

# 横壁中村遺跡(7)

— 土器埋設遺構・掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列・集石・焼土編 —

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

2008

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 横壁中村遺跡(7)

— 土器埋設遺構・掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列・集石・焼土編 —

ハッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

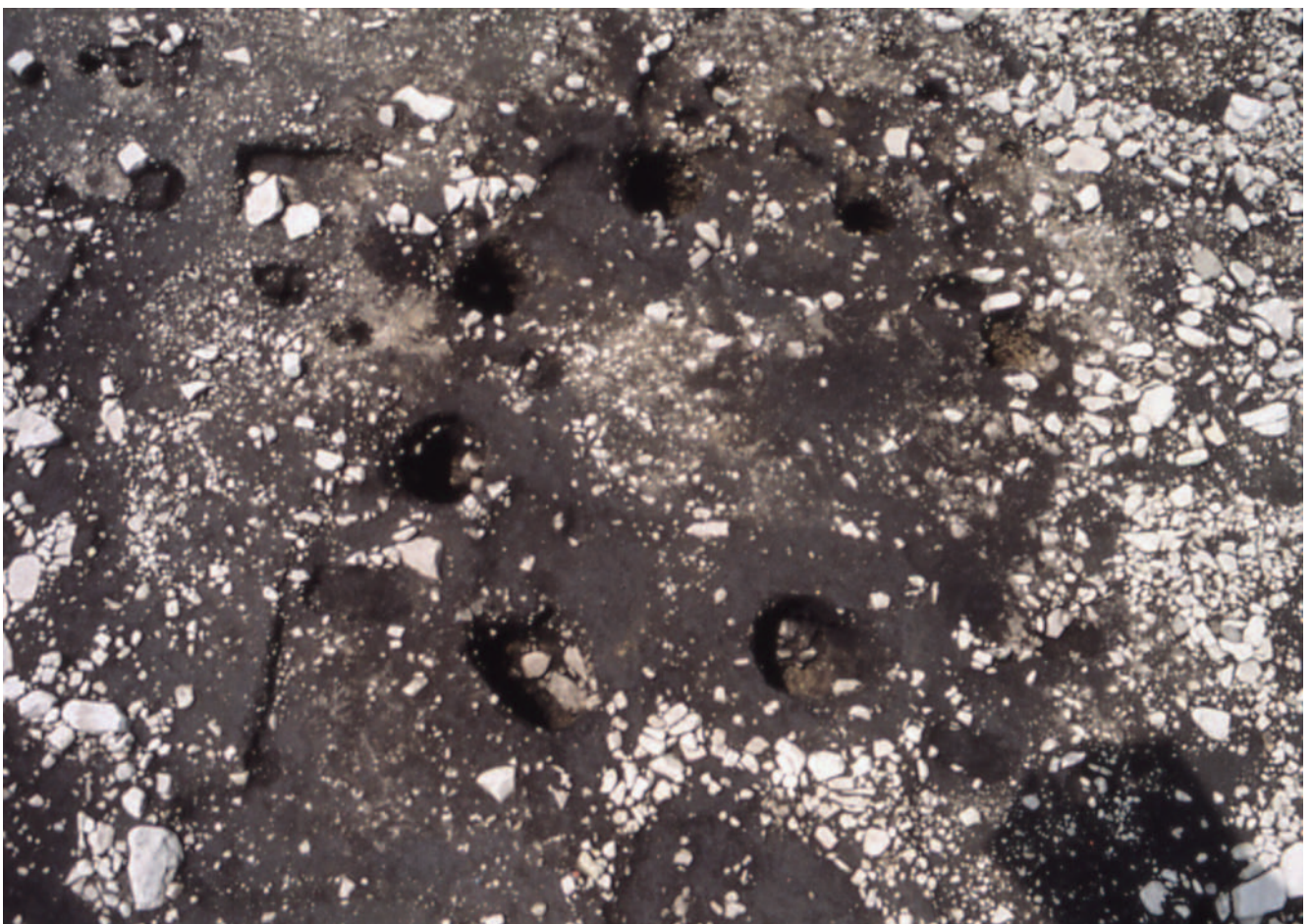
2008

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





30区 1号環状柱穴列 上方の吾妻川が北にあたる。



30区 1号環状柱穴列（東から） 直径1～1.5m、深さ1.3～1.8mの柱穴7本のうち、6本は直径7.6mの円周上に配置されている。時期は後期掘之内式期と想定される。



## 口絵2



18区3号掘立柱建物確認状況（北東から） 確認当初は1×3間の8本柱長方形の建物を想定したが、その後埋没谷にかかる円形の配石下で柱穴が見つかった。右上上方の27号住居は、ほぼ同時期の柄鏡形住居。

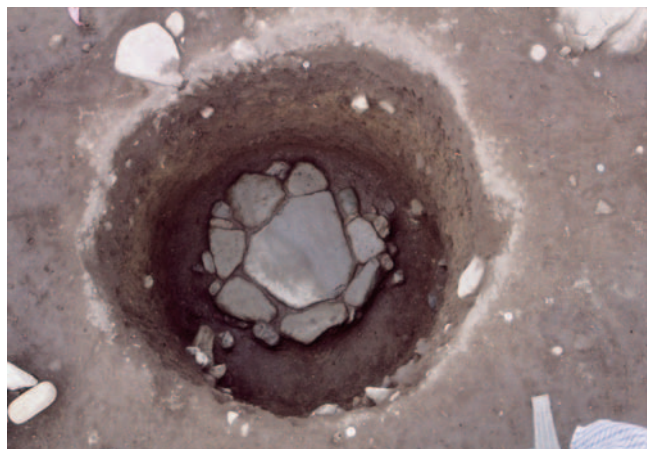


18区3号掘立柱建物（北東から） 棟持ち柱を備えた12本柱亀甲形の高床建物で、長軸は南北方向にほぼ一致する。長辺7.35m、短辺3.5m、棟持ち柱間の距離は12.95mで、いずれも縄文尺とされる35cmの倍数に合致している。縄文時代後期掘之内1式期の建物で、当時の技術水準の高さをよく示している。

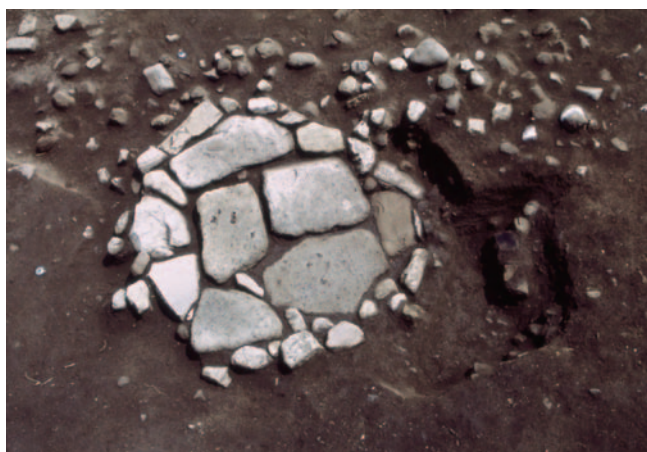




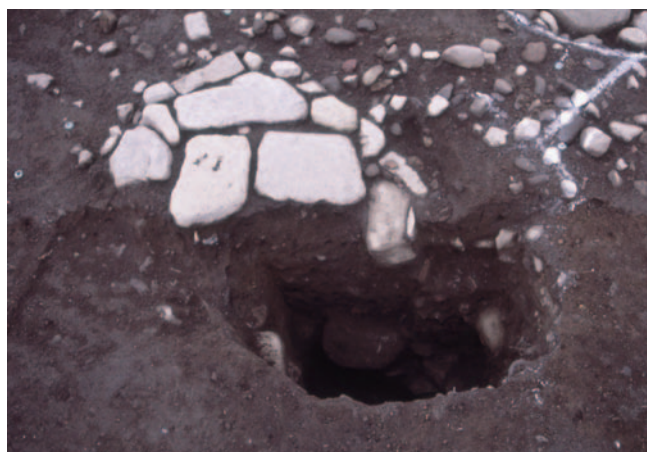
18区 3号掘立柱建物柱 1 上面の37号配石 中央の丸い空白部が柱痕。



18区 3号掘立柱建物柱 1 底面の礎石



18区 3号掘立柱建物柱 2 上面の21号配石



18区 3号掘立柱建物柱 2 配石下の柱穴



20区 5号掘立柱建物（北から） 右手下方の大きな地山礫には、数カ所に磨り面が付く。時期は後期加曽利 B 2～3 式期。



口絵4



18区14号土器埋設遺構



18区12号土器埋設遺構の土器



20区10号土器埋設遺構



20区10号土器埋設遺構の土器



20区14号土器埋設遺構



20区14号土器埋設遺構の土器

# 序

ハッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

ハッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で14年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成8年度から発掘調査が開始され、平成19年度以降も調査の継続が予定されており、長期にわたる大規模な調査となりました。また調査された遺構や遺物は本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大規模な、また長く続いた集落であることを示しております。これら膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は平成16年度までに調査された土器埋設遺構や掘立柱建物等に関して報告を纏めることができました。本書は、縄文時代から長く続く横壁中村遺跡の様相と共に、縄文時代の集落構造を考える上で、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上でも、重要な資料になると考えています。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で末永く活用されることを願い、序といたします。

平成20年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇夫

## 例 言

- 1 本書は、ハッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成8年度から実施されている「横壁中村遺跡」の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』を第1冊目として既に6冊が刊行されている。本書は、平成16年度までに検出された土器埋設遺構・掘立柱建物・集石遺構・焼土遺構と出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第7冊目である。
- 2 横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、ハッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ハッ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は平成8年4月1日から平成18年3月31日まで実施し、平成18年度以降も調査は継続する予定である。今回報告する土坑の調査年度は、平成8年度から16年度に調査されたものである。詳細は、各遺構一覧に記している。
- 5 発掘調査組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 小寺弘之（平成8・9年度）、菅野 清（平成10年度）、小野宇三郎（平成11～17年7月まで）、高橋勇夫（平成17年7月～平成19年度）  
常務理事 菅野 清（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～12年度）、吉田 豊（13・14年度）、住谷永市（平成15・16年度）、木村裕紀（平成17～19年度）  
事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～13年度）  
事業局長 神保侑史（平成14～16年度）、津金澤吉茂（平成17～19年度）  
管理部長 蜂巢 実（平成8年度）、渡辺 健（平成9・10年度）、住谷 進（平成11～13年度）、萩原利通（平成14・15年度）、矢崎俊夫（平成16・17年度）、萩原 勉（平成18・19年度）  
調査研究部長 赤山容造（平成8～10年度）、神保侑史（平成11年度）、能登 健（平成12・13年度）、巾 隆之（平成14年度）、右島和夫（平成15・16年度）西田健彦（平成17～19年度）  
調査研究課長 岸田治男（平成8年度）、能登 健（平成9～11年度）、飯島義雄（平成12年度）、下城 正（平成13年度）

ハッ場ダム調査事務所長 水田 稔（平成14・15年度）、巾 隆之（平成16～19年度）  
同調査研究部長 津金澤吉茂（平成14・15年度）、佐藤明人（平成16～18年度）、中束耕志（平成19年度）  
同調査研究課長 下城 正（平成14年度）、斎藤和之（平成15・16年度）、中沢 悟（平成17年度）、佐藤明人（平成18年度兼務）

事務担当 井上 剛、大島信夫、岡島伸昌、小渕 淳、笠原秀樹、片岡徳雄、国定 均、小山建夫、坂本敏夫、須田朋子、野口富太郎、町田文雄、宮崎忠司、富沢よねこ、森下弘美、矢嶋知恵子、柳岡良宏、吉田有光

調査担当 阿久津 聡、飯田陽一、飯森康広、池田政志、石坂 聡、石田 真、今井和久、岡部 豊、小野和之、金井 武、唐沢友之、久保 学、児島良昌、小林大悟、斎藤幸男、篠原正洋、関 俊明、田村公夫、田村邦宏、友廣哲也、原 雅信、榛沢健二、廣津英一、藤巻幸男、松原孝志、森田真一、諸田康成、山川剛史、渡辺弘幸、綿貫邦男
- 6 整理期間は平成19年4月1日から平成20年3月31日である。
- 7 整理組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫、常務理事 木村裕紀、事業局長 津金沢吉茂、総務部長 萩原 勉、ハッ場ダム調査事務所長 巾 隆之、同事務所調査研究部長兼整理GL 中束耕志  
事務担当 ハッ場ダム調査事務所庶務GL 吉田有光、事務所庶務 若林正人、

庶務臨時補助員 鈴木理佐

整理担当 藤巻幸男

8 本報告書作成の担当

編集 藤巻幸男

本文執筆 黒澤照弘（遺物観察表）、石田 真（第2章及び遺物観察表）、

藤巻幸男（前記以外）

骨鑑定 檜崎修一郎

石材鑑定 渡辺弘幸

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

機械実測 田所順子 伊東博子 岸 弘子

委託関係 遺構測量および空中写真 株式会社測研

遺構図デジタル編集 株式会社測研

整理補助 黒岩扶美枝 足立やよい 日野亮子 中嶋公江 関 裕子 山崎崇史

9 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関、諸氏から貴重なご教示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

国土交通省関東地方建設局ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会

飯島義雄 大竹幸恵 金子直行 小池岳史 佐藤雅一 白石光男 寺内隆夫 寺内敏郎 富田孝彦

能登 健 萩原昭朗 平林 彰 福島 永 古郡正志 松島榮治 綿田弘実 渡辺清志

## 凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 遺構図の縮尺は、個別図は1/50を基本とし、全体図は1/400または1/500（付図）を基本としている。
- 3 今回の報告は、平成16年度までに調査された土坑を対象としている。遺構番号は、30区を除き調査時の番号を用いている。発掘調査中或いは整理作業中に、他の遺構に変更された土坑や遺構として認定できなかった土坑もあり、欠番が多く遺構番号は連続していない。
- 4 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器、▲は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 5 遺物図の縮尺は土器実測図は1/4、土器拓本は1/3、石器2/3または1/3を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。各図下部にスケールを示すか、各遺物実測図に縮尺を記している。
- 6 写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺とした。
- 7 遺物観察表、石器計測表の記載方法は下記の通りである。
  - （1）土器の計測値の単位はcmである。
  - （2）石器及び銭の計測値の単位はmmである。
  - （3）石器、銭、鉄滓等の重量は全て残存値であり、単位はgである。
  - （4）色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に基づいている。
- 8 石器実測図では、自然面は点描、磨り面と欠損面は白抜きとした。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	
表目次	

## 第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	4

## 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6

## 第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	13
第2節 基本土層	14
第3節 土器埋設遺構	15
第4節 掘立柱建物	93
第5節 環状柱穴列	145
第6節 柱穴列	173
第7節 集石遺構	175
第8節 焼土遺構	178

## 第4章 まとめ

遺物観察表	202
抄録	224
写真図版	



## 挿図目次

- 第 1 図 年度別調査区全体図
- 第 2 図 遺跡位置及び周辺遺跡図
- 第 3 図 横壁中村遺跡全体図
- 第 4 図 横壁中村遺跡基本土層
- 第 5 図 20区・30区土器埋設遺構分布図
- 第 6 図 19区・29区土器埋設遺構分布図
- 第 7 図 18区・28区土器埋設遺構分布図
- 第 8 図 18区1号・2号土器埋設遺構
- 第 9 図 18区4号・5号・6号、28区5号土器埋設遺構(1)
- 第 10 図 18区4号・5号・6号、28区5号土器埋設遺構(2)
- 第 11 図 18区7号土器埋設遺構
- 第 12 図 18区8号・9号土器埋設遺構
- 第 13 図 18区10号・11号土器埋設遺構
- 第 14 図 18区12号・13号土器埋設遺構
- 第 15 図 18区14号土器埋設遺構
- 第 16 図 18区16号・17号土器埋設遺構
- 第 17 図 18区19号・22号土器埋設遺構
- 第 18 図 18区23号土器埋設遺構
- 第 19 図 18区24号・25号土器埋設遺構
- 第 20 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (1・2号)
- 第 21 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (4・5・6・7号)
- 第 22 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (8・9・10号)
- 第 23 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (11・12・13号)
- 第 24 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (14号)
- 第 25 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (16・17・19号)
- 第 26 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (22・23号)
- 第 27 図 18区土器埋設遺構出土遺物 (24・25号)
- 第 28 図 18区12号配石出土遺物(1)
- 第 29 図 18区12号配石出土遺物(2)
- 第 30 図 19区1号・4号・5号土器埋設遺構
- 第 31 図 19区2号・3号土器埋設遺構
- 第 32 図 19区6号・7号・9号土器埋設遺構
- 第 33 図 19区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・3・4号)
- 第 34 図 19区土器埋設遺構出土遺物 (5・6・7・9号)
- 第 35 図 20区2号・3号・4号土器埋設遺構
- 第 36 図 20区22号住居
- 第 37 図 20区6号・11号・12号土器埋設遺構
- 第 38 図 20区10号土器埋設遺構
- 第 39 図 20区13号・14号土器埋設遺構
- 第 40 図 20区15号・16号土器埋設遺構
- 第 41 図 20区18号・19号土器埋設遺構
- 第 42 図 20区20号・21号土器埋設遺構
- 第 43 図 20区23号土器埋設遺構
- 第 44 図 20区24号・25号・28号土器埋設遺構
- 第 45 図 20区26号土器埋設遺構
- 第 46 図 20区29号・30号土器埋設遺構
- 第 47 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (2・3・4・6・11・13号)
- 第 48 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (10号)
- 第 49 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (12・14・15・16号)
- 第 50 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (18・20号)
- 第 51 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (19・21・23・24・28号)
- 第 52 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (25・26・29号)
- 第 53 図 20区土器埋設遺構出土遺物 (30号)
- 第 54 図 28区1号土器埋設遺構
- 第 55 図 28区2号・3号・5号土器埋設遺構
- 第 56 図 28区土器埋設遺構出土遺物 (2・3・5号)
- 第 57 図 30区10号土器埋設遺構
- 第 58 図 30区11号土器埋設遺構
- 第 59 図 30区土器埋設遺構出土遺物 (10・11号)
- 第 60 図 20区・30区掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列分布図
- 第 61 図 19区・29区掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列分布図
- 第 62 図 18区・28区掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列分布図
- 第 63 図 18区1号掘立柱建物
- 第 64 図 18区2号掘立柱建物
- 第 65 図 18区3号掘立柱建物礫出土状況
- 第 66 図 18区3号掘立柱建物全体図
- 第 67 図 18区3号掘立柱建物 柱痕確認状況
- 第 68 図 18区3号掘立柱建物 柱1
- 第 69 図 18区3号掘立柱建物 柱2
- 第 70 図 18区3号掘立柱建物 柱3
- 第 71 図 18区3号掘立柱建物 柱4
- 第 72 図 18区3号掘立柱建物 柱5・柱6・柱7・柱8
- 第 73 図 18区3号掘立柱建物 柱9
- 第 74 図 18区3号掘立柱建物 柱10・柱11
- 第 75 図 18区3号掘立柱建物 柱12
- 第 76 図 18区4号掘立柱建物
- 第 77 図 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱1・柱2)
- 第 78 図 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱3・柱4・柱8・柱9)
- 第 79 図 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱9)
- 第 80 図 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱7・柱10・柱11)
- 第 81 図 18区4号掘立柱建物出土遺物 (柱2・柱3)
- 第 82 図 20区1号掘立柱建物
- 第 83 図 20区2号掘立柱建物(1)
- 第 84 図 20区2号掘立柱建物(2)
- 第 85 図 20区2号掘立柱建物(3)
- 第 86 図 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・5・6・11)
- 第 87 図 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱7・8・9・10・12)
- 第 88 図 20区2号掘立柱建物出土遺物(1)
- 第 89 図 20区2号掘立柱建物出土遺物(2)
- 第 90 図 20区5号掘立柱建物 確認状況
- 第 91 図 20区5号掘立柱建物
- 第 92 図 20区5号掘立柱建物出土遺物 (柱2・柱3・柱4)
- 第 93 図 20区5号掘立柱建物出土遺物(1)
- 第 94 図 20区5号掘立柱建物出土遺物(2)
- 第 95 図 20区6号掘立柱建物出土遺物 (柱1・柱3・柱4)
- 第 96 図 20区6号・8号掘立柱建物
- 第 97 図 20区6号掘立柱建物
- 第 98 図 20区8号掘立柱建物
- 第 99 図 20区8号掘立柱建物出土遺物 (柱1・柱2・柱3・柱4)
- 第100 図 20区7号掘立柱建物
- 第101 図 20区7号掘立柱建物出土遺物 (柱2・柱3)
- 第102 図 29区1号掘立柱建物
- 第103 図 29区1号掘立柱建物出土遺物 (柱1・柱2・柱3)
- 第104 図 19区1号環状柱穴列
- 第105 図 19区1号環状柱穴列出土遺物 (柱4)
- 第106 図 19区2号環状柱穴列(1)
- 第107 図 19区2号環状柱穴列(2)
- 第108 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱1)
- 第109 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱1・柱2)
- 第110 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱2)
- 第111 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱2・柱3)
- 第112 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱3)
- 第113 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱4)
- 第114 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱5・柱6)
- 第115 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱6・柱7)
- 第116 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱7)
- 第117 図 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱7)
- 第118 図 30区1号環状柱穴列の位置
- 第119 図 30区1号環状柱穴列(1)
- 第120 図 30区1号環状柱穴列(2)
- 第121 図 30区1号環状柱穴列(3)
- 第122 図 30区1号環状柱穴列 柱1・柱2・柱8

第123図	30区1号環状柱穴列	柱3・柱4	3	18区22号土器埋設遺構	埋設状況
第124図	30区1号環状柱穴列	柱5・柱6	4	18区22号土器埋設遺構	掘り方
第125図	30区1号環状柱穴列	柱7	5	18区23号土器埋設遺構	確認状況
第126図	30区1号環状柱穴列出土遺物		6	18区23号土器埋設遺構	埋設状況
第127図	30区1号環状柱穴列出土遺物	(柱1・柱2)	7	18区24号土器埋設遺構	確認状況
第128図	30区1号環状柱穴列出土遺物	(柱2・柱3・柱4)	8	18区24号土器埋設遺構	掘り方
第129図	19区1号柱穴列・29区1号柱穴列の位置		P L 7	1	19区2号・3号土器埋設遺構確認状況(40号住居内)
第130図	19区1号柱穴列		2	2	19区2号・3号土器埋設遺構 確認当初の状況
第131図	19区1号柱穴列出土遺物		3	3	19区2号土器埋設遺構 確認時の状況
第132図	29区1号柱穴列		4	4	19区3号土器埋設遺構 確認時の状況
第133図	18区1号、20区1号・2号・4号集石遺構		5	5	19区3号土器埋設遺構 埋設状況
第134図	20区集石遺構出土遺物(1号・2号)		P L 8	1	19区4号土器埋設遺構 確認状況
第135図	20区集石遺構出土遺物(2号・4号)		2	2	19区4号土器埋設遺構 埋設状況
第136図	18区1号～4号・9号焼土遺構		3	3	19区6号土器埋設遺構 確認状況
第137図	18区10号～15号焼土遺構		4	4	19区6号土器埋設遺構 埋設状況
第138図	18区16号・17号焼土遺構		5	5	19区7号土器埋設遺構 確認状況(上から)
第139図	18区焼土遺構出土遺物(11号)		6	6	19区7号土器埋設遺構 埋設状況
第140図	19区2号・4号・6号～11号焼土遺構		7	7	19区7号土器埋設遺構 埋設状況(上から)
第141図	20区9号～12号・14号～17号焼土遺構		8	8	19区7号土器埋設遺構 掘り方
第142図	20区13号焼土遺構		P L 9	1	20区2号土器埋設遺構 確認状況
第143図	20区18号・19号焼土遺構		2	2	20区2号土器埋設遺構 埋設状況
第144図	20区23号～25号・29号～32号焼土遺構		3	3	20区3号土器埋設遺構 埋設状況
第145図	20区焼土遺構出土遺物(9号)		4	4	20区4号土器埋設遺構 確認状況
第146図	20区焼土遺構出土遺物(9号・13号・18号)		5	5	20区6号土器埋設遺構 確認状況
第147図	29区1号・2号、30区1号焼土遺構		6	6	20区6号土器埋設遺構 埋設状況
第148図	29区焼土遺構出土遺物(1号)		7	7	20区12号土器埋設遺構
			8	8	20区11号土器埋設遺構
			P L 10	1	20区10号土器埋設遺構 埋設状況
			2	2	20区10号土器埋設遺構 土器内部の状況
			3	3	20区10号土器埋設遺構
			4	4	20区10号土器埋設遺構 土坑掘り方
			5	5	20区14号土器埋設遺構 右手の段差は4号列石
			6	6	20区14号土器埋設遺構 上方の段差は4号列石
			7	7	20区14号土器埋設遺構 埋設状況(北から)
			8	8	20区14号土器埋設遺構 埋設状況(東から)
			P L 11	1	20区15号土器埋設遺構(北西から)
			2	2	20区15号土器埋設遺構 埋設状況
			3	3	20区16号土器埋設遺構 確認状況
			4	4	20区18号土器埋設遺構 上面の大形礫
			5	5	20区18号土器埋設遺構 埋設状況
			6	6	20区18号土器埋設遺構 土坑掘り方
			7	7	20区19号土器埋設遺構(上から)
			8	8	20区19号土器埋設遺構 埋設状況
			P L 12	1	20区20号土器埋設遺構 確認状況
			2	2	20区20号土器埋設遺構 土器内に丸い凹石
			3	3	20区21号土器埋設遺構(上から)
			4	4	20区21号土器埋設遺構 埋設状況
			5	5	20区23号土器埋設遺構(上から)
			6	6	20区23号土器埋設遺構 埋設状況
			7	7	20区23号土器埋設遺構 掘り方の礫
			8	8	20区23号土器埋設遺構 掘り方
			P L 13	1	20区24号土器埋設遺構
			2	2	20区25号土器埋設遺構
			3	3	20区26号土器埋設遺構 確認状況
			4	4	20区26号土器埋設遺構 蓋石と扁平円礫
			5	5	20区26号土器埋設遺構 埋設状況
			6	6	20区26号土器埋設遺構(上から)
			7	7	20区26号土器埋設遺構 土器下の板石
			8	8	20区26号土器埋設遺構 掘り方
			P L 14	1	20区28号土器埋設遺構 確認状況
			2	2	20区28号土器埋設遺構 掘り方確認
			3	3	20区28号土器埋設遺構 掘り方

## 図版目次

P L 1	1	18区1号・2号土器埋設遺構	確認当初の状況
	2	18区1号・2号土器埋設遺構	確認状況
P L 2	1	18区1号・2号土器埋設遺構	埋設状況
	2	18区2号土器埋設遺構	埋設土器下出土の土器
	3	18区5号土器埋設遺構	
	4	18区7号土器埋設遺構	
	5	18区10号土器埋設遺構	
P L 3	1	18区11号土器埋設遺構	確認状況
	2	18区11号土器埋設遺構	埋設状況
	3	18区12号土器埋設遺構	確認状況
	4	18区12号土器埋設遺構	
	5	18区12号土器埋設遺構	埋設状況
	6	18区12号土器埋設遺構	土坑掘り方
	7	18区13号土器埋設遺構	確認状況
	8	18区13号土器埋設遺構	埋設状況
P L 4	1	18区14号土器埋設遺構	確認状況
	2	18区14号土器埋設遺構	埋没土と礫
	3	18区14号土器埋設遺構	埋設状況
	4	18区14号土器埋設遺構	埋設状況
	5	18区14号土器埋設遺構	埋設状況
	6	18区14号土器埋設遺構	土器内部の土壌と礫
	7	18区14号土器埋設遺構	土坑掘り方
	8	18区16号土器埋設遺構	確認状況
P L 5	1	18区16号土器埋設遺構	埋設状況
	2	18区16号土器埋設遺構	土器内部の土壌と礫
	3	18区16号土器埋設遺構	土坑掘り方
	4	18区17号土器埋設遺構	確認状況
	5	18区17号土器埋設遺構	埋設状況
	6	18区17号土器埋設遺構	周辺の状況
	7	18区17号土器埋設遺構	埋設状況
	8	18区17号土器埋設遺構	掘り方
P L 6	1	18区22号土器埋設遺構	確認状況
	2	18区22号土器埋設遺構	周囲の礫

	4	20区30号土器埋設遺構		2	同1 柱4 下層に敷かれた礎石
	5	20区28号土器埋設遺構	手前に449号土坑	3	同1 柱4 完掘
	6	20区28号土器埋設遺構		4	18区3号掘立柱建物 柱5 確認状況
	7	28区1号土器埋設遺構	確認状況	5	同4 柱5 柱痕確認状況
	8	28区1号土器埋設遺構	埋設状況	6	同4 柱5 完掘
P L 15	1	28区2号土器埋設遺構	埋設状況	7	18区3号掘立柱建物 柱6 確認状況
	2	28区2号土器埋設遺構	埋設状況	8	同7 柱6 柱痕確認状況
	3	28区3号土器埋設遺構	埋設状況	P L 26	1 18区3号掘立柱建物 柱6 完掘
	4	28区3号土器埋設遺構	掘り方	2	18区3号掘立柱建物 柱7 遺物出土状況
	5	30区10号土器埋設遺構	確認状況	3	同2 柱7 下層の状況
	6	30区10号土器埋設遺構	埋設状況	4	同2 柱7 完掘
	7	30区10号土器埋設遺構	周囲の礫	5	18区3号掘立柱建物 柱8 柱痕確認状況
	8	30区11号土器埋設遺構	埋設状況	6	18区3号掘立柱建物 柱9 上面の中世土坑
P L 16	1	18区1号掘立柱建物	(南から)	7	同6 柱9 上面の中世土坑
	2	18区1号掘立柱建物	(南から)	8	同6 柱9 確認状況
	3	18区2号掘立柱建物	柱2	P L 27	1 18区3号掘立柱建物 柱10 柱穴確認状況
	4	18区2号掘立柱建物	柱2	2	同1 柱10 底面の礎石
	5	18区2号掘立柱建物	(南から)	3	同1 柱10 完掘
P L 17	1	18区2号掘立柱建物	(南から)	4	18区3号掘立柱建物 柱11
	2	18区4号掘立柱建物	(北から)	5	18区3号掘立柱建物 柱12 底面の礫
P L 18	1	18区3号掘立柱建物	確認状況(北から) 中央部に埋没谷	6	同5 柱12 柱痕を取り巻く礫
	2	18区3号掘立柱建物	確認状況(北から) 北西部の一部が埋没谷上にある。南側に後期の5号・6号列石が見える。柱穴上面に配石・礫群がのる。	7	同5 柱12 完掘
P L 19	1	18区3号掘立柱建物	確認当初の状況(北から) 埋没谷上の柱穴の上面に配石・礫群がのる。	8	同5 柱12 底面の状況
	2	18区3号掘立柱建物	確認当初は8本柱の構造を想定していた。	P L 28	1 20区1号掘立柱建物 全景(南東から)
P L 20	1	18区3号掘立柱建物	完掘状況(東から) 棟持ち柱を持つ12本柱の構造が判明。	2	20区2号掘立柱建物 全景(西から)
	2	18区3号掘立柱建物	完掘状況(北東から) 左手の棟持ち柱の上に、後期の6号列石がのる。	P L 29	1 20区2号掘立柱建物 柱1
P L 21	1	18区3号掘立柱建物	遠景(北東から) 南側(左手)に後期の6号列石。	2	同1 柱1
	2	18区3号掘立柱建物	遠景(北北東から) 掘立柱建物の南側は、1mほどの段差がある。	3	同1 柱2
P L 22	1	18区3号掘立柱建物	柱1 上面の37号配石	4	同1 柱3
	2	同1	37号配石下の礫群	5	同1 柱4
	3	同1	礫群中央に柱1の柱痕	6	同1 柱5
	4	同1	柱1 柱痕を取り巻く礫	7	同1 柱6
	5	同1	柱1 柱痕を取り巻く礫	8	同1 柱7
	6	同1	底面で礎石を確認	P L 30	1 20区5号掘立柱建物 全景(北から)
	7	同1	柱1 礎石	2	同1 柱2 完掘
	8	同1	柱1 礎石	3	同1 柱2 柱痕調査
P L 23	1	18区3号掘立柱建物	柱2 上面の21号配石確認	4	同1 柱1 柱痕調査
	2	同1	21号配石 周囲の小石	5	同1 柱1 完掘
	3	同1	21号配石	P L 31	1 20区5号掘立柱建物 柱1 掘り方
	4	同1	21号配石	2	同1 柱3 柱痕調査
	5	同1	配石下の確認調査	3	同1 柱3 柱痕調査
	6	同1	柱2 確認状況	4	同1 柱3 掘り方
	7	同1	柱2 確認状況	5	20区6号掘立柱建物 全景(北から)
	8	同1	柱2 完掘	P L 32	1 20区6号掘立柱建物 柱1
P L 24	1	18区3号掘立柱建物	柱3 上面の22号配石確認	2	同1 柱1 掘り方
	2	同1	22号配石	3	同1 柱2
	3	同1	配石下で柱3を確認	4	同1 柱2 掘り方
	4	同1	柱3 柱痕を取り巻く礫	5	同1 柱3 柱痕調査
	5	同1	柱3 下部の状況	6	同1 柱3
	6	同1	柱3 完掘	7	同1 柱4 柱痕調査
	7	18区3号掘立柱建物	柱4 上面の38号配石	8	同1 柱4
	8	同7	柱4 下層に敷かれた礎石	P L 33	1 20区7号掘立柱建物 全景(西から)
P L 25	1	18区3号掘立柱建物	柱4 柱痕を取り巻く礫	2	20区8号掘立柱建物 全景(北から)
				P L 34	1 20区8号掘立柱建物 柱1
				2	同1 柱2
				3	同1 柱3
				4	同1 柱4
				5	29区1号掘立柱建物 全景(南から)
				6	同5 柱1
				7	同5 柱2
				8	同5 柱3
				P L 35	1 19区1号環状柱穴列 全景(東から)

	2	同1	柱3と柱4		2	同1
	3	同1	柱2 手前に炭化材		3	同1
	4	同1	柱2 炭化材		4	同1
	5	同1	柱2 炭化材		5	18区14号焼土 確認状況
P L 36	1	19区2号掘立柱建物	柱1		6	同5
	2	同1	柱1		7	18区15号焼土 確認状況
	3	同1	柱2		8	同7 断面調査
	4	同1	柱2	P L 45	1	18区16号焼土 確認状況 (北から)
	5	同1	柱3		2	同1 焼土A
	6	同1	柱3		3	同1 焼土A 断面調査
	7	同1	柱4 上面の礫		4	同1 焼土B
	8	同1	柱4 埋没土上層の礫と遺物		5	同1 焼土B 断面調査
P L 37	1	19区2号掘立柱建物	柱4 埋没土上層の礫		6	同1 焼土C
	2	同1	柱4 完掘		7	同1 焼土C 確認状況
	3	同1	柱5		8	同1 調査状況
	4	同1	柱5 完掘	P L 46	1	18区17号焼土 確認状況
	5	同1	柱6		2	19区1号焼土
	6	同1	柱6 下層の礫と遺物		3	19区2号焼土
	7	同1	柱7 16号住居床面で確認		4	19区3号焼土
	8	同1	柱7 完掘		5	19区4号焼土
P L 38	1	30区1号環状柱穴列	全景 (北北東から)		6	19区6号焼土
	2	30区1号環状柱穴列	全景 (南東から)		7	19区7号焼土
P L 39	1	30区1号環状柱穴列	柱1 柱痕調査		8	19区8号焼土
	2	同1	柱1 完掘	P L 47	1	19区9号焼土
	3	同1	柱8 確認状況		2	19区10号焼土
	4	同1	柱8と柱1		3	19区11号焼土
	5	同1	柱2 柱痕調査		4	20区9号焼土 確認状況
	6	同1	柱2 下層の礫		5	同4 遺物出土状況
	7	同1	柱2 完掘		6	同4 遺物出土状況
	8	同1	柱3 上面の礫		7	同4 焼土の確認
P L 40	1	30区1号環状柱穴列	柱5 上面の礫		8	20区10号焼土
	2	同1	柱5 柱痕調査	P L 48	1	20区11号焼土
	3	同1	柱5 完掘		2	20区12号焼土
	4	同1	柱6 柱痕調査		3	20区13号焼土 確認状況
	5	同1	柱6 完掘		4	同3
	6	同1	柱7		5	同3 断面調査
	7	同1	柱穴の調査状況		6	同3 断面調査
P L 41	1	18区1号集石	(南東から)		7	20区14号焼土
	2	20区1号集石	(南から)		8	同7
	3	20区1号集石	(東から)	P L 49	1	20区14号焼土
	4	20区1号集石	(南から)		2	20区15号焼土
	5	20区1号集石	(東から)		3	20区16号焼土 確認状況
	6	20区2号集石	(東から)		4	20区17号焼土
	7	20区4号集石	(北から)		5	20区18号焼土 確認状況
	8	20区4号集石	掘り方確認		6	同5 焼土下の礫
P L 42	1	18区1号焼土	(北から)		7	同5 焼土下の礫
	2	18区2号焼土	断面調査		8	20区19号焼土
	3	18区2号焼土	断面調査	P L 50	1	20区20号焼土
	4	18区2号焼土	掘り方		2	20区21号焼土
	5	18区3号焼土	確認状況		3	20区22号焼土
	6	18区3号焼土	断面調査		4	20区23号焼土
	7	18区4号焼土	断面調査		5	20区24号焼土
	8	18区9号焼土	確認状況		6	20区25号焼土
P L 43	1	18区9号焼土	断面調査		7	20区26号焼土
	2	18区9号焼土	完掘		8	20区27号焼土
	3	18区10号焼土	確認状況	P L 51	1	20区29号焼土 確認状況
	4	18区11号焼土			2	同1 断面調査
	5	18区12号焼土			3	同1 遺物出土状況
	6	18区13号焼土	確認状況		4	20区30号焼土
	7	同6			5	20区31号焼土
	8	同6	断面調査		6	同5
P L 44	1	18区13号焼土	断面調査		7	同5

- 8 20区32号焼土
- P L 52 18区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・4・5・6・7号)
- P L 53 18区土器埋設遺構出土遺物 (7・8・9・10号)
- P L 54 18区土器埋設遺構出土遺物 (11・12・13・14・16・17号)
- P L 55 18区土器埋設遺構出土遺物 (19・22・23・24・25号)
- P L 56 19区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・3・4・5・6・7・9号)
- P L 57 20区土器埋設遺構出土遺物 (2・3・4・6・11・12・13・14・15・16号)
- P L 58 20区土器埋設遺構出土遺物 (18・19・20・21・23号)
- P L 59 20区土器埋設遺構出土遺物 (24・25・26・28号)  
28区土器埋設遺構出土遺物 (2号)
- P L 60 28区・30区土器埋設遺構出土遺物 (3・5・10・11号)  
18区12号配石出土遺物 (1~20)
- P L 61 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・4・7・8)
- P L 62 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱9・10・11)  
18区4号掘立柱建物出土遺物 (柱2・3)
- P L 63 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・5・6・7・8)
- P L 64 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱9・10・11・12)  
20区5号掘立柱建物出土遺物 (柱2・3)
- P L 65 20区5号掘立柱建物出土遺物 (柱4)  
20区6号掘立柱建物出土遺物 (柱1・3・4)  
20区7号掘立柱建物出土遺物 (柱2)
- P L 66 20区7号掘立柱建物出土遺物 (柱2・3)  
20区8号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・4)  
29区1号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3)
- P L 67 19区1号環状柱穴列出土遺物 (柱4)  
19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱1・2)
- P L 68 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱2・3)
- P L 69 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱3・4)
- P L 70 19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱7)
- P L 71 30区1号環状柱穴列出土遺物 (柱1・2・3)
- P L 72 30区1号環状柱穴列出土遺物 (柱4)  
19区1号柱穴列出土遺物  
30区1号環状柱穴列出土遺物
- P L 73 20区1号集石出土遺物  
20区2号集石出土遺物  
20区4号集石出土遺物  
18区11号焼土出土遺物  
20区9号焼土出土遺物(1)
- P L 74 20区9号焼土出土遺物(2)  
20区13号焼土出土遺物  
20区18号焼土出土遺物  
29区1号焼土出土遺物

## 表目次

- 表1 周辺遺跡一覧表
- 表2 横壁中村遺跡縄文時代の遺構数集計表
- 表3 横壁中村遺跡 土器埋設遺構一覧
- 表4 横壁中村遺跡 掘立柱建物一覧
- 表5 横壁中村遺跡 環状柱穴列一覧
- 表6 横壁中村遺跡 柱穴列一覧
- 表7 横壁中村遺跡 掘立柱建物 柱穴対照一覧
- 表8 横壁中村遺跡 環状柱穴列 柱穴対照一覧
- 表9 横壁中村遺跡 焼土一覧
- 表10 横壁中村遺跡 土器埋設遺構出土遺物総量一覧
- 表11 横壁中村遺跡 掘立柱建物出土遺物総量一覧
- 表12 横壁中村遺跡 環状柱穴列・柱穴列出土遺物総量一覧
- 表13 横壁中村遺跡 集石遺構出土遺物総量一覧
- 表14 横壁中村遺跡 焼土遺構出土遺物総量一覧

# 第1章 調査の方法と経過

## 第1節 調査に至る経緯

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方建設局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成6年3月18日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受諾契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成6年度から実施されている調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、ハッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成6年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は7遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成6年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も平成6年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成6・7年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成8年度から調査が行われ

ることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する7遺跡のうち上野IV遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

## 第2節 調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成8年度より行われた。平成8年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示した通りであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終了した年度を表している。各年度ごとの調査経過を調査日誌を元に抜粋する。

**平成8年度** 調査事務所の設置、調査区への進入路等の造成工事などを行ったため、本調査は7月1日開始となった。本年度は担当者3名による1班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

**平成9年度** 前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は4名の配置であったが、7月から9月まで1名は久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000㎡であ

## 第1章 調査の方法と経過

る。11月3・4日に当事業団主催の平成9年度出土文化財巡回展示会が八ッ場地区で実施され、遺物・パネルを出展した。

**平成10年度** 平成8・9年度の継続調査である。担当者は年度当初4名の配置であったが、うち1名は林地区及び西久保I遺跡の調査を担当することになったため、実質3名の1班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

**平成11年度** 前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は5名、2班の体制であったが、うち2名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは3名、1班での調査となった。4月29日に前年度に検出された大形敷石住居、環状柱穴列等を現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年8月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、8月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は6,200㎡である。

**平成12年度** 工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者7名による2班体制で開始する予定であったが、1班は林地区の調査に対応することとなり、残る1班も、西久保I遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にパンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡を併せて調査し、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。調査面積1,800㎡であった。

**平成13年度** 発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が6月4日となった。本年度の調査対象地は遺跡中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている山根沢の西側は、工事行程にあわせて調査が終了した地区を

順次、工事側に引き渡ししながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月1日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の6,200㎡から5,200㎡となった。

**平成14年度** 本年度より当事業団八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は7名の2班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は6月から8月にかけて担当者2名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者4名が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は5,400㎡であった。

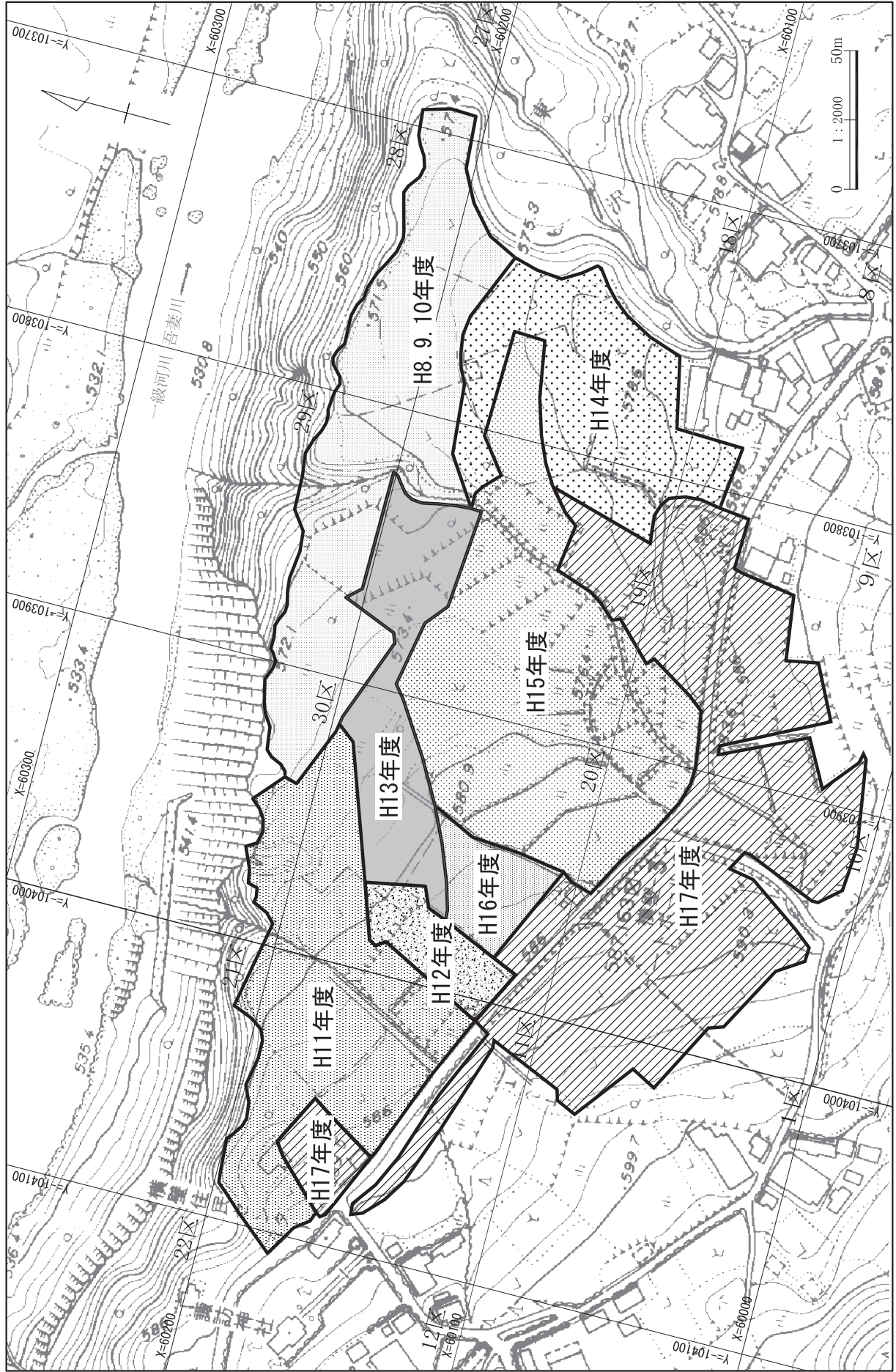
**平成15年度** 前年度の継続調査の18区と9・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初6名の配置であったが、4月から6月は担当者2名が久々戸遺跡の調査を行い、7月から1名が整理事業への異動となった。また11月からは1名が増員となった。調査は前年度からの継続であり、18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であった。

**平成16年度** 前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者2名による1班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400㎡であった。

**平成17年度** 国道145号線部分の調査を、担当者5名による2班体制で行った。調査区は9・10区である。調査面積は約14,000㎡であった。

**平成18年度** 10・20区の平成17年度調査で経塚が検出された地点を中心に、4月1日から4月13日まで担当者3名による短期間の調査を実施した。調査面積は188㎡である。





第1図 年度別調査区全体図



## 第3節 調査の方法

### (1) 調査の手順

調査は初めはバックフォーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑、水田、道路であった。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがあつた。縮尺については、住居・土坑・配石等は1/20、炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、バルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35mmモノクローム及びリバーサル、6×7判モノクロームで撮影し、一部6×7判リバーサルも状況に応じて使用している。

### (2) 遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名+小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成8年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、『長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査報告書一』（長野原町教育委員会 1990）によると本遺跡は「観音堂遺跡」「上野IV遺跡」の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが

記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

### (3) 調査区の設定

調査区の設定については、1994（平成6）年度から始まったハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、「ハツ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、『長野原一本松遺跡(1)』（群埋文 2002）に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（X=58000.00、Y=-97000.00）とした。そして、まずこの基点から1km四方の地区（大グリッド）を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の区（中グリッド）に区分し、南東隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区別した。更に各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは、南東を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせてグリッド名としている（例：20区A-1）。

本遺跡の調査区は、地区では「27地区」を中心とし、一部「28地区」にかかり、「区」では27地区は「9・10・17・18・19・20・28・29・30区」、28地区は「1・11区」に相当している。遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

## 第2章 遺跡の環境

ハッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の『長野原一本松遺跡(1)』(群埋文 2002)および『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』(群埋文 2003)に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

### 第1節 地理的環境

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬭恋村、六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県境の鳥井峠付近に源を発し、東流して渋川市で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点であり、また、本遺跡から約6km下流には「関東の耶馬溪」の異名をとる国指定名勝である吾妻溪谷がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。

本遺跡の立地する長野原地域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位、上位、中位、下位の4段丘面に区分されるが(長野原町 1993)、このうちの最上位段丘と上位段丘の2面は約21,000万年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を数10m以上の厚さで埋めつくした応桑泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘は吾妻川からの比高が約80~90mであり、泥流流下後にほとんど浸食されずに段丘面となったもの、上位段丘は比高が約60~65mであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら2面の上には、約11,000年前に噴出した浅間一草津黄色軽石(As-YPk)を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘は比高30m前後で、本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も広く

分布する。低位段丘は比高約10~15mである。

横壁中村遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸の中位段丘上に立地する。標高は約570mで、調査区北を流れる吾妻川とは比高差40mほどの急峻な段丘崖により隔てられている。また南側には山地が迫り、西は深沢、東は東沢という2本の沢によって深く区画され、調査区のほぼ中央にも山根沢という小沢が北流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖錐堆積物が、吾妻川により形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。調査区内の比高差は約15mである。調査区内には、この崖錐堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘については、離水時期は明らかでないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPkの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな影響はないと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居の埋土の中には、浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在し、また江戸時代の1783(天明三)年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流により埋没した畑跡が検出されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5kmに位置する標高1,124mをはかる岩峰で、100万年ほど前に活動していた菅峰火山の溶岩に由来すると考えられている。南側を除いた3方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状とあわせ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを推測するにたる奇峰と言える。

## 第2節 歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた堪場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑 I 岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からは八ッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。(その後の調査で、平成17年3月現在では214遺跡に増加している。)これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成6年からは八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査をもとに横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

**旧石器時代** 長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間一草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡(14)から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が1点出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が実施されれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

**縄文時代** 長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑 I 岩陰遺跡(2)があげられる。奥行4m、幅40mの大規模な岩陰遺跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に

人間が生活していたことを証明する遺跡である。早期では、楡木II遺跡(27)で多くの撚糸文系土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、竪穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲炉を持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬 I 遺跡(17)でも撚糸文期の住居と田戸下層式期の住居が検出されている。この立馬 I 遺跡では、早期から晩期までのほぼすべての時期の遺物が出土している。山間の狭隘な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることは、この地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は幸神遺跡(28)、長野原一本松遺跡(29)、坪井遺跡(35)でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野県域を主体とする塚田式、北陸地方の極楽寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また暮坪遺跡(38)では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長畝II遺跡(41)では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、楡木II遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡(10)で同時期の土坑が検出されており、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

中期になると遺跡数、遺構量ともに大幅に増加する。本遺跡では勝坂式期の住居から中期末まで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただその始まりは本遺跡より若干時期が下り、中期後半の加曾利E式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器とともに中部高地系、特に長野県東部との強い関連がうかがえる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野原

一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「柝倉類型」などの資料が出土していることから確認できよう。

後期になると長野原一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曾利B式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野原一本松遺跡のほか、林中原I遺跡(20)、上原IV遺跡(21)、向原遺跡(32)、櫛II遺跡(37)、滝原III遺跡(44)、古屋敷遺跡(45)、上郷岡原遺跡(48)などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑I岩陰遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により検出例が増加している。川原湯勝沼遺跡では水II式土器による再埋葬と思われる土坑が検出され、久々戸遺跡(31)では水式土器の鉢形土器、立馬I遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。本遺跡でも平成15年度の調査で晩期終末から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。検出できた遺構数は少ないが、土器片を中心とする遺物量は多く、県内でも有数のものと考えられる。

**弥生時代** 長野原町域では、この時期の遺跡は極めて希薄である。遺構では、本遺跡で甕形土器を埋設した前期の再埋葬の可能性のある土坑が検出されているほか、立馬I遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度である。また、楡木III遺跡(25)、坪井遺跡、外輪原I遺跡(42)などで前期から中期の遺物、二社平遺跡(4)で後期の遺物が出土している。

**古墳時代** 1938(昭和13)年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、長野原町には大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚の2基の古墳が存在するとされている。しかし、現在までに発掘調査によって確認されたものは一つもなく、現時点では東吾妻町の岩島地区が古墳の西限である。集落としては、林宮原遺跡(22)で1軒、下原遺跡(23)で1軒の住居が確認されているが、いずれも小規模なものである。

**奈良・平安時代** 奈良時代の遺跡は極めて希薄で、分布調査では僅かに羽根尾II遺跡(40)で確認されただけである。これに対して平安時代の遺跡は多く、97遺跡が確認されている。主な遺跡としては横壁中村遺跡、花畑遺跡(18)、林宮原II遺跡、楡木II遺跡、長野原一本松遺跡、向原遺跡、坪井遺跡などが挙げられる。各遺跡での住居の検出数は数軒と少ないが、楡木II遺跡では、9世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が約30軒とまとまって検出されており、「三家」や「長」と書かれた墨書土器の存在とともに注目される。この地域の平安時代の集落は、楡木II遺跡にみられるように9世紀後半に出現し10世紀前半に消滅するものがほとんどであり、特徴的である。特徴的な遺物としては、町立中央小学校の敷地から出土した瓦塔がある。塔の最上層にあたる屋根根部がほぼ完形で残っているもので、現在は同小学校に保管されている。

**中世** この時期の資料は柳沢城跡、丸岩城跡(15)、長野原城跡(33)、羽根尾城跡(39)、などの城館跡が中心であったが、近年の発掘調査により遺跡が増えつつある。西久保I遺跡(13)、立馬I遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡(24)、楡木II遺跡、長野原一本松遺跡などで遺構が確認されている。下原遺跡では畑跡や建物跡、二反沢遺跡では区画跡のほか、羽口や鉄滓など製鉄関連遺跡も検出されている。本遺跡においても、石垣を伴う館跡が検出されており、柳沢城跡との関連で注目される。また平成12年度には踏査により金花山砦跡(9)が新たに見つかっている。

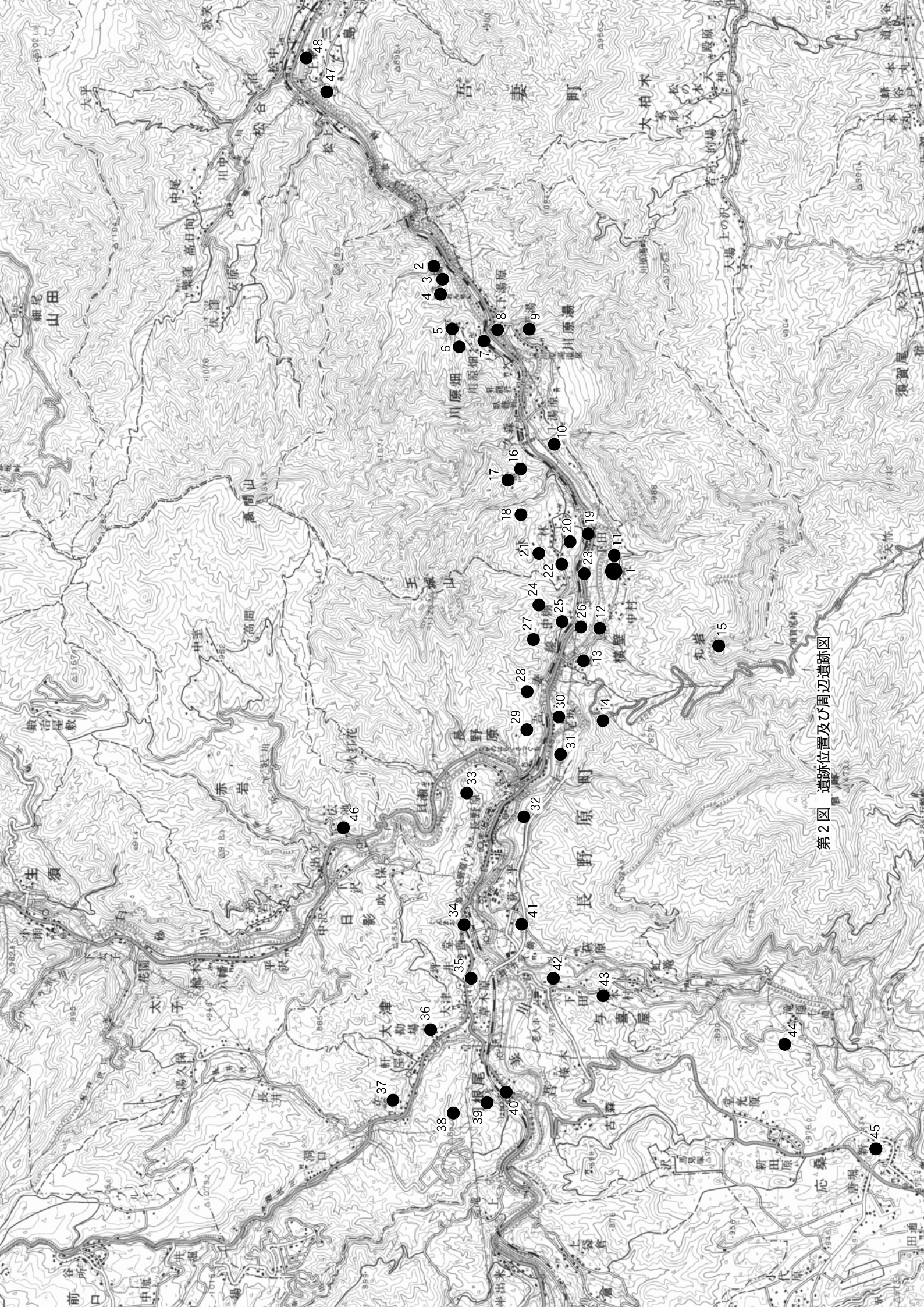
**近世** 近世の遺跡の大部分は1783(天明三)年の浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物により埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡(7)、西ノ上遺跡(8)、川原湯勝沼遺跡、下田遺跡(19)、中棚II遺跡(26)、尾坂遺跡(30)、久々戸遺跡(31)、小林家屋敷跡(34)などが挙げられる。多くは畑を中心とする生産遺跡であるが、東宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡、小林家屋敷跡などでは民家跡も検出されている。特に小林家屋敷跡は、農業・酒造業を営みこの地域の分限者と呼ばれた小林家の屋敷の一部が

## 第2章 遺跡の環境

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	文献
1	横壁中村	長野原町横壁	本遺跡。	5, 7他
2	石畑Ⅰ岩陰	長野原町川原畑	県教委昭和53年度調査。縄文草創期から晩期の遺物と獣骨が出土。	30
3	石畑	長野原町川原畑	事業団平成8・9・10年度調査。縄文前期包含層。弥生中期土坑。近世畑。	4
4	二社平	長野原町川原畑	事業団平成8・10年度試掘。弥生後期土器片。近世畑。	4
5	三平Ⅰ・Ⅱ	長野原町川原畑	事業団平成16年度調査。縄文前期住居。中世建物。陥し穴多数。	15
6	上ノ平Ⅰ	長野原町川原畑	事業団平成18・19年度調査。縄文中期中葉から後期住居。平安住居。陥し穴多数。	24
7	東宮	長野原町川原畑	事業団平成7・9・19年度調査。近世民家、畑。	4
8	西ノ上	長野原町川原湯	事業団平成14年度調査。近世畑。	6
9	金山山砦跡	長野原町川原湯	町教委・事業団により平成12年度に踏査・確認。中世城跡。	
10	川原湯勝沼	長野原町川原湯	事業団平成9・16年度調査。縄文前期後半の土坑、晩期終末期の再葬墓。近世畑。	8
11	横壁勝沼	長野原町横壁	事業団平成6・7年度調査。縄文中期から後期の土器。槍先形尖頭器が出土。	4
12	山根Ⅲ	長野原町横壁	事業団平成10・13・18年度調査。縄文中期後半の住居、土坑。	21, 24
13	西久保Ⅰ	長野原町横壁	事業団平成6・10・12年度調査。縄文中期末葉の敷石住居、土坑。中期の水場遺構。	4
14	柳沢城跡	長野原町横壁	町教委平成5年度調査。中世城跡。郭、堀切、土居等検出。	28
15	丸岩城跡	長野原町横壁	中世城跡。	28
16	立馬Ⅱ	長野原町林	事業団平成14年度調査。縄文時代中期初頭から後半の住居。	10
17	立馬Ⅰ	長野原町林	事業団平成13・14年度調査。縄文早期初頭、晩期の住居。弥生中期の住居、甕棺墓。	13
18	花畑	長野原町林	事業団平成9～12年度調査。平安住居。陥し穴多数。	4
19	下田	長野原町林	事業団平成7年度調査。近世民家、畑。	4
20	中原Ⅰ	長野原町林	町教委平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。	38
21	上原Ⅳ	長野原町林	事業団平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。近世水路。	23
22	林宮原	長野原町林	町教委15年度調査。古墳住居1軒。平安住居6軒。	39
23	下原	長野原町林	事業団平成12～16年度調査。古墳住居1軒。平安住居2軒。中世建物。近世畑。	5, 14
24	二反沢	長野原町林	事業団平成12年度調査。中世区画、製鉄関連遺物。近世畑。	11
25	楡木Ⅲ	長野原町林	事業団平成10年度調査。縄文前期、後期の包含層。弥生中期の包含層。	4
26	中棚Ⅱ	長野原町林	事業団平成11・15年度調査。近世畑、石垣、道など。	5
27	楡木Ⅱ	長野原町林	事業団平成12・13年度調査。縄文早期初頭の集落。前期、中期初頭の住居。平安住居。中世建物。	20, 21
28	幸神	長野原町長野原	事業団平成8・9年度調査。縄文中期中葉から後半の住居。古代の可能性ある畑。	19
29	長野原一本松	長野原町長野原	事業団平成6～19年度調査。縄文中期後半から後期初頭にかけての拠点集落。	3, 17
30	尾坂	長野原町長野原	事業団平成6・7・11・18・19年度調査。近世民家、畑。	4
31	久々戸	長野原町長野原	事業団平成9～15年度調査。縄文晩期土器。近世畑、道、掘立柱建物。	5, 6
32	向原	長野原町長野原	町教委平成5年度調査。縄文中期から後期の住居。平安住居。	34
33	長野原城跡	長野原町長野原	中世城跡。	28
34	小林家屋敷	長野原町長野原	町教委平成14年度調査。近世礎石建物、土蔵、石垣。	40
35	坪井	長野原町大津	町教委平成3・10年度調査。縄文前期、中期住居。弥生土器。平安住居。	33, 36
36	堪場木石器時代住居	長野原町大津	昭和29年調査。縄文中期後半の住居。群馬県史跡。	26
37	櫛Ⅱ	長野原町大津	町教委昭和63年度調査。縄文後期前半の敷石住居4軒。	32
38	暮坪	長野原町羽根尾	町教委平成12年度調査。縄文前期前半の住居。	37
39	羽根尾城跡	長野原町羽根尾	中世城跡。	28
40	羽根尾Ⅱ	長野原町羽根尾	奈良散布地。	31
41	長畝Ⅱ	長野原町与喜屋	町教委平成12年度調査。縄文前期前半、中期後半の住居。	33
42	外輪原Ⅰ	長野原町与喜屋	町教委平成7年度試掘。縄文前期後半の土器。弥生土器。	27
43	上ノ平	長野原町与喜屋	縄文中期、後期の土器、石器類出土。	28
44	滝原Ⅲ	長野原町応桑	町教委平成8年度調査。縄文中期後半の住居。中期末の敷石住居。	35
45	古屋敷	長野原町応桑	昭和34年発見。縄文後期前半の敷石住居。	28
46	広池	六合村赤岩	群馬大学昭和44年度調査。縄文中期後半の住居。	1
47	上郷A	東吾妻町三島	事業団平成15年度調査。陥し穴多数。押型文土器出土。	6
48	上郷岡原	東吾妻町三島	事業団平成14年度調査。縄文中期後半から後期前半住居。近世民家、畑。	18





第2図 遺跡位置及び周辺遺跡図

## 第2章 遺跡の環境

検出されたものであり、文献との照合もなされ重要な発見である。本遺跡からは基跡や泥流堆積物により埋没した畑跡が検出されている。また平成17年度調査では経塚を検出し、多数の一字一石経が出土している。

泥流下から発見される遺跡は、旧地表面がそのまま保存されているものが多く、集落や生産域の構成要素及びその関連性を具体的に読み取ることが可能である。泥流の発生した日時が明らかであるため、遺物の時期をほぼ限定することも可能であり、また、通常では残らない建築部材や漆器などの植物遺存体の検出例も多い。今後水没地の調査が進展するにつれ、泥流に埋没した遺跡の調査はさらに増えることが予想され、近世農村史研究に多大な寄与をもたらすものと考えられる。

参考文献（番号は表1の文献欄に対応）

1. 六合村 1973『六合村誌』
2. 群埋文 1998『長野原久々戸遺跡』第240集
3. 群埋文 2002『長野原一本松遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
4. 群埋文 2003『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
5. 群埋文 2003『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
6. 群埋文 2004『久々戸遺跡(2)・中棚II遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
7. 群埋文 2005『横壁中村遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
8. 群埋文 2005『川原湯勝沼遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
9. 群埋文 2006『横壁中村遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
10. 群埋文 2006『立馬II遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
11. 群埋文 2006『上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
12. 群埋文 2006『横壁中村遺跡(4)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
13. 群埋文 2006『立馬I遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
14. 群埋文 2007『下原遺跡II』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
15. 群埋文 2007『三平I・II遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
16. 群埋文 2007『横壁中村遺跡(5)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
17. 群埋文 2007『長野原一本松遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
18. 群埋文 2007『上郷岡原遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
19. 群埋文 1998『年報17』
20. 群埋文 2001『年報20』
21. 群埋文 2002『年報21』
22. 群埋文 2003『年報22』
23. 群埋文 2005『年報23』
24. 群埋文 2007『年報26』
25. 群馬県史編纂委員会 1988『群馬県史 資料編』1
26. 塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町 堪場木遺跡調査(概報)』
27. 富田孝彦 2000『外輪原遺跡の弥生中期土器』『群馬考古学手帳』10
28. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
29. 長野原町 1993『長野原町の自然』
30. 長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局 1979『石畑遺跡略報』
31. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—』
32. 長野原町教育委員会 1990『榊II遺跡』
33. 長野原町教育委員会 1992『長畝II遺跡・坪井遺跡』
34. 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』
35. 長野原町教育委員会 1997『滝原III遺跡』
36. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡II』
37. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』
38. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡IV』
39. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡II』
40. 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』





第3図 横壁中村遺跡全体図 (1/1000)



### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 第1節 遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で竪穴住居230軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に追うところとなるが、冬には午後3時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで擦糸土器が少量出土している。前期では、初頭の花積下層式から諸磯C式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑はいくつか確認されている。住居が出現するのは勝坂式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成される。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。

後期後半以後の様子を示す材料は少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つとあって良いだろう。

弥生中期前半期の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後、本地域に集落が戻るのは9世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が数軒確認され、炭化した床材が遺存する焼失住居跡も検出されている。

中世になると本地域には、海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世の館が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓や経塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は、平成16年度までに調査された掘立柱建物、埋設土器、焼土等についての報告であり、資料編的な内容と捉えていただきたい。表2は現段階における本遺跡の遺構種別ごとにその数を集計したものである。特に、本年度整理を行った掘立柱建物、埋設土器、土坑などについては、これまでに報告されたものと数量が変更されている。本遺跡の整理は継続中であるため、さらに変更される可能性があることをご了解いただきたい。

表2 横壁中村遺跡遺構数集計表（平成8～16年度）

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
竪穴住居		1	3	27	52	104	19	18	13	237
土坑	縄文			86	110	272	11	21	28	528
	弥生					4				4
	平安				1	1				2
中世以降				161	134	170	2	1	4	472
掘立柱建物	縄文			4		6		1		11
	中世				3	7				10
埋設土器	縄文		2	23	9	27	4		2	67

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
配石遺構				42	17	28	17	53	15	172
列石遺構				7	4	5	12	4		32
集石遺構				1		4				5
環状柱穴列	縄文				2				1	3
柱穴列	縄文				1			1		2
	中世					1				1
焼土	縄文			1	2	2		2	1	8
	中近世			12	6	16				34
埋没河道				1	5					6

## 第2節 基本土層（第4図）

本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返して堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層ま

で確認しているが、この10層が1箇所ですべて揃う断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。

今回の報告対象となる縄文時代中期の遺構は、土層としてはⅥ層に該当するが、第1章本文中で「地山の黄色砂質土」と呼んでいるのは、Ⅷ層に該当する。

	I層 表土（耕作土）
I	II a層 浅間A泥流
II a	II b層 浅間A軽石
II b	II c層 浅間A軽石下畑の耕作土
II c	III層 淡褐色土 軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区1号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。
III	IV層 灰黒褐色土 やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。
IV	V層 黄褐色土 やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曾利B式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅷ層ないしはローム層の2次堆積の可能性が高い。
V	VI層 灰褐色土 締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫（山石）を含む。
VI	VII層 西側縁辺に特有に土壌で、層位はⅧ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている。
VII	VIII層 黄褐色粘質土 崩落したローム層の2次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考えられる。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。
VIII	IX層 黒褐色粘質土 硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。
IX	X層 黄色砂礫層 吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。
X	

第4図 横壁中村遺跡基本土層

## 第3節 土器埋設遺構

縄文時代の土器を埋設した遺構は、調査段階で総計71基が確認された。各区の内訳は18区に23基、19区に9基、20区に28基、28区に6基、29区に1基、30区に4基が分布する。これは集落の密集の度合いを反映しているが、この数が直ちに土器埋設遺構の総数とはならない。

当遺跡はローム層の堆積が認められず、南側に迫る山地からの礫を多量に含む崩落土や雨水による堆積があり、縄文時代の遺構は黒褐色土中に遺構面を構築したものも多い。また、後世の畑耕作等に伴う削平もかなり及んでいることから、住居の炉内に埋設した土器や埋甕が単独で確認される事例や、埋設土器の一部が散乱している事例も数多い。本来は発掘調査時に遺構の見極めと検討を加えるべきだが、諸般の事情で果たされていないため、整理作業では周辺グリッド出土遺物との接合関係の確認と、土器本体の観察、特に炉内埋設土器に認められる二次的な被熱痕跡の観察等を実施し、周辺遺構との関係も考慮して検討を加えた。

その結果、単独の土器埋設遺構と判断されるものは総数56基で、他に住居の施設と判断されるものが10基、土器埋設遺構とは認められないもの5基となった。また、単独の土器埋設遺構には、土坑内に埋設されたものと、そうでないものがある。

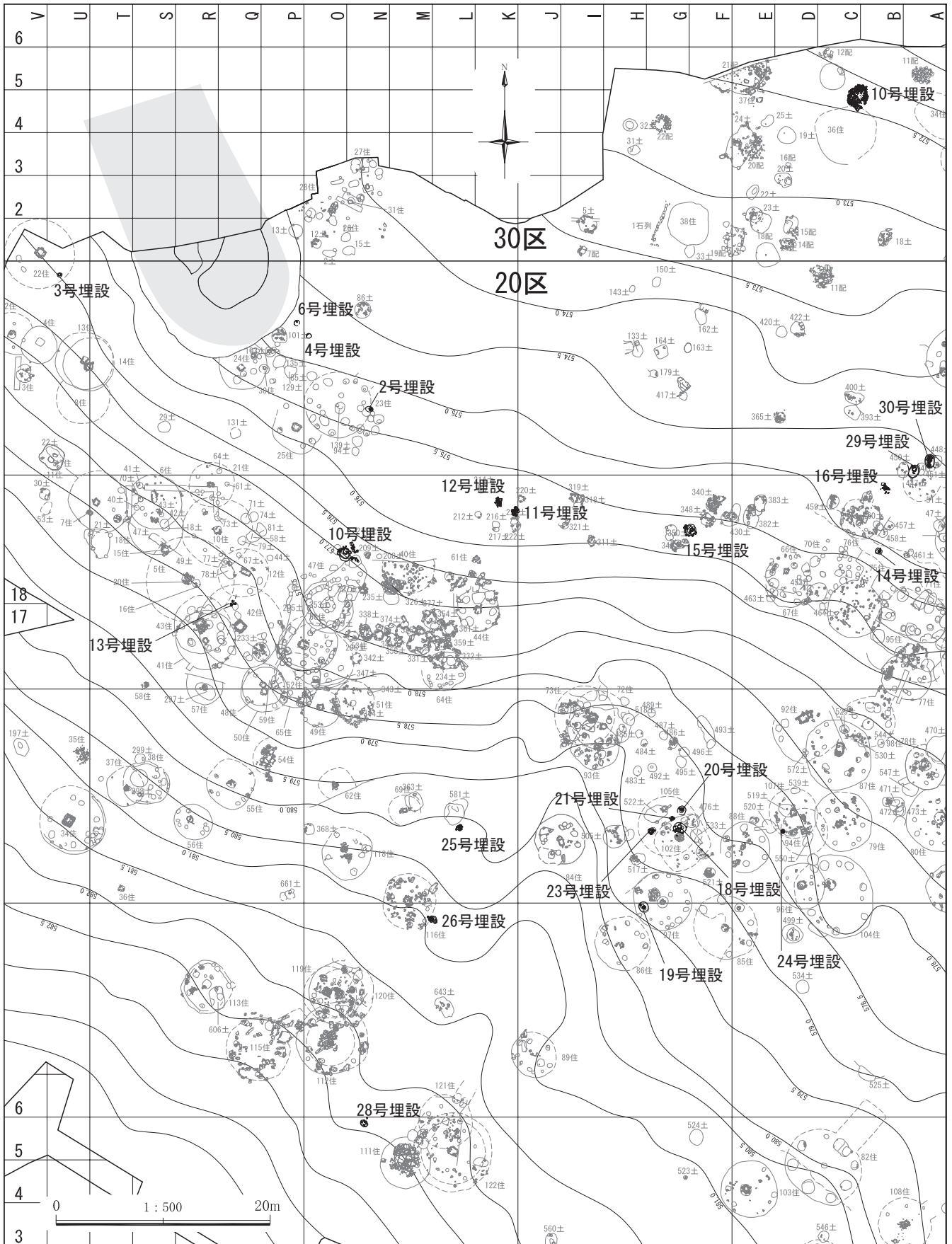
表3（19～20頁）に一覧を掲載した。網掛けしたものは今回は掲載していないもので、欠番、名称変更のほか、住居の施設に変更されてすでに報告したもの、住居の施設として今後報告を予定しているもの、土器埋設遺構とは判断できないもの、などを含む。今回報告したもののなかにも、住居の施設と判断されるものも含んでおり、再度検討を加えるつもりである。

また、第5図～第7図に区毎の分布図を示した。これは付図を区毎に裁断したもので、縄文時代中期～後期の主要遺構と重ねて表示してある。調査区外の地形を表現していないため、第1図の地形図と併

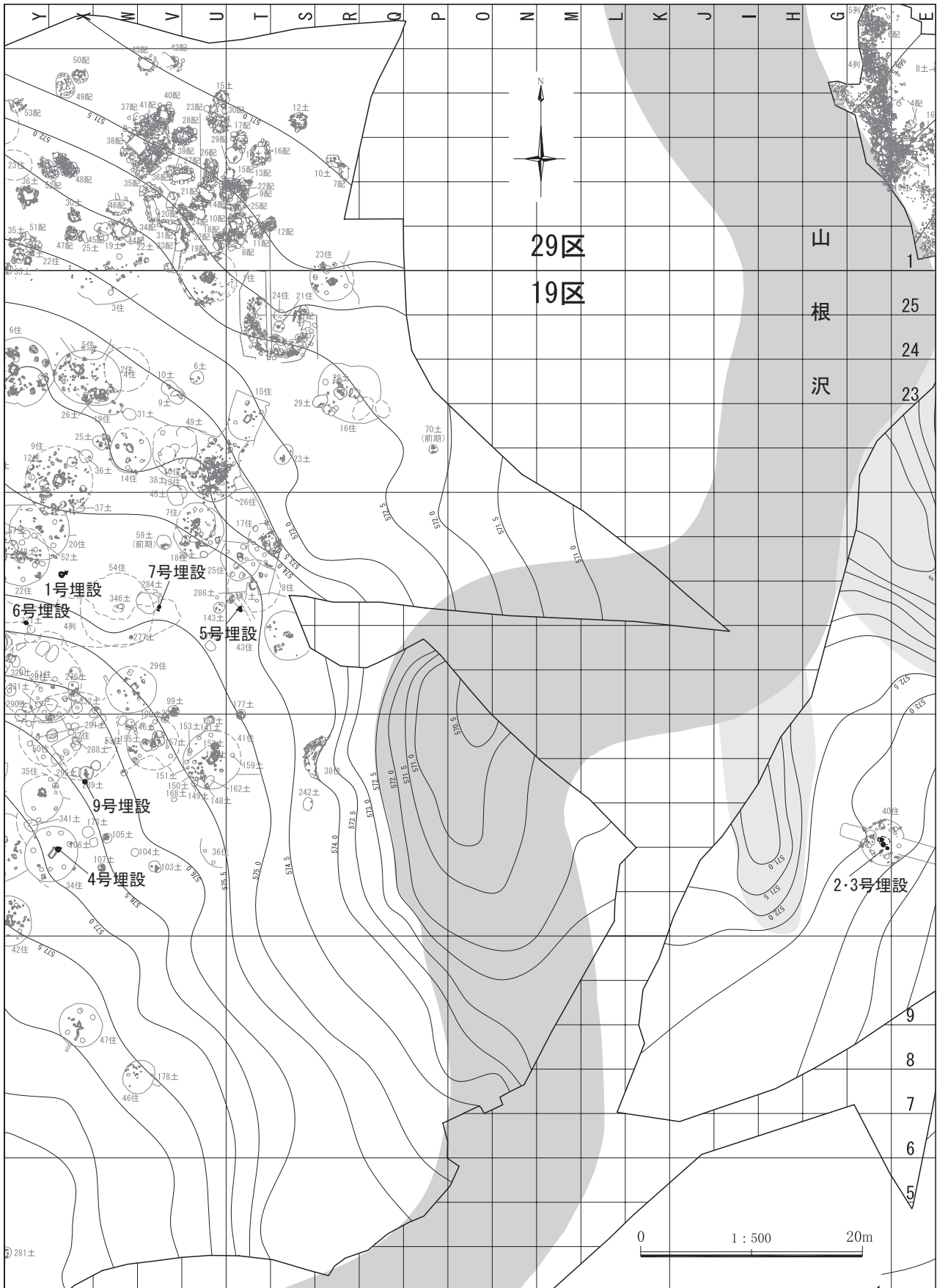
せて見ていただきたい。調査区の北側は吾妻川が東西に流れており、本遺跡とは比高差30m以上の断崖で画されている。調査区の東側、つまり18区の東側には、南側の山地から流れる東沢があり、これも遺跡内との比高差は5m以上あるが、本遺跡にとって重要な水源である。遺跡中央を南北に蛇行する山根沢（濃いトーンで表示、調査結果を加味して復元）も、本遺跡の重要な水場で、現在も適度な水を供給している。淡いトーンで示したのは埋設谷で、年代ははっきりしないが、地山土のシルト～砂質土が堆積する際に南側の山地から流れる沢によって刻まれた痕跡で、このうち18区の中央を南東から北西に横切る谷は、上層に縄文時代中期から後期前半代の遺物と礫を大量に包含している。この谷については、本文中で埋設谷と表記する。19区・20区の北半部から29区・30区には、中期後半の環状集落があり、29区西側には後期後半の配石墓群がある。整理作業は未だ途上にあり、時期別の遺構分布は今後の課題である。

ここでは、全体の分布状況を見ておきたい。本遺跡で土器埋設遺構が一般化するの、中期勝坂3式～加曾利E1式期からで、その後、後期堀之内2式期までのものが確認されている。それ以前の時期では、前期黒浜式期が1基（19区5号）あるが、これは住居の炉と判断した。ただし、勝坂3式～加曾利E1式は3基のみで、次ぐ加曾利E2式期の土器埋設遺構は確認されていないため、この点については検討を要する。

山根沢の西側の分布は、ほぼ環状集落の分布に符合している様に見える。時期別にみると、中期のものと後期のものが拮抗しており、継続的な分布のように見えるが、実際には後期の住居分布は環状集落を継承してはいない。ただし、集落は継続している可能性が高く、今後の作業でその実態を明らかにしていきたい。山根沢の東側の分布も、西側と同様に、住居群分布と符合している。ここでは中期のものがやや優勢であり、後期のものは分布が西側に偏る傾向が認められる。

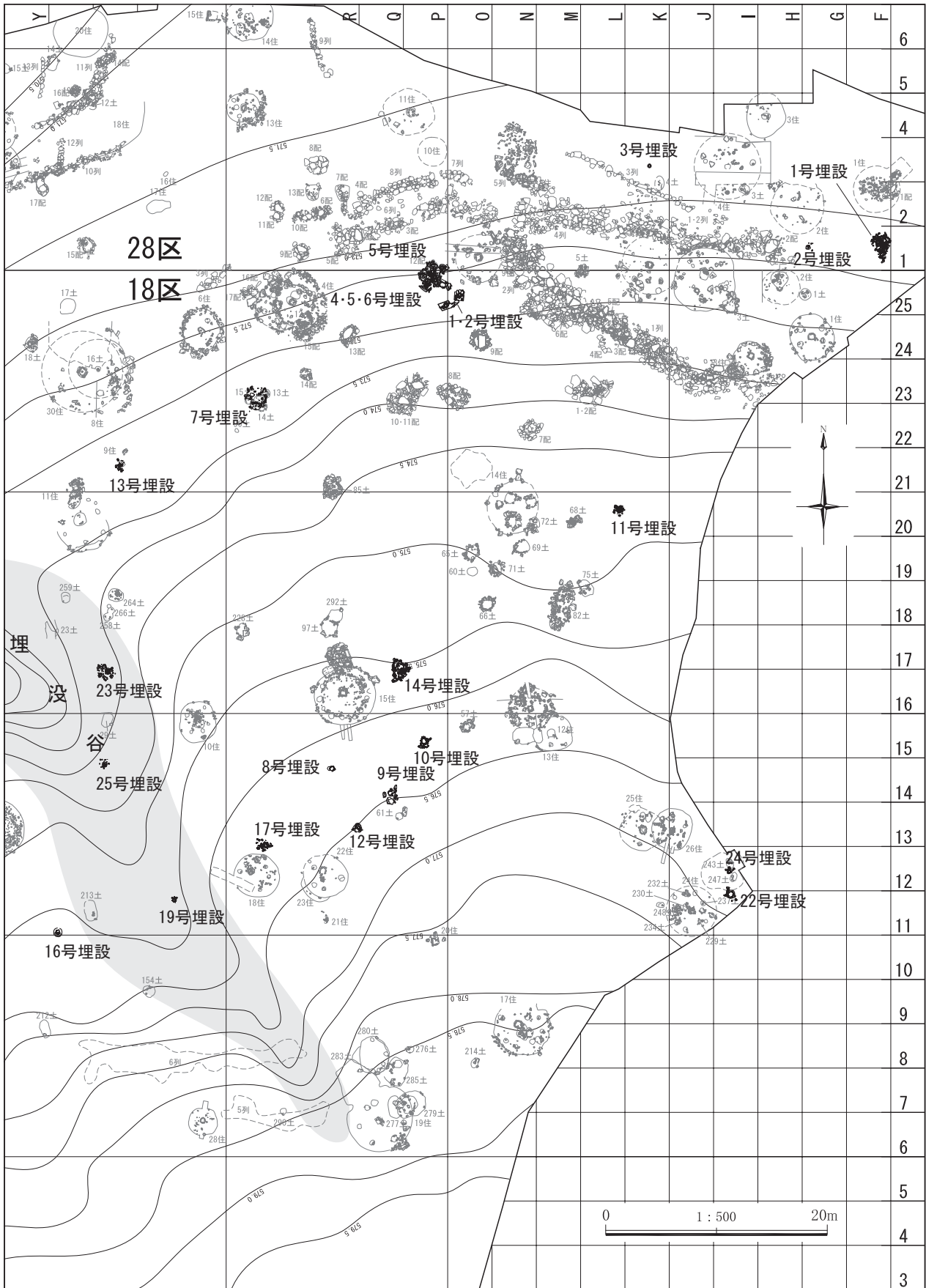


第5図 20区・30区土器埋設遺構分布図



第6図 19区・29区土器埋設遺構分布図

第3章 発見された遺構と遺物



第7図 18区・28区土器埋設遺構分布図



表3 横壁中村遺跡 土器埋設遺構一覧

遺構名	位置	時期	型式名	調査	器種	大きさ	使用部位	設置	認定	備考
18区1号	O-25	中期	加曾利E 3 式中	1998	深鉢	中形	口縁～胴部中位	逆位	墓	列石南側隣接中にあり。上面に石蓋。
18区2号	P-25	中期	加曾利E 3 式中	1998	深鉢	大形	口縁～胴部中位	逆位	墓	直下から小形深鉢(2埋-2)出土。グリッド2点接合。
18区3号	L-20	欠番		1998	11号埋設に変更					
18区4号	P-25	中期	唐草文系	1998	深鉢	大形	胴部下～底部	正位	覆土?	大形土器の下半部。被熱なし。5号を炉とする住居の遺物か。
18区5号	P-25	中期	加曾利E 3 式	1998	深鉢	小形	胴部上～下位	正位	炉	周囲に板石。上端被熱明瞭。炉と認定。
18区6号	P-25	中期	加曾利E 3 式	1998	深鉢	大形	胴部下～底部	正位	埋甕?	大形土器の下半部。被熱なし。5号を炉とする住居の遺物か。
18区7号	T-23	後期	称名寺1 式	1998	深鉢	大形	胴部中位～底部1/3	正位	炉?	円形形状の土坑内に埋設。周囲から遺物出土。
18区8号	R-14	後期	後期前半	2001	深鉢	大形	胴部中位	正位	炉	上端部5～7cm幅が変色。小形棒状礫の磨石共伴。
18区9号	Q-14	中期	加曾利E 3 式新	2001	深鉢	大形	口縁～胴部中位	逆位	墓	掘り方不明瞭。
18区10号	P-15	後期	堀之内1 式	2001	深鉢	大形	口縁～胴部下位1/4	逆位	墓	石組みの隅に大形破片を重ねて縦位に設置。グリッド3点接合。
18区11号	L-20	中期	唐草文系	2001	深鉢	中形	口縁～胴部中位	逆位	墓	3号埋設土器から変更。掘り方不明。
18区12号	R-13	中期	加曾利E 1 式古	2001	深鉢	大形	完形、口縁1/2欠損	斜位	墓	注記は11号。楕円形の土坑内に埋設。
18区13号	W-21	後期	堀之内1 式	2002	深鉢	小形	口縁～胴部下半	正位	炉?	1/3を欠失。
18区14号	Q-16	中期	加曾利E 3 式中	2002	深鉢	大形	完形品	逆位	墓	楕円形の土坑内に埋設。
18区15号	N-15	中期	加曾利E 3 式新	2002	深鉢	大形	口縁～胴部中位	逆位	埋甕(4)	で報告済み(18区12住埋甕)
18区16号	X-11	中期	加曾利E 3 式中	2002	深鉢	中形	口縁～胴部中位	正位	墓	円形の土坑内に埋設。土器下に柱穴状の落ち込み。
18区17号	T-13	中期	加曾利E 3 式中	2002	深鉢	大形	口縁～胴部中位	逆位	墓	掘り方不明。
18区18号	Q-6	後期		2002						19号住居の炉に変更。後期住居として後日報告予定。
18区19号	V-11	後期	後期前半	2002	深鉢	中形	胴部中位	正位	墓	グリッド13点接合。
18区20号		欠番								欠番
18区21号	J-11	中期	加曾利E 3 式	2002	深鉢	大形	口縁～胴部中位	逆位	埋甕	横壁(4)で報告済み(18区24住埋甕)
18区22号	I-11	中期	加曾利E 4 式古	2002	深鉢	大形	口縁～胴部中位	正位	埋甕	口縁部に小石がめぐり、周囲に敷石あり。グリッド1点接合。
18区23号	W-16	中期	加曾利E 3 式新	2002	深鉢	中形	口縁～胴部中位	逆位	墓?	47号配石中にあり、丸石(23埋-2)近接。
18区24号	I-12	中期	曾利IV～V 式	2002	深鉢	中形	口縁～胴部中位	正位	埋甕?	周囲に厚手の敷石あり。グリッド2点接合。
18区25号	W-14	後期	後期前半	2002	深鉢	大形	胴部中位～下位	逆位	墓?	上面に土器集中。
19区1号	X-19	後期	後期前半	2001	深鉢					
19区2号	F-12	後期	堀之内1 式	2002	深鉢	小形	胴部中位～底部	正位	墓?	周囲に板石あり。
19区3号	F-13	後期	堀之内1 式	2002	深鉢	小形	口縁～胴部中位	逆位	墓?	40号住居を切る。被熱痕跡なし。
19区4号	X-12	後期	称名寺1 式	2003	深鉢	中形	胴部下～底部	正位	炉?	40号住居の一部を切る。上端部被熱変色。底部内面に凹石。
19区5号	T-18	前期	黒浜式	2003	深鉢	中形	胴部中位～底部	正位	墓	34号住居を切る。凹石共伴。
19区6号	Y-18	後期	堀之内2 式	2003	深鉢	小形	胴部中位～下位	正位	炉	住居の炉とみるのが妥当。
19区7号	V-18	後期	堀之内1 式	2003	深鉢	大形	口縁～胴部下位2/3	正位	祭祀	朝顔形、被熱なし、4号列石下で確認。
19区8号	W-18	後期	堀之内1 式	2003	深・浅鉢	大形	口縁～底部1/3	正位	埋納	4号列石下で確認。破片を重ねて押し込んだ状態。
19区9号	V-15	後期	後期前半	2003	深鉢	大形	口縁～底部	正位	炉	複数個体の土器を使用。後期住居炉に変更。後日報告予定。
20区1号	U-21	後期	称名寺1 式期	1999	深鉢					142号土坑を対ピットとする住居の炉か。
20区2号	N-22	後期	後期前半	1999	深鉢	大形	口縁～胴部中位	正位	埋甕	11号住居の埋甕に変更。上端部劣化。後日報告予定。
20区3号	U-25	中期	唐草文系	1999	深鉢	中形	胴部中位～底部	正位	墓	1号掘立柱建物柱1を切る。上部は攪乱で消失か。
20区4号	O-24	中期	加曾利E 3 式	1999	深鉢	大形	口縁～胴部中位	正位	埋甕	横壁(2)報告済みの22号住居の埋甕となる。
				1999	深鉢	大形	口縁部片	逆位	墓?	口縁端部の一部のみ確認。

\* ここでは便宜的に土器の大きさを、口径40cm以上を大形、40～25cmを中形、25cm以下を小形と表記する。

第3章 発見された遺構と遺物

遺構名	位置	時期	型式名	調査	器種	大きさ	使用部位	設置	認定	備考
20区5号	P-23	中期	加曾利E 3式	1999	深鉢		口縁～胴中位	正位	埋甕	横壁(2)で報告済み(20区30住埋甕)
20区6号	P-24	中期	曾利III式	1999	深鉢	小形	胴中位～底部	正位	墓?	円筒状の土坑内に埋設。
20区7号	30区に変更			1999	深鉢					30区に変更。
20区8号	P-23	中期	唐草文系	1999	深鉢		口縁～胴中位	正位	炉	横壁(2)で報告済み(20区30住炉)
20区9号	30区に変更									30区に変更。
20区10号	O-19	後期	称名寺1式	2000	深鉢	大形	口縁～胴部下位	正位	墓	39住埋甕から変更。円筒状の土坑内に埋設。
20区11号	K-20	中期	唐草文系	2000	台付深鉢	小形	胴中位～底部	正位		2号掘立柱建物の西側にあり。
20区12号	K-20	後期	後期前半	2000	深鉢		胴中位～底部	正位	炉?	数片の土器が伴出。11号と近接。
20区13号	Q-18	中期	中期後半	2000	深鉢		胴下半～底部		覆土?	42号住居の遺物か。
20区14号	B-19	後期	堀之内1式	2001	深鉢	中形	口縁～底部3/4	逆位	祭祀	4号列石下で確認。円筒状の土坑内に埋設。
20区15号	G-19	中期	唐草文系	2001	深鉢	大形	胴部中位～下位	正位	墓	楕円形の土坑内に埋設。小形棒状礫の台石共伴。
20区16号	B-20	中期	加曾利E 3式	2001	深鉢	大形	胴部中位～下位	正位		上面に円礫がのり、周囲に板石が散乱。
20区17号	L-4	中期	加曾利E 3式新	2003	深鉢	中形	胴中位～下位	正位	埋甕	横壁(5)で報告済み(20区122住埋甕)
20区18号	G-12	後期	称名寺1式	2003	深鉢		胴部中位～下位	正位	墓	102住・105住を切る。楕円形の土坑内に埋設。上面に棒状円礫、周囲に土器散乱。グリッド13点接合。
20区19号	H-10	後期	称名寺1式	2003	深鉢	中形	口縁～胴部中位	正位	墓	97号住居を切る。円形の土坑内に埋設。
20区20号	G-13	後期	称名寺1式	2003	深鉢	中形	胴部中位～底部	正位	墓	円筒状の土坑内に埋設。底部内面に凹石。
20区21号	G-12	後期	後期前半	2003	鉢	中形	胴部上位～底部	正位	墓	特殊な把手付鉢。18号に隣接。
20区22号	G-11	中期	加曾利E 4式	2003	深鉢		完存	横転	横壁(5)で報告済み(20区97住覆土の土器)	
20区23号	G-12	中期	唐草文系	2003	深鉢	小形	胴部上位～中位	正位	炉	105住と重複。石囲いを伴う。上端部被熱痕跡明瞭。
20区24号	D-12	中期	唐草文系	2003	深鉢	中形	完形	正位	埋甕?	107号住居内にあり。
20区25号	L-12	中期	加曾利E 3式中	2004	深鉢	中形	胴部中位	正位		掘り方不明。住居の炉あるいは埋甕か。
20区26号	M-10	中期	唐草文系	2004	深鉢	中形	口縁部～胴部中位	逆位	埋甕	上面に蓋石がのり、直下にも板石あり。
20区27号	T-11	中期	唐草文系	2004	深鉢		口縁～胴下位	横転		土器埋設遺構にあらず。欠番。
20区28号	N-5	中期	加曾利E 3式新	2004	深鉢	小形	口縁～胴部中位1/3	逆位		周囲に礫あり。土器は3分の1の破片。
20区29号	A-21	中期	加曾利E 3式新	2001	深鉢	大形	口縁～胴部上位	逆位	墓	447号土坑から変更。楕円形の土坑内に埋設。
20区30号	A-21	中期	加曾利E 3式新	2001	深鉢	中形	胴部上位～下位	逆位	墓	448号土坑から変更。楕円形の土坑内に埋設。
28区1号	F-1	中期	唐草文系	1996	深鉢	小形	口縁～胴中位	正位	炉	隣群中にあり。住居炉の可能性あり。土器所在不明中。
28区2号	G-1	中期	加曾利E 1式古	1998	深・浅鉢		口縁部・胴部・底部	?		方形状の掘り方に別個体数片を重ねて埋納。
28区3号	K-3	中期	加曾利E 1式古	1996	深鉢	小形	胴部中位～底部	正位	炉?	台付き土器台部共伴。
28区4号	L-3	欠番		1997						配石中に土器片が集積。
28区5号	P-1	中期	加曾利E 3式中	1996	深鉢	中形	胴部中位～底部	正位	埋甕?	12号配石内の大形地山礫に接して設置。
28区6号	P-4	中期	唐草文系	1997	深鉢		胴部下位～底部	正位		11号住居石囲い炉の上面にあり。覆土中の遺物であろう。
29区1号	Y-1	欠番								埋設にあらず。22号住居の遺物。
30区7号	N-2	中期	加曾利E 3式古	1999	深鉢		胴部中位	正位	炉	30区32号住居の炉に変更。後日報告予定。
30区8号	欠番									欠番。
30区9号	B-4	後期	高井東式	1997	深鉢		胴部1/4周分	横位		潰れた状態で確認。埋設にあらず。
30区10号	C-4	中期	加曾利E 3式	1997	深鉢	小形	胴部中位	逆位	炉	隣群中に埋設。端部の被熱痕跡明瞭。
30区11号	B-1	中期	加曾利E 3式	1999	深鉢	中形	口縁～胴部中位	逆位	墓?	改30区184号土坑に接してあり。



以下、個別に報告するが、埋設に使用された土器の大きさを、ここでは便宜的に口径40cm以上のものを大形、25cm～40cmを中形、25cm以下を小形と表記する。

#### 18区1号土器埋設遺構

調査年度 平成10年度

位置 O-25グリッド

確認状況 28区の列石の調査に伴い、大小礫が全面に広がる縄文時代の文化層を調査中に、一辺40cmほどの扁平な亜角礫の直下で確認された。

埋設状況 使用された土器は、口径38cmほどの加曾利E3式期中段階の深鉢で、胴部下半を打ち欠いて礫の間に逆位に埋設し、それに蓋をするように扁平な亜角礫が乗せられていた。土器は残存高が31cmで、口縁部に渦巻文と楕円区画文を組み合わせて4単位で構成し、胴部には懸垂文を11本垂下させた関東系の土器で、区画内を縦位条線で充填している。土器の中は土壌で満たされており、その土壌も調査したが、検出できたものはない。

掘り方 明瞭な掘り方は確認できなかった。

所見 深鉢の上半部を逆位に埋設したもので、蓋石を伴う。周辺の調査状況より、住居その他の遺構との関連は認められないことから、単独の遺構と判断した。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期中段階に比定されよう。

#### 18区2号土器埋設遺構

調査年度 平成10年度

位置 P-25グリッド

確認状況 1号埋設の西南西1.2mに近接する。埋設されたレベルも近いため、ほぼ同時に発見された。

埋設状況 使用された土器は口径42cmほどの加曾利E3式中段階の大形深鉢で、やはり胴部下半を打ち欠いて逆位で埋設されていた。これには蓋石はなかったが、上方にあった下端部が潰れた状態で確認されており、あるいは確認以前に気づかずに蓋石を取り去ってしまった可能性もある。土器は残存高が

31cmで、口縁部に渦巻文と楕円区画文を組み合わせて5単位で構成し、胴部には無文懸垂帯と蛇行沈線を10本垂下させた関東系の土器で、区画内を充填する縄文はRLである。

また、埋設土器の直下から、胴部下半を欠損した小形深鉢(2埋-2)が、横転して潰れた状態で確認された。この土器は、埋設土器の口唇部との間に2～3cmの間隙があり、接してはいない。また残っていたのは2/3周分で、表の破片が下位に、裏の破片がその上にあることから、埋設土器を設置するのに先立って、破片の状態で入れられたか混入したものと考えるのが妥当であろう。

なお、埋設土器の中は土壌で満たされており、その土壌を調査したところ、中位付近から長さ9cmほどの小さな磨石(2埋-3)が1個確認された。

掘り方 明瞭な掘り方は確認できなかった。

所見 深鉢の上半部を逆位に埋設したもので、住居その他の遺構との関連は認められないことから、単独の遺構と判断した。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期中段階に比定されよう。

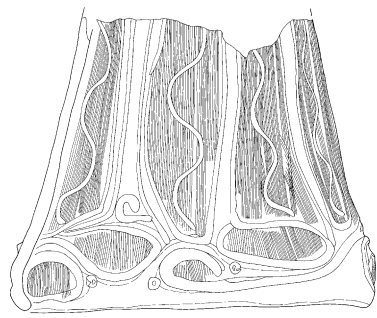
#### 18区4号土器埋設遺構

調査年度 平成10年度

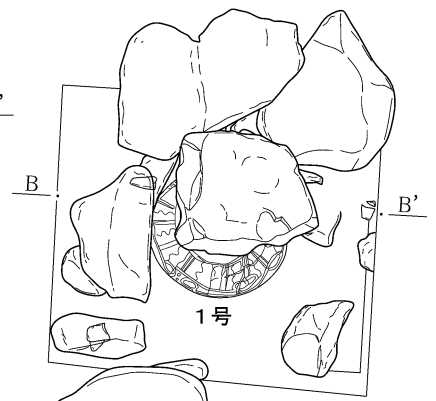
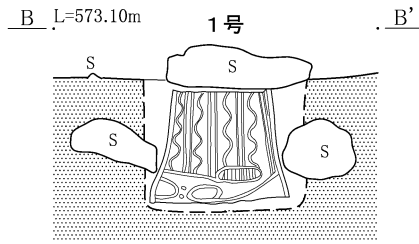
位置 P-25グリッド

確認状況 大形の礫が集積した12号配石を調査中に、配石遺構中に埋設された土器として確認された。12号配石は長軸2.7mほどの小さな纏まりとして認定され、その一部は28区にも及んでいるが、そのなかに本遺構も含めて4つの土器埋設遺構が確認されている。18区帰属の4号・5号・6号、そして28区帰属の5号である。また、配石遺構の範囲では、礫の上面から比較的多くの遺物が出土している。

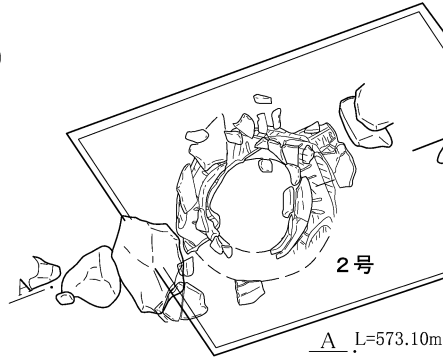
埋設状況 4号は唐草文系深鉢の胴部下半を使用したもので、配石中の南西寄りで正位で確認された。確認されたレベルは、北東側に隣接する5号や28区5号よりやや高い位置にあり、楕円形状にひしゃげた状態であった。底部はほぼ完存するが、上位は大半を失っている。土器内部は土壌で満たされており、



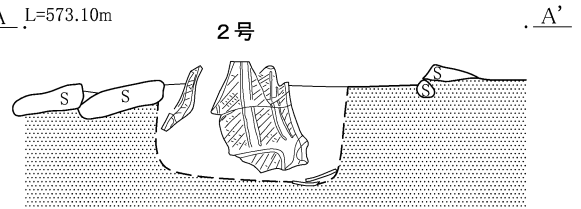
1埋



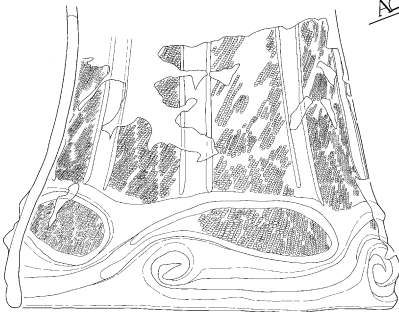
2埋-2



A L=573.10m



2号



2埋-1

0 1 : 20 1m



18区 1号土器埋設遺構 確認状況



18区 2号土器埋設遺構 確認状況



18区 1号土器埋設遺構 埋設状況



18区 2号土器埋設遺構 埋設状況

第8図 18区 1号・2号土器埋設遺構

伴出物はなかった。また、二次的な被熱痕跡も認められない。

**掘り方** 確認できない。

**伴出遺物** 特にない。

**所見** 深鉢の胴下半部が正位で確認されたが、底部のレベルが高く、潰れた状態を示していることから、土器埋設遺構とは認定しがたい。むしろ、12号配石上面からの出土遺物の一部であったとするのが妥当であろう。時期は中期加曽利E3式期に比定されよう。

#### 18区5号土器埋設遺構

**調査年度** 平成10年度

**位置** P-25グリッド

**確認状況** 表土掘削の段階で大形の地山礫が点在し、その中央で一端が球状に加工された特異な石製品と28区5号土器埋設遺構が確認された。この段階で12号配石と命名され、その後浮いた礫を取り去って面的に掘り下げた段階で、18区4号・5号・6号土器埋設遺構は確認された。

**埋設状況** 5号は、胴上半部と底部を打ち欠いた粗製の小形深鉢を正位に埋設したもので、東側に大きく傾けた状態で確認された。使用された土器は上半部内面が強い被熱による変色・劣化が著しく、土器の周囲には同様に被熱痕跡が明瞭な礫片が数個残されていた。また、土器の東側の下端部付近には、明瞭な焼土が残っていた。

**掘り方** 確認できなかった。

**伴出遺物** 特にない。

**所見** 土器の内面に明瞭な被熱痕跡があること、周囲に同様の被熱痕跡が明瞭な礫片が残っていること、焼土を伴うことなどから、本遺構は住居の炉とみて間違いはない。本遺跡でも小形深鉢を使用した土器埋設石囲い炉は数多く確認されており、炉内隅に設置する場合は大半が中央に向かって大きく傾けて設置されている。

この想定が正しいとすれば、18号配石遺構は住居に変更されることになる。18号配石から出土した遺

物を第28図～第29図に示した。そのうち、20は敲打によって頭状の造り出しを設けた特異な石製品であるが、これは当埋設土器の西側に近接して、頭部を上にして設置しており、炉の石囲いの一部であったと考えられる。

なお、当遺構の時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期に比定されよう。

#### 18区6号土器埋設遺構

**調査年度** 平成10年度

**位置** P-25グリッド

**確認状況** 12号配石の南東に隣接して確認された。

18区5号との距離は南東へ1.5mである。

**埋設状況** 深鉢の底部のみが正位で確認された。断面図では底部内面に円礫が記載されている。おそらく、土器の上半部は耕作等で失われたのであろう。

**掘り方** 断面図では掘り方が明記されているが、平面図が残っていない。

**伴出遺物** 土器内の底部付近に、直径数cmほどの円礫があったと見られる。

**所見** 想定の域を出ないが、18区5号を炉とする住居の出入り口部に埋設された埋甕であったと考えたい。本遺跡では南東側に出入り口部が想定される中期後半段階の住居事例が多く、5号を炉と想定した場合の距離も妥当な位置にある。

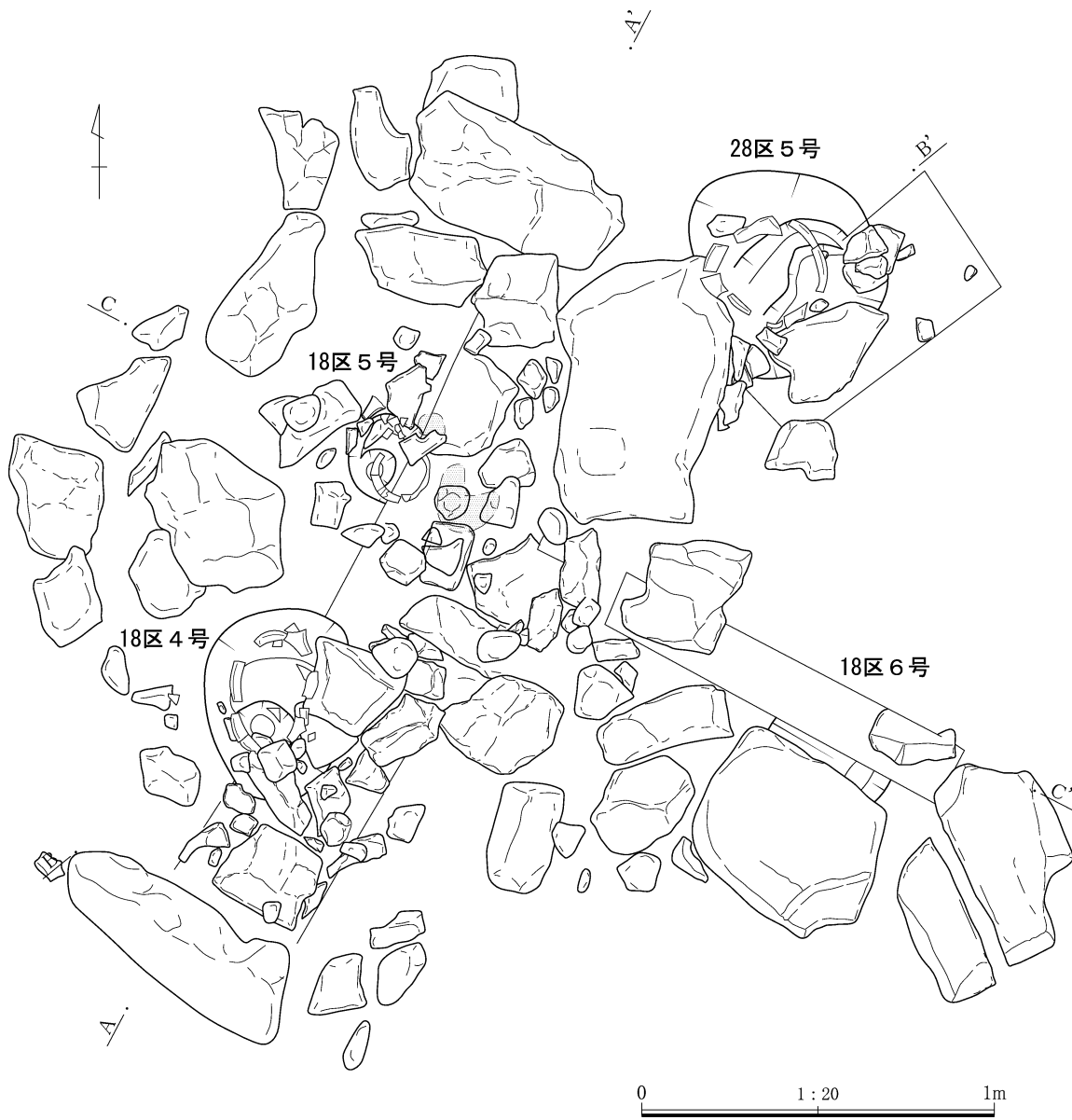
#### 18区7号土器埋設遺構

**調査年度** 平成10年度

**位置** T-23グリッド

**確認状況** 地山礫が多量に散在するなかに、単独で確認された。南西側に2号掘立柱建物が隣接する以外は周囲に遺構はなく、土器の散布も少ない地区である。2号掘立柱建物のすぐ南には後世の石垣があり、その構築の際にかなり削平を受けたためであろう。埋設土器の周囲からは、少量の土器が出土している。

**埋設状況** 大形の深鉢を正位に埋設したものであるが、胴部以上と下部の北側半分を失っており、残さ



18区12号配石

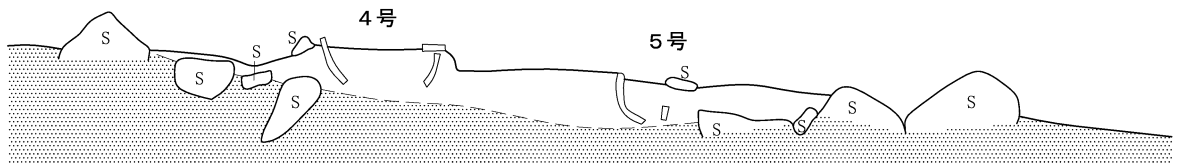


18区4号土器埋設遺構

第9図 18区4号・5号・6号、28区5号土器埋設遺構(1)

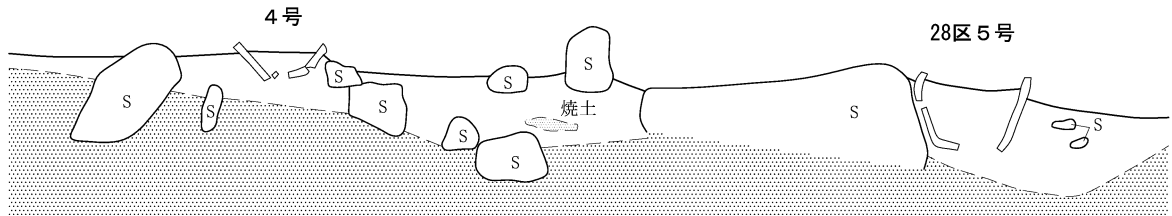
A L=573.10m

A'



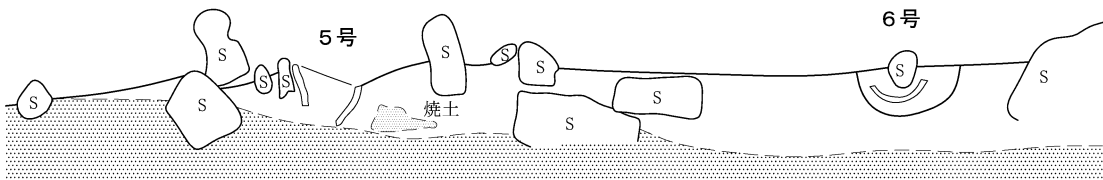
B L=573.10m

B'



C L=573.10m

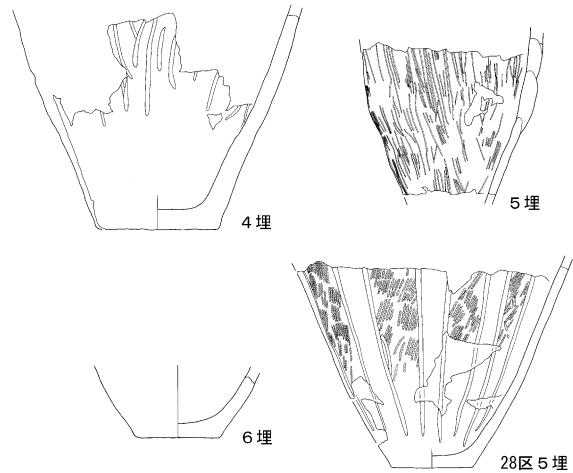
C'



0 1 : 20 1m



18区 5号土器埋設遺構

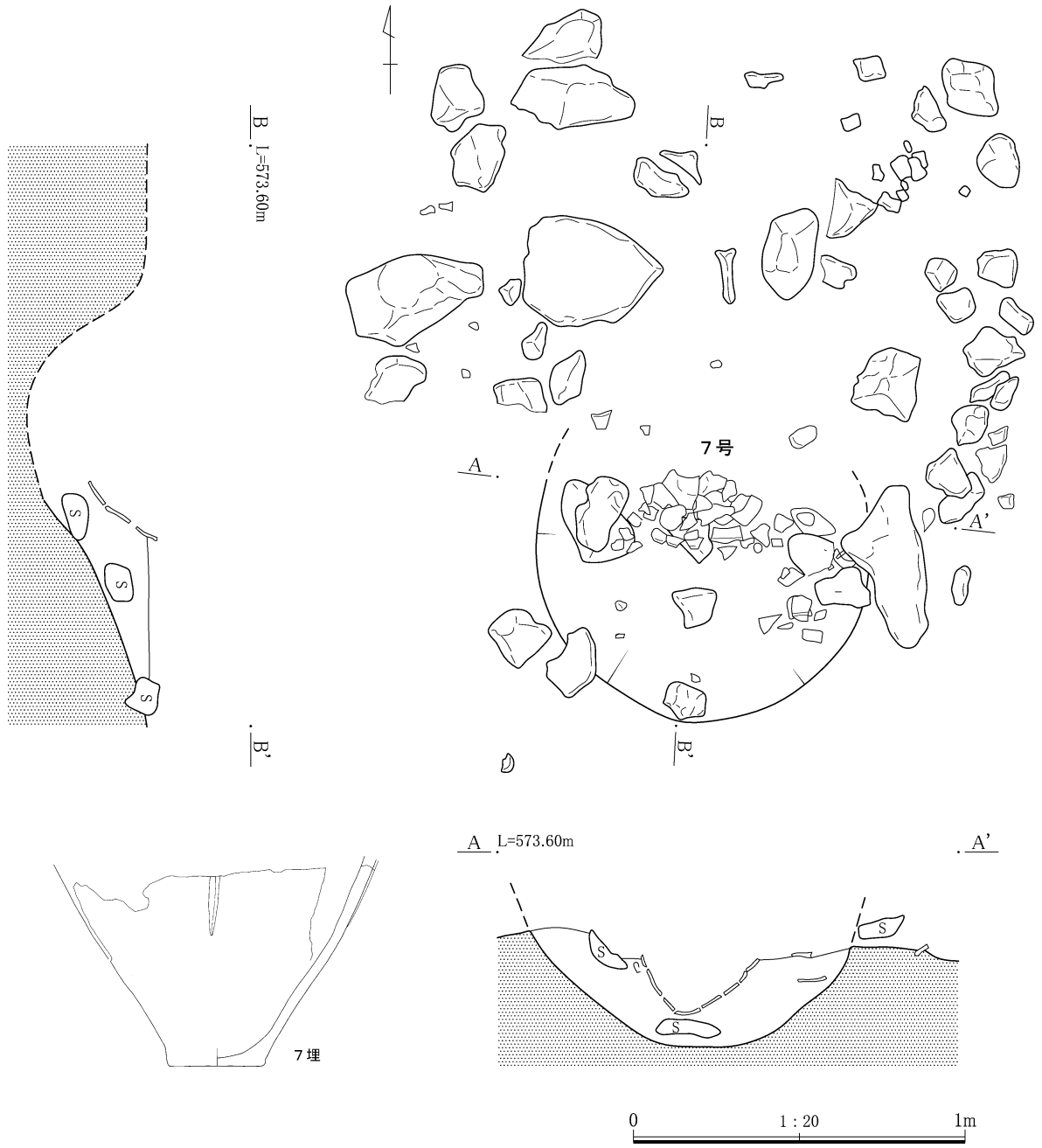


18区 6号土器埋設遺構



28区 5号土器埋設遺構

第10图 18区 4号・5号・6号、28区 5号土器埋設遺構(2)



18区 7号土器埋設遺構

第11図 18区 7号土器埋設遺構



れたのは僅かな部分に留まる。後世の攪乱によるものと考えられるが、本来は胴部中位以上を打ち欠いた大形の土器を使用したのではないかと想像する。使用された土器は、1本単位の断面三角形隆線の懸垂文以外は無文であることから、後期称名寺1式期に比定される深鉢で、内部からの出土遺物はない。

**掘り方** 上部と北側半分を大きく失っているが、東西長95cm、深さ35cmの鍋底状の土坑が認められた。平面形は円形を呈するものと見られ、埋設土器はその中央に正位で設置されていた。土坑は軟質の黒褐色土で埋められており、埋め土中および周囲から後期前半期の少量の土器と軽石製品が出土している。

**伴出遺物** 埋設土器の内部からの伴出はなかったが、周囲から後期称名寺1式を中心とする土器等が出土している。

**所見** 円形の土坑の中央に、大形の深鉢を正位に埋設したもので、周囲から同時期の遺物がかなり出土しており、炉の可能性も否定できない。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 18区8号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** R-14グリッド

**確認状況** この地区は地山礫が少なく、耕作による削平が強く及んでいることから、縄文時代の土壌はほとんど残っていない。そのため、耕作土の下はすぐ地山であり、遺物分布も少ない。当遺構は、石垣をはじめとする中世以後の調査が終了し、縄文時代の遺構確認中に、埋設土器の上端が全周した状態で確認された。周辺には、東4mに加曾利E3式期の9号、南東6mに加曾利E1式期の12号、南西9mに加曾利E3式期の17号があり、北4mに後期堀之内1式期の15号住居が位置する。

**埋設状況** 胴部上半と下半部を打ち欠いた大形の深鉢を、地山を掘り込んで正位に埋設した状態で確認された。西側に接して淡く焼土化した土壌が残り、東側に接して被熱した小さな扁平礫が認められた。

使用された土器は後期前半の深鉢で、現況で上端部直径37cmほどである。器面が劣化しているためはっきりしないが、斜位方向の強い撫で調整が認められることから、残存部は無文と見られる。また、内面上位の4～5cmが被熱で明色化・劣化している。

**伴出遺物** 土器の内部から、上げ底様の高台がつく小型土器の底部（8埋-2）と、長さ10cmほどの小さな棒状円礫を使用した磨石（8埋-3）が出土している。

**掘り方** 明瞭ではないが、45×50cmほどの円形状の掘り方が認められた。

**所見** 焼土と被熱した礫を伴っており、土器の内面上位にも被熱痕跡が認められることから、当遺構は住居の炉であった可能性が高いと判断される。時期は、使用された土器から後期前半期に比定されよう。

#### 18区9号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** Q-14グリッド

**確認状況** 8号に隣接するが、当遺構は大形礫が散布する地区にあり、縄文時代の黒褐色土が礫に守られて存在する。当遺構はその大形礫の間で確認された。

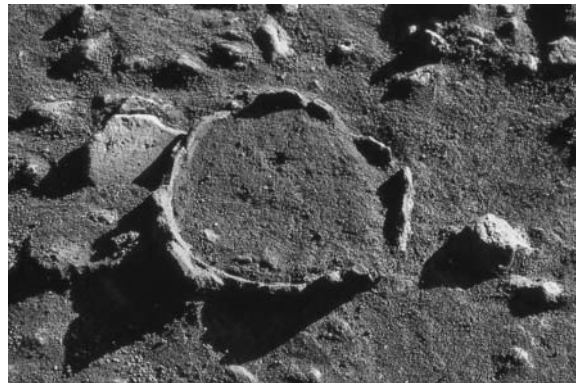
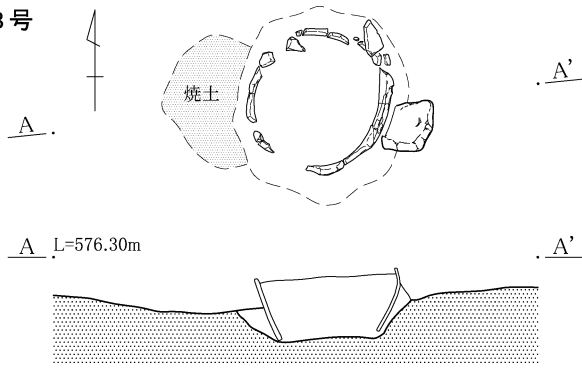
**埋設状況** 使用された土器は胴部下半を打ち欠いた大形の深鉢で、黒褐色土中に逆位に埋設されていた。口唇部はちょうど地山の黄色砂質土に届く位置にあり、大礫を側縁に利用するように設置されている。土器は加曾利E3式新段階に比定される深鉢で、口径が約40cm、残存部は高さ15cmほどで、周囲の礫に守られた部分のみが残存したと言ってよいだろう。

文様は、口縁部に底隆帯と凹線による渦巻文と楕円区画文を組み合わせて4単位で構成し、胴部には上端がアーチ状に区画された縄文懸垂帯と蕨手状沈線を施す関東系の土器である。内部は土壌で充たされており、遺物等の伴出は認められない。

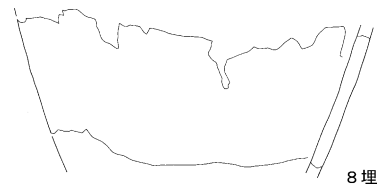
**掘り方** 長軸58cm、短軸54cm、深さ10cmほどの楕円形状の掘り方が確認された。遺物は異系統の土器

第3章 発見された遺構と遺物

8号

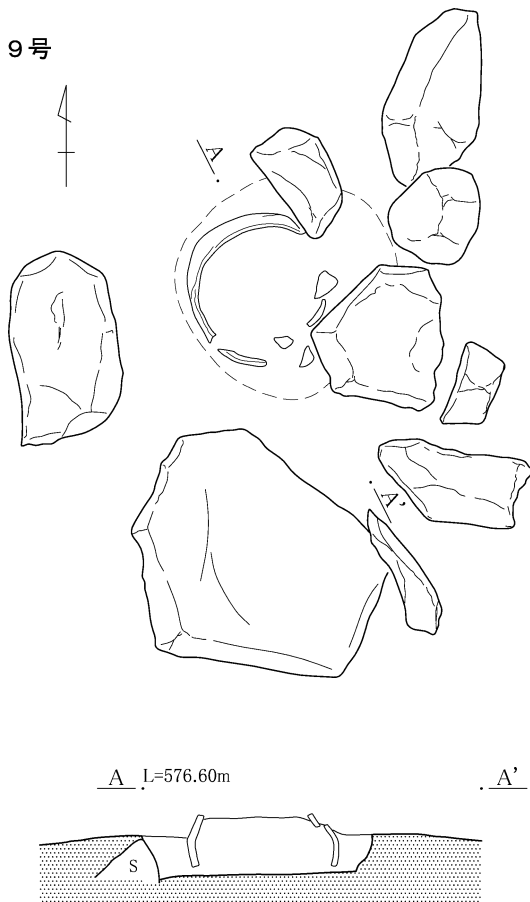


18区 8号土器埋設遺構

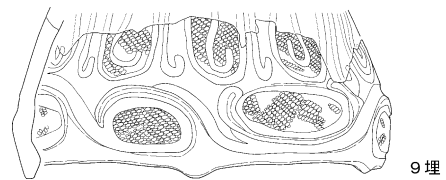


8埋

9号



18区 9号土器埋設遺構

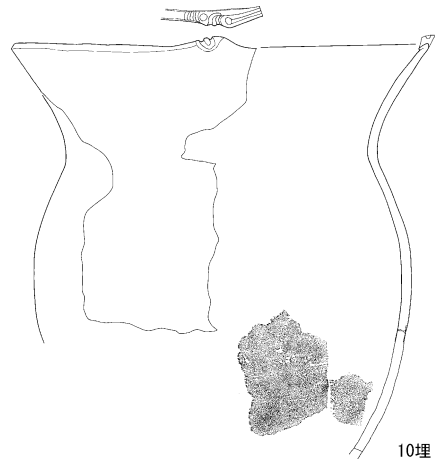
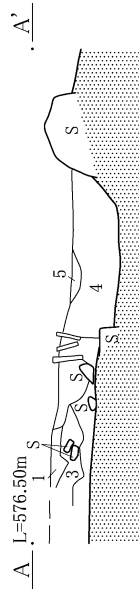
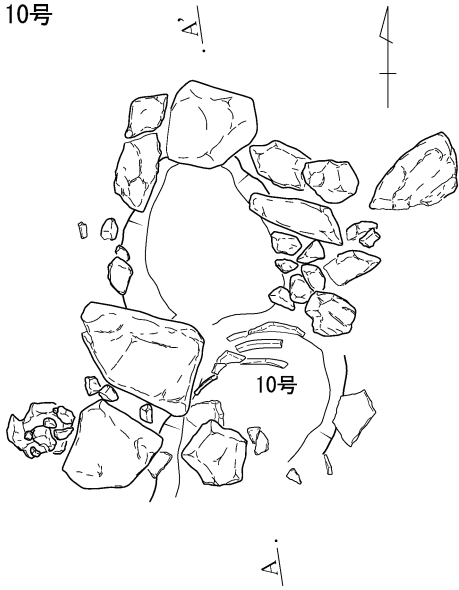


9埋

0 1 : 20 1m

第12図 18区 8号・9号土器埋設遺構

10号

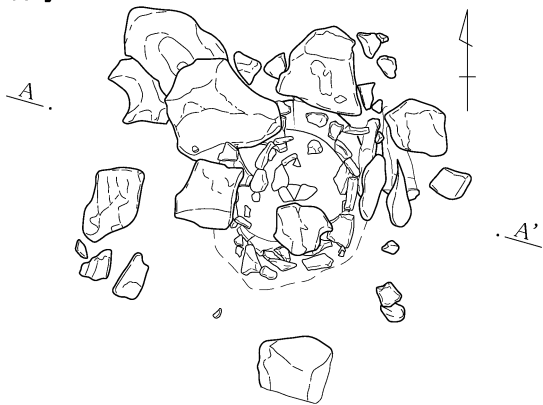


18区10号土器埋設遺構

18区10号

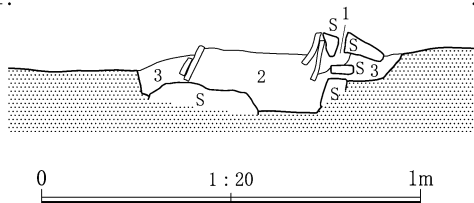
- 1、褐色土 軟質。
- 2、暗褐色土 軟質。
- 3、明褐色土 軟質で灰を多く含む。
- 4、淡褐色土 やや硬質で炭化物を含む。

11号



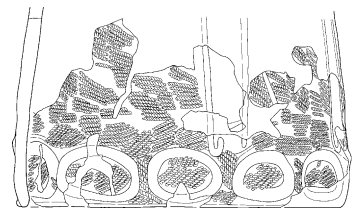
18区11号土器埋設遺構

A L=574.90m



18区11号

- 1、暗褐色土
- 2、淡褐色土
- 3、淡褐色土と地山の混土



第13図 18区10号・11号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

小片（9埋-2）が出土している。

**所見** 胴下半部を打ち欠いた大形の深鉢を逆位に埋設したもので、単独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期新段階に比定されよう。

#### 18区10号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** P-15グリッド

**確認状況** 耕作等による削平が強い地区で、まだ中世以後の土壌が残る面で方形状に組んだ礫群が確認され、その隅で大形の土器片が重なった状態で確認された。1～4層は中世以後の土壌で、5層が地山土にあたる。当初は攪乱中の遺物とも考えたが、いずれも同一個体であり、その一部は地山土中に届いていた。

**埋設状況** 3片の大形土器片を重ねて縦位に設置し、地山土中には取り残された小破片が円形状に数片認められた。3片の大形土器片は接合関係にあり、口径40cm以上の大形深鉢の口縁部から胴部の20%ほどの部分であることがわかった。取り残された小破片も同一個体だが、接合はできなかった。想像を逞しくすれば、当初はここに胴下半部を打ち欠いた大形深鉢が埋設されていたが、後世の畑地耕作等で大半が失われ、残った一部が礫と共に埋め込まれたことになる。使用された土器は、口径推定45cmの口縁に突起が付く無文の大形深鉢で、後期堀之内1式に比定される。

**所見** 後期堀之内1式期の単独の遺構と判断したい。

#### 18区11号土器埋設遺構

**調査年度** 平成10・13年度

**位置** L-20グリッド

**確認状況** 平成10年度の調査で礫が集積した中で確認され、3号土器埋設遺構と命名されたが、その年は調査の手がつかずに終了した。平成13年度にこの地区の調査が再開されたが、前回のデータが正確に

引き継がれていなかったため、11号として再確認してしまった。周囲に礫が多く、そのいくつかは被熱痕跡が認められた。

**埋設状況** 礫を多く含む黒褐色土中に、胴下半部を打ち欠いた中形の深鉢を逆位に埋設している。口唇部は地山の黄色砂質土に近いが、地山は大形の礫を多量に含むため、その直前で止まっている。使用された土器は加曾利E3式中段階の深鉢で、口径35cmでほぼ全周する。一部は胴部中位まで残存するが、口唇部から10cmほどの部分も多く、後世の耕作等で消失したものと考えられる。

文様は、口縁部の楕円区画文を等間隔に並べ、胴部には蕨手状沈線による無文懸垂帯を垂下させている。器形や文様の特徴から、地元でつくられた関東風の土器と言えよう。なお、周囲には礫が多く、埋設土器の上面付近の一部は被熱痕跡が認められた。

**伴出遺物** 特になし。

**掘り方** 明確な掘り方は確認できていない。

**所見** 中形の深鉢の上半部を逆位に埋設したもので、上端部は耕作等で削平されているものと考えられる。上端部付近の礫のいくつかは被熱痕跡が認められたが、周囲の状況から住居の炉とは考えにくく、単独の遺構と判断した。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期中段階に比定されよう。

#### 18区12号土器埋設遺構

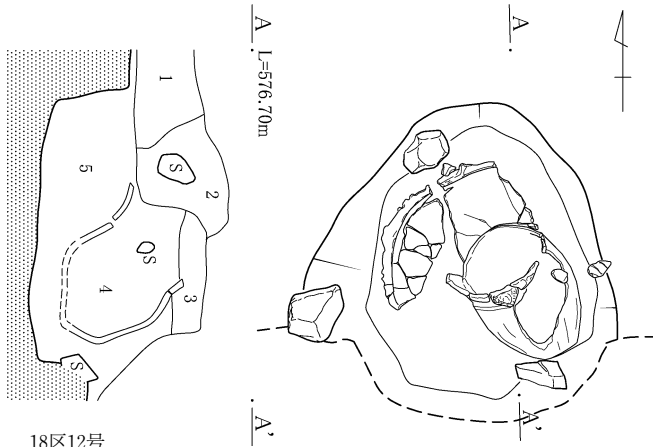
**調査年度** 平成13年度

**位置** R-13グリッド

**確認状況** 地山に礫が少ない地区で、すぐ東側に石垣があるため、後世の削平が強く及んでいる。石垣を中心に中世以降の調査を実施した段階で、土器の一部が確認された。そのため、上半部の半分はすでに欠失していた。周囲に遺物の散布はほとんど見られなかった。

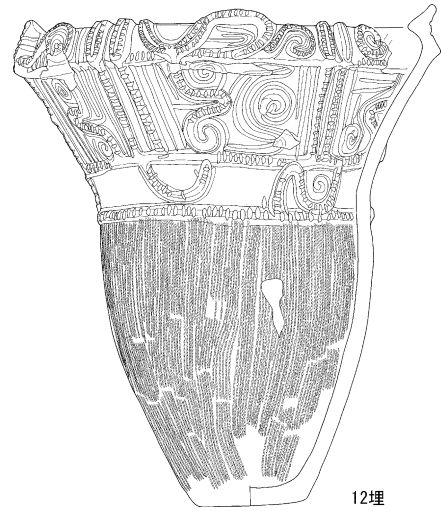
**埋設状況** 楕円形の土坑内に、底部を南東側、口縁部を北西側に大きく傾けた状態で埋設されていた。土器の底部は土坑の底面より10cmほど浮いており、器体は垂直に対して55度も傾いている。当初よりこ

12号



18区12号

- 1、明褐色土 軟質。
- 2、褐色土 硬質。
- 3、暗褐色土 軟質。
- 4、淡褐色土 硬質。
- 5、淡褐色土 硬質で炭化物を含む。

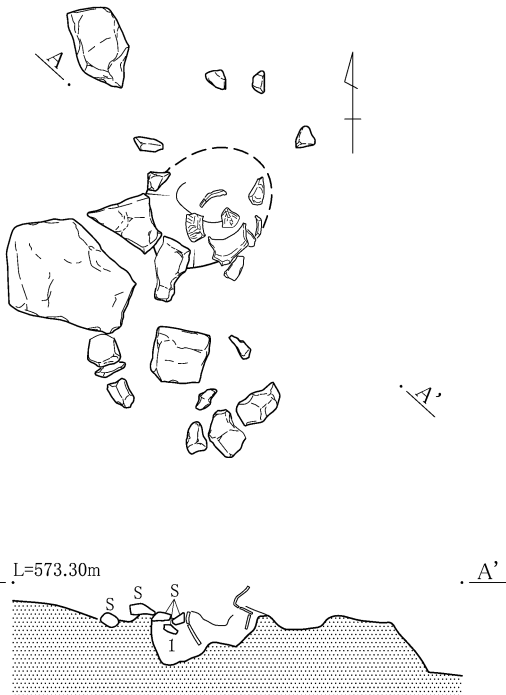


12埋



18区12号土器埋設遺構

13号



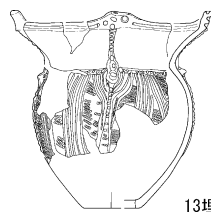
18区13号

- 1、淡褐色土と暗褐色土の混土。硬質。

0 1:20 1m



18区13号土器埋設遺構



13埋

第14図 18区12号・13号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

の状態では埋設されていたとすれば、土坑の深さは60cm以上はあったはずだが、現状では25～40cmで、上部は大きく削平されていた。使用された土器は中期加曾利E1式期古段階の勝坂系大形深鉢で、口径45cm、高さ52.4cmで、口縁部の半分は後世の削平で失われている。土器の内部は土壌で充たされており、伴出したものはない。

**伴出遺物** 埋設土器内および土坑からの出土遺物は認められなかった。

**掘り方** 長軸84cm、短軸80cmの楕円形を呈する土坑で、深さは60cm以上あったと見られるが、上部は後世の削平で失われており、現況で25～40cmである。掘り込み面は褐色土中にあるが、地山の黄色シルト質土を大きく掘り込んで構築されている。底面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は炭化物を少量含む淡褐色土で、礫を少量含む。

**所見** 楕円形の土坑内に、大形深鉢を大きく傾けて埋設したもので、単独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から中期加曾利E1式期古段階に比定されよう。

#### 18区13号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

**位置** W-21グリッド

**確認状況** 現況の石垣が通る位置にあり、かなりの攪乱を受けている。地山の黄色粗砂層及び淡褐色土の上面が斑状に見えており、遺物の散布もいたって少ない。当遺構の周囲には礫が多く集積しており、それらに守られるようにして土器の一部が確認された。南西側に後期の11号住居が隣接するが、この住居も床面まで攪乱を受けている。

**埋設状況** 小形の深鉢を正位に埋設したもので、口縁部から底部まで残存するが、各部位の半分は失われていた。胴部は地山土を掘り込んで設置されているが、礫の少ない北東側は破片が散乱していた。使用された土器は後期堀之内1式の深鉢で、口縁部と胴部の一部に被熱による著しい劣化が認められる。土器は口径約21cm、高さ約21cmの小形の深鉢で、文

様は4単位で構成される。土器内部は土壌で充たされており、内部からの出土遺物はない。

**掘り方** 直径30cm、深さ10cm前後の円形状の掘り方が確認された。

**所見** 使用された土器の一部に強い被熱痕跡が認められることから、住居の炉であった可能性も考えられるが、残された手懸かりは僅かであり、判断は難しい。時期は、使用された土器から後期堀之内1式期に比定されよう。

#### 18区14号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

**位置** Q-16グリッド

**確認状況** 大量の大形礫が分布する地区で、礫の間から土器の一部がわずかにのぞいた状態で確認された。当初はわずかに分布する土器の一つと見ていたが、礫をどけてみると大形土器の胴下半部であった。

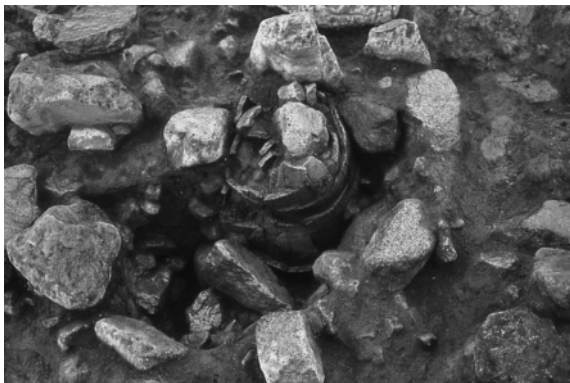
**埋設状況** 南北方向に長軸をとる楕円形の土坑の南端に、口径41cm、高さ59cmの大形深鉢の完形品を逆位に埋設している。土器の口縁部は掘り方の底面から7～8cmほど浮いた状態で設置されていた。

土器の上面には15～20cm大の礫がのっており、確認時には土器内部は土壌で充たされていたが、この土器の底部は土器内部の口縁部付近に落ち込み、その上に拳大の礫を詰め込んだような状態で確認された。つまり、埋設時には土器内部は空洞だったとみてよいだろう。土器の高さは59cmだから、埋設時は完存状態だったとすれば、底部は調査確認時よりも20cmほど上方にあったことになる。当時の地表面を想定するのは難しいが、あるいは底部が地表に見えていたことも想定される。

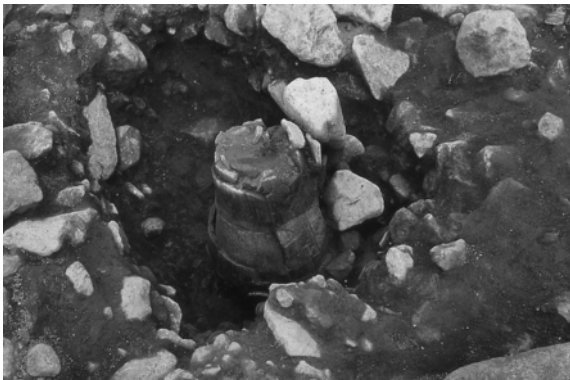
使用された土器は、関東地方の流儀でつくられた中期加曾利E3式中段階の大形深鉢で、口縁部に渦巻文と楕円区画文を一体化した文様を入り組み状に5単位施し、胴部には無文懸垂帯を14本施す。区画内を充填する縄文はRL。

**掘り方** 長軸113cm、短軸98cm、深さ48cmの楕円形の土坑が確認された。先述のように長軸をほぼ南北

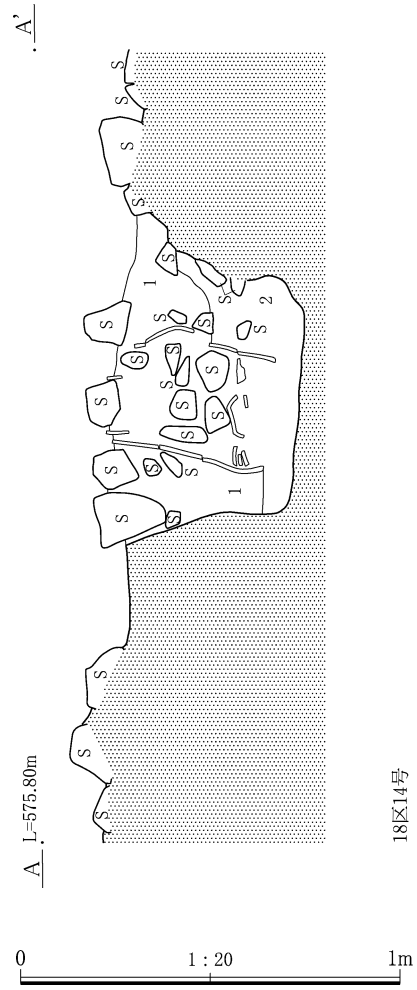




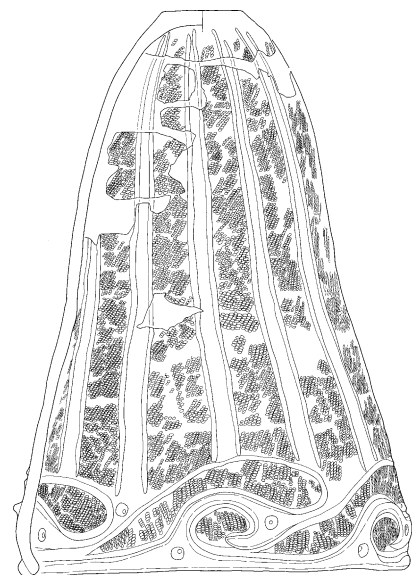
18区14号土器埋設遺構 確認状況



18区14号土器埋設遺構 埋設状況



18区14号  
 1、淡褐色土 硬質で礫を多量に含む。  
 2、淡褐色土 1層より明るく、硬質。



第15図 18区14号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

にとり、土器は長軸上の南端に寄せて埋設されていた。底面はほぼ平坦であるが、土器が埋設されていた南側はやや低くなっており、北側は南側よりやや高く、幅もやや狭い作りになっている。壁面は、底面から15cmほどは垂直に立ち上がるが、上方は扇状に開いている。

底面および壁面の地山土中には大量の礫が含まれており、硬質で掘削は容易ではなかったであろう。土坑の埋め土中にも礫は多く見られたが、大形のものは少なく、遺構の上面や周囲の大形礫は当遺構を作った時に掘り出された礫で、埋め戻す際に上面に寄せた可能性もある。

なお、土坑からの伴出遺物等は認められない。

**所見** 当遺構は、南北方向に長軸をとる楕円形の土坑内に、完形品の大形深鉢を逆位に埋設したもので、単独の遺構と判断される。また、土器底部の出土状況から、埋設した当初は土器内部に土壌は存在しなかったと考えられる。もし、当遺構が遺体を埋葬するための施設だったとすれば、遺体が朽ちた後に底部が陥没したことになるが、今回の調査では、土器内部等からそのことを検証できる証拠は得られていない。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期中段階に比定されよう。

#### 18区16号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

**位置** X-11グリッド

**確認状況** 南東から北西側に流下する縄文時代の埋没谷の西側に隣接する位置で確認された。この地区は礫が少なく、地山の黄色シルト～砂壤土の上面に10cmほどの厚さで黒褐色土の堆積が認められた。当遺構はこの黒褐色土面で確認されたが、周囲には大小の川原石が数個認められた。

**埋設状況** 直径75cmの円形を呈する土坑の中央に、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を正位で埋設していた。土器の直下には直径30cm、深さ25cmの柱穴状の穴があり、その中は拳大以下の小石と砂壤土でぎっしり充填され、その上部は土坑の底面から10cm

以上も突き出していた。土器は、掘り方の底面から10cmほど浮いた状態で埋設されていたが、土器の底面はその礫の上ののっていたのである。土坑は、地山の砂礫を含むやや硬質の黒褐色土で埋められており、礫は少ない。

使用された土器は、口径36cmの中期加曽利E3式中段階の中形深鉢で、口縁部には隆帯による渦巻文を6単位施し、胴部には無文懸垂帯を垂下させている。直線的に開口する器形や、口縁部文様等の特徴から、唐草文系土器の色彩が強く看取される。

なお、土器の内部は地山土と硬質の黒褐色土で充たされており、小石が比較的多く含まれていた。

**伴出遺物** 特になし。

**掘り方** 北側の約半分は未確認だが、形状等の特徴から平面形が円形の土坑と考えられる。規模は直径は75cmで、断面形は箱形を呈し、深さは40cmである。土坑の確認面は黒褐色土面にあり、地山の黄色シルト～砂壤土を30cmほど掘り込んで構築されている。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土器は土坑のほぼ中央に埋設されており、土坑内は地山の砂礫を含むやや硬質の黒褐色土で埋められていた。埋設土器の真下には直径30cm、深さ25cmの柱穴状の穴があり、この穴には先述のとおり、拳大以下の小礫が詰め込まれていた。

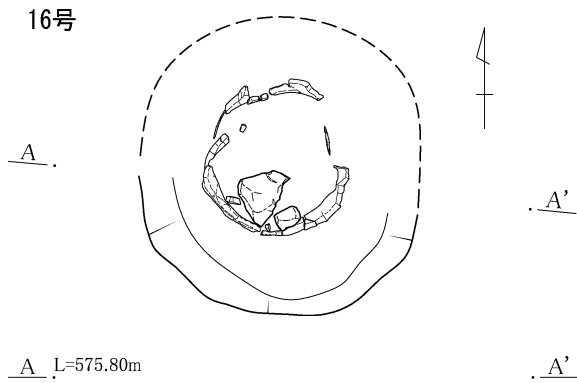
**所見** 円形の土坑内に、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を正位に埋設したもので、単独の遺構と判断される。時期は、使われた土器から中期加曽利E3式期中段階に比定されよう。

#### 18区17号土器埋設遺構

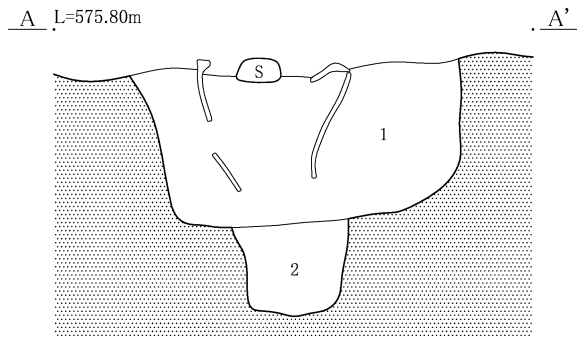
**調査年度** 平成14年度

**位置** T-13グリッド

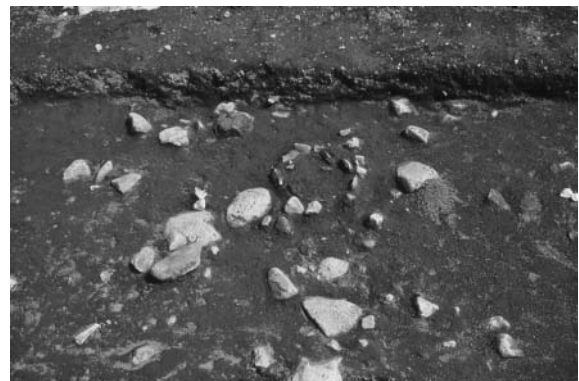
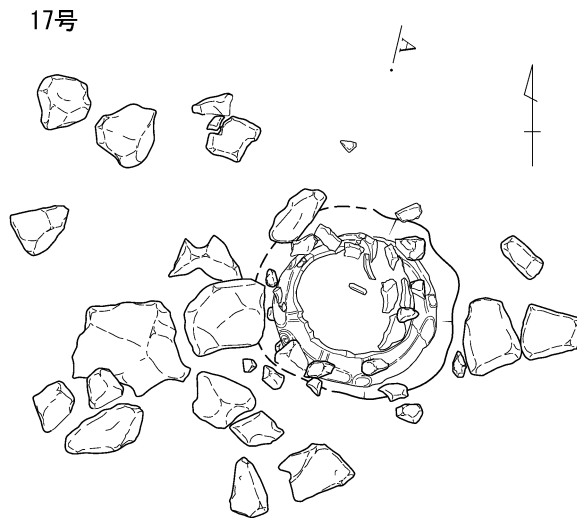
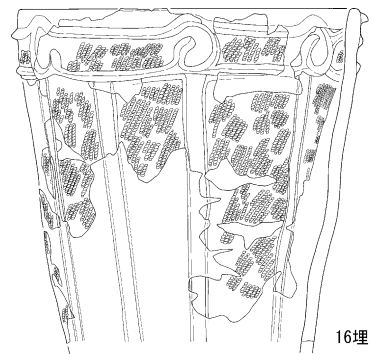
**確認状況** 縄文時代の埋没谷の東側に隣接する地区に位置する。埋没谷は縄文時代中期後半から後期前半の遺物の廃棄場所になっており、当遺構は大形の礫や土器片が多く分布する暗褐色土面で、胴部が全周した状態で確認された。当遺構の南側には、中期加曽利E1式期の18号住居が近接する。



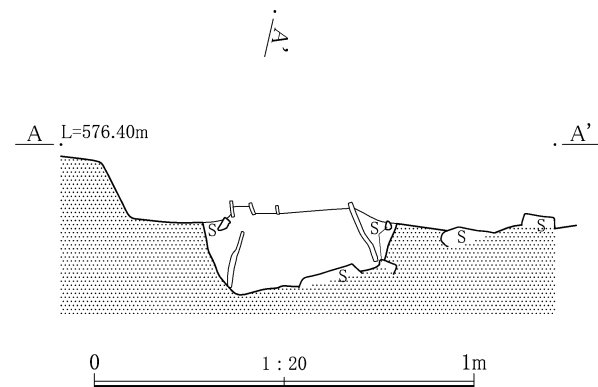
18区16号土器埋設遺構



18区16号  
1、黒褐色土 硬質。  
2、多量の礫を詰め込んだ穴。



18区17号土器埋設遺構



第16図 18区16号・17号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

**埋設状況** 暗褐色土面を掘り込んで、胴部下半を打ち欠いた大形の深鉢を逆位で埋設していた。口縁部は地山の黄色シルトにちょうど達しており、小礫を並べて平坦面をつくった上に設置されていた。

使用された土器は中期加曾利E 3 式中段階の大形深鉢で、胴部の一部は埋設後に欠失しているだろう。大きさは口径41cm、残存高は22cmほどで、ほぼ完存している。口縁部は渦巻文と楕円区画文を組み合わせで5単位で文様構成し、胴部には沈線区画の無文帯と蛇行沈線を8本垂下させており、器形や文様は関東地方の流儀でつくられている。

なお、土器の内部は暗褐色土で充たされており、伴出した遺物等はない。

**掘り方** 土壌が一様で、掘り方は確認できなかった。

**所見** 明確な掘り方は確認できなかったが、小礫等で設置面を調整していること、土器の形態が崩れていないことから、土器埋設遺構と考えてよいだろう。当遺構は、胴部下半を打ち欠いた大形の深鉢を逆位に埋設したもので、単独の遺構と判断される。時期は、使用された土器から中期加曾利E 3 式器中段階に比定されよう。

#### 18区19号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

**位置** V-11グリッド

**確認状況** 縄文時代の埋没谷上流部のほぼ中央で確認された。縄文時代後期の18区24号配石の東側に隣接しており、その南西には後期の3号掘立柱建物が位置する。谷内には中期後半から後期前半の土器が多く分布し、当遺構の周囲にも数多くの礫や後期の土器等の遺物が散布する。

**埋設状況** 縄文時代の包含層中に、胴部上半以上と底部を打ち欠いた無文の中形深鉢を正位に埋設していた。確認時は上半部を中心にかなりの破片が動いていたが、接合の結果、上半部を中心に30%は欠落するが、ほぼ全周する形態に復元できた。埋設に使用された胴部中位の部分は、上端部と下端部が粘土

帯で外されており、周囲に分布する土器との接合関係は認められなかった。

使用された土器は、後期前半の無文の深鉢で、接合痕の凹凸が残る外面にかかる研磨を施し、内面には横位の荒いナデ痕を残す。堀之内1式期の無文深鉢であろうか。なお、土器に二次的な被熱痕跡は認められない。

**掘り方** 土器内を充たす土壌も含めて、土壌は同様であり、掘り方は確認できなかった。

**所見** 明確な掘り方は確認できないが、ほぼ全周する土器が正位の状態を保ったまま確認されていることから、土器埋設遺構として扱っておきたい。当遺構は、胴部上半と底部を打ち欠いた中形の深鉢を正位に埋設したもので、単独の遺構と判断される。時期は、使用された土器から後期前半に比定しておきたい。

#### 18区22号土器埋設遺構

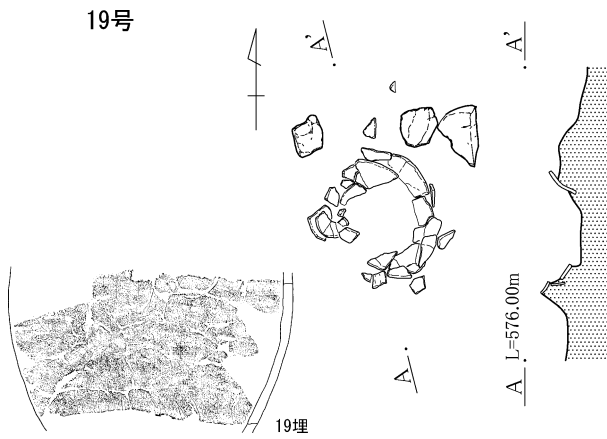
**調査年度** 平成14年度

**位置** I-11グリッド

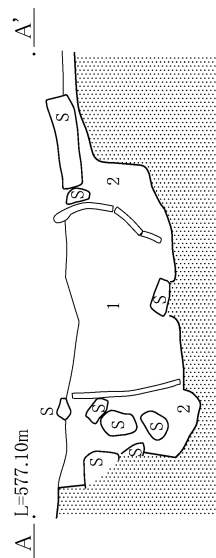
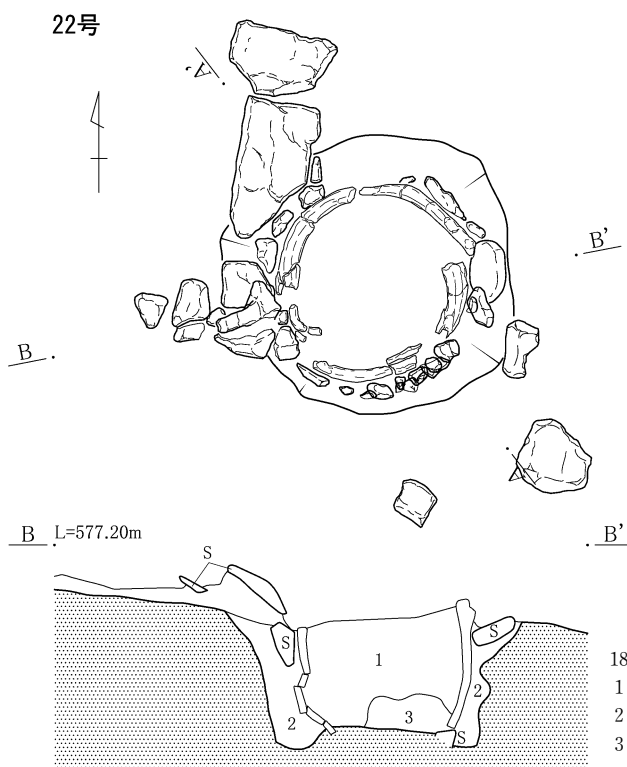
**確認状況** 18区の東側を画す東沢の屋上で確認された。この地点は住居数軒が重複する遺構密集地だが、耕作等による後世の削平もかなり及んでおり住居の大半は床面での確認がほとんどである。

当遺構はこれら住居の調査に伴って確認されたもので、確認面は地山の黄色シルト層が微かに覗いた面である。この面では地山土中の礫はほとんど無い。当遺構は平坦面を揃えて敷かれた数枚の板石に接して、円形の口唇部が全周した状態で確認された。周囲には扁平礫も数個しかかれており、精査の結果、土器の周囲には小さな円礫と小石が並べた状態で確認された。小さな円礫は、敷石住居等で敷石間の根詰めにも多用される、当地域では特徴的なもので、敷石住居を認定する根拠の一つになっている。

この段階で、当遺構は敷石住居内の施設との認識で調査を進めたが、炉をはじめとする住居認定に必要な施設が確認できず、また当遺構が敷石住居の出入り口部埋甕としては大きすぎることから、単独の



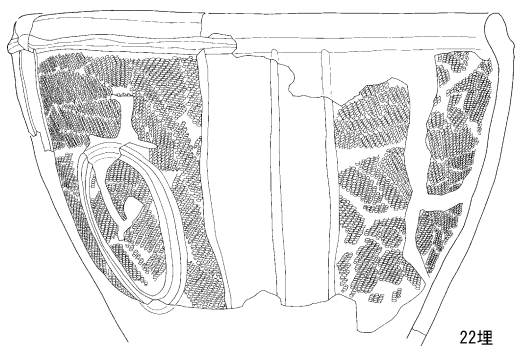
18区19号土器埋設遺構



0 1:20 1m

18区22号

- 1、暗褐色土 やや軟質。
- 2、暗褐色土 粘性があり、やや硬質。
- 3、暗褐色土と地山黄色シルトの混土。



18区22号土器埋設遺構

第17図 18区19号・22号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

土器埋設遺構の可能性も考慮して変更登録された。

**埋設状況** 胴部下半を打ち欠いた大形の深鉢を正位に埋設している。掘り方は、土器に合わせて地山土を掘り込んでおり、底面付近は地山土中に多量の礫が認められる。掘り方内は、やや軟質の暗褐色土で埋められており、土器内は粘性があるやや硬質の暗褐色土で充たされていた。

使用された土器は、口径52cm、残存高34cmの中期加曾利E 4式土器で、ほぼ全周するが、胴部の一部を欠失している。口縁部がゆるく内湾しながら開くバケツ状の器形で、3条の沈線による無文懸垂帯で器面を4分割し、縄文施文部の1箇所には2条の沈線で区画した無文懸垂帯を、もう1箇所には楕円文を施している。なお、小さな磨石(22埋-2)は、埋設土器の周囲に並べられた円礫の一つである。

**掘り方** 直径75cmほどの円形を呈し、深さは30cmである。

**所見** 確認当初に想定したとおり、当遺構は敷石住居の出入り口部埋甕と考えるのが妥当であろう。埋甕の周囲を円礫その他の小石で取り囲む手法は、本遺跡でも20区66号住居(加曾利E 4式期)にも事例があり、当遺構では板石を使用した敷石がそれに接して敷き込まれ、原位置を保っている。

時期は、使用された土器から中期加曾利E 4式期に比定されよう。

#### 18区23号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

**位置** W-16グリッド

**確認状況** 縄文時代の埋没谷の中流部内東側縁辺で確認された。ここには、埋没谷を南北方向に横断する通路ではないかと想定している47号配石があり、当遺構は47号配石の北西部に重複する位置で確認された。周辺には大形礫が数多く点在するが、当遺構の周囲に礫が集積することはなかった。なお、埋設土器の北側端部に接して丸石が確認されている。

**埋設状況** 埋没谷内の黒褐色土を掘り込んで、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を逆位に埋設してい

る。土器の残存部上端に接するようにして丸石(23埋-2)があり、これも掘り方内に含まれることから、当遺構に伴うものとして扱った。

使用された土器は、中期加曾利E 3式新段階の深鉢で、口径35cm、残存高は27.5cmで、残存部はほぼ完存している。器形は湾曲の弱いキャリパー形を呈し、口縁部に渦巻文と楕円区画文を組み合わせた文様を入り組み状に7単位施し、胴部には懸垂無文帯を12本垂下させた、関東系の深鉢である。

なお、土器内部は掘り方埋め土と同質の黒褐色土で充たされており、遺物等の出土は認められない。

**掘り方** 平面形は埋設土器よりやや大きな円形で、断面形は箱状を呈する。規模は長径56cm、短径52cm、深さは25cmである。

**所見** 胴部下半を打ち欠いた中形深鉢を逆位に埋設したもので、単独の遺構と判断される。時期は、使用された土器から中期加曾利E 3式期新段階に比定されよう。

#### 18区24号土器埋設遺構

**調査年度** 平成14年度

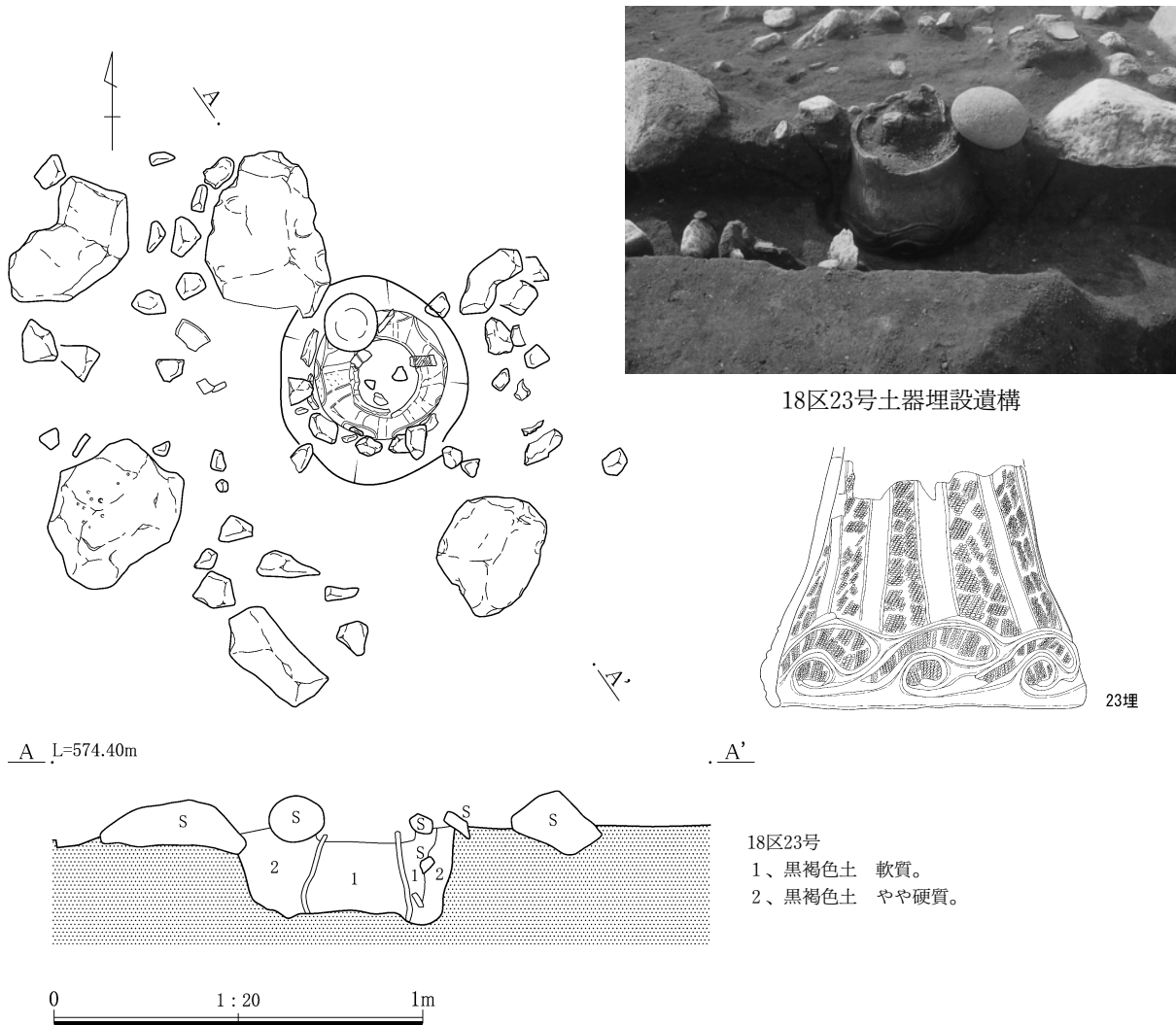
**位置** I-12グリッド

**確認状況** 18区の東側を画す東沢の崖上で確認された。この地点は住居数軒が重複する遺構密集地だが、耕作等による後世の削平もかなり及んでおり住居の大半は床面での確認がほとんどである。

当遺構はこれら住居の調査に伴って22号と共に確認されたもので、確認面は地山の黄色シルト層が微かに覗いた面である。この面では地山土中の礫はほとんど無いが、当遺構の周囲では同一面で厚手の扁平礫4個が確認された。

**埋設状況** 礫を多量に含む地山の黄色シルトを掘り込んで、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を正位に埋設している。周囲には敷石住居に使用可能な厚手の扁平礫が4個あり、その一部は重なった状態で確認された。土器は南西方向からの圧力で一部が欠損して傾いており、その北東側の扁平礫が重なっていることから、後世の攪乱がかなり及んでいることが





第18図 18区23号土器埋設遺構

想定される。

使用された土器は曾利IV式新段階～V式の深鉢で、口径28.5cm、残存高は23cmで、口縁部の半分を欠失するが、その他の残存部は完存している。器形は単純に開く深鉢で、逆U字状の無文懸垂帯と上端が蕨手状の沈線間に綾杉状沈線を施した懸垂帯を6単位で構成している。口縁部等に二次的な被熱痕跡は認められない。やや粗い作りの土器であるが、当地方では希な曾利式系の一群である。

なお、土器内部は掘り方と同質の黒褐色土で充たされており、遺物の出土は認められない。

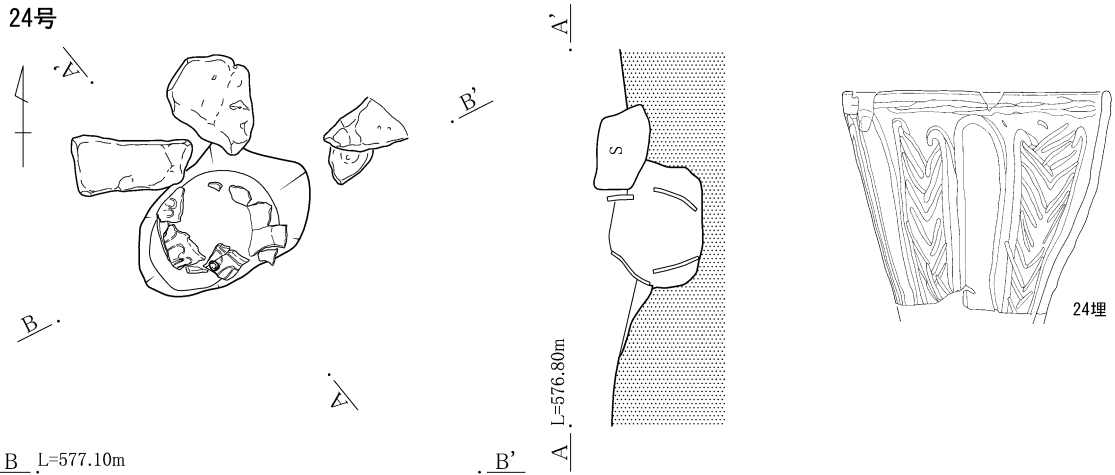
**掘り方** 当初は土器よりやや大きな円形の掘り方

であったと思われるが、南西方向からの大きな圧力で楕円形に変形している。規模は長軸52cm、短軸32cm、深さ25cmで、黒褐色土で埋められている。なお、埋め土中から関東系の小形深鉢の破片（24埋-2）が出土している。

**所見** 胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を正位に埋設したもので、付熱痕跡が認められないことから、敷石住居の出入り口部埋甕の可能性が高いと判断したい。炉の確認ができていない点で根拠を欠くが、同一面に敷かれた扁平礫の存在は無視できない。時期は、使用された土器から中期加曾利E4式期古段階に比定されよう。

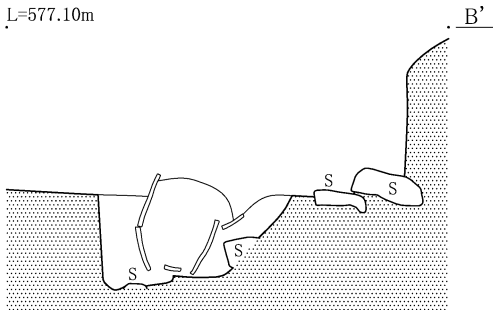
第3章 発見された遺構と遺物

24号



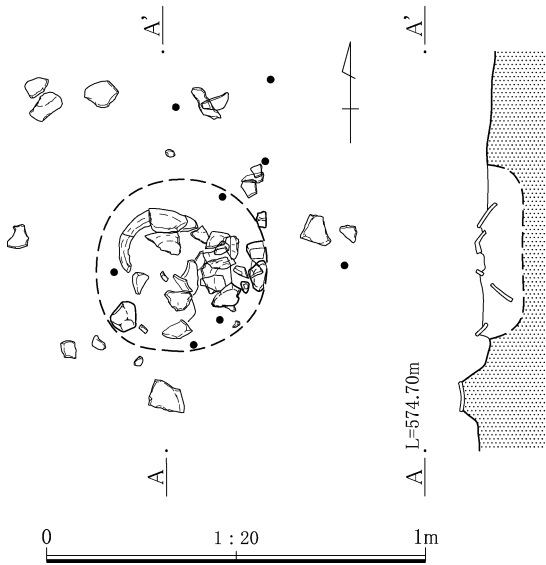
B L=577.10m

A L=576.80m



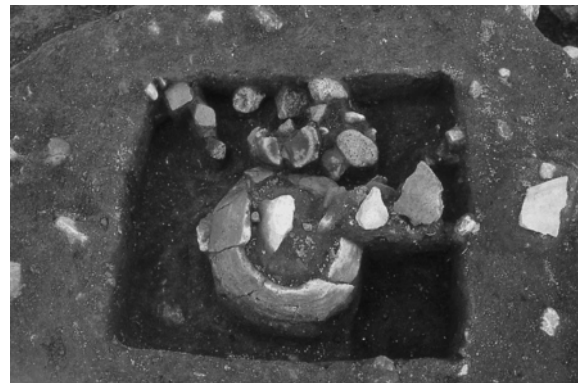
18区24号土器埋設遺構

25号



A L=574.70m

0 1:20 1m

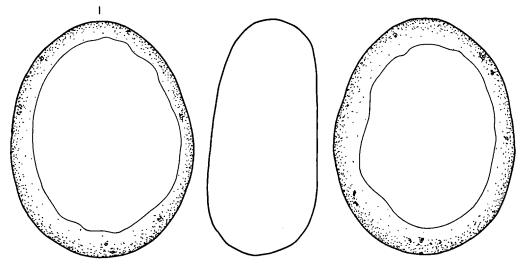
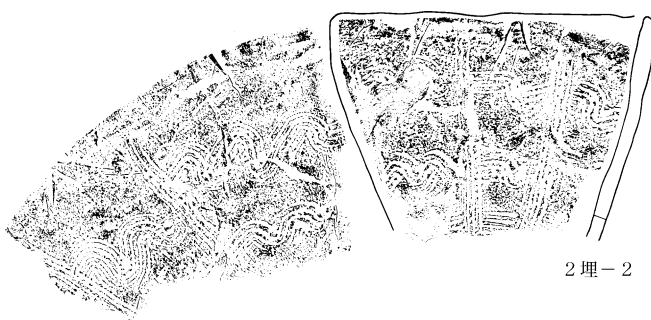
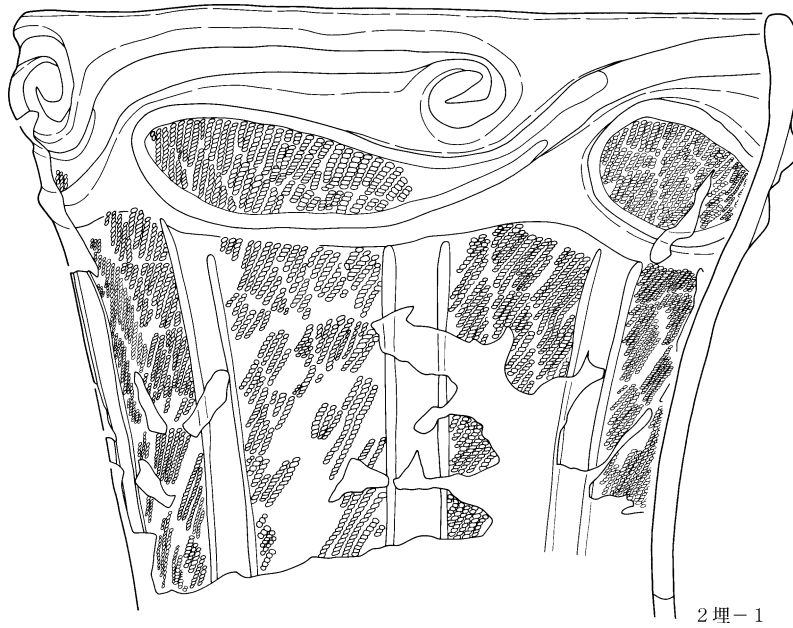
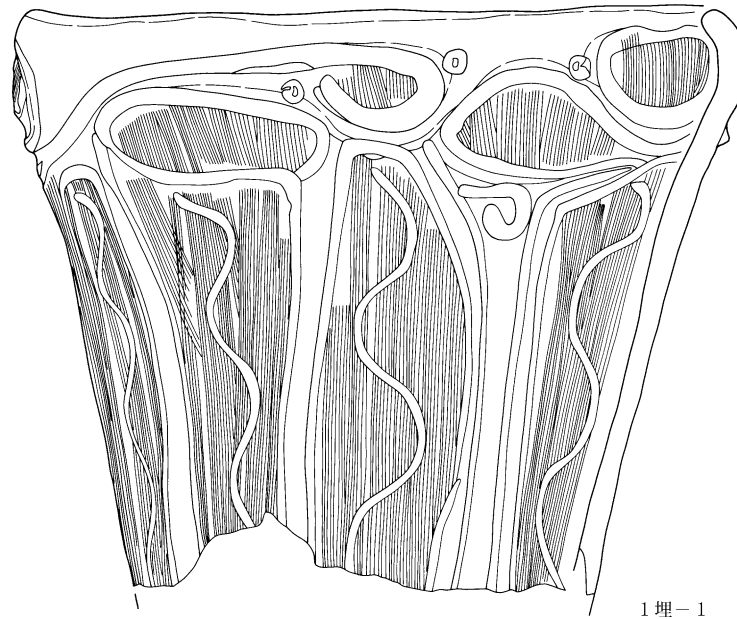


18区25号土器埋設遺構



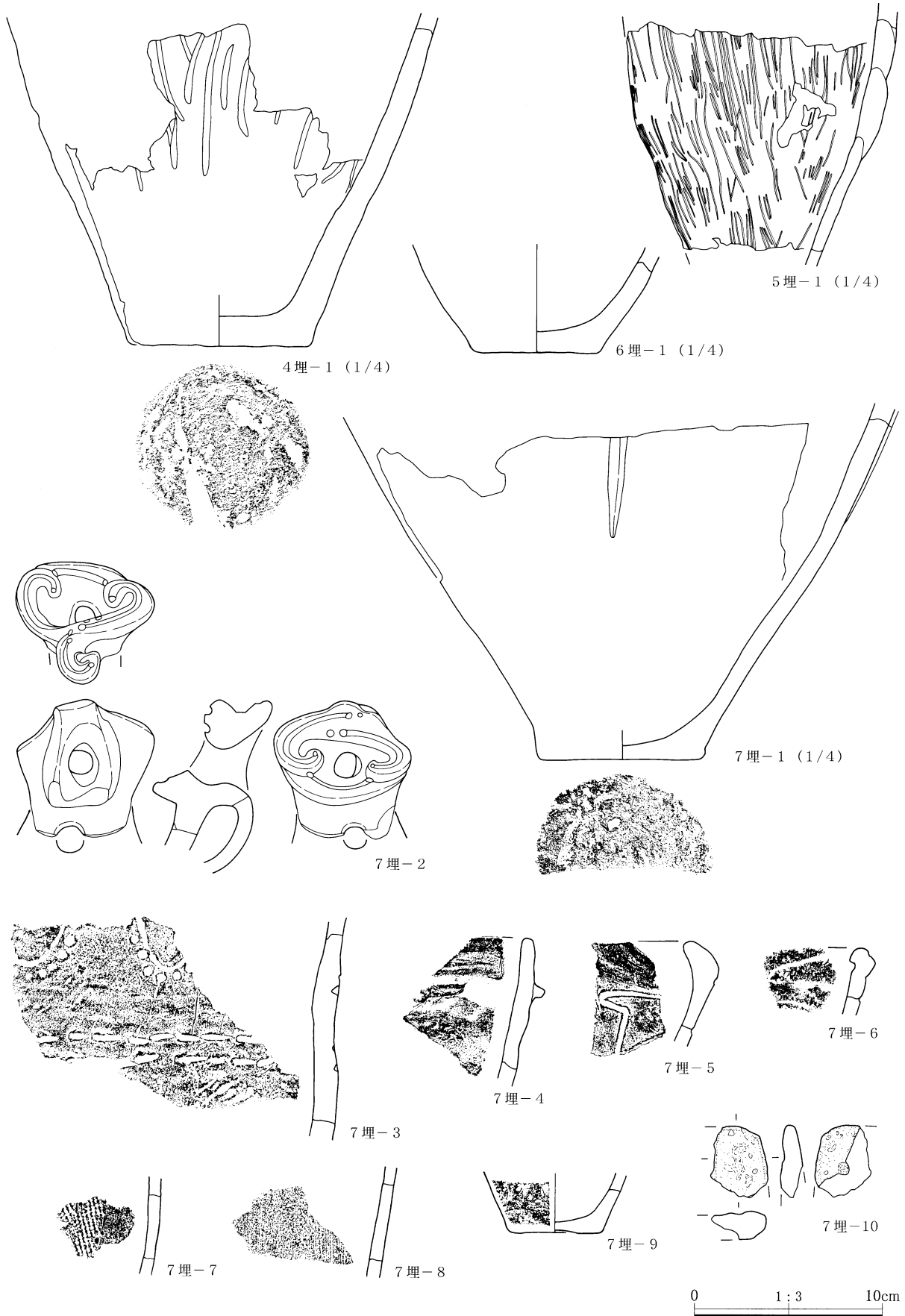
25埋

第19図 18区24号・25号土器埋設遺構



0 1:4 10cm

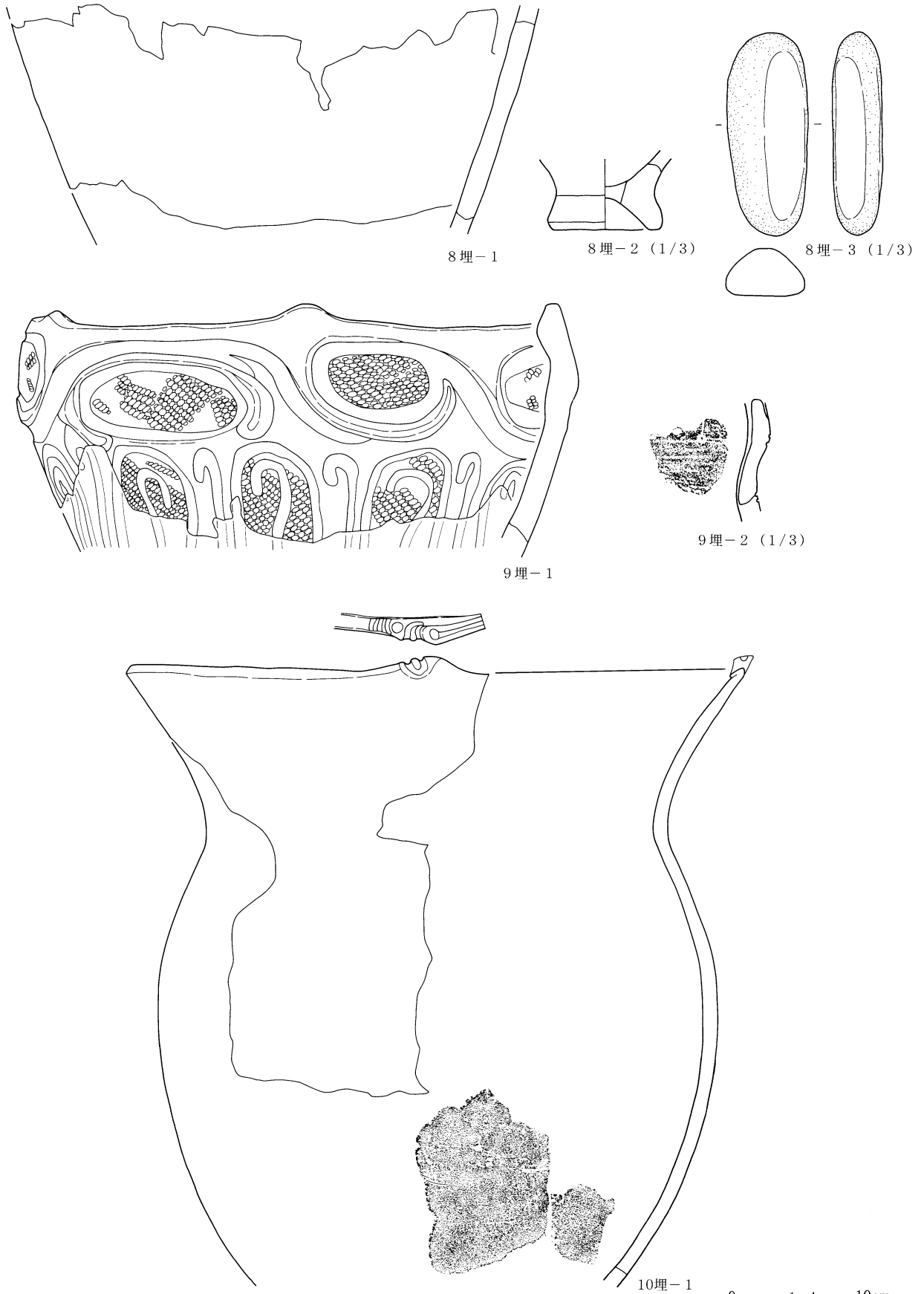
第20図 18区土器埋設遺構出土遺物 (1・2号)



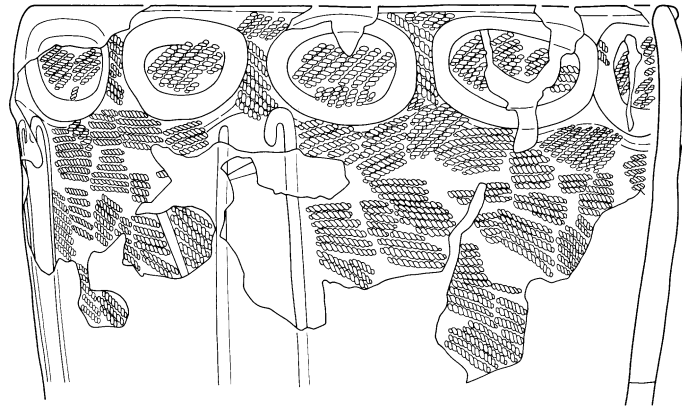
第21図 18区土器埋設遺構出土遺物(4・5・6・7号)



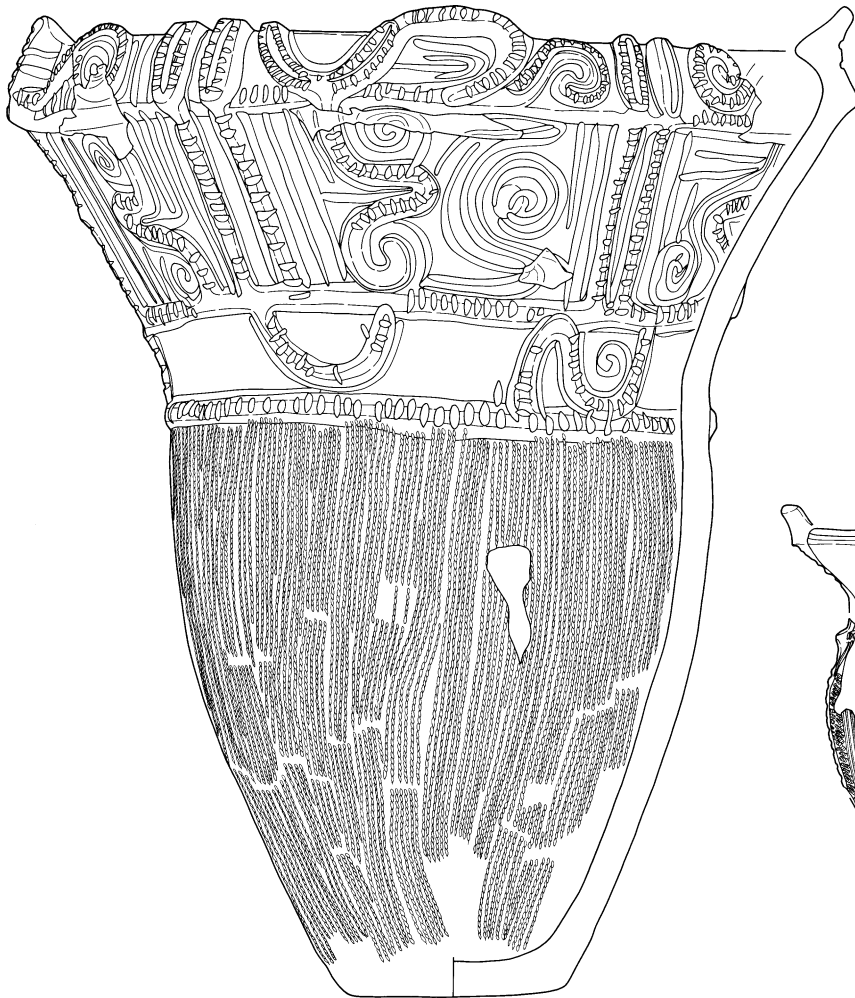
第3節 土器埋設遺構



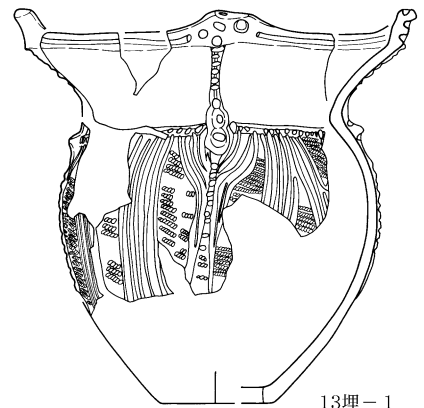
第22図 18区土器埋設遺構出土遺物 (8・9・10号)



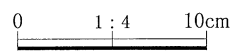
11埋-1



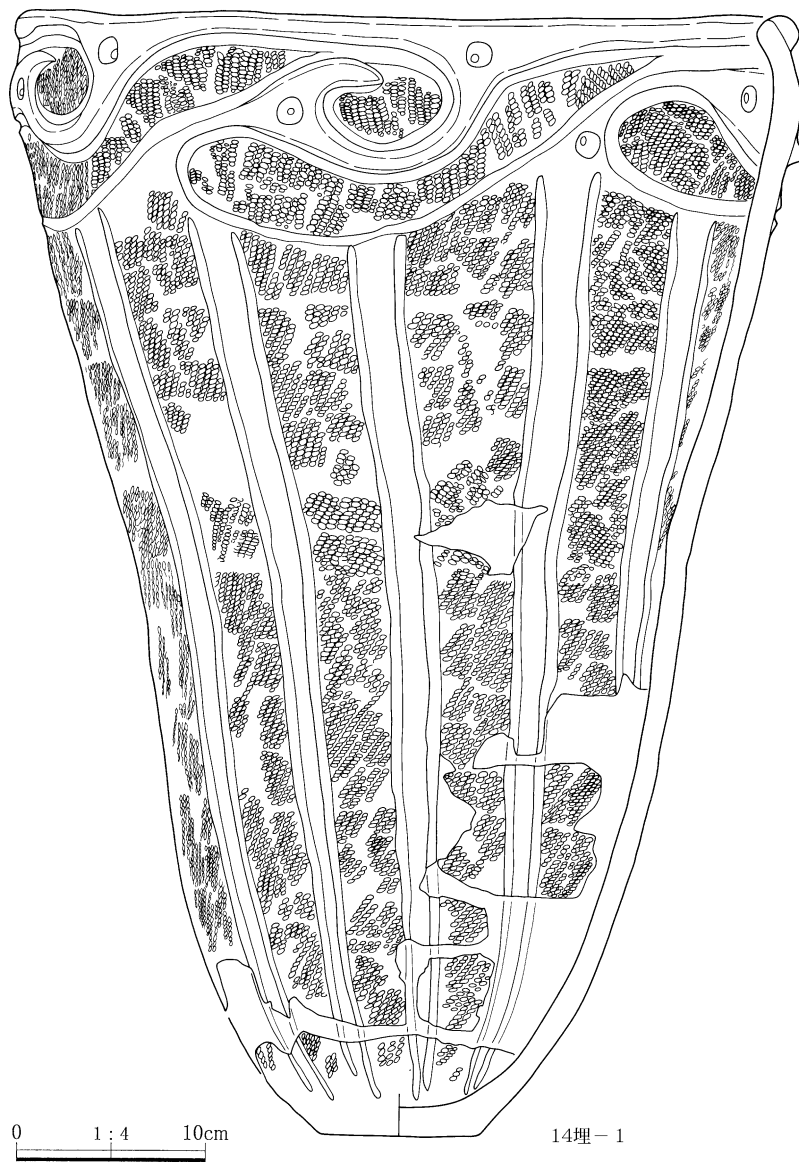
12埋-1



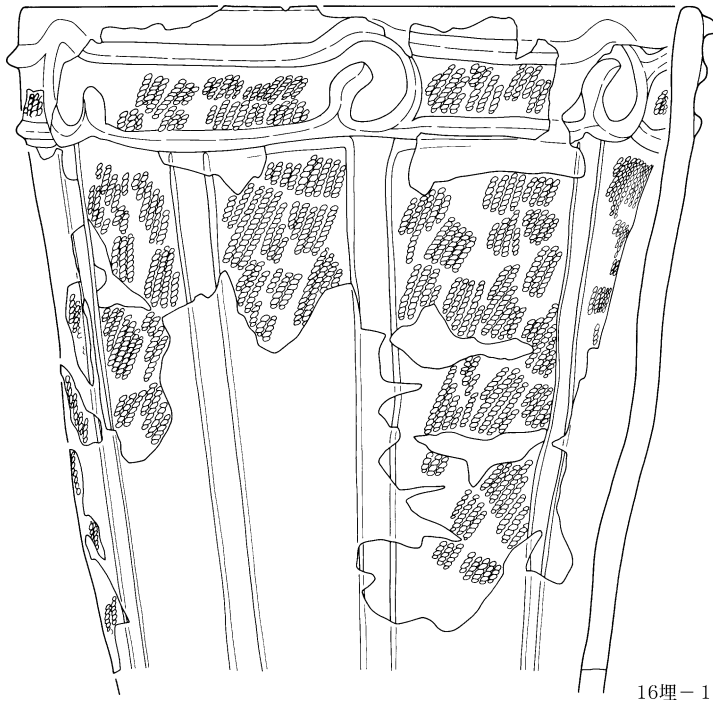
13埋-1



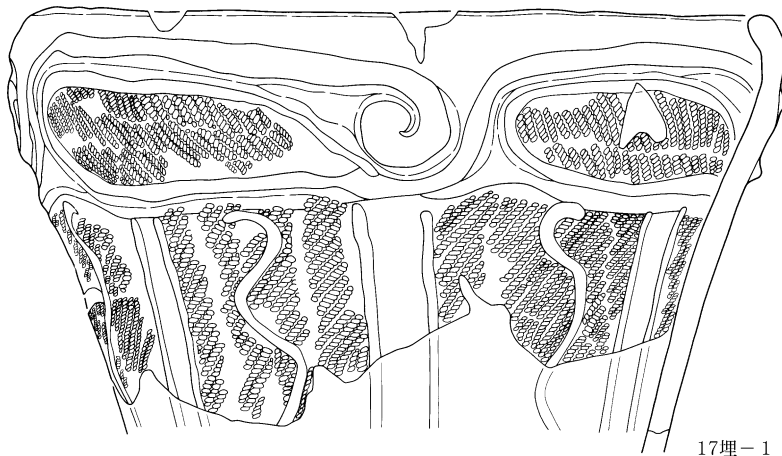
第23図 18区土器埋設遺構出土遺物 (11・12・13号)



第24図 18区土器埋設遺構出土遺物 (14号)



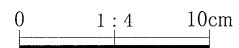
16埋-1



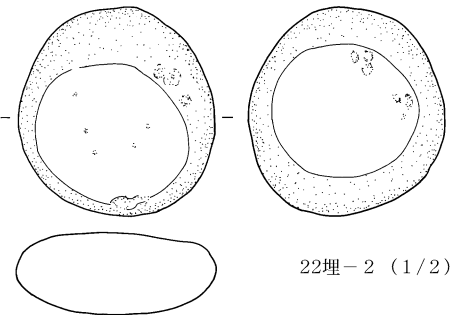
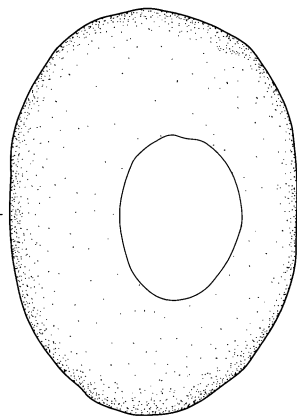
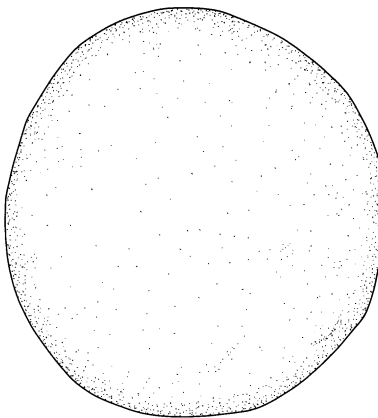
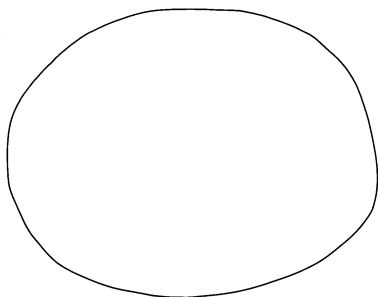
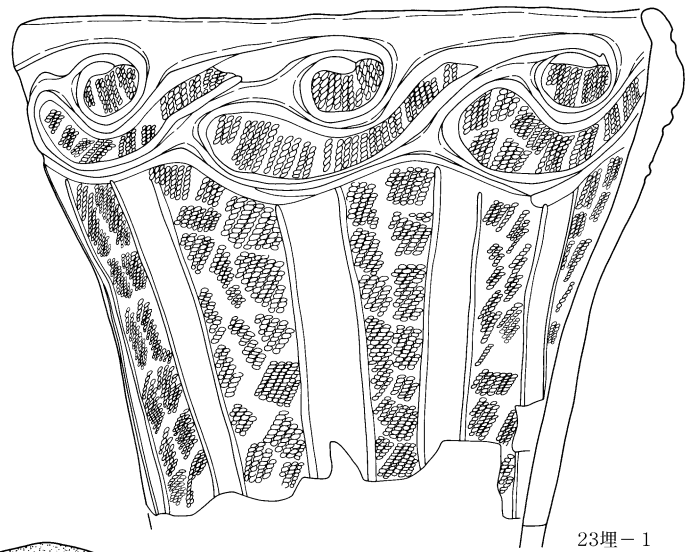
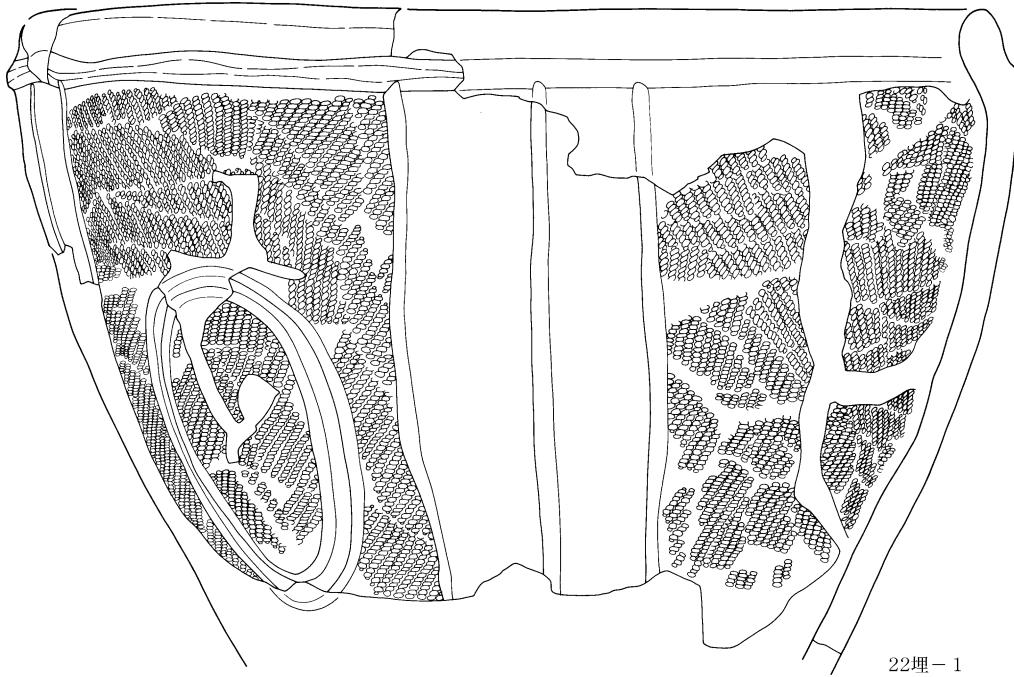
17埋-1



19埋-1



第25図 18区土器埋設遺構出土遺物 (16・17・19号)



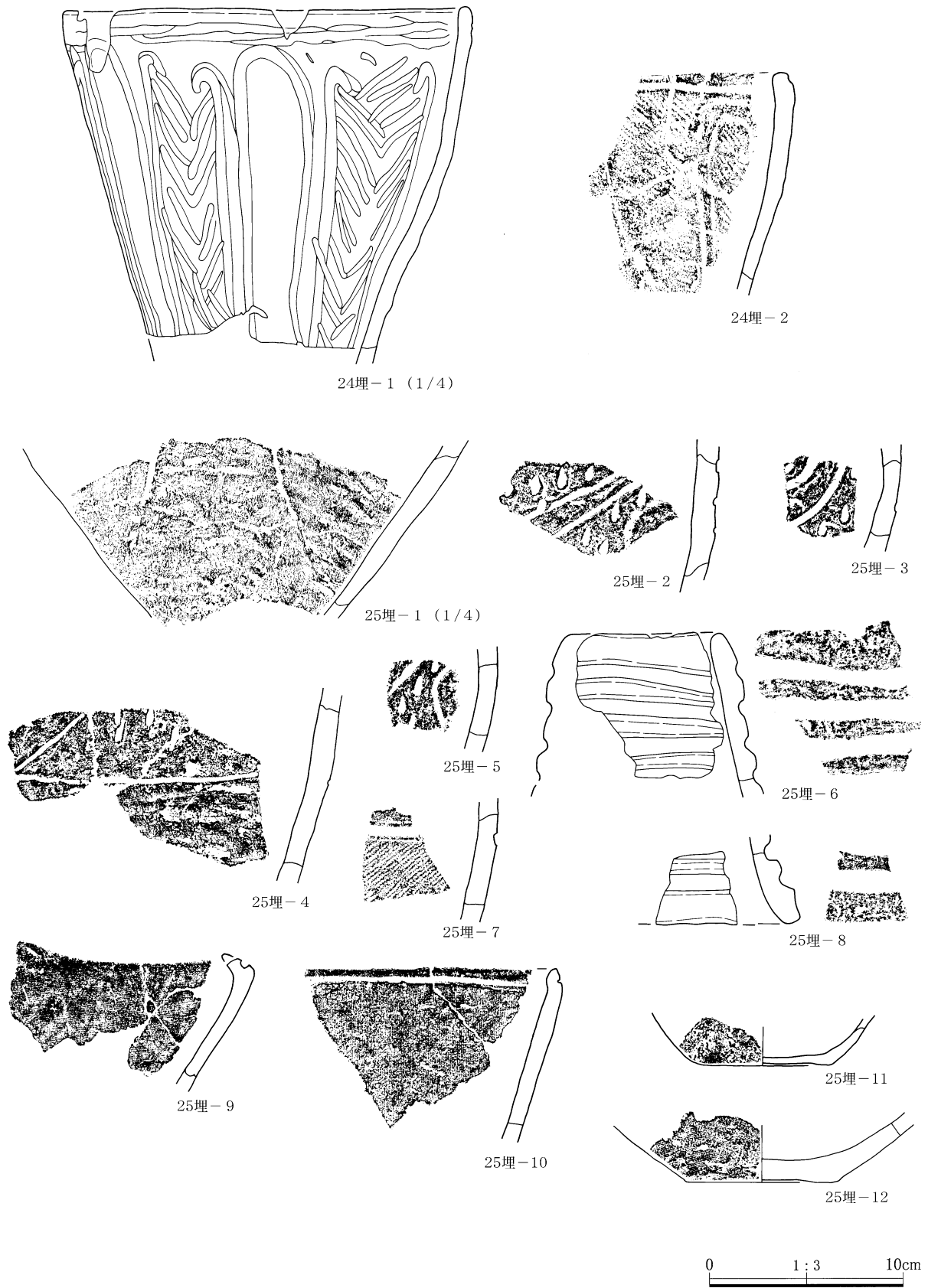
22埋-2 (1/2)

23埋-2 (1/3)

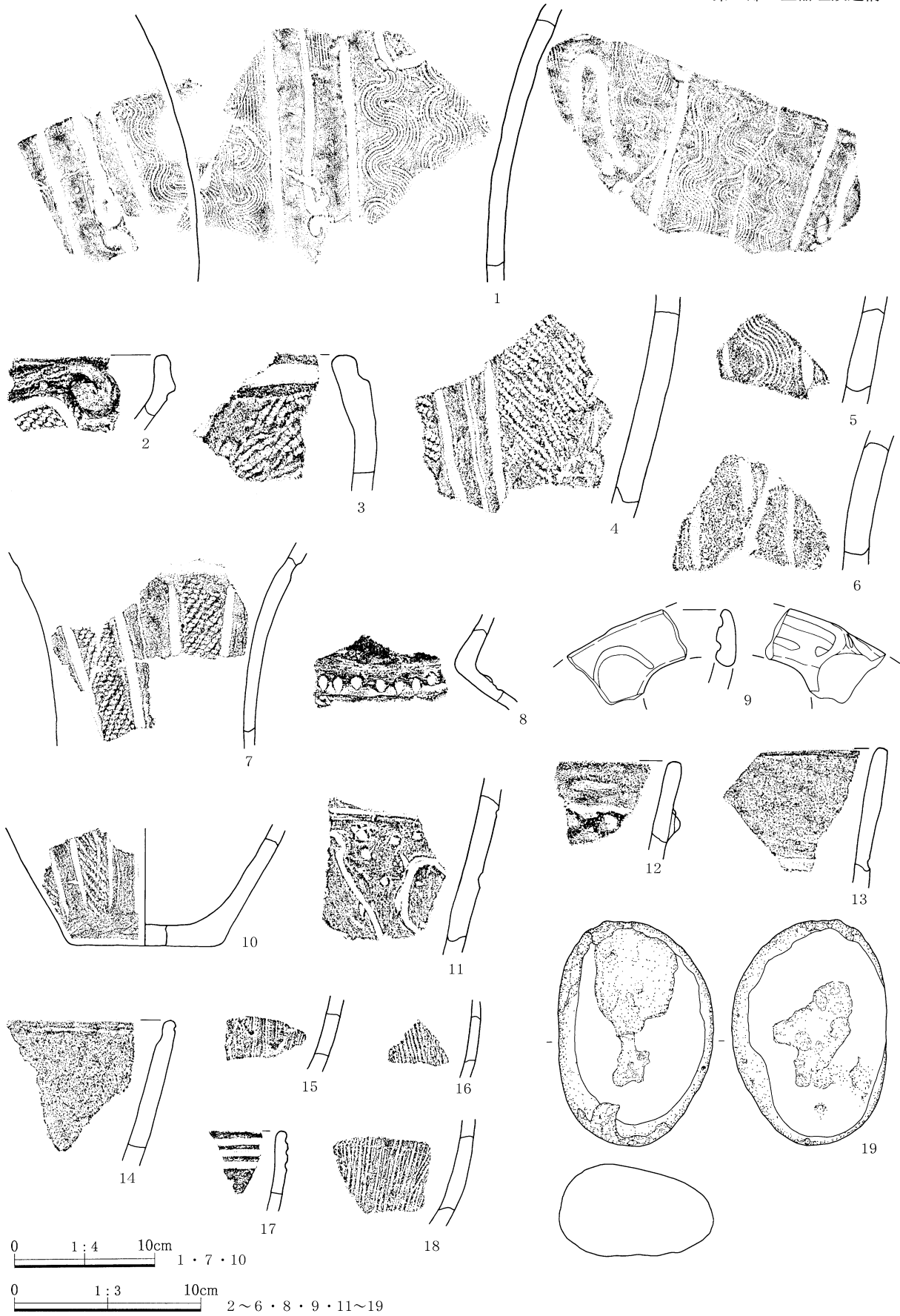
0 1:4 10cm

第26図 18区土器埋設遺構出土遺物 (22・23号)

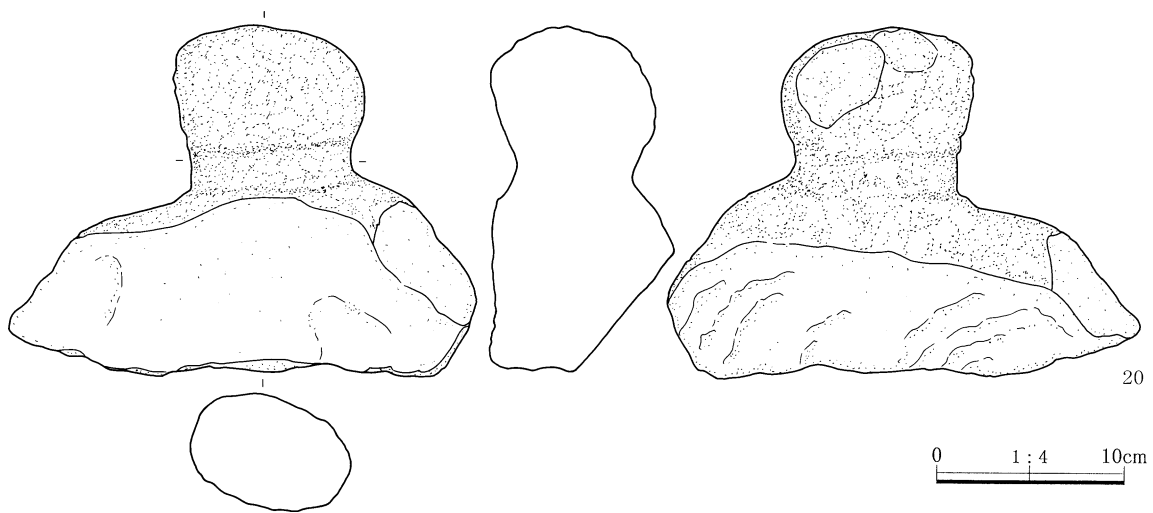




第27図 18区土器埋設遺構出土遺物 (24・25号)



第28図 18区12号配石出土遺物(1)



第29図 18区12号配石出土遺物(2)

#### 18区25号土器埋設遺構

調査年度 平成14年度

位置 I-12グリッド

**確認状況** 縄文時代の埋没谷の中央部で確認された。隣接する47号配石より高いレベルで確認されており、縄文時代後期の包含層と同レベルにある。周囲には後期前半の土器が数多く分布する。

**埋設状況** 縄文時代後期の包含層である淡褐色土中に、大形深鉢の胴下半部を逆位に伏せた状態で確認された。発掘時には底部の一部が存在しており、胴下半部が完存することから、土器埋設遺構として扱った。使用された土器は、残存部上端の直径が30cmほどの深鉢の胴下半部で、外面に粗いケズリ痕を残す。二次的な被熱痕跡は認められない。

**掘り方** 土質が一様であり、掘り方は確認できなかった。

**所見** 埋没谷のやや上流部で確認された19号と類似した状況であり、設置する意図が見て取れることから、土器埋設遺構として扱いたい。当遺構は大形深鉢の胴下半部を逆位に埋設したもので、単独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から後期前半に比定されよう。

#### 19区1号土器埋設遺構

調査年度 平成13年度

位置 X-19グリッド

**確認状況** 中期後半環状集落内の東部地区に位置し、中期の住居が重複しながら群在するなかで確認された。東側に中期の20号・22号住居が近接し、南側には後期の4号列石が隣接する。この地区は、地山礫の量はさほど多くはないが、中期の住居群と南側の後期4号列石が錯綜する複雑な領域でもあり、礫や遺物の取り上げには慎重を要する地区である。特に、4号列石から流れ落ちた礫と後期の遺物が比較的后半に散布しており、当遺構もそのなかの一つであるが、正位を保持していることから、土器埋設遺構と登録された。

**埋設状況** 深鉢の胴下半部を正位に埋設した状態で確認された。使用された土器は、底径10cm、残存高15cmほどのもので、器外面に磨きを施し、底部に網代痕を残した後期の土器である。すぐ西側に板状の礫が当遺構の土器底部とほぼ同じレベルにあり、その上方には大形の礫が分布する。

**掘り方** 明瞭な掘り方は確認できない。

**所見** 残存部位が僅かであるが、不安定な底部

で正位を保持しており、ここでは単独の遺構として扱っておきたい。時期は、使用された土器から、後期前半に比定しておきたい。

#### 19区2号土器埋設遺構

調査年度 平成14年度

位置 F-12グリッド

確認状況 山根沢の西側に位置する。この地区は、山根沢と埋没谷の間にある、もう一つの小さな谷により、18区より一段低い地形になっており、遺物の散布も少ないことから、まずトレンチによる確認調査から開始した。そのトレンチにかかって確認されたのが2号・3号埋設土器で、この地区の全面調査の契機となった。確認当初は住居であろうと考えていたが、その後の調査で40号住居を切って埋設されていることが判明した。

埋設状況 2号は、小形の深鉢を逆位に埋設したもので、40号住居炉の南東に位置する。40号住居の床面は地山の黄色砂質土を掘り込んで構築しており、埋没土との違いは明瞭である。当遺構はその床面をさらに15cmほど掘り込み、底面から10cmほど浮いた状態で土器を逆位に設置している。そのため、土器の上端部は40号住居床面より8cmほど上方にある。掘り込み面は不明。40号住居の覆土は、床面から10～15cmの厚さで確認できたが、その上部は後世の削平で失われており、当遺構の埋設土器が胴下半部を打ち欠いた土器を使用したのか、後世の削平で欠失したのか、判断できない。

使用された土器は、口縁に小突起が4個付く後期堀之内1式の小形深鉢で、胴部文様も4単位で構成される。縄文はLRで、無文部にはかるく研磨が施されている。なお、炉に使用された痕跡は認められない。

伴出遺物 なし。

掘り方 直径24cmの円形状を呈し、40号住居床面からの深さは14cm、底面から土器上端まで22cmである。埋め土は黒褐色土で、小礫を多く含む。

所見 小形の深鉢を逆位に埋設したもので、単

独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から後期堀之内1式期に比定されよう。

#### 19区3号土器埋設遺構

調査年度 平成14年度

位置 F-13グリッド

確認状況 2号と同様である。

埋設状況 やや大きな深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、40号住居の炉に伴う焼土を切り込んで構築している。土器の上端部は40号住居より若干突出しており、内面の底に長さ12.6cmの丸い凹石（3埋-2）が据えられていた。

使用された土器は、底径9.5cm、残存高が13cmで、内面上位部分が被熱により劣化していた。

掘り方 長軸41cm、短軸37cmの円形状を呈し、深さ18.5cmの掘り方が確認された。土器は掘り方底面より若干浮いた状態で設置されており、上端部は2号よりやや低いレベルで欠失していた。掘り方の底面は、40号住居の炉の底面より20cm前後高いレベルにある。

所見 深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、内面に被熱による劣化が認められることから、40号住居の新規の炉であった可能性も否定できないが、判断は難しい。時期は、使用された土器、2号土器埋設遺構、および40号住居の出土土器との関係から、後期堀之内1式期に比定されよう。

#### 19区4号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 X-12グリッド

確認状況 中期加曾利E2式期の34号住居の石囲い炉上面覆土中に重複した状態で確認された。確認面にはまだ遺物は少なく、住居の存在も不確定だったが、当遺構の掘り方調査で34号住居の石囲い炉の一部が露呈し、住居調査の契機となった。

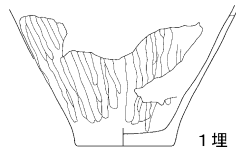
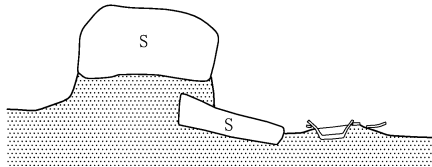
埋設状況 胴部上半を打ち欠いた深鉢を、34号住居の埋没土を掘り込んで、正位に埋設されていた。土器は胴部直径34cm、残存高36cmで、確認面では上端

第3章 発見された遺構と遺物

1号



A L=575.40m

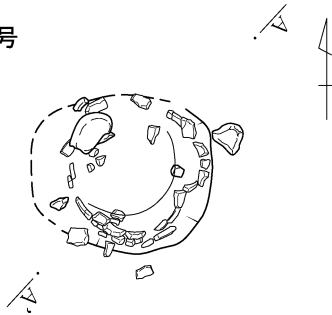


1埋

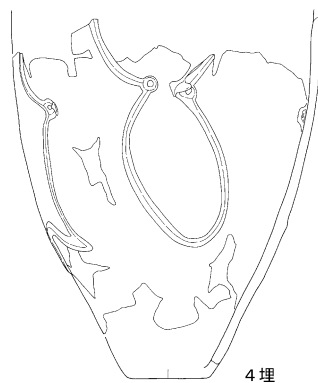
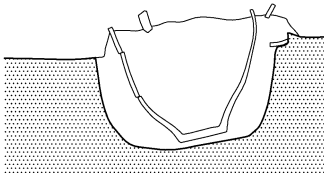


19区 4号土器埋設遺構

4号

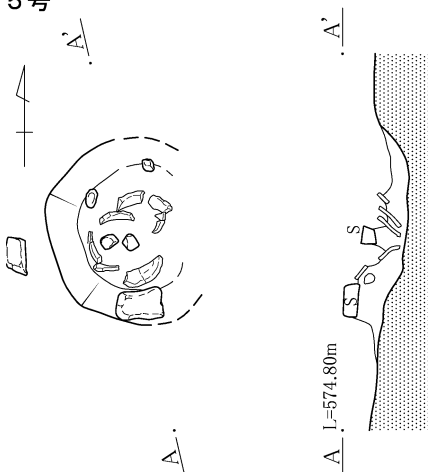


A L=577.30m



4埋

5号



A L=574.80m

0 1:20 1m



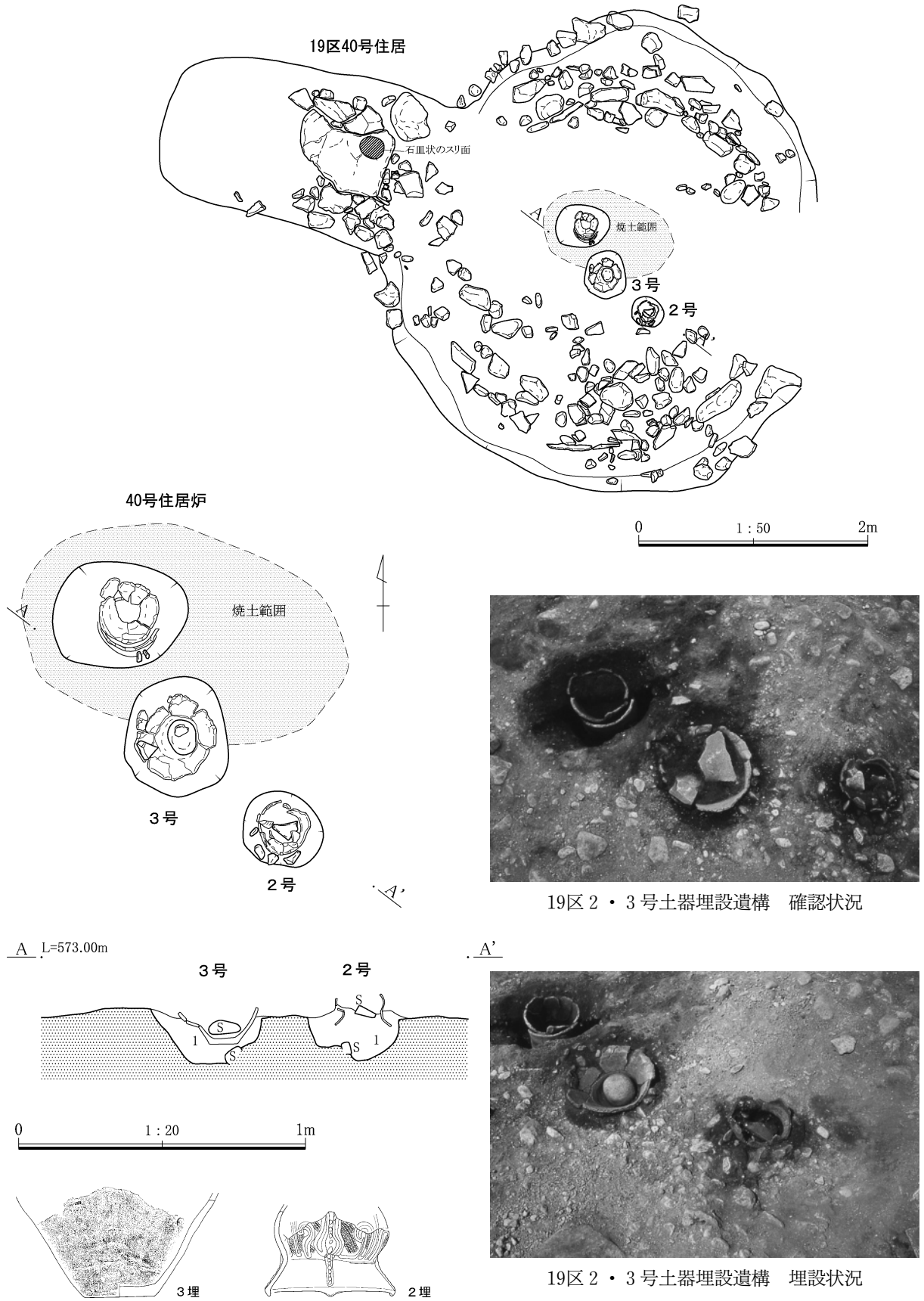
19区 5号土器埋設遺構



5埋

第30図 19区 1号・4号・5号土器埋設遺構





第31図 19区2号・3号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

が潰れて周囲に散乱していた。その一部は埋設土器に接合したが、なかには口縁部の破片もあり、本来は口縁部まで完存する土器が使用された可能性もある。

使用された土器は、断面三角形の微隆帯でU字状文を組み合わせてX字状の文様を構成するもので、文様の要点に円形の貼り付けを施した、本地域特有の後期称名寺1式土器である。なお、埋設土器に二次的な被熱痕跡は認められない。

**伴出遺物** 当遺構の確認面には50点の土器破片が散乱していた。このうち、中期の土器は34号住居の遺物となろう。後期土器のうち、当埋設土器と接合しなかった土器の一部を第33図に掲載した。4埋-2・3は口縁部片で、当埋設土器の一部である可能性が高い。4埋-4の凹石は、埋設土器の内部からの出土である。

**掘り方** 明瞭ではないが、直径50cmほどの円形状を呈し、深さは40cmほどの掘り方が認められた。埋め土は34号住居の埋設土と大差なく、掘り方の形状は心許ない。

**所見** 中形の深鉢を正位に埋設したもので、単独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 19区5号土器埋設遺構

**調査年度** 平成15年度

**位置** T-18グリッド

**確認状況** 中期後半環状集落域内の東側、山根沢左岸沿いに位置する。この地区は地山礫が少なく、中期後半代の遺構が集中する地区にあたるが、後世の削平が及んでいて、住居の確認が難しい地区である。また、本遺跡では初期にあたる、前期前半代の遺物分布が集中する地区でもある。当遺構は中期の8号住居の調査に伴い、住居の南西部壁にかかった状態で確認された。

**埋設状況** 直径50cmの円形状を呈する浅い掘り込みの中央に、深鉢の胴下半部を正位に埋設した状態で確認された。土器は上から押し潰された状態で一部

が重なっており、上端部も不揃いであることから、上部を削平されていると考えられる。使用されて土器は結節縄文を施す前期有尾・黒浜式期のもので、残存部は胴下半部の半分強ほどである。周囲で長さ10cm前後の扁平礫が2個確認されている。

**伴出遺物** 特にない。

**掘り方** 直径50cmの円形状で、深さ10cmの掘り方が確認された。底面は平坦で、暗褐色土で埋まっており、焼土は認められない。

**所見** 胴部上半を欠失した小形の深鉢を正位に埋設したもので、炉内埋設土器と判断したい。明瞭な焼土は確認できないが、上部を一部削平されているものと考えられる。時期は、使用された土器から前期有尾・黒浜式期に比定されよう。

#### 19区6号土器埋設遺構

**調査年度** 平成15年度

**位置** Y-18グリッド

**確認状況** 後期の4号列石の列石下で確認された。

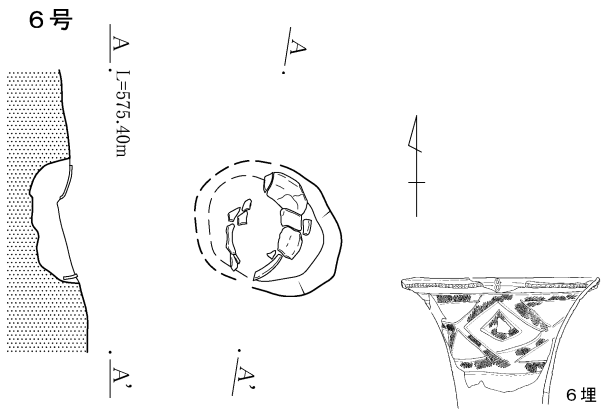
4号列石に28号住居が取り付く西側にあり、列石の石を取り去った段階で確認された。

**埋設状況** 地山の黄色シルト質土を掘り込んで、胴下半部を欠失した朝顔形の浅形深鉢を正位に埋設していた。上面を4号列石の礫で覆われたためか、土器はかなり変形した状態で確認されたが、口縁部の7割と体部の半分は残存していた。埋設土器は菱形文様を施した後期堀之内2式土器で、二次的な被熱痕跡は認められない。

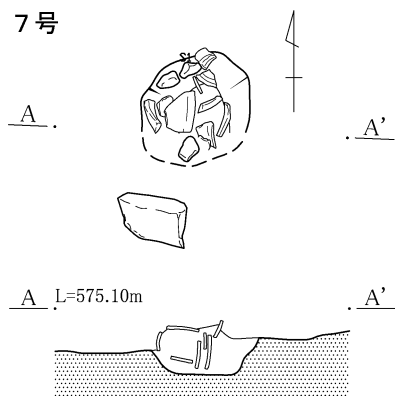
**伴出遺物** 別個体の堀之内2式土器破片(6埋-2)が1点出土している。

**掘り方** 直径33cm、深さ10cmほどの円形状の掘り方が確認された。

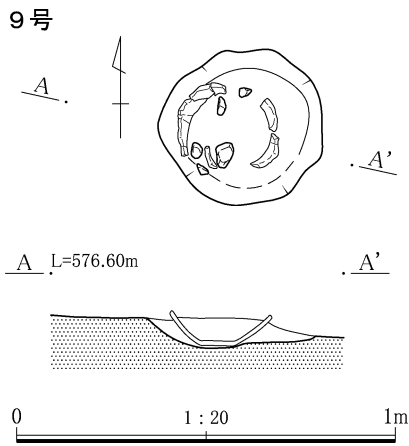
**所見** 4号列石に伴う埋設土器と判断する。時期は、使用された土器から後期堀之内2式期に比定されよう。



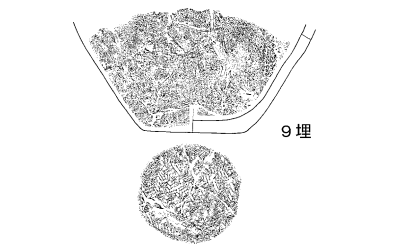
19区 6号土器埋設遺構



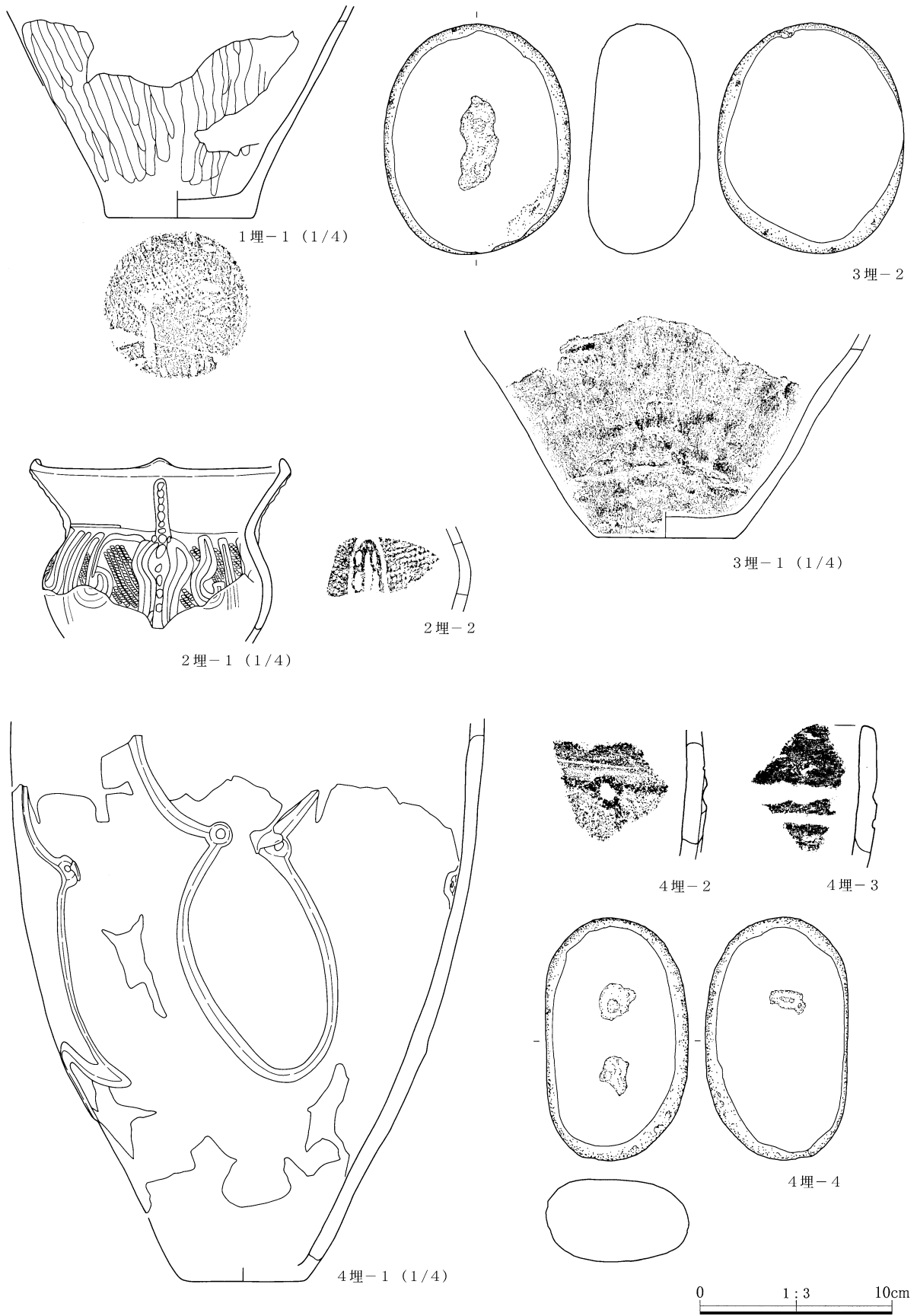
19区 7号土器埋設遺構



19区 9号土器埋設遺構

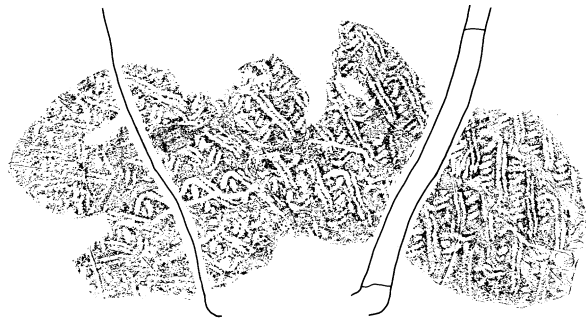


第32図 19区 6号・7号・9号土器埋設遺構

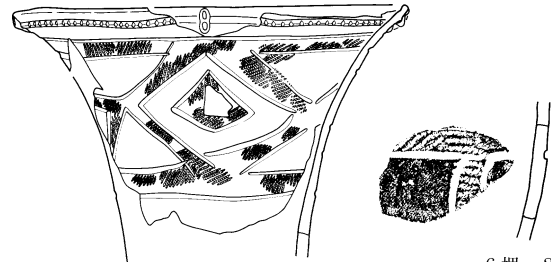


第33図 19区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・3・4号)

第3節 土器埋設遺構



5埋-1



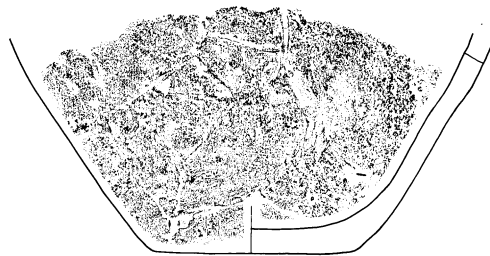
6埋-1

6埋-2



7埋-1

0 1:4 10cm



9埋-1



第34図 19区土器埋設遺構出土遺物(5・6・7・9号)



### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 19区7号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 V-18グリッド

確認状況 後期の4号列石の列石下で確認された。列石の東端部にあり、同じく列石下で確認された284号土坑に近接する。

埋設状況 4号列石の礫下から、土器破片を折り重ねて詰め込んだような状態で確認された。土器破片は全て同一個体で、各部位の一部の破片のみであったが、推定口径49cm、高さ49cmの大形深鉢の破片であった。つまり、埋設された土器が押し潰されたのではなく、当初から破片になったものを一括して埋納されたことになる。

掘り方 長軸35cm、短軸28cm、深さ8cmほどの浅い掘り込み内に、土器は埋納されていた。

所見 4号列石に伴う埋納物と判断する。時期は、出土土器から後期堀之内2式期に比定されよう。

#### 19区9号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 V-15グリッド

確認状況 中期後半代の環状集落域内の東側、後期の32号住居の南で確認された。この地区は、中期後半集落域に重なって後期の住居や土坑が集中する箇所、各遺構が密集するなかから確認された。なお、当遺構の周囲には焼土が転々と散布していた。

埋設状況 褐色土を掘り込んだ浅い掘り方内に、深鉢の胴下半部を正位に埋設した状態で確認された。土器は底径10.8cm、残存高10.6cmで、内面に被熱による変色と劣化が認められた。

伴出遺物 なし。

掘り方 長軸42cm、短軸39cm、深さ8cmの円形の掘り方が確認された。埋め土中に焼土は認められないが、掘り方の周囲には焼土が転々と散布していた。

所見 埋設土器の内面に被熱痕跡が認められ、周囲に焼土が点在することから、住居の炉の可能性が高いと判断する。時期は、使用された土器から後期前半期に比定しておきたい。

#### 20区2号土器埋設遺構

調査年度 平成11年度

位置 N-22グリッド

確認状況 20区中央の北側、中期後半代環状集落域の西側内縁で確認された。この地区は、中世の館が構築された場所で、縄文時代の遺構はかなりの部分が削平を受けている。確認面は地山の黄色砂質土で、礫はほとんど含まない。

埋設状況 地山面を浅く掘り込み、鉢の胴下半部を正位に埋設した状態で確認された。土器は圧力で変形しており、上部を削平されたと見て間違いない。使用された土器は、底径13cm、残存高14.4cmで、底部に網代痕が付く。被熱痕跡は認められない。

掘り方 平面形が楕円形を呈し、断面形が鍋底状の浅い掘り方が確認された。規模は長軸73cm、短軸53cm、深さ15cmである。

所見 鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、単独の遺構と判断したい。時期は、使用された土器から後期前半期に比定されよう。

#### 20区3号土器埋設遺構

調査年度 平成11年度

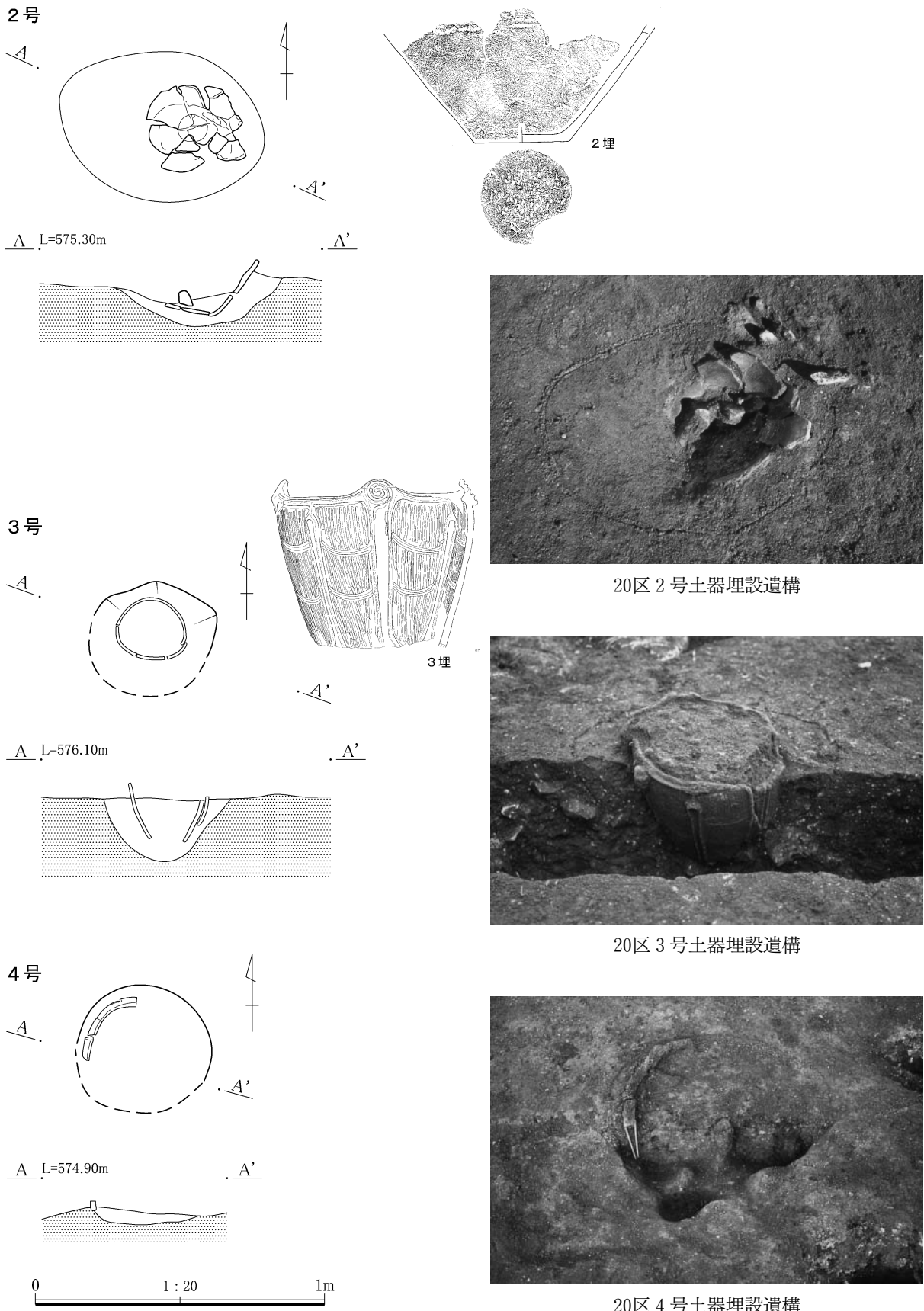
位置 U-25グリッド

確認状況 20区の北西部、中期後半代環状集落域の西北側外縁で確認された。確認面は暗褐色土面で、北西側に22号住居が近接する。

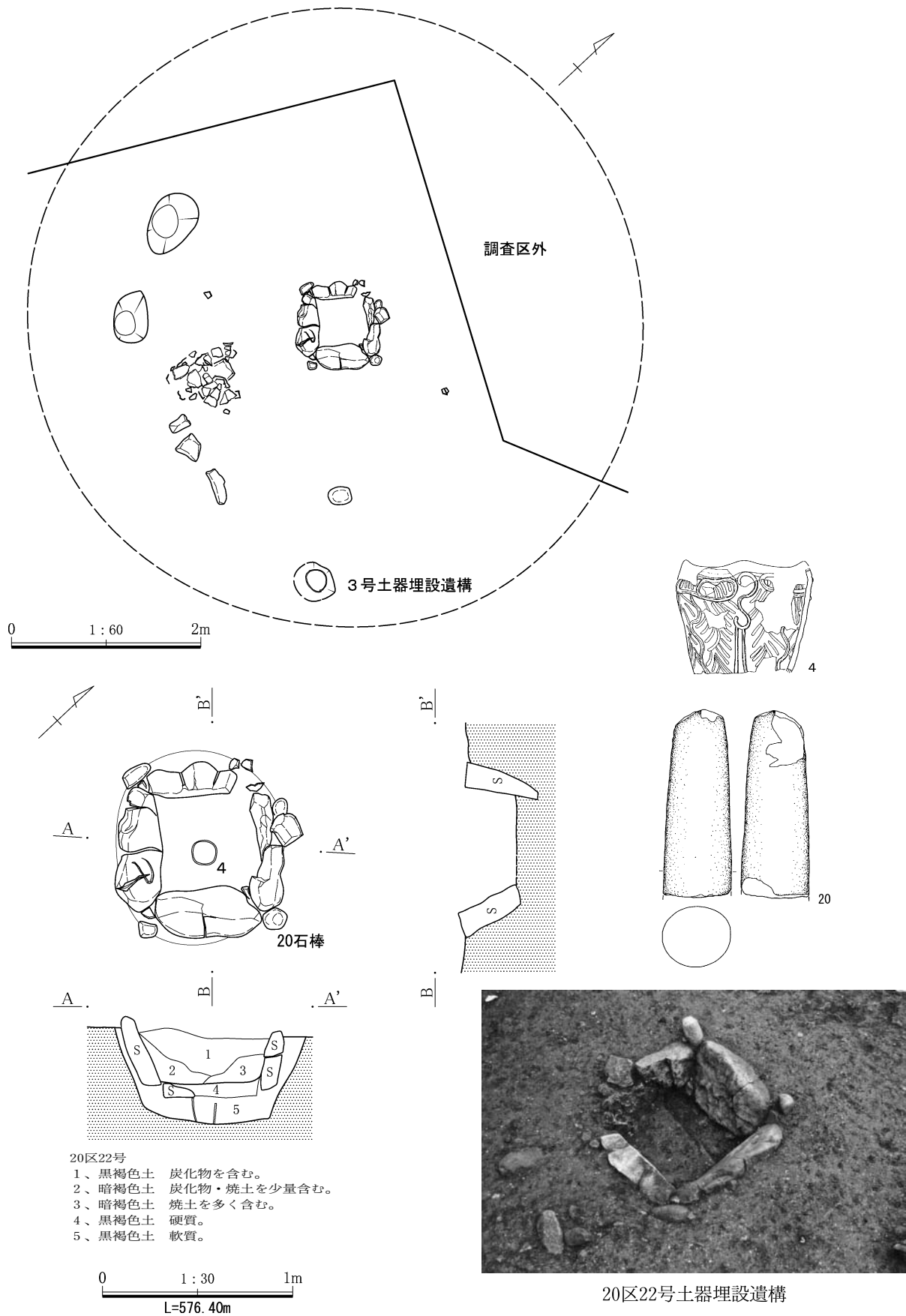
埋設状況 暗褐色土面を掘り込んで、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を正位に埋設している。使用された土器は、バケツ形をした地元の唐草文系土器で、口径28.5cm、残存高は23.5cmで、残存部はほぼ完存している。被熱痕跡は認められない。

掘り方 埋設土器の形状に合わせた掘り方が確認された。規模は直径40cm前後、深さ22cmで、やや明るい暗褐色土で埋め土されている。

所見 22号住居の埋甕に該当すると判断した。第36図に当遺構を組み込んだ22号住居を示す。20区22号住居は、2005年刊行の横壁中村遺跡(2)で報告済みであるが、当時想定していた出入り口部にちよ



第35図 20区 2号・3号・4号土器埋設遺構



第36図 20区22号住居

うど3号が位置しており、時期的にも妥当と判断した。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期中段階に比定される。

#### 20区4号土器埋設遺構

調査年度 平成11年度

位置 O-24グリッド

確認状況 20区中央の北側、中期後半代環状集落域の西側で確認された。この地区は、中世の館が構築された場所で、縄文時代の遺構はかなりの部分が削平を受けている。確認面は地山の黄色シルト質土で、礫はほとんど含まない。

埋設状況 地山面に、大形深鉢の口縁部片を逆位に置いた状態で確認された。口縁部片は5分の1周分しか残っていないが、その痕跡は直径46cmの円形状に残っており、掘り方が存在したものと判断される。残存した口縁部片は高さ5cmほどであり、大半が削平されたと考えられる。使用された土器は、関東系の中期加曽利E3式土器である。

掘り方 直径46cmの円形状に地山土が汚れており、掘り方が存在したものと判断される。

所見 明確な掘り方は確認できないが、大形の深鉢を逆位に埋設したもので、単独の遺構の可能性が高い。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期に比定されよう。

#### 20区6号土器埋設遺構

調査年度 平成11年度

位置 P-24グリッド

確認状況 5号の北西部にあり、確認面は地山の黄色シルト質土面である。中世の館に関わる土坑や柱穴が密集する地区で確認された。

埋設状況 直径50cmほどの円形土坑の片隅から、口縁部を欠失し、胴部上半が破碎した小形の深鉢が、正位を保持した状態で確認された。使用された土器は、中期加曽利E3式期の地元唐草文系土器で、被熱痕跡は認められない。

掘り方 直径50cmほどの円筒形を呈する土坑で、

深さは24cmである。覆土は、地山土と礫を多く含む黒褐色土で、焼土等は含まない。

所見 土器と土坑の規模は小さいが、円形土坑に深鉢を埋設する点では、18区16号や20区10号と共通しており、単独の遺構と判断しておきたい。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期古段階に比定されよう。

#### 20区10号土器埋設遺構

調査年度 平成12年度

位置 O-19グリッド

確認状況 中期後半代環状集落域の南西部にある。この地区は、中期住居群と後期住居群が重複する遺構密集地区であり、そこに後世の石垣が重なっている。当遺構は、後期堀之内1式期の柄鏡形住居である47号住居の北側にあり、調査当初は柄部に集積した礫群を39号住居と捉え、当遺構もその一部として調査された。最終的に39号住居は欠番となり、47号住居の柄部北側に近接する当遺構は、単独の扱いとなった。

埋設状況 円筒状の土坑の北東側壁面に寄せて、底部を打ち欠いた大形の深鉢を正位に埋設していた。土器は、土坑の底面から10cm前後浮いた状態で設置し、その周囲に大小の礫をあてがって押さえとしている。土坑の周囲にも大小の礫が数多く認められたが、当遺構に続いて構築された、南西側に近接する47号住居柄部に集積された多量の礫群との見分けは、困難だった。

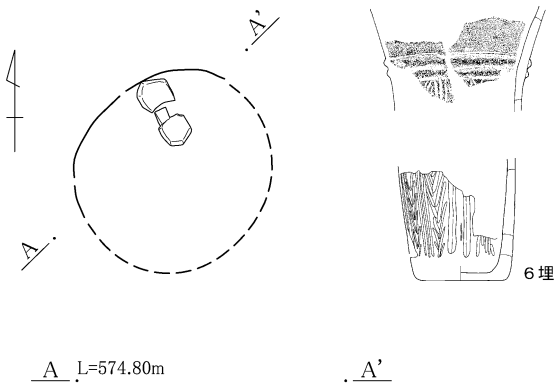
使用された土器は、口径49cm、残存高55cmの樽形を呈する大形深鉢で、体部に断面三角形の微隆帯で区画された縄文帯でH字状の文様を3単位で構成している。

なお、土器内部はよく締まった黒褐色土で充たされており、遺物等の出土は認められない。

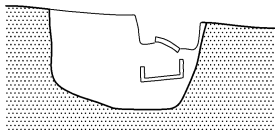
掘り方 円筒状を呈する大形の土坑で、規模は長径126cm、短径123cm、深さは61.5cmである。埋め土は、1層が締まった黒褐色土、2層が地山の黄色砂質土を多量に含んだ硬質の褐色土、3層が軟質の黒

第3章 発見された遺構と遺物

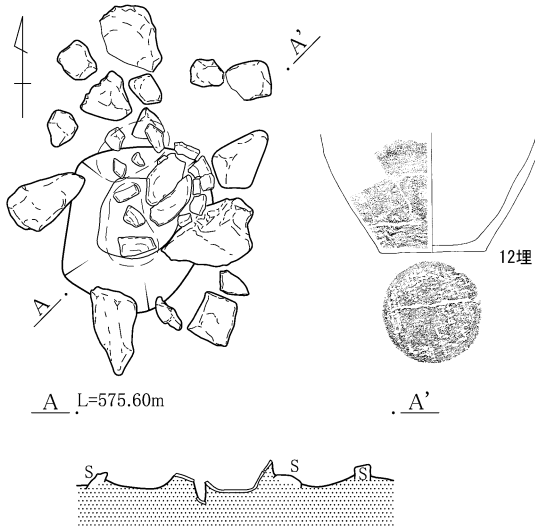
6号



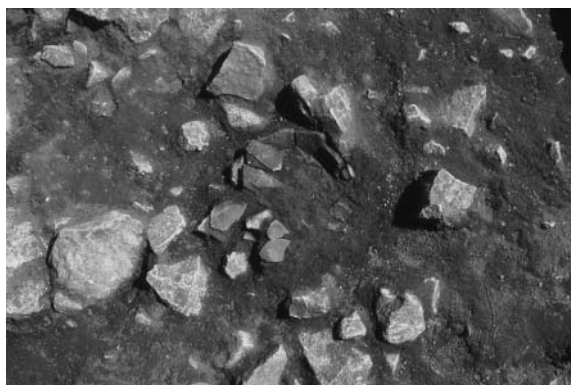
20区6号土器埋設遺構



12号

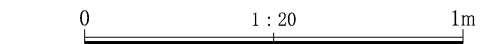
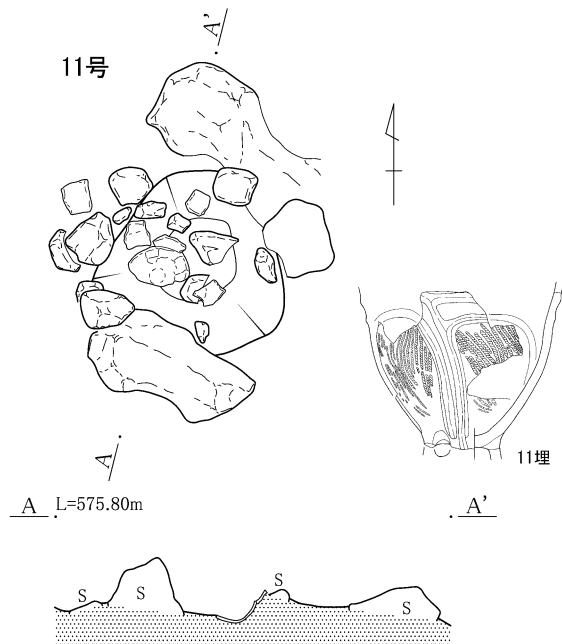


20区12号土器埋設遺構



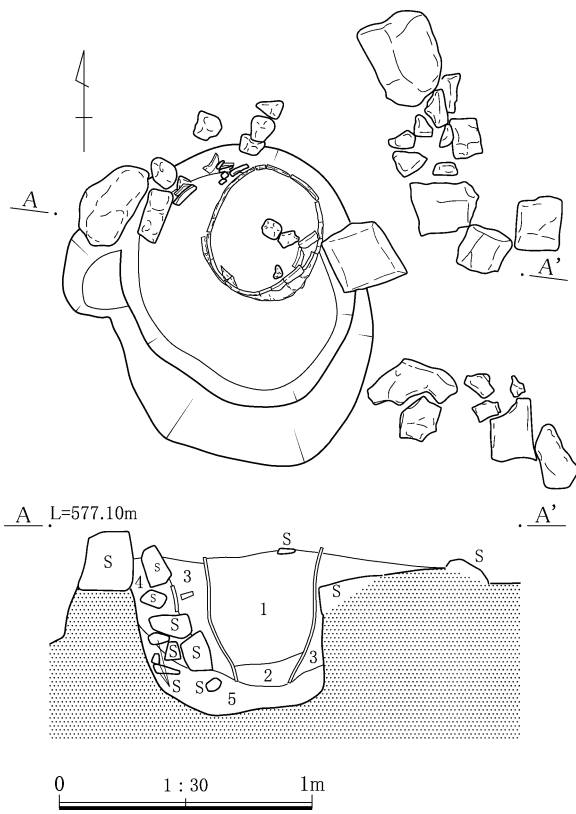
20区12号土器埋設遺構

11号



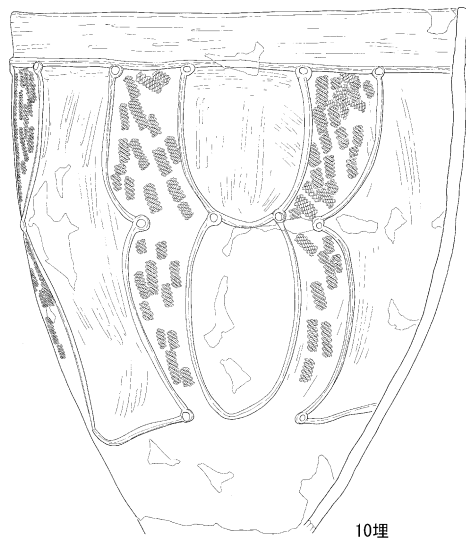
第37図 20区6号・11号・12号土器埋設遺構





20区10号

- 1、黒褐色土 硬質。
- 2、褐色土 硬質で、地山黄色シルトを含む。
- 3、黒褐色土 軟質。
- 4、黒褐色土 炭化物を少量含む。
- 5、褐色土と地山黄色シルトの混土。硬質。



20区10号土器埋設遺構 確認状況



20区10号土器埋設遺構 埋設状況



20区10号土器埋設遺構 土器内部の状況



20区10号土器埋設遺構 掘り方

### 第3章 発見された遺構と遺物

褐色土、4層が礫を多量に含む黒褐色土、5層が3層と近似した硬質の褐色土である。

**所見** 大形の円筒状土坑に、底部を打ち欠いた大形深鉢を正位に埋設したもので、単独の遺構と判断する。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 20区11号土器埋設遺構

**調査年度** 平成12年度

**位置** K-20グリッド

**確認状況** 中期後半代環状集落域の南側内縁にある。地山礫が集中する地区で、後世の攪乱も多く、遺構分布は希薄である。当遺構は、地山礫が集中する最終確認面でかろうじて検出できた遺構の一つで、東側に2号掘立柱建物が隣接する。

**埋設状況** 大量の礫を含む暗褐色土中に、胴部上半と脚部を欠失した脚台付深鉢を正位に埋設していた。土器の周囲には大形の礫が点在し、掘り方の有無ははっきりしない。土器は7割を破損し、その破片は周囲に点在していた。その一部は接合したが、半分以上の部分は欠失していることから、本来の掘り込み面は失われていると考えられる。

使用された脚台付深鉢は、地元の唐草文系土器で、平行隆線と曲線的な文様を構成する。被熱痕跡は不明瞭だが、外面上半と内面下半に煤状炭化物の付着が認められた。

**掘り方** 明瞭な掘り方は確認できない。

**所見** 胴部上半と脚部を欠失した脚台付深鉢を正位に埋設したもので、使用された土器の大きさや周囲の状況から、住居の炉の可能性も考えられるが、判断する要素が不足しており、断定できない。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期に比定されよう。

#### 20区12号土器埋設遺構

**調査年度** 平成12年度

**位置** K-20グリッド

**確認状況** 11号の西側2mに近接しており、状況は

11号と同様である。

**埋設状況** 大量の礫を含む暗褐色土中に、胴部中位以上を打ち欠いた深鉢を正位に埋設していた。埋設されていた土器(11埋-3)は、胴部下半がほぼ残存しており、その上に別個体の深鉢の口縁部破片(11埋-2)と胴部破片(11埋-1)がのっていた。埋設に使用された土器は、底面に網代痕が付く深鉢で、内外面とも被熱による劣化・摩耗が著しい。

**掘り方** 明瞭な掘り方は確認できなかった。

**所見** 深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、土器に被熱痕跡が認められることから、住居の炉の可能性が高いと判断する。時期は、使用された土器から後期前半期に比定されよう。

#### 20区13号土器埋設遺構

**調査年度** 平成12年度

**位置** Q-18グリッド

**確認状況** 中期後半代環状集落域の南西部、中期加曾利E3式期の5号住居を調査中に、その南東の範囲外で確認された。その場所は、後の調査で5号住居に先行する42号住居の範囲内となったが、当遺構の確認面には他に土器の出土がなく、土器は正位を保持していることから、認定に至った。

**埋設状況** 5号住居壁外直近の暗褐色土中に、深鉢の底部が正位に置かれていた。同一面に礫が数多く認められたが、その多くは5号住居の範囲内にあたる。土器の底部は、底径8.4cm、残存高6.6cmで、網代痕は認められない。

**掘り方** 認められない。

**所見** 42号住居の遺物とするのが妥当であろう。時期は中期後半に比定されよう。

#### 20区14号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** B-19グリッド

**確認状況** 後期の4号列石下で確認された。列石の礫を上位から順次取り外し、列石構築当初の段階で階段状の段差が確認された。これは礫をのせる際の

地行にあたるが、その段差の直下で当遺構の土器の一部が確認された。

**埋設状況** 土器よりやや大きな円形状の掘り方に、体部の4分の1を欠失した鉢を逆位に埋設していた。確認面は、地行で削平された地山の黄色砂質土面で、地山に礫は含まない。掘り方内は黒褐色土で埋め土されており、埋設土器の直上には列石の一部がのって、土器の底部を押し潰していた。

確認時は、埋設土器は約半分を欠損しており、その欠損部に20cmほどの割れた厚手の扁平礫が、あたかも土器に投げつけて割ったような状況で食い込み、その傍らに数片の破片が折り重なってこぼれ落ちていた。復元作業で、掘り方から出土した土器片の大半は接合し、口縁部から底部まで揃ってはいるが、体部の4分の1は見つからない。

使用された土器は、口径30cm、底径8cm、器高20.9cmの鉢で、口縁部には9個の山形突起が付き、胴部には渦巻文を5つ配した、後期堀之内1式土器である。

**掘り方** 円形状の掘り方が確認された。規模は長軸55cm、短軸50cm、深さ26cmである。

**所見** 4号列石に伴う埋設土器と判断する。出土状況から、4号列石構築に伴う最初期の祭祀的な遺構の可能性が想定される。時期は、使用された土器から後期堀之内1式期古段階に比定されよう。

#### 20区15号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** G-19グリッド

**確認状況** 中期後半代環状集落域の南側内縁で確認された。現況の道に関連して後世の削平が及んでおり、表土下が直接地山の黄色砂質土となっており、地山礫も多い。当遺構も地山の黄色砂質土面で確認された。周囲には数基の土坑が集中する。

**埋設状況** 円形状土坑の中央に、胴部上半と底部を欠失した大形の深鉢を正位に埋設していた。確認状況から、上部のかなりの部分を削平されているものと考えられる。使用された土器は、6単位文様で構

成された地元の唐草文系土器で、大きさは胴部直径36cm、残存高34.5cmである。土器は、土坑の底面にほぼついた状態で設置されている。

**伴出遺物** 特にない。

**掘り方** 地山の黄色砂質土を掘り込んだ円形状の土坑で、規模は長軸104cm、短軸91.2cmで、深さは16cmである。地山中の礫が所々に突出しており、土坑内と土器内は黒褐色土で埋め土されている。なお、埋め土中から小さな棒状円礫を使用した、小形石器加工用の台石（15埋-2）が1点出土している。

**所見** 円形状の土坑内に、胴部上半と底部を欠失した大形の深鉢を正位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期に比定されよう。

#### 20区16号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** B-20グリッド

**確認状況** 中期後半代環状集落域の南東内縁で確認された。礫を多く含む暗褐色土中にあり、東側に29号・30号が隣接する。

**埋設状況** 上方にのる長さ30cmの礫で、押し潰された状態で確認されており、調査時に大形深鉢の胴部中位を正位に埋設したものと判断された。周囲には割れた板石や円礫など数点が散布しているが、遺構の範囲を示すものが認められない。

整理作業で、直径36cm、残存高22.5cmの深鉢胴部が復元されたが、残存部は約半分しか残されていなかった。

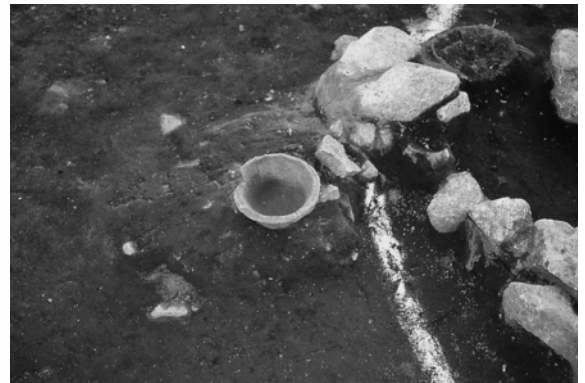
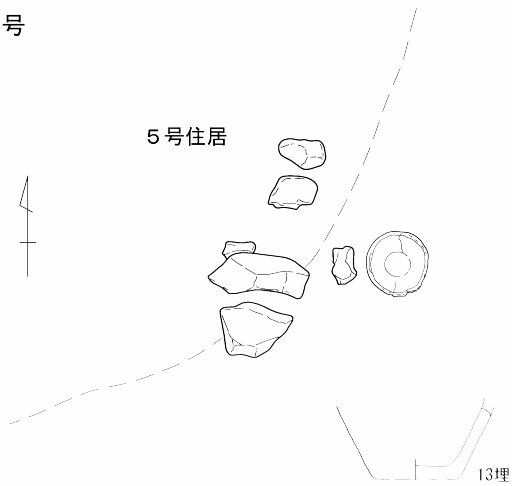
**伴出遺物** 他に出土遺物は認められなかった。

**掘り方** 確認できない。

**所見** 出土状況から、住居あるいは土坑に投棄されたものと判断する。埋設された土器が、これほど破損することはないだろう。時期は、中期加曽利E3式期に比定されよう。

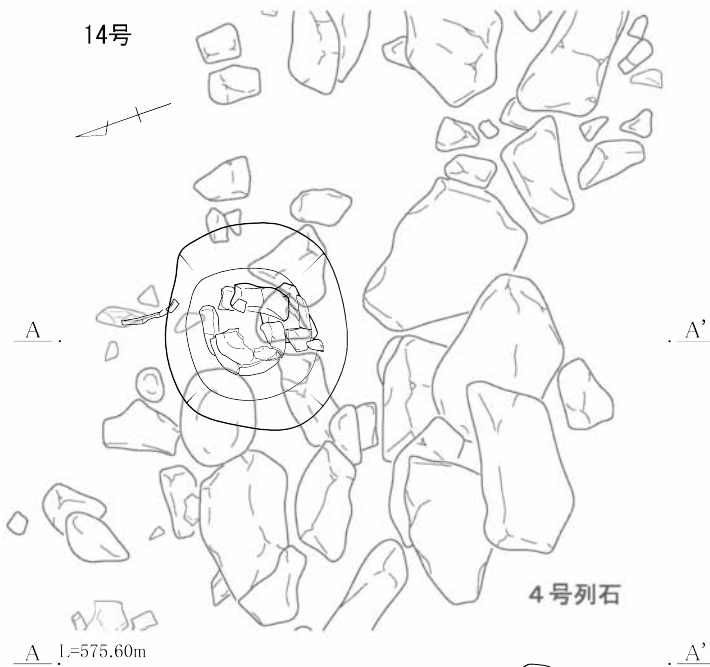
第3章 発見された遺構と遺物

13号



20区13号土器埋設遺構

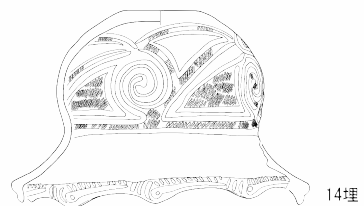
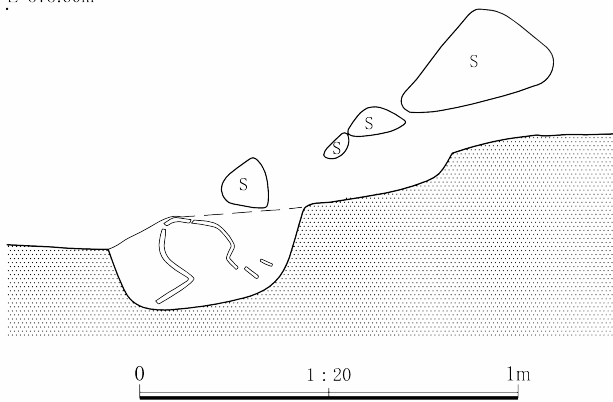
14号



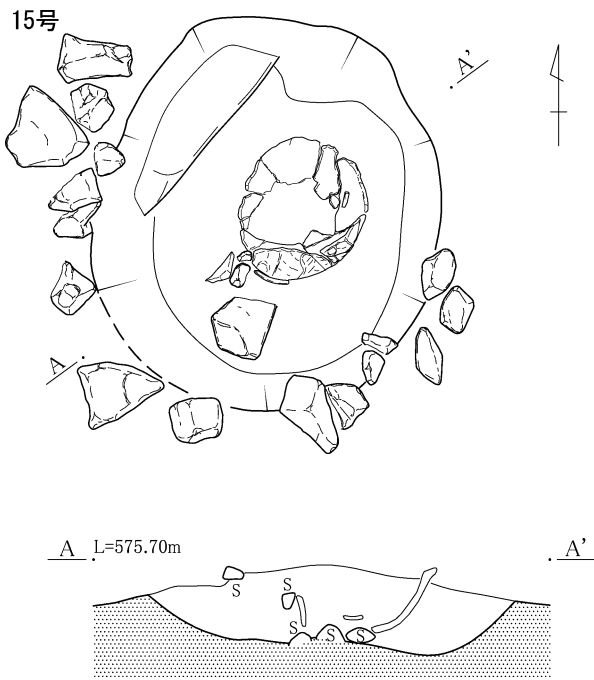
20区14号土器埋設遺構 確認状況



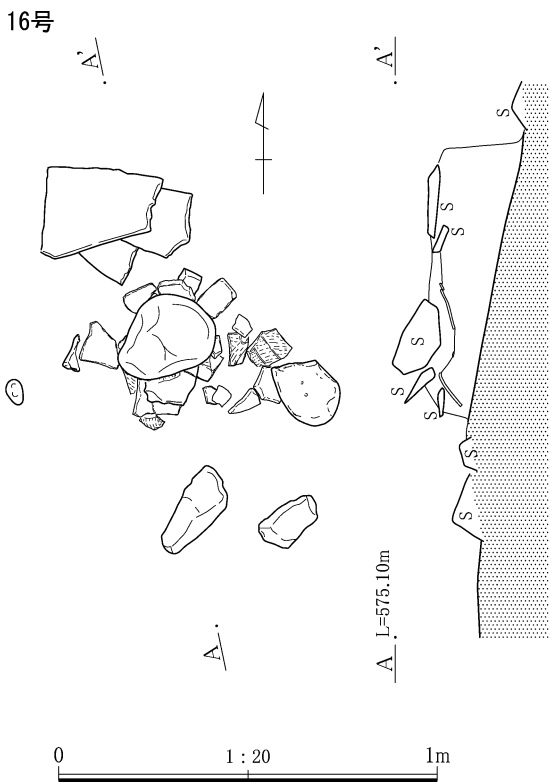
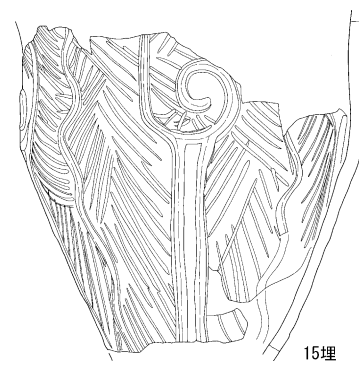
20区14号土器埋設遺構 埋設状況



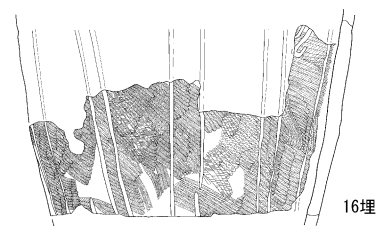
第39図 20区13号・14号土器埋設遺構



20区15号土器埋設遺構



20区16号土器埋設遺構



第40図 20区15号・16号土器埋設遺構

#### 20区18号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 G-12グリッド

**確認状況** 中期後半代の住居が密集する地区で確認された。当遺構は、中期加曽利E 3式期の102号・105号住居が重複する場所にあり、両住居の覆土を切り込んで構築している。周囲には、ほぼ同時期の20号・21号が近接する。

**埋設状況** 楕円形状の浅い土坑の中央に、口縁部と底部を欠失した深鉢（18埋-1）を、やや傾けて正位で埋設されていた。土器は土坑底面から7cmほど浮いた状態で設置されており、直上には長さ40cmの大きな棒状円礫が、あたかも墓標のように斜めについていた。

また、埋設土器の中とその周囲には数多くの土器破片が散在しており、接合の結果、それらは1個体の深鉢（18埋-2）と口縁部（18埋-3）に復元できた。18埋-2の口縁部は埋設土器の周囲から、底部は埋設土器の中からの出土である。18埋-3は、埋設土器の口縁部になる可能性がある。

埋設されていた土器（18埋-1）は、胴部直径推定38cm、残存高30cmの深鉢で、胴部の8割が残存していた。劣化が著しく、被熱痕跡の有無は不明である。文様は、断面三角形の微隆帯でH字状文を構成し、交点に円形の刺突を施す。復元された深鉢（18埋-2）は、口径推定27cm、高さ42.8cmで、全体の6割が残存していた。文様は、口縁部に押圧を施した隆線がめぐる。

**掘り方** 楕円形状の浅い土坑で、規模は長軸129cm、短軸91cm、深さは33cmである。大半は暗褐色土で埋め土されており、下層に薄く黒褐色土が認められた。焼土は認められない。

**所見** 楕円形状の土坑内に、口縁部と底部を欠失した深鉢を正位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 20区19号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 H-10グリッド

**確認状況** 当遺構も中期後半代住居密集地区にあり、中期加曽利E 4式期の97号住居の覆土を切り込み、床面を掘り抜いて構築されている。

**埋設状況** 円形土坑の中央に、胴下半部を打ち欠いた深鉢を、やや傾けて正位に埋設していた。土器は、土坑底面から12cmほど浮いた状態で設置されており、口縁部の一部は後世の攪乱で欠失している。

使用された土器は、口唇部が強く内折し、胴部に2段の渦巻文を構成するもので、口縁部をめぐる円形刺突列と、把手下に垂下する鎖状隆線が特徴的な、後期称名寺1式土器である。なお、土器に被熱痕跡は認められない。

**伴出遺物** 土坑埋め土中から土器片25点と剝片1点が出土している。19埋-2・3は、埋設土器と同時期の資料である。

**掘り方** 平面形が円形、断面形が鍋底状の土坑で、規模は長軸94cm、短軸89cm、深さは36cmである。埋め土は18号と同様に、上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。

**所見** 円形の土坑内に、胴下半部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。やや傾けた埋設状態や埋め土など、18号と良く似ている。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 20区20号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

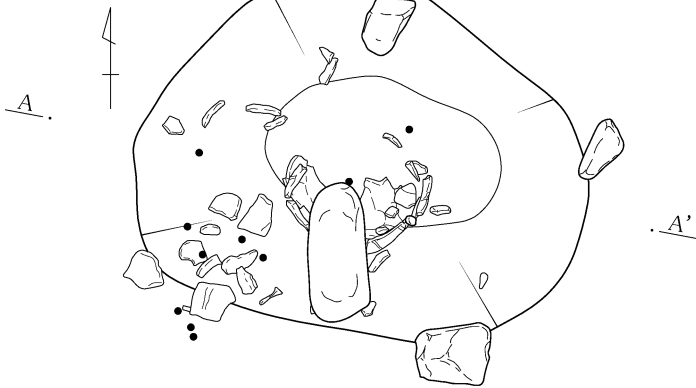
位置 G-13グリッド

**確認状況** 中期後半代の住居が密集する地区で確認された。当遺構は、中期加曽利E 3式期の102号・105号住居が重複する場所にあり、105号住居の覆土を切り込んで構築している。周囲には、ほぼ同時期の18号・21号が近接する。

**埋設状況** 直径75cmの円形状土坑の中央に、深鉢の胴下半部を正位で埋設していた。土器は土坑底面か

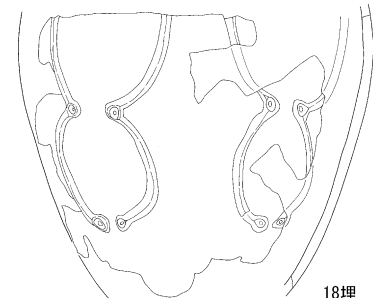
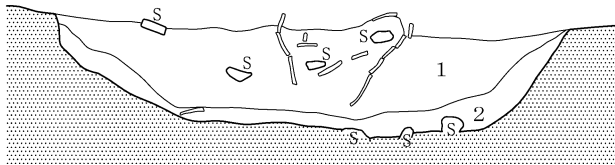


18号



20区18号土器埋設遺構

A L=579.40

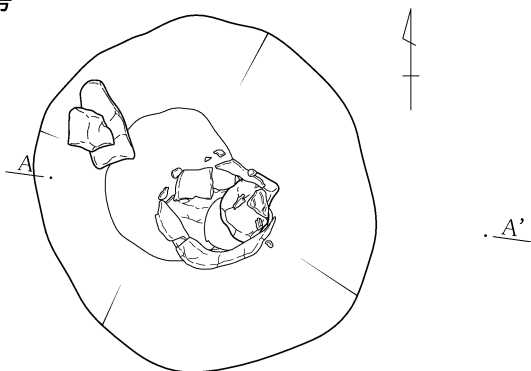


18埋

20区18号

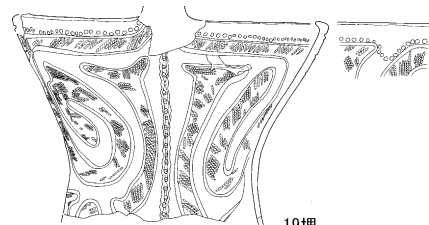
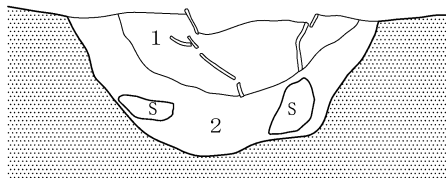
- 1、暗褐色土 軟質で炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土 軟質。

19号



20区19号土器埋設遺構

A L=579.60



19埋

20区19号

- 1、暗褐色土 軟質で炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土 軟質。

0 1:20 1m

第41図 20区18号・19号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

ら10cmほど浮いた状態で設置されており、攪乱等によりかなり崩れた状態で確認されている。土器上半部の一部は土器内面や周囲に散在しており、残存していたのは底部から19cmほどの部分に留まった。土器に比熱痕跡は認められない。なお、直径10cm前後の丸い磨石（20埋－4）が、埋設土器内の底に置いた状態で確認されている。

**掘り方** 円形状の浅い土坑で、規模は直径75cm、深さは24cmである。埋め土は隣接する18号と同じで、下層に黒褐色土があり、上層は暗褐色土で埋没している。なお、埋め土から少量の土器片が出土している。

**所見** 円形の土坑内に、深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。使用された部位は異なるが、土坑の形態や埋設土の状況、底面から浮いた埋設手法などは、18号・19号と良く似ており、土器内部の底に丸い凹石が置かれていた点では、19区3号と共通している。時期は、使用された土器から後期称名寺1式期に比定されよう。

#### 20区21号土器埋設遺構

**調査年度** 平成15年度

**位置** G-12グリッド

**確認状況** 中期後半代の住居が密集する地区で確認された。当遺構も、中期加曾利E3式期の102号・105号住居が重複する場所にあり、105号住居の覆土を切り込んで構築している。周囲には、ほぼ同時期の18号・20号が近接する。

**埋設状況** 105号住居覆土の暗褐色土面を掘り込んで、胴部上半を欠失した深鉢を正位で埋設していた。当遺構では、明確な掘り方は確認できなかった。使用された土器は、胴部がくの字に突出した鉢で、突出部の両側に円環状の把手が付く特異な器種である。上半部は後世の攪乱で失い、残存していたのは体部の半分ほどであった。

**伴出遺物** 埋設土器を中心に土器片10点と剝片1点が出土した。土器片のいくつかは埋設土器に接合し

たが、別個体の鉢の胴部2点（21埋－1・2）と深鉢の破片1点（21埋－3）を第51図に示した。

**掘り方** 土壌が一様で、掘り方は確認できなかった。

**所見** 特異な鉢を正位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。時期は、使用された土器から後期前半期に比定されよう。

#### 20区23号土器埋設遺構

**調査年度** 平成15年度

**位置** G-12グリッド

**確認状況** 中期後半代の住居が密集する地区で確認された。当遺構も21号の西側に隣接した位置にあり、中期加曾利E3式期の105号住居と重複する。確認面は礫を多く含む暗褐色土中にあり、数個の礫と埋設土器の上端部が同時に露出した状態で確認された。

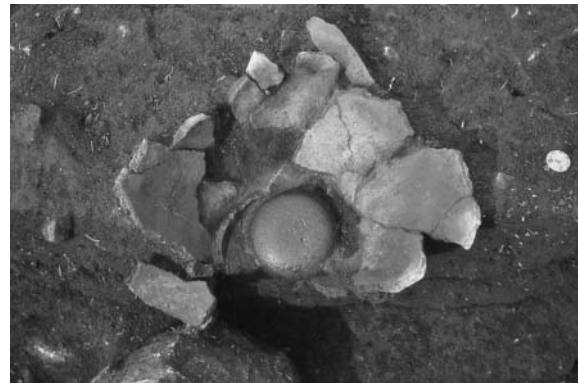
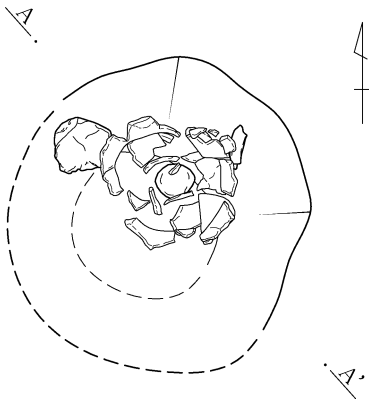
**埋設状況** 暗褐色土中に、口縁部と胴下半部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設した状態で確認された。土器の周囲には炉石状に設置された扁平礫が数個あり、土器の下には多量の礫が詰め込まれていた。

使用された土器は、平行隆線による懸垂文を6単位施し、その間を充填した縦位の条線に3本の平行沈線を加えた、地元の中期唐草文系土器で、上端部と内面に明瞭な比熱痕跡が認められた。

**掘り方** 礫の多い暗褐色土を掘り込んだ、楕円形状の掘り方が確認された。規模は長軸73.2cm、短軸64.8cm、深さは29cmで、下層に多量の礫があり、埋設土器はその上に設置されていた。

**所見** 口縁部と胴部下半を打ち欠いた深鉢を正位に埋設したもので、炉石と焼土は確認できないが、土器の上端部と内面に明瞭な比熱痕跡が認められることから、住居の炉と判断する。掘り方の状態から、長方形の石囲い炉が想定される。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期古段階に比定されよう。

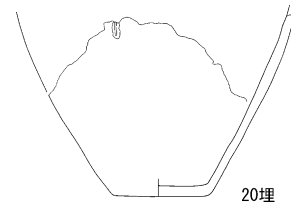
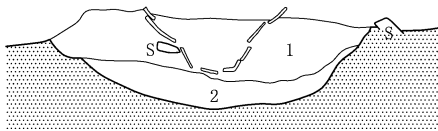
20号



20区20号土器埋設遺構

A L=579.30m

A'

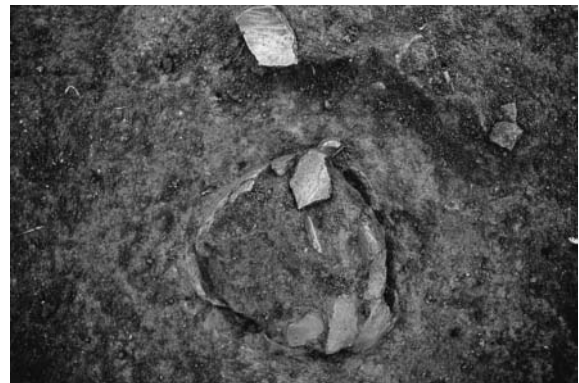
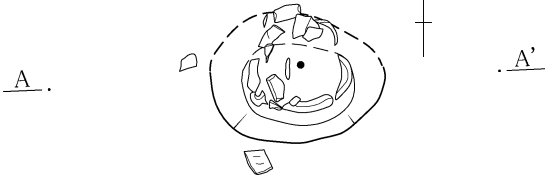


20埋

20区20号

- 1、暗褐色土 軟質で炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土 軟質。

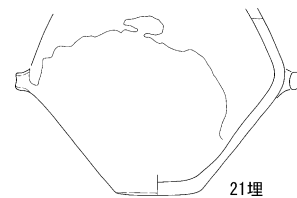
21号



20区21号土器埋設遺構

A L=579.30m

A'



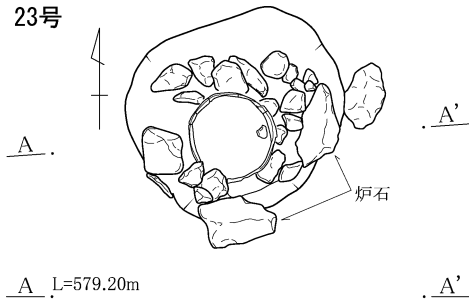
21埋

0 1:20 1m

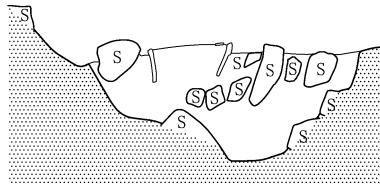
第42図 20区20号・21号土器埋設遺構

第3章 発見された遺構と遺物

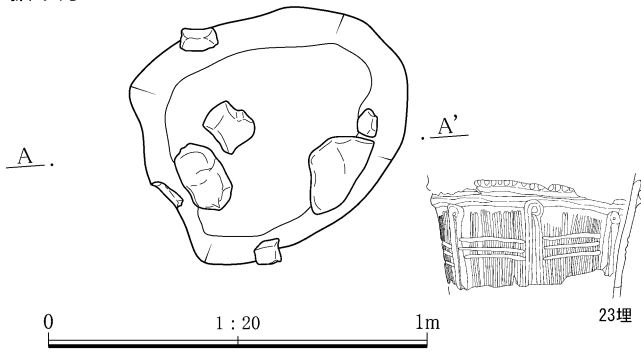
23号



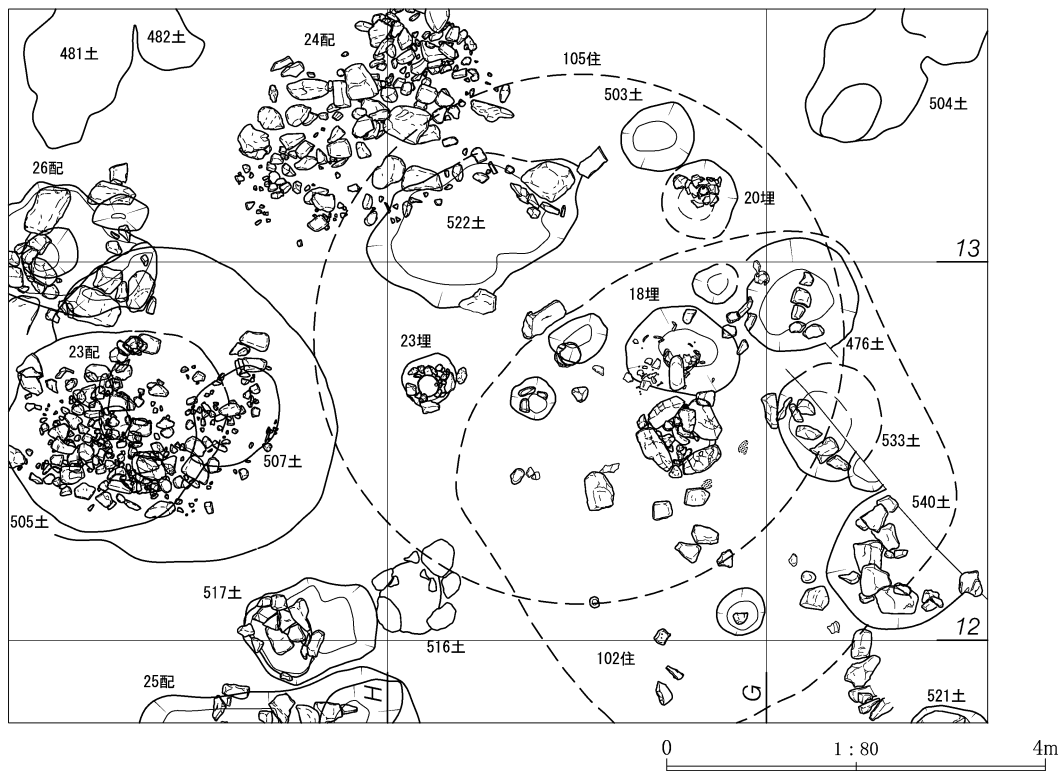
20区23号土器埋設遺構 確認状況



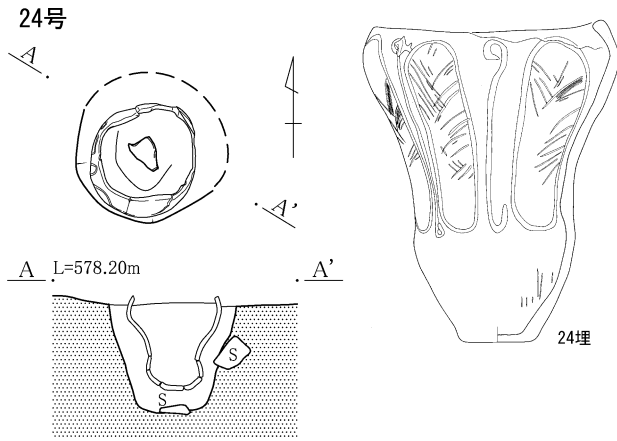
掘り方



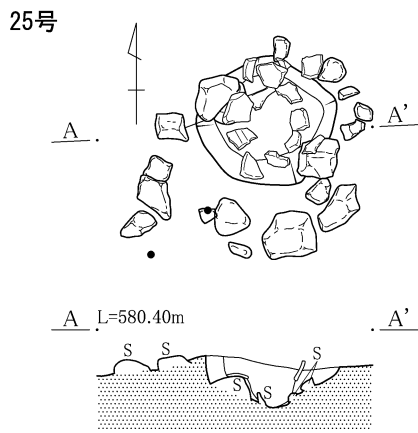
20区23号土器埋設遺構 埋設状況



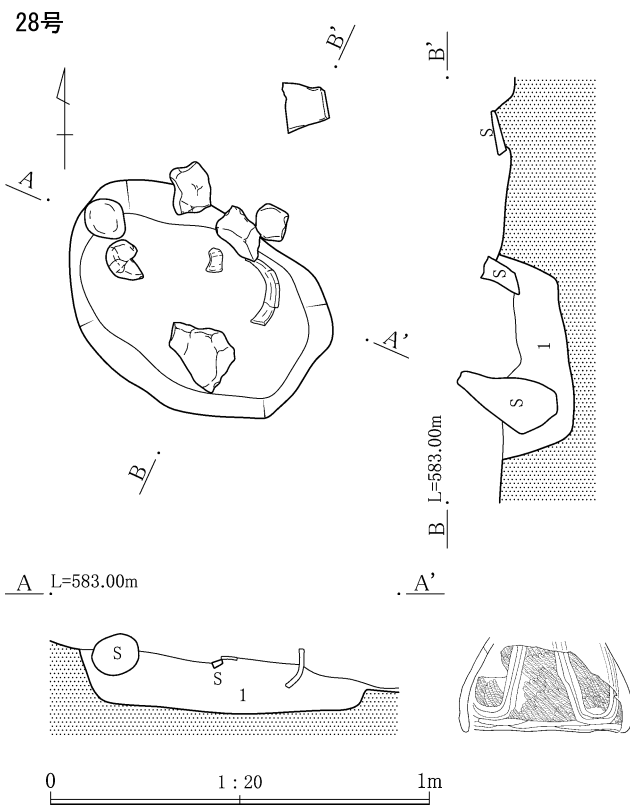
第43図 20区23号土器埋設遺構



20区24号土器埋設遺構



20区25号土器埋設遺構



20区28号土器埋設遺構

0 1:20 1m

第44図 20区24号・25号・28号土器埋設遺構

#### 20区24号土器埋設遺構

調査年度 平成15年度

位置 D-12グリッド

確認状況 中期後半代環状集落域にあり、94号・107号住居が重複する地点で確認された。この地区は地山の黄色砂質土が無いため、遺構の切り合い関係はほとんど見分けがつかない。当遺構は、107号住居の床面調査時に確認されたが、両住居との切り合い関係は不明である。

埋設状況 ほぼ完形の小形深鉢が正位に埋設されていた。掘り方は不明瞭だが、土器の大きさに合わせて礫を多く含む暗褐色土を掘り込み、掘り方はやや軟質の暗褐色土で埋められていた。

使用された土器は、胴部上半に綾杉状施文の条線を充填した楕円区画文と蕨手状沈線を交互に7単位施した地元の唐草文系土器で、器形や文様構成に関東の加曾利E式の流儀が看取される。土器の大きさは、口径23.7cm、器高34cmで、被熱痕跡は認められない。

掘り方 土壌の差はほとんどないが、地山中の礫が目安となった。直径34cmほどの円形を呈し、深さは32cmである。

所見 ほぼ完形の小形深鉢を正位に埋設したもので、関連する遺構が見あたらないことから、単独の墓としておきたい。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期新段階に比定されよう。

#### 20区25号土器埋設遺構

調査年度 平成16年度

位置 L-12グリッド

確認状況 20区中央部の遺構分布が少ない地区で確認された。現況の道に沿った地区で後世の攪乱がかなり及んでおり、遺構の分布も少ない。確認面は礫を多量に含む暗褐色土である。

埋設状況 暗褐色土中に、口縁部と胴部下半を欠失した深鉢が正位に埋設されていた。土器は、後世の攪乱等で破損して散在し、埋設状態を保っていたのは胴部半周分のみである。使用された土器は、地文

に縦位の条線を施した、加曾利E3式期の深鉢で、上半部は後世の攪乱で失われている。土器に明瞭な被熱痕跡は認められない。

掘り方 明瞭な掘り方は確認できなかった。

所見 口縁部と胴部下半を欠失した中形の深鉢を正位に埋設したもので、住居の炉あるいは埋甕の可能性が考えられるが、根拠に乏しく、確定できない。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期に比定されよう。

#### 20区26号土器埋設遺構

調査年度 平成16年度

位置 M-10グリッド

確認状況 20区の中央部、中期加曾利E3式期新段階の116号住居の南東端部にかかった位置にある。116号住居の調査が終盤になった頃に確認されたが、当遺構の確認面は116号住居より20cmほど低い位置にあり、中期後半代の住居の出入り口が南東側にあることも知られていなかったため、注意されなかった。当遺構は、116号住居石囲い炉の中央から南東側に2.8mの位置にあり、周囲には破碎した板石や円礫が散在していた。

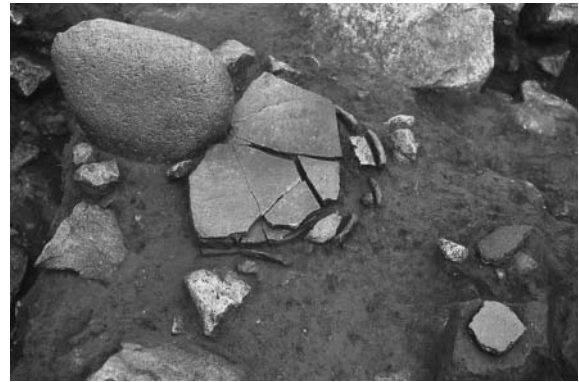
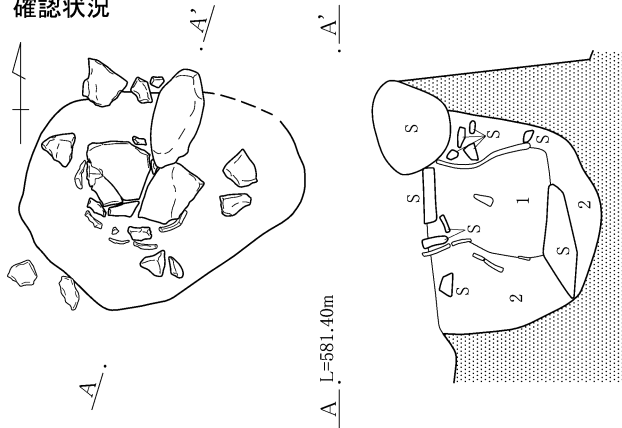
埋設状況 大小の礫を多量に含む淡褐色土を掘り込んで、胴部下半を打ち欠いた深鉢を逆位に埋設していた。土器の上面には30×20cmの板石で蓋がしており、その東側上面に28×20cmほどの扁平な円礫がのっていた。確認時に蓋石は割れていたが、それは扁平な円礫を投げつけた際に割れたものであることが、状況から看取される。掘り方底面から10cmほどの位置に26×19cmの厚手の板石が敷いてあり、土器はその上に据えられ、周囲には押さえのために小礫が数多く詰められていた。

使用された土器は、口径35.7cm、残存高27.4cmの地元の唐草文系土器で、口縁部には斜行沈線を施し、胴部には渦巻文や蕨手文を配した区画文様を6単位で構成する。なお、被熱痕跡は認められない。

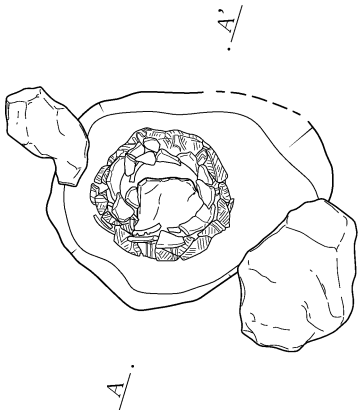
掘り方 楕円形のやや深い掘り方が確認された。規模は、長軸73.5cm、短軸61cm、深さは33cmで、淡



26号  
確認状況

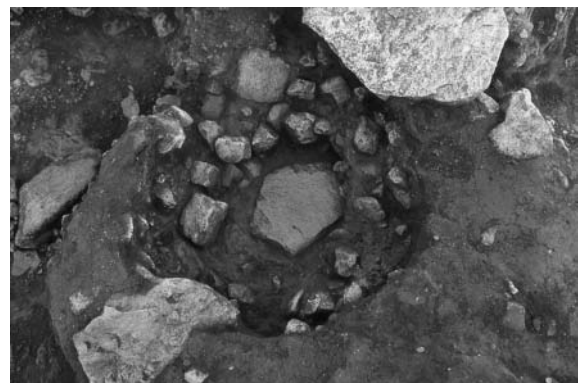
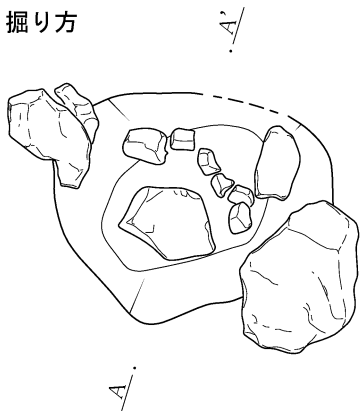


20区26号土器埋設遺構 確認状況



20区26号土器埋設遺構 埋設状況

掘り方

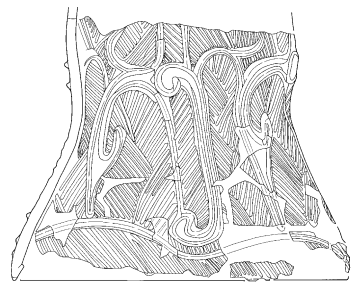


20区26号土器埋設遺構 土器下の板石

0 1:20 1m

20区26号

- 1、暗褐色土 軟質で炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土 軟質で地山黄色シルトを含む。



26埋

第45図 20区26号土器埋設遺構

### 第3章 発見された遺構と遺物

褐色土面から掘り込んで、底面は地山の黄色砂質土に達していた。埋め土は、小礫を多く含む暗褐色土で、埋設土器の内部は礫を含まない暗褐色土で埋設していた。なお、掘り方覆土中から石鏃1点、碎片1点が出土している。

**所見** 楕円形の掘り方内に、胴部下半を打ち欠いた中形の深鉢を逆位に埋設したもので、住居の出入り口部埋甕に該当すると判断される。時期は、使用された土器から、中期加曽利E3式期に比定されよう。

当遺構は、埋設土器の上面に蓋石、下面に板石を伴っており、埋設位置は116号住居の石囲い炉の中心から南東方向に2.8mにある。本遺跡の中期後半代住居の出入り口部埋甕は、斜面の傾斜に対して平行する南東側に設置される傾向にあり、当遺構は116号住居の出入り口部埋甕に該当する可能性が高い。

#### 20区28号土器埋設遺構

**調査年度** 平成16年度

**位置** N-5グリッド

**確認状況** 中期後半代の環状集落域から南側にはずれた高所で確認された。確認面は暗褐色土面で礫が多く点在するが、遺物の分布は少ない。南東側に111号・121号・122号住居が隣接する。

**埋設状況** 暗褐色土面に、胴部下半を欠失した小形深鉢の破片を、逆位に置いたような状態で確認された。周囲には大形礫や円礫、あるいは被熱痕跡がある割れた厚手の扁平礫が点在するが、焼土等は確認できない。

使用された土器は、中期加曽利E3式新段階の小形深鉢で、残存していたのは胴部上半の約3分の1にすぎない。大きさは、口径推定17.4cm、残存高は8.9cmほどのもので、口縁部の一部に被熱痕跡が認められた。

**掘り方** 図では炉状の掘り方となっているが、土壌が一樣で、明瞭な掘り方は確認できなかった。

**所見** 土器の一部と周囲の礫の一部に被熱痕跡は認められたが、埋設土器とは判断しがたい。

#### 20区29号土器埋設遺構

**調査年度** 平成13年度

**位置** A-21グリッド

**確認状況** 中期後半代の環状集落域の南東部内縁で確認された。後期の4号列石の北側にあたり、楕円形の浅い土坑が集中するなかの一つが当遺構である。確認面は暗褐色土中で、449号・450号土坑と一部を重複するが、切り合い関係は不明である。確認当初は、暗褐色土中に逆位の土器と周囲の礫が分布しており、住居を想定していたが、炉が見つからず、浅い楕円形の土坑内に埋設してあることが判明し、447号土坑とした。

なお、当遺構は横壁中村遺跡(6)土坑編では447号土坑として扱ったが、土器埋設遺構でも同種の遺構が存在するため、本編では29号として併せて掲載することにした。

**埋設状況** 楕円形の土坑の北側寄りに、胴部下半を欠失した大形の深鉢を逆位に埋設していた。土器は土坑の底面から10cmほど浮いた状態で設置されており、胴部は後世の攪乱で欠失している。

使用された土器は、口縁部直径40cmの大形深鉢で、残存していたのは口縁部の13cm幅の部位だけである。文様は、凹線による弧状文様で構成される、中期加曽利E3式新段階の土器で、関東の流儀でつくられている。土器に被熱痕跡は認められない。

**掘り方** 南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑で、規模は長軸125cm、短軸95cmで、確認面からの深さは16cmであるが、土器の上端までは27cmで、本来は30cm以上の深さがあったものと想定される。土坑内は暗褐色土で埋設しており、焼土は認められない。

**所見** 楕円形の土坑に、大形の深鉢を逆位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。土坑の規模や埋設手法は18区14号と共通しており、興味深い。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期新段階に比定されよう。

**20区30号土器埋設遺構**

**調査年度** 平成13年度

**位置** A-21グリッド

**確認状況** 29号と一連の土坑群中にあり、29号の北東1.5mで確認された。確認面は同様に、地山の黄色砂質土の直前面で楕円形の土坑の形状が判明し、448号土坑とした。なお、東側の一部を451号土坑と重複し、それを切っていると判断した。

当遺構も29号と同様に土坑編では448号土坑として扱ったが、本編では30号として併せて掲載することにした。

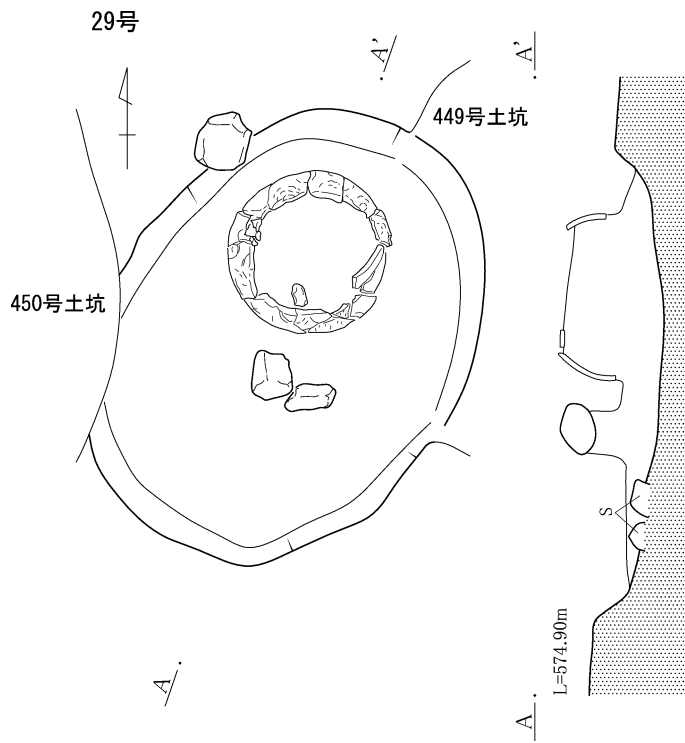
**埋設状況** 楕円形の土坑内に大形の扁平礫を中心に礫を集積し、その南側に口縁部と胴部下半を欠失した中形の深鉢を逆位に埋設していた。礫と土器は土坑の底面から10cmほど浮いた状態で設置されており、土器の胴部下半は後世の攪乱で欠失している。土坑は、確認面から17cmほどの深さだが、土器の端部までは30cmほどあり、本来は30cm以上の深さがあったものと想定される。

埋設に使用された土器は、胴部に無文懸垂帯を施す中期加曾利E3式新段階の土器で、関東の流儀でつくられている。また、礫群中から赤色塗彩が施された浅鉢の大形破片（30埋-2）と、扁平礫を利用した台石（30埋-3）が出土している。

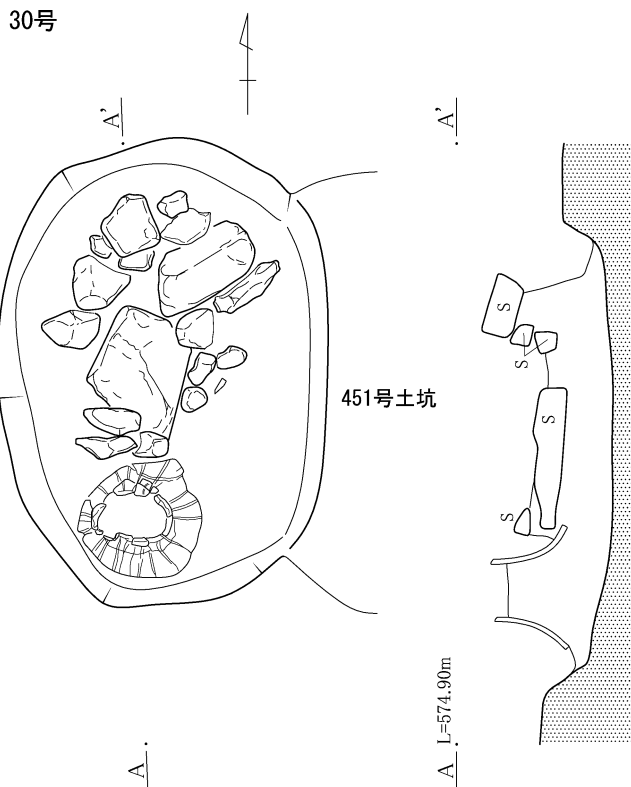
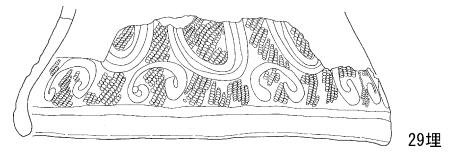
**掘り方** 南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑で、規模は長軸120cm、短軸83cmで、確認面からの深さは17cmであるが、土器の上端までは30cmで、本来は30cm以上の深さがあったものと想定される。土坑内は暗褐色土で埋没しており、焼土は認められない。

**所見** 楕円形の土坑に、大形礫と共に深鉢を逆位に埋設したもので、墓の可能性が強いと判断する。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式新段階に比定されよう。

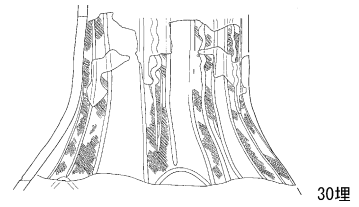
第3章 発見された遺構と遺物



20区29号土器埋設遺構

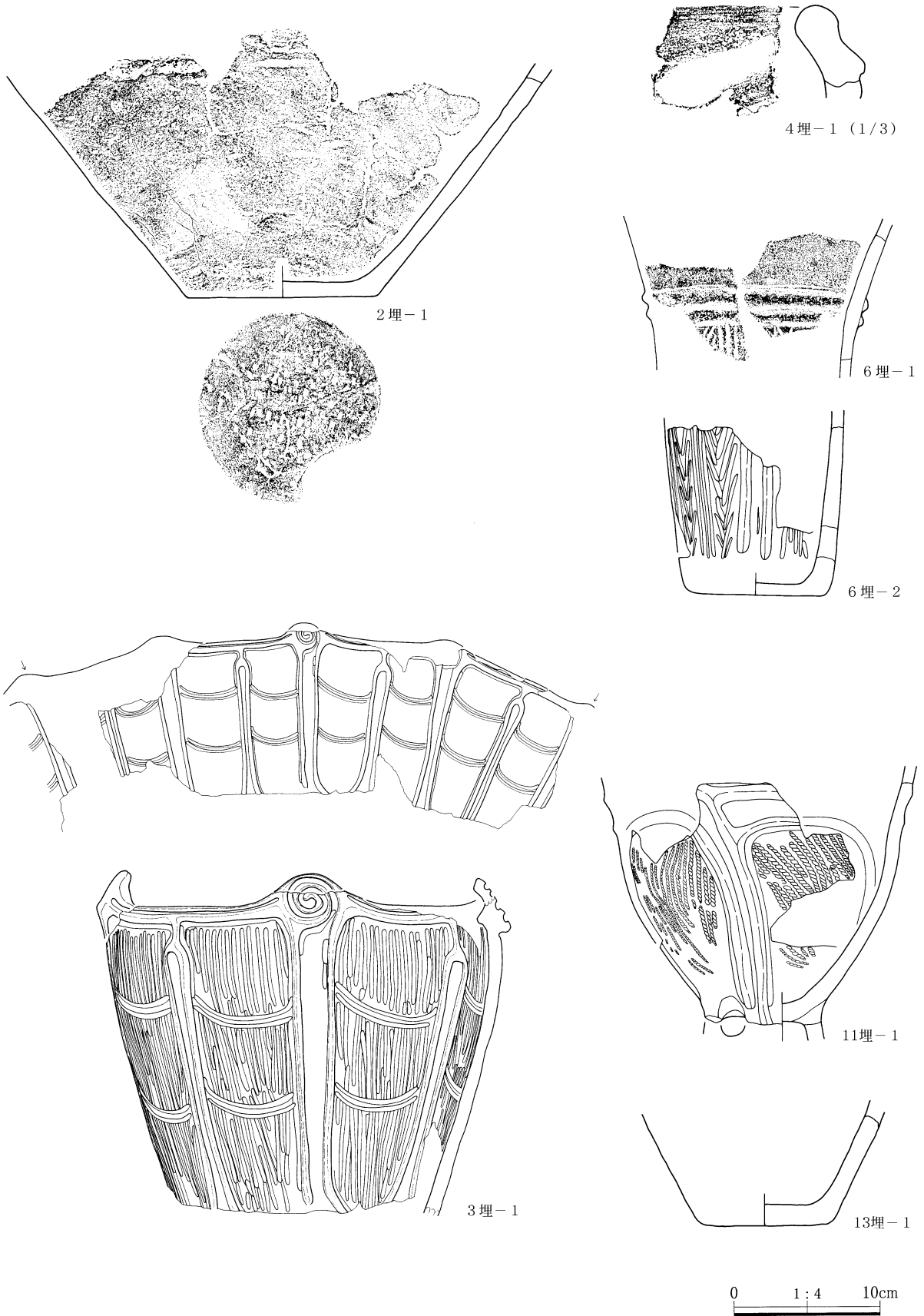


20区30号土器埋設遺構

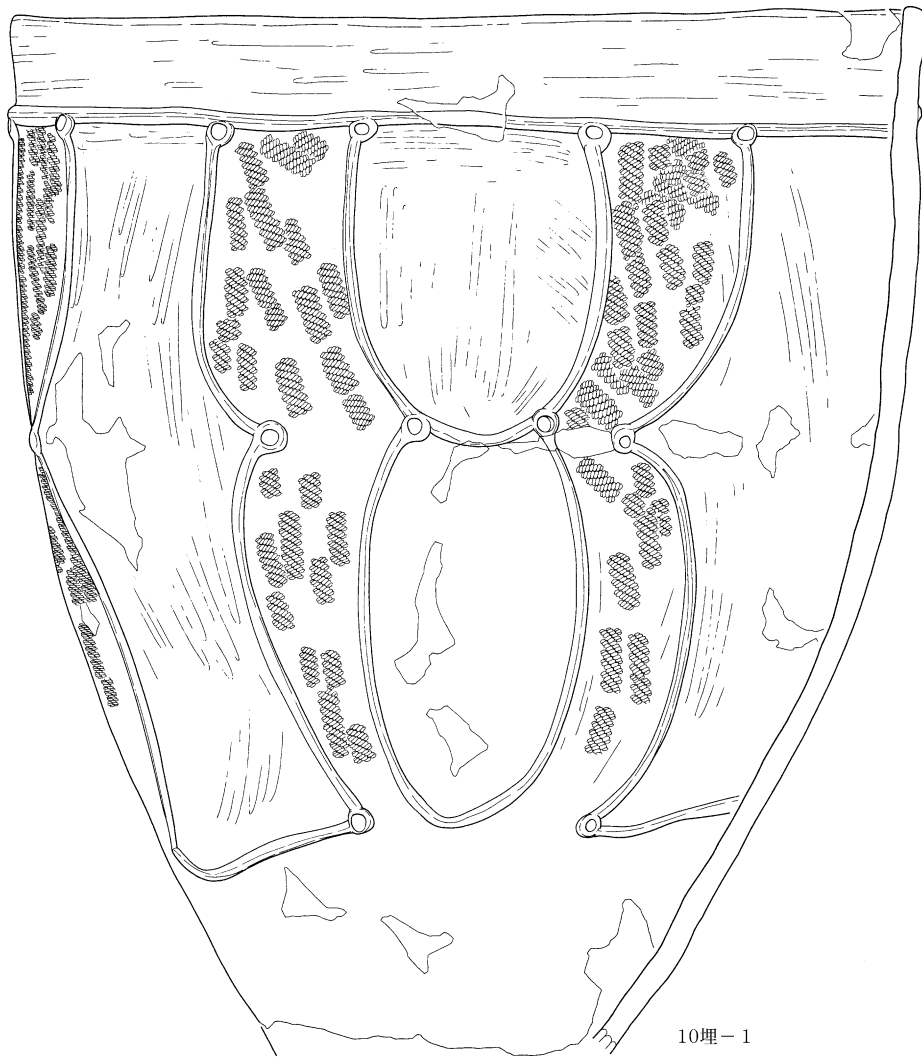
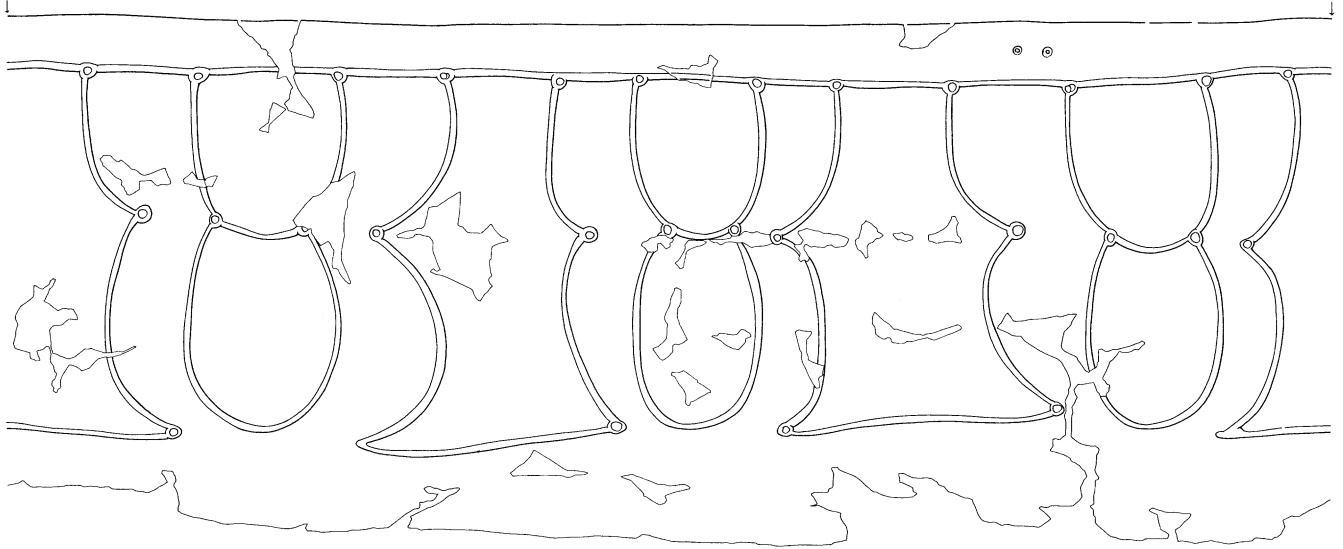


0 1:20 1m

第46図 20区29号・30号土器埋設遺構



第47図 20区土器埋設遺構出土遺物 (2・3・4・6・11・13号)

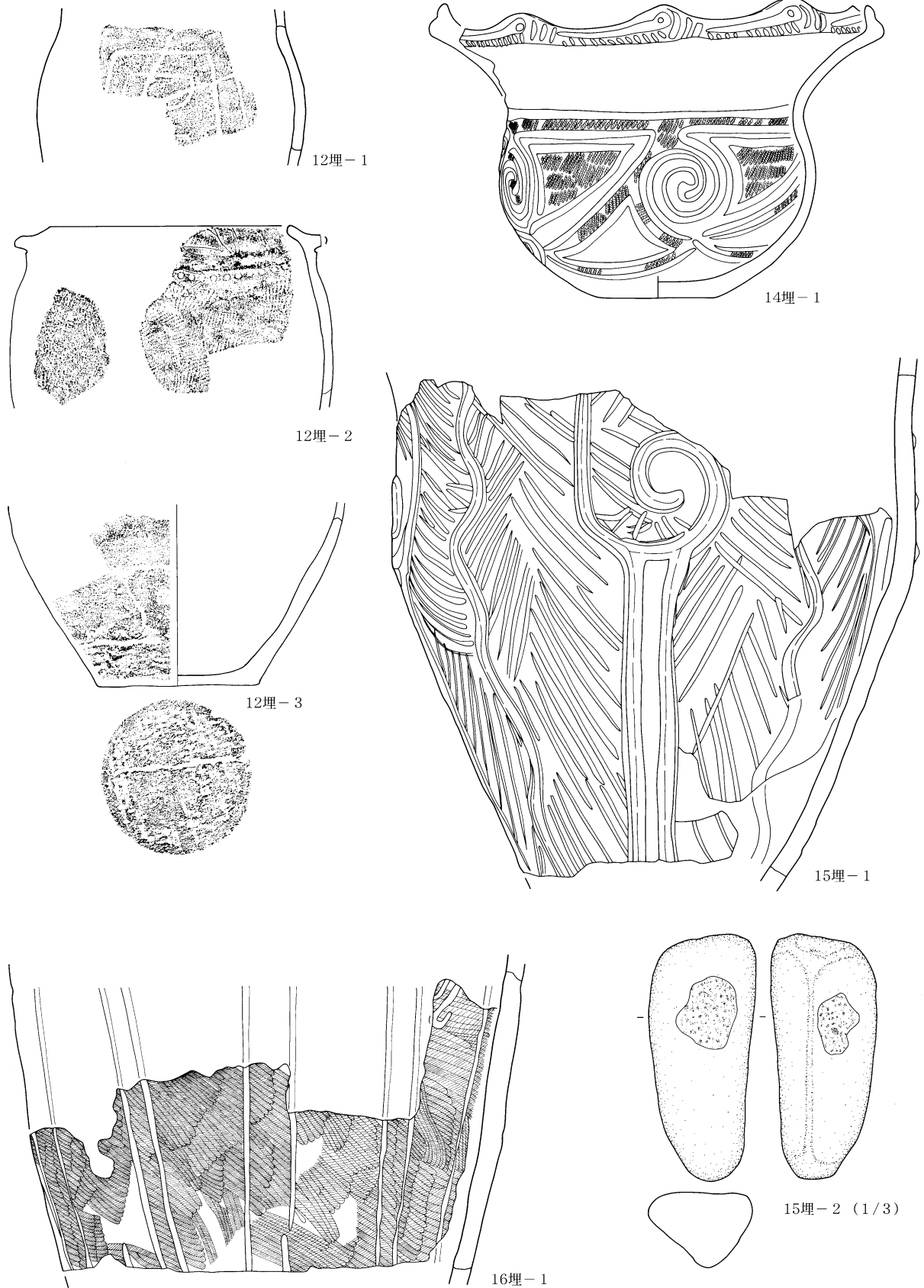


10埋-1

0 1:4 10cm

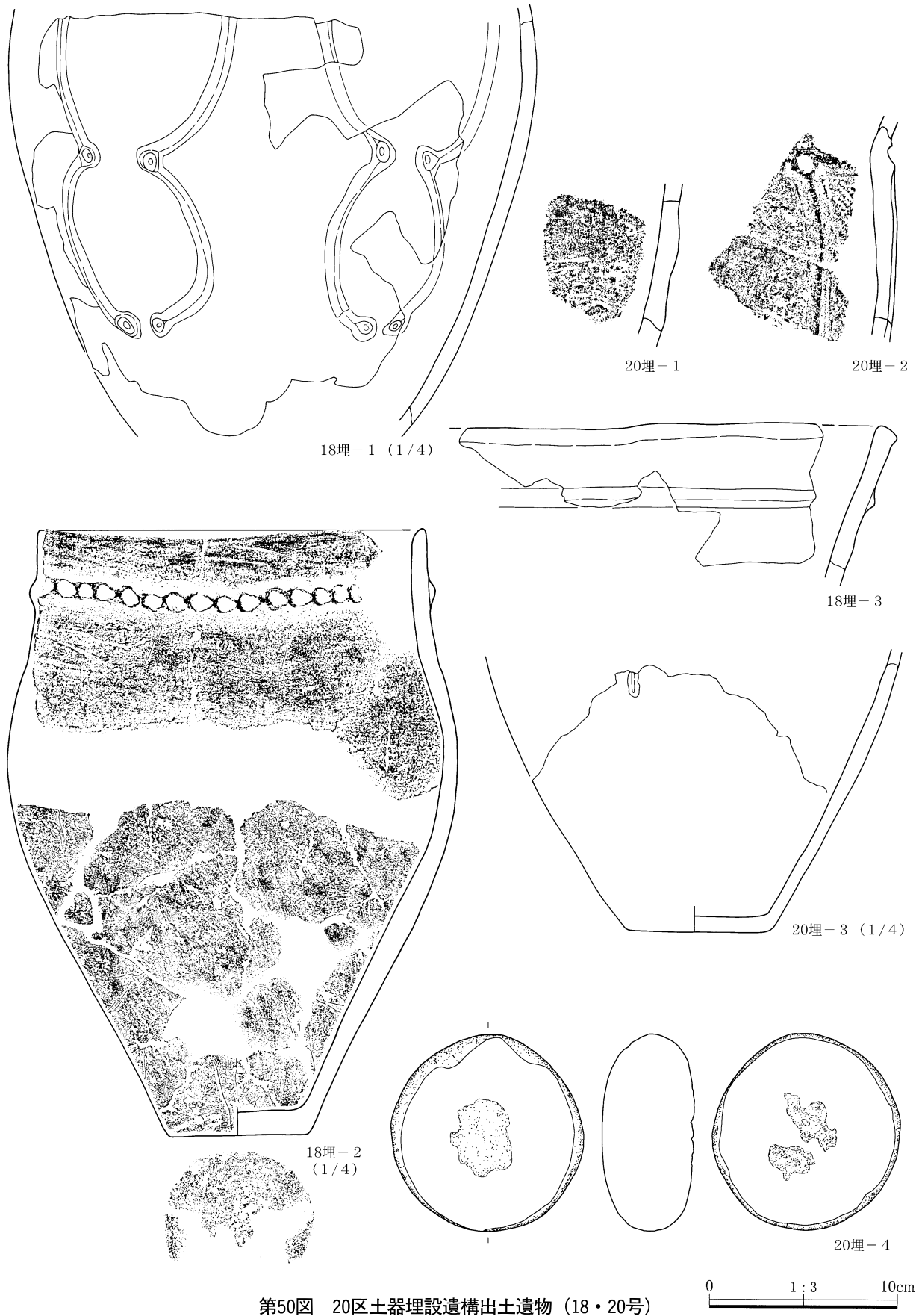
第48図 20区土器埋設遺構出土遺物 (10号)



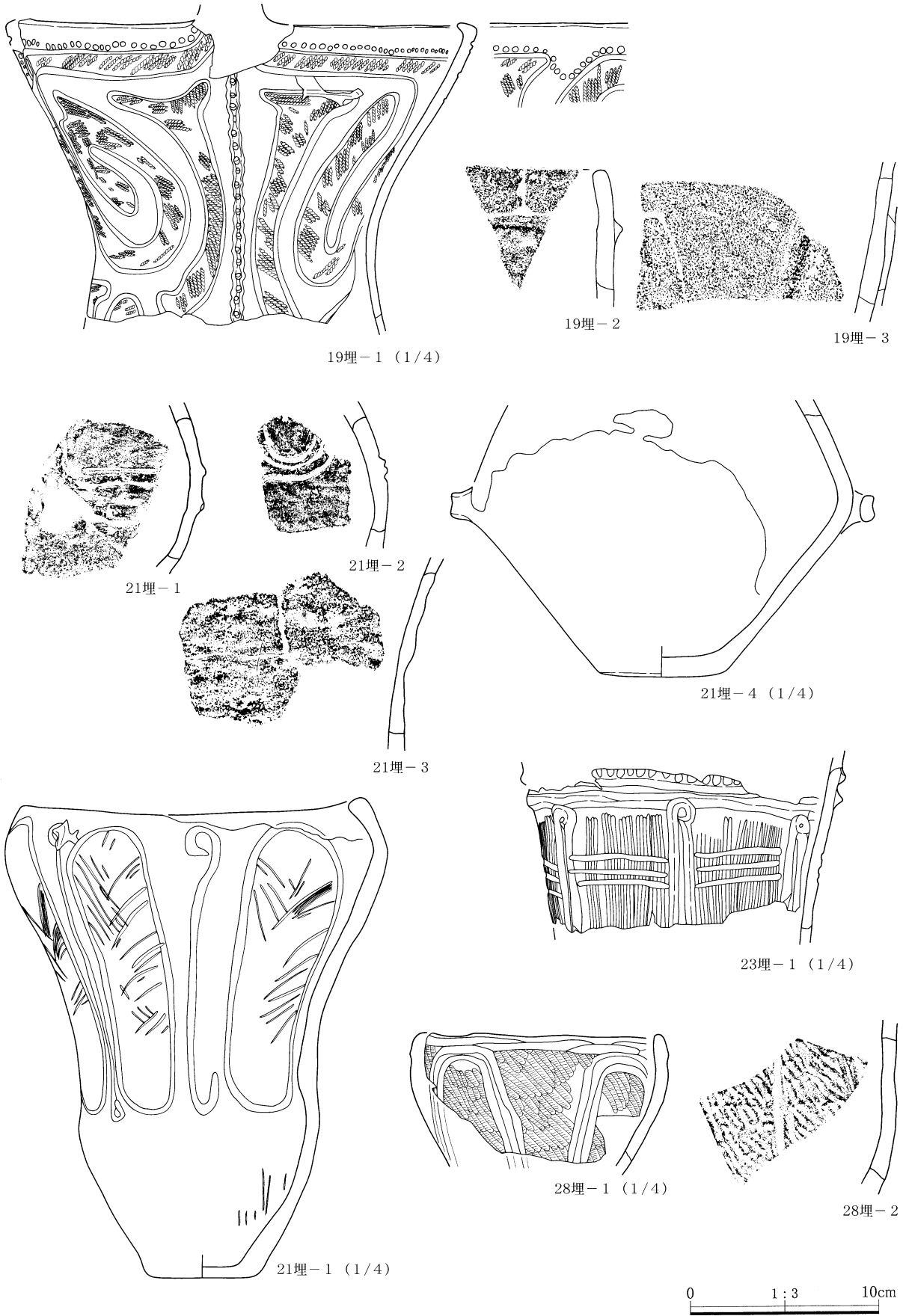


第49図 20区土器埋設遺構出土遺物 (12・14・15・16号)

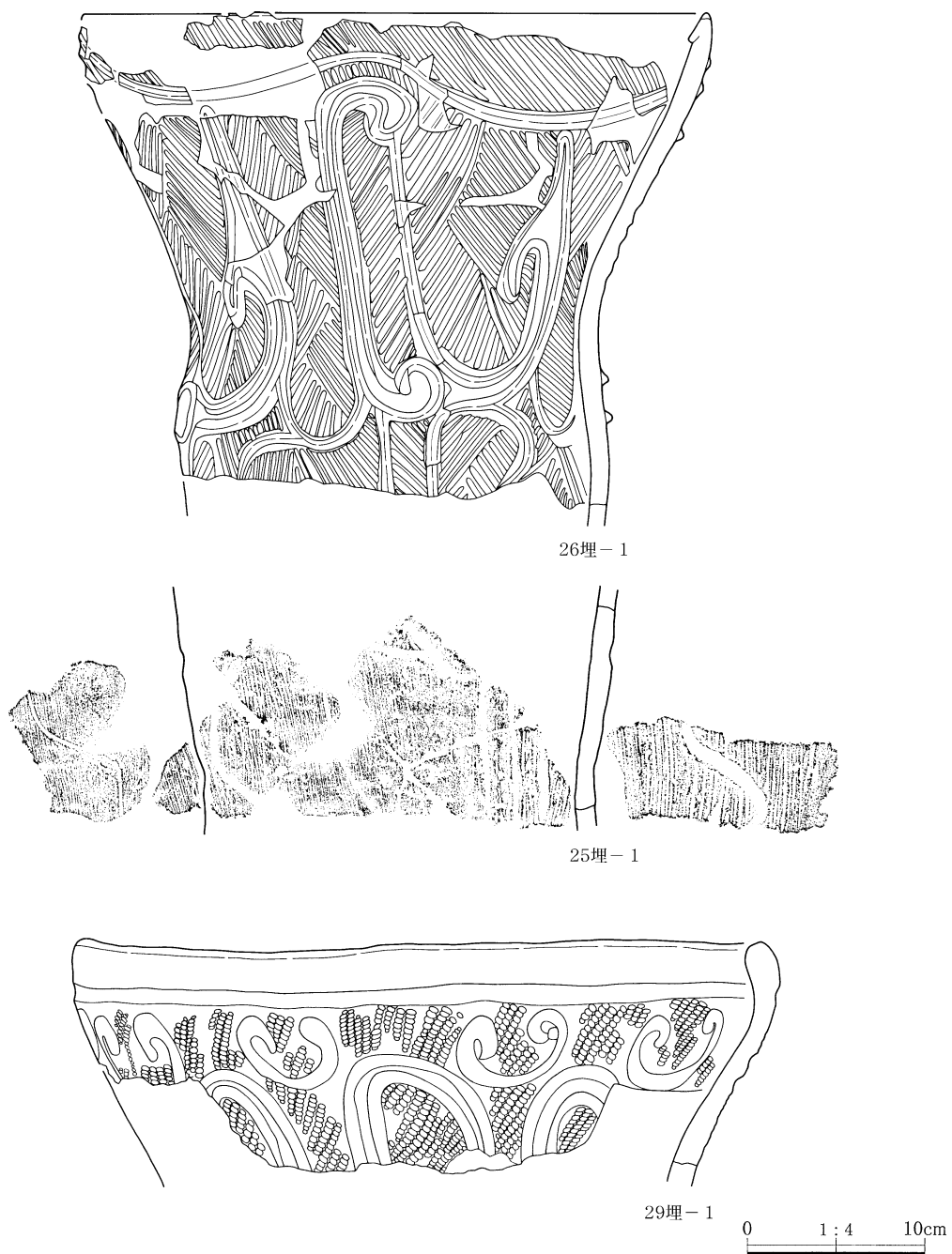
0 1:4 10cm



第50図 20区土器埋設遺構出土遺物 (18・20号)



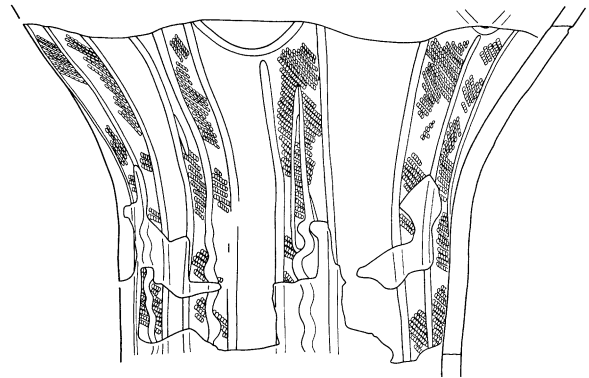
第51図 20区土器埋設遺構出土遺物 (19・21・23・24・28号)



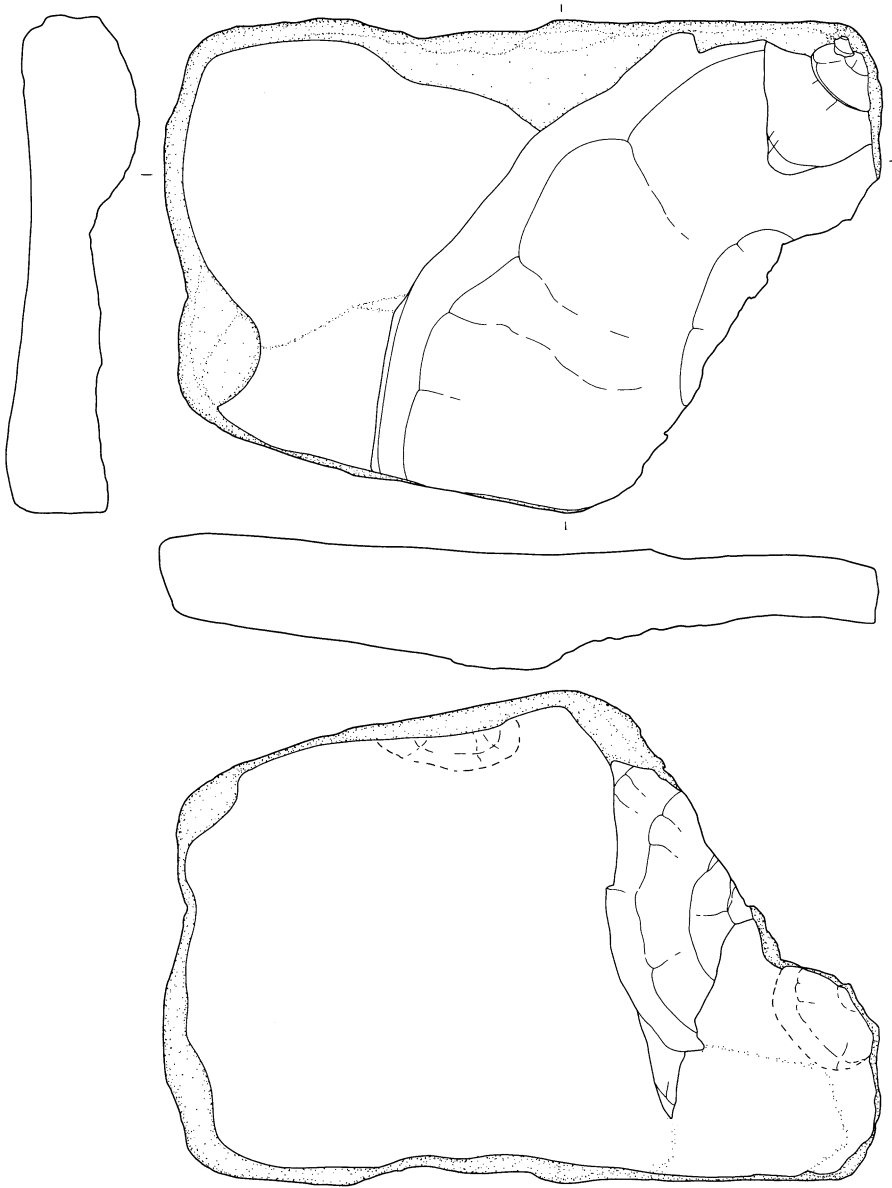
第52図 20区土器埋設遺構出土遺物 (25・26・29号)



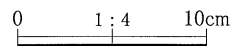
30埋-2 (1/3)



30埋-1



30埋-3



第53図 20区土器埋設遺構出土遺物 (30号)

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 28区1号土器埋設遺構

調査年度 平成8年度

位置 F-1グリッド

**確認状況** 本遺跡の東側を画す東沢の崖上にある。この地区は、地山土中に大量の礫を含んでおり、当遺構も礫群中で確認された。確認面は暗褐色土面で、同一面で土器の出土はほとんど認められない。

**埋設状況** 礫群中に、胴部下半を欠失した小形の深鉢を正位に埋設していた。土器の上端部と礫群の上端部はほぼ同レベルで、その上層は後世の耕作等で削平されている。埋設に使用された土器は、地元の唐草文系深鉢で、現在行方不明中のため、図示できない。所在が判明した段階で提示する予定である。

なお、焼土等の伴出は認められない。

**掘り方** 明確な掘り方は確認されていない。

**所見** 胴部下半を欠失した小形の深鉢を正位に埋設したもので、住居の炉に伴う土器の可能性が高いと判断する。礫群の上面に床があった可能性が高く、石囲いや出土土器は削平されてしまったのではないか。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期に比定されよう。

#### 28区2号土器埋設遺構

調査年度 平成8年度

位置 G-1グリッド

**確認状況** 1号の西側6mほどのところに位置する。周囲には列石や住居が展開するが、当遺構はこれらの調査が終了し、地山の黄色砂質土面での最終確認で検出された。当初は、地山土から1片の土器片がわずかに覗いている状態だったが、掘り出してみると、数個体の土器が重なっていた。地山土中には、小礫が数多く含まれている。

**埋設状況** 地山の黄色砂質土を掘り込んで、4個の大きな土器破片を重ねた状態で縦位に埋納していた。土器は、小形深鉢の口縁部片と胴部片、および2個体の浅鉢の体部片で、通常の埋設土器とは異なる。小形の深鉢は勝坂式の様式を色濃く残す土器で、浅鉢2個体は加曾利E1式期に該当するであろう。

**掘り方** 一辺40cmほどの方形状の掘り方で、深さは18cmである。土器は北側に寄せて埋納され、地山の黄色砂質土と暗褐色土の混土で埋め土されていた。焼土等は認められない。

**所見** 掘り方の形状と規模から、炉の可能性も考えられるが、他の状況証拠が乏しく、断定できない。

確認時には一片の土器しか見えていないことから、掘り方内に埋納することが意図されていたのかもしれない。通常の埋設土器とは異なっており、特殊な埋納遺構の可能性もある。時期は、使用された土器から中期加曾利E1式期に比定されよう。

#### 28区3号土器埋設遺構

調査年度 平成8年度

位置 K-3グリッド

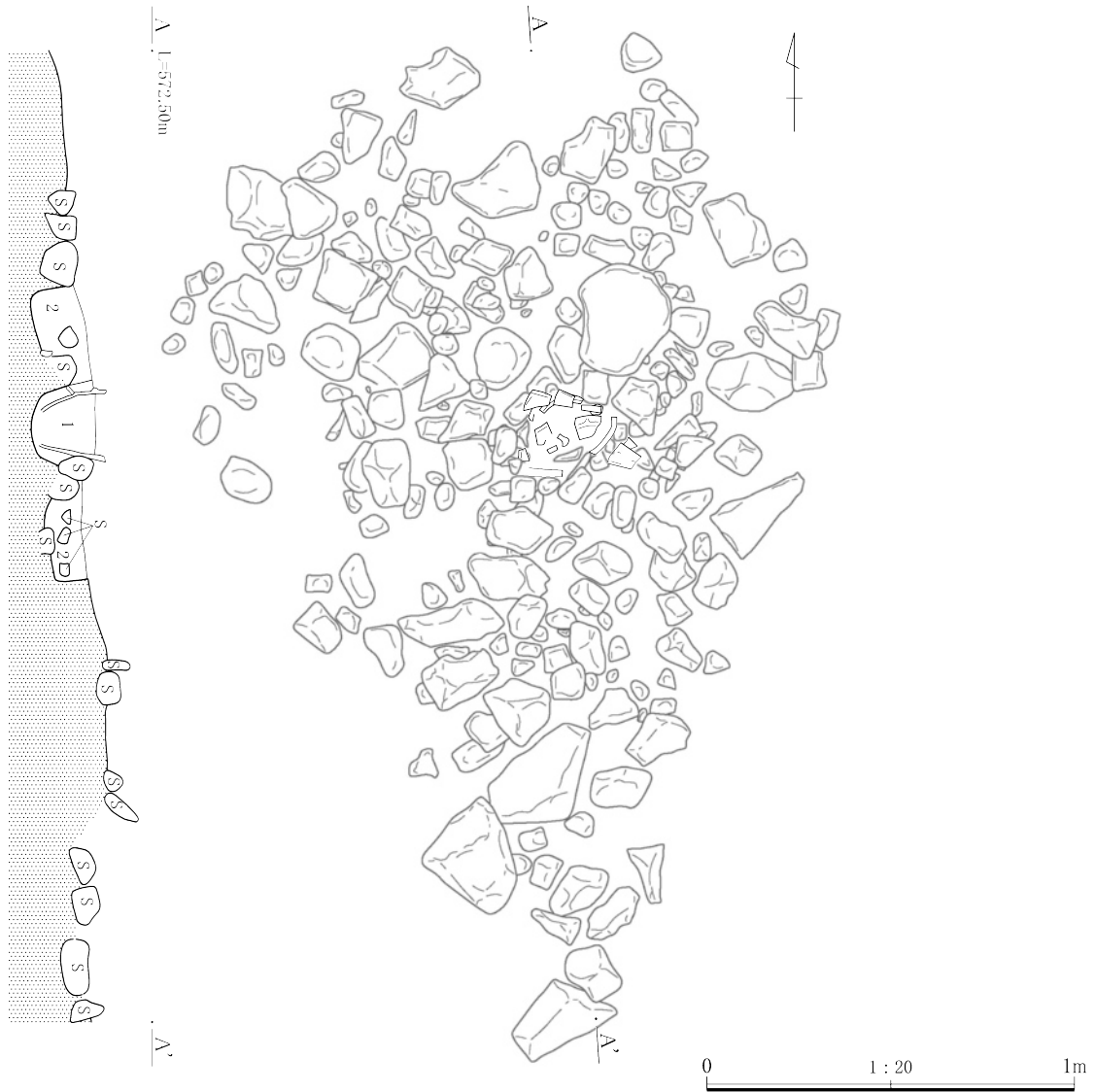
**確認状況** 吾妻川に寄った北側に位置する。この地区は暗褐色土が厚く堆積しており、所々に大形礫が点在する。上面を後世の耕作等で削平されたためか、遺構・遺物の分布も少ない。

**埋設状況** 暗褐色土中に、胴部上半を欠失した小形の深鉢を正位に埋設していた。土器の上端部は後世の削平で欠落しており、残存部は22cmほどである。使用された土器は、縦位の撚糸文を地文に、隆帯と平行沈線で区画文を構成する、中期加曾利E1式土器で、内面に弱い被熱痕跡が認められた。

**掘り方** 明瞭ではないが、直径35cm、深さ15cmほどの円形状の掘り方が認められた。また、掘り方付近から台付土器の台部(3埋-2)が出土している。

**所見** 胴部上半を欠失した小形深鉢を正位に埋設したもので、住居の炉に伴う土器の可能性が高いと判断する。土器の上端部は削平されており、住居の床面は失われている可能性が高い。時期は、使用された土器から、中期加曾利E1式期古段階に比定されよう。





28区1号

- 1、暗褐色土 硬質で焼土・炭化物を少量含む。
- 2、暗褐色土 軟質で地山黄色シルトを含む。



28区1号土器埋設遺構 確認状況

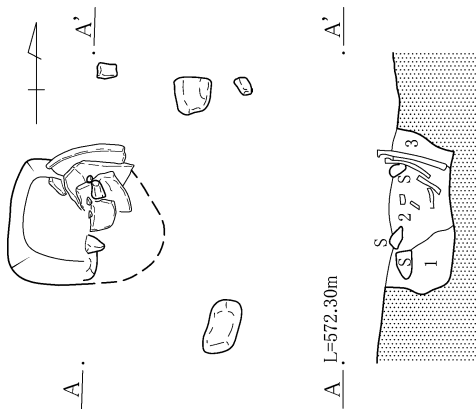


28区1号土器埋設遺構 埋設状況

第54図 28区1号土器埋設遺構

第3章 発見された遺構と遺物

2号



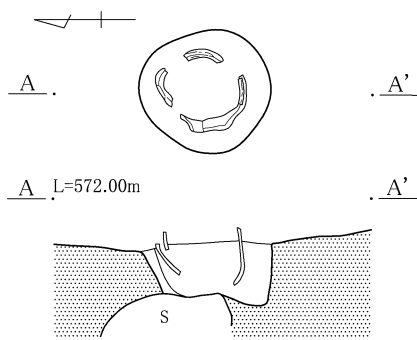
28区 2号土器埋設遺構

28区 2号

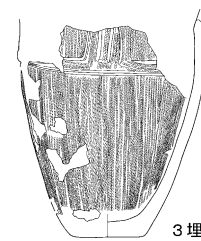
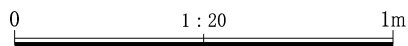
- 1、暗褐色土と地山黄色シルトの混土。
- 2、暗褐色土 やや軟質。
- 3、暗褐色土 やや硬質。



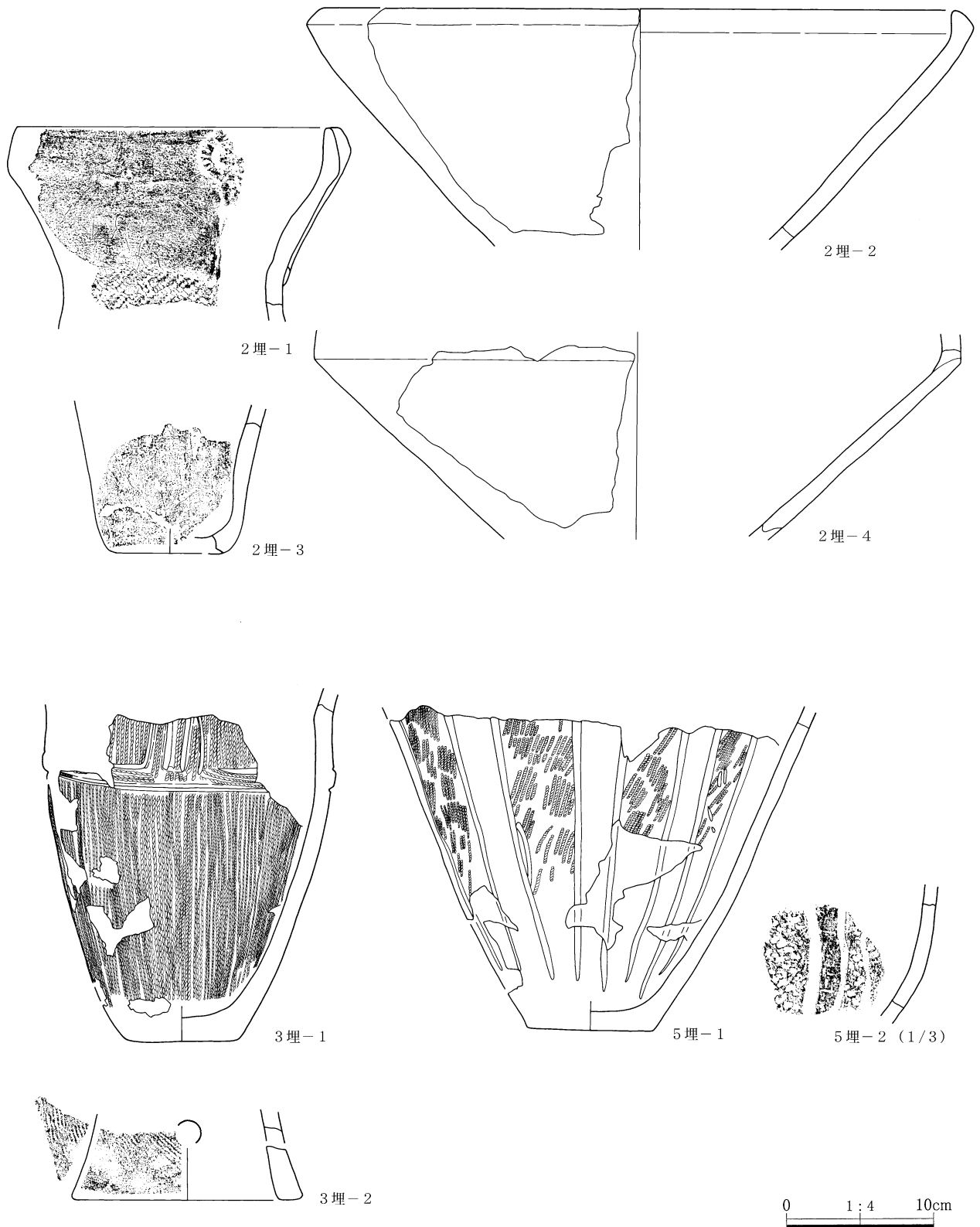
3号



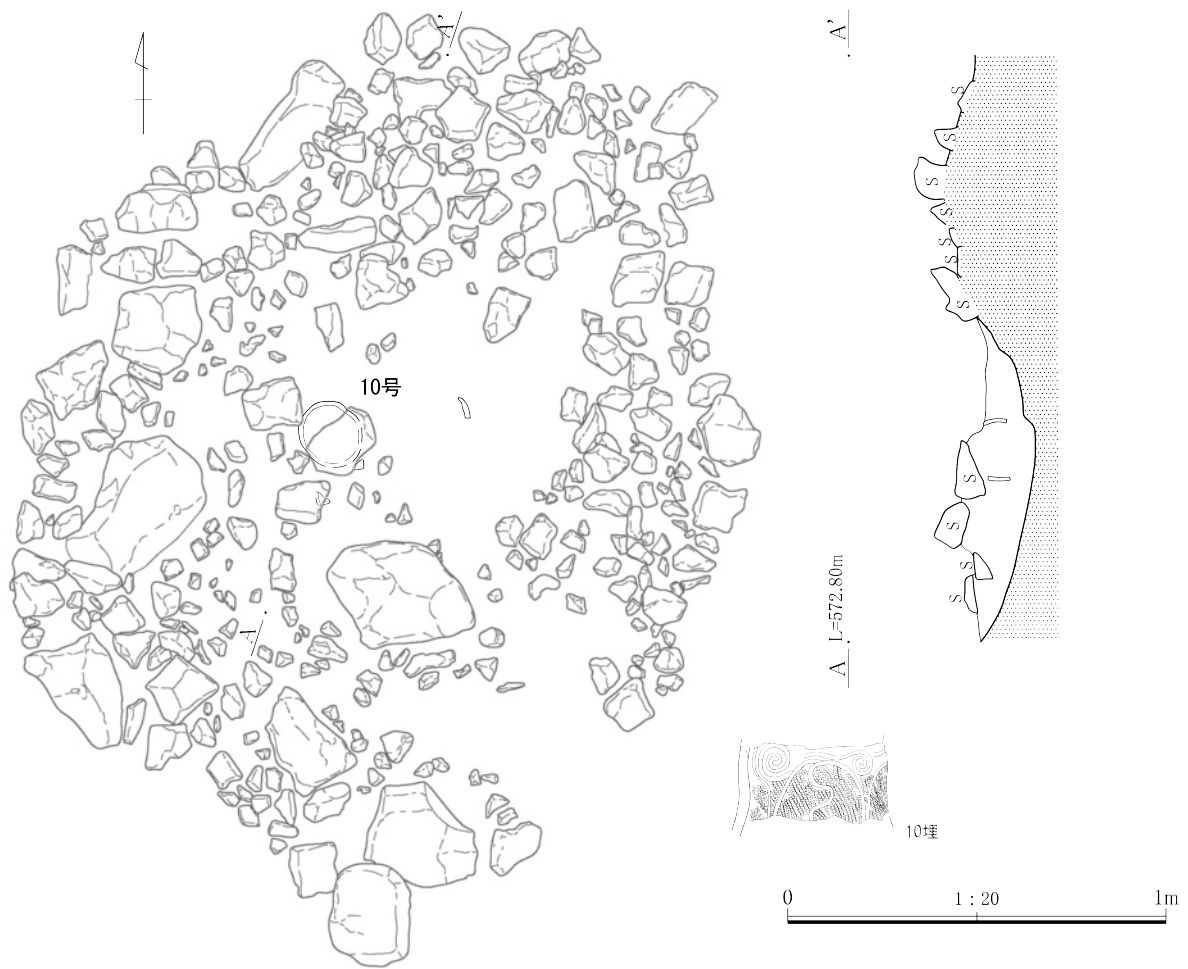
28区 3号土器埋設遺構



第55図 28区 2号・3号土器埋設遺構



第56図 28区土器埋設遺構出土遺物(2・3・5号)



30区10号土器埋設遺構 確認状況



30区10号土器埋設遺構 埋設状況

第57図 30区10号土器埋設遺構

28区 5号土器埋設遺構

調査年度 平成8年度

位置 P-1グリッド

確認状況 12号配石の北東部から、18区4号～6号と共に確認された。当遺構は、12号配石中の大きな

地山礫に接して埋設されており、礫群の調査時に円形にめぐる上端部がはっきりと確認された。確認面は暗褐色土中である。

埋設状況 暗褐色土中に、胴部上半を欠失した深鉢を正位に埋設していた。土器は底部までほぼ完存し

ており、残存高は21.8cmであった。使用された土器は、胴部に無文懸垂帯を施した加曾利E3式中段階の土器で、被熱痕跡は認められない。

**掘り方** 明瞭な掘り方は確認できなかったが、直近から深鉢の胴部破片（5埋-2）が出土している。

**所見** 18区12号配石が、18区5号を炉とする住居となることを前提とすれば、当遺構はその住居の出入り口部埋甕に該当する可能性が高いと判断する。時期は、使用された土器から中期加曾利E3式期中段階に比定されよう。

30区10号土器埋設遺構

調査年度 平成9年度



30区11号土器埋設遺構 確認状況



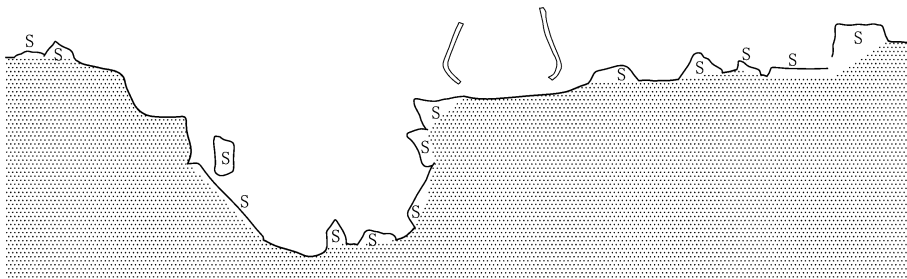
30区11号土器埋設遺構 埋設状況

**位置** C-4グリッド

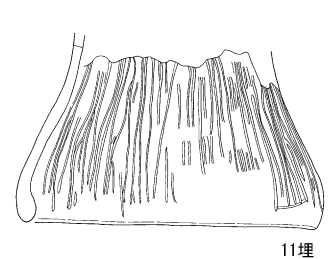
**確認状況** 大量の地山礫が散布する地区で確認された。周囲は一面に地山礫が広がり、住居等の遺構がある場所だけが転々と窪んでいた。当遺構が位置する地点も、大形礫とその間を埋める小礫が一面に集積しており、その一画にある直径80cmほどの浅い窪みの中央で確認された。

**埋設状況** 礫を多量に含む暗褐色土を掘り込んで、口縁部と胴部下半を欠失した小形の深鉢を逆位に埋設していた。土器は掘り込みの底面より5cmほど浮いた状態で埋設されており、その上端部は周囲の礫面より8cmほど低いレベルにあった。使用された土器は、直径16cm、残存高8cmほどの深鉢胴部で、上

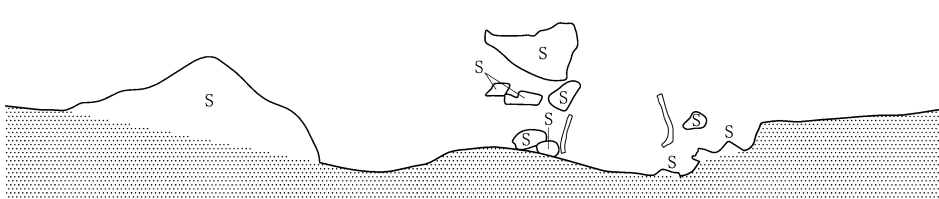
A L=537.00m



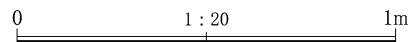
A'



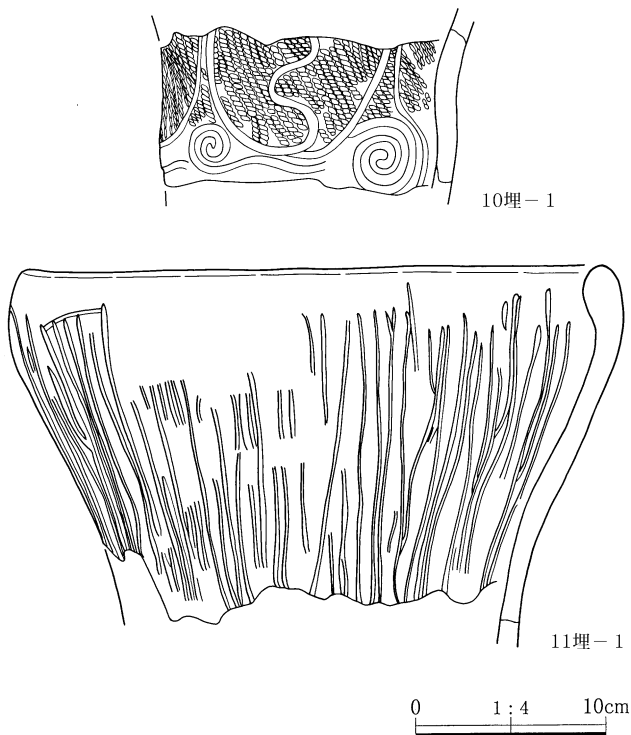
B L=537.20m



B'



第58図 30区11号土器埋設遺構



第59図 30区土器埋設遺構出土遺物 (10・11号)

方にあった部分には明瞭な被熱痕跡が認められた。  
 なお、周囲に焼土や炉石は認められなかった。

**掘り方** 礫を多量に含む暗褐色土を、直径約80cm、深さ20cmほど掘り込んだ掘り方が確認された。掘り方の底面は地山の黄色砂質土に達しており、小礫を少量含む暗褐色土で埋め土されていた。埋め土中に焼土は認められない。

**所見** 浅い掘り込み内に、口縁部と胴部下半を欠失した小形の深鉢を逆位に埋設したもので、土器に明瞭な被熱痕跡が認められることから、住居の炉に使用されたものと判断する。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期に比定されよう。

#### 30区11号土器埋設遺構

**調査年度** 平成11年度

**位置** B-1グリッド

**確認状況** 当遺構も地山礫が多量に散布する地区で確認された。分布図には記載していないが、18号土坑

の東側に後期の33号住居があり、その周囲には大形の地山礫が点在している。当遺構は、暗褐色土面を調査中に胴部の一部が検出された。当初は住居を想定して調査が進められたが、炉が確認できないことから、11号埋設土器として扱った。なお、当遺構は現在、平面図が所在不明であり、判明した段階で提示したい。

**埋設状況** 暗褐色土中から、胴部下半を欠失した深鉢が逆位で出土した。土器は、地山の黄色砂質土面より若干浮いた状態を保持しており、その周囲にあてがうように礫が認められることから、掘り方を伴う可能性もある。また、周囲には大形の礫が点在しており、土器の口縁部のレベルで平坦面を確保することが難しいことから、住居床面の伏せ甕を想定することは困難であろう。

使用された土器は、口径30.4cm、残存高は18.9cmの深鉢で、縦位の沈線が施された中期加曽利E3式土器である。器形は関東の流儀でつくられている。なお、被熱痕跡は認められない。

**掘り方** 明確な掘り方は確認できなかった。

**所見** 胴部下半を欠失した中形の深鉢を逆位に据えたもので、本来は掘り方を伴う墓の可能性が高いと想定する。時期は、使用された土器から中期加曽利E3式期に比定されよう。



## 第4節 掘立柱建物

当遺跡では、縄文時代の掘立柱建物が13棟、柱穴列が2箇所確認されている。これらの遺構の多くは、住居の確認面よりも低い地山面で単独の土坑として調査されたもので、その後に周辺の遺構調査が終了し、掘り方調査の段階で新たに確認された柱穴と組み合わせて全形が判明したものも多い。そのため、本来の遺構面よりもかなり低いレベルで記録が作成されており、柱穴の深さはその点を考慮しておく必要がある。また、当遺跡は地山が黄色シルト～砂質土であり、最終的な遺構確認が困難な地点もあることから、確認漏れの遺構も少なからず存在する。

ここで再度、遺構分布図について説明しておきたい。この図は、付図の中から必要な箇所を抜き出したもので、第5節の環状柱穴列、および第6節の柱穴列を含んだ分布図になっている。

調査区外の地形を表現していないため、第1図の地形図と併せて見ていただきたい。調査区の北側は吾妻川が東西に流れており、本遺跡とは比高差30m以上の断崖で画されている。調査区の東側、つまり18区の東側には、南側の山地から流れる東沢があり、これも遺跡内との比高差は5m以上あるが、本遺跡にとって重要な水源である。遺跡中央を南北に蛇行する山根沢（濃いトーンで表示、調査結果を加味して復元）は、本遺跡の重要な水場で、現在も適度な水を供給している。淡いトーンで示したのは埋没谷で、年代ははっきりしないが、地山土のシルト～砂質土が堆積する際に南側の山地から流れる沢によって刻まれた痕跡で、このうち18区の中央を南東から北西に横切る谷は、上層に縄文時代中期から後期前半代の遺物と礫を大量に包含している。この谷については、本文中で埋没谷と表記する。なお、遺構は、縄文時代中期後半～後期の遺構の住居・列石・配石を図化してある。

確認された掘立柱建物の形態は、方形と長方形とが認められた。柱構造は、1×1間の4本柱建物が9棟で最も多く、他に1×2間の6本柱長方形建物

が1棟と、棟持ち柱を持つ2×3間の12本柱長方形建物が1棟ある。1×1間の4本柱建物には、正方形および正方形に近いタイプが6棟、長方形タイプが3棟ある。

当遺構の分布は、集落を2分する山根沢の両側で確認されており、東側にあたる18区に4棟、西側にあたる20区に6棟、29区に1棟である。

18区には、4本柱方形建物である1号と、4本柱長方形建物である2号・4号と、棟持ち柱を持つ12本柱長方形建物である3号がある。1号は集落中央部の遺構が比較的少ない地区に単独で位置し、2号と4号は集落北西部の遺構群の内側に接近して位置する。大形で棟持ち柱を持つ3号は、集落の南西部縁辺にあり、一部が埋没谷にかかる。

20区には、4本柱方形建物である1号・5号・6号・7号・8号と、6本柱長方形建物の2号がある。これらは、いずれも中期後半の環状集落内の空白部縁辺に位置し、2号と7号は近接し、6号と8号は一部を重複している。

29区には、4本柱長方形である1号があり、中期後半の環状集落の北東部に位置する後期配石墓群の北西側に、単独で配置されている。

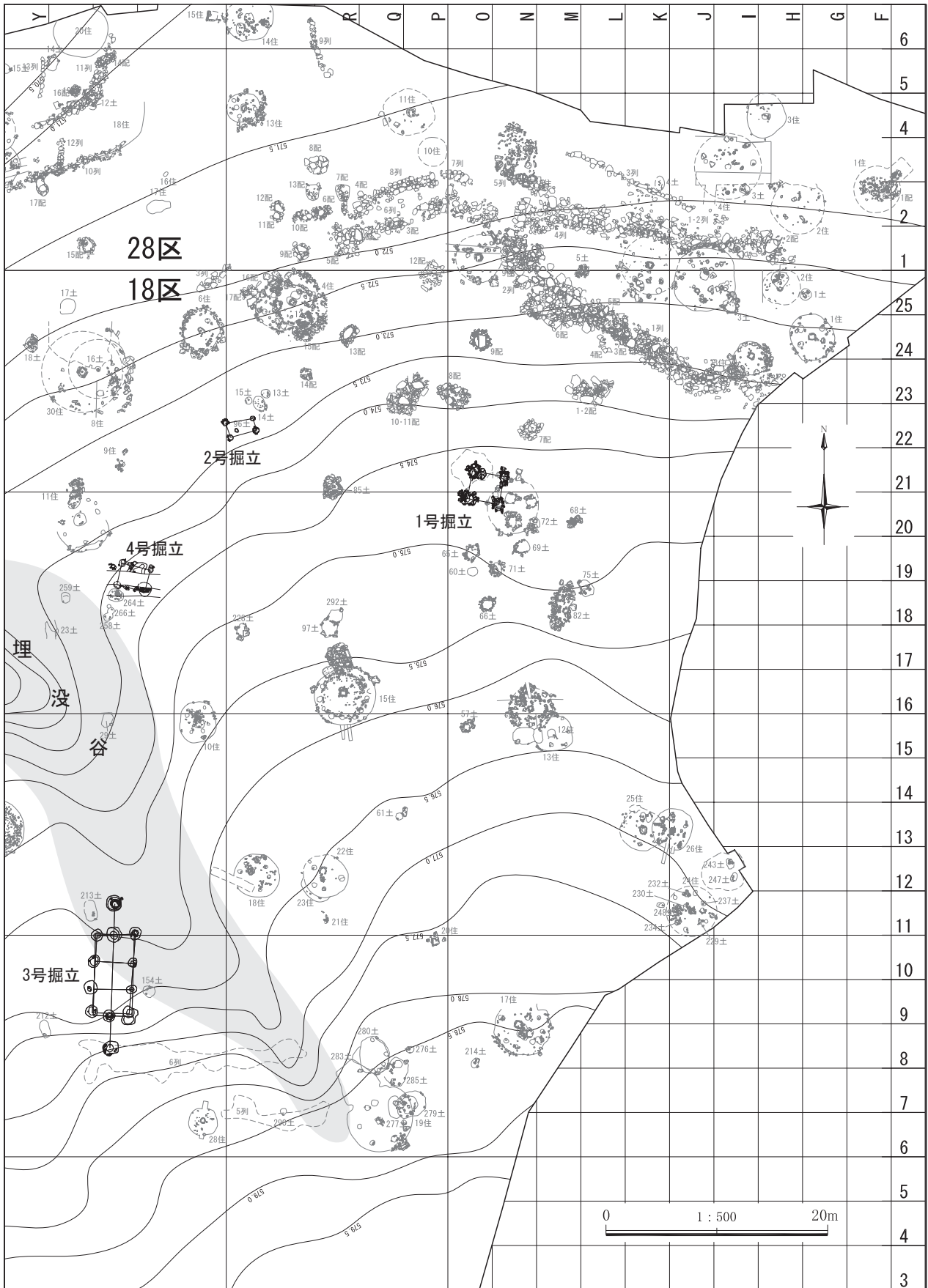
なお、掘立柱建物の時期は、柱穴内から各期の土器が出土しているものも多く、判断は難しい。

以下、個別に報告する。





第3章 発見された遺構と遺物



第62図 18区・28区掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列分布図

表4 横壁中村遺跡 掘立柱建物一覧

遺構名	位置	時期	詳細	形状	方位	規模 (cm)		重	複	備	考
						長辺	短辺				
18区1号	N-21	縄文後期		4本柱長方形	N78W	290	254	18号配石、14号住居			
18区2号	T-22	縄文		4本柱長方形	N75E	245	110-135	9号焼土			
18区3号	W-10	縄文後期	堀之内1式	棟持付12本柱長方形	N3W	735	350	1号石垣、6号列石		2×3間。柱穴の上面に配石・礎群を伴う。	
18区4号	W-19他	縄文後期	堀之内1式	4本柱長方形	N77W	265	200	40・42・52号土坑			
20区1号	N-22	縄文後期		4本柱長方形	N35W	200	200	23号住居、2号土器埋設		2号土器埋設遺構に柱1を切られる。	
20区2号	I-19	縄文後期	後期前半	6本柱長方形	N82W	510	280			1×2間。柱間250cm。	
20区3号	P-14	欠番									
20区4号	M-13	欠番									
20区5号	H-22	縄文後期	加槽B2~3式	4本柱長方形	N88-90E	312-326	234-244			重複する地山礫に磨り面あり。	
20区6号	D-22	縄文後期	堀之内式	4本柱長方形	N77E	290	280				
20区7号	H-19	縄文		4本柱長方形	N88W	354	310				
20区8号	D-23	縄文後期	堀之内2式	4本柱長方形	N2W	280	280				
29区1号	X-6	縄文後期	加槽B2~3式	4本柱長方形	N90	410	160				

表5 横壁中村遺跡 環状柱穴一覧

遺構名	位置	時期	詳細	形状	方位	規模 (cm)	重	複	備	考
19区1号	W-24	縄文後期				直径710円周上	5号住居を切る		柱間240cm	
19区2号	U-22他	縄文後期		6本柱円形		直径560円周上	10号・13号住居を切る		柱間280cm	
30区1号	B-3他	縄文後期	堀之内1~2式	7本柱橢円形		直径760円周上	36号住居		柱間260~270cm	

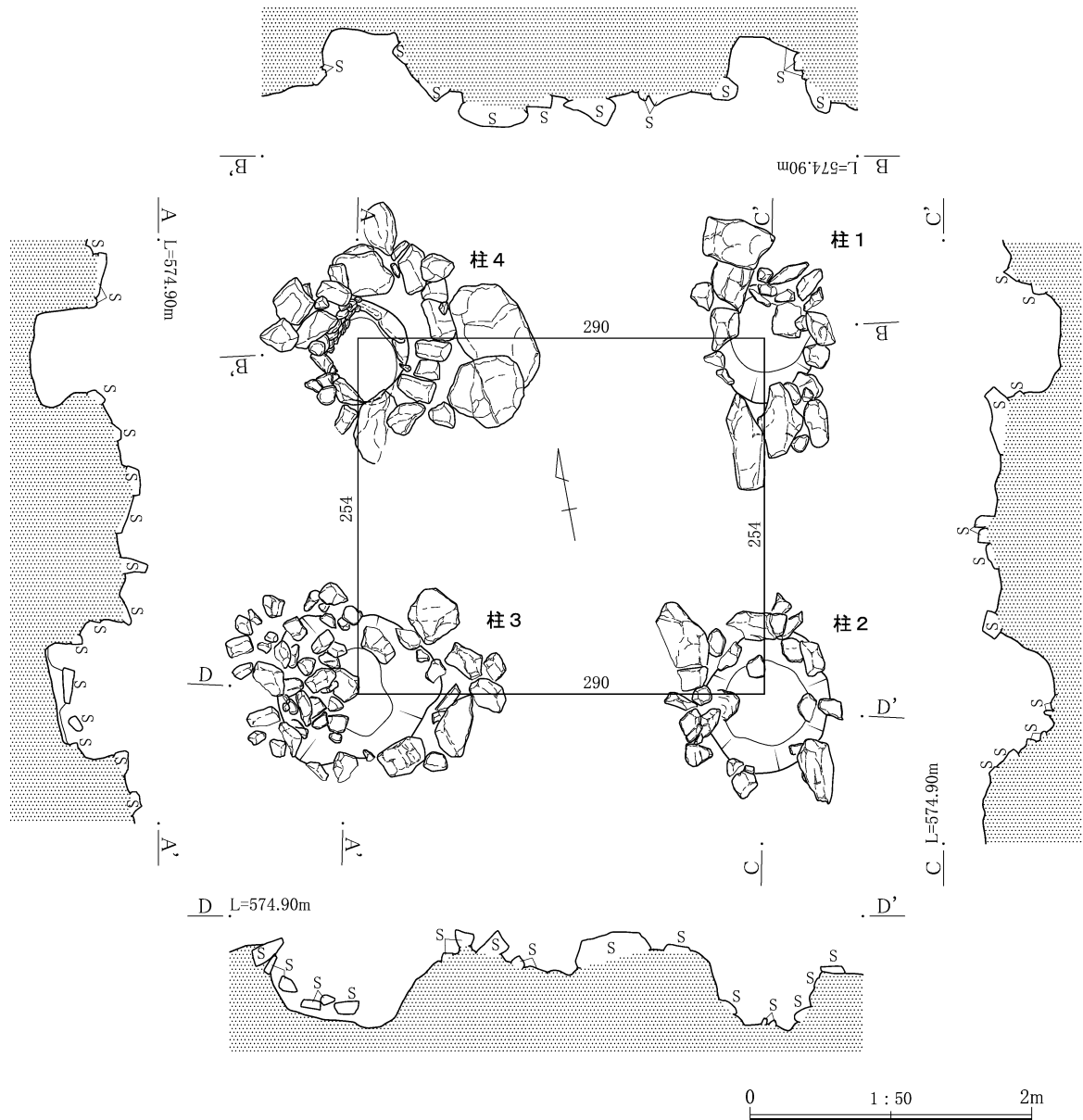
表6 横壁中村遺跡 柱穴一覧

遺構名	位置	時期	詳細	形状	方位	規模 (cm)	重	複	備	考
19区1号	Q・R-24	縄文後期	後期後半	6本柱弧状		635			山根沢の低地南側に沿う	
29区1号	R-3・4・5	縄文		4本柱直線上		610			山根沢の低地西側に沿う	

第3章 発見された遺構と遺物

表7 横壁中村遺跡 掘立柱建物 柱穴対照一覧

報告用	調査時名称	共伴遺構	重複遺構	長径	短径	深さ	主な遺物	備考
18区1号掘立柱建物								
柱1	73号土坑			88	75	41		
柱2			14号住居	105	86	51		
柱3				117	107	64		
柱4			18号配石	75	64	66		
18区2号掘立柱建物								
柱1	87号土坑		9号焼土	50	43	54		
柱2	86号土坑		9号焼土	58	57	71		
柱3				55	46	48		
柱4				52	45	49		
18区3号掘立柱建物								
柱1	206号土坑	37号配石		138	127	124	堀之内1式土器	根巻き礫 柱痕 礎石(板石)
柱2	194号土坑	21号配石		113	103	106	堀之内1式土器	— — —
柱3	205号土坑	22号配石		126	122	113	堀之内1式土器	根巻き礫 柱痕 —
柱4	204号土坑	38号配石		120	97	110	堀之内1式土器	— — 礎石(板石)
柱5	196号土坑	—		119	95	97		— 柱痕 —
柱6	197号土坑	礫 集積		82	77	115	堀之内1式土器	根巻き礫の一部 — —
柱7	168号土坑	—		105	97	60	堀之内1式土器	— — —
柱8	191号土坑	礫 集積		93	75	97	堀之内1式土器	根巻き礫の一部 — —
柱9	152号土坑	—	152号土坑(中世)	110	107	(67)	堀之内1式土器	— — —
柱10	209号土坑	—		107	107	92	堀之内1式土器	— 柱痕 礎石(割石)
柱11	190号土坑	礫 集積	195号土坑	104	100	98	堀之内1式土器	— — —
柱12	207号土坑	—	6号列石	147	123	172		根巻き礫 柱痕 —
18区4号掘立柱建物								
柱1	41号土坑			49	45	58		
柱2	56号土坑			108	—	72	称名寺2式土器	
柱3	51号土坑			51	—	51	堀之内1式土器	
柱4	43号土坑			67	57	59		
20区1号掘立柱建物								
柱1	23号住居柱17		23号住居	82	78	76		23住を切り、2号埋設に切られる。
柱2	97号土坑			87	73	82		
柱3	115号土坑		138号土坑	98	98	87		
柱4	23号住居柱3		23号住居	83	76	83		23号住居を切る。
20区2号掘立柱建物								
柱1	312号土坑			99	79	67		
柱2	310号土坑			104	80	99	堀之内1式土器	
柱3	314号土坑			115	86	61		
柱4	なし			100	75	32		
柱5	なし			110	87	40		
柱6	なし			136	102	46		
柱7	316号土坑			90	76	35		
柱8	317号土坑			91	83	68		
柱9	394号土坑(東)			—	84	54		
柱10	395号土坑			88	67	68		
柱11	404号土坑			114	100	64		
柱12	407号土坑			95	79	54		
20区5号掘立柱建物								
柱1	414号土坑	(旧2号柱)		125	101	91	台石2点、丸石1点、石棒片1点、軽石製品1点	
柱2	410号土坑	(旧1号柱)		156	118	119	加曾利B2~3式土器	
柱3	416号土坑	(旧4号柱)		140	97	103		隣接地山礫に磨り面
柱4	415号土坑	(旧3号柱)		139	137	95		隣接地山礫に磨り面
20区6号掘立柱建物								
柱1	370号土坑	(旧2号柱)		130	124	107		
柱2	388号土坑	(旧1号柱)		104	88	103		
柱3	364号土坑	(旧4号柱)		127	109	112		
柱4	366号土坑	(旧3号柱)		111	85	96		
20区7号掘立柱建物								
柱1	349号土坑	(旧4号柱)		102	98	49		
柱2	389号土坑	(旧1号柱)		94	83	58		
柱3	405号土坑	(旧2号柱)		121	80	75		
柱4	394号土坑	(旧3号柱)		108	81	55		
20区8号掘立柱建物								
柱1	428号土坑		(旧2号柱)	134	85	51	堀之内2式土器	
柱2	442号土坑	441号土坑	(旧1号柱)	86	82	60	石棒片1点	
柱3	384号土坑		(旧4号柱)	110	93	79	堀之内1~2式土器	
柱4	419号土坑	435号土坑	(旧3号柱)	146	83	68	堀之内2式土器	
29区1号掘立柱建物								
柱1	24号土坑			54	48	52	加曾利B式土器	W-6a土坑
柱2	23号土坑			65	43	59	後期土器	W-5a土坑
柱3	31号土坑		50号配石	60	53	51	加曾利B式土器	X-5a土坑
柱4	32号土坑			58	48	57	加曾利B式土器	X-6a土坑



第63図 18区1号掘立柱建物

18区1号掘立柱建物

調査年度 平成14年度

位置 N-21グリッド

方位 N78度W

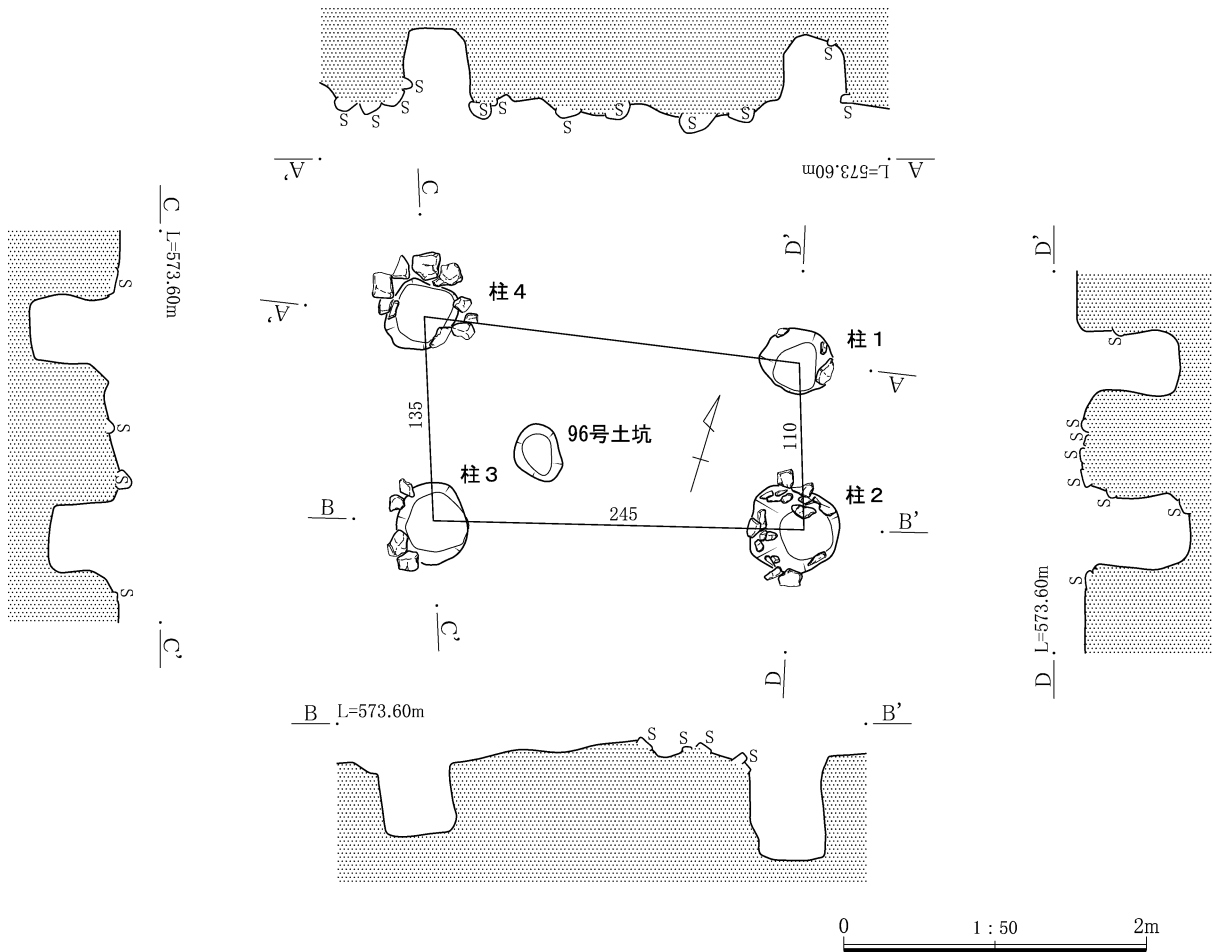
確認状況 台地中央部の、礫が全面に広がる地区で確認された。ここでは後期の14号住居と18号配石、および土坑数基が確認され、遺構調査が終盤になった頃、14号住居内と18号配石内で大きな柱穴が見つかり、周辺の土坑と組み合わせたところ、方形の規

格的な配置にのっていることがわかった。両遺構との新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ平行して、東西に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は方形に近い長方形を呈し、規模は東西方向が290cm、南北方向が254cmである。各柱穴は直交する位置に整然と配置されており、そのうち柱2は14号住居内に、柱4は18号配石内に重複する。

柱穴 地山礫が多い場所であるが、各柱穴とも





第64図 18区2号掘立柱建物

直径70～100cm前後の円形状の掘り方が認められた。深さは41～66cmであるが、本来はこれよりも数十cm増しの深さがあったと想定される。

**伴出遺物** 柱穴内から遺物等は確認されていない。

**所見** 柱穴からの出土遺物もなく、重複する遺構との新旧関係も判然としないため、帰属時期の特定は難しいが、形態と規模は20区で確認された5号・6号・8号掘立柱建物に類似しており、それらと同じ時期に該当する可能性が高いと判断する。

**18区2号掘立柱建物**

**調査年度** 平成14年度

**位置** T-22グリッド

**方位** N75度E

**確認状況** 4号石垣のすぐ北側で確認された。この地区は、石垣構築に伴って地山の黄色砂質土上面まで削平を受けており、土坑が数基確認されるに留まったが、そのうちの4基が長方形の規格にのっており、柱の規模も揃っていることから、掘立柱建物と判断した。東側に9号焼土が重なるが、この遺構はかなり上面で存在した遺構であり、当遺構との関わりはない。縄文時代の遺構では、北東1mほどに後期の7号土器埋設遺構が接近する。

**形状** 斜面地の等高線方向にほぼ平行して、東西に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は長方形を呈し、規模は東西方向が245cm、南北方向が110～135cmである。柱穴は、柱1を除いて直交する位置にある。

**柱 穴** ここも地山礫が多い場所だが、各柱穴とも直径50cm前後の円形状の掘り方が認められた。深さは48～71cmまでであるが、50cm前後のものが多く、ここでも本来はこれよりも数十cm増しの深さがあつたと想定される。

**伴出遺物** 柱穴内から遺物等は確認されていない。

**所 見** 確認面は住居等の遺構より低いレベルにあり、掘り方もしっかりしていることから、縄文時代の掘立柱建物と判断したい。柱穴からの出土遺物等もなく、時期の詳細は不明である。

### 18区3号掘立柱建物

**調査年度** 平成14年度

**位 置** W-8～11グリッド

**方 位** N3度W

**確認状況** 縄文時代の埋没谷の調査段階で、谷の縁辺部に分布する後期前半の遺物包含層上面から、直径1m前後の範囲に礫を集積した遺構が数カ所で確認され、配石遺構として調査を進めていた。

ところが、配石遺構の下部に深い土坑が存在することが判明し、その周囲にある大形の土坑と共に南北線上に並んでいることがわかった。確認当初は、8本柱の単純な長方形を呈するものと考えていたが、最終的には長軸に棟持ち柱を持つ12本柱の長大な掘立柱建物となった。

当遺構は、南側の一部を縄文時代後期の6号列石、および構成の1号石垣と重複しており、この地区はかなりの削平が及んでいる。そのため当遺構の確認面は、南半部の大半は削平された地山の黄色シルト～砂質土面であり、北側の一部は埋没谷の後期前半包含層中であつた。

**形 状** 斜面地の等高線方向に直交して、南北に長軸を持つ2×4間の長方形を呈し、南北の長軸線上の両外側に棟持ち柱が付く12本柱の構造となる。規模は、長軸7.35m、短軸3.5m、長軸線上に位置する南北の両棟持ち柱間の距離は12.95mであり、その確認面の比高差は1.5m前後である。柱の配置に若干のおれは認められるものの、各柱穴間の距離は、縄

文尺といわれる35cmの増数に合致している。また、建物の長軸はほぼ磁北に沿っており、全体の構造と共に、高度な規格性が感じられる。

**柱 穴** 当掘立柱建物を構成する柱穴は12本あり、それぞれに詳細な調査内容があるため、ここでは伴出遺物も含めて個別に報告したい。

**柱1** 北側の棟持ち柱に該当する柱穴で、埋没谷の中程で確認された。西側に後期の24号配石が隣接する。上面に多量の礫が集積されており、確認時には37号配石とした。

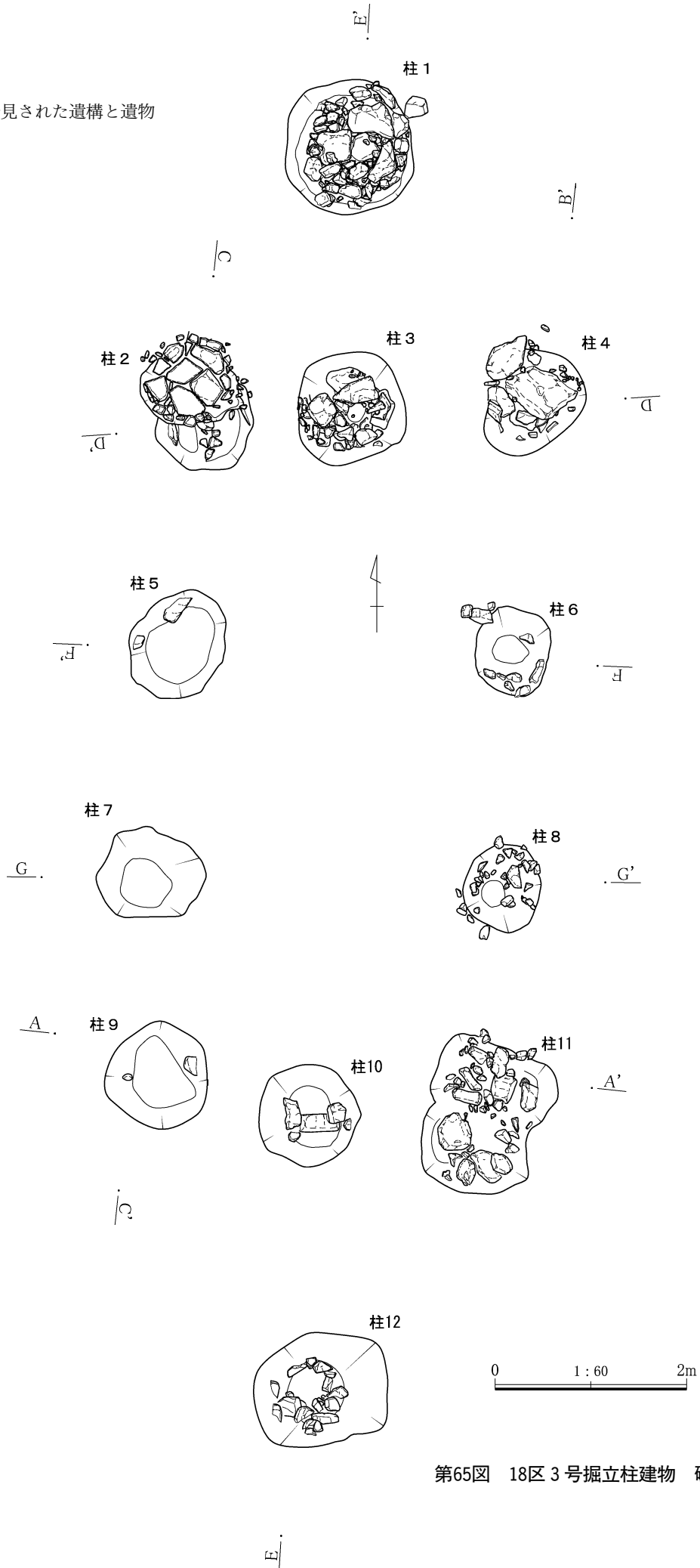
上面の礫は、長さ50cmの大型礫を中心に、拳大～20cm大の小礫が円形状に集積されており、その小礫を取り去ると、20～40cm大の大振りな礫が面的に並べたような状態で組まれていた。この段階で、礫の中央部に直径30cm前後の柱痕が明確に認められた。この柱痕を取り囲んだ根巻き状の礫群は、底面に至るまで連続して認められた。

底面には、50cm前後の板石を中心に、その周囲に小礫を敷いて直径90cmの円形状に仕上げた敷石が、礎石として敷かれていた。柱痕部分の埋没土は軟質の暗褐色土で、その他は地山を多く含むやや硬質の暗褐色土である。

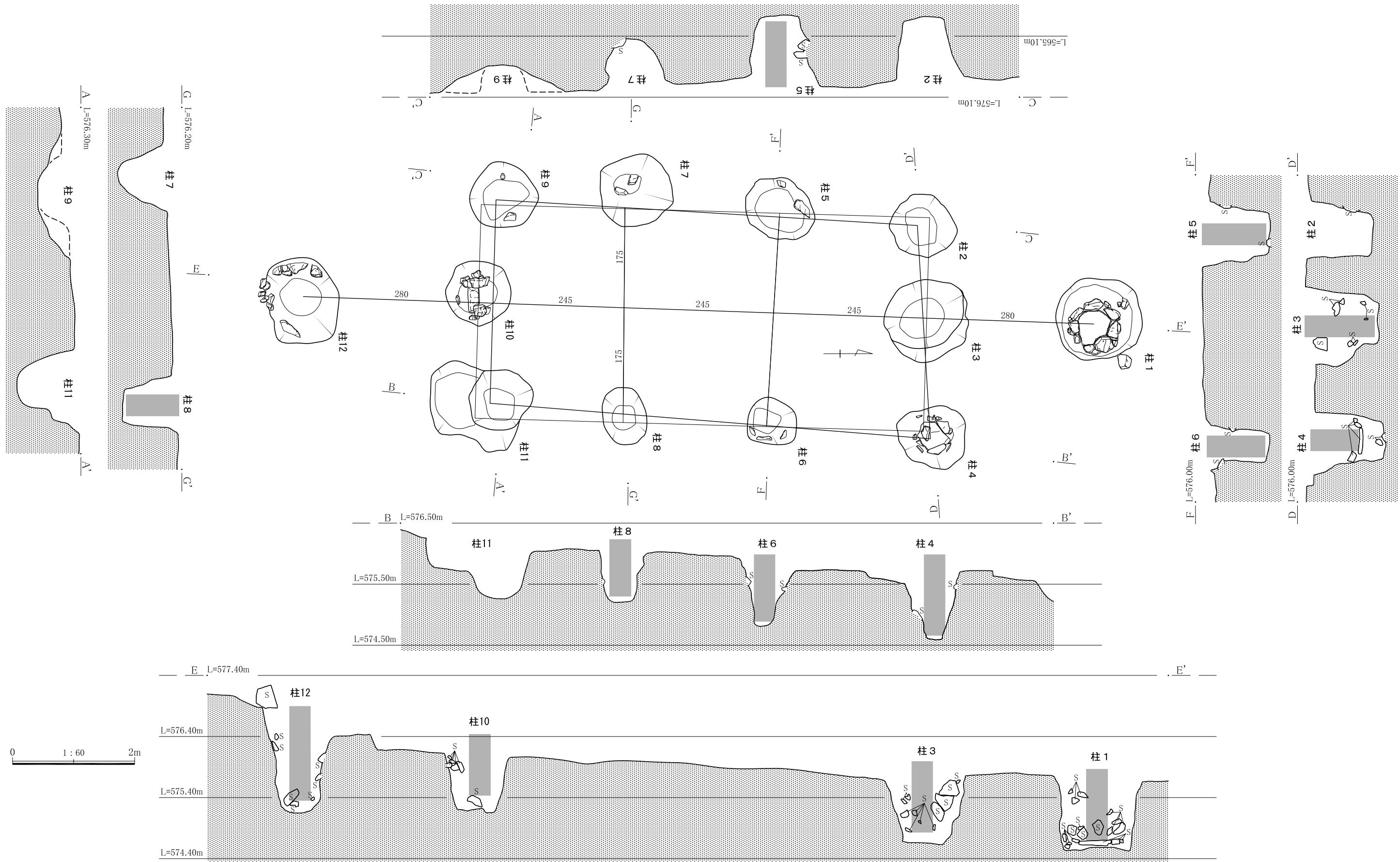
掘り方は、確認時に206号土坑としたもので、平面形は138×127cmのほぼ円形を呈し、深さは124cmで、断面形は箱状となる。断ち割り調査でも、掘り方中央部の南東寄りで直径30cm前後の柱痕を確認することができた。柱痕部は軟質の暗褐色土で埋まっており、その他は地山の黄色砂質土を多く含むやや硬質の褐色土で埋め土されていた。

遺物は、37号配石とした上面の礫群中から後期堀之内1式土器破片4点と完形の凹石1点が、206号土坑とした掘り方内から堀之内1式土器破片9点が出土している。

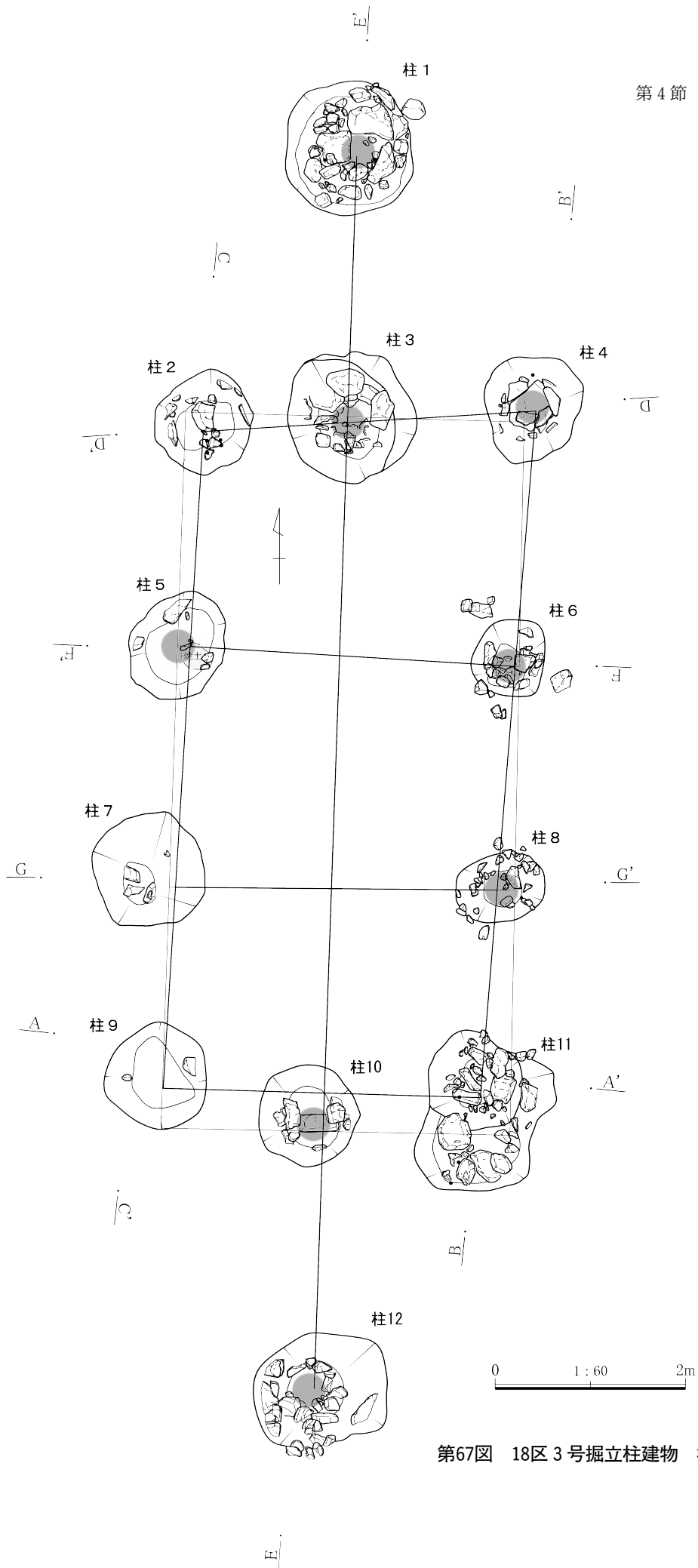
**柱2** 埋没谷の縁辺部で確認された。上面の北西にずれた位置に、掘り方とほぼ重なる大きさの敷石があり、確認時は21号配石とした。この配石は20～40cm大の扁平礫を敷き並べ、礫の間やまわりに小石を根詰めして、直径90cmの円形状に設置したもので、



第65図 18区3号掘立柱建物 礎出土状況



第66图 18区3号掘立柱建物全体图



第67図 18区3号掘立柱建物 柱痕確認状況



確認面の配石 (37号配石)



柱穴上層の礫

柱1の底面に敷かれていた礎石と規模・手法ともに共通している。なお、この手法は敷石住居の敷石に多用される手法である。

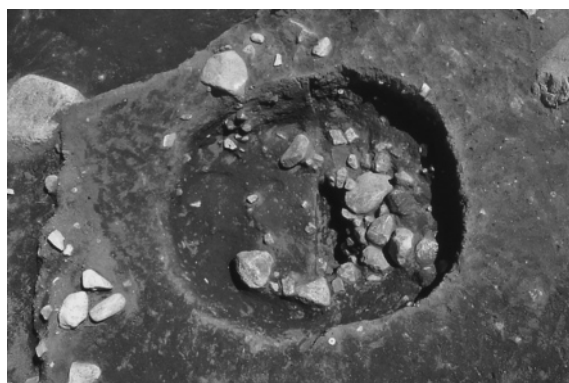
掘り方は確認時に194号土坑としたもので、平面形は113×103cmの円形状を呈し、深さは106cmで、断面形は上方が直線的にやや開く逆台形状となる。埋め土は、地山の黄色砂質土を多く含む褐色土で、よく締まっており、上層には小石を多く含み、下層には大きな礫を多く含む。柱痕は確認できない。

遺物は、21号配石中から後期前半の土器破片が2点、194号土坑とした掘り方の中位付近から礫と共に後期堀之内1式土器破片8点が出土している。

**柱3** 埋没谷の縁辺部で確認された。確認時には、直径1mほどの円形状に拳大の礫が集積されており、22号配石とした。上層の礫を取り去ると、その直下に大形礫が敷いたように配置されており、その中央に直径30cm前後の柱痕が認められた。ここでは断ち割り調査は実施していないが、柱1と同様に、この柱痕を取り巻く根巻き状の礫は、底面付近まで続いていることが確認されている。

掘り方は、確認時に205号土坑としたもので、平面形は126×122cmの円形状を呈し、深さは113cmで、断面形は箱形である。埋め土は、地山の黄色砂質土を多く含むやや軟質の褐色土で、柱痕部分はさらに軟質であった。

遺物は、上面の22号配石中から後期堀之内1式土器破片が2点と石皿の破片1点が、205号土坑とした掘り方から堀之内1式土器破片3点が出土してい



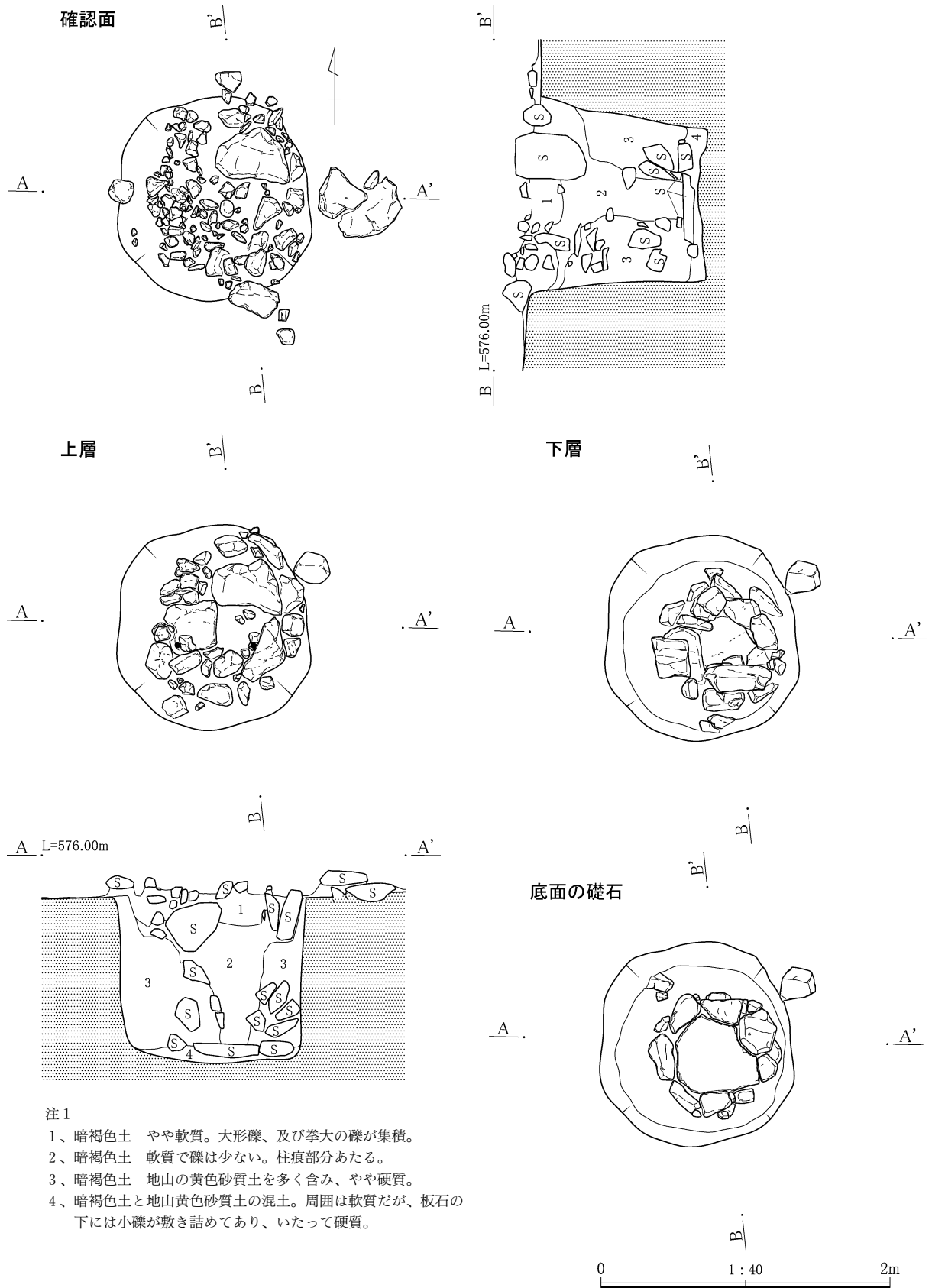
上層礫下の状況 柱痕を確認



下層の柱痕を取りまく礫



底面の礎石



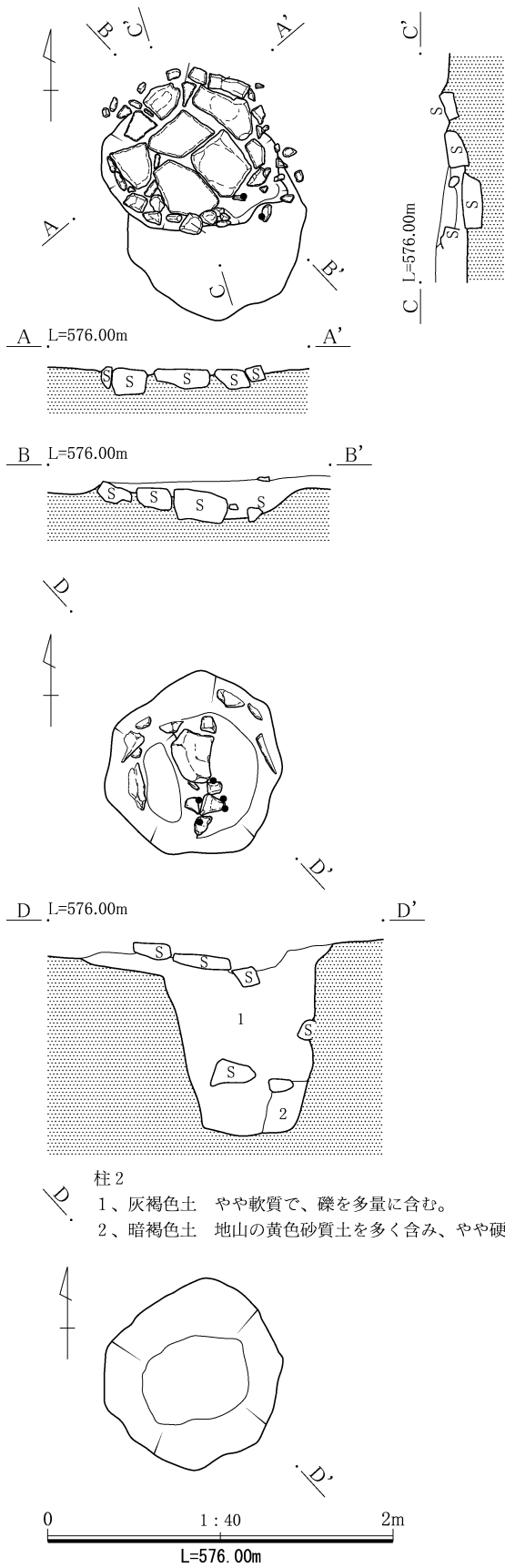
注1

- 1、暗褐色土 やや軟質。大形礫、及び拳大の礫が集積。
- 2、暗褐色土 軟質で礫は少ない。柱痕部分あたる。
- 3、暗褐色土 地山の黄色砂質土を多く含み、やや硬質。
- 4、暗褐色土と地山黄色砂質土の混土。周囲は軟質だが、板石の下には小礫が敷き詰めてあり、いたって硬質。

第68図 18区3号掘立柱建物 柱1



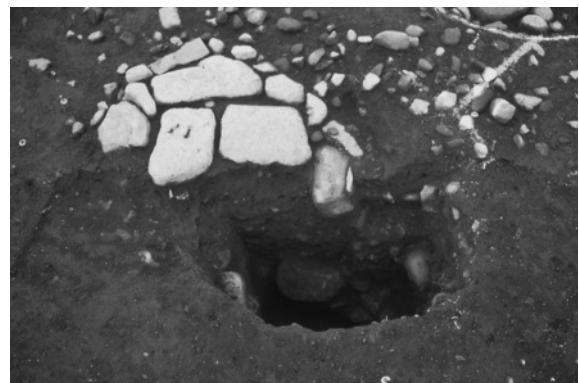
第3章 発見された遺構と遺物



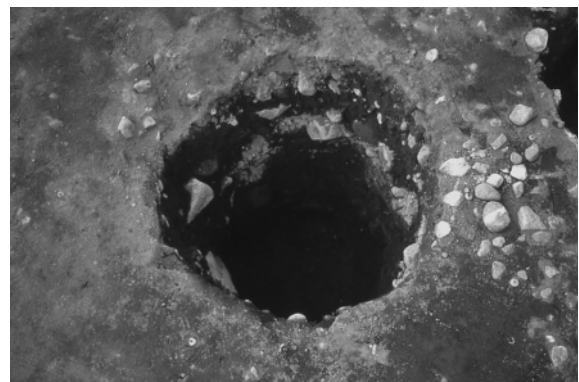
21号配石確認状況



21号配石全景

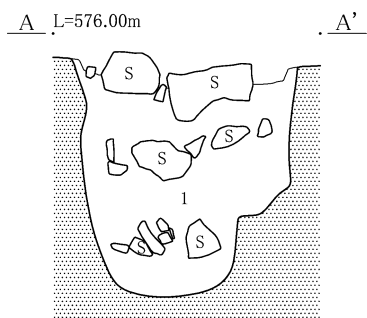
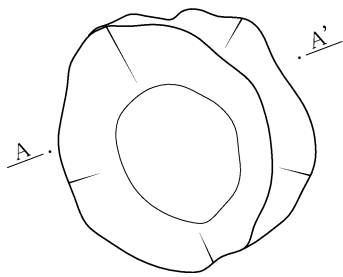
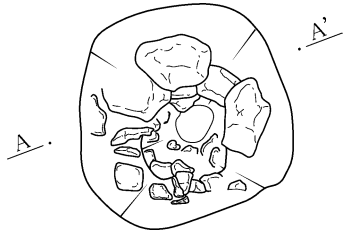
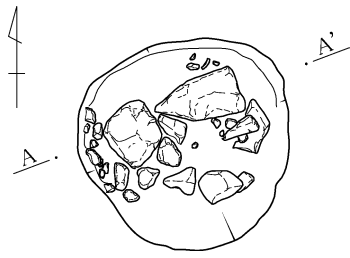


配石下に柱穴確認

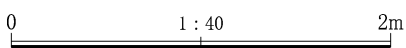


柱穴完掘

第69図 18区3号掘立柱建物 柱2



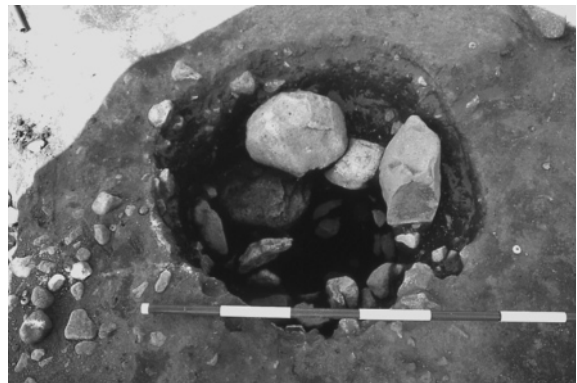
柱3  
1、褐色土 軟質で、礫と地山の黄色砂質土を多く含む。



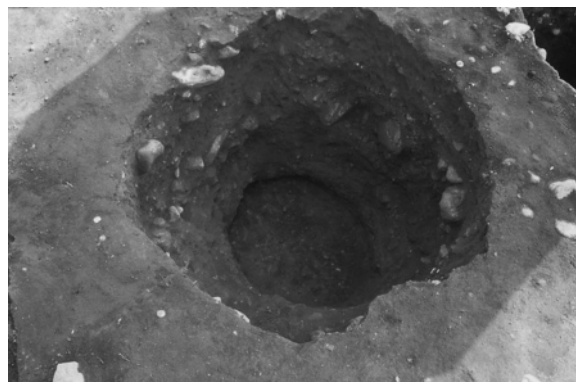
確認状況



上面の配石 (22号配石)



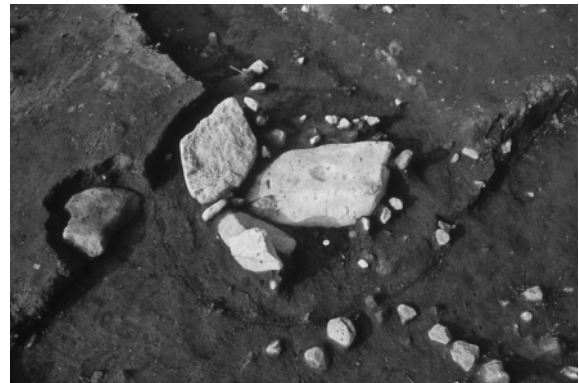
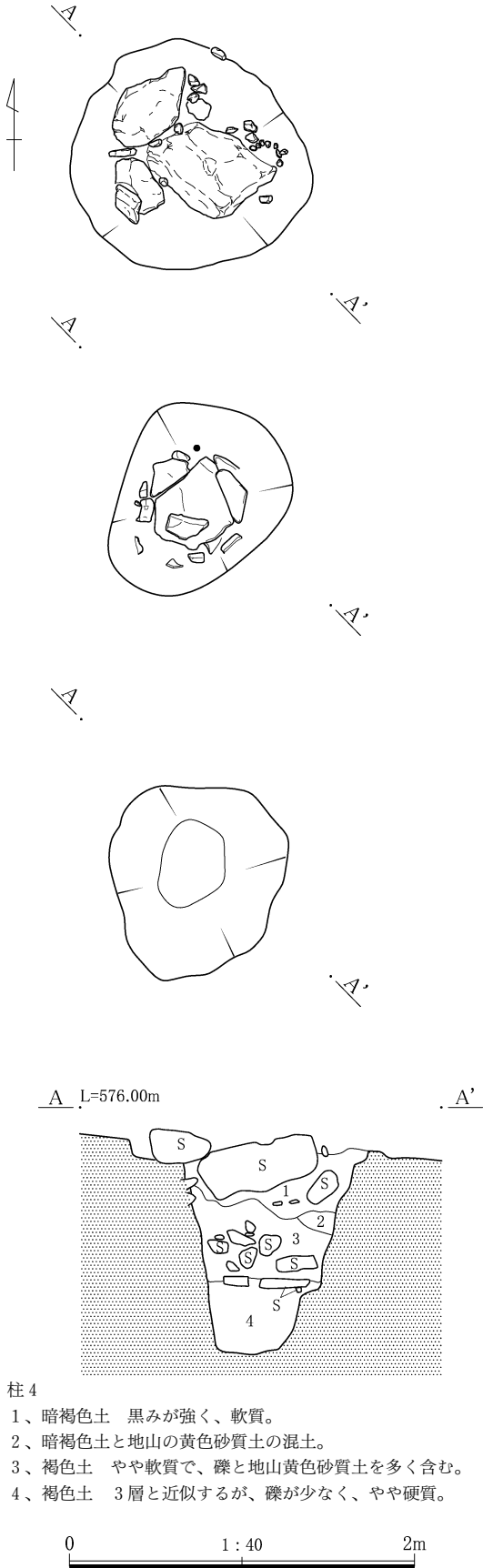
上層の礫



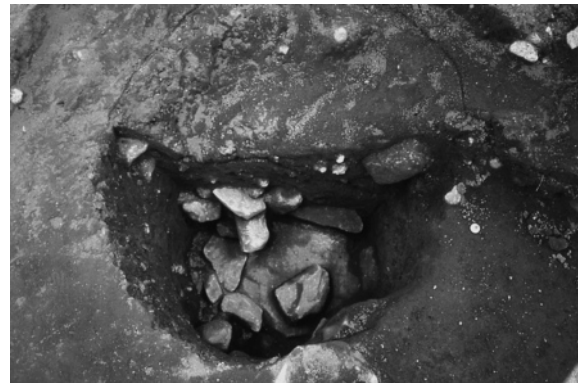
柱穴完掘

第70図 18区3号掘立柱建物 柱3

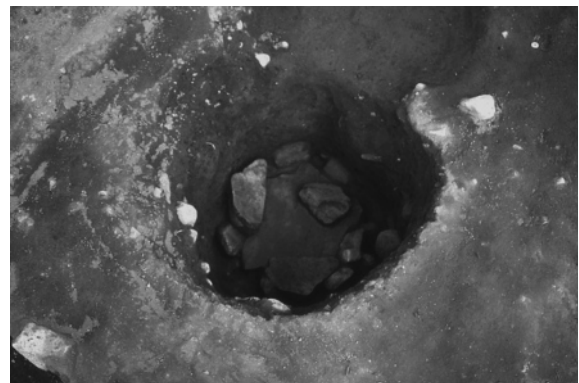
第3章 発見された遺構と遺物



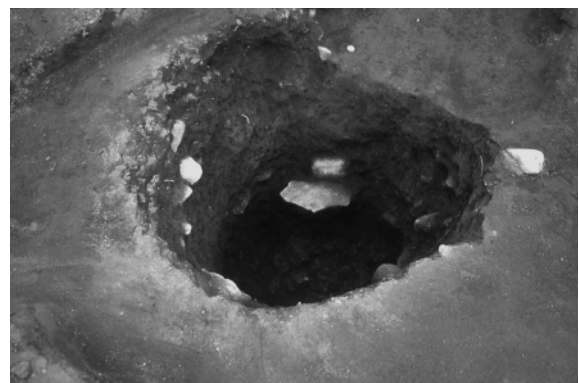
上面の配石 (38号配石)



上~中層の礫



中層の礎石



柱穴完掘

第71図 18区3号掘立柱建物 柱4

る。

**柱4** 埋没谷の中程で確認された。上面の中央に3個の大形礫がのっており、確認時は38号配石とした。配石の下には軟質の暗褐色土があり、礫は少ない。中層付近からは礫が多量に含まれるが、柱痕を取り巻くような状況は認められず、柱痕も確認できない。その礫の下には、底面から40cmのレベルに60cmほどの大きな板石と小さな板石を組み合わせた礎石が敷かれていた。この礎石の下は礫を含まない硬質の褐色土で埋められていた。

掘り方は、確認時に204号土坑としたもので、平面形は120×97cmの楕円形状を呈し、深さは110cmで、断面形は上方が直線的に開いた逆台形である。

遺物は、上面の38号配石中から後期堀之内1式土器他の破片5点が、204号土坑とした掘り方から堀之内1式土器4点が出土している。

掘り方から出土した土器4点は同一個体であり、柱2の掘り方出土の3と、柱3の掘り方出土の5も、これと同一個体と判断される。

**柱5** 地山の黄色砂質土の上面がわずかに覗く平坦面で確認された。確認時は196号土坑としたもので、上面に礫の集積は認められない。平面形は119×95cmの楕円形を呈し、深さは97cmで、断面形は上方が直線的に開いた逆台形状となる。

断ち割り調査で掘り方中央に直径25cm前後の柱痕が確認された。柱痕は軟質の暗褐色土で埋没していた。掘り方は拳大の礫と地山の黄色砂質土を多く含む褐色土で埋められており、上層に焼土ブロックの堆積が認められた。

なお、遺物の出土は認められなかった。

**柱6** 埋没谷の縁辺部で確認された。確認時は197号土坑としたもので、上面に拳大～20cm大の礫が集積されていた。平面形は82×77cmの円形状を呈し、深さは115cmで、断面形は箱状である。

断ち割り調査では、掘り方中位に根巻きの一部と見られる礫が認められたが、明瞭な柱痕は確認できなかった。掘り方の大半は、地山の黄色砂質土を多く含む硬質の褐色土で埋められており、下層に軟質

の淡褐色土が堆積していた。

なお、遺物の出土は認められなかった。

**柱7** 地山の黄色砂質土の上面が削平された平坦面で確認された。確認時は168号土坑としたもので、上面に礫の集積は認められない。平面形は105×97cmの円形状を呈し、深さは60cmで、断面形は上方が開いた逆台形状となる。

断ち割り調査を実施したが、深さが思いのほか浅く、柱痕は確認されなかった。掘り方内はやや硬質の淡褐色土で埋められており、土器と礫が多く含まれていた。

遺物は、堀之内1式土器破片4点が出土している。このうち1・2・3としたものは大形深鉢口頸部の同一個体であり、柱2の掘り方出土の3・7もこれと同一個体と判断される。

**柱8** 地山の黄色砂質土の上面が削平された平坦面で確認された。この地点は地山土中に多量の礫を含んでいる。確認時は191号土坑としたもので、掘り方上面に拳大～20cm大の礫の集積が認められた。平面形は93×75cmの卵形を呈し、深さは97cmで、断面形は上方が直線的に開く逆台形状となる。地山が砂質土のため、壁面の一部が崩落している。

断ち割り調査では、掘り方中位に根巻きの一部と見られる礫が認められたが、明瞭な柱痕は確認できなかった。掘り方内は地山の黄色砂質土を多く含む軟質の暗褐色土で埋められており、礫の混入は少ない。

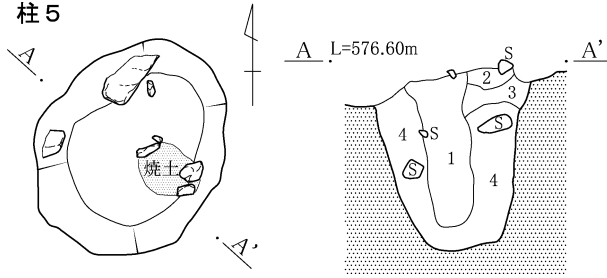
遺物は、埋め土中から堀之内1式土器破片が2点出土している。

**柱9** 地山の黄色砂質土の上面が削平された平坦面で確認された。この地点は、1号石垣の構築で大きく削平されており、地山土中に多量の礫を含んでいる。確認面は石垣南側の面より70cmほど下がっている。

この柱穴の上面には中世の大形土坑が重複しており、確認時は152号土坑とした。中世土坑は220×200cmの不整円形状を呈し、深さは60cmで、断面形は鍋底状となる。土坑の下層に多量の礫が集積されてお

第3章 発見された遺構と遺物

柱5



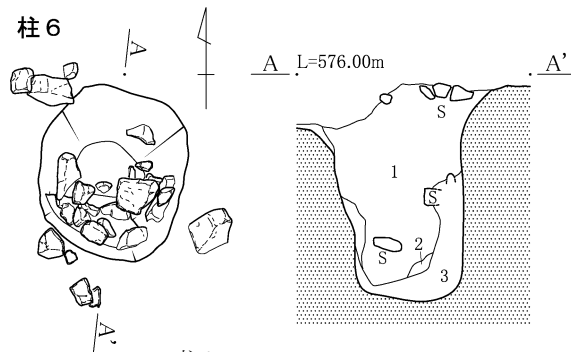
柱5

- 1、暗褐色土 軟質で、地山黄色砂質土を多く含む。
- 2、褐色土と焼土の混土。
- 3、褐色土 軟質で、径1cm大の小礫を多量に含む。
- 4、淡褐色砂質土 軟質で、拳大の礫と地山黄色砂質土を多く含む。



18区3号掘立柱建物 柱5

柱6



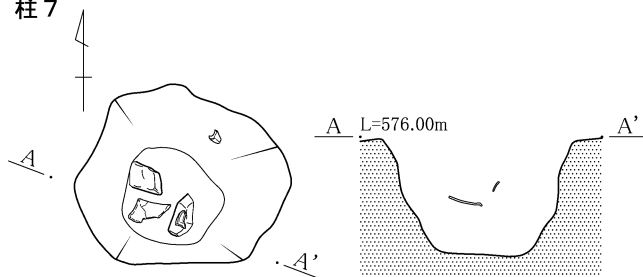
柱6

- 1、褐色土 砂質でよく締まっている。
- 2、暗褐色土
- 3、淡褐色土 砂質で軟質。



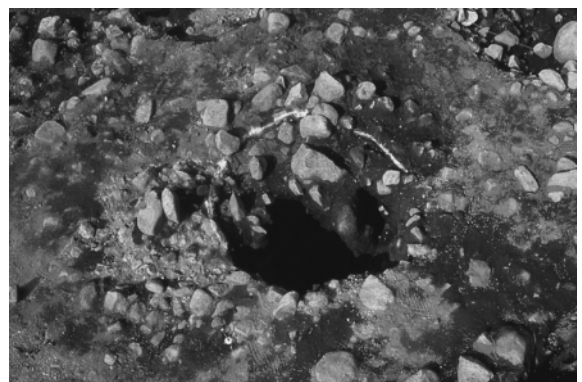
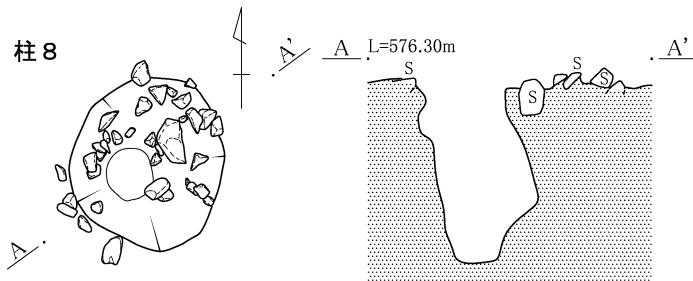
18区3号掘立柱建物 柱6

柱7



18区3号掘立柱建物 柱7

柱8

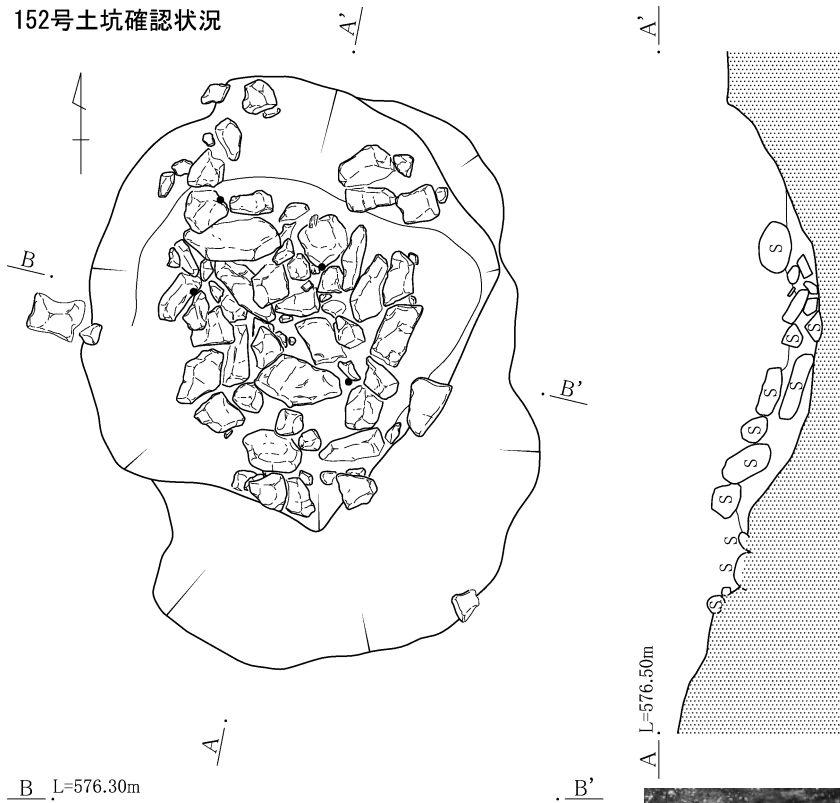


18区3号掘立柱建物 柱8

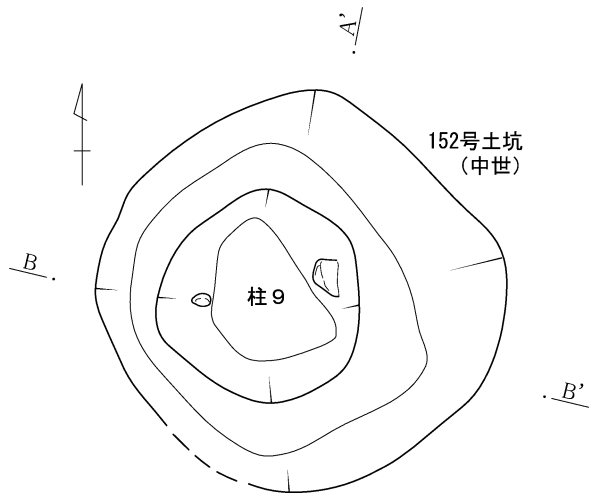
0 1:40 2m

第72図 18区3号掘立柱建物 柱5・柱6・柱7・柱8

152号土坑確認状況



152号土坑確認状況



中央のくぼみが柱9

0 1:40 2m

第73図 18区3号掘立柱建物 柱9

### 第3章 発見された遺構と遺物

り、その中から打ち割られた大形の荒砥石1点(4)と牛馬歯片1点が出土している。

当掘立柱建物の柱9は、その中央部下に僅かに底の一部が残存していた。平面形は110×107cmの円形状を呈し、確認面からの深さは65cmである。埋め土は淡褐色土で、拳大の礫が含まれていた。

遺物は、埋め土中から堀之内1式土器破片2点(1・2)と完形の凹石1点(3)が出土している。

**柱10** 地山の黄色砂質土の上面が削平された平坦面で確認された。削平の状況等は柱9と同様である。確認時は209号土坑としたもので、平面形は107×107cmの円形を呈し、深さは92cmで、断面形は箱形である。

断ち割り調査で、掘り方のほぼ中央に直径20～30cmの柱痕が確認できた。柱痕は、上層から順に地山の黄色砂質土、やや硬質の暗褐色土、軟質の黒褐色土で埋められており、底面には柱状に割った扁平礫を鉤手状に組んだ礎石が敷かれていた。掘り方内は、地山の黄色砂質土を多く含む軟質の褐色土で埋められている。

遺物は、埋め土中から後期堀之内1式土器破片3点が出土している。

**柱11** 地山の黄色砂質土の上面が削平された平坦面で確認された。削平の状況等は柱10と同様である。確認時は190号土坑としたもので、当初は一つの柱穴と捉えていたが、その後の調査で2基の柱穴が重複していることが判明し、北側の深い柱穴を190号、南側の浅い柱穴を195号とした。

190号は、平面形が104×100cmの方形状を呈し、確認面からの深さは98cmで、断面形は箱形である。東側の上部に195号とほぼ同じ深さの段があり、柱穴の位置を微調整したことを示している可能性がある。掘り方の上面には、拳大～30cm大の礫が集積されていた。埋め土は、地山の砂質土を多く含む軟質の暗褐色土で、柱痕は確認されていない。遺物は、覆土中から後期堀之内1式土器破片2点と土製円盤1点、および完形の凹石1点が出土している。

195号土坑は、長軸122cmの方形状を呈し、確認面

からの深さは56cmで、断面形は箱形である。埋め土は、地山の砂質土を多く含む軟質の暗褐色土で、柱痕は確認されていない。また、埋め土中に拳大～30cm大の礫を多く含む。遺物の出土は認められない。

190号土坑との重複関係は不明だが、柱穴の平面規模や埋め土は当掘立柱建物のものと共通しており、当掘立柱建物に関わる柱穴と判断したい。具体的には、柱11の当初計画時の設置位置が195号土坑で、何らかの理由で190号土坑に変更されたと考えたい。

**柱12** 南側の棟持ち柱に該当する柱穴で、縄文時代後期の6号列石と重複し、それに切られている。確認面は、6号列石の構築によって削平された地山の黄色砂質土面で、当柱穴の上に6号列石の根石列が乗った状態で確認されている。

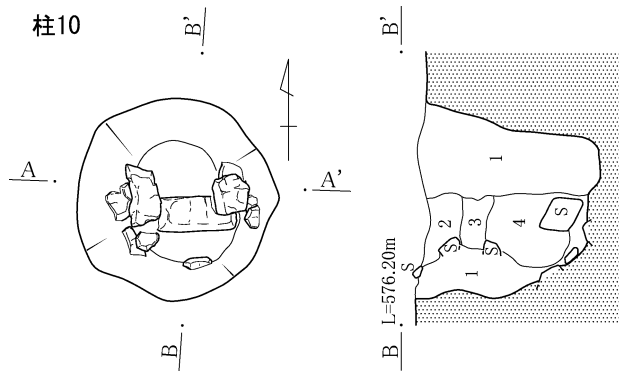
確認時は207号土坑としたもので、平面形は147×123cmのU字状を呈し、深さは172cmで、断面形は箱状である。上面にのる礫は6号列石のもので、当柱穴には礫の集積は認められない。断ち割り調査は実施できなかったため、セクションで柱痕の確認はしていないが、下層部に柱痕を取り囲む根巻き状の礫が残っていた。それによれば、柱痕は掘り方のほぼ中央にあり、その直径は35cm前後である。掘り方内は淡褐色土で埋め土されており、掘り方の壁面には地山土中に含まれる多量の礫が認められた。

なお、遺物の出土はなかった。

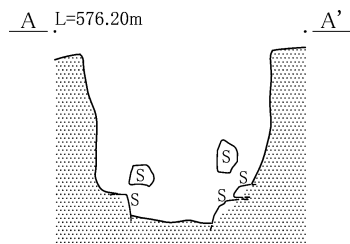
**所見** 棟持ち柱を備えた12本柱長方形の建物で、時期は柱穴内出土遺物から後期堀之内1式期に比定されよう。

各柱穴の調査では、1箇所(柱穴)で上面に配石遺構が伴い、6箇所(柱穴)で上面に礫の集積が認められた。配石遺構は柱2に伴う21号配石で、柱穴の掘り方平面と規模・形態が一致しているが、なぜか北側に50cm、つまり直径の半分だけずらして設置している。その理由はまだ解らないが、この配石は当時の地表面をほぼ示していると考えてよいだろう。上面に礫が集積された6本の柱穴は、いずれも当掘立柱建物の北東側、つまり埋没谷に面した側に当たっており、単なる偶然ではないだろう。6箇所のうち、



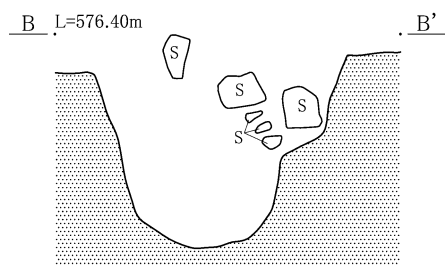
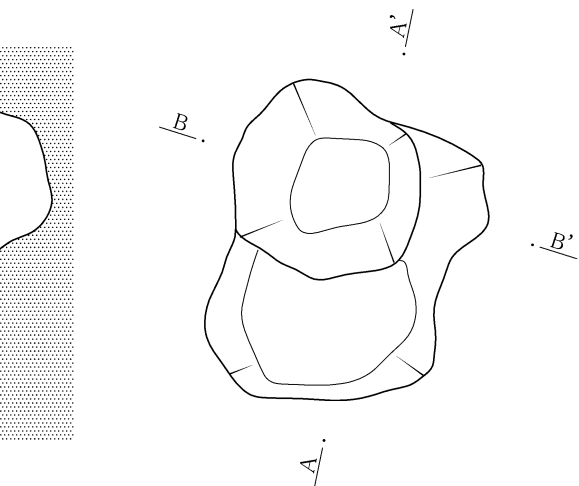
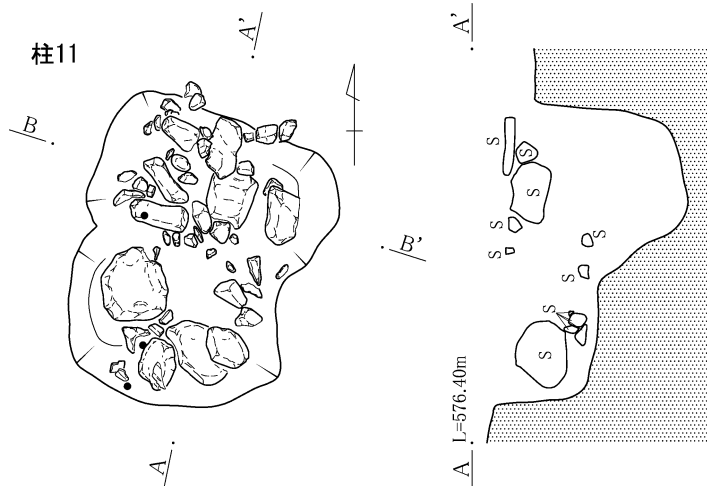


18区3号掘立柱建物 柱10



柱10

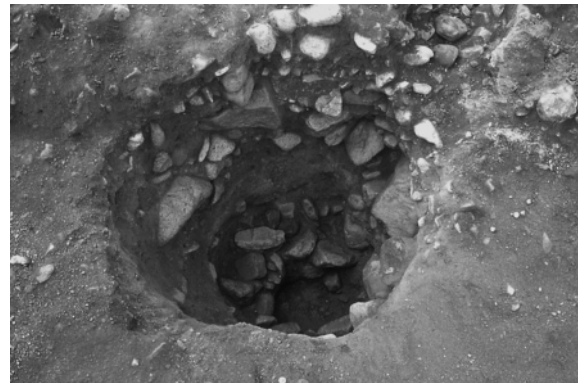
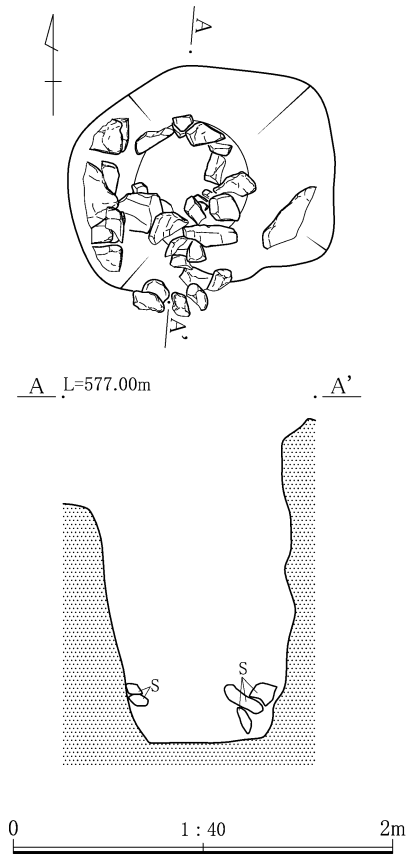
- 1、褐色土 軟質。
- 2、黄褐色土 地山の黄色砂質土を多く含む。
- 3、暗褐色土 やや硬質。
- 4、暗褐色土 軟質で黒みが強い。下部に大きな扁平礫が組んである。



18区3号掘立柱建物 柱11

0 1:40 2m

第74図 18区3号掘立柱建物 柱10・柱11



18区 3号掘立柱建物 柱12

第75図 18区 3号掘立柱建物 柱12

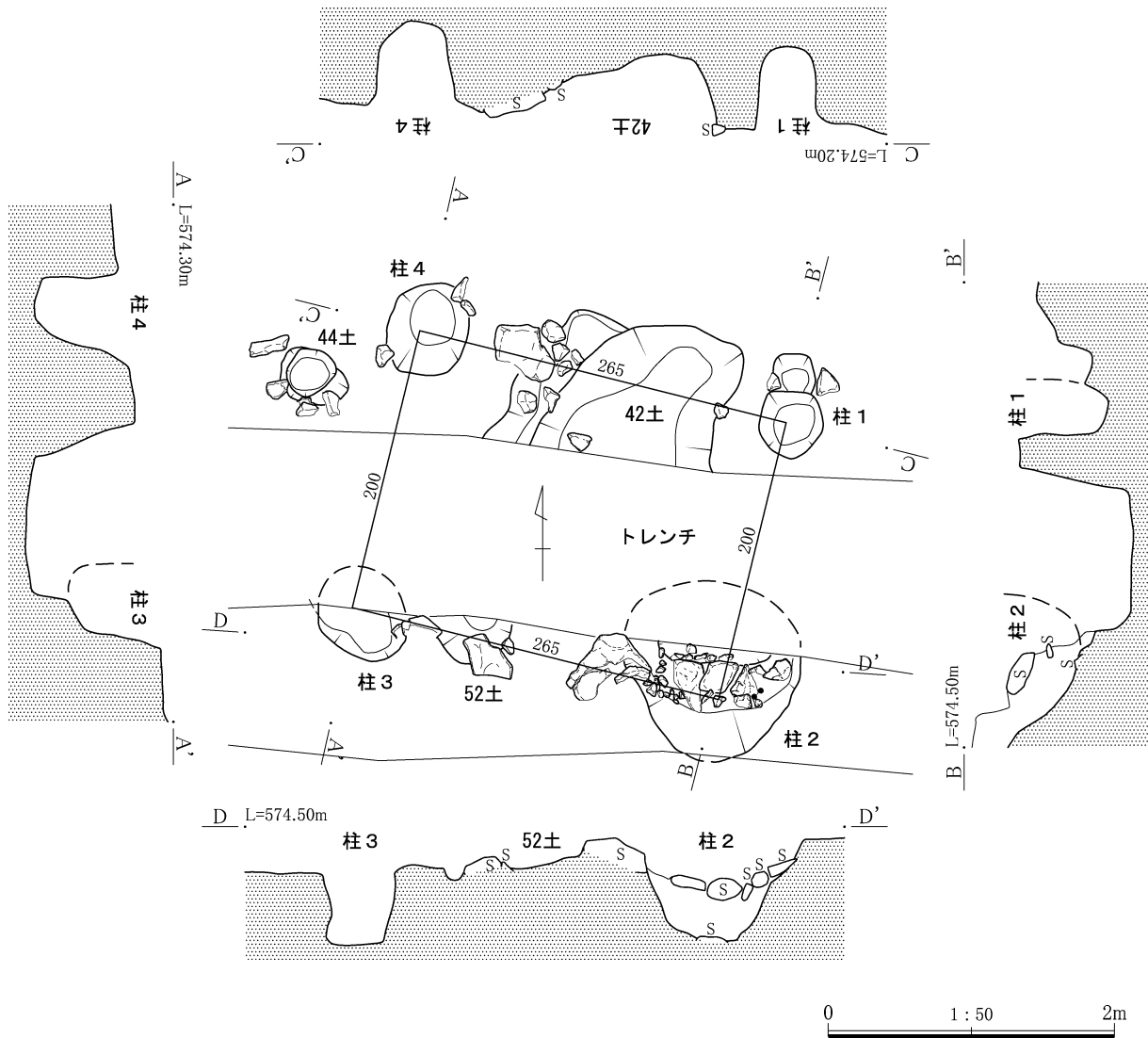
3箇所は大形礫を伴う規模の大きなもので、確認時に配石としたものである。これらは確認面も21号配石とほぼ一致しており、当時の地表面を示しているとの前提に立てば、当掘立柱建物が機能を停止して間もない頃に、この建物に対する何らかの儀礼が執り行われた可能性が高いと考える。

構造的な側面では、5箇所の柱穴で直径30cm前後の円形状の柱痕が確認されており、礫を使用した根巻き状の造作も、5箇所の柱穴で認められた。また、3箇所の柱穴で、底面に板石等を敷いた礎石が確認されている。掘り方底面に礎石を持つのは柱1・柱4・柱10で、柱1は北側の棟持ち柱、柱4は埋没谷の中程に位置する北東隅の柱、柱10は南側の中軸柱にそれぞれ該当する。

出土遺物では、12本の柱穴のうち、9本の柱穴から遺物の出土が認められた。土器はいずれも破片で

の出土で、意図的に埋納されたものはないが、柱2と柱7、および柱2と柱3と柱4から、それぞれ同一個体の土器が出土しており、当遺構の構築時期、および柱穴の時間的共有性を示す、有効な資料となった。

全体の構造に関わる点では、当掘立柱建物は傾斜地の等高線に対して直交する方向に長軸を持っており、南北の棟持ち柱（柱1と柱12）の確認面には1.4mの比高差がある。当掘立柱建物は、この傾斜に対して、あえて長軸を直交させて構築しており、平地式あるいは竪穴式の構造は考えがたく、高床構造の建物と考えるのが最も妥当であろう。その場合、傾斜地の下方にあたる北側の短辺と南側の短辺では、1m前後の高位差があり、地盤の高い南側の床が地表から1mの高さであったとすれば、北側では2mとなり、その時の屋根の高さは、かなりのものとなっ



第76図 18区4号掘立柱建物

たことが想定される。

18区4号掘立柱建物

調査年度 平成13年度

位置 W-19グリッド他

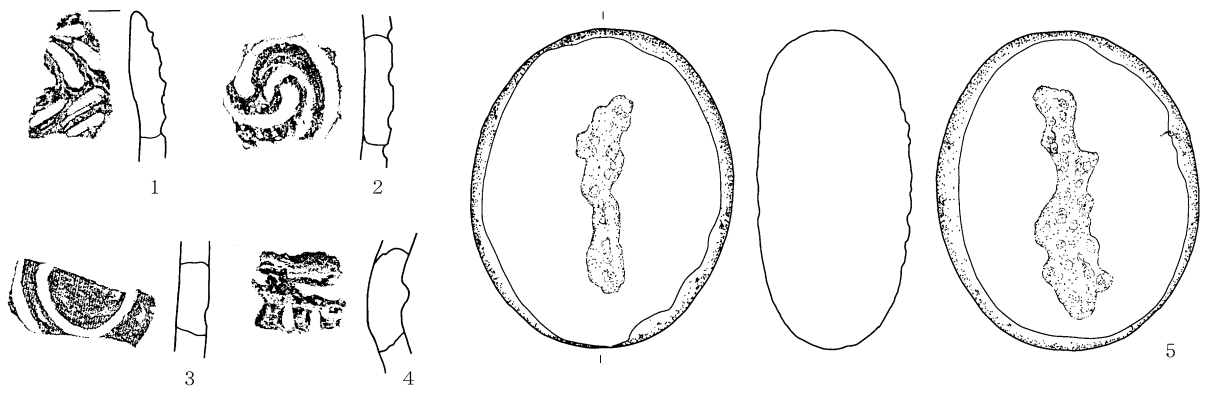
方位 N77度W

確認状況 平成13年度に18区の調査を再開するにあたり、確認調査を実施した際にトレンチにかかって柱2と柱3が確認された。当初は土坑として扱ったが、調査の終盤になって周辺で土坑数基が確認され、しっかりとした柱穴状の土坑4基が長方形の規格で

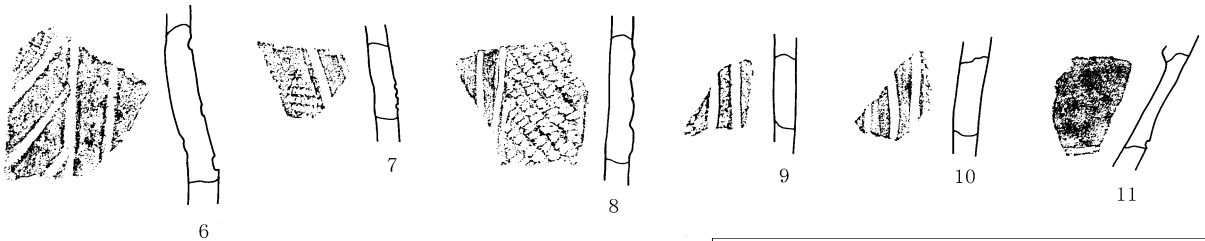
並ぶことから、掘立柱建物と判断した。確認面は地山の黄色シルト～砂質土で、上面には礫が多く認められた。

なお、平成13年度調査時には18区1号掘立柱建物としたが、次年度への引継ミスで遺構名が重複したため、今報告では改めて4号掘立柱建物として扱うことを付記する。

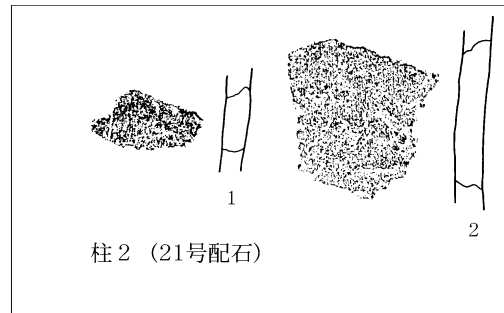
形状 斜面地の等高線方向にほぼ平行して、東西に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は方形に近い長方形を呈し、規模は東西方向が265cm、南北方向が200cmである。柱2は明確さに欠けるが、他の柱



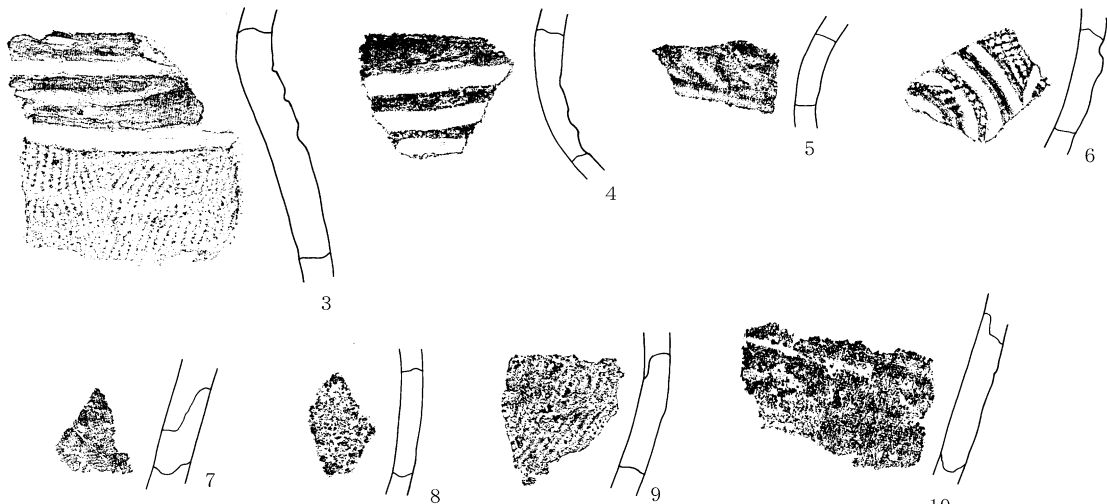
柱1 (37号配石)



柱1 (206号土坑)



柱2 (21号配石)

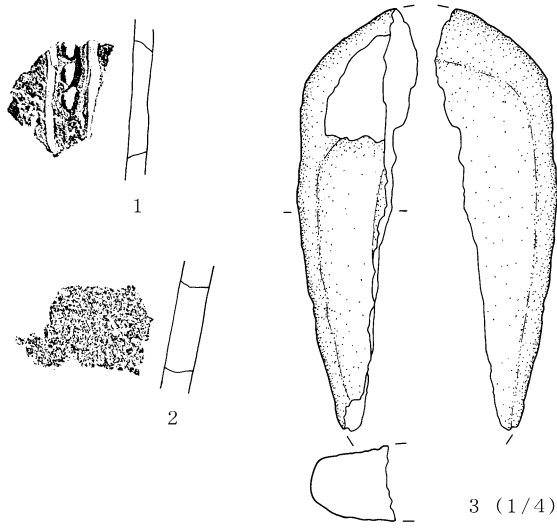


柱2 (194号土坑)

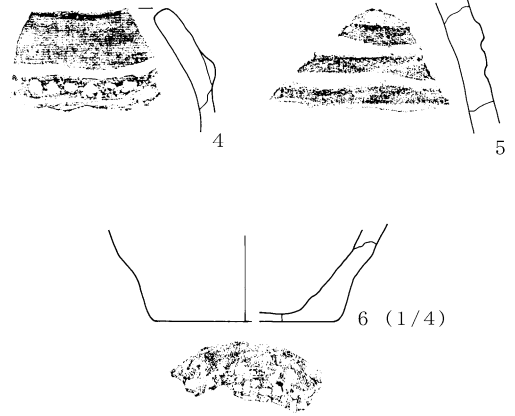
0 1:3 10cm

第77図 18区3号掘立柱建物出土遺物(柱1・柱2)

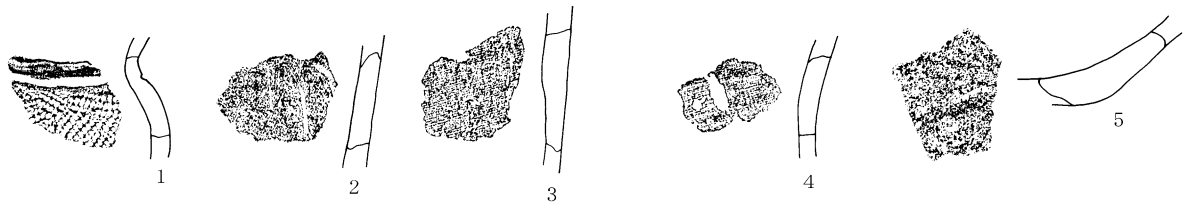
第4節 掘立柱建物



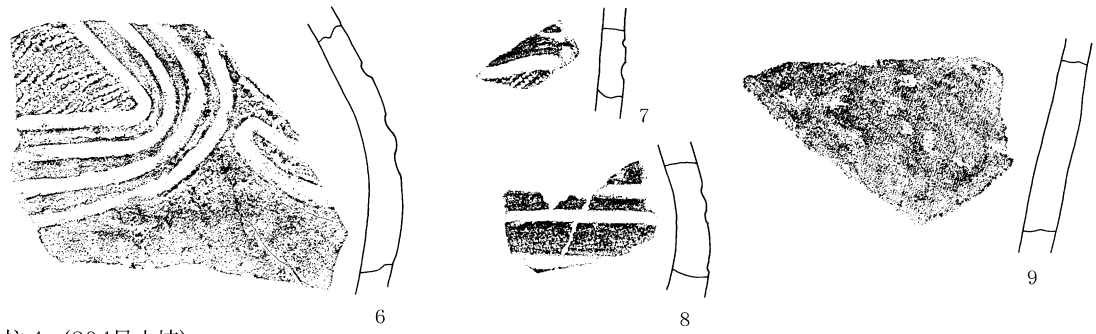
柱3 (22号配石)



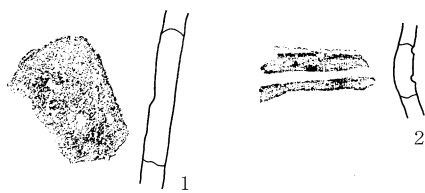
柱3 (205号土坑)



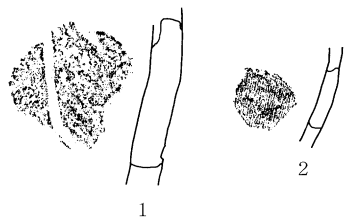
柱4 (38号配石)



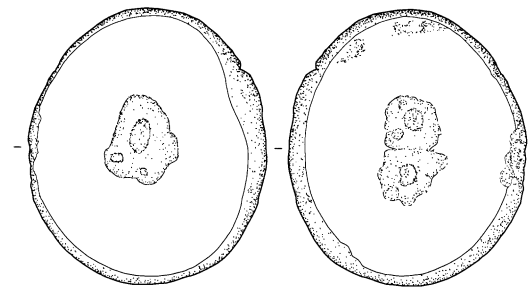
柱4 (204号土坑)



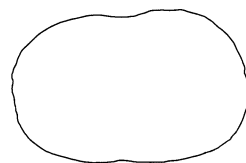
柱8 (191号土坑)



柱9 (152号土坑)

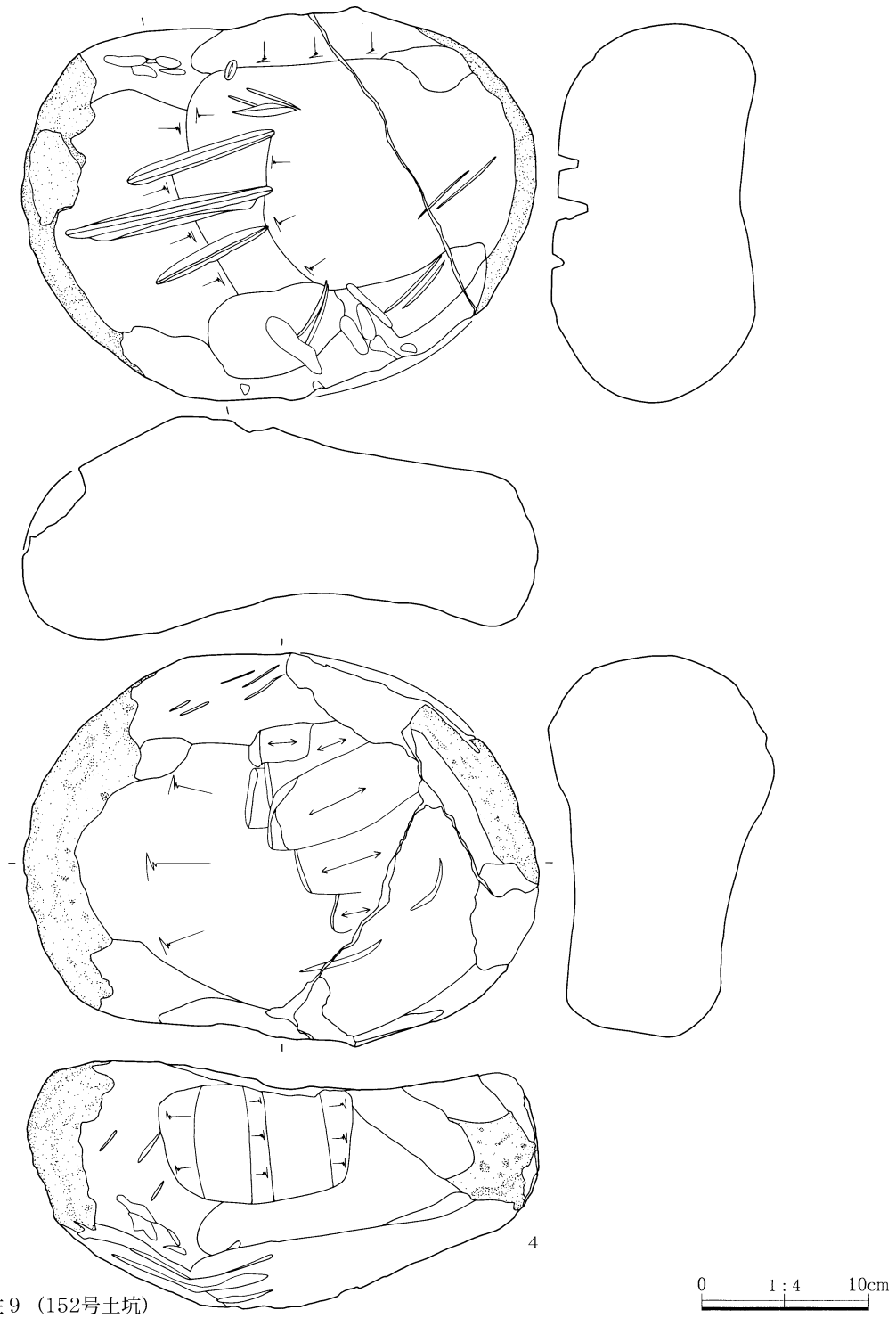


3

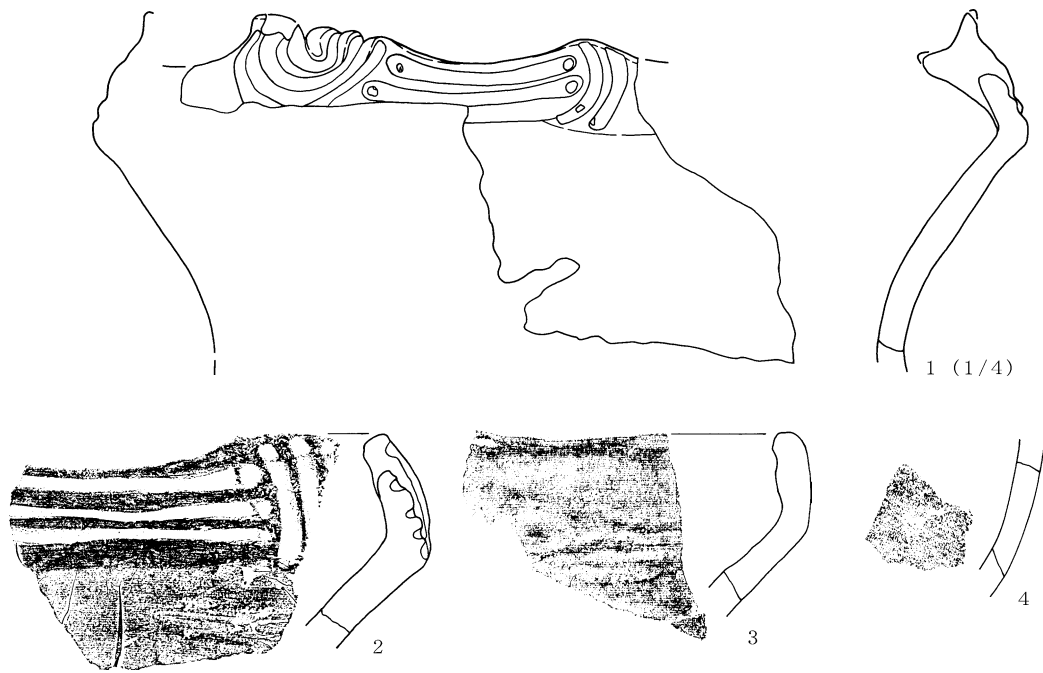


0 1:3 10cm

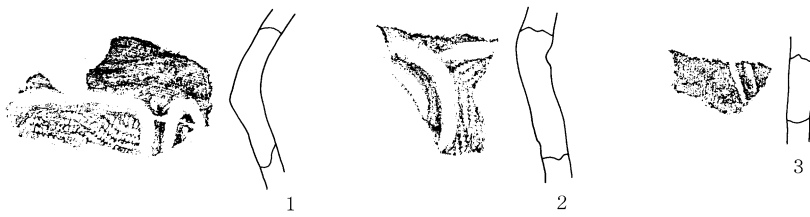
第78図 18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱3・柱4・柱8・柱9)



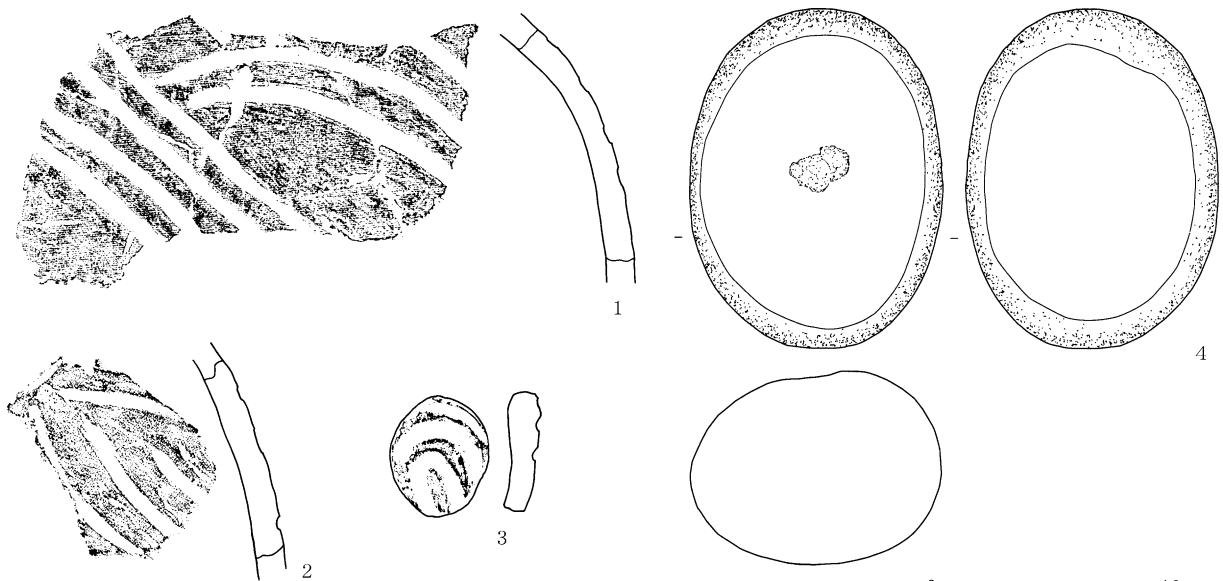
第79図 18区3号掘立柱建物出土遺物(柱9)



柱7 (168号土坑)



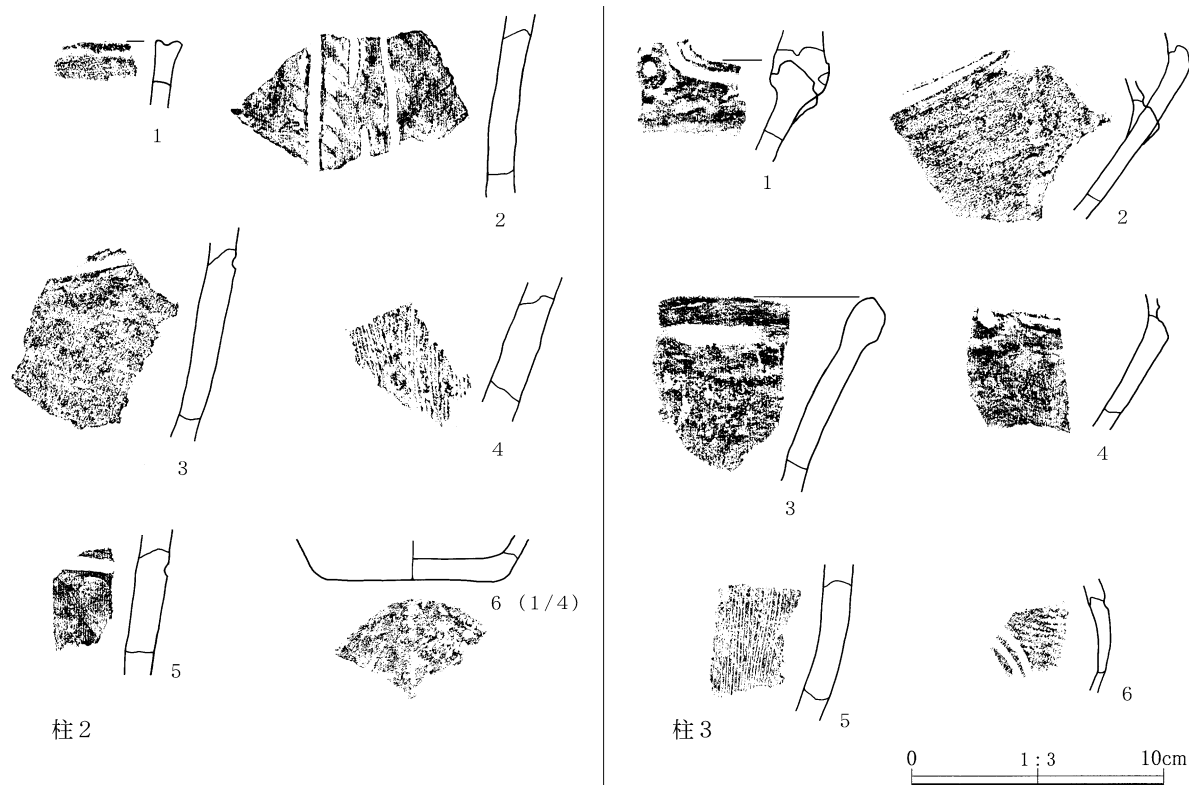
柱10 (209号土坑)



柱11 (190号土坑)

第80图 18区3号掘立柱建物出土遺物(柱7・柱10・柱11)





第81図 18区4号掘立柱建物出土遺物（柱2・柱3）

穴は直交する位置にある。

**柱 穴** 確認時の遺構名は、柱1が41号土坑、柱2が56号土坑、柱3が51号土坑、柱4が43号土坑である。このうち、柱2と3はトレンチにかかって北側半分を消失している。平面形は、柱2を除いて、直径50cm前後の円形を呈し、断面形は円筒状で、確認面からの深さは50～60cmである。柱2は上方が大きく開き、中位に多量の礫が集積されていた。残存部直径108cm、深さは72cmである。

**伴出遺物** 柱2から後期堀之内1式土器を主体とする破片6点、柱3からも後期堀之内1式土器を主体とする破片6点が出土している。

**所 見** 規模の小さな建物であるが、柱穴の配置には規格性が認められる。時期は、複数の柱穴の出土土器の時期が共通しており、後期堀之内1式期に比定されよう。

**20区1号掘立柱建物**

**調査年度** 平成11年度

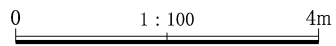
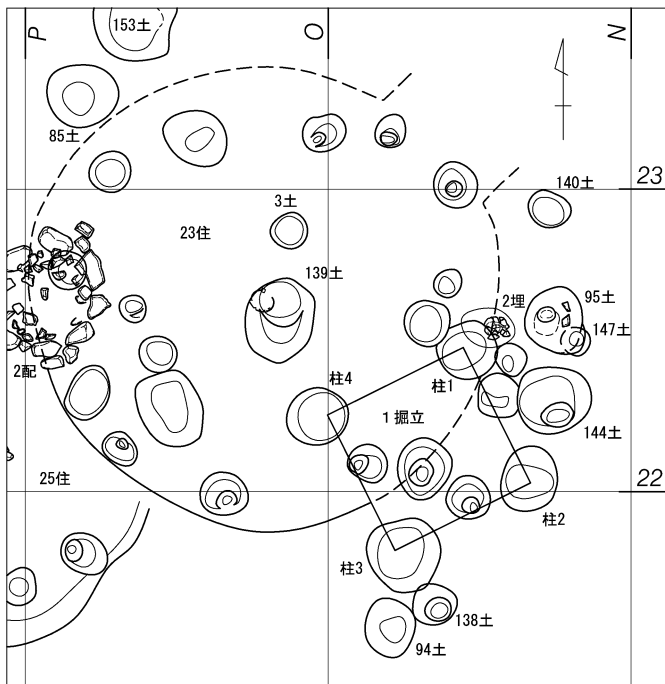
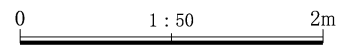
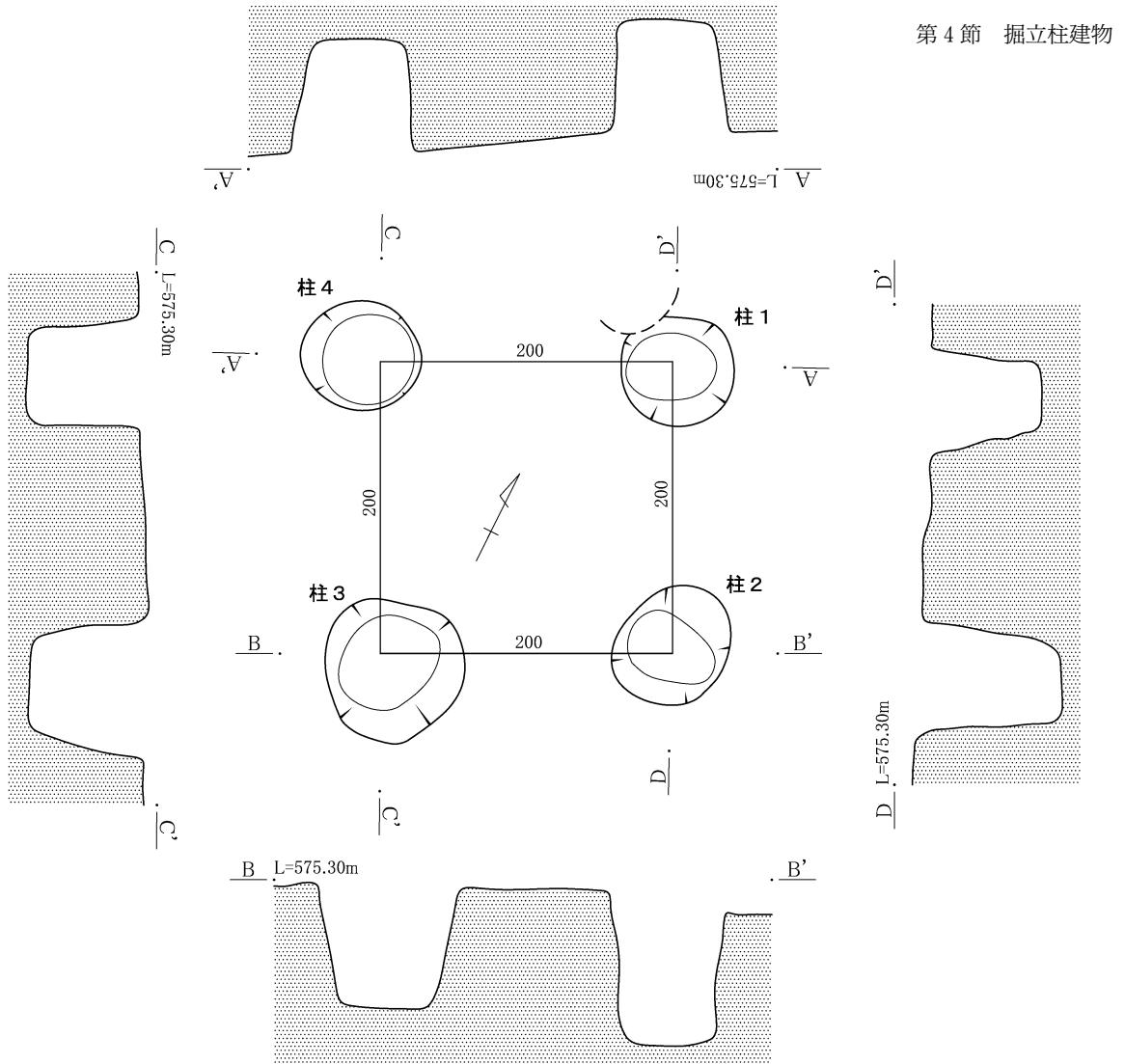
**位 置** N-21～22グリッド

**方 位** N35度W

**確認状況** 平成11年度の最終確認で、中期加曾利E4式期の23号住居に重複する大形の柱穴4基を確認した。住居に隣接する97号土坑が、23号住居の柱3・柱17と直交する位置にあり、規模も同規模であることから、規格性を重視して115号土坑を割り出した。6本柱も考慮して周辺を調査したが、この他に大形の柱穴は確認できなかった。

**形 状** 斜面地の等高線方向に対角線を合わせて設置した1×1間の建物で、平面形は正方形を呈し、規模は1辺200cmである。柱穴の規模、および直交する規格がよく揃った建物である。

**柱 穴** 形状や規模はよく揃っており、いずれも円筒状の形態を保っている。埋め土は、上層に硬質の暗褐色土、中層以下は淡褐色土で埋没しており、



第82図 20区1号掘立柱建物

### 第3章 発見された遺構と遺物

柱痕は確認されていない。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が82×78×76cm、柱2が87×73×82cm、柱3が98×98×87cm、柱4が83×76×83cmである。

**伴出遺物** 出土遺物は認められなかった。

**所見** 20区で確認された掘立柱建物は、いずれも中期後半環状集落の中央空白部にあり、規模は当遺構より大きい。当遺構は単独で構築されており、正方形のよく整った規格を持ち、方位も当遺跡では独自性を持っている。柱穴内からの出土遺物はないが、23号住居を切っている可能性が高いことから、後期に比定したい。

#### 20区 2号掘立柱建物

**調査年度** 平成13年度

**位置** I～J-19～20グリッド

**方位** N82度W

**確認状況** 中期後半期環状集落の中央空白部の南寄りで確認された。この地点は、後世の石垣や道の造成に伴ってかなりの削平をうけており、確認面は地山の黄色シルト～砂質土面で、地山面には全面に大量の地山礫が累々と点在している。ここには、大形の柱穴状落ち込みが数多く点在しており、そのなかから規格性を持った配置をとるもの2組を取り上げた(2号、7号)。当遺構はそのうちのひとつで、すぐ東側に7号掘立柱建物が隣接する。

調査時には、この2組のほかにも建物を想定して取り組んだが、果たせなかった。2号掘立柱建物と認定したのは柱1～柱6までであるが、柱7～柱12の出土遺物も参考として掲載してある。また、整理段階でも、平図面上で規格を持つ方形の組み合わせを検討した。波線で結んだのがそれであり、参考として掲載しておく。

**形状** 傾斜地の等高線方向に平行して、東西方向に長軸を持つ1×2間の6本柱建物で、平面形は長方形を呈し、規模は東西方向が510cm、南北方向が280cmである。東西方向の中間に位置する柱2・柱5と両側との距離は、250cm前後である。

**柱穴** 2号掘立柱建物の柱穴は柱1～柱6までであり、柱7～柱12は参考として掲載した。

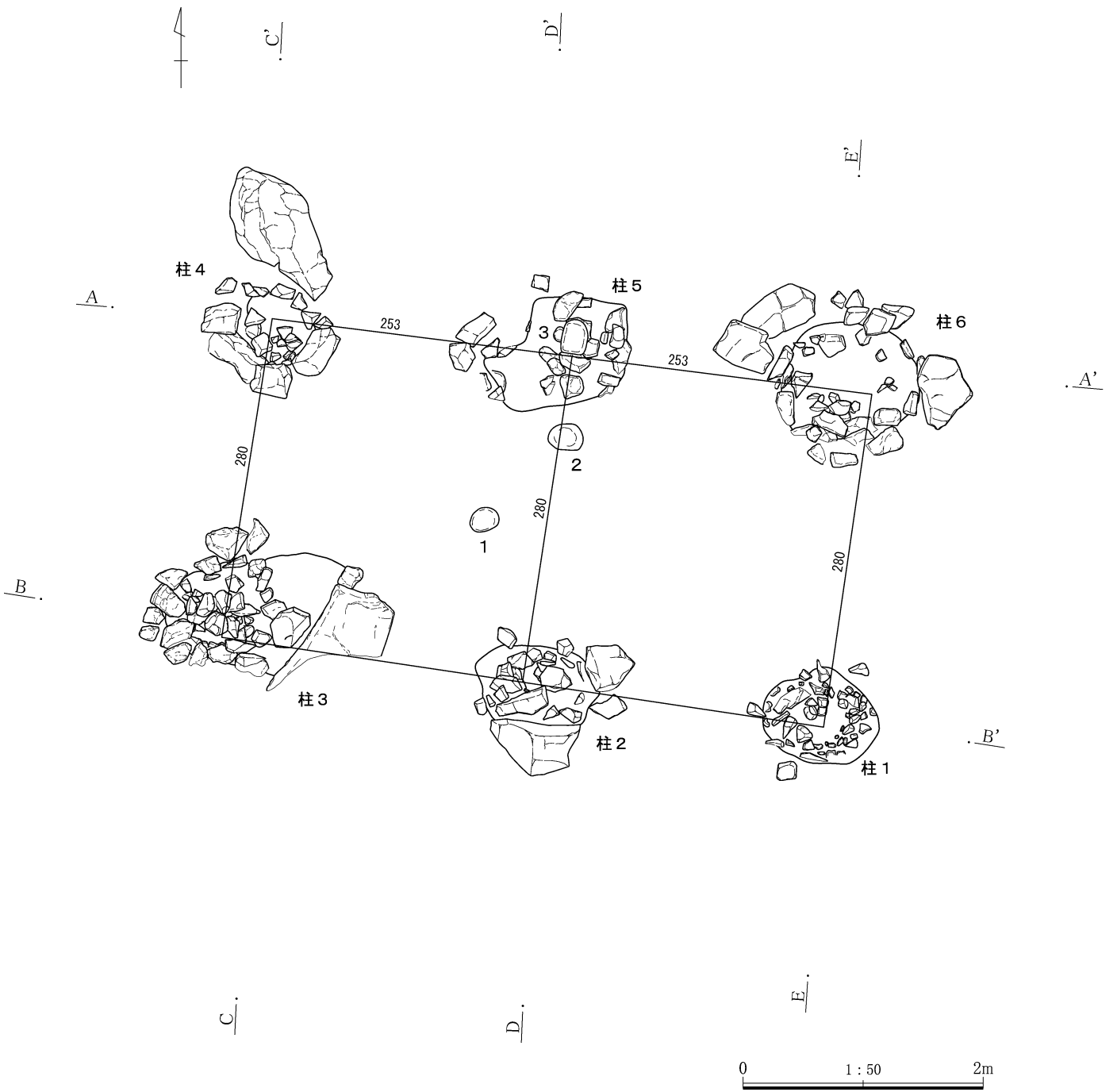
当遺構の柱穴は、平面形が楕円形状を呈するものが多く、なかには不定形のものもあるが、その多くは無数の地山礫に阻まれた結果と考えられる。規模は長軸99～136cm、短軸75～102cmで、深さは32～99cmである。深さが浅いものが多いのは、確認面が下がっているからで、断面図C・D・Eを見ると、柱穴底面の標高はほぼ揃っていることがわかる。おそらく、構築時は1m以上の深さがあったものと想定されよう。

柱穴内には多量の礫が詰まっており、柱1・柱2・柱4・柱6では、ほぼ中央に柱痕が確認された。柱痕の大きさは直径25cm前後で、礫はそれを取り巻くように根詰めされていた。

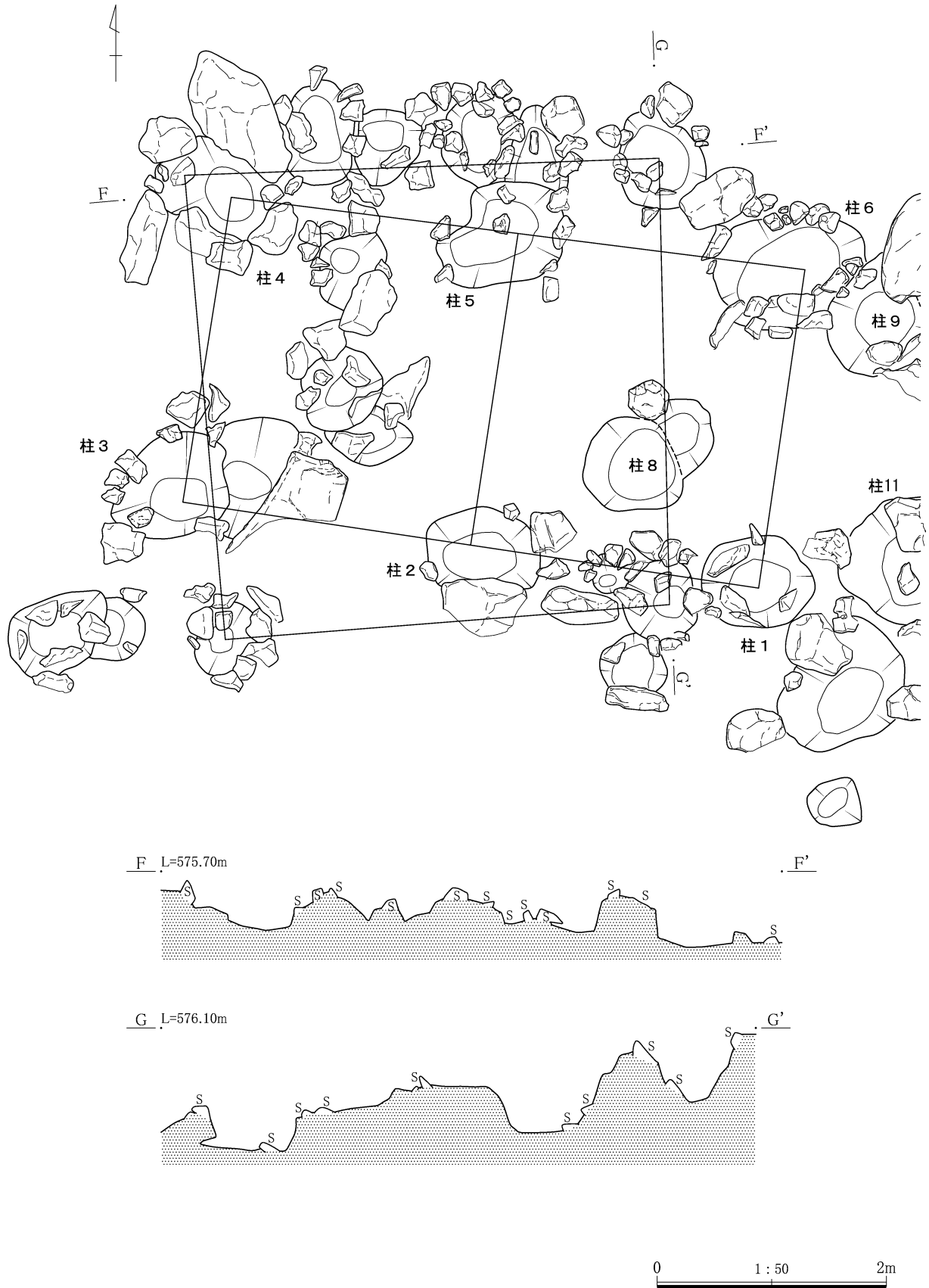
なお、参考の柱7～柱12も、ほぼ同様の規模を持っている。

**伴出遺物** 各柱穴から比較的多くの遺物が出土している。出土土器の時期は、中期後半加曾利E3式～E4式が主体であり、一部に後期前半の土器も僅かに含まれている。なお、第88・89図の台石3点は、本建物の範囲内で確認されたものである。

**所見** 焼土と被熱した礫を伴っており、土器の内面上位にも被熱痕跡が認められることから、当遺構は住居の炉であった可能性が高いと判断される。時期は、使用された土器から後期前半期に比定されよう。

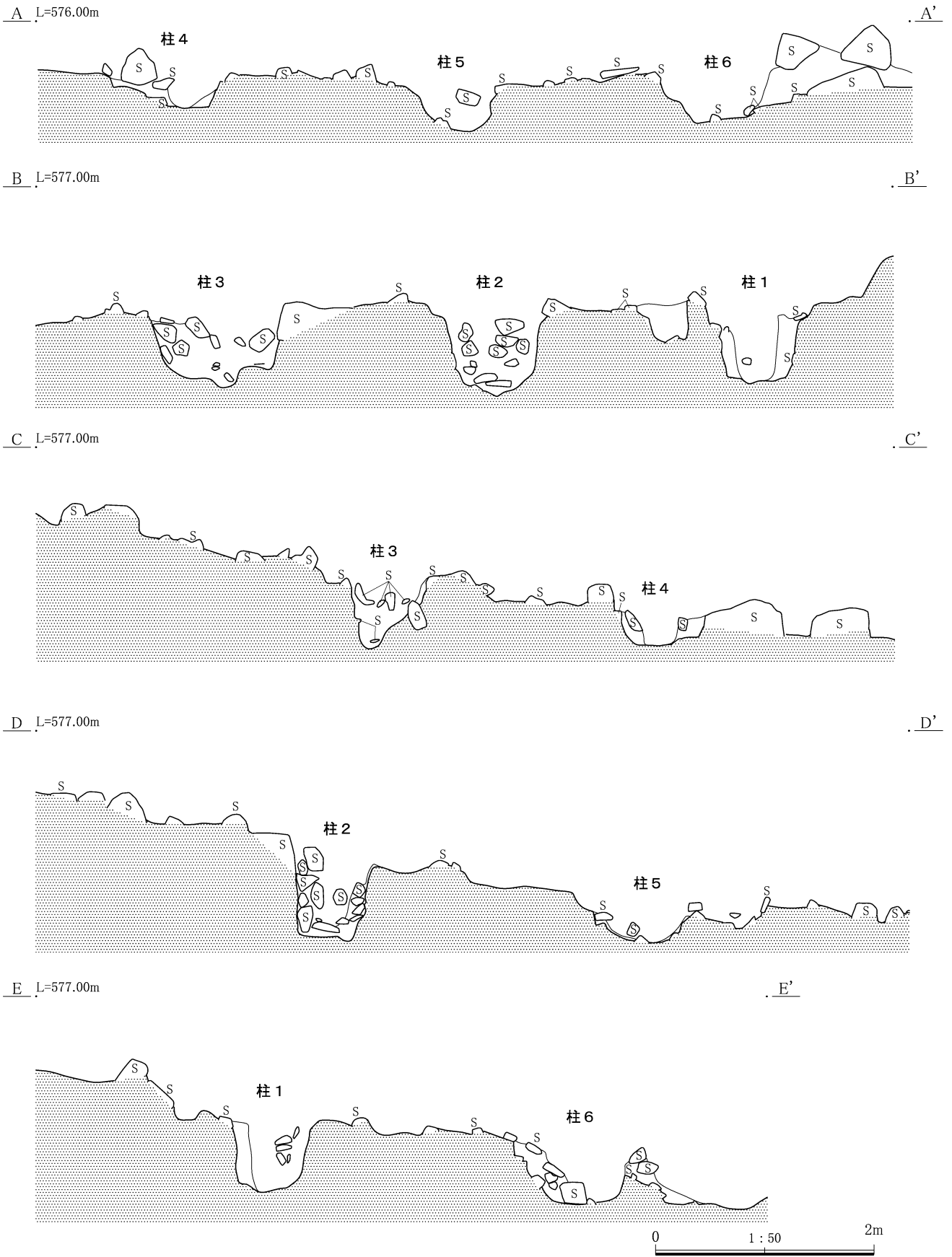


第83图 20区2号掘立柱建物(1)



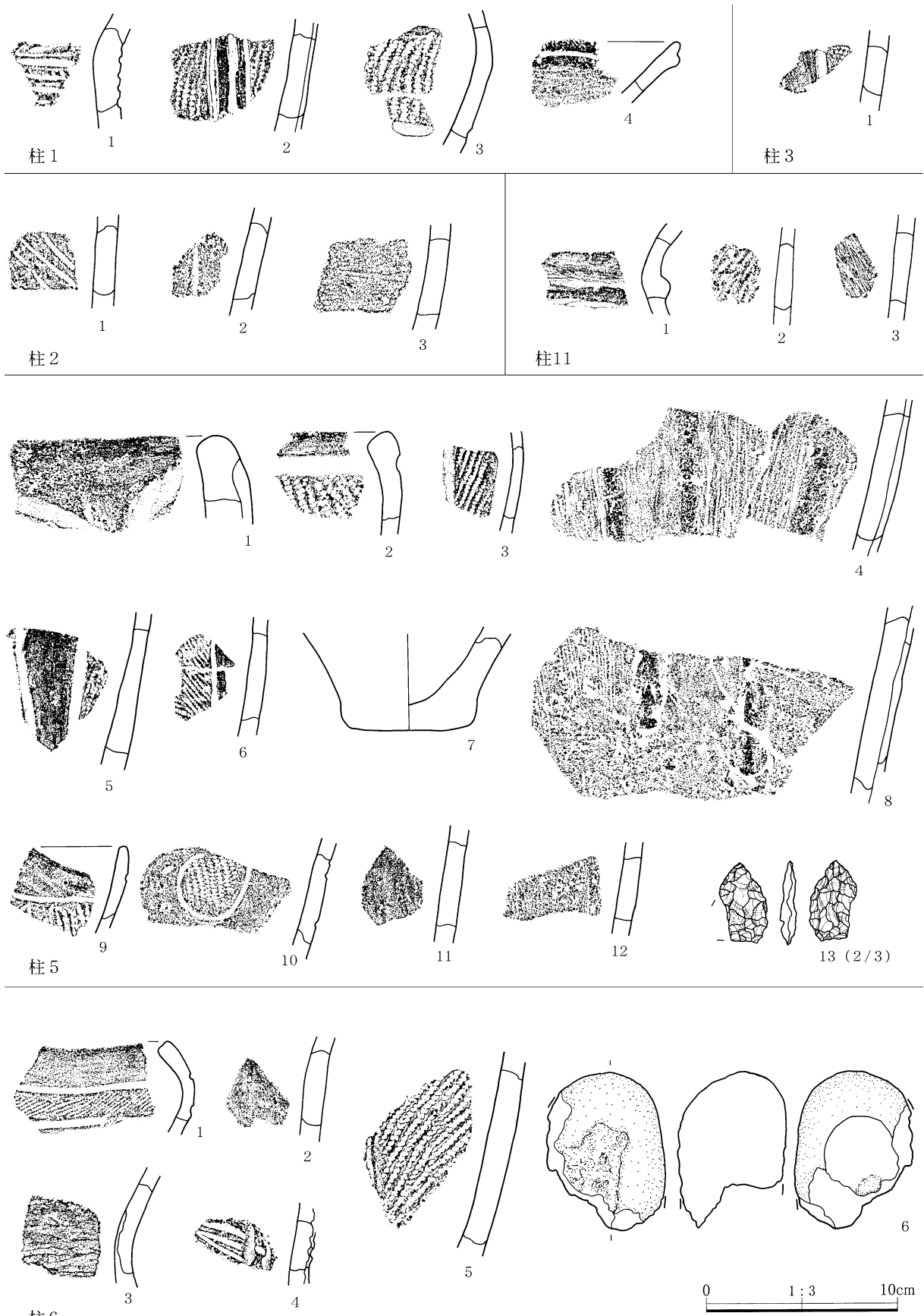
第84図 20区2号掘立柱建物(2)

第4節 掘立柱建物



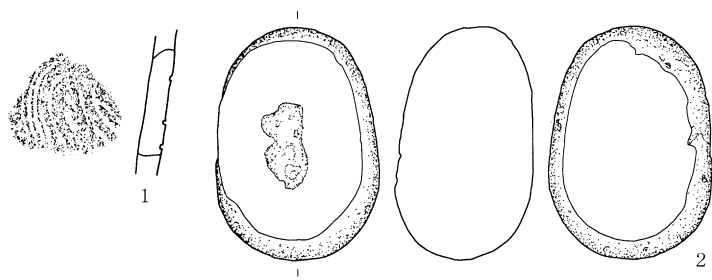
第85図 20区2号掘立柱建物(3)

第3章 発見された遺構と遺物

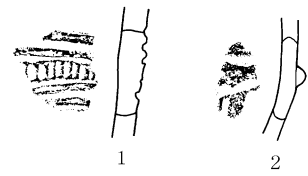


第86図 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・5・6・11)

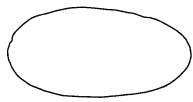
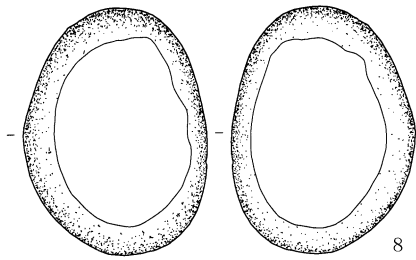




柱7

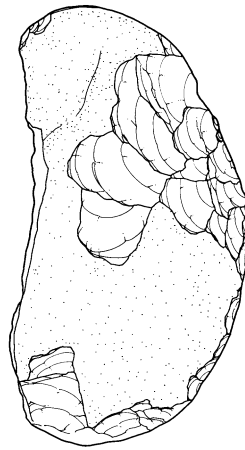


柱12

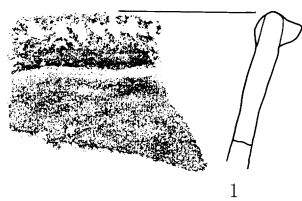


柱8

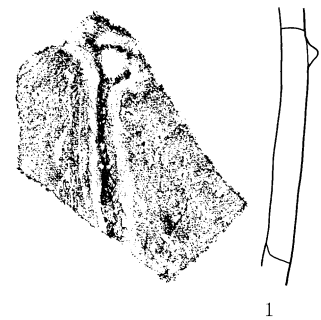
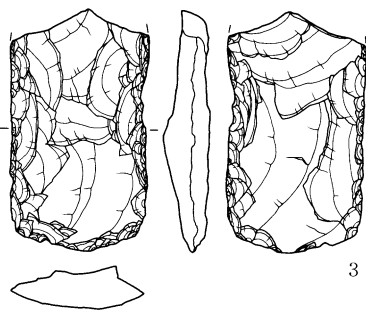
9 (2/3)



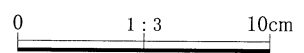
10



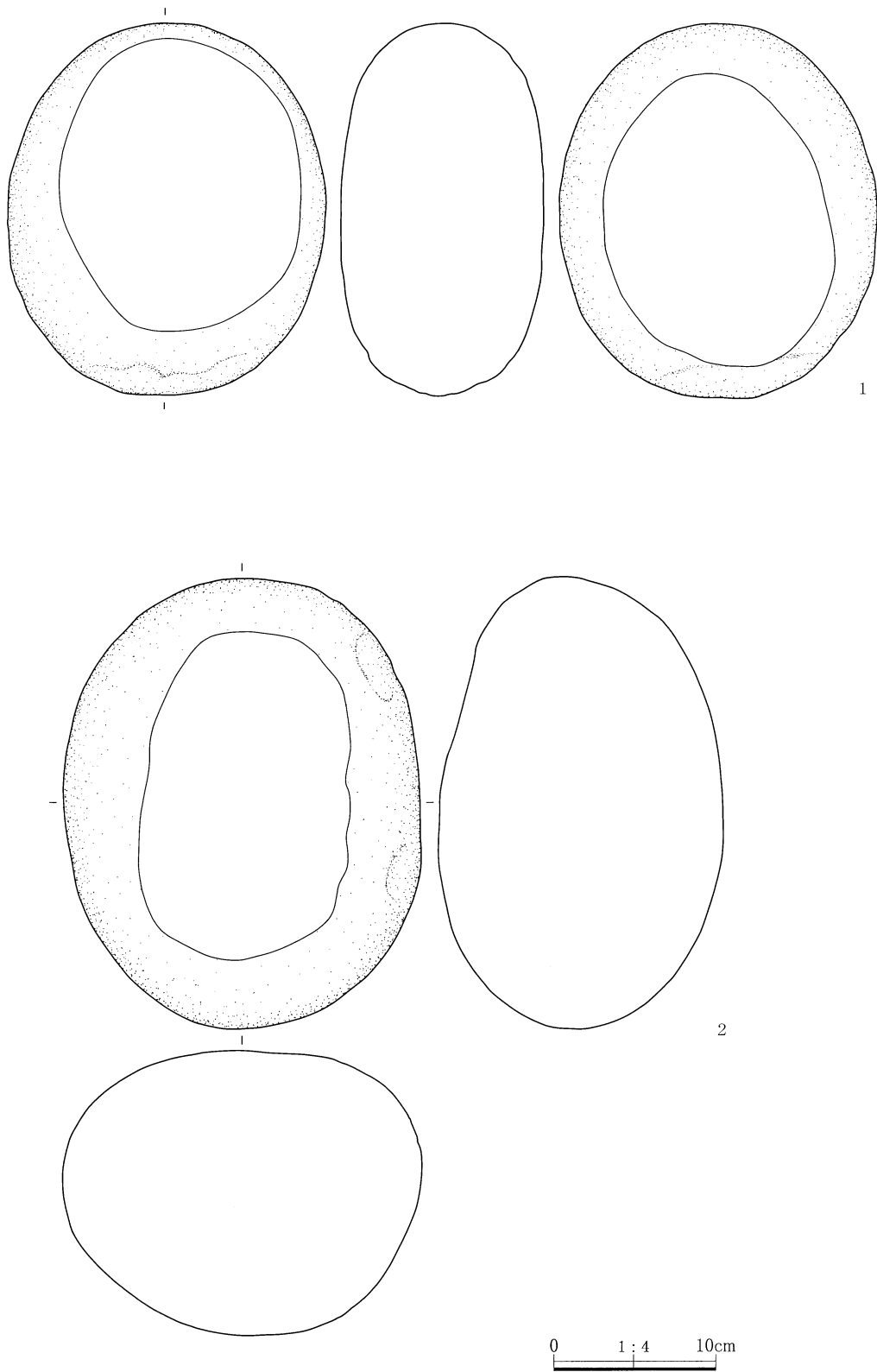
柱9



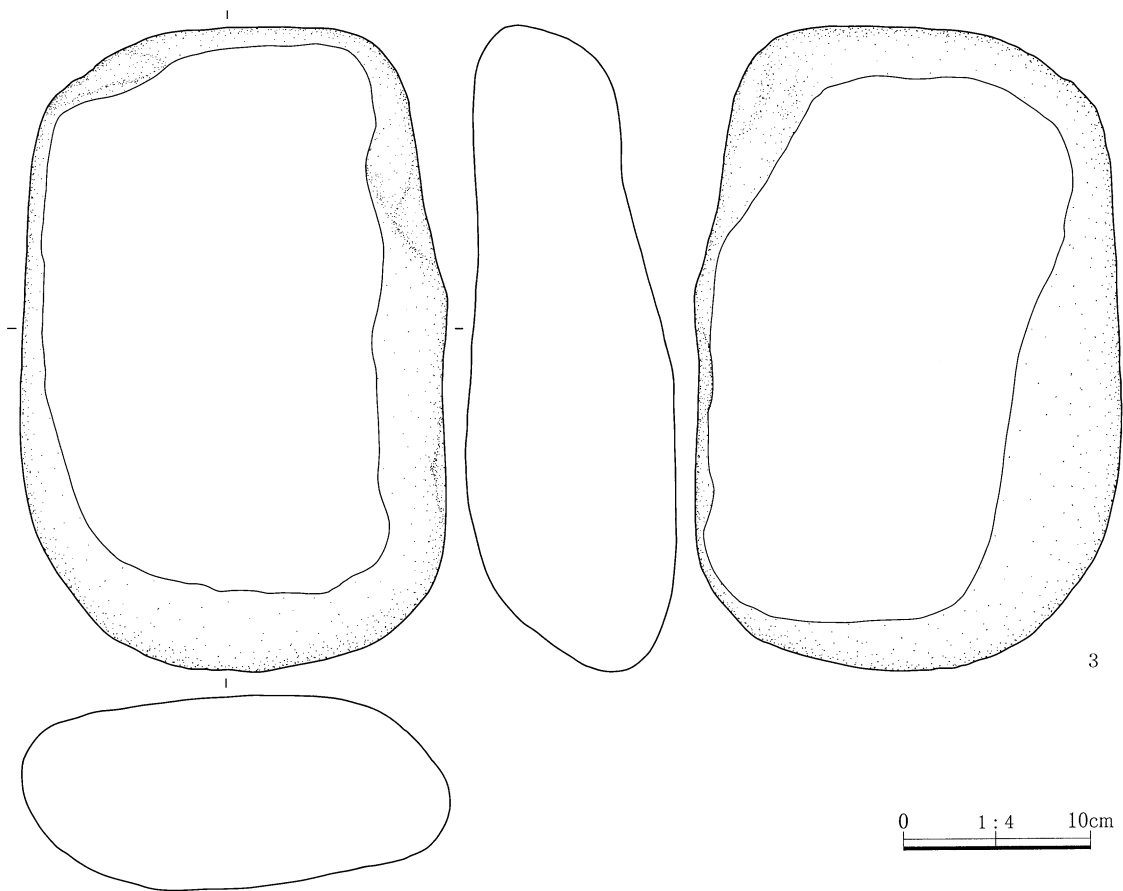
柱10



第87図 20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱7・8・9・10・12)



第88図 20区2号掘立柱建物出土遺物(1)



第89図 20区2号掘立柱建物出土遺物(2)

**20区5号掘立柱建物**

調査年度 平成13年度

位 置 H-22グリッド

方 位 N88度~90度E

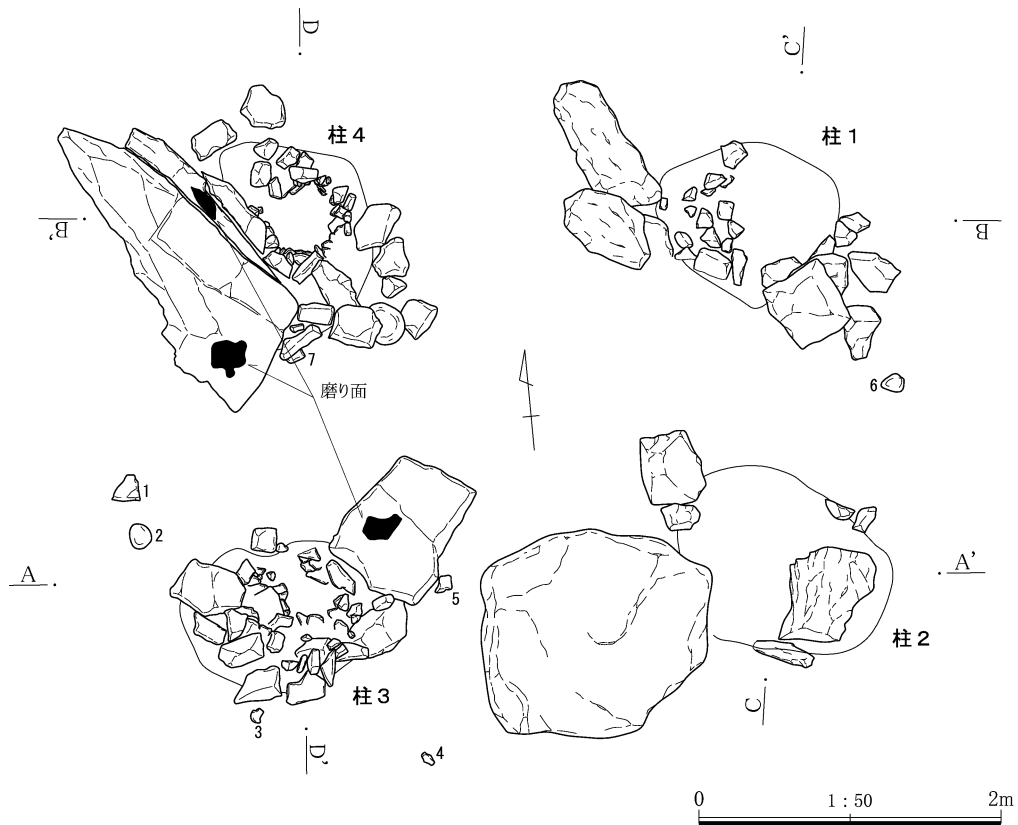
**確認状況** 中期後半期環状集落の中央空白部の中央部で確認された。この地点も地山に礫を多量に含んでいる。そのなかでも、ひととき大きな地山礫が集積した場所で、当遺構は確認された。確認面は、当初は黒褐色土面であったが、遺構の正確な把握ができないことから、最終確認は地山の黄色シルト上面まで下げて調査した。

**形 状** 傾斜地の等高線方向にほぼ平行して、東西方向に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は平

行四辺形状にやや歪んだ長方形を呈し、規模は東西方向が312~326cm、南北方向が234~244cmである。

当遺構は、北西から南東方向に並ぶ3つの大形地山礫に接して構築しており、そのうち柱3と柱4に接する地山礫の上面平坦部には、明瞭な人為的磨り面が確認された。この磨り面が、いつの時期のものかは不明だが、柱4に接する大形礫は長さ2mの規模があり、地山の黄色シルト中にしっかりと埋没し、その面から50cmほど突出している。

**柱 穴** 柱穴の平面形状はほとんどが不定形であるが、これは無数の地山礫に阻まれた結果であり、その大きさはほぼ揃っている。柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）は、柱1が125×101×91cm、柱2が156×



第90図 20区5号掘立柱建物 確認状況

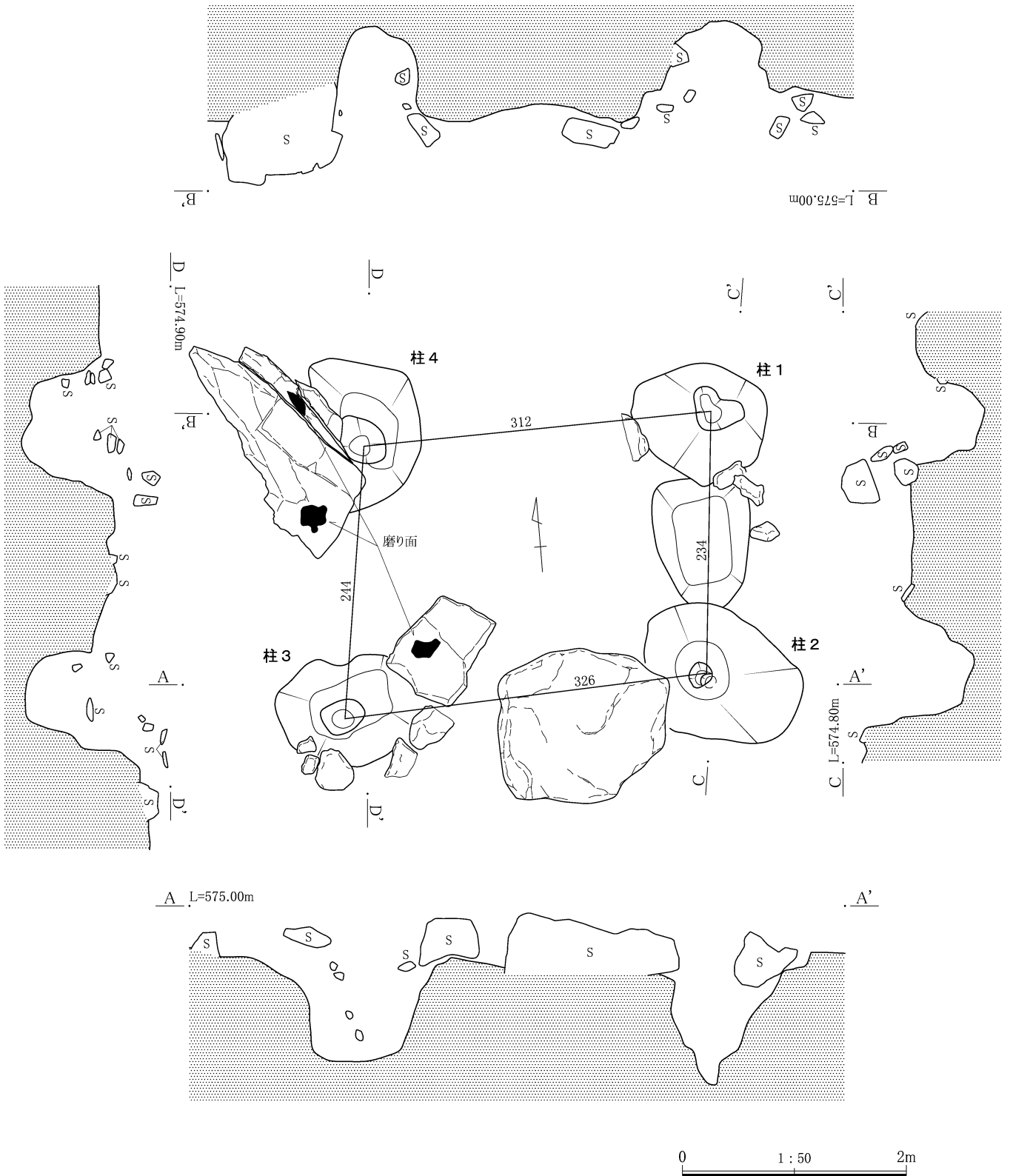
118×119cm、柱3が140×97×103cm、柱4が139×137×95cmである。この数値は地山の黄色シルト面でのもので、断面図に見られる小礫の上面が当初の確認面であるから、深さはさらに20～30cmを加えた数値になる。

柱穴内はいずれも軟質の黒褐色土で埋められており、土層断面で柱痕は確認できなかったが、柱穴底面に直径20～30cmの柱痕状の凹みが確認できた。この凹み穴による各柱間の距離は、柱1と柱2が234cm、柱2と柱3が326cm、柱3と柱4が244cm、柱4と柱1が312cmである。

**伴出遺物** 各柱から中期から後期の土器破片が出土しており、その中から時期特定に必要なものを第92図に示した。主体となるのは、中期加曾利E3式～4式土器と後期加曾利B2式～3式土器で、両者の時

間差は大きい。また、第93図～第94図に示した石器は、柱穴の上面に接して集積されていた礫の中から、あるいは隣接して出土したものである。敲石(2・4)、台石(5・7)の他に、石棒の破片(1)や軽石未製品(3)、丸石(5)などの非実用の石器もある。

**所見** 柱4に接する大形地山礫は、縄文時代においても地山から突出していた可能性が高く、その前提に立てば、当遺構は高床の構造だったことになる。時期は、出土遺物のみで判断すれば、後期加曾利B2式～B3式期に比定される。

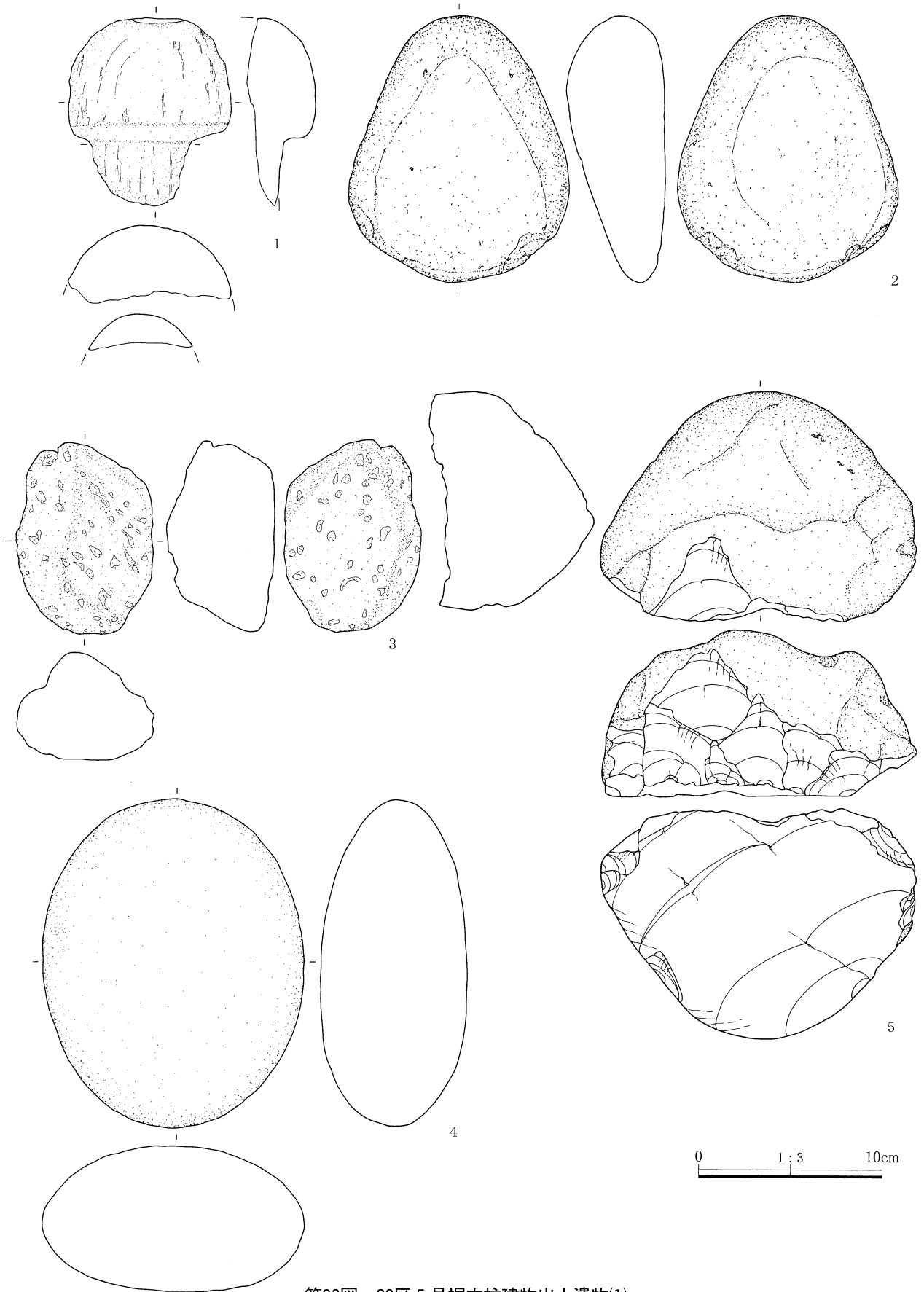


第91図 20区5号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物

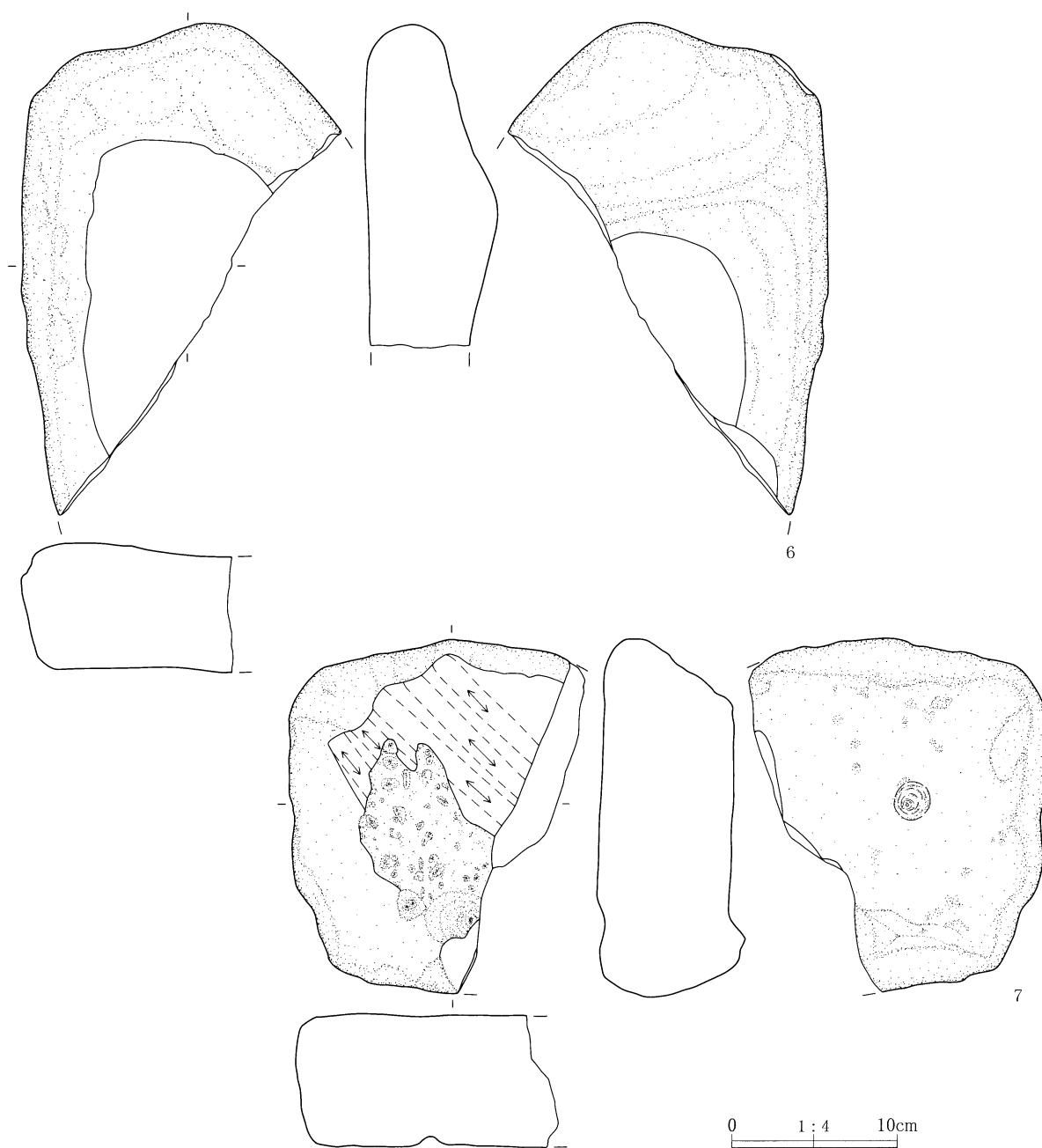


第92図 20区5号掘立柱建物出土遺物（柱2・柱3・柱4）



第93図 20区5号掘立柱建物出土遺物(1)





第94図 20区5号掘立柱建物出土遺物(2)

20区6号掘立柱建物

調査年度 平成13年度

位置 C～D-22グリッド

方位 N77度E

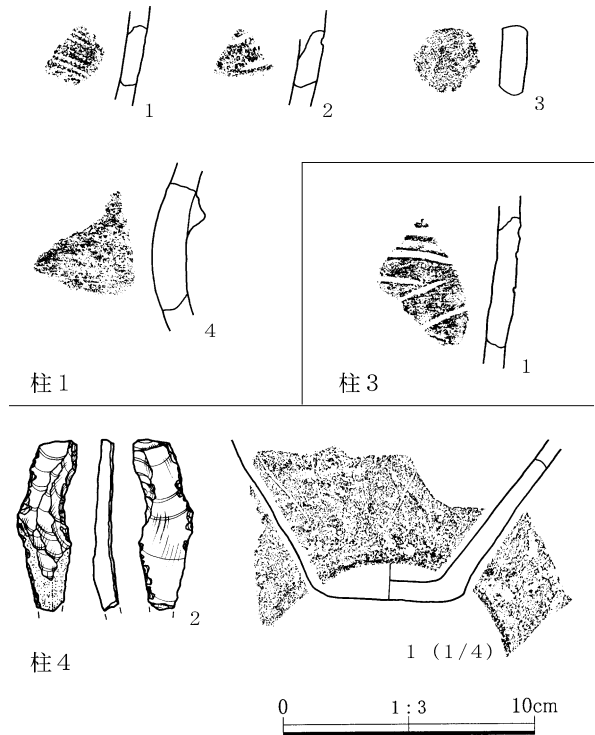
確認状況 中期後半期環状集落の中央空白部の東側寄りで確認された。北西に8号掘立柱建物が接近する。この地点も地山に礫を多量に含んでいる。確認面は、地山の黄色シルトの上面に若干の黒褐色土がのる面で、やはり礫が大量に含んでおり、その上層までは耕作が及んでいた。

この地点では2棟の掘立柱建物を認定したが、周囲にはその候補となる柱穴状の落ち込みが数多く認められた。参考として掘立柱建物の候補を図面上に波線で示す。

形状 傾斜地の等高線方向に沿って設置された1×1間の建物で、平面形はほぼ正方形を呈し、規模は東西方向が280cm、南北方向が290cmである。各柱穴はほぼ直交する位置にあり、柱穴間の距離もよく揃っている。

柱穴 柱穴の平面形状は、地山礫の多い北側では不定形であるが、礫の少ない南側では円形状を呈する。柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）は、柱1が130×124×107cm、柱2が104×88×103cm、柱3が127×109×112cm、柱4が111×85×96cmである。この数値は地山の黄色シルト面でのもので、断面図に見られる小礫の上面が当初の確認面であるから、深さはさらに20cm前後を加えた数値になる。

また、断面図の柱痕状の線は、最初の平面確認段階で想定された柱痕を掘削した図である。この調査は、上面の礫の状況や土質の硬軟をもとに判断したもので、図は途中段階のものもあるが、いずれの柱穴でも直径30cm前後の柱痕を取り巻くように礫が根詰めされていた。柱穴内は軟質の黒褐色土で埋められており、土層断面では柱痕ははっきりしなかった。  
伴出遺物 柱1・3・4から、中期から後期の土器破片が少量出土したが、いずれも小片が多い。図示したのは後期のもので、柱3出土の4は堀之内2式に比定される。



第95図 20区6号掘立柱建物出土遺物(柱1・3・4)

所見 時期は、出土遺物のみで判断すれば、後期堀之内式期に比定される。

20区7号掘立柱建物

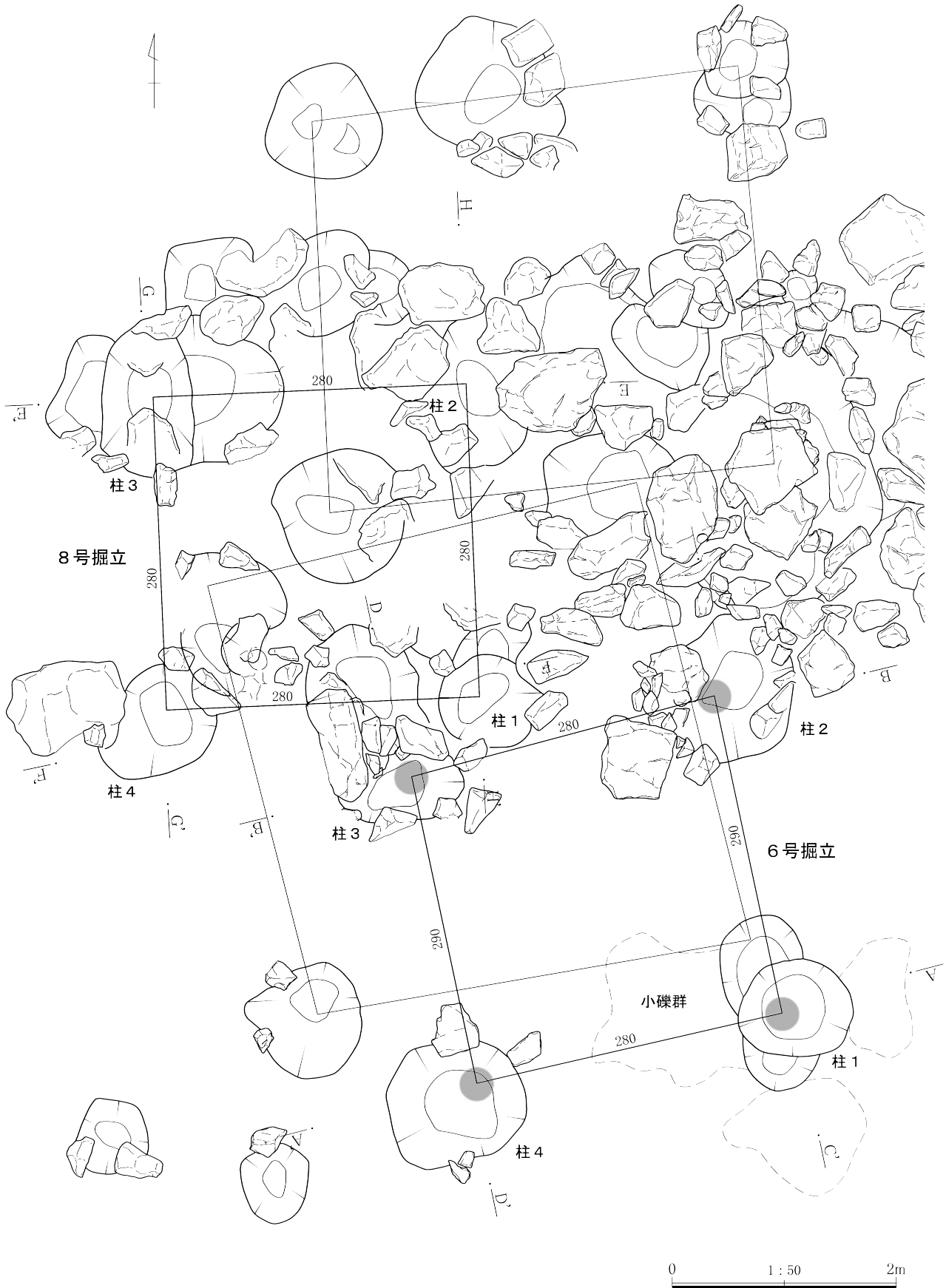
調査年度 平成13年度

位置 H-19グリッド

方位 N88度W

確認状況 中期後半期環状集落の中央空白部の南側寄りで確認された。20区2号掘立柱建物の調査に伴って、その周辺部で数多くの柱穴状落ち込みが確認された。当遺構は、そのなかから選出されたもので、2号掘立柱建物の東側に隣接する。

確認面は地山の黄色シルト～砂質土面で、地山面には全面に大量の地山礫が累々と点在している。ま



第96図 20区6号・8号掘立柱建物

た、本遺構はちょうど現況の道と重なっており、地山自体が他の地区よりも深く削平されている。

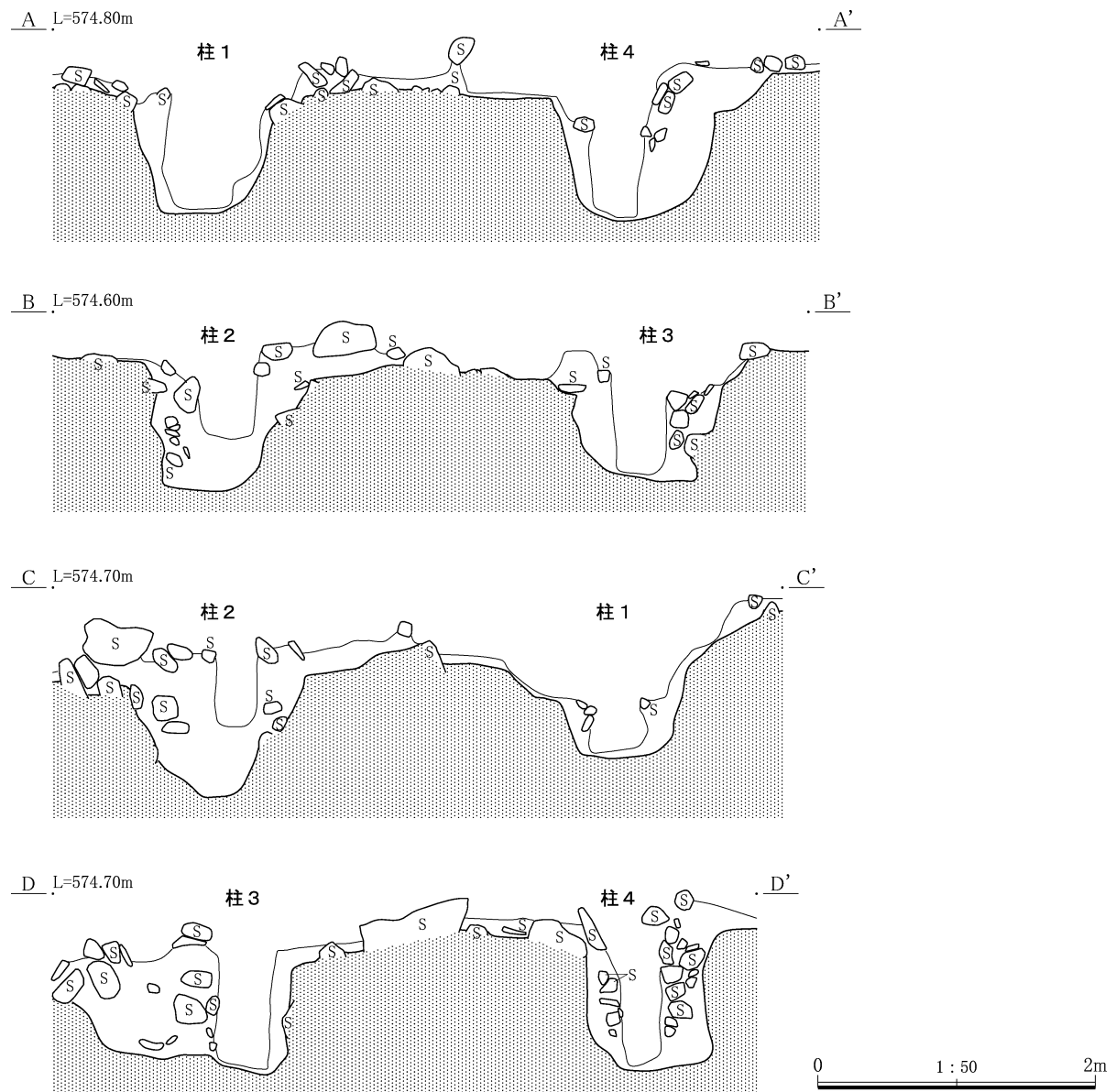
**形状** 傾斜地の等高線方向にほぼ平行して、東西方向に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は方形に近い長方形を呈し、規模は東西方向が354cm、南北方向が310cmである。各柱穴はほぼ直交する位置にあり、柱穴間の距離もよく揃っている。

**柱穴** 地山礫が多い地区であるが、大形の礫が比較的少ないため、平面形は円形状のものが多く、柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が102×98×49cm、柱2が94×83×58cm、柱3が121×80×75cm、

柱4が108×81×55cmである。深さが浅いものが多いのは、先述したように、本遺跡が現況の道と重複しているため、本来は1m前後の深さがあったと考えてよいだろう。

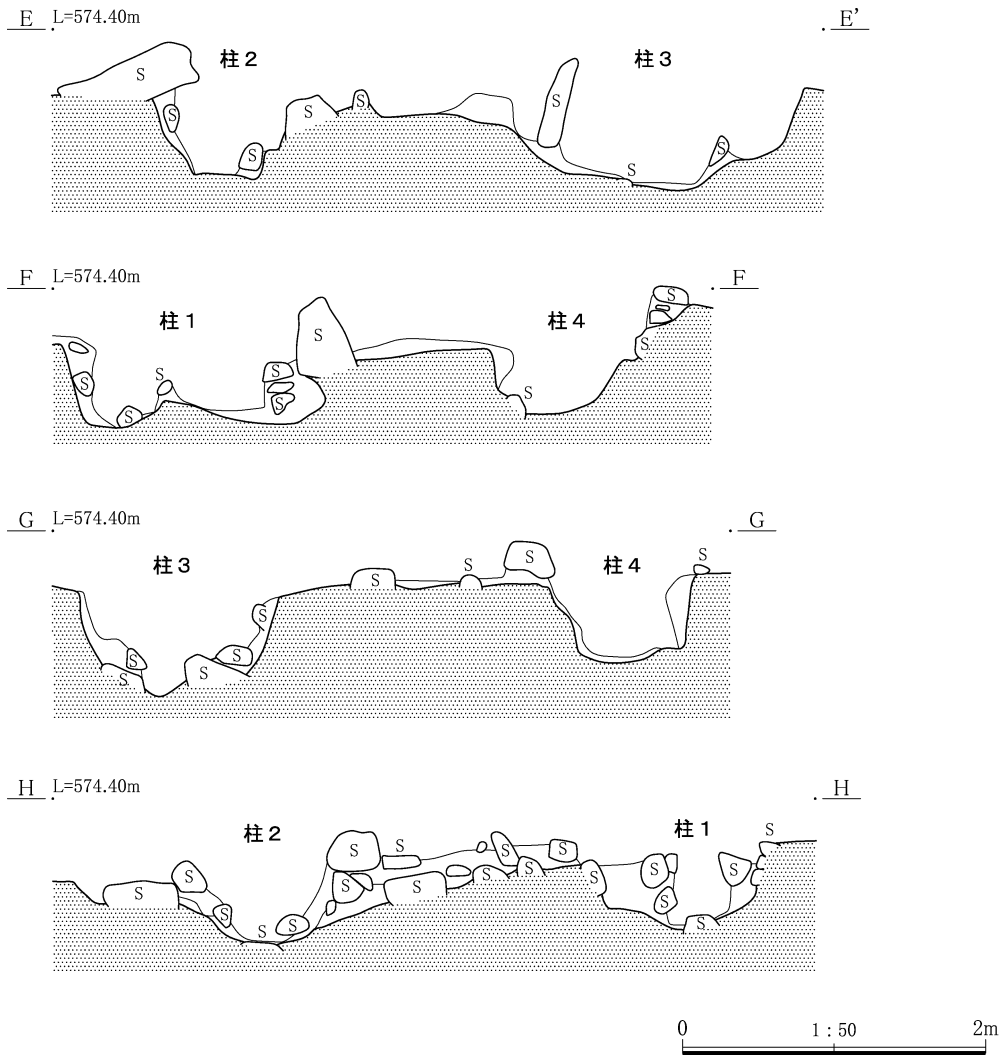
**伴出遺物** 柱2から土器破片16点と台石破片1点、柱3から土器破片31点と台石1点、柱4から土器破片3点が出土しており、土器のほとんどは中期加曽利E3式期のものであった。柱2から出土した土器は接合するものが多く、1・4などは意図的に埋納された可能性も考えられる。

**所見** 20区で確認された同型の掘立柱建物のな



第97図 20区6号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物



第98図 20区 8号掘立柱建物

かでは、最も大形の規模を持つ。時期は、出土遺物のみから判断すれば、中期加曽利E 3式期に比定される。

20区 8号掘立柱建物

調査年度 平成13年度

位置 D～E-23グリッド

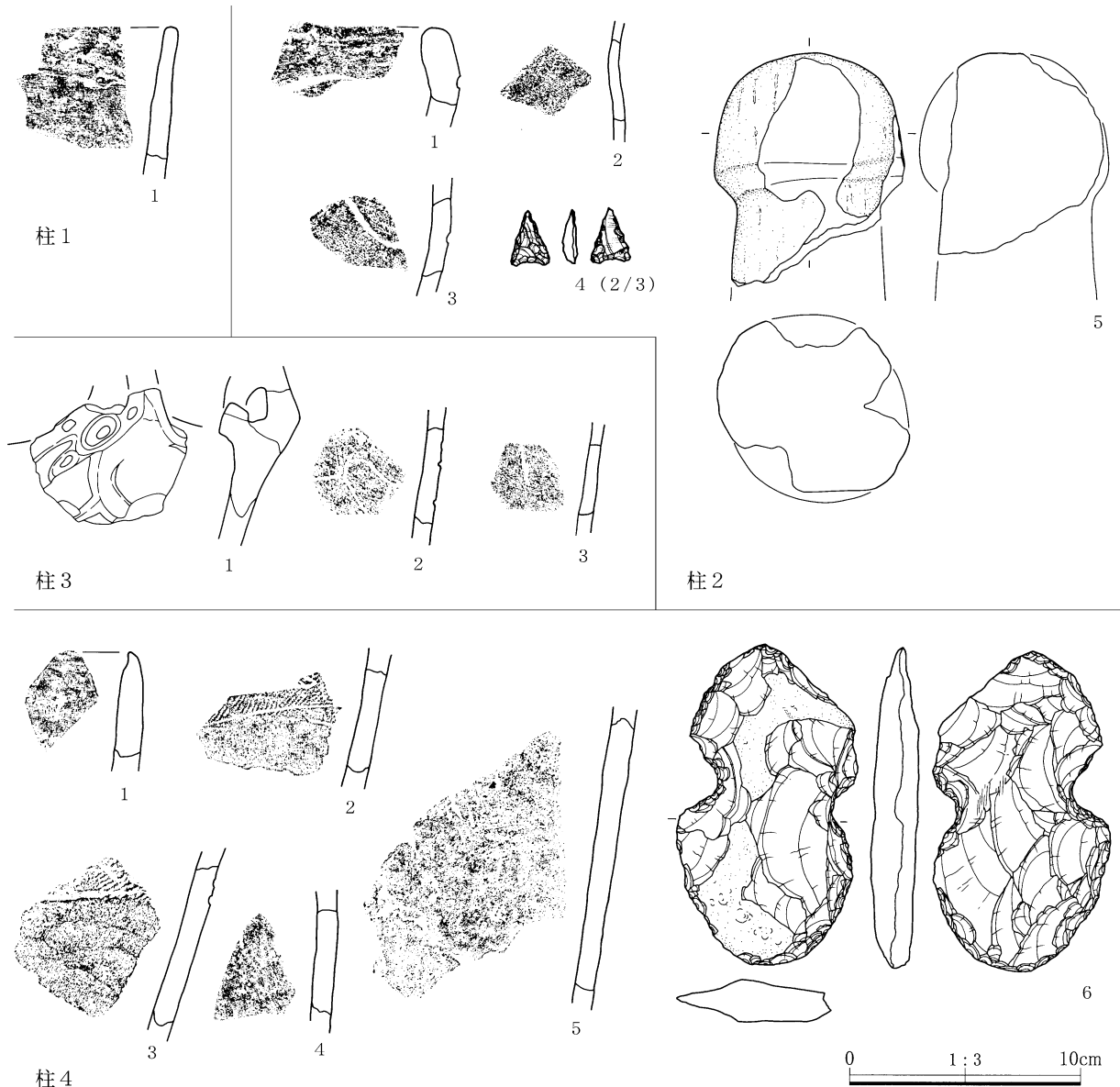
方位 N 2度W

確認状況 中期後半期環状集落の中央空白部の東側寄りで確認された。南東に6号掘立柱建物が接近する。この地点も地山に大形礫を多量に含んでいる。確認面は、地山の黄色シルトの上面に若干の黒褐色土がのる面で、やはり礫を大量に含んでおり、その

上層までは耕作が及んでいた。

形状 傾斜地の等高線方向に沿って設置された1×1間の建物で、平面形は正方形を呈し、規模は各辺とも280cmである。各柱穴はほぼ直交する位置にあり、柱穴間の距離もよく揃っている。

柱穴 柱穴の平面形状は、円形～楕円形を呈する。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が134×85×51cm、柱2が86×82×60cm、柱3が110×93×79cm、柱4が146×83×68cmである。この数値は地山の黄色シルト面でのもので、断面図に見られる小礫の上面が当初の確認面であり、深さは1m前後であったと想定される。



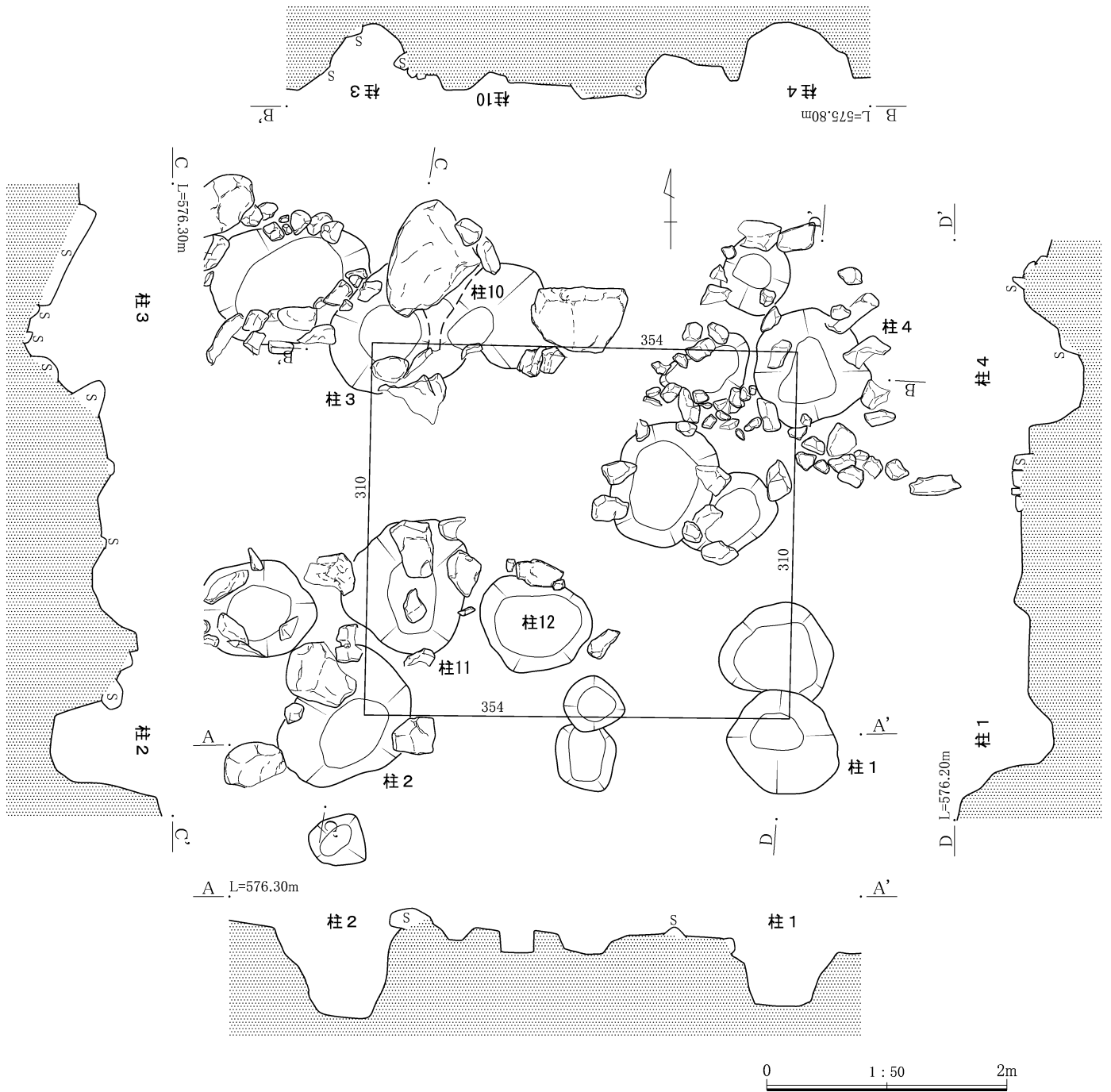
第99図 20区8号掘立柱建物出土遺物（柱1・柱2・柱3・柱4）

柱1では直径30cm前後の柱痕を取り巻くように礫が根詰めされていたが、その他の柱穴には礫は少なかった。柱穴内は軟質の黒褐色土で埋められており、土層断面でも柱痕は確認できない。

**伴出遺物** 各柱穴から遺物が出土した。土器はいずれも破片の状態であるが、柱1から1点、柱2から15点、柱3から5点、柱4から18点が出土しており、内訳は中期が4点、後期が35点であり、後期土器が

圧倒的の主体である。なかでも主体となるのは堀之内2式土器で、この時期の土器は4基全ての柱穴から出土しており、柱4では13点がまとまって出土している。石器は、柱2から打製石斧の完形品1点と石棒の頭部が1点出土している。

**所見** 方位はやや異なるが、形態は近接する6号掘立柱建物と近似している。時期は、出土遺物から後期堀之内2式期に比定されよう。



第100図 20区7号掘立柱建物

29区1号掘立柱建物

調査年度 平成10年度

位置 X～Y-5～6グリッド

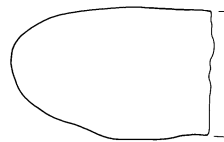
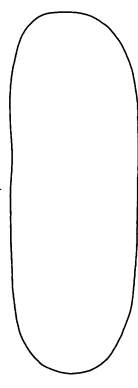
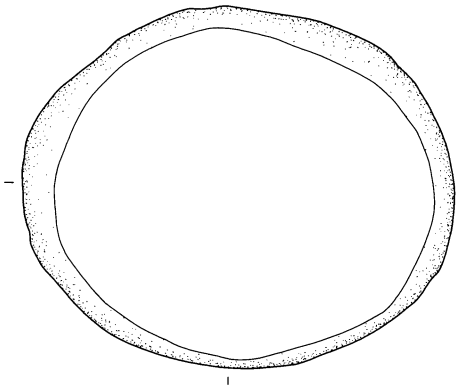
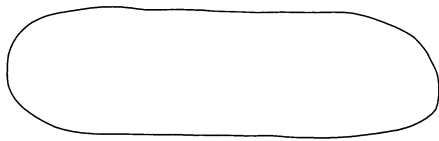
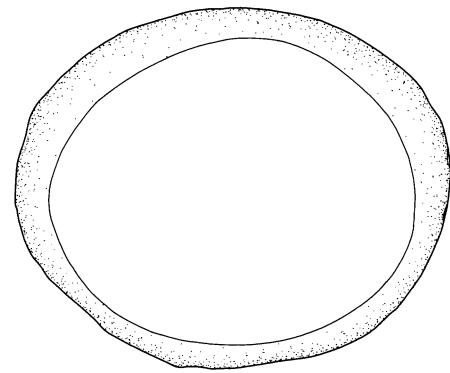
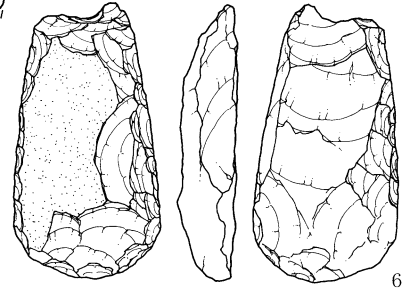
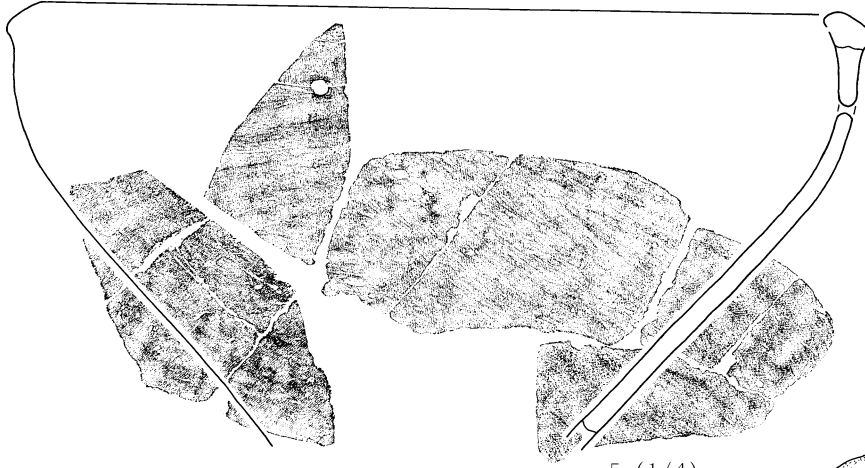
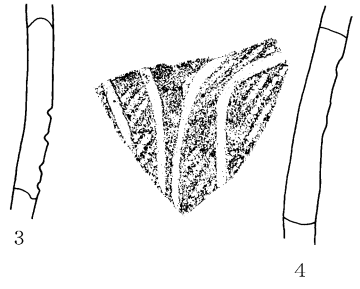
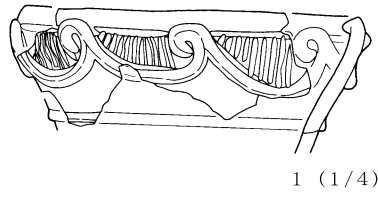
方位 N90度

確認状況 29区の北西隅に位置する。この地区は、

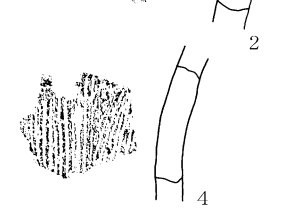
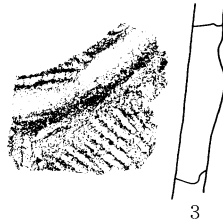
中期後半期環状集落の北東側居住区にあたるが、後期後半に配石墓群が形成された地点に隣接しているため、中期住居の分布は少ない。当遺構は、配石墓群の北西6mのところ、配石墓群の調査に伴って確認された。南西側12mに30区1号環状柱穴列が位



第4節 掘立柱建物

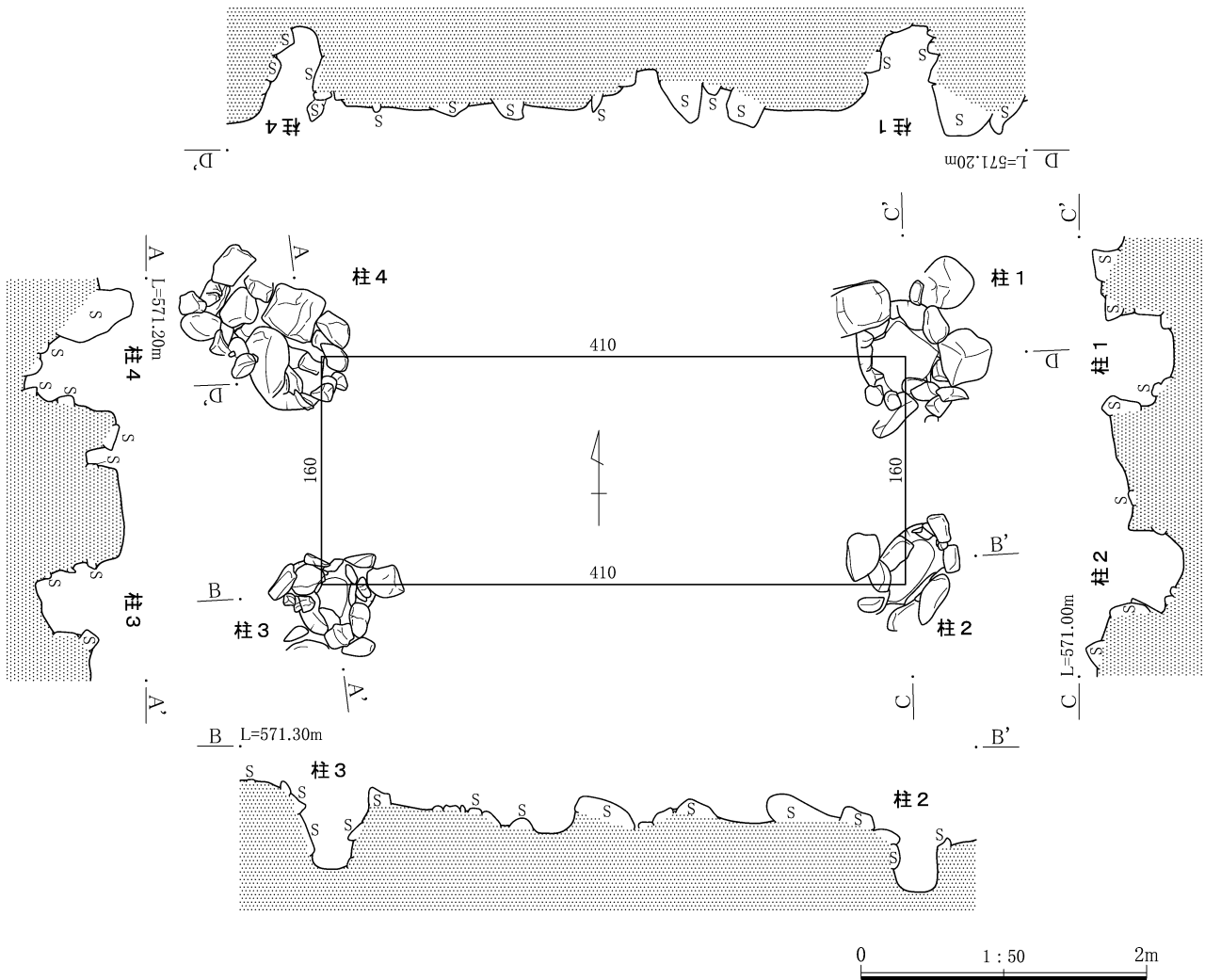


柱2



0 1:3 10cm

第101図 20区7号掘立柱建物出土遺物(柱2・柱3)



第102図 29区1号掘立柱建物

置する。

この地点も地山に大形礫を多量に含んでいる。確認面は、地山の黄色シルトの上面に若干の黒褐色土がのる面で、やはり礫を大量に含んでおり、その上層までは耕作が及んでいた。

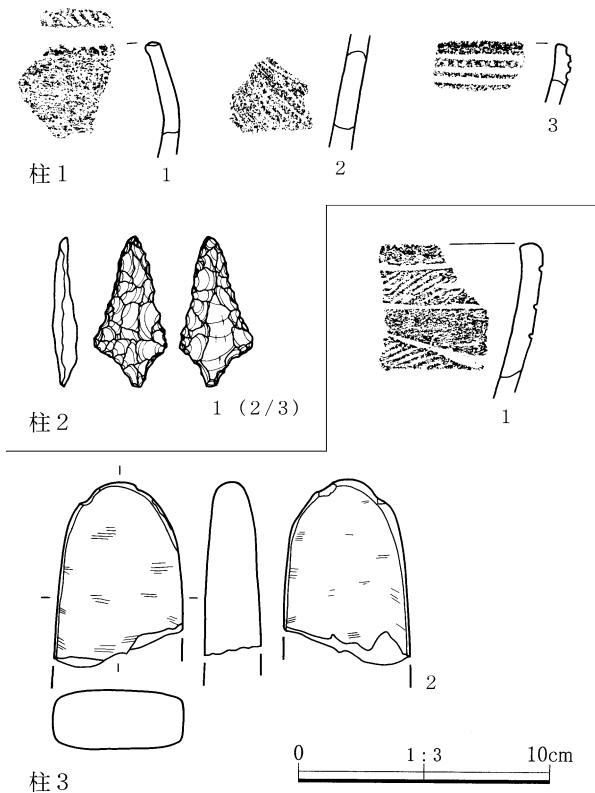
**形状** 傾斜地の等高線方向にほぼ平行して、東西方向に長軸を持つ1×1間の建物で、平面形は細長い長方形を呈し、規模は東西方向が410cm、南北方向が160cmである。

各柱穴はほぼ直交する位置にあり、柱穴間の距離もよく揃っているが、本遺跡で確認された4本柱方形タイプの掘立柱建物と比べて、長辺と短辺の比率がまったく異なっており、異質な形態である。

**柱穴** 柱穴の平面形状は、円形～楕円形を呈する。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が54×48×52cm、柱2が65×43×59cm、柱3が60×53×51cm、柱4が58×48×57cmである。この数値は地山の黄色シルト面でのもので、断面図にはかかっていないが、柱穴の周囲には地山面から50cmも突出した大形礫が数多く点在しており、本来の深さは1m前後はあったものと想定される。

柱穴内は軟質の黒褐色土で埋没しており、明瞭な柱痕は確認されていない。断面図では、柱穴内の側縁に礫が数多く記載されているが、この年度の調査では側縁の礫を外さずに図面化しており、なかには掘り方が一回り大きくなるものもあるだろう。また、

## 第5節 環状柱穴列



第103図 29区1号掘立柱建物出土遺物(柱1・2・3)

側縁の礫は、他の掘立柱建物でも確認されている柱痕を取り巻く根巻き礫の可能性もある。

**伴出遺物** 各柱穴から遺物が出土した。土器はいずれも小破片であるが、柱1から27点、柱2から12点、柱3から1点、柱4から3点が出土しており、内訳は中期が1点、後期が42点で、後期土器が圧倒的主体である。後期土器で時期が特定できる21点はいずれも加曾利B式であり、そのなかから良好なものを掲載した。いずれも加曾利B2式～3式に比定されよう。石器は、柱2から完形の有柄石鏃1点、柱3から磨製石斧の欠損品1点が出土している。

**所見** 本遺跡では異例な形態だが、縄文時代の調査面で確認されており、埋没土も他の掘立柱建物と共通している。時期は、柱穴出土の土器から後期加曾利B2～3式期に比定されよう。

本遺跡では、縄文時代の環状柱穴列が3棟確認されている。これらの遺構の多くは、住居の確認面よりも低い地山面で単独の土坑として調査されたもので、その後に周辺の遺構調査が終了し、掘り方調査の段階で新たに確認された柱穴と組み合わせて全形が判明したものも多い。そのため、本来の遺構面よりもかなり低いレベルで記録が作成されており、柱穴の深さはその点を考慮しておく必要がある。また、当遺跡は地山が黄色シルト～砂質土であり、最終的な遺構確認が困難な地点もあることから、確認漏れの遺構も少なからず存在する。

確認された場所は、20区の北西隅から30区南東隅にかかる地点で、3棟が斜めに並んだ状態で分布する。この地点は、縄文時代中期後半の環状集落の北東側居住区にあたるが、その後の後期後半には配石墓群が形成された地区でもある。

確認された環状柱穴列の形態は、円形にめぐると楕円形状にめぐるとの2者があり、時期はいずれも縄文時代後期に該当する。

なお、遺構分布および位置は、第60図～第62図の分布図、あるいは付図を参照していただきたい。

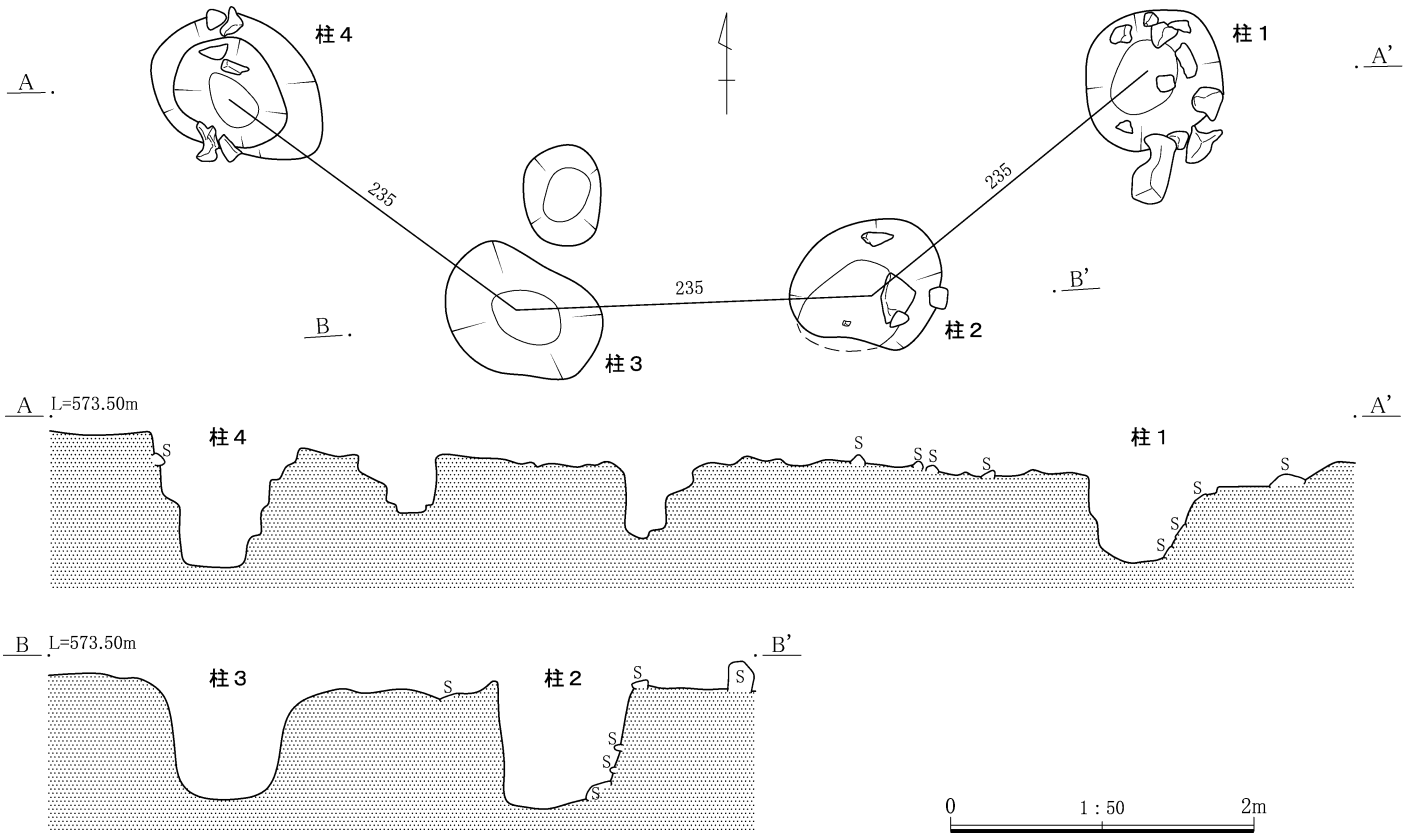
### 19区1号環状柱穴列

**調査年度** 平成11年度

**位置** W～X-24グリッド

**確認状況** 19区の北西隅に位置する。南側に中期後半の2号・4号住居、北側に後期の29区3号住居が隣接する。当遺構は、中期加曾利E4式期の敷石住居である5号住居の掘り方調査の段階で、5号住居には属さない大型の柱穴として2基が確認されたことが発端となり、さらに周辺部の最終確認面でそれと同規格の柱穴が2基確認され、弧状にめぐるとの柱穴列が判明した。当遺構が確認された時、すでに3号住居を含めた29区は埋め戻されており、北側への追跡調査は実施できなかった。確認当初は亀甲形の掘立柱建物を想定していたが、すでに形態が判明して

第3章 発見された遺構と遺物



第104図 19区1号環状柱穴列

表8 横壁中村遺跡 環状柱穴列 柱穴対照一覧

報告用	調査時名称	共伴遺構	重複遺構	長径	短径	深さ	主な遺物	備考
19区1号掘立柱建物								
柱1				98	88	48		
柱2			19区5号住居	97	86	85		
柱3			19区5号住居	97	77	81		
柱4				123	89	88	凹石1点	
19区5号掘立柱建物								
柱1	3号土坑		10号・13号住居	124	120	110	称名寺1式~高井東式土器	
柱2	42号土坑			135	119	75	称名寺1式~堀之内2式土器	
柱3	24号土坑			138	135	134	称名寺1式~堀之内1式土器	
柱4	20号土坑			159	138	44	称名寺1式~2式土器	
柱5	50号土坑			113	105	36	称名寺1式~堀之内1式土器	
柱6	5号土坑			204	158	70	称名寺1式~加曾利B式土器	
柱7	21号土坑			172	170	147	称名寺1式~加曾利B式土器	
30区1号環状柱列								
柱1	183号土坑		9号埋設土器	162	123	132	堀之内1式~加曾利B式土器	
柱2	182号土坑			174	120	138	堀之内1式~2式土器	
柱3	187号土坑		35号住居	136	115	168	堀之内1式土器	
柱4	186号土坑		35号住居	125	107	168	堀之内1式~2式土器	
柱5	189号土坑		35号住居	124	116	183	堀之内1式~加曾利B式土器	
柱6	36号住居柱11			110	107	152		
柱7	188号土坑			105	92	132		
柱8	柱1に重複			145	—	128		

は未整理であり、今回は検討する時間が取れなかった。この点については、今後の整理作業の中で再度検討を加えて報告したい。当遺構の時期は、土器の出土がないため詳細は不明だが、加曾利E 4 式期の5号住居を切っていることから、後期に比定されよう。

#### 19区 2号環状柱穴列

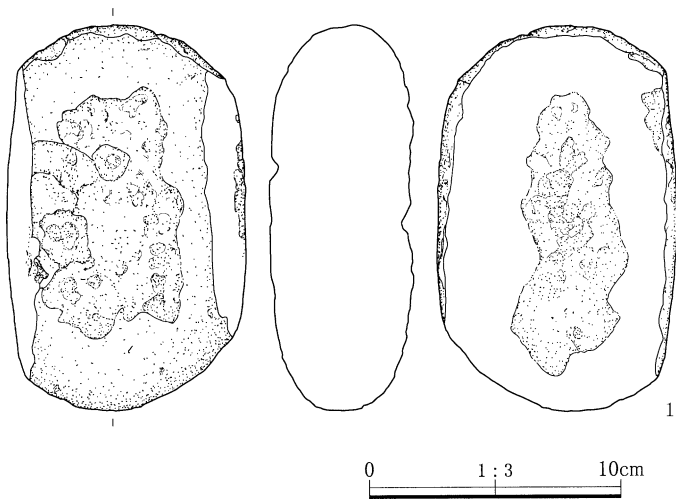
調査年度 平成10・11年度

位置 U～V-21～22グリッド

確認状況 19区の北西部に位置する。1号環状柱穴列の南側15mにあり、縄文時代中期後半の10号・13号住居と重複し、それを切っている。当遺構の一部は、平成10年度に3号・5号土坑として調査が実施され、その他のものは平成11年度に20号以降の土坑として調査された。このうち、柱2・3は10号住居、柱4・7は13号住居と重複し、両住居を切っている。

この地区では、地山の黄色シルト面が標高573.6m付近にあるが、柱穴の多くはその30～40cm上、つまり標高574m前後で確認されている。これらのうち、柱5の確認面が低いのは、地山面まで下げてから確認されたためである。この地区では、黄色シルト面の層に地山の黒褐色粘質土が堆積しており、柱穴の多くはその面で確認された。また、柱2・3・4・7は重複する住居の床面で確認されており、本来は住居の壁高の上から重複していたはずである。つまり、中期の住居床面が標高574m前後であるから、その当時の地表面は標高574.5m前後にあったことになる。

形状 柱1から柱6の配置が示す平面形は、わずかに歪んだ六角形を呈する。直径5.6mの円周上に、各柱穴の中央付近がのる位置にあり、その円周上での各柱穴の芯々間の距離は、柱1と柱2が275cm、柱2と柱3が275cm、柱3と柱4が260cm、柱4と柱5が305cm、柱5と柱6が335cmであるが、半径にあたる2.8mを一辺とする正六角形でつなぐことも可能である。その場合、柱3と柱6の角をつなぐ軸線を南北に合わせると、その北側延長線上15mに



第105図 19区 1号環状柱穴列出土遺物（柱4）

いた30区 1号環状柱穴列と規格が一致することから、ここでは環状柱穴列として扱う。

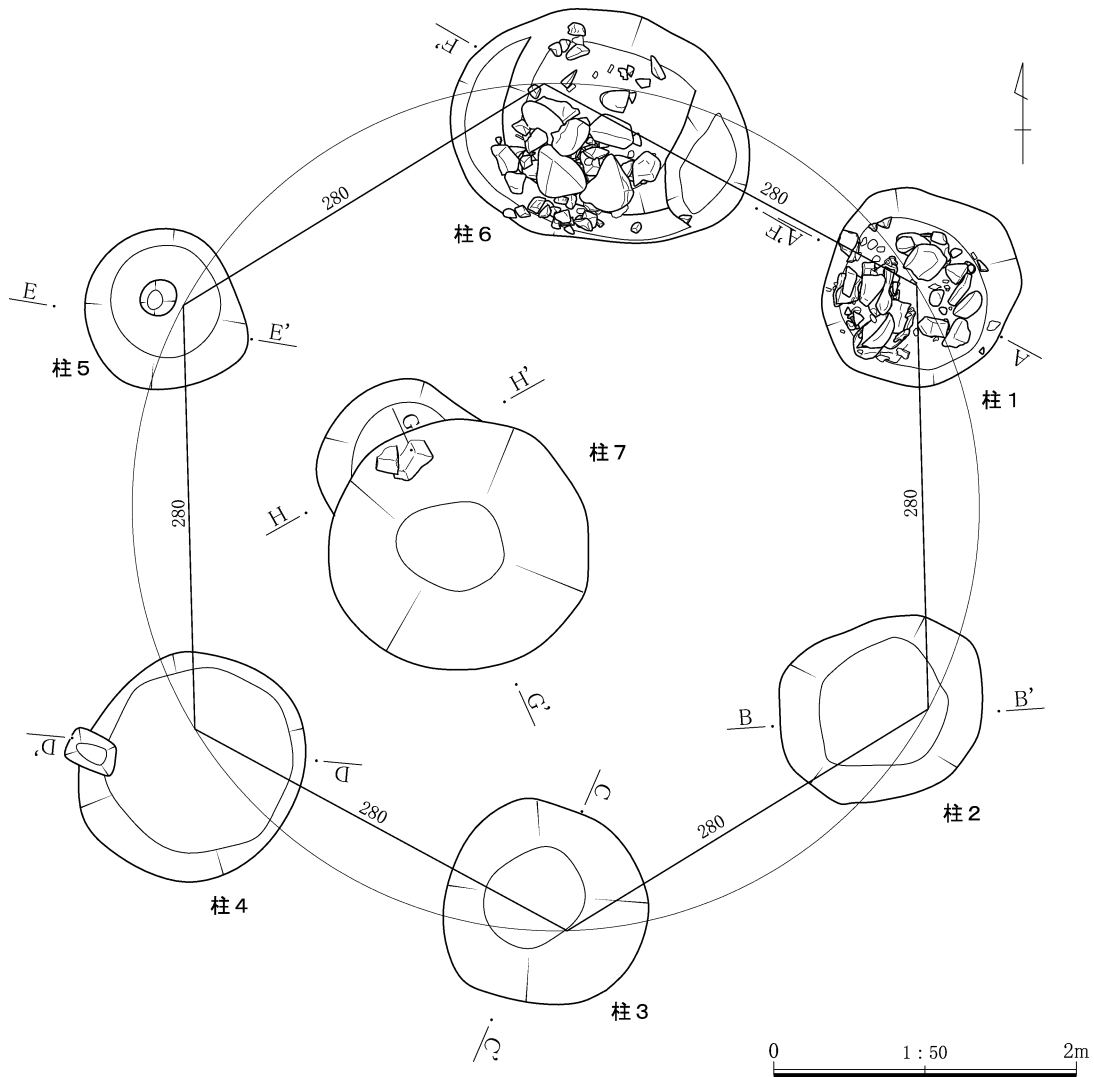
形状 確認できた柱穴は4本のみである。30区 1号環状柱穴列より規模は小さいが、基本的な規格は共通しており、柱穴は楕円形状にめぐるものと想定する。各柱間の距離は235cmでほぼ揃っている。

柱穴 柱穴の平面形状は、各柱穴をつなぐ弧線に沿って長軸を持つ楕円形を呈する。柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）は、柱1が98×88×48cm、柱2が97×86×85cm、柱3が97×77×81cm、柱4が123×89×88cmである。この数値は地山の黄色シルト面でのもので、少なくとも重複する5号住居は壁高が30cm以上はあることから、本来の深さは1mを優に超えていたものと想定される。

柱穴の埋没土はやや硬質の暗褐色土で、柱痕は確認されていない。なお、5号住居と重複する柱穴は、5号住居の炉と壁を破壊しており、同住居を切っている。

伴出遺物 柱4から完形の凹石1点が出土している。土器の出土は認められなかった。

所見 柱穴列が北側に延びることは間違いないと思われるが、3号住居をはじめとする29区の遺構



第106図 19区2号環状柱穴列(1)

後期後半の配石墓群が位置する。

この6本柱が示す規格性が、当遺構を一連の構造物と判断した契機であり、検討する中で各柱穴の大きさと底面標高の共通性、埋没土や出土遺物の量と時期の共通性などが、その判断を高めた。また、柱7は、6本柱の中心から大きく西側に寄った位置にあり、底面形状や深さも他の柱穴と異なるが、埋没土の状況、および出土遺物の量や時期に共通性が認められることから、ここで扱うことにした。

**柱 穴** 平面形は円形状を呈し、側縁は垂直で、

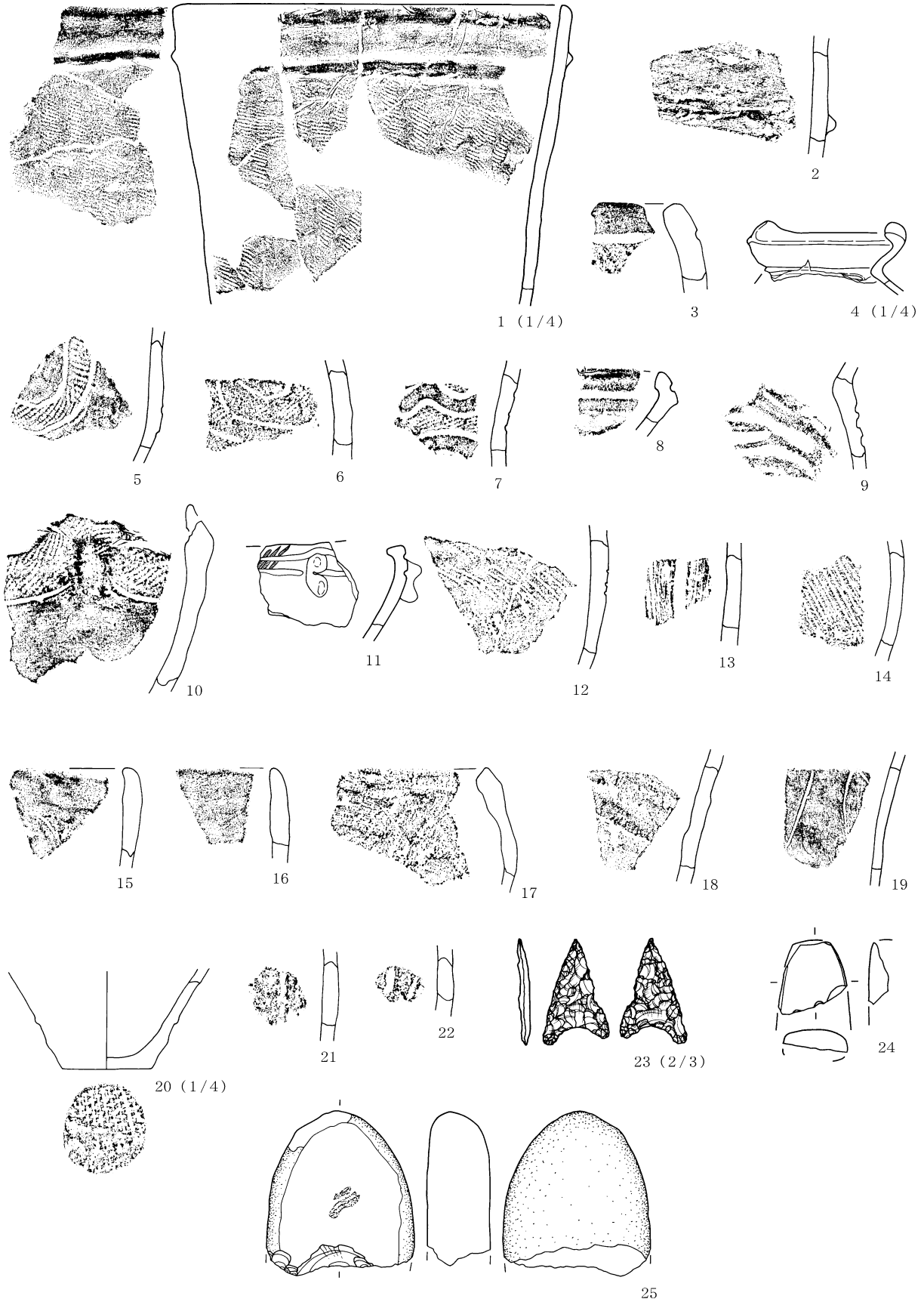
底面は平坦となるものが多い。柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）は、柱1が124×120×110cm、柱2が135×119×75cm、柱3が138×135×134cm、柱4が159×138×44cm、柱5が113×105×36cm、柱6が204×158×70cm、柱7が172×170×147cmである。先述したように、柱7を除いて深さは120～150cmであったと想定できる。

平面形が楕円形を呈する柱7は、形態が後期柄鏡形住居の出入り口部の対柱穴が一体化したのによく似ている。柄鏡形住居の柄部は、本遺跡でも傾斜

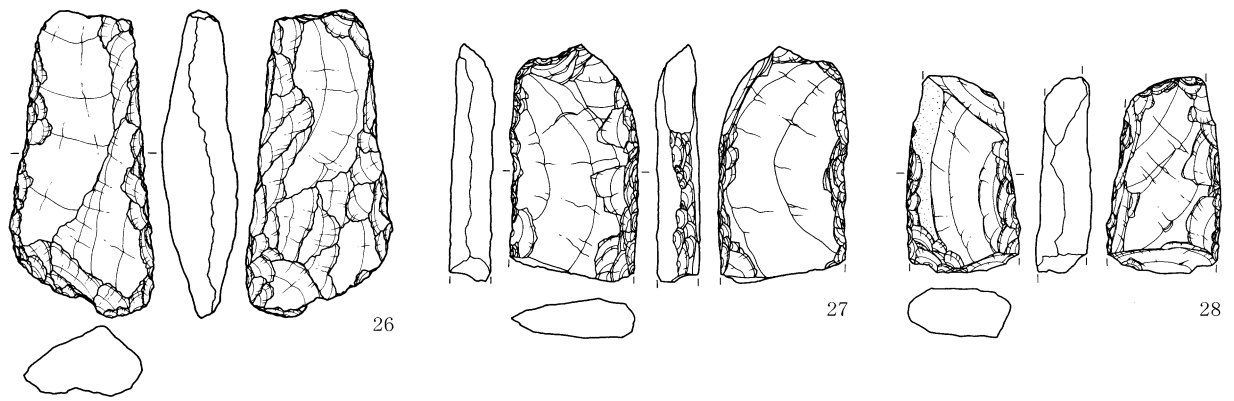


第107図 19区2号環状柱穴列(2)

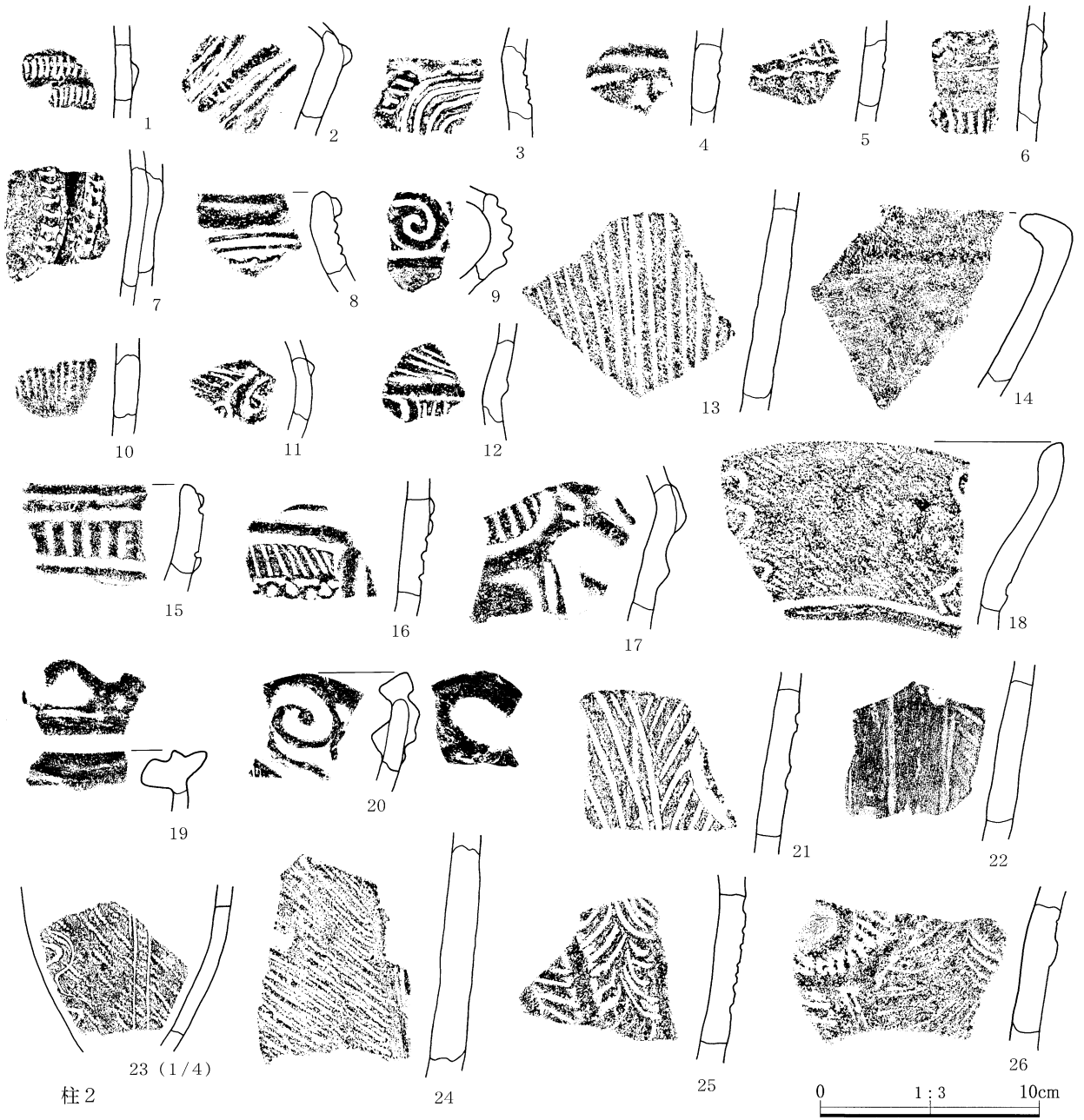




第108図 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱1)



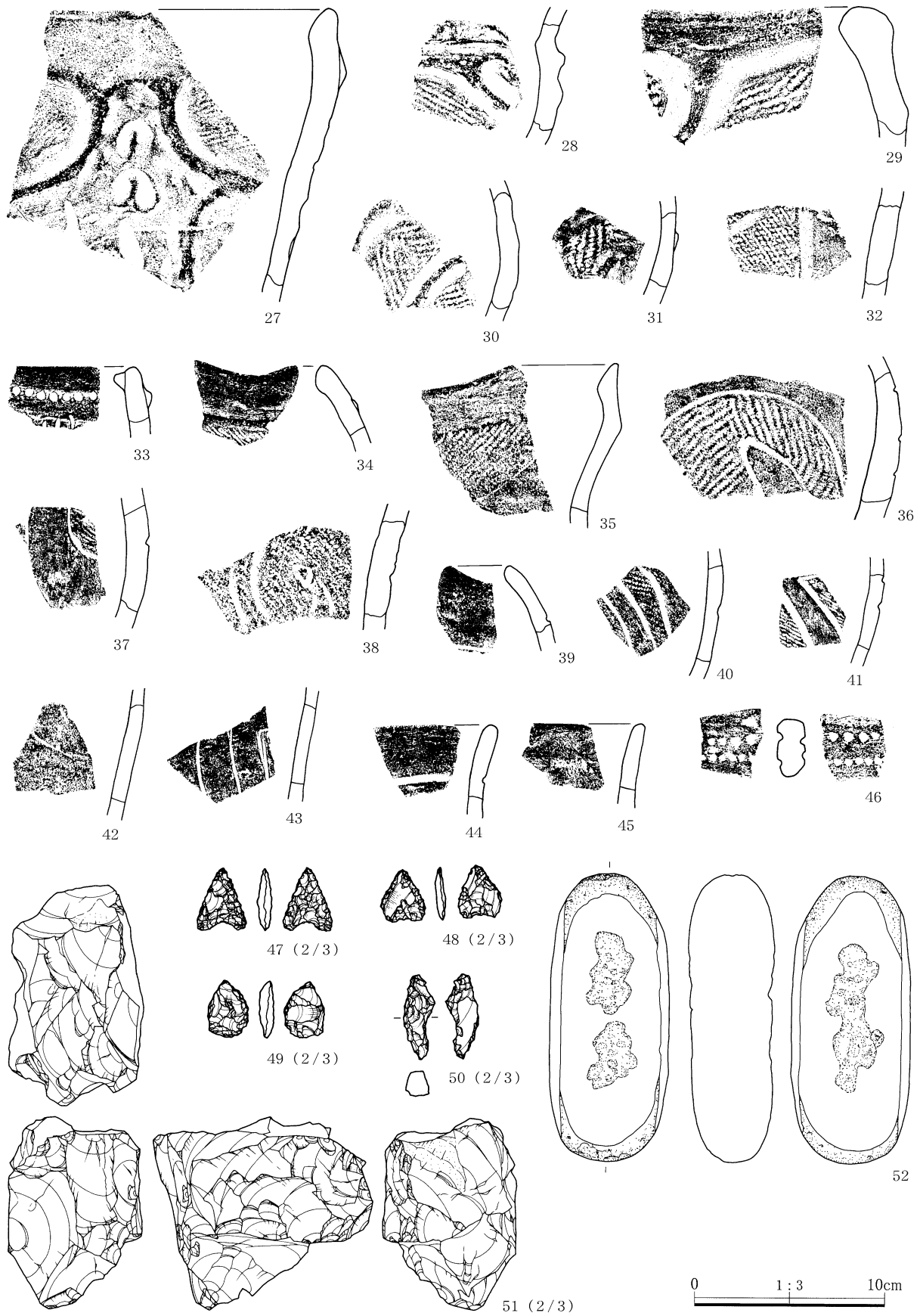
柱1



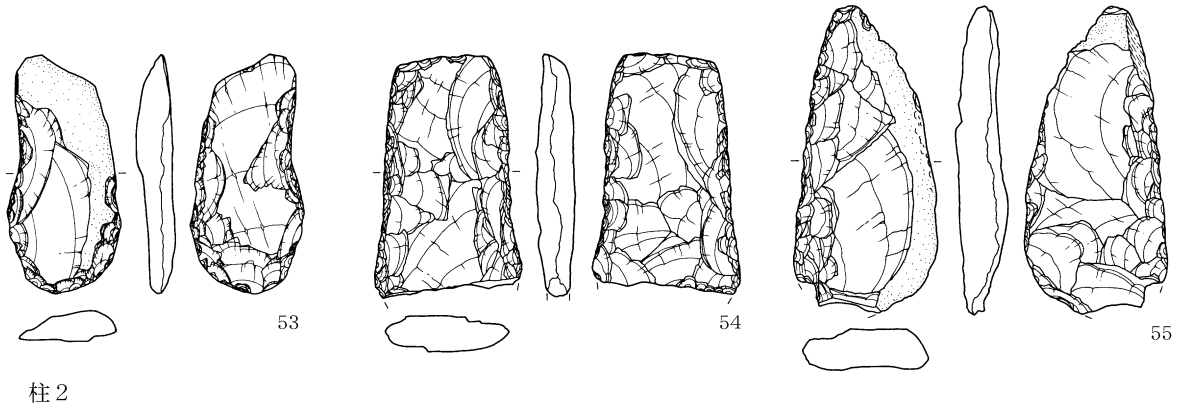
柱2

0 1:3 10cm

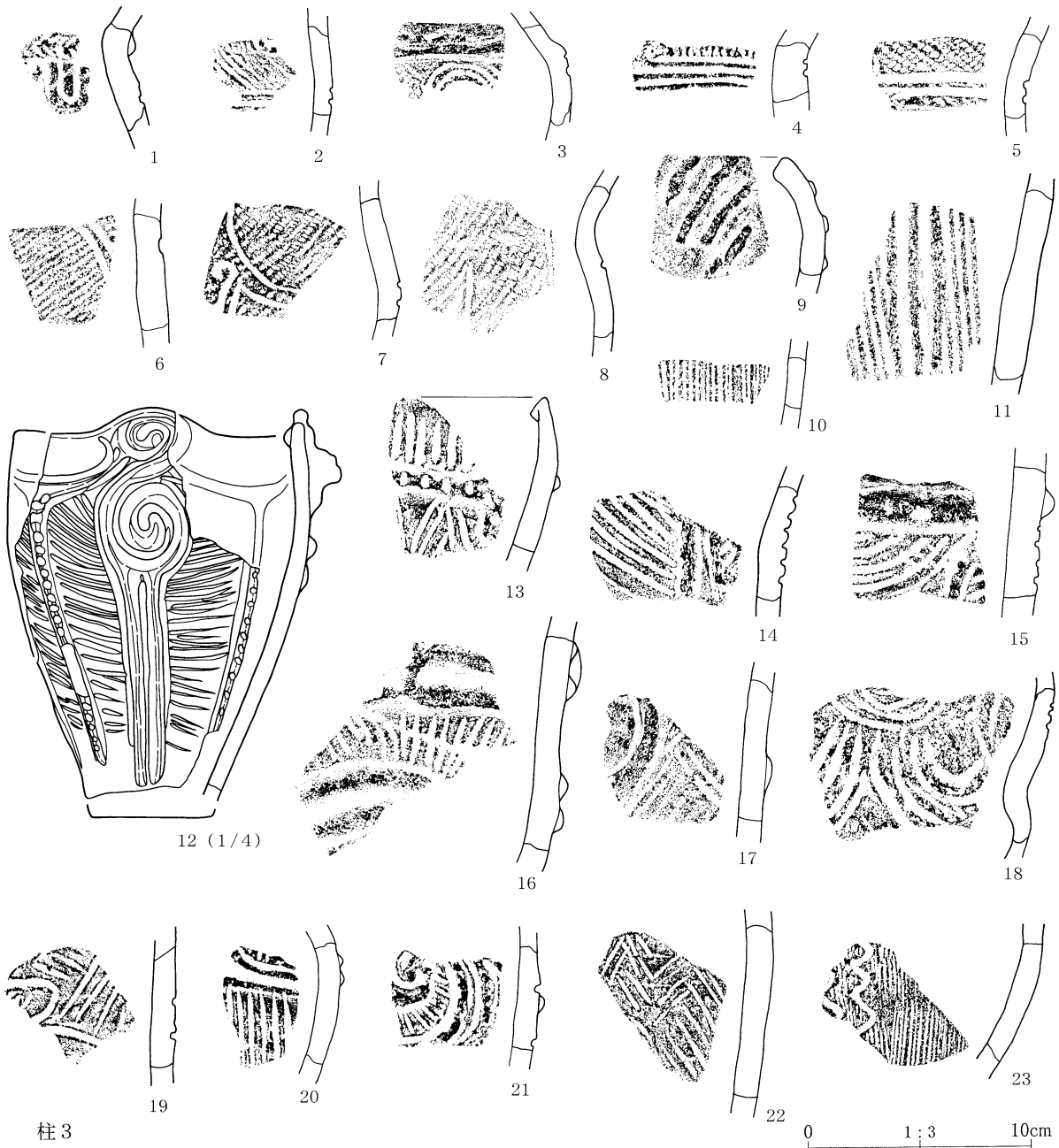
第109图 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱1・柱2)



第110図 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱2)



柱2

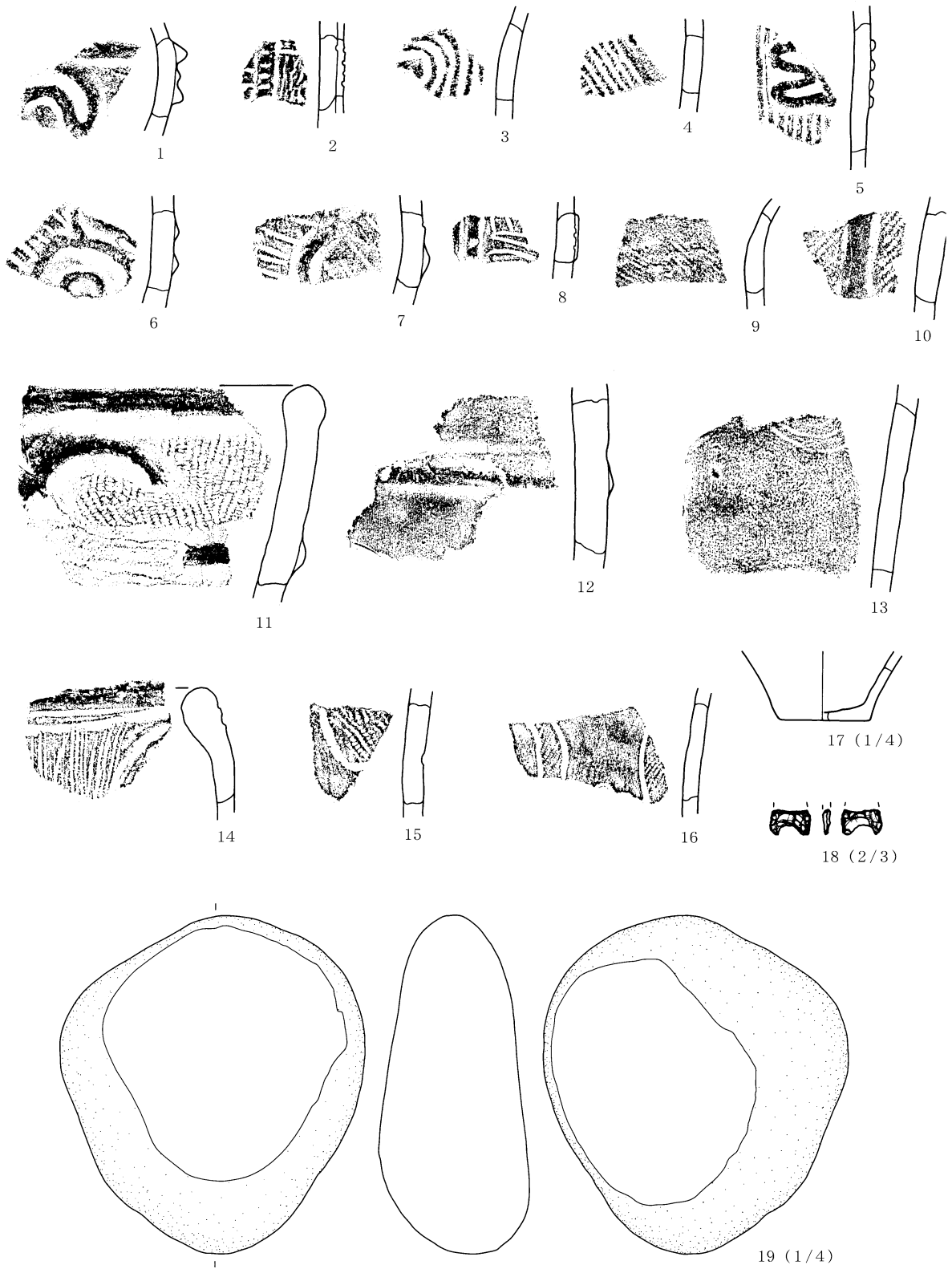


柱3

第111图 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱2・柱3)



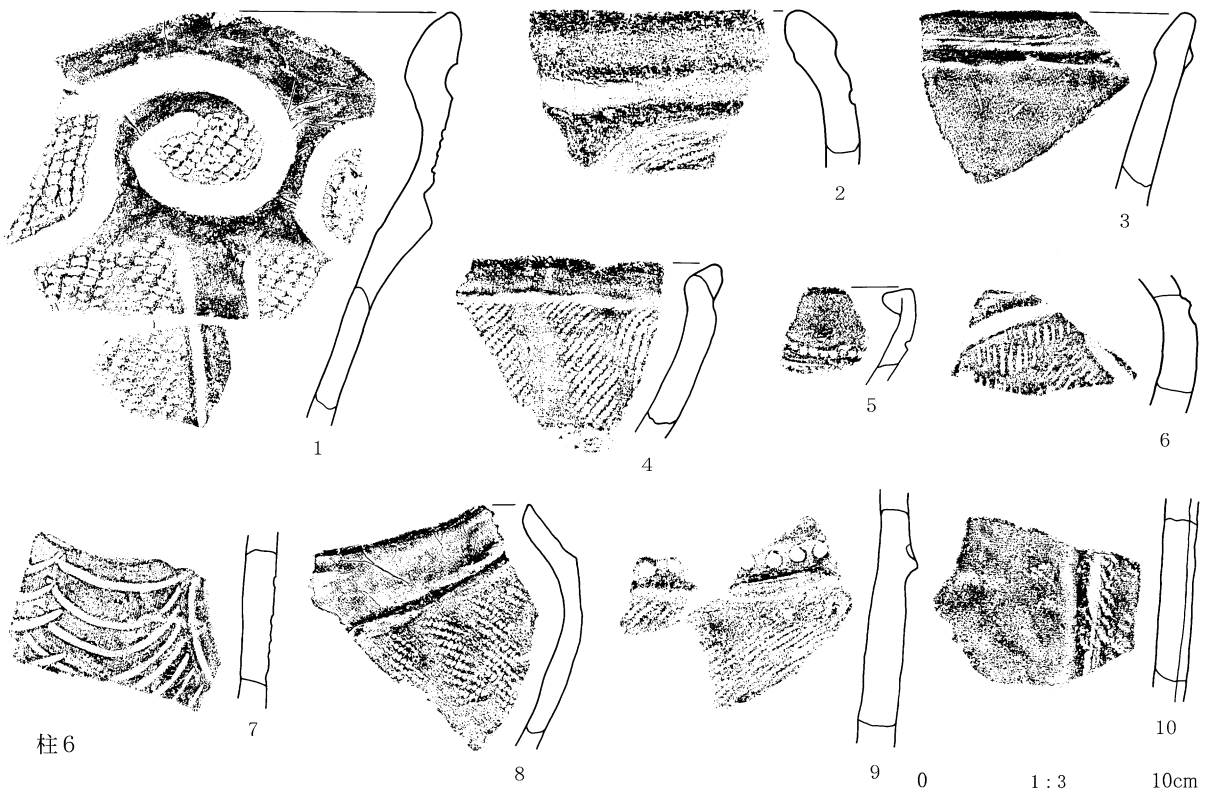
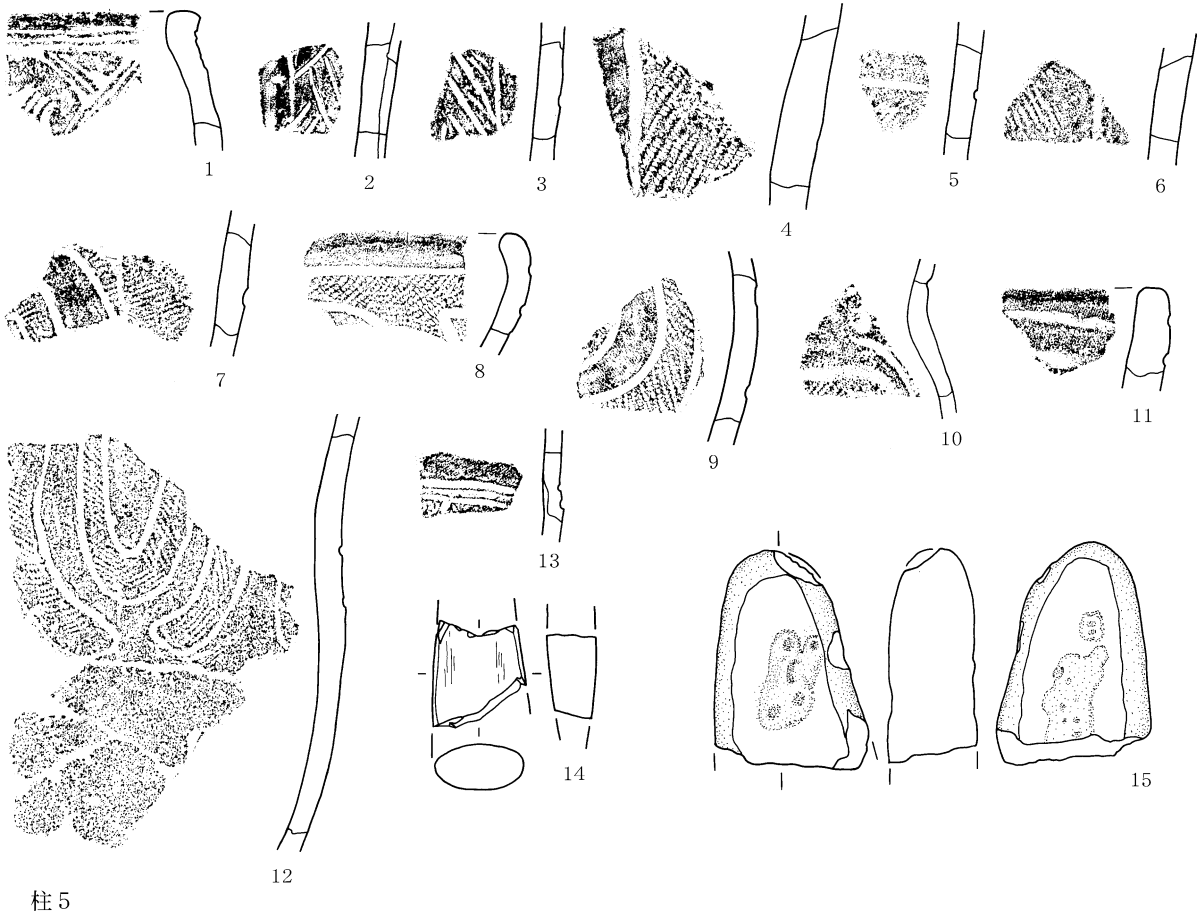
第112図 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱3)



0 1:3 10cm

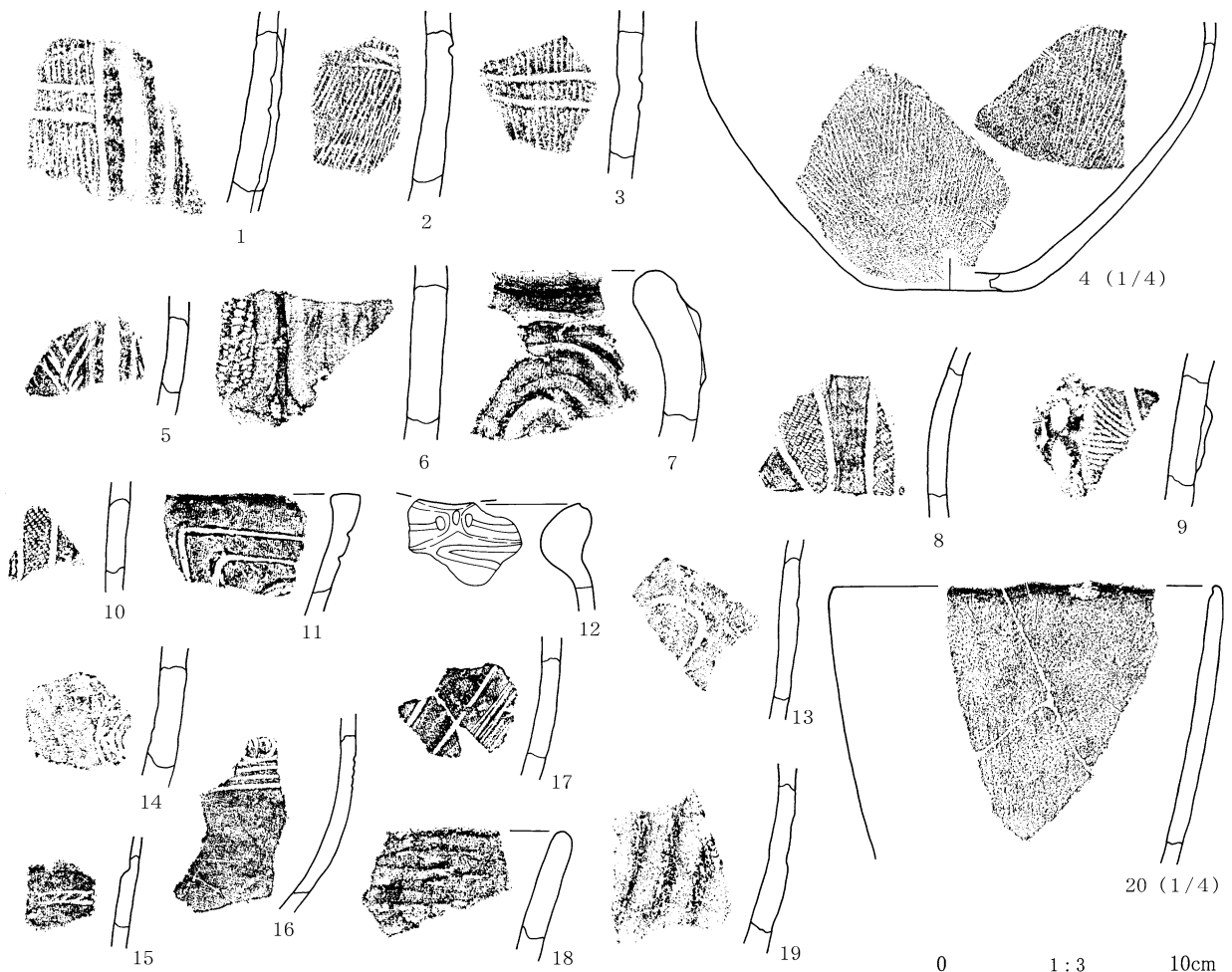
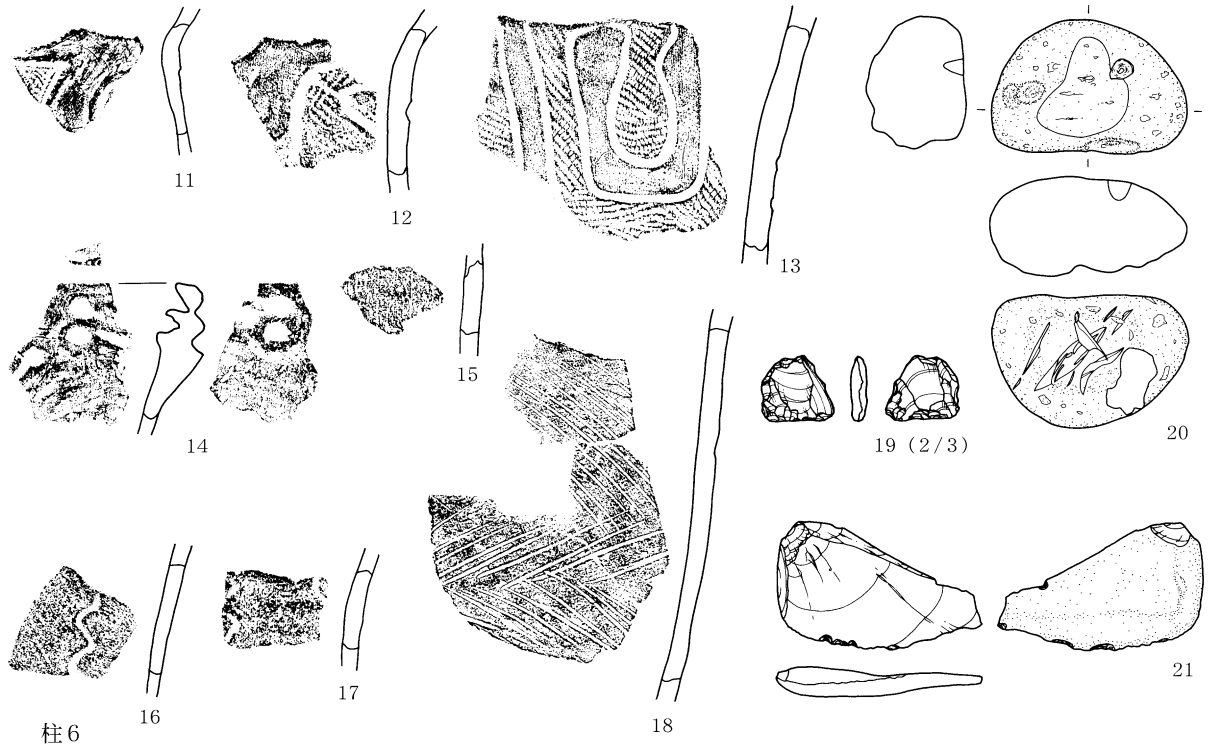
第113図 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱4)

第3章 発見された遺構と遺物



第114図 19区2号環状柱穴列出土遺物（柱5・柱6）

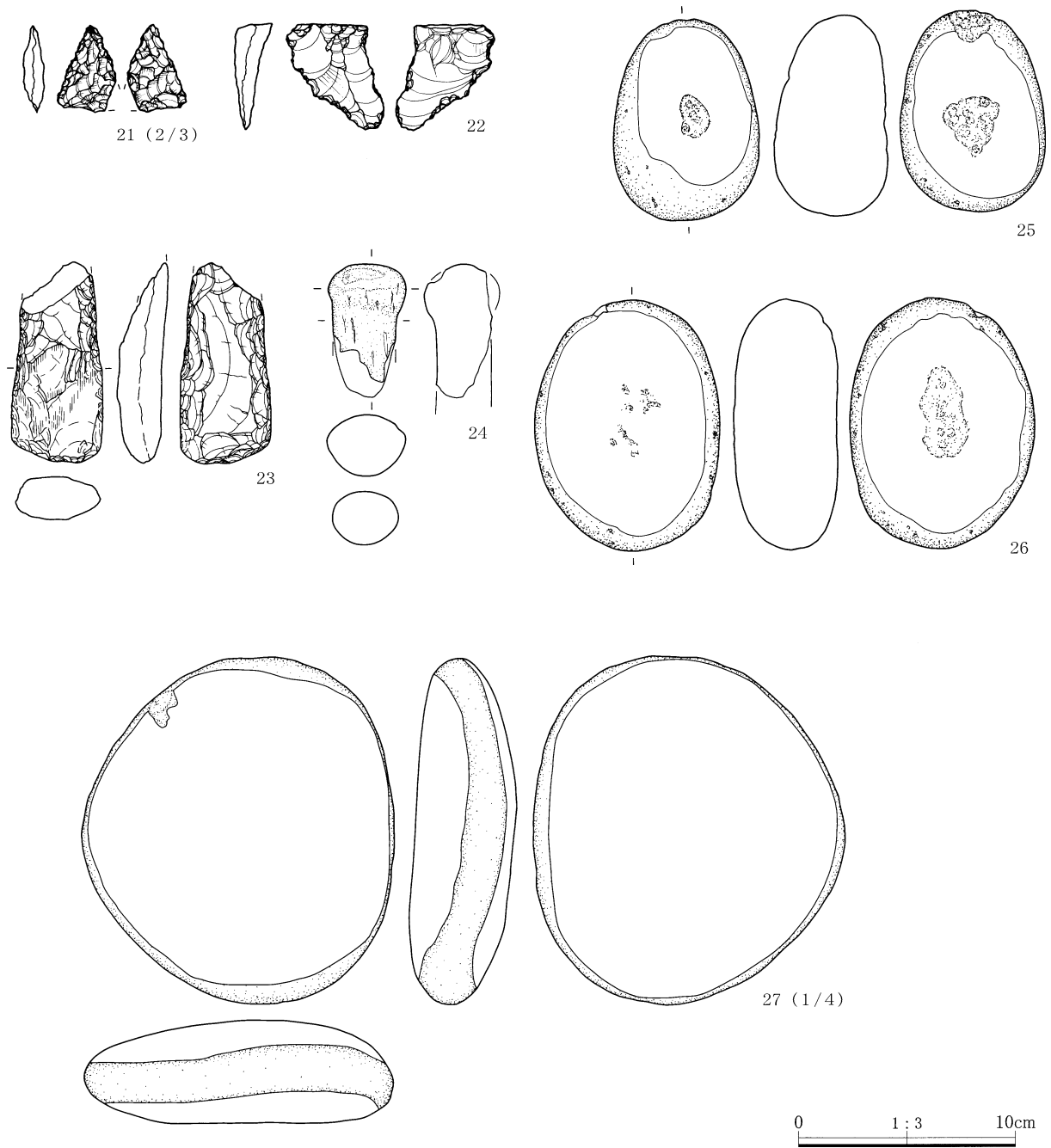
第5節 環状柱穴列



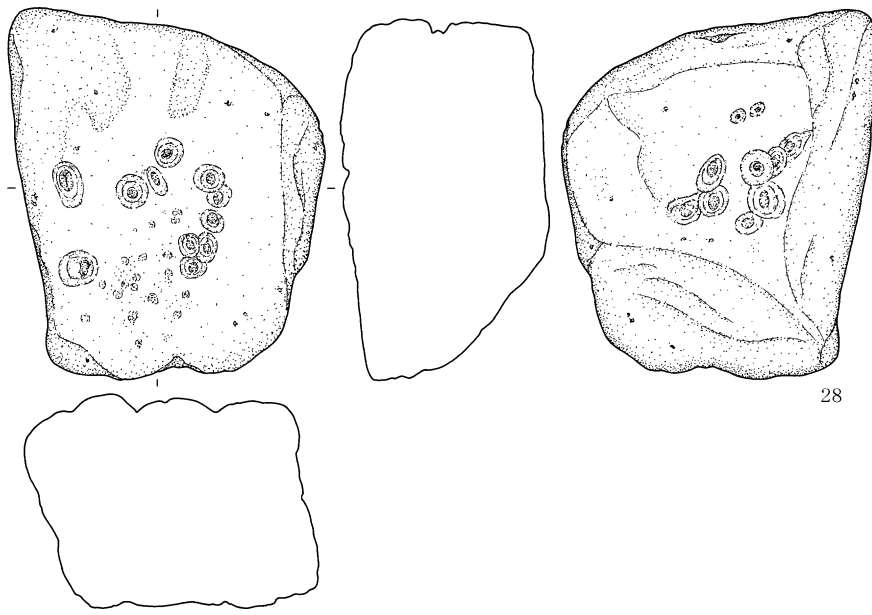
第115图 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱6・柱7)

0 1:3 10cm

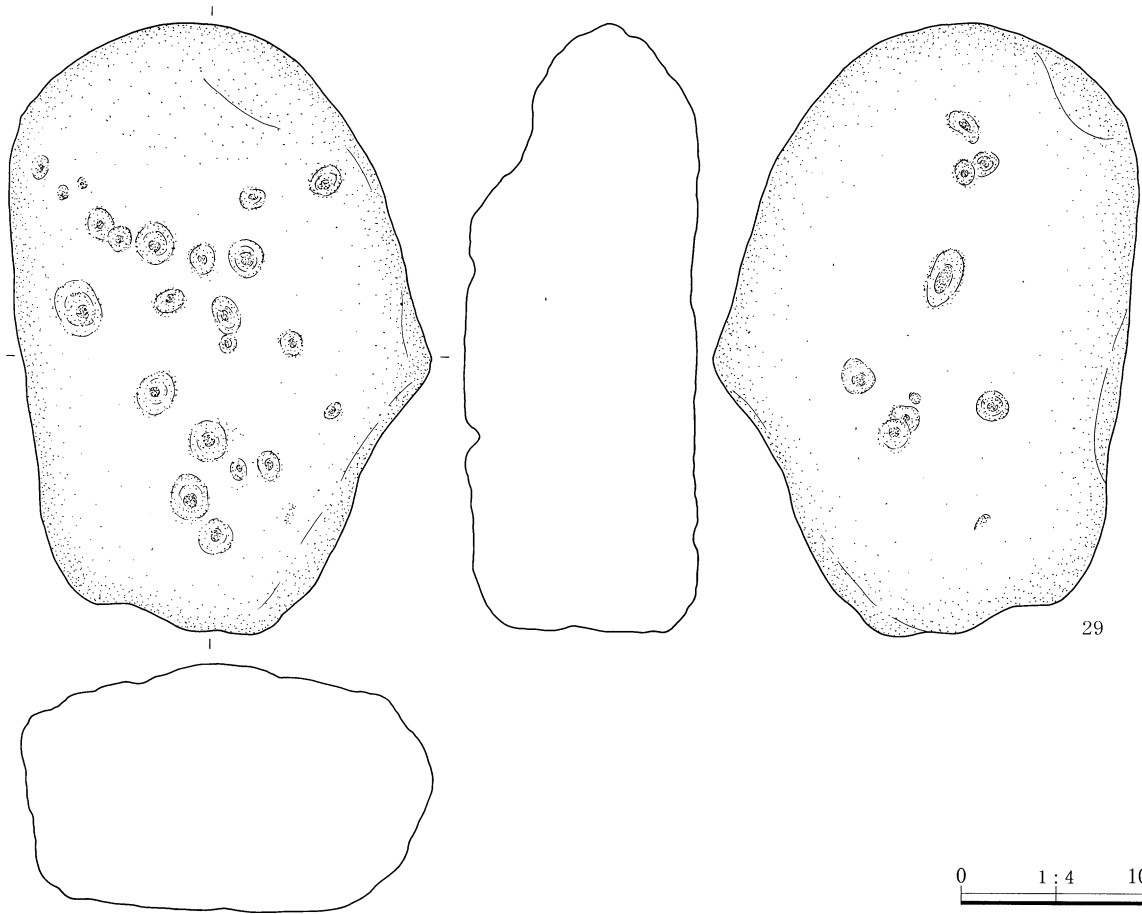




第116図 19区2号環状柱穴列出土遺物（柱7）



28



29

0 1:4 10cm

第117図 19区2号環状柱穴列出土遺物(柱7)

### 第3章 発見された遺構と遺物

の低い側にあるが、柱6も同様に傾斜の低い側に位置している点で共通している。

埋没土は、軟質の黒褐色土を主体にしており、土層断面で柱痕が確認されたものはない。なお、埋没土の中層や上層に、大小の礫を多量に含むものが多く、本遺構の特徴の一つにあげておきたい。

**伴出遺物** 7基全ての柱穴から、大量の遺物が出土している。詳細は表12の一覧に掲載した。

土器は破片での出土ではあるが、その量は柱1が492点、柱2が299点、柱3が493点、柱4が188点、柱5が71点、柱6が395点、柱7が261点である。柱5は確認レベルが低いため、出土量が少ない。このうち、主体となるのは中期後半の土器であるが、いずれの土坑でも後期の土器が出土しており、僅かだが前期の土器も認められる。中期後半の土器は、おそらく重複する住居の土器が混在したのであろう。柱1・5・6は住居と直接重複していないが、その範囲にも中期後半の住居があった可能性は高い。後期の土器は、称名寺1式から高井東式まで認められ、主体を特定することは難しい。

石器は、柱1から石鏃1点・打製石斧3点・磨製石斧1点・凹石1点、柱2から石鏃8点・石錐2点・削器1点・加工痕剥片2点・使用痕剥片3点・打製石斧3点・石核2点・凹石1点、柱3から石鏃1点・石錐1点・使用痕剥片1点・打製石斧1点・凹石1点・軽石製品1点、柱4から石鏃1点・加工痕剥片2点・使用痕剥片2点、柱5から磨製石斧1点・凹石1点、柱6から石鏃1点・削器1点・打製石斧1点・軽石製品1点、柱7から石鏃2点・削器1点・使用痕剥片1点・打製石斧1点・凹石2点・多孔石2点・石棒1点が出土している。土器と同様に考えれば、このうちの半数以上が中期後半の住居からの混在となるだろう。

**所見** 以上のことから、当遺構は一連の構造物になると考える。時期は、中期後半の住居を切っていること、および柱穴内の出土遺物から、後期に比定したい。性格については、柱6を出入り口とする住居、あるいは7本柱の構造物も想定されるが、後

期の住居にしては柱穴の数が少なく、また明瞭な柱痕も確認できていない。想像を逞しくすれば、楕円形を呈する柱6の先には後期後半の配石墓群があり、それに関連した施設を想定しておきたい。

#### 30区1号環状柱穴列

**調査年度** 平成10年度

**位置** A～C-2～4グリッド

**確認状況** 30区の北西隅で確認された。この地区は、中期後半期環状集落の北東側の居住区にあたるが、配石墓群をはじめ、後期の配石や住居等が一面に重複しており、中期段階の遺構は形を留めていない。当遺構の北西の一部を後期後半期の36号住居と重複し、北東には同期の34号住居が近接する。

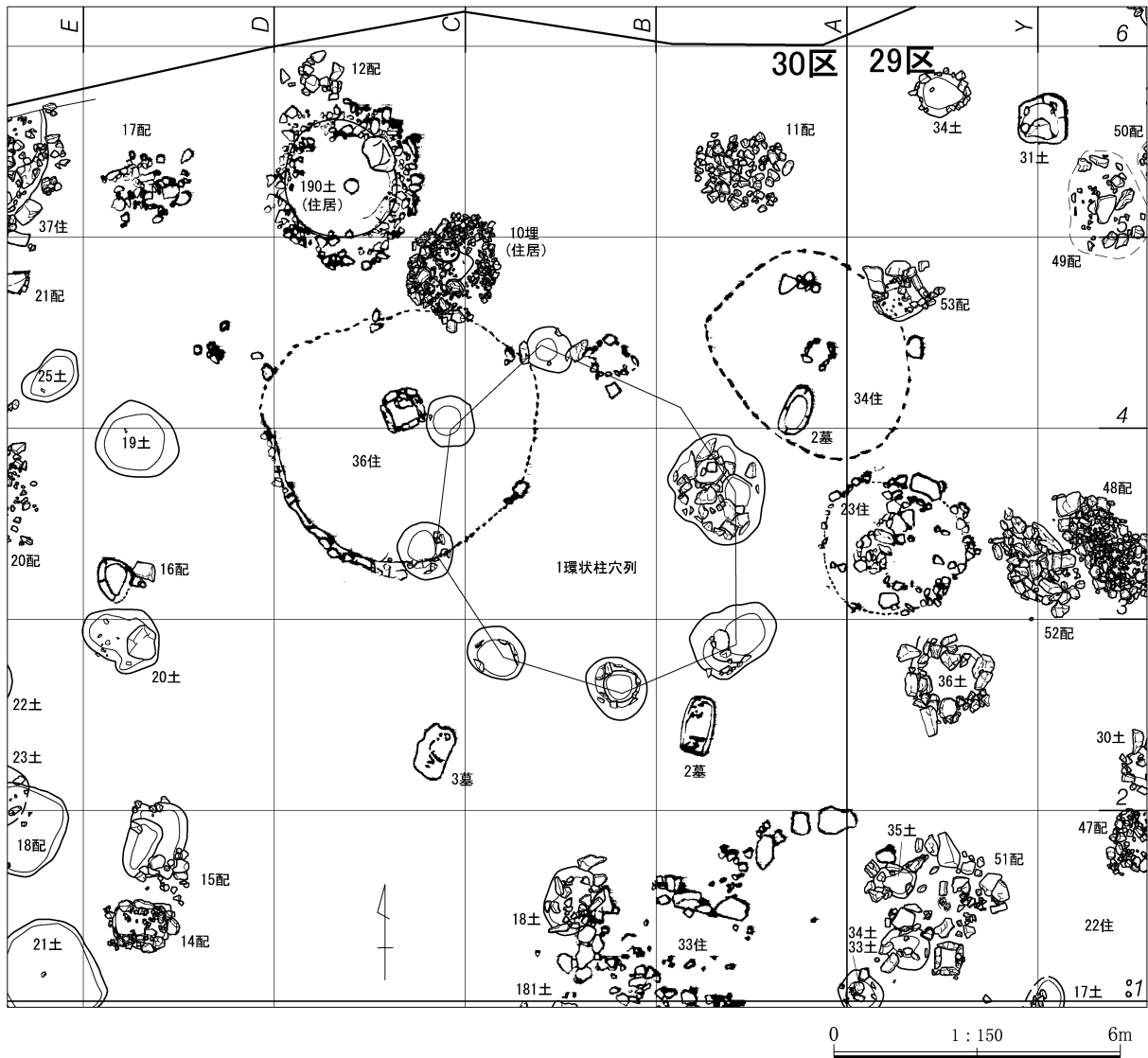
当遺構は、36号住居の掘り方調査に伴って、同住居には伴わない大型の柱穴が確認されたことを契機に、周辺部での追跡調査で同タイプの柱穴が7本確認された。このうち、柱1と柱2の上面には多量の礫の集積が認められた。この礫の集積については、記録が不十分なため、報告は後日を期したい。柱穴の調査段階で、柱1の北西側に重複する同規模の柱穴が確認され、最終的に8本となった。

確認面は、地山の黄色シルト～砂質土面の上に、若干の黒褐色土が堆積した面である。周辺部には多量の礫が分布するが、当遺構の柱穴で囲まれた内部は礫が少なく、空白地のような状態であった。

なお、柱7の東側に接して極浅い落ち込みがあり、底面から後期の深鉢が横転した状態で確認され、調査時に9号埋設土器とされた。出土状況から、土器埋設遺構からは除外したが、当遺構に伴う可能性を考慮して、ここに掲載した。

**形状** 確認された柱穴は8本であるが、柱8は柱1に重複しており、柱穴の配置は7箇所となる。このうち、柱5と柱6は、後期後半期の36号住居と重複し、これに切られている。

この地区は南西から北東方向に傾斜しており、その傾斜の等高線方向に長軸を持つ楕円形状を呈する。柱穴の配置7箇所のうち、柱2～柱7は直径7.



第118図 30区1号環状柱穴列の位置

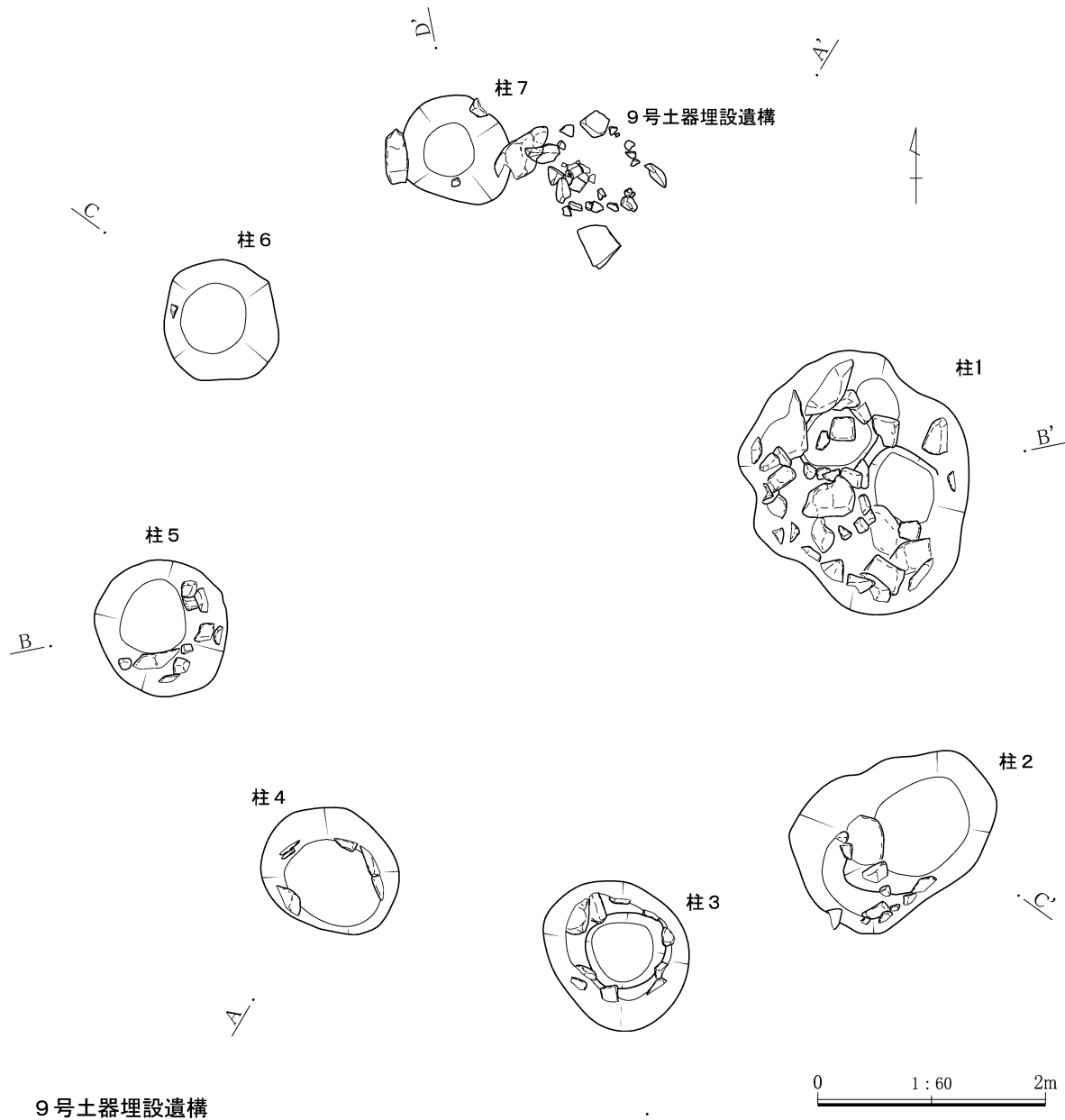
6mの円周上についており、柱1（柱8を含む）だけがその円周上より内側に入り込んでいる。また、柱穴間の距離は260～270cmでほぼ揃っており、その配置には規格性が伺える。

**柱 穴** 柱穴の平面形状は、円形～楕円形を呈する。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が162×123×132cm、柱2が174×120×138cm、柱3が136×115×168cm、柱4が125×107×168cm、柱5が124×116×183cm、柱6が110×107×152cm、柱7が105×92×132cm、柱8が145× $\times$ 128cmである。柱穴の深

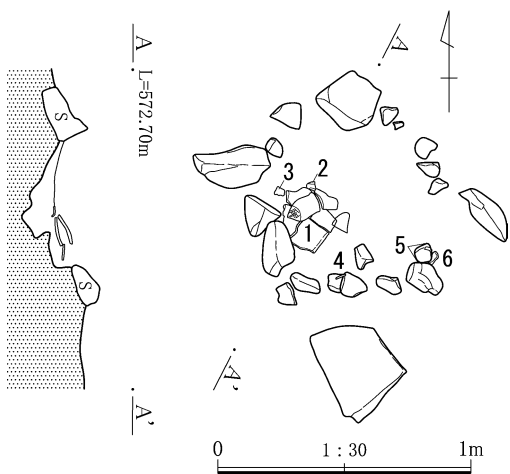
さは、傾斜の山側にあたる柱3～柱6が、より深い造りになっている。

柱2と柱4は、各柱穴を繋ぐ円周に沿って長軸を持つ楕円形を呈するが、これは19区1号環状柱穴列の柱穴と共通する特徴である。また、柱1と柱2の上面には、多量の礫の集積が認められた。量は少ないが、柱3～柱5でも上面に礫の集積があり、これらは18区3号掘立柱建物の柱穴の状態と共通する特徴である。

柱1は、円周上より内側に設置されたもので、確

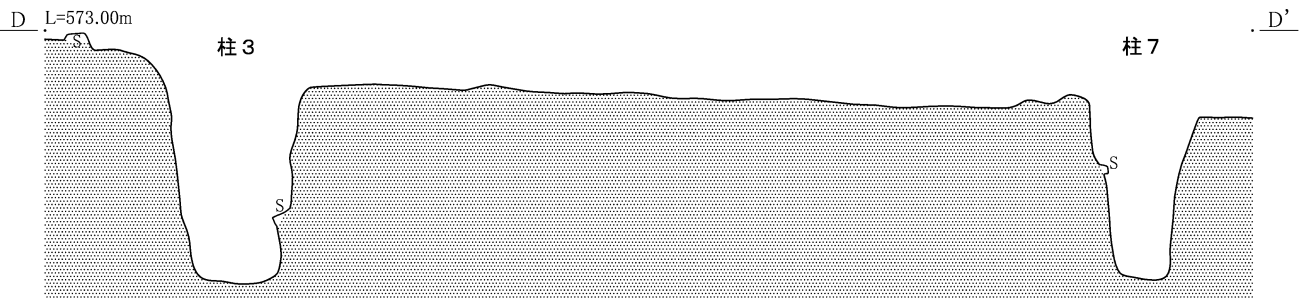
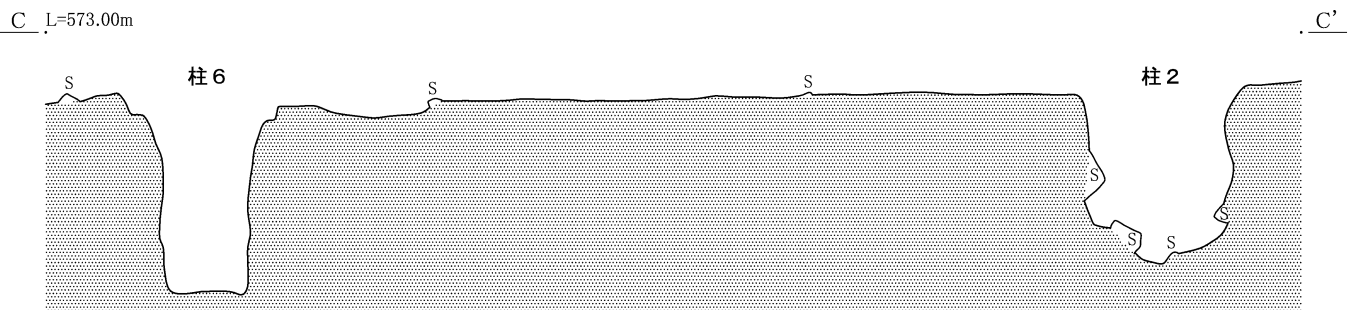
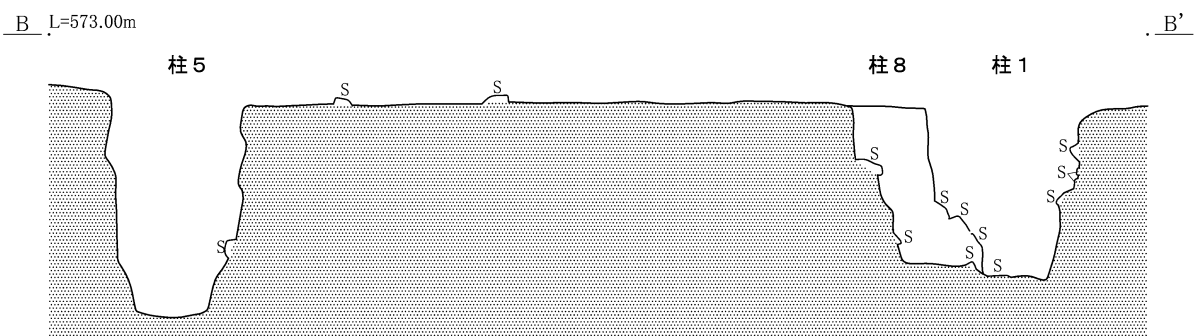
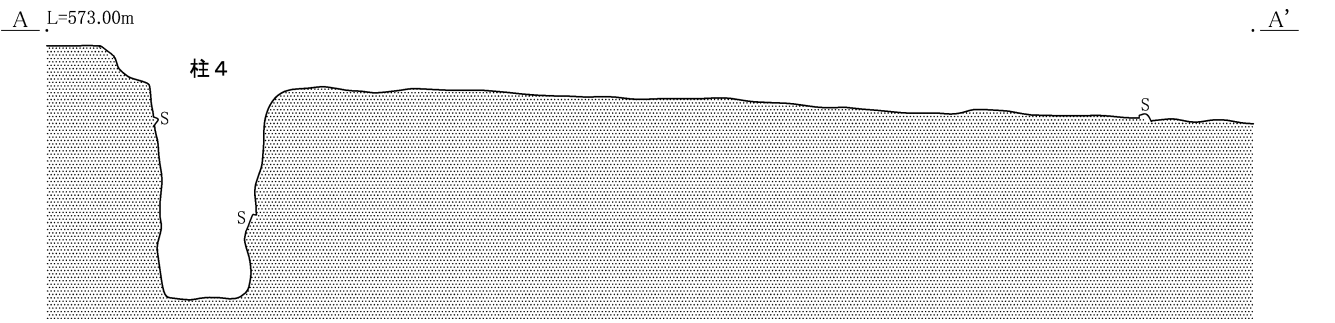


9号土器埋設遺構

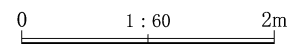


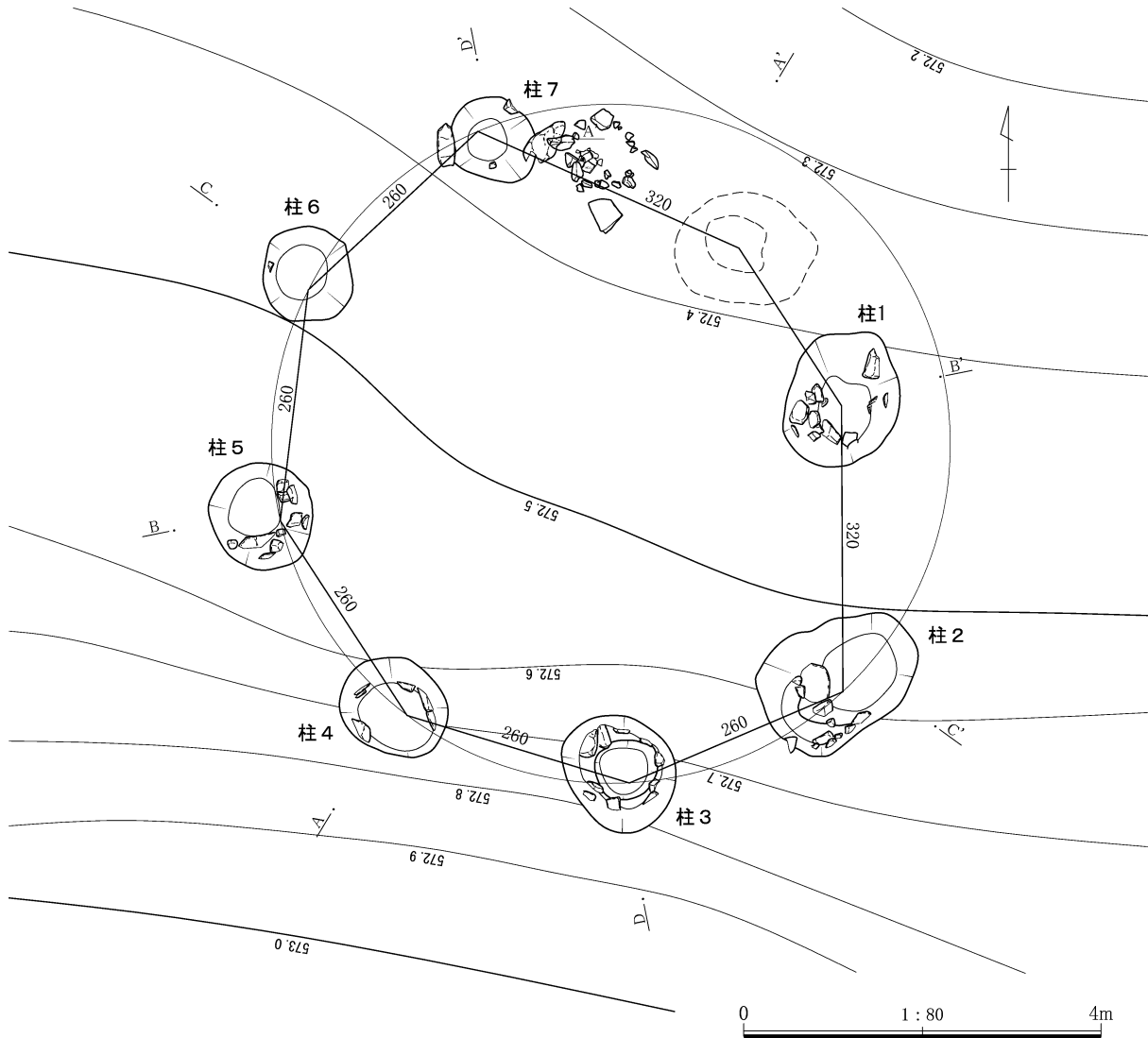
30区 9号土器埋設遺構

第119図 30区 1号環状柱穴列(1)



第120図 30区1号環状柱穴列(2)





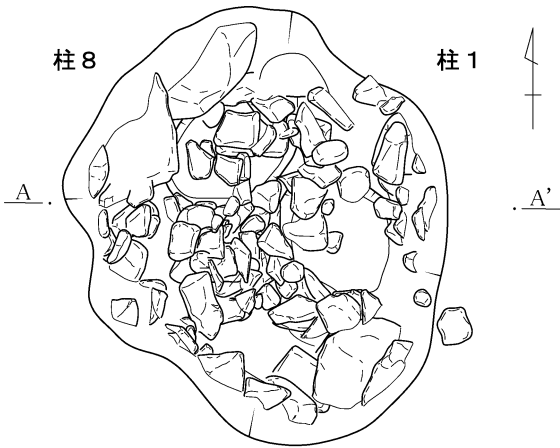
第121図 30区1号環状柱穴列(3)

認時に183号土坑とされた。上面に多量の礫が集積されており、それを取り去ると軟質の黒褐色土で埋没した柱穴が確認された。この土層には小礫が僅かに含まれ、柱痕は認められない。中層以下は硬質の黒褐色土で、地山土ブロックと礫を多量に含んでいた。礫は底面付近まで続いており、大形のものが多い。礫が柱痕を取り巻くような状態であったかどうかは、確認できない。

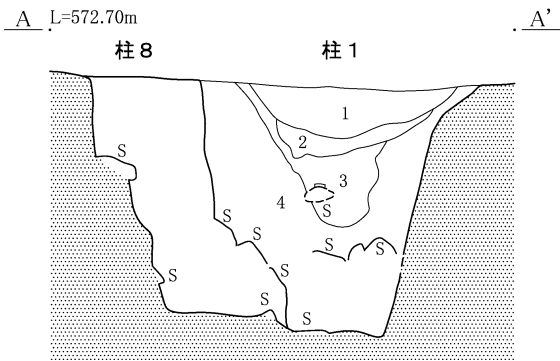
平面形は、傾斜地の等高線方向に直交する、南北

方向に長軸を持つ楕円形状を呈し、断面形は上方に向かって直線的にやや開く円筒状で、底面は平坦な作りである。底面まで完掘した段階で、北西側の側縁にもう一つの柱穴が重複していることが判明し、これを柱8とした。

柱8の規模と形態は、柱1と近似しており、おそらく柱1は再構築したものであろう。柱8は硬質の黒褐色土で埋められており、埋め土中には地山土ブロックと多量の大形礫が含まれていた。

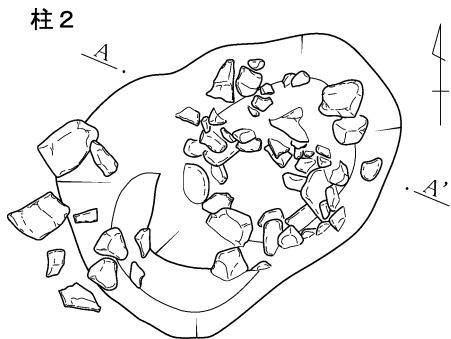


30区1号環状柱穴列 柱1埋没土

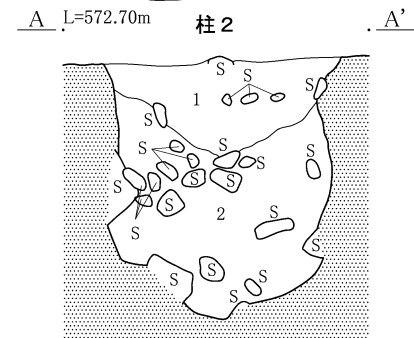


30区1号環状柱穴列 柱1掘り方

- 柱1
- 1、黒褐色土 黒みが強く、軟質。
  - 2、黒褐色土 地山の黄色シルトを多く含む。
  - 3、黒褐色土 硬質。
  - 4、黒褐色土 硬質。礫と地山黄色シルトを多く含む。

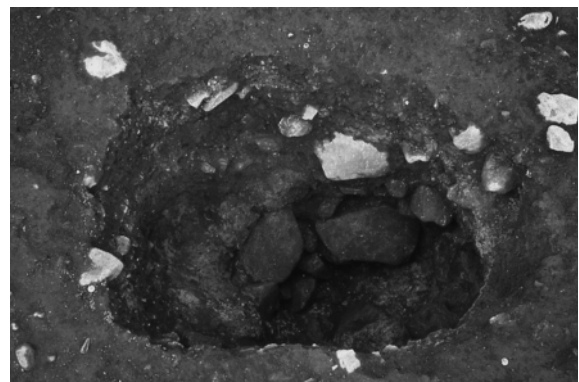


30区1号環状柱穴列 柱2埋没土



- 柱2
- 1、黒褐色土 軟質で小礫を含む。
  - 2、黒褐色土 黒みが強く、拳大の礫を多量に含む。

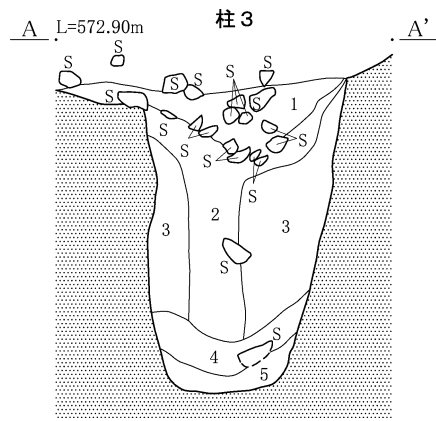
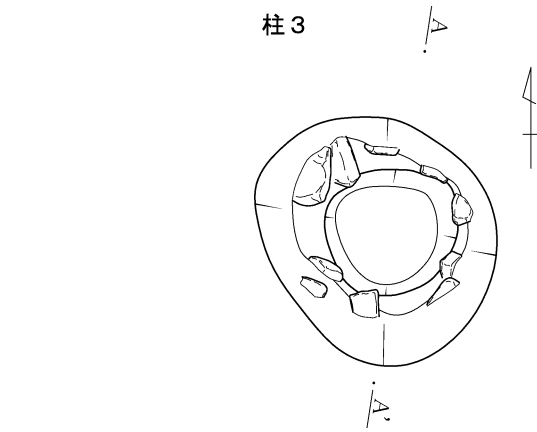
0 1:40 2m



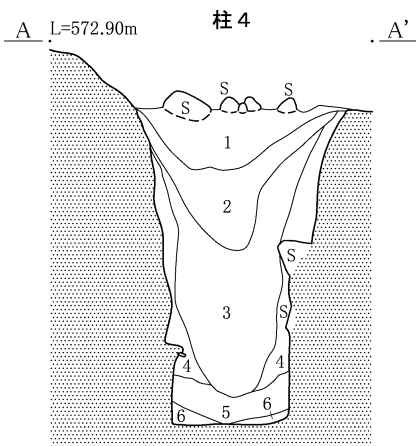
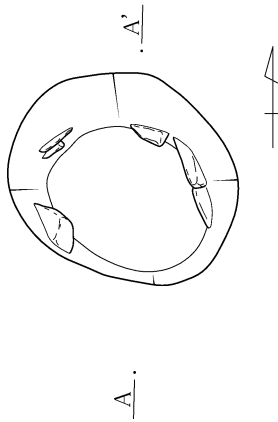
30区1号環状柱穴列 柱2掘り方

第122図 30区1号環状柱穴列 柱1・柱2・柱8





柱4

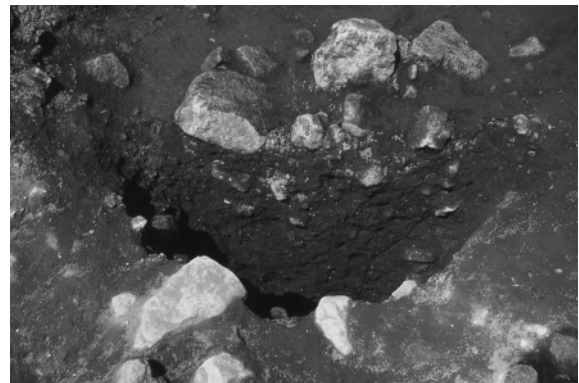


柱4

- 1、黒褐色土 黒みが強く、拳大の礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土 やや軟質。
- 3、黒褐色土 軟質で、地山の黄色シルトを多く含む。
- 4、暗褐色土 地山の黄色シルトを多く含む。
- 5、黄褐色土 硬質で、小礫と地山黄色シルトを多く含む。
- 6、黄褐色土 よごれた地山土。

柱3

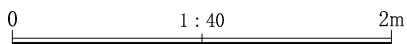
- 1、黒褐色土 黒みが強く、拳大の礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土 軟質。
- 3、褐色土 地山の黄色シルトを多く含む。
- 4、黄褐色土 硬質で、小礫と地山黄色シルトを多く含む。
- 5、黄褐色土 よごれた地山土。



30区1号環状柱穴列 柱4

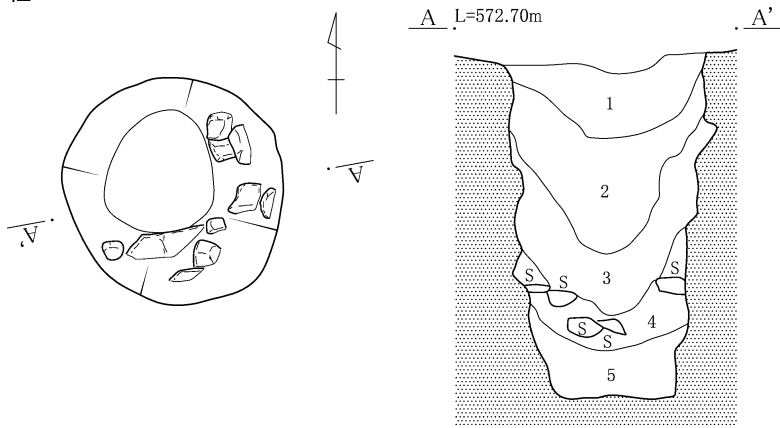


30区1号環状柱穴列 調査風景



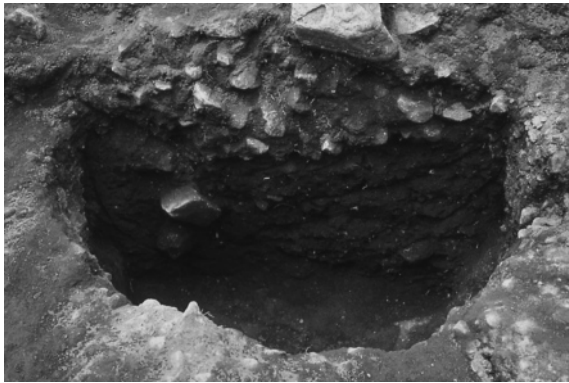
第123図 30区1号環状柱穴列 柱3・柱4

柱5



柱5

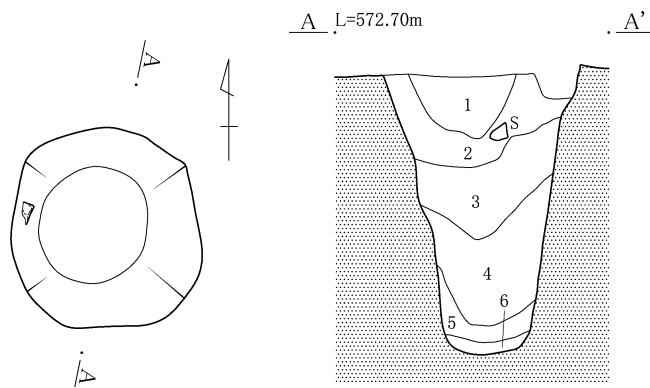
- 1、黒褐色土 黒みが強く、小礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土 やや軟質。
- 3、黄褐色土 地山の黄色シルトを多く含む。
- 4、黒褐色土 硬質で、礫を多量に含む。
- 5、黄褐色土 よごれた地山土。



30区1号環状柱穴列 柱5埋没土

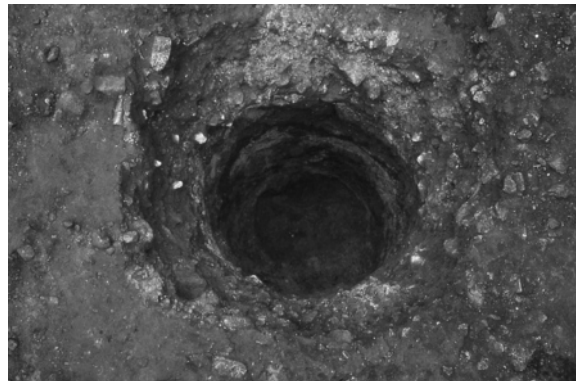
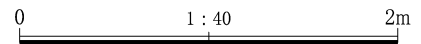
30区1号環状柱穴列 柱5掘り方

柱6



柱6

- 1、黒褐色土 黒みが強く、小大の礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土 やや軟質で地山黄色砂質土を多く含む。
- 3、黒褐色土 粘性があり、硬質。
- 4、暗褐色土 礫と地山の黄色シルトを多く含む。
- 5、黄褐色土 硬質で、小礫と地山黄色シルトを多く含む。
- 6、黄褐色土 よごれた地山土。硬質で礫を多く含む。

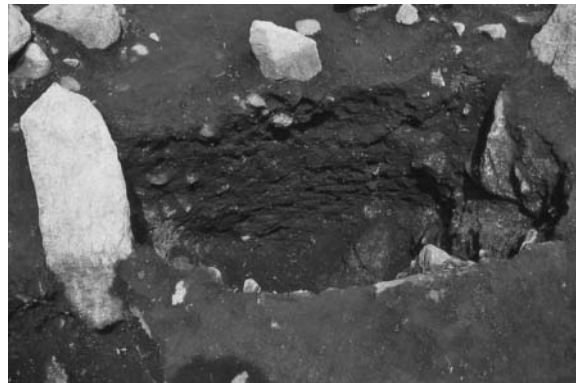
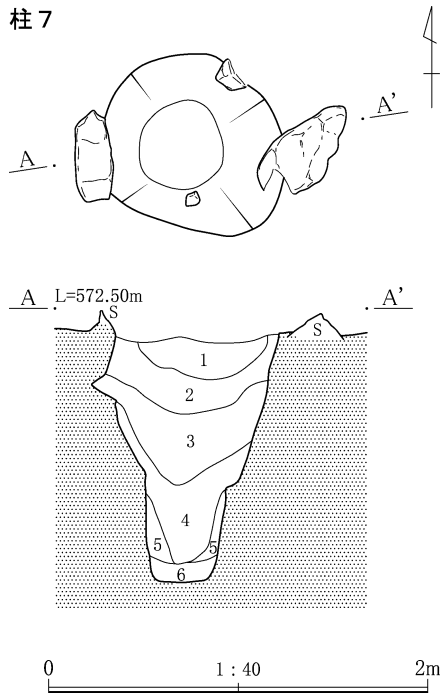


30区1号環状柱穴列 柱6埋没土

30区1号環状柱穴列 柱6掘り方

第124図 30区1号環状柱穴列 柱5・柱6

柱7



30区1号環状柱穴列 柱7

柱7

- 1、黒褐色土 黒みが強く、小大の礫を多量に含む。
- 2、黒褐色土 やや軟質で地山黄色砂質土を多く含む。
- 3、黒褐色土 硬質で、地山黄色シルトを多量に含む。
- 4、暗褐色土 礫と地山の黄色シルトを少量含む。
- 5、黄褐色土 硬質で、地山黄色シルトを少量含む。
- 6、黄褐色土 よごれた地山土。硬質で礫を多く含む。

第125図 30区1号環状柱穴列 柱7

柱2は、確認時に182号土坑としたもので、柱1と同様に、上面に多量の礫が集積されていた。平面形は、柱穴列を繋ぐ円周上に長軸を持つ楕円形を呈し、断面形は円筒形で、底面はやや丸みを持つ。

埋没土も柱1と類似しており、上層に小礫を含む軟質の黒褐色土があり、中層以下は大形礫を多量に含む硬質の黒褐色土で埋められていた。柱痕は、土層断面では確認できなかったが、礫は中央部の直径30cm前後の空白部を取り巻いており、これを柱痕と考えてよいだろう。

柱3は、確認時に168号土坑としたもので、平面形は円形状を呈し、断面形は上方に向かって直線的にやや開く円筒状で、底面は平坦である。この柱穴では、断面調査で中心からやや北側に寄った位置に、直径30cm前後の柱痕が確認された。柱痕は軟質の黒褐色土で埋没しており、底面から25cmほどの厚さで埋め土された小礫を多量に含む硬質の黄褐色土で止まり、上層は礫を多量に含む黒褐色土で覆われていた。

柱4は、確認時に186号土坑としたもので、上面に大形礫を主体とする礫の集積が認められた。柱穴の平面形は、柱2と同様に、柱穴列を繋ぐ円周上に長

軸を持つ楕円形を呈し、断面形は上部が外反する円筒形で、底面は平坦である。断面調査では、明瞭な柱痕は確認できなかったが、軟質の黒褐色土は中心付近で大きく落ち込んでおり、この土層は柱3と同様に、底面から25cmほどの厚さで埋め土された小礫を多量に含む硬質の黄褐色土で止まり、上層は礫を多量に含む黒褐色土で覆われていた。

柱5は、後期後半の36号住居に重複する柱穴で、確認時は189号土坑とした。平面形は円形を呈し、断面形は円筒状で、底面は平坦である。当遺構で最も深い柱穴で、深さはなんと183cmもある。断面調査では明瞭な柱痕は確認できないが、埋没土は柱4と近似しており、底面に25cmほどの厚さで埋め土された小礫を多量に含む硬質の黄褐色土があり、上層は礫を多量に含む黒褐色土で覆われていた。

柱6も後期後半の36号住居に重複する柱穴で、確認時は36号住居11号柱穴とした。当遺構発見の契機となった柱穴で、36号住居の石囲い炉のすぐ北側の床下で確認された。平面形は円形を呈し、断面形は上方に向かって直線的に開く円筒状で、底面は平坦である。断面調査では明瞭な柱痕は確認できないが、埋没土は柱4と近似しており、底面に25cmほどの厚

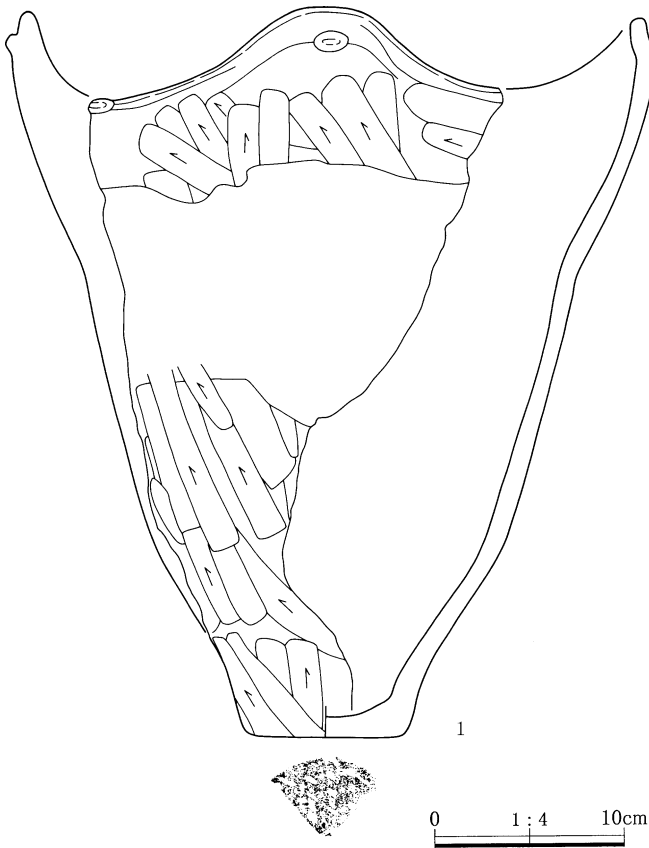
から105点、柱5から10点、総計258点が出土した。内訳は中期が31点、後期が227点であり、後期土器が圧倒的主体である。

後期土器は、堀之内1式から高井東式までのものが混在して出土している。時期が判明するもので主体となるのは堀之内1式土器で、この時期の土器はいずれの柱穴でも出土量が最も多く、柱2では13点、柱4では58点がまとまって出土しており、堀之内2式土器がそれに次いでいる。

その他では、柱1から無頭石棒の頭部が1点、柱2から完形の軽石製品1点と土製円盤が1点、柱4から打製石斧の欠損品1点が出土している。

**所見** 長大な柱穴が直径7.6mの円周上に、ほぼ等間隔に配置された構造物で、東側12mにある後期後半期の配石墓群との関係や、出土遺物を考慮して、環状木柱列との見方もあるが、近年では直径8mを超える大形の柄鏡形住居も確認されており、本遺跡でもその後の調査で直径8mクラスの柄鏡形住居が確認されている。当遺構の性格については、後期住居の整理作業を待って、慎重に検討したい。

時期は、出土土器の中から最も新しい時期を選択すれば、加曾利B式～高井東式が該当するが、当遺跡に重複する36号住居と、北東に接近する34号住居がその時期に該当しており、さらに柱7に接する9号埋設土器も高井東式であることを考慮すれば、最も出土量の多い後期堀之内1～2式に比定される妥当性が高いと思われる。



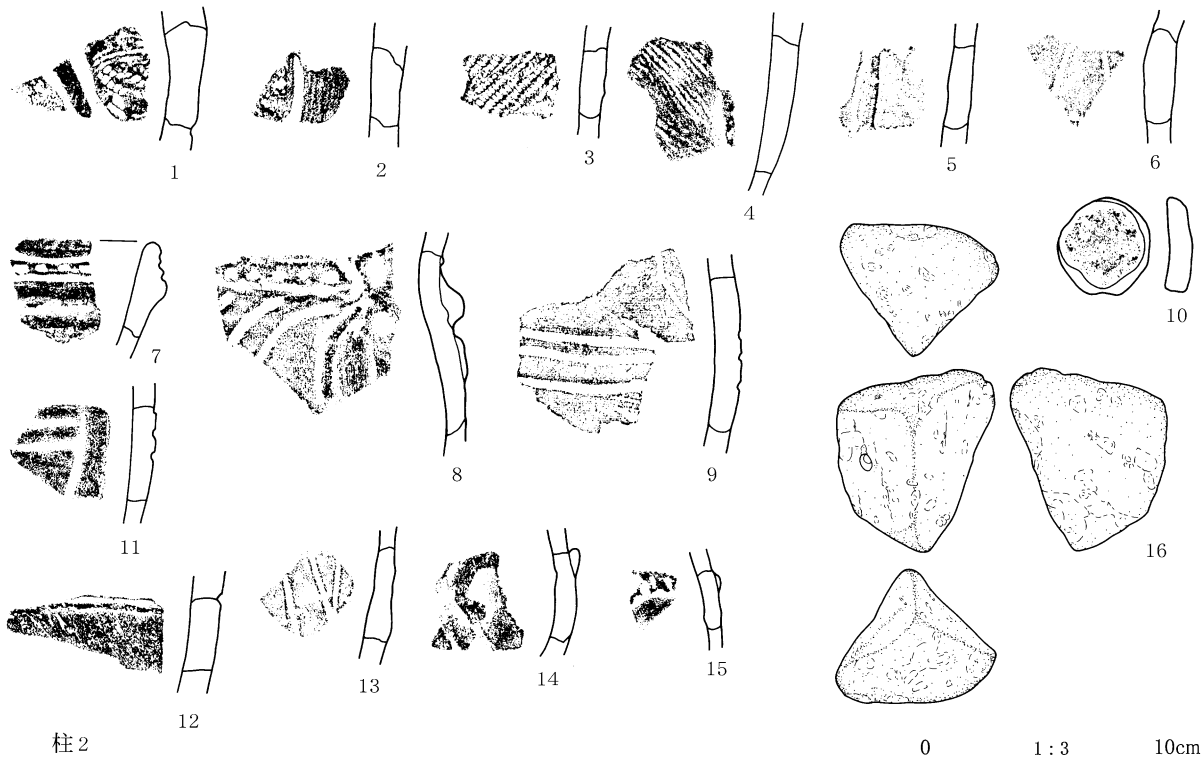
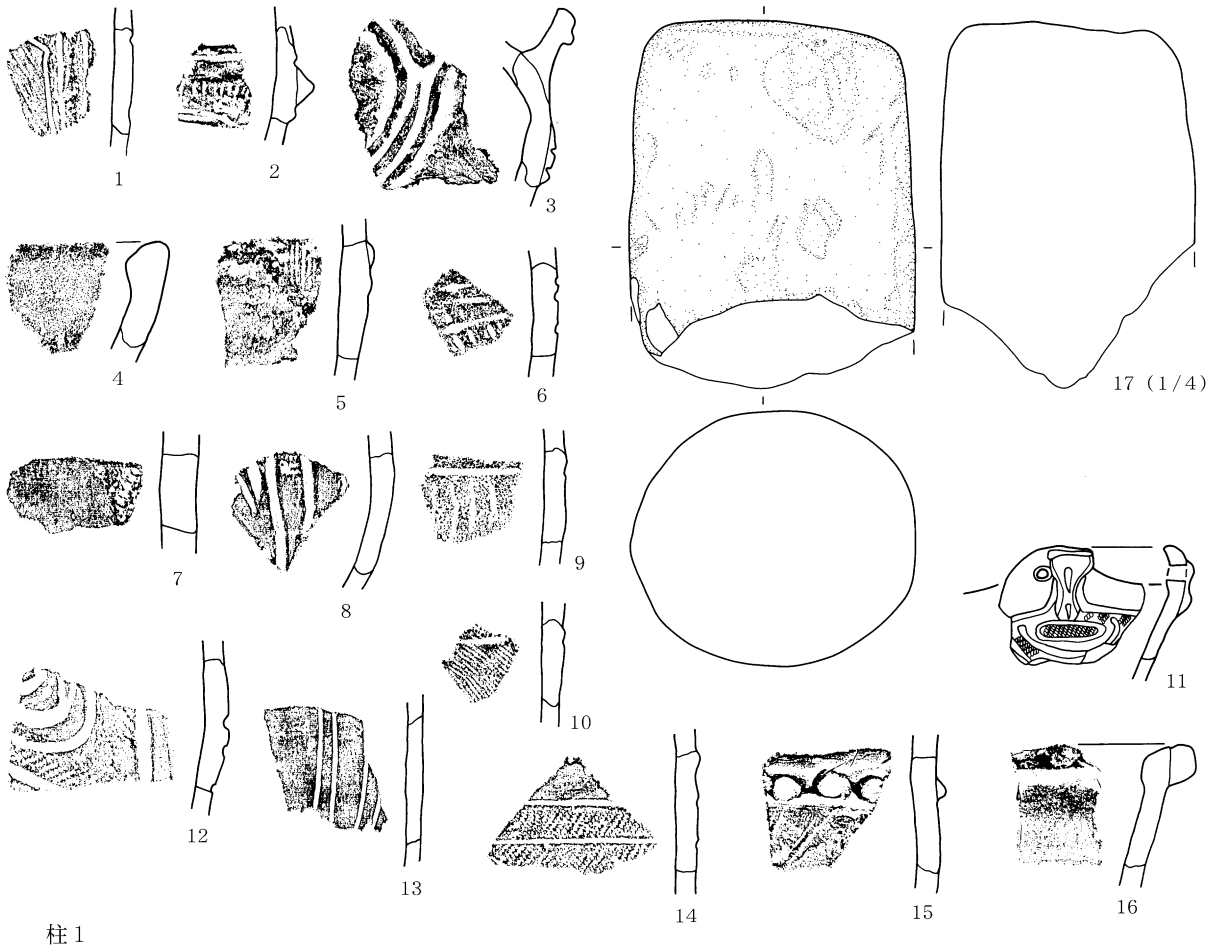
第126図 30区1号環状柱穴列出土遺物

さで埋め土された小礫を多量に含む硬質の黄褐色土があり、上層は礫を多量に含む黒褐色土で覆われていた。また、写真で見ると、中央部を取り囲むように礫があり、柱痕があった可能性が想定される。

柱7は、確認時に188号土坑としたもので、平面形は円形状を呈し、断面形は下半部が細いY字状で、底面は平坦である。断面調査では明瞭な柱痕は確認できないが、埋設土は柱4と近似しており、底面に25cmほどの厚さで埋め土された小礫を多量に含む硬質の黄褐色土があり、上層は礫を多量に含む黒褐色土で覆われていた。

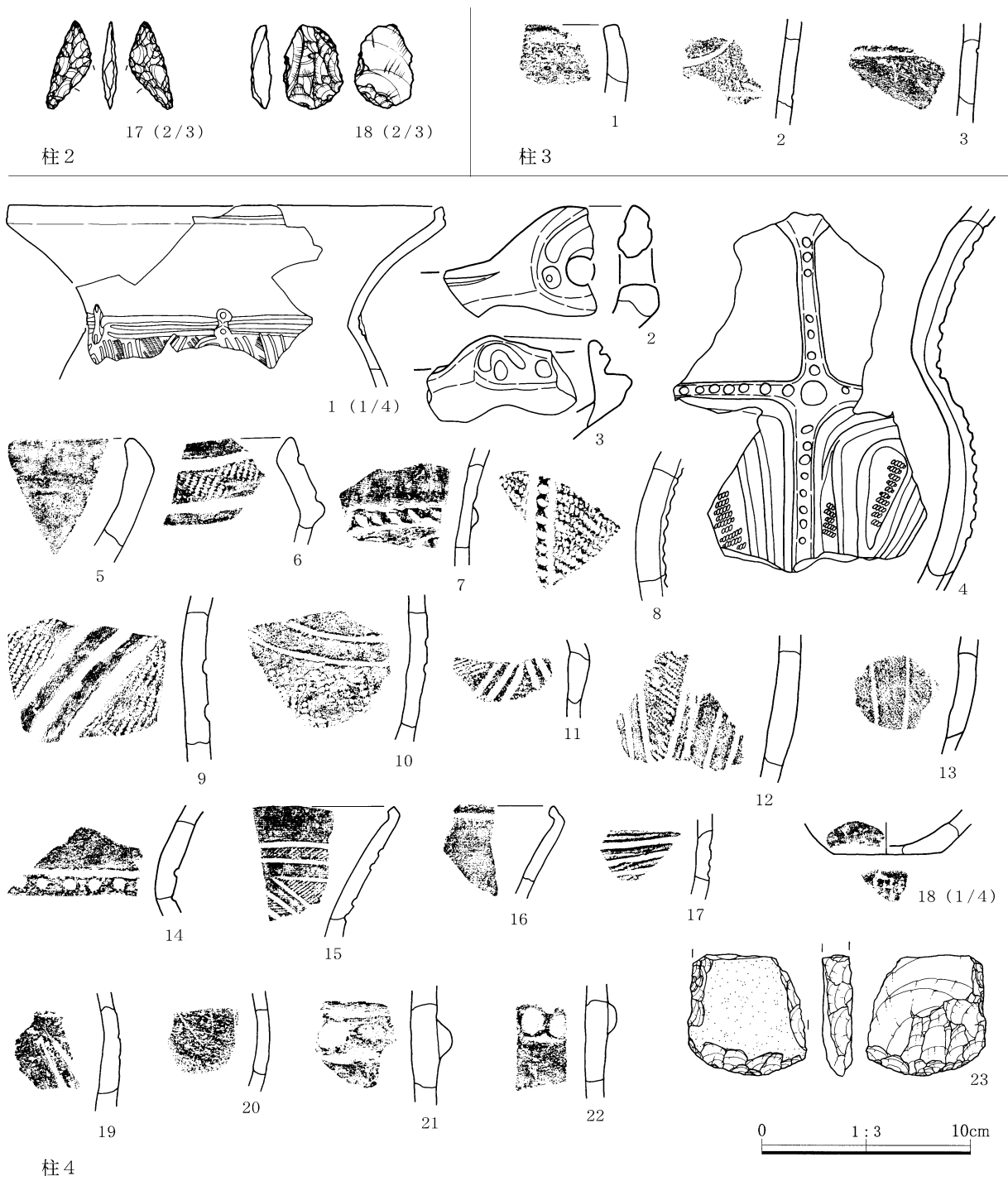
**伴出遺物** 柱1～柱5の各柱穴から、遺物の出土が認められた。土器はいずれも破片の状態であるが、柱1から46点、柱2から83点、柱3から14点、柱4

第3章 発見された遺構と遺物

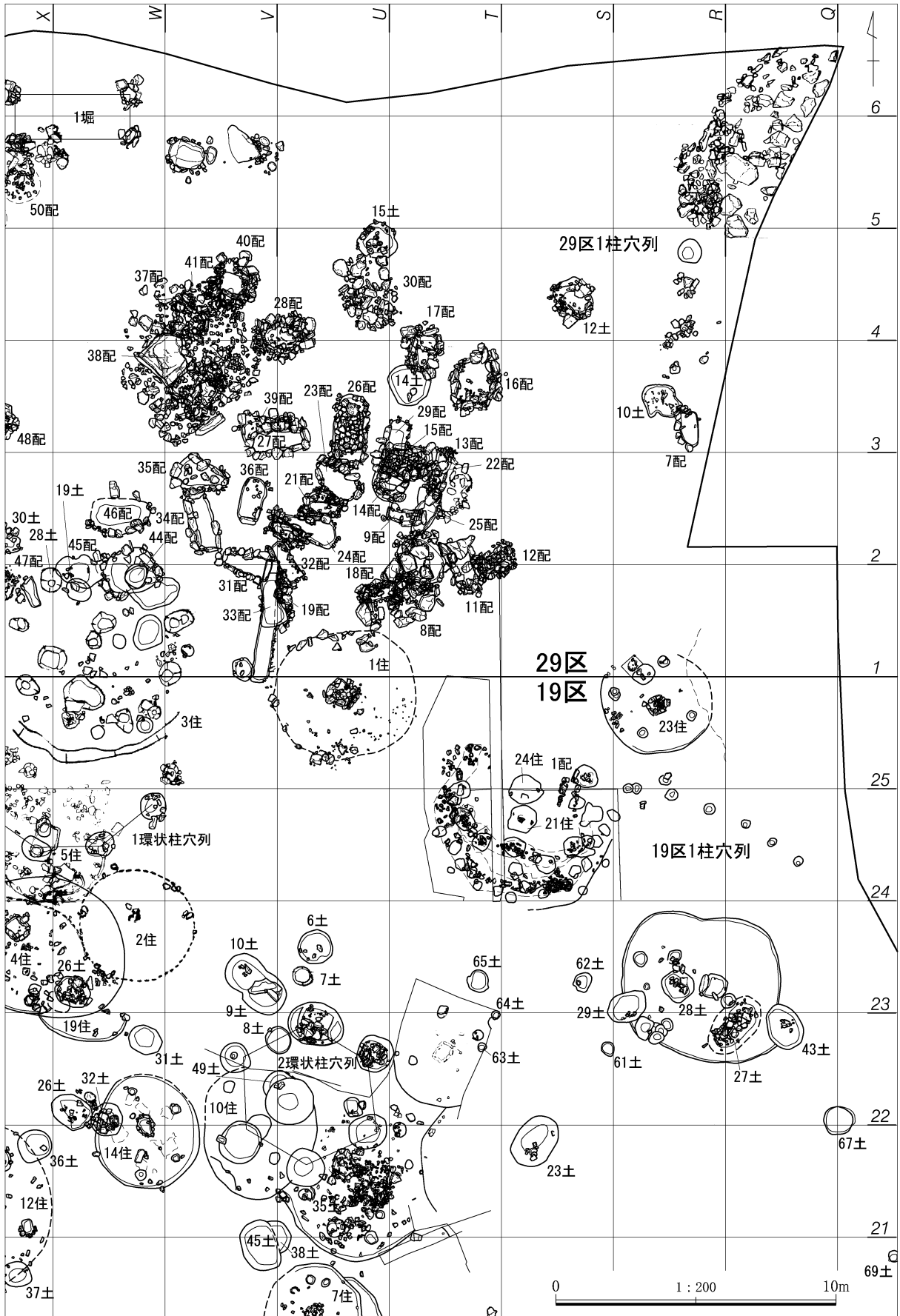


第127図 30区1号環状柱穴列出土遺物（柱1・柱2）

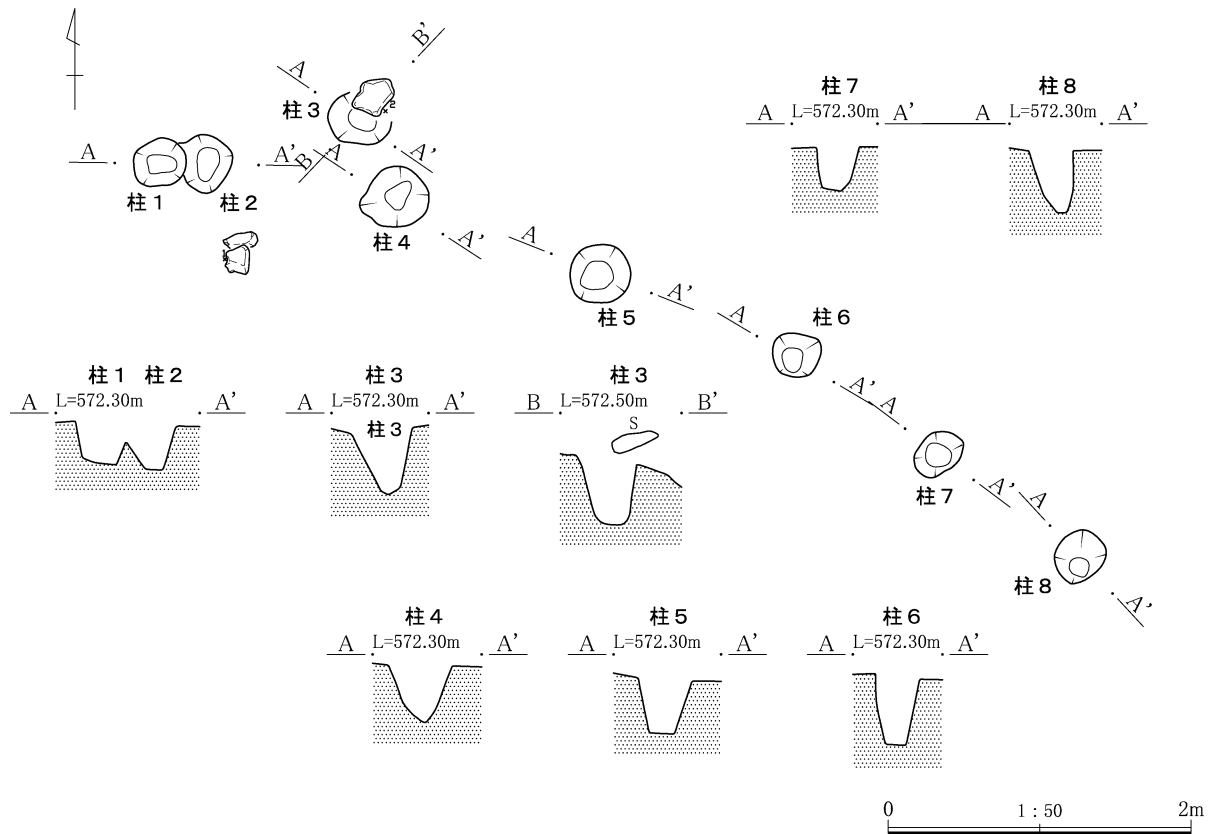
0 1:3 10cm



第128图 30区1号環状柱穴列出土遺物（柱2・柱3・柱4）



第129図 19区1号柱穴列・29区1号柱穴列の位置



第130図 19区1号柱穴列

## 第6節 柱穴列

縄文時代の柱穴列は、19区と29区で各1箇所ずつ、合計2箇所が確認された。両遺構は、本遺跡の中央を流れる山根沢が、吾妻川に落ちる手前の、東側に迂回した位置にある。ここはちょうど19区と29区の境にあたるが、現況は低い水田があったところで、調査範囲から除外された場所である。おそらく、縄文以前から低地だった場所で、本集落ではどのような利用をしたのか興味深い。2つの柱列は、この低地の西側に面して設置されており、19区1号柱列は等高線に沿って配置するのに対し、29区1号柱列は等高線に直交する南北方向に配置されている。柱列の確認は一部に留まるが、両柱列の配置は、あたかも低地を取り囲んでいるかのようにも見える。

なお、遺構分布および位置は、第129図の位置図、

あるいは付図を参照していただきたい。

以下、個別に報告する。

### 19区1号柱穴列

調査年度 平成11年度

位置 Q～R-24～25グリッド

確認状況 この地区は現況が水田であり、山根沢に沿って階段状に造成されていた。削平は地山にまで及んでいたが、平坦面の先端に僅かに縄文時代の遺構が残っており、その部分で当遺構は確認された。周辺には、西側に後期の21号・24号住居、北側に中期の23号住居が隣接する。確認面は、地山の黄色シルト～砂質土面である。

形状 傾斜地の等高線方向に沿って、弧を描きながら6本の柱穴が並んで確認された。西端にある柱1と柱2は重複しており、柱2と柱4の間には、





第131図 19区1号柱穴列出土遺物

北側に寄った柱3が位置する。各柱穴間の距離は、柱2と柱4が128cm、柱4と柱5が144cm、柱5と柱6が140cm、柱6と柱7が118cm、柱7と柱8が118cmである。

**柱 穴** 平面形は円形あるいは楕円形を呈し、断面形は上方が直線的に開く逆台形状で、底面は平坦なものとなつたものが認められる。いずれも暗褐色土で埋没しており、礫はほとんど含まない。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が35×30×28cm、柱2が35×—×30cm、柱3が42×33×44cm、柱4が40×40×38cm、柱5が40×38×38cm、柱6が32×28×46cm、柱7が34×27×30cm、柱8が34×31×42cmである。

**伴出遺物** 柱2から後期後半の土器破片2点、柱3から後期高井東式土器の破片が2点と、上面から多孔石1点が出土した。

**所 見** 柱穴の大きさや柱穴間の距離に多少の幅はあるが、その配置からみても一連の構造であった可能性が高い。山根沢は本遺跡で最も重要な水場であり、当遺構の性格として、手向け等の儀式的場に伴う柵列その他の施設を想定したいが、関連する遺

物等は得られていない。時期は、出土遺物から後期後半に比定しておきたい。

#### 29区1号柱列

**調査年度** 平成11年度

**位 置** R-3～5グリッド

**方 位** N9度E

**確認状況** 地山面に大量の地山礫が累々と点在する地区で確認された。この地区には大形礫が多く集積されており、後世に多少動かされている可能性もある。確認面は、地山の黄色シルト～砂質土面で、周辺に遺構はない。

**形 状** 傾斜地の等高線方向にほぼ直交して、南北方向に柱穴状の落ち込み等が並んだ状態で確認された。柱穴状の落ち込みが3箇所と、皿状の浅い落ち込み1箇所が、ほぼ直線上に並んでおり、両端の柱穴間の距離は約6.2mである。各柱穴間の距離は柱1と柱2が150cm、柱2と柱3が270cm、柱3と柱4が205cmである。

**柱 穴** 柱3以外の落ち込みは、19区1号柱列の柱穴と規模・形状が共通しており、本来はこの形態

## 第7節 集石遺構

礫を集めた集石遺構は、4箇所を確認されている。内訳は18区が1箇所、20区が3箇所である。各遺構の位置は、焼土遺構と共に付図3に示した。本遺跡は地山土中に礫を多量に含む遺跡であり、河川も身近にあるため、石を多用する遺構は各時代にわたって認められる。そのため、土坑や焼土遺構等でも礫が集積されたものを含んでいるものもある。ここでは、調査時の遺構名称を優先し、以下個別に報告する。

## 18区 1号集石

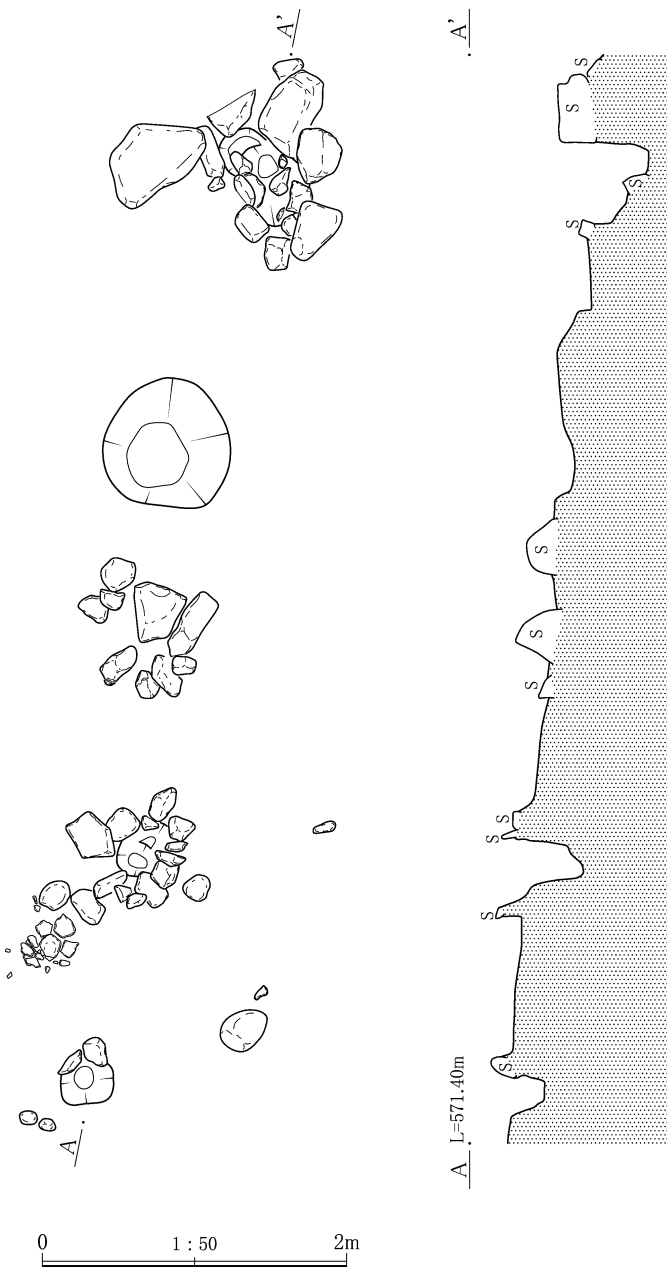
W-7グリッドに位置する。現況に残る1号石垣南側の高い地点にあり、周囲の地山に礫は少ない。東側に縄文時代後期の5号列石があり、当遺構はその延長線上に位置するが、両者の関係は不明である。

長軸130cm、短軸100cm、深さ20cmの楕円形状を呈する浅い掘り方内に、拳大~20cm大の礫がぎっしり詰め込まれていた。礫は各種雑多であり、被熱等は認められない。出土遺物はなく、時期ははっきりしない。

## 20区 1号集石

M-18グリッドに位置する。現況の区画に残っていた6号石垣の前面にあたるが、ここには馬入れ、あるいは通路の痕跡と思われる溝状の掘り方があり、当遺構はその一部を円形状に掘り込み、そこに大形の礫が集積されていた。円形状の掘り込みは、当初は一連の構造と思われたが、楕円形の土坑状を呈する掘り込みが2つ並んでおり、西側に161×146cmで深さは46cmの土坑、東側に113×102cmで深さ17cmの土坑が確認された。図では表現していないが、18区1号土坑と同様に、当初は両土坑とも多量の礫が集積されていた。礫の大きさは拳大~30cm大まであり、各種雑多で被熱痕跡は認められない。

遺物は、礫群中から縄文時代の丸石と多孔石が各1点ずつ、中世の内耳鍋の破片が2点出土しており、

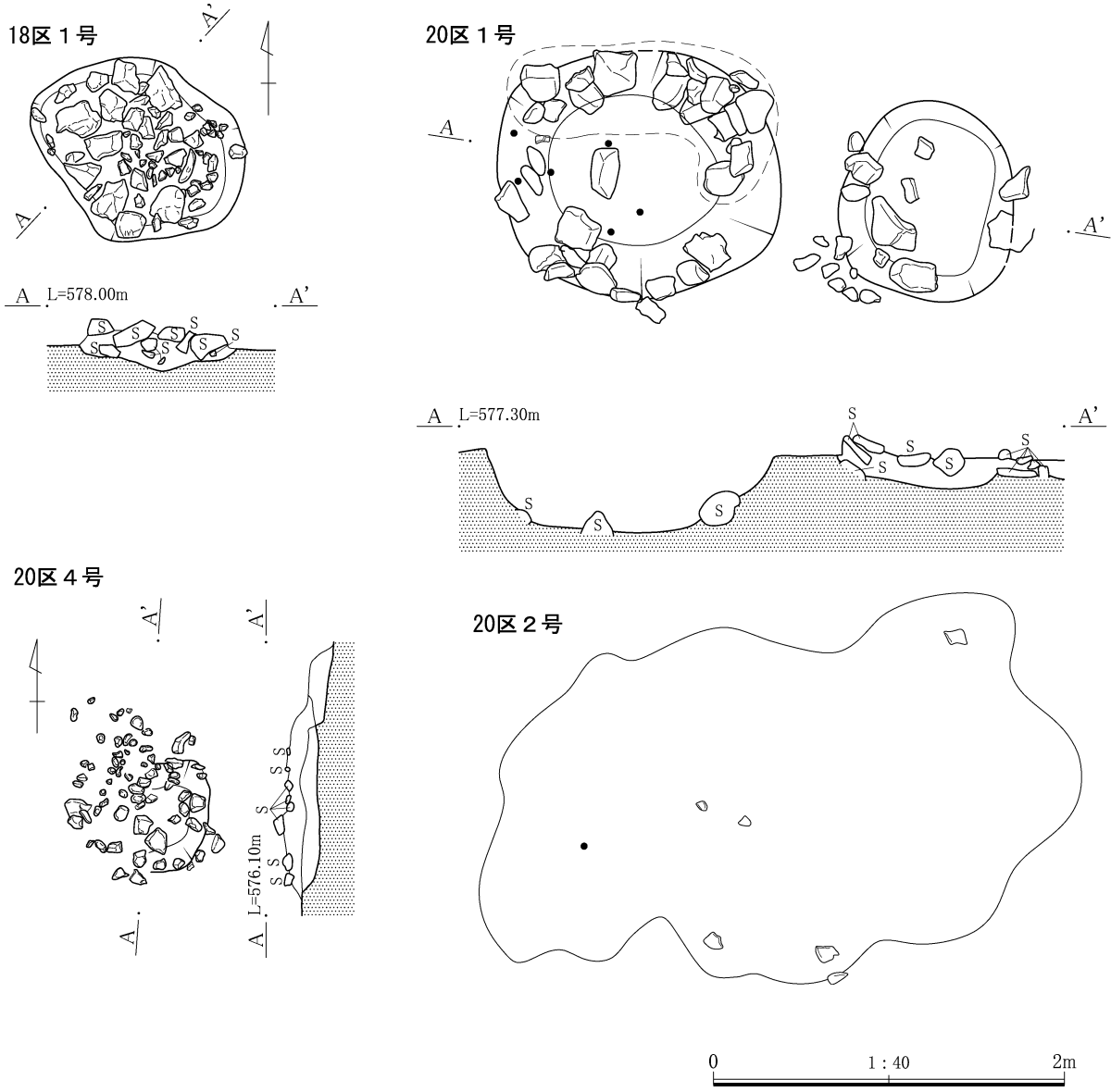


第132図 29区1号柱穴列

の柱列だったと考えたい。柱穴の規模(長軸×短軸×深さ)は、柱1が34×32×37cm、柱2が42×30×54cm、柱3が86×84×12cm、柱4が70×42×60cmで、深さは周囲の礫の上端部から計測した。

**伴出遺物** 出土遺物は認められなかった。

**所見** 柱列の方向は異なるが、柱穴の規模や、山根沢に面した低地の縁辺部に沿う点では19区1号柱列と共通しており、一連の施設だった可能性が高い。



第133図 18区1号、20区1号・2号・4号集石遺構

当遺構は中世以後の時期に比定されよう。

20区2号集石

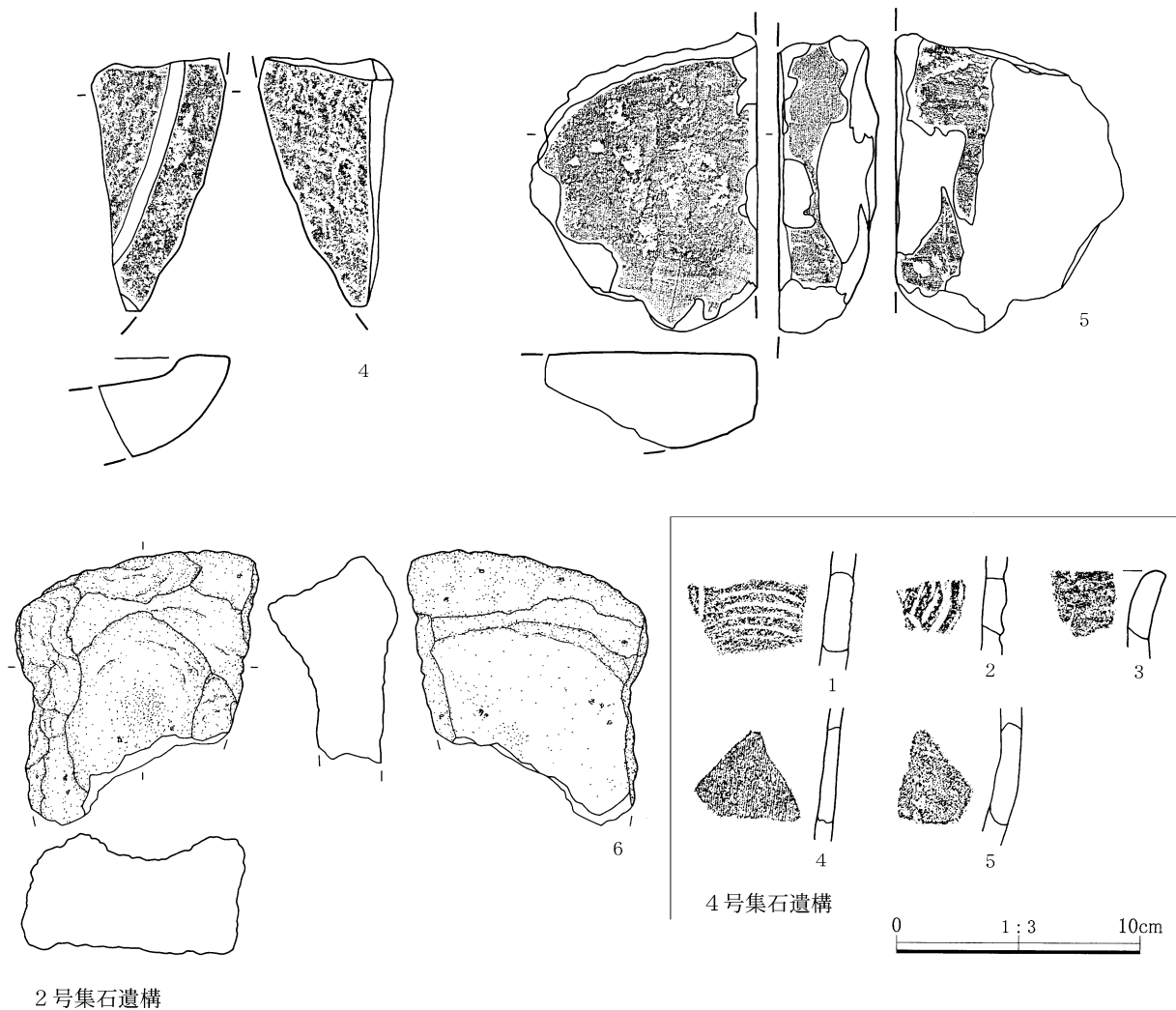
L-19グリッドに位置する。20区1号の北東7mのところであり、長さ30~50cmの大形礫と共に、多量の礫が長軸3.5m、短軸2mの範囲に集積されていた。掘り方ははっきりしないが、礫群中から中世の内耳鍋破片が3点出土しており、当遺構も中世以後の時期に比定されよう。

20区4号集石

E-18・19グリッドに位置する。縄文時代中期加曾利E4式期の68号住居に重複し、これを切っている。浅い掘り方内に拳大前後の礫が集積されており、円礫や破碎礫を含む。遺物は認められないため、時期は特定できないが、縄文時代の遺構であろう。



第134図 20区集石遺構出土遺物（1号・2号）



第135図 20区集石遺構出土遺物（2号・4号）

## 第8節 焼土遺構

焼土遺構は42箇所が確認されている。内訳は18区が13箇所、19区が8箇所、20区が18箇所、29区が2箇所、30区が1箇所である。各遺構の位置は、集積遺構と共に付図3に示した。

調査段階で焼土遺構としたものを表9に示した。網掛けしたものは、基本資料を点検・吟味するなかで、他の遺構内に含まれる等の理由から除外したものである。残る42箇所をここで扱うが、性格の判然としないものが多い。年代的には、中世以後と思われるものが主体となっており、縄文時代と特定でき

るものは少ない。

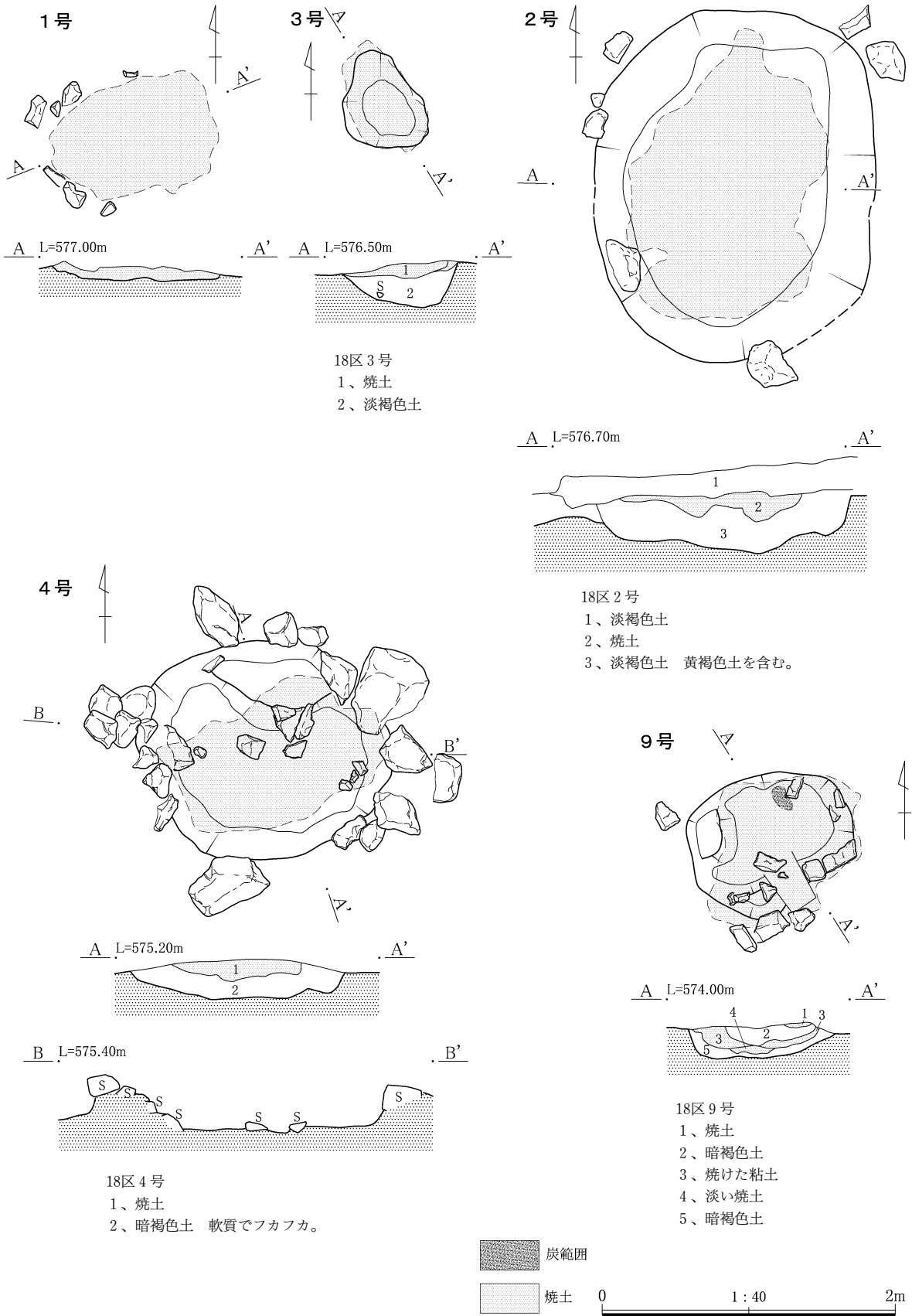
遺構の種類としては、その場で火を焚いた結果、表面が焼土化したものと、土坑等の掘り方を伴うものがある。後者では、掘り方埋没土の上面が焼土化したものの他に、土坑内に貼った粘土が焼土化したもの、焼土がまとめて廃棄されたもの等もある。また、中世以後のものでは、焼土中に炭や灰を伴うものが多い傾向が伺える。

以下、主要な遺構を中心に区毎に報告する。

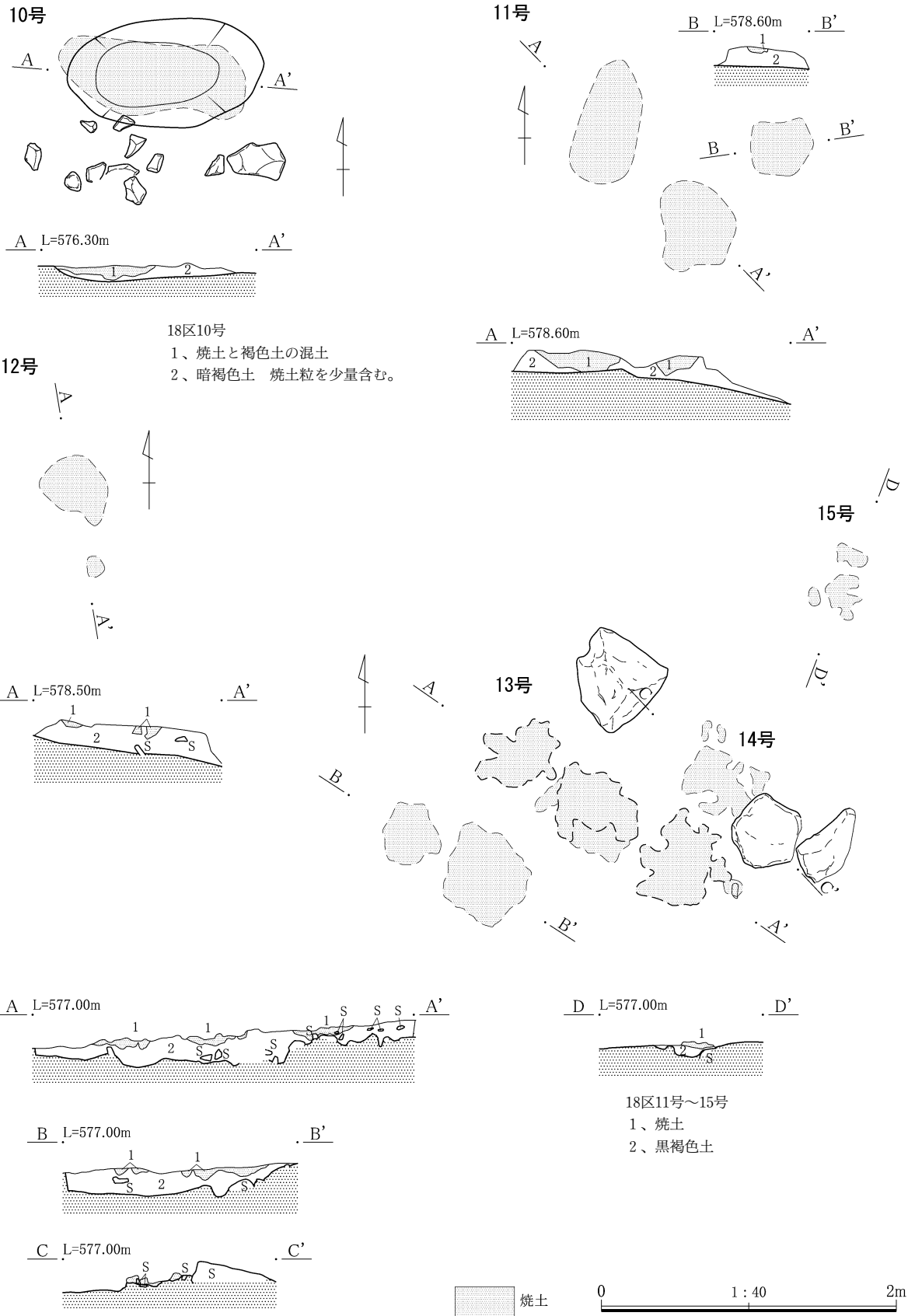
表9 横壁中村遺跡 焼土一覽

遺構名	位置	時期	型式名	調査	規模(cm)			備考
					長径	短径	深さ	
18区1号	L-14			2001	116	84	24	
18区2号	Q-14・15	中近世		2001	242	182	54	浅い掘り込みの上面に黄色シルトを土間状に貼る。地山礫なし。
18区3号	P-15	中近世		2001	82	56	42	浅い掘り込みの上面に黄色シルトを土間状に貼る。地山礫なし。
18区4号	K-19	中近世		2001	172	160	38	浅い掘り込みの上面に黄色シルトを土間状に貼る。地山礫なし。
18区5号	O-21	縄文	欠番	2001				18号配石中にあり。散在した焼土の一部で、遺構ではない。
18区6号	O-21	縄文	欠番	2001				18号配石中にあり。散在した焼土の一部で、遺構ではない。
18区7号	N-20	縄文	欠番	2001				14号住居覆土中の焼土で、遺構ではない。
18区8号			欠番	2001				
18区9号	T-22	中近世		2002	131	106	36	側に粘土を貼った土坑で、覆土中に炭化材を伴う。
18区10号	N・O-16	中近世		2002	140	75	21	浅い掘り込みの上面に黄色シルトを土間状に貼る。地山礫なし。
18区11号	S-7	中近世		2002	—	—	48	117・118・119号土坑の上面で確認。3カ所に散在し、一部に炭化材を伴う。
18区12号	T-7	中近世		2002	—	—	42	142号土坑の上面で確認。11号焼土と同じ性質か。
18区13号	T-10	中近世		2002	—	—	34	1号石垣の前面で確認。等間隔に列状に並ぶ。
18区14号	T-10	中近世		2002	—	—	38	13号焼土と一連の遺構。
18区15号	S-10	中近世		2002	—	—	24	13号焼土と一連の遺構。
18区16号	U・V-2	中近世		2002	—	—	24	小規模な焼土が3カ所に点在。地山礫が抜かれている。
18区17号	W-14	縄文中期		2002	—	—	21	縄文時代の埋没谷で確認。北西1mに24号土器埋設遺構あり。
18区18号			欠番	2003				
19区1号	U-16		欠番	2002				37住(平安)の南接、
19区2号	F-20	縄文後期		2002	120	71	24	縄文埋没谷にあり、後期の層位で確認。
19区3号	X-12	縄文中期	欠番	2003				34住(加E2)覆土中にあり。34住覆土中の焼土。
19区4号	T・U-16			2003	52	48	18	37住(平安)に近接。地山で確認したが時期不明。
19区5号			欠番	2003				
19区6号	U-17	縄文?		2003	—	60	22	2号溝に切られる。炭化物を伴う。
19区7号	O-12	中近世		2003	84	54	28	山根沢の埋没谷にあり。
19区8号	O-11	中近世		2003	40	38	16	山根沢の埋没谷にあり。1号畑より新しい。
19区9号	O-14	中近世		2003	28	14	—	山根沢の埋没谷にあり。
19区10号	O-15	中近世		2003	—	—	—	山根沢の埋没谷にあり。
19区11号	L-10	中近世		2003	90	70	22	山根沢の埋没谷にあり。炭化物を伴う。
19区12号	W-18	縄文	欠番	2004				54号住居の炉に変更。8号埋設土器の下。
20区1号~8号	M-20他	中世1号館内		1999				後日報告
20区9号	T-12	縄文中期	加E4式	2000	—	—	46	直上に加E4式土器が横転し、下部に223号土坑(陥穴)あり。
20区10号	U-16	中世		2000	68	65	34	
20区11号	P-15	中世		2000	70	62	62	
20区12号	P-16	中世		2000	68	58	46	11号焼土の近く
20区13号	I-19・20	近世?		2000	—	—	44	焼土明瞭、土が貼ってある感じ。
20区14号	P-15	中世		2001	44	32	30	石に囲まれる。
20区15号	P-14	中世		2001	60	48	46	ママ出土。土サンプル採取。下部に灰あり。
20区16号	Q-20	中世以降		2001	215	124	46	焼土、炭、灰あり、炭は生焼け。新しいか?
20区17号	Q-19	中世以降		2001	106	58	36	小規模で時期不明瞭。
20区18号	F・G-21	中世以降		2001	444	321	103	長方形の土間状、下部に掘り方あり。
20区19号	F-19	中世以降		2001	86	58	—	しっかりした焼土で、長楕円形に分布。
20区20号	P-14	中世	欠番	2001				炭化物集中。土サンプル採取。
20区21号	F-19		欠番	2001				
20区22号	N-16		欠番	2001				炭を伴う
20区23号	F-18	中世		2001	—	86	—	
20区24号	F-18	中世		2001	79	54	27	灰、炭、礫を伴う
20区25号	B・C-19	中世以降		2001	158	88	26	近世か?
20区26号		縄文?	欠番	2001				上面に多量の礫
20区27号	J-14	縄文	欠番	2001				多量の礫を伴う。411土坑とセットで住居か。
20区28号	B-15	縄文後期	堀之内1式					98号住居の炉に変更。欠番とする。
20区29号	F-4	縄文後期	称名寺1式	2003	124	112	66	住居の炉であろう。
20区30号	L-10			2004	—	—	22	炭を伴う
20区31号	M-12			2004	80	64	24	下部に石組み
20区32号	P-8			2004	44	32	38	
29区1号	C-3他	縄文中期	加E3式	1999	—	—	24	6箇所に分散する旧1号~6号を一括した。12住や列石の下部で確認。
29区2号	C-3	縄文中期		1999	40	40	14	1号に隣接する。1号と一連の焼土であろう。
30区1号	N-2			1999	—	—	—	39住から変更

第3章 発見された遺構と遺物



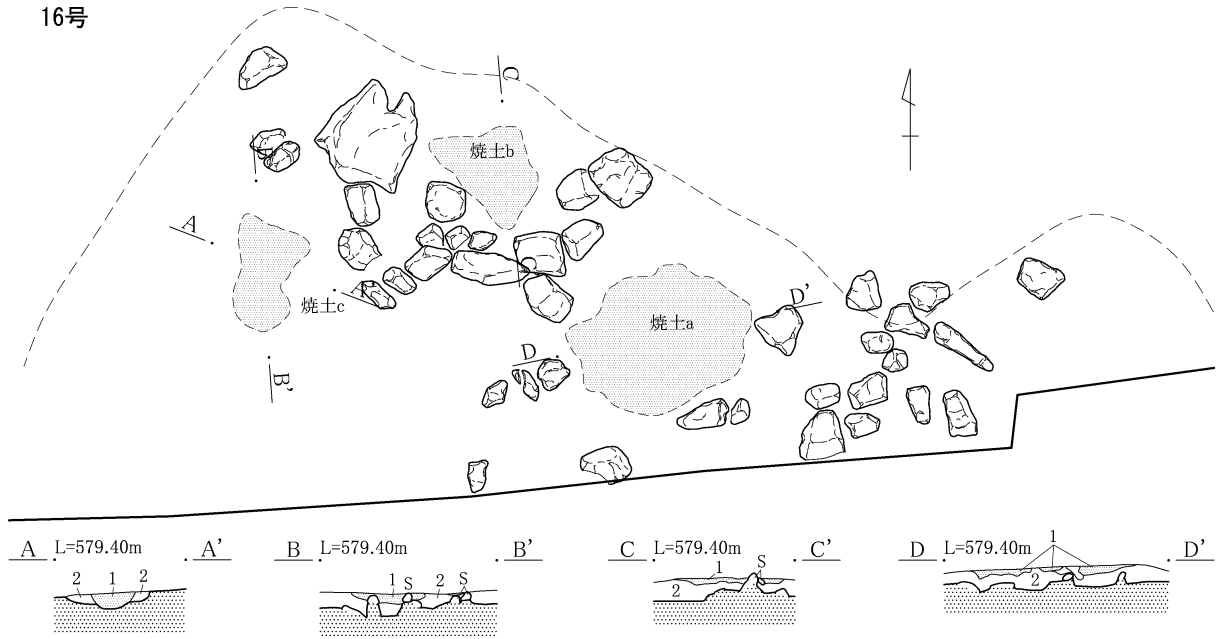
第136図 18区1号～4号・9号焼土遺構



第137図 18区10号~15号焼土遺構



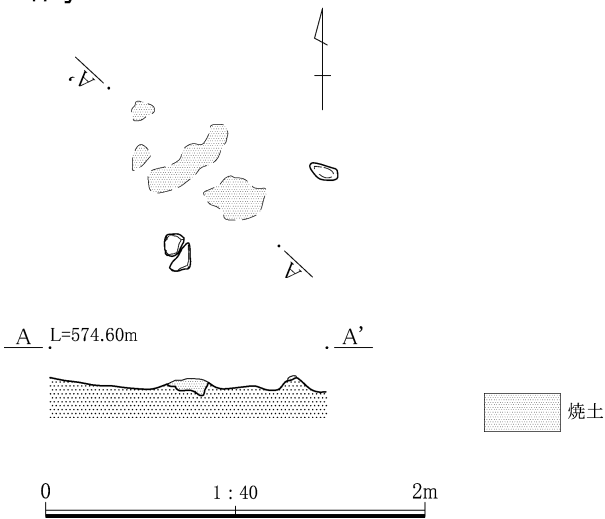
16号



18区16号

- 1、焼土 上面ほど赤化しており、直に被熱している状態で確認。炭化物を伴う。
- 2、灰褐色土

17号



第138図 18区16号・17号焼土遺構

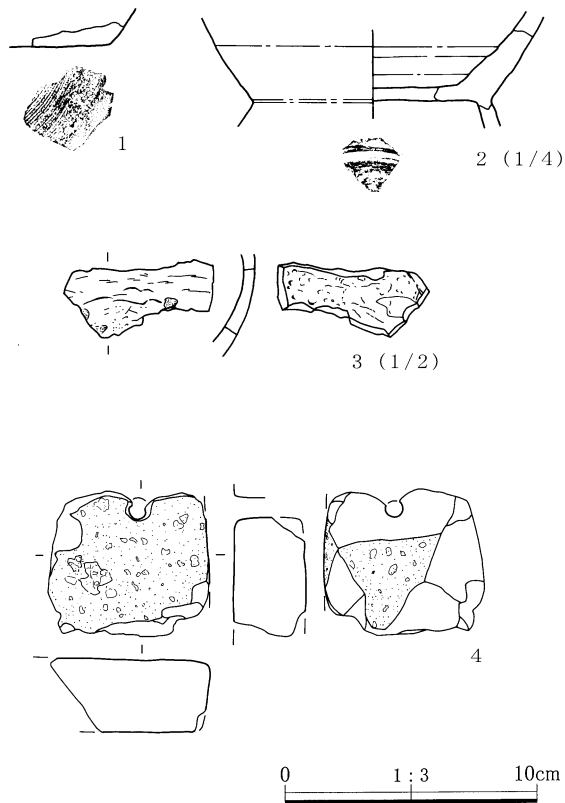
18区焼土遺構

18区では13箇所焼土遺構が確認された。このうち、縄文時代に該当するのは17号だけで、その他は中世以後の遺構と想定される。

17号は、埋没谷の中程の縄文時代中期後半期包含層で確認されたもので、周囲には数多くの遺物と礫が分布している。焼土はブロック状に点在しており、

この地点で直に火を焚いていたと考えられる。

その他の中世以後の遺構は、現況の地割りに隣接して分布する傾向が伺える。このうち、2号・3号・4号・9号・10号は、下部に掘り方を伴うもので、いずれも礫を取り除いて構築している。2号・3号・4号・10号は掘り方上面の粘質土が焼けているもので、大きさは様々である。9号は、土坑内に粘土を



第139図 18区焼土遺構出土遺物（11号）

貼ったタイプで、平面形が楕円形を呈し、覆土中に炭化材を伴っている。

11号・12号・13号・14号・15号・16号は、掘り方を伴わないもので、いずれも数地点に焼土が点在している。11号～15号は、現況の1号石垣の上下に位置している。付図には記載がないが、1号石垣は埋没谷のところで東西方向から南北方向に折れており、何らかの関連が想定される。また、13号は斜め方向に等間隔に連なる方向性があり、畑のサクと関連することも想定される。

16号は調査区の南端にあり、周囲は地山礫が累々と拡がっているが、当遺構はその地山礫を片付けた方形状の平坦面にある。平坦面の南側の大半は調査区外となるため、詳細は不明だが、区画は西側に60度ほど傾いた方向性を持ち、北東辺の一面に入口状の突出部が付いている。周囲は地山の黄色シルト

～砂質土辺であるが、平坦面にはくすんだ灰褐色土が敷き込まれており、簡易な屋敷か小屋があったのかもしれない。ちなみに、調査区の南側には現在家屋がある。焼土は、方形状区画の北東辺に沿って、3箇所認められた。焼土は、表面からグラデーションで変化しており、3箇所直に火を焚いたと見て間違いはない。

なお、18区では11号焼土遺構から第139図に示した遺物が出土した。1は平安時代の須恵器杯の底部片、2は平安時代の須恵器瓶の底部片、3は鉄鍋の破片、4は紐掛け孔が付いた軽石製品である。4は縄文時代の遺物であろうが、3は時代が判然としない。本遺跡では平安時代の住居が10数軒確認されており、18区にもW-24グリッドに1軒存在しており、当遺構は平安時代の遺構となる可能性もある。

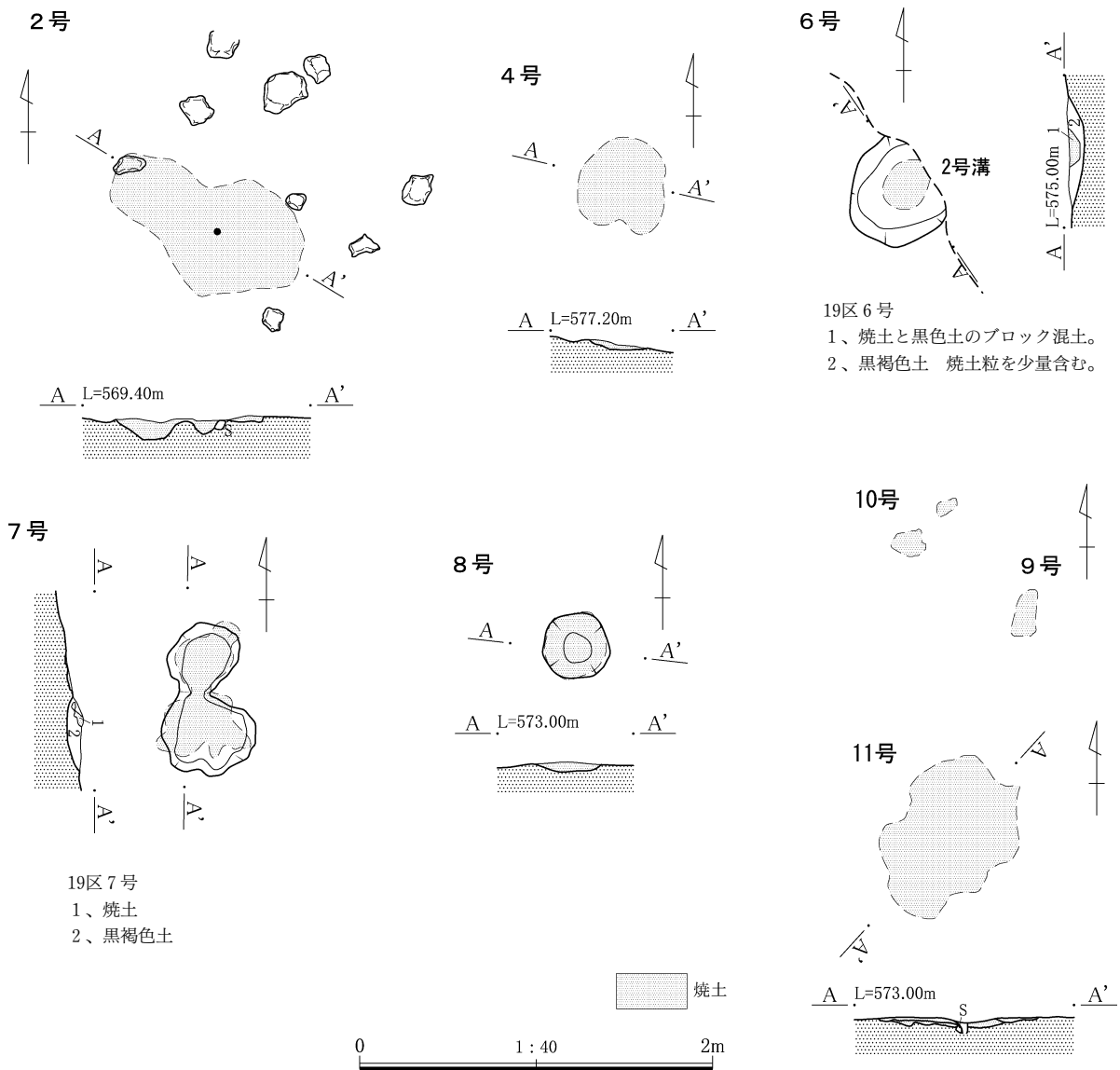
#### 19区焼土遺構

19区では8箇所焼土遺構が確認された。このうち、縄文時代に該当するのは2号と6号の2箇所、その他は中世以後に該当するものと想定される。

2号は、縄文時代の埋没谷を調査中に、後期前半の遺物が多量に含まれる層順で確認されたもので、遺物と共に廃棄されたものの可能性が高い。6号は、縄文時代中期後半期の環状集落の居住帯に位置する。北東側の一部を中世以後の溝と重複し、これに切られている。上面をかなり削平されているが、円形状の浅い掘り方を伴うもので、焼土の状態や形状から、縄文時代の住居に伴う炉の可能性が高い。

中世以後の所属と想定される4号・7号・8号・9号・10号・11号のうち、4号以外は山根沢の低地に分布する。山根沢の低地は縄文時代の遺物包含層が薄く、その後の天仁元年(1,108年)以降の浅間Bテフラ堆積後の畑や掘立柱建物が確認されている。焼土遺構もそれらと共に確認された遺構で、一部は掘立柱建物と関連する可能性がある。焼土遺構は、いずれもその地点で火を焚いたもので、下部に掘り方を伴うものはない。

なお、19区焼土遺構で遺物を伴うものはない。



第140図 19区 2号・4号・6号～11号焼土遺構

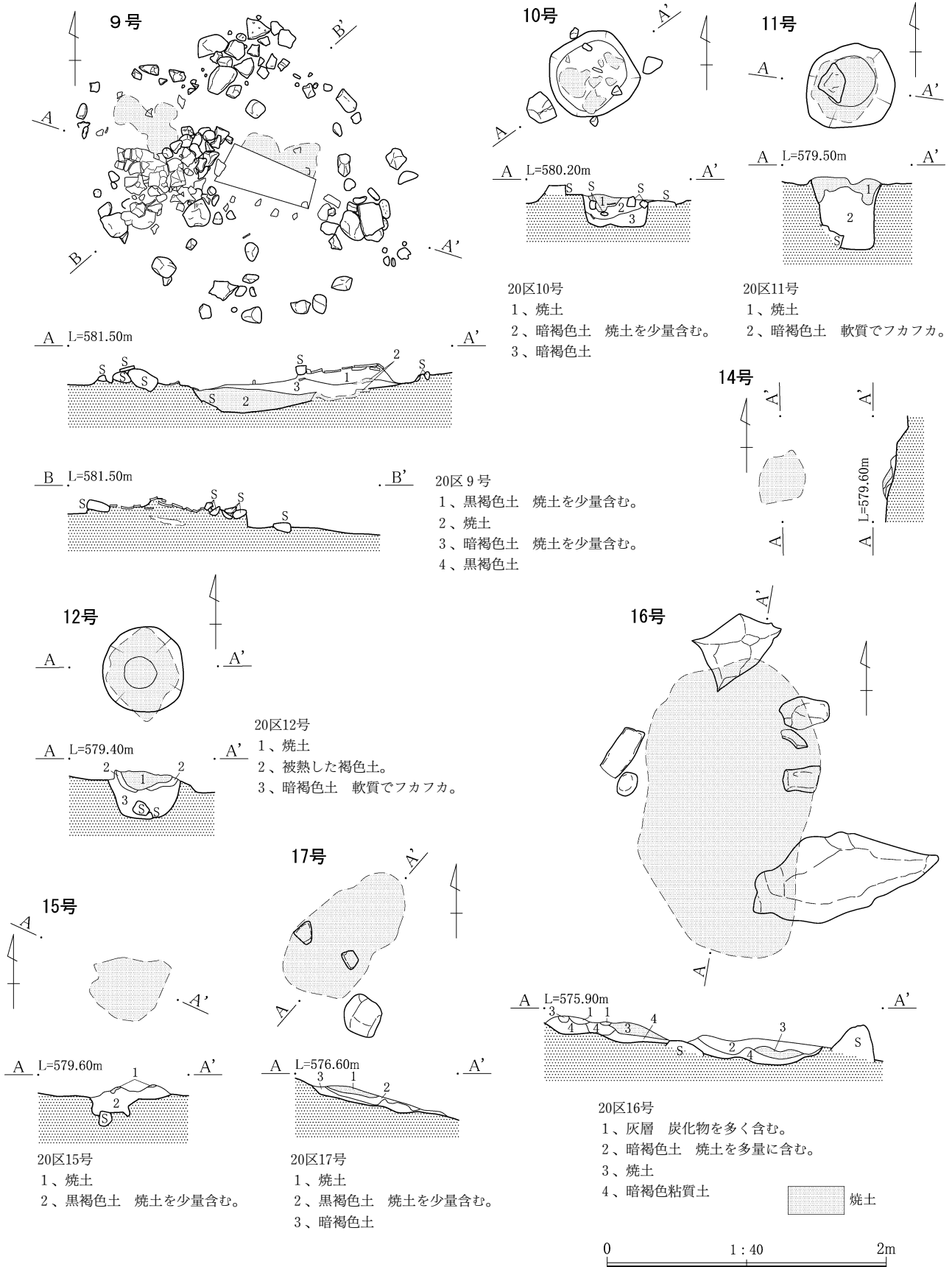
### 20区焼土遺構

20区では18箇所焼土遺構が確認された。このうち、縄文時代に該当するのは9号・29号の2箇所のみで、その他は中世以後に該当するものと想定される。

9号はT-12グリッドに位置する。縄文時代中期後半期の環状集落の居住帯にあり、周囲には縄文時代中期後半の34号・37号・38号住居が近接する。当遺構は、西側にほぼ接する34号住居と共に確認されたもので、直径2m前後の円形状の範囲に集積した

多量の礫と共に、縄文時代中期加曾利E4式期の大型土器が、横転して潰れた状態で確認された。その下には広範にわたって焼土が堆積していることから、当初は住居を想定して調査を進めたが、炉や床面を検出することはできなかった。最終的に、当遺構の下から長軸3.05m、短軸1.65m、深さ82cmの、東西方向に長軸を持つ陥穴(20区223号土坑)が確認され、当遺構は多量の遺物や礫と共にその上面に廃棄された焼土であることが判明した。礫を含めた当遺構の大半は、ちょうど陥穴にすっぽりと含まれる。

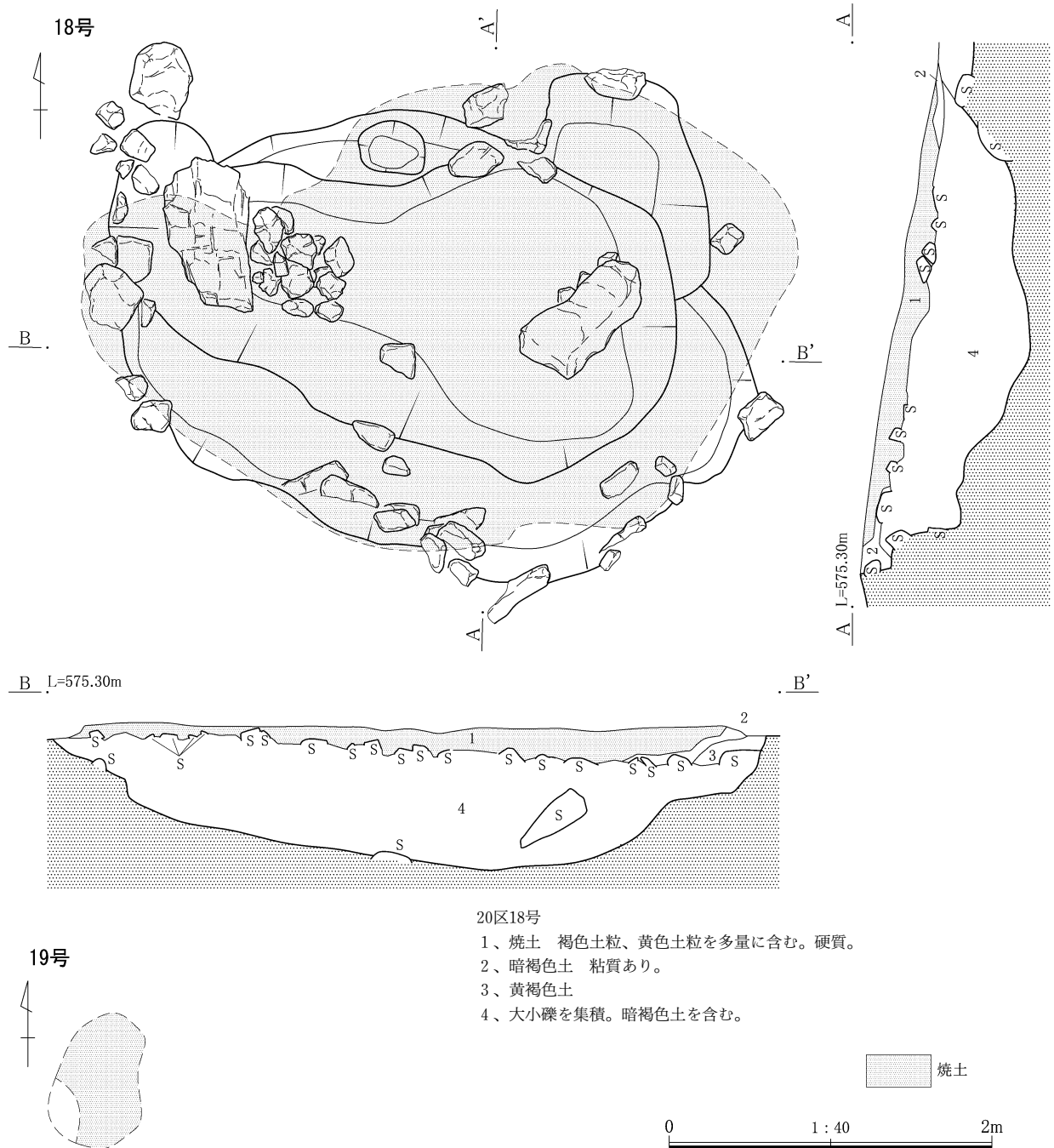
第8節 焼土遺構



第141図 20区9号~12号・14号~17号焼土遺構



第142図 20区13号焼土遺構



- 20区18号
- 1、焼土 褐色土粒、黄色土粒を多量に含む。硬質。
  - 2、暗褐色土 粘質あり。
  - 3、黄褐色土
  - 4、大小礫を集積。暗褐色土を含む。

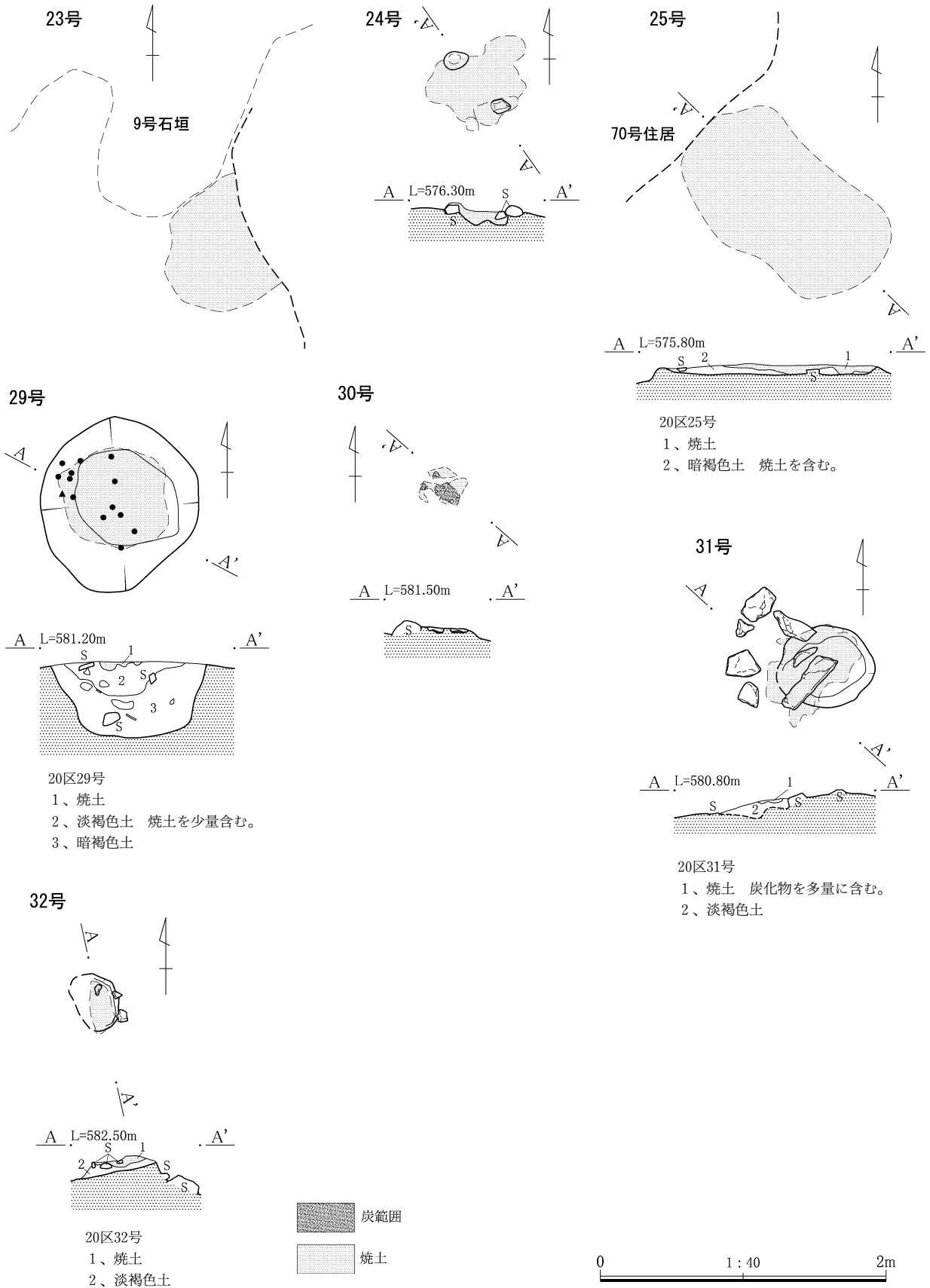
第143図 20区18号・19号焼土遺構

礫のなかには板石や扁平礫が含まれており、おそらく周辺の敷石住居の片付け等に伴って廃棄されたものであろう。なお、第145図～第146図に示した出土土器は、加曽利E 4 式期の良好な一群である。

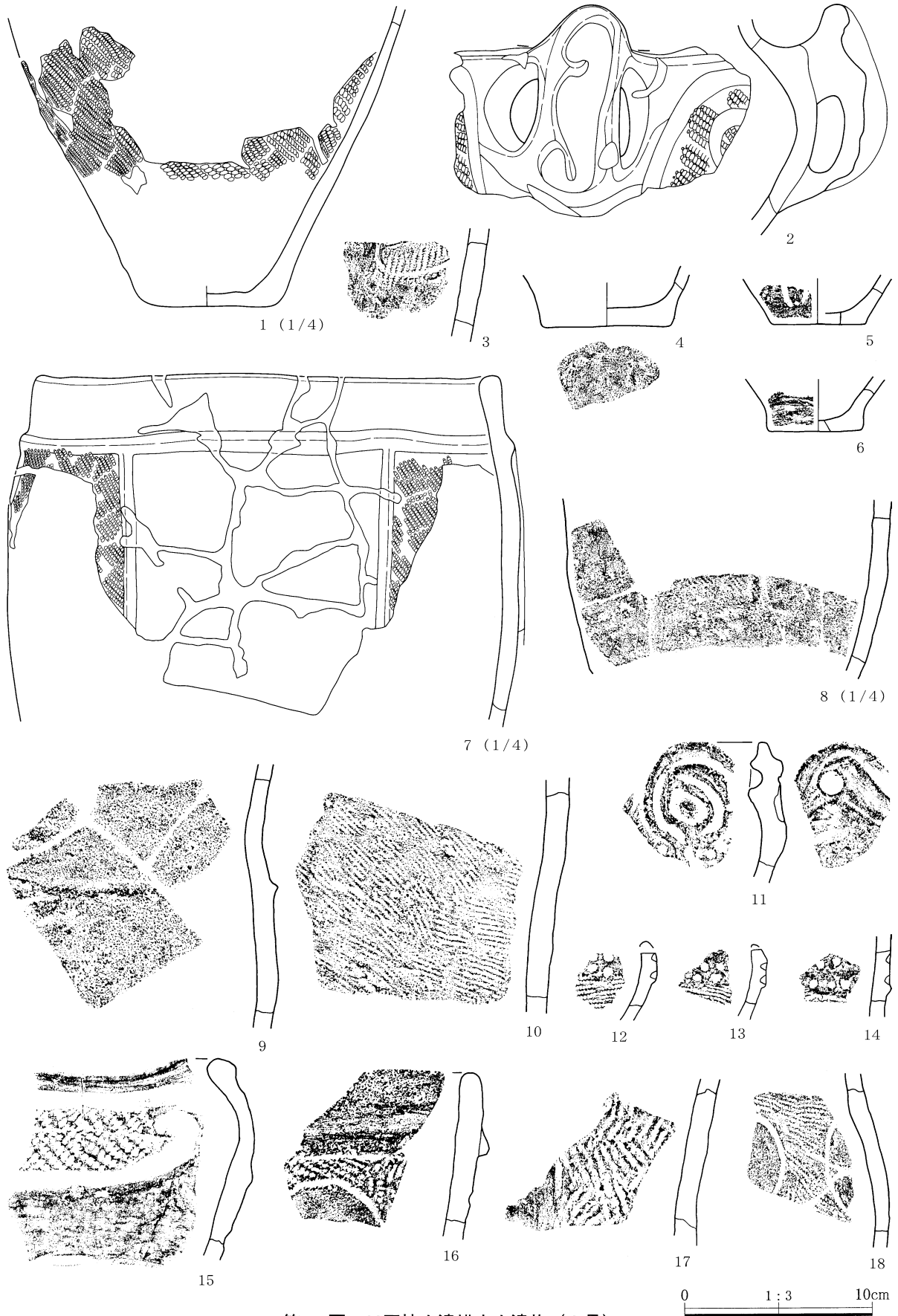
29号はF-4 グリッドに位置する。この地点は、縄文時代中期末～後期初頭の柄鏡形住居が集まる

場所で、中期後半の環状集落とは異なる、後期の特徴的な居住形態を示している。当遺構の東側には中期加曽利E 3 式新段階の103号住居が近接し、その隣に後期の大型柄鏡形住居である82号住居がある。当遺構は、焼土の下に円形を呈する大きな掘り方を伴うもので、縄文時代後期住居の炉と考えられる。上

第3章 発見された遺構と遺物

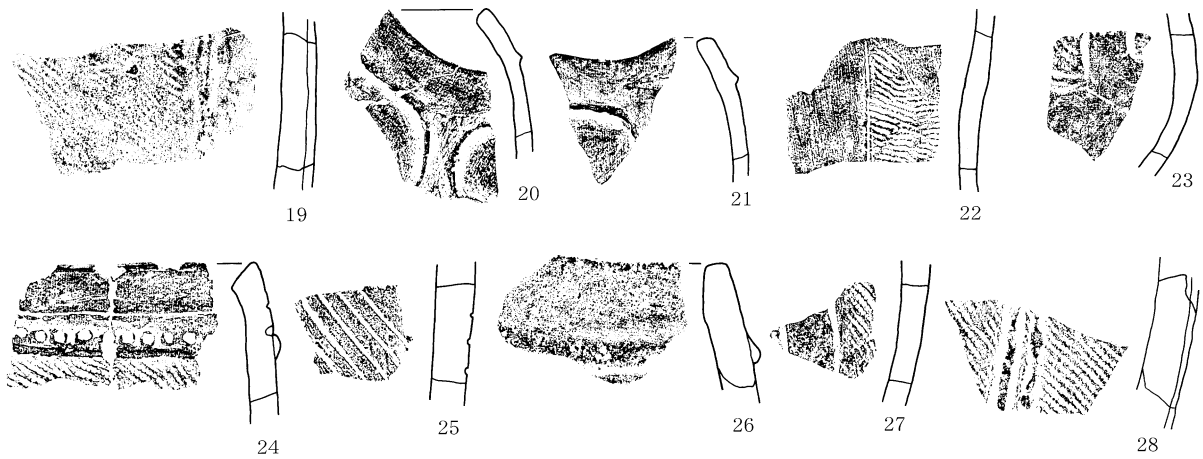


第144図 20区23号～25号・29号～32号焼土遺構

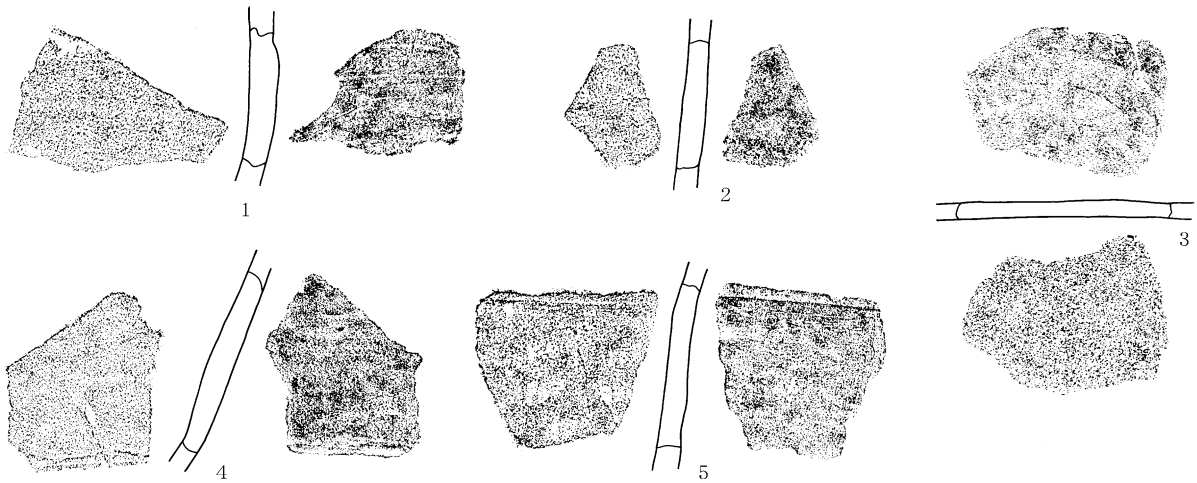


第145図 20区焼土遺構出土遺物(9号)

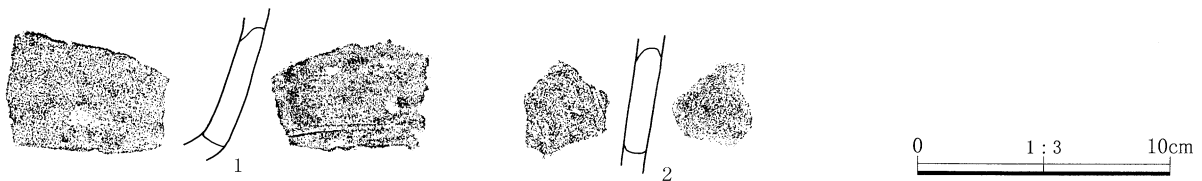




9号焼土遺構



13号焼土遺構



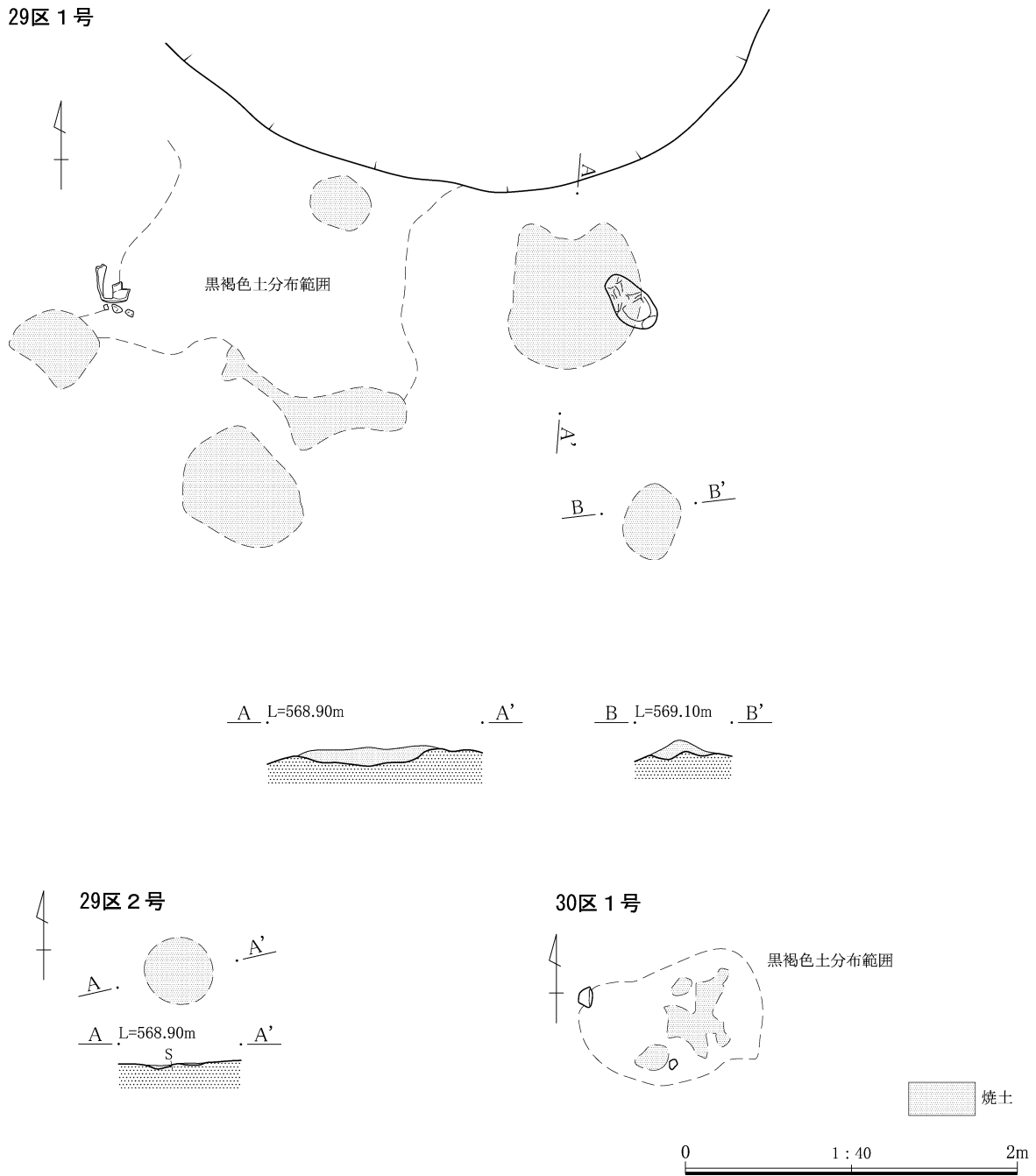
18号焼土遺構

第146図 20区焼土遺構出土遺物（9号・13号・18号）

面を削平されているため、床面は残っていないが、西側に近接する後期堀之内1式期の523号・524号が、この住居の柱穴の一部になるだろう。当遺構の掘り方から後期堀之内1式期の土器が数多く出土しているが、これらも含めて後日後期住居編に掲載の予定

である。

中世以後のものは、やはり現況の地割りに沿って分布する傾向があり、下部に土坑あるいは掘り方を伴う10号・11号・12号・18号と、伴わないその他とがある。10号・11号・12号は、直径60～70cmの円形

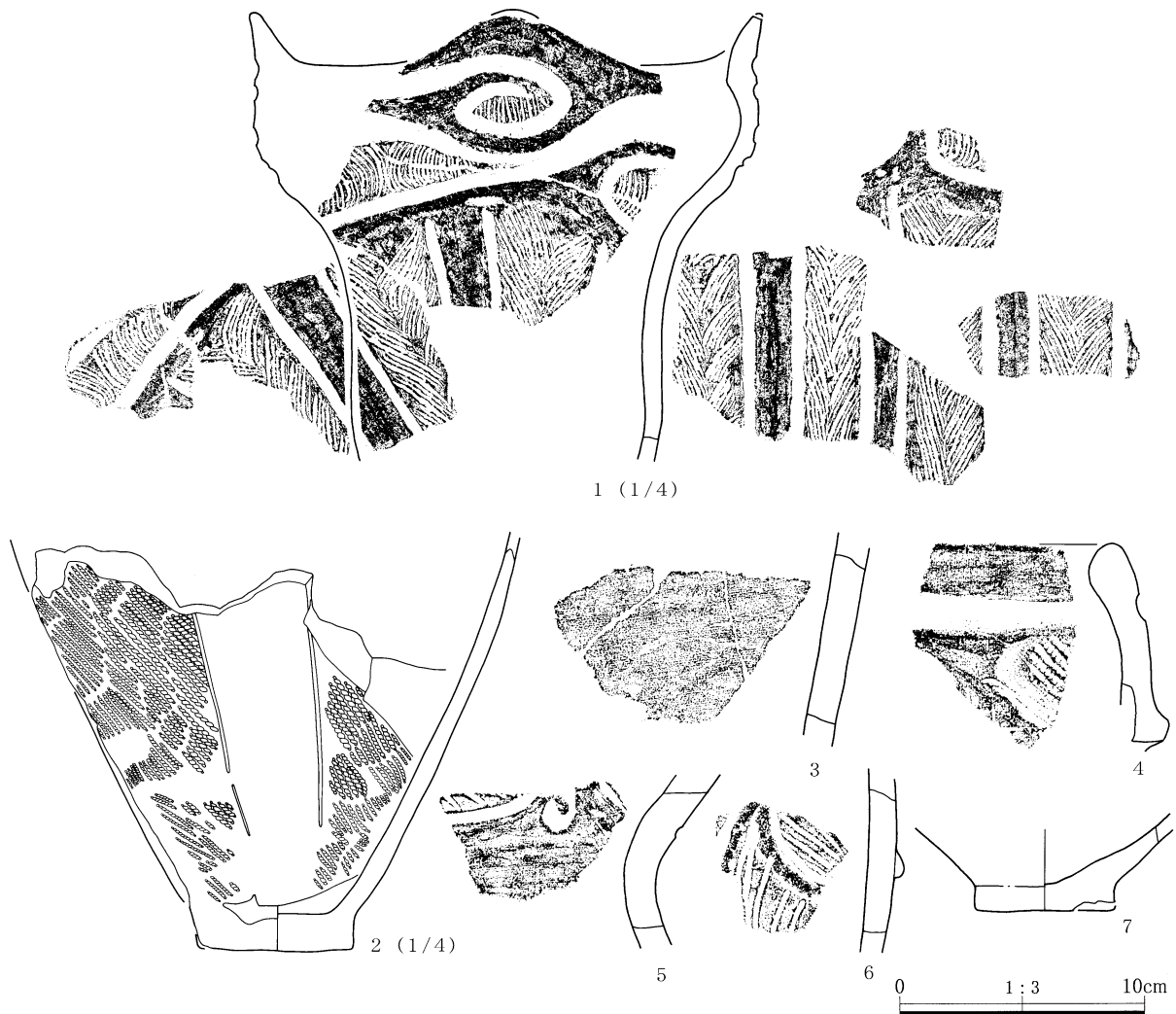


第147図 29区1号・2号、30区1号焼土遺構

を呈する同規模のもので、いずれも上面に明瞭な焼土が認められる。18号は、長軸が4m以上の大型のもので、焼土下に大量の礫がぎっしり詰め込まれていた。下部に掘り方を伴わないものは、大きさも形状もまちまちで、炭化材を伴うものが多い。13号は18区16号と類似したもので、広範囲にわたって礫を

取り去り、焼土混じりの土を敷いて平坦面をつくっている。北側の一部に出入り口状の硬化面があり、南側の平坦面に直に火を焚いた焼土が数カ所認められた。

なお、遺物は13号から中世の内耳鍋片が5点、18号からも中世の内耳鍋片が2点と鉄スラグ1点が出



第148図 29区焼土遺構出土遺物（1号）

土しており、その他に15号と25号から鉄製品が各1点ずつ出土している。

#### 29区焼土遺構

29区では2箇所焼土遺構が確認された。いずれも山根沢沿いの斜面部にあり、縄文時代中期後半の遺物包含層中で確認された。1号は12号住居の南側にあり、焼土が数カ所に点在していた。同一面で第148図に示した土器が出土しており、廃棄行為に伴う可能性が高い。2号は、やや離れて単独で確認されたもので、地山が直接被熱しており、炉の可能性もある。

#### 30区焼土遺構

30区では1箇所のみ確認された。縄文時代中期後半の環状集落居住帯にあり、住居が重複する地点に位置する。確認当初は、住居の炉を想定して39号住居としたが、確証が得られないため、焼土遺構に変更された。遺物の伴出は認められない。

## 第4章 まとめ

本報告は、横壁中村遺跡報告書の7冊目になる。(1)は天明三年(1783)の浅間山噴火に伴って発生した泥流で被災した畑、(2)～(5)では縄文時代中期の住居152軒、(6)で各時代の土坑約1,006基を報告した。今回の(7)では、縄文時代の土器埋設遺構と掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列、および各時代の集石遺構と焼土遺構を取り上げた。今後には縄文時代の配石・列石、縄文時代中期および後期の住居、遺物包含層、古代～近世の遺構等の報告書作成を控えているが、分冊にならざるをえないため、今後は時期毎の集落総集編を併せて掲載する予定である。

本遺跡は、縄文時代中期後半～後期中葉を中心とする集落で、縄文時代では前期初頭の花積下層式期から晩期終末までの土地利用が伺える。その後、弥生時代中期前半代までは継続的に利用され、古代では平安時代に20区を中心に集落が営まれ、中世には20区から30区にかけて館跡が置かれた。山根沢沿いの低地では、中世の掘立柱建物と畑が確認されており、この頃から耕作が行われていたと考えられる。20区の南側には、以前は地蔵堂があり、その跡地の調査で掘立柱建物と墓、および2,000点以上の経石などが発見されている。

以上のように、本遺跡には長期にわたる土地利用の痕跡が刻まれているが、これらの遺構のほとんどは礫を多く含む黒褐色土中に重複している。そのため、ローム層の堆積がない土壤中での遺構の見極めは困難を極め、一連の遺構が個別の扱いになったり、重複する遺構がセットで扱われているケースも多い。そこで、整理作業では、各遺構を様々な角度で検討し、本来の状態に戻す作業が必要となる。今回報告する遺構も、大半の時間をその作業に当てたが、未整理の遺構との重複等もあり、総合的な検討ができていない部分も多い。各時期の集落様相および土地利用の変遷を解明することが、当面の目標である。

ここでは、今回の報告で扱った遺構のうち、土器埋設遺構と掘立柱建物・環状柱穴列について、成果

と問題点をまとめておきたい。

### 1、土器埋設遺構

発掘調査段階で、縄文時代の単独の埋設土器として扱われたのは71基であったが、住居の整理作業に伴ってすでに炉や埋甕に変更されたもの、および今回の整理作業で埋設土器から変更されたものを含めて15基あり、今回の報告では残る56基を扱った。

この56基のうち、①住居の炉内埋設土器あるいはその可能性が高いものが12基、②住居の出入り口部埋甕あるいはその可能性が高いものが7基、③墓と判断されるものが26基、④祭祀行為と判断されるもの2基、⑤判断が下せないものが9基であった。

①は前期黒浜式期が1基、中期加曾利E1式期が1基、加曾利E3式期が4基、後期称名寺1式期が1基、堀之内1式期が2基、後期前半期が3基である。埋設方法は正位が11基、逆位が1基で、正位が圧倒的に多い。使用された土器の大きさは、大形が2基、小形が6基、不明が4基で、小形のものが多い傾向にある。

②は中期加曾利E3式期が5基、加曾利E4式期が2基である。埋設方法は正位が6基、逆位1基で、圧倒的に正位が多く、使用された土器の大きさは、大形が1基、中形が5基、不明が1基で、中形が多い傾向にある。

③は中期加曾利E1式期が1基、加曾利E3式期が14基、後期称名寺1式期が5基、堀之内1式期が2基、後期前半期が5基である。埋設方法は正位が12基、逆位が13基、斜位が1基、不明が1基で、正位と逆位が拮抗している。使用された土器の大きさは、大形が12基、中形が12基で相半ばし、他に小形が2基、不明が1基であった。

また、③では明らかな土坑に埋設した事例が11例あり、このうち円形状の土坑に伴う事例は5例、楕円形状のものは6例である。前者は中期が2基、後期が3基あり、埋設方法は正位が5基で、逆位はない。後者は中期が5基、後期が1基で、埋設方法は正位が2基、逆位が3基、斜位が1基である。

## 第4章 まとめ

④は19区6号と20区14号で、ともに4号列石の下で確認された。19区6号は後期堀之内2式期で、底部を打ち欠いた小形の深鉢を正位に埋設しており、4号列石に取り付く28号住居と関連する可能性がある。20区14号は後期堀之内1式期で、中形の深鉢を逆位に埋設しており、4号列石構築に伴う最初期の祭祀行為の可能性が高い。

埋設土器の上面に蓋石を伴う事例は2例認められた。18区1号と20区26号で、ともに中期加曾利E3式期に該当し、中形土器を逆位に埋設している。

石器を1点だけ伴う事例も比較的多く、18区2号・22号・23号、19区3号・4号、20区20号では円形状の凹石が1点、18区8号では棒状の磨石が1点、20区15号では棒状の敲石が1点、それぞれ出土している。このうち、19区3号と20区20号では、埋設土器の内側底面に丸い凹石を置いた状態で確認されており、注目される。また、18区23号では埋設土器の上面に丸石がのっており、20区18号では棒状の円礫がのっていた。

以上、調査および整理作業を通じて気づいた点を記した。いずれも現段階での所見で、有効な証拠が得られているものではないが、①および②とした19基は住居に伴う施設の可能性があるもので、この判断が正しいとすれば、本遺跡の住居軒数は19軒増加することになる。不明と判断したものも含めて、今後の整理作業のなかで、再度検討を加えていきたい。

### 2、掘立柱建物と環状柱穴列

本遺跡では、縄文時代の掘立柱建物11棟、環状柱穴列3棟が検出された。各遺構の分布は第3章第4節の分布図と別添付図に示し、出土遺物は表11～12に総量を示した。

掘立柱建物には、4本柱方形タイプが7棟、4本柱長方形タイプが2棟、6本柱長方形タイプが1棟、棟持ち柱を持つ12本柱長方形タイプが1棟あり、山根沢を挟んだ東西両集落に分布する。時期の判定が明確なものは少ないが、その多くは後期段階に該当するであろう。本遺跡の対岸にある長野原一本松遺

跡では、中期後半の6本柱長方形タイプの掘立柱建物を主体としているが、本遺跡では4本柱方形タイプが主体となっている点は、そのことを暗示しているものと考ええる。

本遺跡で確認された掘立柱建物の特徴として、東西・南北の方位沿って配置されている点が上げられる。若干のぶれはあるものの、20区1号を除いて、その大半の遺構にその傾向が見られ、地形の傾斜や多量の地山礫の存在を考慮しても、単なる偶然の一致とは思えない。特に18区3号は、地形の傾斜に沿って約13mの長軸側を当て、その長軸方位をN3度Wで設置している。また、柱間の計測では、縄文尺と呼ばれる35cmの倍数を敢えて使わなかったが、その距離が共通する遺構も多く、本遺跡においても共通した尺度が存在した可能性は高い。本遺跡で最も規模の大きな18区3号は、柱間がいずれも35cmの倍数で設計されていたと考えてよさそうである。

なお、本遺跡で主体となる4本柱方形タイプについて、縄文時代後期中葉以降の住居の可能性を検討する必要がある。本遺跡では、加曾利B式以降の住居が数軒確認されているが、その形態は判然としない。今回は十分な検討ができなかったが、出土遺物は後期終末まで認められており、本地域での後期中葉以後の住居形態の変遷を把握することは、今後の大きな課題である。

環状柱穴列は、19区から30区にかけて3棟が等高線に沿って並んだ状態で確認され、いずれも重複関係および出土遺物から、後期に属す遺構と判断した。6本柱の19区2号は、一辺2.8mの正六角形配置にほぼ合致しており、その北側軸線上15mに後期後半の配石墓群があることから、それと関連する遺構の可能性が高いと判断した。19区1号と30区1号は、大形の柄鏡形住居となる可能性が高いが、炉は確認されていない。この点は今後に予定されている後期住居の整理作業のなかで、再度検討を加えていきたい。

表10 横壁中村遺跡 埋設土器遺構出土遺物総量一覧

時期	勝坂	阿玉台	焼町	加E1	加E2	加E3	加E4	曹利古	曹利新	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石	器
18区1号						15												3	9	27	No.上げ1~28まであり	剝片1点	
18区2号																						円礫1点	剝片1点
18区3号																							
18区4号																							
18区5号																							
18区6号																							
18区7号						1	4								6				18	30	晩期末~弥生1点	軽石製品1点	剝片1点
18区8号																			1	1		棒状円礫1点	剝片1点
18区9号											2				7					9	No.上げ1~9まで	剝片1点	
18区10号																		3	6				
18区11号													1										
18区12号						1									1					1			
18区13号																				2			
18区14号													1										
18区15号																					報告済み		
18区16号				1		6												3	5	15			
18区17号											2								2	4			
18区18号						5													5	10	19号住居の炉	地山礫1点	
18区19号																		2	2				
18区20号																							
18区21号																					報告済み		
18区22号						3												1	7	3			
18区23号						3									1					13			
18区24号																							
18区25号						4									11	11		9	9	47			
18区12号配石(4・5・6号埋設)					1	40									3	2	2	17	66	晩期末4点	くぼみ石1点	石製品1点	
19区1号																							
19区2号																							
19区3号															3					3			
19区4号																							
19区5号						6					1		5					36	50				
19区6号																	2			2			
19区7号																							
19区8号																	8	17	25	住居の炉			
19区9号						2													14	17			
20区1号											4								2	6	11号住居の炉		
20区2号													1							1			
20区3号																			1	1	中世内耳1点		
20区4号																			1	1			



表11 横壁中村遺跡 掘立柱建物出土遺物総量一覧

旧名称	時期	勝坂	阿玉台	残町	加E1	加E2	加E3	加E4	曹利店	曹利断	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石	器
18区1号掘立柱建物																								
柱1	73						1														1			
柱2																								
柱3																								
柱4																								
18区2号掘立柱建物																								
柱1	87																				0			
柱2	86																				0			
柱3																								
柱4																								
18区3号掘立柱建物																								
柱1	206	堀之内1					1									28					29			
柱2	194	堀之内1														9					9			
柱3	205	堀之内1														12					12			
柱4	204	堀之内1														9					9			
柱5	196																				0			
柱6	197	堀之内1																1			1			
柱7	168	堀之内1														18					18			
柱8	191	堀之内1														2					2			
柱9	152	堀之内1														2					2			
柱10	209	堀之内1														6					6			
柱11	190	堀之内1														8					9			
柱12	207																				0			
37号配石																								
堀之内1																4			1		5			
21号配石																								
称名寺2																			2		2			
22号配石																								
堀之内1																2			1		3			
38号配石																								
堀之内1																2			8	1	11			
18区4号掘立柱建物																								
柱1	41																				0			
柱2	56	称名寺2																	10		17			
柱3	51	堀之内1														6					11			
柱4	43																				0			
20区1号掘立柱建物																								
柱1																								
柱2	97																				4			
柱3	115																				2			
柱4																								



区画	名称	時期	勝坂	阿玉台	焼町	加E1	加E2	加E3	加E4	曾利古	曾利新	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石	器
20区2号	堀立柱建物																								
柱1	312																								銅片1点
柱2	310	堀之内1					4										3					6	17		銅片2点
柱3	314						1															1	2		
柱4																									
柱5								6	9													7	22	44	石鏃未製品1点 砂片1点
柱6	316						3						2		1							2	13	21	凹石1点 銅片2点 砂片2点
柱7	317																1					1	2	3	凹石1点
柱8	317						3	2														6	14		凹石1点
柱9	394								1													1	3		
柱10	395																								
柱11	404								1													9	16		
柱12	407								1													3	5		
20区5号	堀立柱建物																								
柱1	414							5	1													4	2	15	
柱2	410	加B2~3						9										13				2	24		
柱3	416																					1	2		
柱4	415								1													2	3	8	
20区6号	堀立柱建物																								
柱1	370																					4	1	7	
柱2	388																								
柱3	364																	1				1	20		
柱4	366																					3	3		
20区7号	堀立柱建物																								
柱1	349																								
柱2	389																								
柱3	405							3														12	31		打製石斧1点 台石1点
柱4	394								1													1	3		
20区8号	堀立柱建物																								
柱1	428	堀之内2																	1				1		
柱2	442																								
柱3	384	堀1~2																				2	1	5	
柱4	435	堀之内2																				13	3	18	
柱4	441																					1	3	15	
29区1号	堀立柱建物																								
柱1	24	加曾利B																							
柱2	23	後期																							
柱3	31	加曾利B																							
柱4	32	加曾利B																							

表12 横壁中村遺跡 環状柱穴列・柱穴列出土遺物総量一覧

旧名称	時期	勝坂	阿玉台	焼町	加E1	加E2	加E3	加E4	曹利新	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石	器
19区1号環状柱穴列																							
柱1																							
柱2																							
柱3																							
柱4																							くぼみ石1点
19区1号環状柱穴列																							
柱1	3	称1～高井 東	17	1	1	7	14	8	9		21		8	6	10			23	337	492	前期前半1、前期末2、土 製円盤2、高井東式22	石鎌1、打製石斧3、磨製石斧1、 凹石1	
柱2	42	称1～堀2	24	7	3	6	7	25	10		101		7	3	2	5			23	299	前期前半3点、前期後半4点	石鎌7、石鎌2、削器1、加工痕 1、使用痕1、打製石斧3、凹石 1、石核2、剝片24、碎片34	
柱3	24	称2～堀1	13		1	7	5	42	21	6	77			1	7			24	283	493	前期諸磯b・c式4点	石鎌1、石鎌1、使用痕1、打製 石斧1、凹石1、脛石製品1、剝 片15、碎片16	
柱4	20	称1～2	3	1	5	11	12	4	3		11		1	2				6	129	188		石鎌1、加工痕2、使用痕2、台 石1、剝片6、碎片15	
柱5	50	称1～堀1	2		1	8	7				5		11	3					34	71		磨製石斧1、凹石1、剝片1	
柱6	5	称1～加B	3	1	4	12	72	20	3		60		7	17				5	191	395	前期関山式1点、前期後半1点	石鎌1、削器1、脛石製品1、剝 片1	
柱7	21	称1～加B	5	2	4	3	5	17	8		26		4	1	6	10	4	32	134	261		石鎌1、削器1、使用痕1、打製 石斧1、石棒1、剝片5、碎片6	
30区1号環状柱穴列																							
柱1	183	堀1～加B	3				4					1	15		5	2	4	12		46	五領ヶ台式1点	石棒1点	
柱2	182	堀1～2									2	1	13	4				63		83	土製円盤1点		
柱3	187	堀之内1									1		5						8	14	186坑と187坑の接合1列あり(堀1式)		
柱4	186	堀1～2	1						1				58	2	2	40				105			
柱5	189	堀1～加B											4	1	1	4				10			
柱6																							
柱7	188																			0			
柱8		柱1に重複																					
19区1号柱穴列																							
柱2		後期後半																4		4			
柱3		後期後半																2		2			
																							剝片1点

表13 横壁中村遺跡 集石遺構出土遺物総量一覧

旧名称	時期	勝坂	阿玉台	焼町	加E1	加E2	加E3	加E4	曹利新	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石	器
18区1号																							
20区1号																							
												2	1					4	9	16	内耳髷2点		
20区2号																							
																							茶臼1点 くぼみ石1点 砥石1点 剝片1点
20区3号																							
20区4号																							
							1				2							4	9	16			



20区1～8号	時期	勝坂	阿玉台	焼町	加E1	加E2	加E3	加E4	曾利古	曾利新	唐草古	唐草新	中期	称1	称2	堀1	堀2	加B	後期	不明	合計	その他	石器
20区9号	中世館内 縄文中期 加E4	4		3		7	44					11								54	123		剥片9点 石錐1点 石鏃未製品2点 加工痕5点 打製石斧1点 砦片8点
20区10号		2	1		2								3								8		打製石斧1点
20区11号		7		3		12	5					3		1						35	66		剥片5点
20区12号																2				6	8		剥片1点
20区13号	中世											1								15	16	中世内耳鍋5点	石錐1点 砦片5点
20区14号																							
20区15号					1																1		1 鉄製品1点
20区16号																	1				1		
20区17号																							
20区18号	中世					6						2	2			7			2	11	30		打製石斧1点 くぼみ石1点 剥片3点 砦片3点
20区19号						1													1	2	4		
20区20号	欠番																						
20区21号	欠番					1														7	8		土製円盤(大形)1点
20区22号	欠番												1								1		
20区23号																							
20区24号																2					2		台石1点
20区25号																							
20区25号																							
20区25号																							
20区26号	不明																						
20区27号	欠番						8													1	9		剥片1点 砦片1点
20区28号	欠番											1				16				1	18		砦片2点
20区29号	縄文後期													28							28		剥片4点
20区30号																							
20区31号																							
20区32号																							
28区17号		2				12	1					2			22				37	9	85		剥片1点
29区1号	縄文中期 加E4						31					2								10	43		
29区2号	縄文中期																						
30区1号																							

# 遺物観察表

## 18区1号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1埋-1	深鉢	口縁～胴部下位 ほぼ完存 口径37.6 残存高31.2	砂粒多。良好。にぶい黄褐～黒褐色。	口縁部渦巻文4、胴部懸垂文11。使用痕跡はほとんど感じられない。被熱なし。	加曾利E3式中

## 18区2号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 80% 口径40.0 残存高30.8	砂粒多。良好。にぶい黄橙～にぶい黄褐色。	口縁部渦巻5単位、胴部懸垂文10本。縄文RL縦。	加曾利E3式
2埋-2	深鉢	口縁～胴部中位 60% 推定口径16.5 残存高10.8	砂粒多。良好。灰褐～橙色。	櫛歯の波状文と懸垂文。	中期後半

## 18区2号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
2埋-3	磨石	完形	93 72 43 444.3	粗粒安山岩	

## 18区4号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
4埋-1	深鉢	胴部中位～底部 80% 底径12.5 残存高22.4	砂粒多。良好。明赤褐色。	底部に凹凸あり、網代痕ではない。	唐草文系

## 18区5号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
5埋-1	深鉢	胴部中位～下位 ほぼ残 残存高15.8	砂粒少。並。にぶい黄褐色。	上端5cmが被熱・劣化明瞭(炉に使用)。外面：粗いケズリ調整後、縦位条痕。内面：ナデ。	加曾利E3式

## 18区6号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
6埋-1	深鉢	底部 底径8.6 残存高5.7	砂粒多。良好。明黄褐色。	外面に白色粘土付着。内外面研磨。	中期後半

## 18区7号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
7埋-1	深鉢	胴部中位～底部 1/3 底径11.6 残存高23.5	砂粒多。良好。橙色。	断面三角形微隆線のみ。外面軽い研磨。内面ナデ。内面上位にスス付着。底部に調整痕、網代痕？	加曾利E4式
7埋-2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明黄褐色。	突起上にC字状S字状の貼り付け。	称名寺式
7埋-3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒色。	上半部に沈線と刺突文。下半部に縄文無節L。	
7埋-4	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	口縁部に高い隆線がめぐる。	称名寺式
7埋-5	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。黒褐色。	沈線文のみ。	称名寺2式
7埋-6	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部にズ縄状の隆線。	堀之内1式
7埋-7	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	縄文LR。	加曾利E4式
7埋-8	深鉢	胴部片	細砂多。良好。明黄褐色。	縦位の細かな条線。	晩期終末
7埋-9	深鉢	底部片	砂粒多。良好。橙色(黒色)。	縄文。	後期前半

## 18区7号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
7埋-10	軽石製品	破片	(36) (27) 9 4.0	軽石	全面加工(斧形か)の欠損品。

## 18区8号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
8埋-1	深鉢	胴部中位 80% 残存高13.5	砂粒多。不明(2次被熱使用時か)。橙色。	器面荒れ。内面上端5cm幅が赤色化。	後期前半
8埋-2	深鉢	高台付底部 底径6.0 残存高3.5	砂粒多。並。明赤褐色。	小形の高台付土器。	中期後半か

## 18区8号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
8埋-3	磨石	完形	108 43 26 175.9	粗粒安山岩	

## 18区9号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
9埋-1	深鉢	口縁～胴部上位 80% 口径36.7 残存高16.9	砂粒多。良好。橙色。	口縁突起4個。楕円区画7個。被熱なし。	加曾利E3式新段階
9埋-2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明黄褐色。	口縁部に竹管の刺突と沈線文。内外面に横位の条痕様ナデ。	

## 18区10号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
10埋-1	深鉢	口縁 1/4 胴部 1/8 口径44.0 残存高44.0	砂粒多。良好。黄橙色。	内外面ともナデ・軽い研磨。把手3単位。	堀之内1式

## 18区11号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
11埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 2/3 推定口径33.3 残存高19.8	砂粒多。良好。明黄褐色。	口縁楕円文12個、胴部懸垂文5個。縄文RL斜。	唐草文系

## 18区12号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
12埋-1	深鉢	口縁～底部 2/3 推定口径43.0 底径11.4 器高52.3	砂粒多。良好。褐～黒褐色。	胴部燃糸R。	勝坂3式

## 18区13号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
13埋-1	深鉢	口縁～底部 2/3 口径19.4 推定底径6.0 器高20.8	砂粒多。良好。にぶい褐～褐灰色。	把手4単位。縄文LR縦。	堀之内1式

## 18区14号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
14埋-1	深鉢	ほぼ完形 口径39.1 底径8.5 器高58.5	砂粒多。良好。明黄褐色。	口縁部渦巻文5単位、胴部懸垂文14本。縄文RL。	加曾利E3式

## 18区16号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
16埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 1/2 口径35.2 残存高35.0	砂粒多。良好。明赤褐色。	口縁部渦巻文6単位。縄文LR縦。	加曾利E3式

## 18区17号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
17埋-1	深鉢	口縁～胴部 80% 口径38.0 残存高21.9	砂粒多。良好。にぶい黄橙色。	口縁部渦巻文5単位、胴部懸垂文8本。縄文RL。被熱なし。	加曾利E3式

## 18区19号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
19埋-1	深鉢	胴部上位～中位 70% 残存高14.7	砂粒多。良好。にぶい黄橙色。	内外面ナデ。	後期前半

## 18区22号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
22埋-1	深鉢	口縁～胴部下位 80% 口径49.2 残存高35.0	砂粒多。良好。明赤褐～黒褐色。	懸垂文4単位。胴部楕円区画1ヶ所。縄文RLランダム。	加曾利E3式

## 18区22号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
22埋-2	磨石	完形	55 53 22 90.5	粗粒輝緑岩	

## 18区23号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
23埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 ほぼ完存 口径32.0 残存高27.5	砂粒多。良好。明赤褐色。	口縁部文様7、胴部文様12。縄文RL縦。内面：煮炊きによる劣化あり。被熱なし。	加曾利E3式中

## 18区23号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
23埋-2	円礫	完形	148 160 113 3,800.0	粗粒安山岩	やや扁平な球状円礫を使用。測線短軸の一方に敲打を加えて平坦面を作出この面で自立する。

## 18区24号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
24埋-1	深鉢	口縁～胴部下位 80% 推定口径28.1 残存高23.2	砂粒多。良好。黒褐～明黄褐色。	器形・文様とも粗い作り。文様6単位。口縁部被熱なし。	唐草文系
24埋-2	深鉢	口縁部片	砂粒多。並。明黄褐色。	逆U字形の懸垂文。縄文はRL。	加曾利E3式新段階

## 18区25号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
25埋-1	深鉢	胴部下位 残存高10.3	砂粒多。良好。橙色。	内外面とも粗いケズリとナデ。	後期前半?
25埋-2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	沈線区画内を刺突で充填。	称名寺2式3～5と同個体

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
25埋-3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄橙色。		称名寺2式 2・4・5と同個体
25埋-4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。		称名寺2式 2・3・5と同個体
25埋-5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄橙色。		称名寺2式 2~4と同個体
25埋-6	土製品?	破片 推定口径7.5	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	数条の凹線を施す。	8と同個体か
25埋-7	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい黄褐色。	沈線区画内に縄文LR。	堀之内1式
25埋-8	土製品?	破片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	数条の凹線を施す。	6と同個体か
25埋-9	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい褐色。	口唇部に沈線と刺突。	堀之内1式
25埋-10	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口唇部直下に沈線を施す。	堀之内1式
25埋-11	深鉢	底部 底径7.2	細砂多。良好。にぶい黄褐色。	器外面に研磨・光沢。	堀之内式
25埋-12	鉢	底部 底径7.8	細砂多。良好。にぶい黄褐色。	内外面に軽い研磨。	後期前半

### 18区12号配石土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部中位 2/3 残存高17.5	砂粒少。並。にぶい黄褐色。	懸垂文間を櫛歯の波状文で充填。	加曾利E3式 5・6と同個体
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	隆線渦巻文と楕円区画文。縄文はRL。	加曾利E3式
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	口縁部に縄文RL。	加曾利E3式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	懸垂沈線間を縄文RLで充填。	加曾利E3式
5	深鉢	胴部片	砂粒少。並。にぶい黄褐色。		1・6と同個体
6	深鉢	胴部片	砂粒少。並。にぶい黄褐色。		1・5と同個体
7	深鉢	胴部片 残存高12.2	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	懸垂沈線間を縄文RLで充填。	加曾利E3式
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	頸部に刻目が付く隆線。	堀之内1式
9	吊り手付土器?	把手片	細砂多。並。にぶい黄褐色。	内面に蕨手状沈線。	加曾利E3式 期
10	深鉢	底部片 底径10.8 残存高7.4	砂粒多。良好。にぶい褐色。	懸垂沈線間を縄文RLで充填。	加曾利E3式
11	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	沈線区画内に刺突を施す。	称名寺2式
12	深鉢	口縁部片	砂粒少。並。橙色。	口縁部に押圧を施した隆線がめぐる。	称名寺1式
13	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	口縁部に高い隆線がめぐる。	称名寺1式
14	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	口唇部内面に凹線がめぐる。	後期後半
15	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	縦位の条線。	晩期終末
16	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。黒褐色。	縦位の条線。	晩期終末
17	鉢	口縁部片	細砂少。良好。黒褐色。	口縁部に3本の凹線がめぐる。	晩期終末
18	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐灰色。	縦位の条線。	晩期終末

### 18区12号配石土器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
19	磨石	完形	120 83 49 653.5	粗粒安山岩	
20	石製品	完形	182 244 95 3,350.0	粗粒安山岩	

### 19区1号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1埋-1	深鉢	胴部下位~底部 80% 底径10.4 残存高14.6	砂粒多。良好。橙色(内面:黒~黒褐色)。	外面:ケズリ~ナデ調整後、縦位の研磨を施す。内面:ナデ。底部網代痕あり。	堀之内2式~加曾利B式

### 19区2号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2埋-1	鉢	口縁~胴部下位 80% 口径18.0 残存高11.5	砂粒多。良好。にぶい褐~暗褐色。	口縁突起4個、文様4単位。縄文LR縦位充填。無文部と内面軽い研磨・光沢。	堀之内1式
2埋-2	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。黒褐色。	刺突を伴う沈線。縄文LR。	堀之内1式

## 19区3号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
3埋-1	深鉢	胴部下位～底部 100% 底径9.5 残存高13.1	砂粒多。良好。にぶい橙褐色。	外面粗いナデ～研磨。底面網代痕なし。内面上位被熱による劣化。白色化明瞭。半周辺に。	後期

## 19区3号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
3埋-2	磨石	完形	120 96 55 966.8	粗粒安山岩	

## 19区4号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
4埋-1	深鉢	胴部上位～下位 70% 残存高36.3	砂粒多。良好。明赤褐色(黒褐色)。	器面やや粗いナデ。	称名寺1式
4埋-2	深鉢	胴部片	砂粒多。並。にぶい褐色。	断面三角形の隆線。交点に円形の刺突。	称名寺1式
4埋-3	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい褐色。	口縁部に隆線がめぐる。	称名寺1式

## 19区4号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
4埋-4	磨石	完形	126 74 43 663.8	粗粒安山岩	

## 19区5号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
5埋-1	深鉢	胴部中位～下位 1/2 残存高13.5	砂粒・繊維多。良好。橙褐色。	縄文1段LとRを束ねた結節(あやくり)。被熱痕跡確認できない。	前期黒浜式段階(長野系)

## 19区6号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
6埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 2/3 口径22.2 残存高12.1	砂粒多。良好。明黄褐色。	口縁部に刻目が付く。隆線と8の字状の貼付文。胴部に菱形区画を構成。	堀之内2式
6埋-2	深鉢	胴部片	細砂少。良好。黒褐色。	帯縄文で文様構成。縄文LR。	堀之内2式

## 19区7号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
7埋-1	深鉢	口縁～底部 1/8 口径48.8 底径12.2 器高49.0	砂粒少。並。黒褐～にぶい黄褐色。	縄文LR。内面入念ナデ～軽い研磨。	堀之内2式

## 19区9号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
9埋-1	深鉢	胴部下位～底部 80% 底径10.8 残存高10.6	砂粒多。良好。赤褐色。	器面やや劣化。底面に白色シルト付着。底面に網代痕あり。	後期

## 20区2号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2埋-1	鉢か	体部中位～底部 2/3 底径13.0 残存高14.4	砂粒多。良好。にぶい褐色。	内外面ともケズリ～ナデ調整後、軽い研磨。	後期 堀之内2式?

## 20区3号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
3埋-1	深鉢	口縁～胴部下位 80% 口径28.5 残存高23.5	砂粒多。良好。明赤褐色。	樽形の深鉢。口縁突起4個。隆線懸垂文間を縦位の口縁で充填。2条の弧線文を加える。	唐草文新段階

## 20区4号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
4埋-1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	隆帯と凹線。	加曾利E3式

## 20区6号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
6埋-1	深鉢	胴部片 残存高8.7	砂粒・金雲母多。良好。にぶい褐色。	胴部に綾杉状の沈線。	唐草文新段階
6埋-2	深鉢	胴部中位～底部 1/3 底径8.6 残存高11.6	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	底面に白色シルト付着。	曾利III式

## 20区10号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
10埋-1	深鉢	口縁～胴部下半 完存 口径49.0 残存高55.0	砂粒多。良好。にぶい黄橙～にぶい黄褐色。	H字状文3単位。隆線の交点に円形の刺突。隆線区画内の縄文はLR。	称名寺1式

## 20区11号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
11埋-1	脚台付深鉢	頸部～底部 1/3 推定底径8.0 残存高16.1	砂粒多。良好。明褐色。	断面三角形隆線+ナゾリ。縄文RL縦。脚台部円孔4個。外面上半にスス、内面下半にススと炭化物付着。煮炊きに実用。	加曾利E3式



## 20区12号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
12埋-1	深鉢	胴部中位破片 残存高8.4	砂粒多。並。明黄褐色。	沈線のみで文様を構成。	称名寺2式
12埋-2	深鉢	口縁～胴部中位 1/4 推定口径16.4 残存高11.6	砂粒多。良好。黒褐色。	縄文LR横。被熱痕なし。	加曾利E4式 ～称名寺式
12埋-3	深鉢	胴部下位～底部 80% 底部10.6 残存高11.4	砂粒多。良好。にぶい黄褐～赤褐色。	内外面被熱による劣化・摩耗が著しく、調整・文様不明。外面全体に白色シルトが少量に付着。底面に網代痕あり。	後期

## 20区13号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
13埋-1	深鉢	胴部下位～底部 100% 底径8.4 残存高6.6	砂粒多。良好。明黄褐色。	内面ナデ。外面～底面軽い研磨。被熱なし。炭化物付着。	中期

## 20区14号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
14埋-1	鉢	口縁～底部 3/4 推定口径30.0 底径8.0 器高20.9	砂粒多。良好。橙色。	口縁部突起9個、胴部渦巻文5個。縄文LR。無文部と内面軽い研磨・光沢。	堀之内1式

## 20区15号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
15埋-1	深鉢	胴部上位～下位 3/4 残存高34.5	砂粒多。良好。暗褐色。	文様5単位。外面上半がスズで黒色化、下半が被熱明色化、やや劣化。内面下半に炭化物付着。	唐草文系

## 20区15号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
15埋-2	台石	完形	127 54 40 380.0	粗粒安山岩	断面三角形の棒状円礫を使用した、小形の台石。おそらく石鏃などの小形石器の加工に使用。平坦面の広い部分に細かなキズの集積がつく。

## 20区16号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
16埋-1	深鉢	胴部中位 50% 残存高22.5	砂粒多。良好。明黄褐色。	縄文無節L縦。	加曾利E3式

## 20区18号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
18埋-1	深鉢	胴部上位～下位 70% 残存高29.9	砂粒多。良好。浅黄橙～褐灰色。	内外面入念ナデ～軽い研磨。	称名寺1式
18埋-2	深鉢	胴部中位～底部 1/2強 口径27.2 底径10.0 器高42.8	砂粒多。良好。赤褐～にぶい赤褐色。	外面は斜位ケズリ～ナデ後、軽い研磨。内面は横位入念なナデ。底部網代痕ないが凸凹あり。	称名寺式 20区102号住居(報告済)15と同個体
18埋-3	深鉢	口縁部片 残存高7.6	砂粒多。良好。にぶい黄橙～褐灰色。	口縁部に断面三角形の隆線がめぐる。	称名寺1式

## 20区19号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
19埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 80% 口径33.2 残存高21.2	砂粒多。並。にぶい黄褐色。	隆線2本、その上に突起が付くが欠失。隆線上に刺突。縄文LR、器面劣化で見えにくい。	称名寺1式
19埋-2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	口縁部に断面三角形の隆線がめぐる。	称名寺1式
19埋-3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	胴部に断面三角形の隆線を施す。	称名寺1式

## 20区20号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
20埋-1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	無文。	後期前半
20埋-2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	断面三角形の隆線を施す。隆線の交点に円形の刺突。縄文はRL。	称名寺1式
20埋-3	深鉢	胴部中位～底部 60% 底径10.0 残存高19.0	砂粒多。並。黄橙色。	内外面粗いナデ～軽い研磨。ただし、器面大荒、大半が劣化・剝落。断面三角形隆線。劣化著しく底面観察不能。	称名寺1式

## 20区20号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
20埋-4	磨石	完形	104 101 49 750.4	粗粒安山岩	

## 20区21号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
21埋-1	壺形	胴部片	細砂少。良好。にぶい黄褐色。	2本の平行隆線。紐掛けの突起が欠損。内外面研磨。	後期前半
21埋-2	壺形	胴部片	細砂少。良好。にぶい黄褐色。	沈線を伴う隆帯。外面研磨・光沢。	後期前半
21埋-3	深鉢	胴部片	砂粒多。並。にぶい黄褐色。	無文。器面に凹凸を残す。	後期前半
21埋-4	鉢	胴部上位～底部 1/2 底径8.0 残存高18.8	砂粒少。良好。橙色。	体部に一對の把手。底面に丸みあり、研磨。内外面に研磨・光沢があるが劣化・荒れ。被熱なし。	加曾利E3式

## 20区23号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
23埋-1	深鉢	頸部～胴部中位 90% 残存高11.6	砂粒多。良好。橙色。	隆線懸垂文6個。内外とも上端3～5cm被熱による劣化明瞭。	唐草文系

## 20区24号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
24埋-1	深鉢	ほぼ完形 口径23.7 底径7.0 器高34.0	砂粒多。並。橙色。	文様7単位。器面劣化で文様不鮮明。器形にゆがみ、埋没のためか。網代痕なし。被熱不明。	唐草文系（加曾利E3式新段階）

## 20区25号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
25埋-1	深鉢	胴部中位 50% 残存高10.7	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	内面軽い研磨・光沢。被熱なし。	加曾利E3式

## 20区26号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
26埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 80% 口径35.7 残存高27.4	砂粒多。良好。赤褐～暗褐色。	文様5単位。被熱痕跡なし。	唐草文系

## 20区28号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
28埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 1/3 口径17.4 残存高8.9	細砂多。良好。にぶい黄褐色。	文様4単位。縄文無節L縦。内面粗いケズリ～ナデ。口縁部内外面やや被熱明色化。	加曾利E3式新段階2と同個体
28埋-2	深鉢	胴部片	細砂多。良好。灰黄褐色。	沈線と無節縄文Lを施す。	加曾利E3式新段階1と同個体

## 20区29号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
29埋-1	深鉢	口頸部 80% 口径39.7	砂粒多。良好。褐灰色。	横位沈線により口縁部無文帯。沈線文。単節RL縄文充填。	加曾利E3式

## 20区30号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
30埋-1	深鉢	胴部 ほぼ全周残存	砂粒多。良好。明赤褐色。	口縁部と胴下半欠失。口縁部弧状沈線。胴部は2条単位の沈線垂下(8単位)。単節LR縄文充填。縄文部に縦位沈線(上端が蕨手状、下端が蛇行するもの有り)。無文部は研磨。	加曾利E3式
30埋-2	浅鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい橙～黒褐色。	隆帯による渦文。外面隆帯部分と内面全面に赤色塗彩。	加曾利E3式

## 20区30号土器埋設遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
30埋-3	台石	70%	379 261 61 8,000.0	安山岩	

## 28区2号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2埋-1	深鉢	口縁～胴部上位 1/4 推定口径21.0 残存高12.1	砂粒多。良好。橙色。	口縁に刻目付隆帯で渦巻文。胴部RL縄文縦位。無文部に入念ナデ。	勝坂3式
2埋-2	浅鉢	口縁～胴部下位 1/6 推定口径43.2 残存高15.5	砂粒多。良好。褐色。	外面：やや粗いナデ～軽い研磨。内面：入念ナデ～研磨・光沢。	中期
2埋-3	深鉢	胴部下位～底部 1/4 残存高8.8	砂粒多。良好。にぶい褐色。	内外面に入念ナデ。	勝坂3式 2埋-1の胴部か
2埋-4	浅鉢	体部破片 残存高12.1	砂粒多。良好。明赤褐～褐灰色。	内外面研磨・光沢。赤塗痕がわずかに残る。	中期

## 28区3号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
3埋-1	深鉢	胴部上位～底部 2/3 底径7.2 残存高22.3	砂粒多。良好。橙色。	撚糸L。	加曾利E1式
3埋-2	高台付土器	高台部片 底径15.8 残存高4.9	砂粒・金雲母多。良好。黄褐色。	4つの円孔が付く。縄文はLR。	中期

## 28区5号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
5埋-1	深鉢	胴部中位～底部 4/5 底径8.6 残存高21.8	砂粒多。良好。明褐色。	胴部懸垂文10本。縄文RL縦。	加曾利E3式
5埋-2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗褐色。	懸垂沈線間を縄文LRで充填。	加曾利E3式

## 30区10号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
10埋-1	深鉢	胴部中位 100% 残存高8.1	砂粒多。良好。浅黄褐色。	文様単位4か(不明瞭)。縄文LR縦、下方不明瞭。下方内外面被熱による劣化著しく、縄文や沈線見えない。	加曾利E3式(連弧文系か)

30区11号土器埋設遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
11埋-1	深鉢	口縁～胴部中位 3/4 口径30.4 残存高18.9	砂粒多。並。にぶい黄褐色。	縦位に粗い条線。外面及び口唇部、被熱による劣化が著しい。	加曾利E 3式

18区3号掘立柱建物柱1土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	横位の綾杉状沈線を施す。	堀之内1式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐灰色。	沈線で重なった入り組み状の渦巻文を施す。	堀之内1式
3	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	2～3条の沈線で曲線的な文様を構成。	堀之内1式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	頸部に刺突を施した隆線がめぐる。	堀之内1式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式 9・10と同個体
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗赤褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。	堀之内1式 8・10と同個体
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。	堀之内1式 8・9と同個体
11	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。赤褐色。	口縁部はくの字に内折。	堀之内1式
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	3本単位の沈線で文様を構成。	堀之内1式
13	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	集合沈線を施す。	堀之内1式
14	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	櫛歯の条線を施す。	堀之内1式

18区3号掘立柱建物柱1石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石材	備考
5	磨石	完形	126	103	61	1,097.3	粗粒安山岩	

18区3号掘立柱建物柱2土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	無文。	後期
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	無文。	後期
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	頸部に3本の沈線がめぐる。胴部の縄文はLR。	堀之内1式 7と18区3号掘立柱建物柱7の1～3と同個体
4	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	頸部に3本の沈線がめぐる。	堀之内1式 18区3号掘立柱建物柱3の5と柱4の6～9と同個体
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	無文。内面平滑に調整。	
6	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	2条の沈線で渦巻文を施す。縄文はLR。	堀之内1式
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	無文。内面平滑に調整。	3と18区3号掘立柱建物柱7の1～3と同個体
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	無文。内面平滑に調整。	
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	縄文LRを施す。	堀之内1式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	無文。内面平滑に調整。	

18区3号掘立柱建物柱3土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	刺突を伴う隆線を垂下する。	堀之内1式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	無文。内面平滑に調整。	
4	鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内傾する口縁部に刺突を施した隆線がめぐる。内外面研磨・光沢。	堀之内1式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	4条の平行沈線を施す。	堀之内1式 18区3号掘立柱建物柱2の4と柱4の6～9と同個体
6	深鉢	底部片 推定底径9.4 残存高4.1	砂粒多。良好。赤褐色。	外面、粗いナデのみ。網代痕が付く。	後期

## 18区3号掘立柱建物柱3石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
3	石皿	欠損	(217)	(58)	(40)	891.1	粗粒安山岩	

## 18区3号掘立柱建物柱4土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	壺形	胴部片	細砂少。良好。黒褐色。	頸部に沈線がめぐり、胴部に縄文LRを施す。内面研磨・光沢。	堀之内1式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	外面ナデ。内面平滑に調整。	後期
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	内外面研磨。	後期
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内外面研磨。	後期
5	鉢	底部片	砂粒多。良好。明黄褐色。	外面ナデ。内面平滑に調整。	後期
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	4条の平行沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式 7~9と18区3号掘立柱建物柱2の4と柱3の5と同個体
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。		堀之内1式 6・8・9と18区3号掘立柱建物柱2の4と柱3の5と同個体
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。		堀之内1式 6・7・9と18区3号掘立柱建物柱2の4と柱3の5と同個体
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。		堀之内1式 6~8と18区3号掘立柱建物柱2の4と柱3の5と同個体

## 18区3号掘立柱建物柱7土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁～頸部 1/5 推定口径46.8 残存高15.9	砂粒多。良好。にぶい黄褐～明褐色。	口縁部にC字状沈線を施した大小の突起が付く。	堀之内1式 2・3と18区3号掘立柱建物柱2の3・7と同個体
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。		堀之内1式 1・3と18区3号掘立柱建物柱2の3・7と同個体
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。		堀之内1式 1・2と18区3号掘立柱建物柱2の3・7と同個体
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	外面ナデ。内面平滑に調整。	

## 18区3号掘立柱建物柱8土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	外面研磨。内面平滑に調整。	後期
2	深鉢	頸部片	細砂少。良好。橙色。	頸部に平行沈線がめぐり。	堀之内1式

## 18区3号掘立柱建物柱9土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	1条の沈線で文様を施す。	堀之内1式
2	鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい黄褐色。	内外面研磨・光沢。	後期

## 18区3号掘立柱建物柱9石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
3	磨石	完形	109	93	60	870.6	粗粒安山岩	
4	砥石	ほぼ完形	306	229	134	6,400.0	粗粒安山岩	よく発砲した軽質安山岩の円礫を使用した荒砥石。両端部の一部を残して、ほぼ全面を研磨・加工に使用。数ヶ所に刺突痕が見つかるが何に使用したかは不明。

## 18区3号掘立柱建物柱10土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。黒褐色。	頸部に沈線で渦巻文を施す。縄文はLR。	堀之内1式 2と同個体
2	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。		堀之内1式 1と同個体
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	2条の平行沈線を施す。	堀之内1式

## 18区3号掘立柱建物柱11土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	3～4条の平行沈線で文様を構成。	堀之内1式 2と同個体

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。		堀之内1式 1と同個体
3	土製円盤	完形	砂粒多。良好。赤褐色。	堀之内1式土器の胴部片を使用。	堀之内1式

#### 18区3号掘立柱建物柱11石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石材	備考
4	磨石	完形	135	100	76	1,570.4	粗粒安山岩	

#### 18区4号掘立柱建物柱2土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒少。並。橙色。	口唇部に沈線を施す。	称名寺2式
2	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。黒褐色。	列点を伴う平行沈線で文様を施す。	称名寺2式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線のみ。	称名寺2式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	縦位の条線を施す。	称名寺2式
5	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	印刻状の深い沈線を施す。	称名寺2式
6	深鉢	底部片 底径10.0 残存高1.5	砂粒多。並。明黄褐色。	網代痕なし。	後期

#### 18区4号掘立柱建物柱3土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	口縁に環状の把手が付く。	堀之内1式
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	波状口縁。内折する口縁部に沈線と円形刺突を施す。	堀之内1式 4と同個体
3	深鉢	口縁部片	細砂少。並。にぶい黄褐色。	口縁部肥厚。	後期
4	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。		堀之内1式 2と同個体
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	縦位の条線を施す。	後期
6	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	胴部に沈線で渦巻文を施す。縄文はLR。	堀之内1式

#### 20区2号掘立柱建物柱1土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。褐灰色。	横位集合沈線間に刻目が付く。	中期後半
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	2本隆線の懸垂文。縄文はRL。	唐草文系新段階
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	縄文はRL。	加曾利E3式
4	深鉢	口縁部片	細砂少。良好。明褐色。	口唇部外面に沈線がめぐる。	堀之内1式

#### 20区2号掘立柱建物柱2土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい褐色。	斜行沈線。	中期後半
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明黄褐色。	沈線のみ。	堀之内1式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内外面研磨。	後期前半

#### 20区2号掘立柱建物柱3土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	凹線区画内に縄文RLを施す。	加曾利E3式

#### 20区2号掘立柱建物柱5土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	隆帯と凹線で区画。	加曾利E3式
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	凹線の楕円区画文。	加曾利E3式
3	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐色。	凹線区画の無文帯。	加曾利E3式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	隆帯区画の無文懸垂帯と縦位の条線。	唐草文系新段階
5	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	凹線区画の無文帯。	加曾利E3式
6	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。暗褐色。	深い沈線で区画された縄文帯で文様を構成。	称名寺1式
7	深鉢	底部片 推定底径6.6 残存高4.5	砂粒少。良好。褐灰～橙色。	底面研磨。	唐草文系新段階
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	隆帯区画の無文懸垂帯と縦位の条線。	唐草文系新段階
9	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	波状口縁。口縁部に沈線がめぐる。	加曾利E4式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	鋭利な細沈線で区画された縄文帯で渦巻文を構成。	加曾利E4式
11	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	内外面平滑。	後期前半
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	内外面入念なナデ。	後期前半

## 20区2号掘立柱建物柱5石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)				石 材	備 考
13	石鏃	70%	21	12	4	0.9	黒曜石	

## 20区2号掘立柱建物柱6土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	細砂少。良好。橙色。	深い沈線で区画された縄文帯で文様を構成。	加曾利E4式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内外面平滑。	後期前半
3	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい褐色。	くびれ部に沈線がめぐる。	堀之内1式
4	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。黒褐色。	刻目が付く隆線の区画と綾杉状沈線。	唐草文系新段階
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	凹線区画内を縄文RLで充填。	加曾利E3式

## 20区2号掘立柱建物柱6石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)				石 材	備 考
6	磨石	60%	(80)	61	55	326.1	粗粒安山岩	

## 20区2号掘立柱建物柱7土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。並。褐灰色。	条線を波状に施す。	後期前半

## 20区2号掘立柱建物柱7石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)				石 材	備 考
2	磨石	完形	92	65	54	381.1	粗粒安山岩	

## 20区2号掘立柱建物柱8土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	口縁部が大きく内湾。深い沈線で文様を区画。	加曾利E4式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	凹線区画内の縄文はRL。	加曾利E3式
3	深鉢	胴部片	細砂多。良好。暗赤褐色。	鋭利な細沈線で文様を区画。	加曾利E4式
4	深鉢	胴部片	細砂少。良好。明黄褐色。	無文。内外面平滑。	後期前半
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黄褐色。	3条の平行沈線。	堀之内1式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	凹線区画内の縄文はRL。	加曾利E3式
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	凹線区画内の縄文はRL。	加曾利E3式

## 20区2号掘立柱建物柱8石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)				石 材	備 考
8	磨石	完形	98	73	35	370.3	粗粒安山岩	
9	石鏃	完形	16	17	3	0.5	黒曜石	
10	敲石	完形	174	94	31	657.5	粗粒安山岩	

## 20区2号掘立柱建物柱9土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。橙色。	口唇部内外面肥厚。口唇上端に刺突列。	唐草文系新段階
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	断面三角形の隆線区画内に縄文LRを施す。	加曾利E4式

## 20区2号掘立柱建物柱9石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)				石 材	備 考
3	打製石斧	70%	(95)	55	18	96.6	細粒輝石安山岩	被熱。

## 20区2号掘立柱建物柱10土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	断面三角形の隆線のみで文様を構成。隆線の交点に円形の刺突が付く。	称名寺1式

## 20区2号掘立柱建物柱11土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	頸部片	細砂多。良好。明褐色。	頸部に隆帯がめぐる。	堀之内1式か
2	深鉢	胴部片	砂粒少。並。にぶい褐色。	縄文LRを施す。	後期
3	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい赤褐色。	外面に刷毛目状の調整痕を残す。内面研磨・光沢。	後期

## 20区2号掘立柱建物柱12土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。暗赤褐色。	半裁竹管による平行沈線間に幅広の押し引き文を施す。	勝坂1式

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆線と沈線を施す。	唐草文系新段階

#### 20区 2号掘立柱建物石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
1	台石	完形	229 195 124.5 8,510.0	粗粒安山岩	
2	台石	完形	276 219 175 15,800.0	粗粒安山岩	
3	台石	完形	340 224 101 13,820.0	粗粒安山岩	

#### 20区 5号掘立柱建物柱 2 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。極暗赤褐色。	2本隆線で区画された中を縦位の沈線で充填。	加曾利E 2式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	細沈線で区画された無文懸垂帯。	加曾利E 4式
3	深鉢	胴部片	細砂少。良好。明褐色。	細沈線で区画された無文懸垂帯。	加曾利E 4式
4	鉢	口縁部片	細砂少。良好。にぶい黄褐色。	口唇部角頭状。口縁部に刻目が付く隆線がめぐる。	加曾利B 2～3式
5	鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	内外面平滑。	加曾利B 2～3式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	2条隆線の懸垂文間に縄文LRを施す。	唐草文系新段階
7	鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	口縁部に縄文帯。頸部の刻目が付く隆線下に斜行沈線を施す。	加曾利B 2式 8・9と同個体
8	鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐～にぶい黄褐色。	外面に斜行沈線。内面平滑。	加曾利B 2式 7・9と同個体
9	鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	外面に斜行沈線。内面平滑。	加曾利B 2式 7・8と同個体
10	鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	内外面黒色処理。外面研磨。内面平滑。	加曾利B 2～3式
11	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい赤褐色。	胴部上半がくの字に外折。内外面平滑、軽い研磨。	加曾利B 2～3式
12	深鉢	頸部～胴部下位 1/6 残存高13.7	細砂少。良好。にぶい赤褐色。	内外面：研磨、少光沢。外面：ケズリ痕残す。	後期加曾利B 2～3式

#### 20区 5号掘立柱建物柱 3 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	断面三角形の隆線区画内の縄文はLR。	加曾利E 4式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	断面三角形の隆線区画内の縄文はLR。	加曾利E 4式
3	深鉢	胴部片	細砂多。良好。明赤褐色。	鋭利な細沈線で区画された縄文帯で文様を構成。	加曾利E 4式
4	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい褐色。	内外面平滑。	後期

#### 20区 5号掘立柱建物柱 4 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	浅鉢	肩部～底部 1/5 推定底径8.6 残存高14.4	砂粒多。良好。にぶい褐色。	赤塗確認できない。底面に白色シルト付着。	唐草文系

#### 20区 5号掘立柱建物石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
1	石棒	頭部片	(102) (89) (34) 395.6	緑泥片岩	有頭石棒の有頭部片。精緻で丁寧な作り。頭頂部は研磨・光沢を帯びる。(転用か。) 被熱なし。
2	敲石	完形	145 119 53 1,142.6	石英閃緑岩	
3	軽石製品	完形	104 73 59 111.3	軽石	加工前の原石であろう。
4	円礫	完形	177 141 79 2,900.0	石英閃緑岩	平面が楕円形、断面が紡錘形の円礫。やや緑がかかった色調で、明瞭な磨り面は認められない。シンメトリーに良く整った形状。
5	敲石	一部欠損	170 118 79 2,400.0	珪質変質岩	
6	台石	1/2	(295) (192) (79) 5,000.0	粗粒安山岩	扁平な円礫を使用した台石。斜めに欠損。表裏の平坦面に研磨による磨り面が明瞭に残る。打痕は認められない。
7	台石	1/2	212 (159) 80 4,000.0	粗粒安山岩	扁平な亜角礫を使用した台石。片面に溝状の研磨痕が並ぶ磨面と集合する敲打痕が重なり、もう一方の面には中央部に錐揉み穴が一つ付く。

#### 20区 6号掘立柱建物柱 1 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	縄文LRを施す。内面平滑。	堀之内 2式
2	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい赤褐色。	斜行する平行沈線。	堀之内 2式

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
3	土製円盤	完形	細砂多。良好。にぶい橙色。	内外面平滑。	後期
4	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	外反する口縁部に断面三角形の隆線を施す。	加曾利E 4式

#### 20区 6号掘立柱建物柱 3 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線による三角形の区画文。内面平滑。	堀之内 2式

#### 20区 6号掘立柱建物柱 4 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	底部 底径6.4 残存高7.6	砂粒少。良好。黒褐色。	胴部に斜行する沈線。内面平滑。底部摩擦顕著。	堀之内 2式

#### 20区 6号掘立柱建物柱 4 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
2	削器	ほぼ完形	(68) 20 9 1.2	黒曜石	

#### 20区 7号掘立柱建物柱 2 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部 50% 推定口径17.6 残存高6.4	砂粒多。良好。褐色。	内面軽い研磨。口縁部渦巻文 8個 4単位。	唐草文系
2	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。暗褐色。	口縁部に斜行沈線。胴部に重弧文。	曾利II式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	3本隆線と稜杉状沈線。上端の欠け口を丸頭状に研磨加工。	唐草文系新段階
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗褐色。	縄文LRを地文に沈線で文様を施す。	唐草文系新段階
5	浅鉢	胴部 1/3 推定口径42.2 残存高20.8	細砂少。並。褐色。	口縁部が内湾し、口唇部肥厚。内外面研磨・光沢、全面に赤色塗彩が残る。口縁部に補修孔あり。	加曾利E 2式か

#### 20区 7号掘立柱建物柱 2 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
6	打製石斧	完形	110 58 23 172.6	黒色安山岩	
7	台石	1/2	163 (81) 52 1,049.5	粗粒安山岩	丸い扁平円礫を使用した台石。片面の数ヶ所に小さな敲打痕。もう一方は平坦で、明瞭な痕跡なし。

#### 20区 7号掘立柱建物柱 3 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。黒褐色。	頸部に 3条の沈線を施す。	加曾利E 2式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	2本隆線区画内に縄文LRを施す。	唐草文系新段階
3	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。黒褐色。	低い隆帯と凹線で文様を構成。	加曾利E 3式
4	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐色。	縦位の条線を施す。	加曾利E 3式

#### 20区 7号掘立柱建物柱 3 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
5	台石	完形	229 191 67 4,900.0	粗粒安山岩	楕円形の扁平な円礫を使用した台石。両平坦面に弱い磨り面が残る。また、ほぼ全面に被熱による黒色化が認められる。

#### 20区 8号掘立柱建物柱 1 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。	無文。内外面粗いナデと研磨。	堀之内 2式

#### 20区 8号掘立柱建物柱 2 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	細沈線で文様を施す。	後期前半
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	無文。	後期前半
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒色。	沈線区画内の縄文はLR。	加曾利E 4式

#### 20区 8号掘立柱建物柱 2 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
4	石鏃	完形	12 8 3 0.2	黒曜石	
5	石棒	頭部2/3	(101) 頭部最大 82 頭部最大 (78) 763.8	緑泥片岩	緑泥片岩製の有頭石棒の頭部。現状は3つに割れて1/3を欠失するが、発掘時は残っていた。体部の加工はやや粗いが頭部は丁寧に研磨されている。

#### 20区 8号掘立柱建物柱 3 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	波状口縁で把手が付く。口縁部内折。文様は刺突文と沈線と隆線。	称名寺 2式



番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。灰黄褐色。	細沈線のみで文様を構成。	称名寺2式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	無文。	後期前半

#### 20区8号掘立柱建物柱4土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。赤褐色。	無文で口唇部内面に沈線がめぐる。外面研磨。	堀之内2式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	区画内の縄文はLR。	堀之内2式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	区画内の縄文はLR。	堀之内2式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	無文。内外面平滑。	堀之内2式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	無文。内外面平滑。	堀之内2式

#### 20区8号掘立柱建物柱4石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
6	打製石斧	ほぼ完形	138 77 20 203.6	黒色頁岩	

#### 29区1号掘立柱建物柱1土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒・雲母多。良好。にぶい褐色。	口唇部に斜めの刻目。内外面ナデ。	高井東式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	斜位の条線。	後期
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部横位沈線間に刻目を施す。	高井東式

#### 29区1号掘立柱建物柱2石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
1	石鏃	ほぼ完形	30 15 5 1.4	珪質変質岩 (流紋岩質凝灰岩)	

#### 29区1号掘立柱建物柱3土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	口縁部縄文帯に列点状の刺突を施す。	堀之内2式

#### 29区1号掘立柱建物柱3石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
2	磨製石斧	1/2	(73) 51 33 152.1	蛇紋岩	

#### 19区1号環状柱穴列柱4石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石材	備考
1	磨石	完形	152 94 56 1,091.0	粗粒安山岩	

#### 19区2号環状柱穴列柱1土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁～胴部中位 1/3 推定口径26.6 残存高19.8	砂粒多。良好。暗赤褐色。	縄文LR縦。	称名寺1式
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	口縁部隆線下に縄文RLを施す。	称名寺1式
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部沈線下に縄文RLを施す。	加曾利E4式
4	深鉢	口縁部片 口径11.5 残存高4.4	細砂少。良好。にぶい褐色。	頸部がくの字に外折し口縁部が強く内折する。口縁に小突起。	称名寺2式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	縄文LRを充填した帯状文で渦巻文を構成。	称名寺1式
6	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。赤褐色。	縄文LRを充填した帯状文で渦巻文を構成。	堀之内1式
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	沈線区画の無文帯で文様を構成。	称名寺1式
8	深鉢	口縁部片	砂粒少。並。にぶい褐色。	くの字に内折する口縁部に沈線がめぐる。	堀之内1式
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	頸部沈線下に文様単位を示す刺突を施す。	堀之内1式
10	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	口縁突起下に押圧を施す。口縁部をめぐる縄文はLR。	高井東式
11	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	外面ナデ、内面軽い研磨。無節の縄文L。	高井東式
12	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	斜行沈線を横位帯状に施す。	加曾利B2式
13	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐灰色。	縦位の条線に太沈線を加える。	後期後半
14	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	縦位の条線を施す。	高井東?

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
15	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	粗製土器。外面にケズリ痕を残す。	後期後半
16	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	粗製土器。外面にケズリ痕を残す。	後期後半
17	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	口縁部が内湾する粗製土器。内外面にナデ痕を残す。	後期後半
18	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	外面に斜位のナデ痕を残す。	高井東?
19	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	細沈線のみで文様を描く。	称名寺2式
20	深鉢	胴部下位～底部 底径6.2 残存高6.0	砂粒多。良好。橙色。	外面、縦位の粗いケズリ痕。内面、ナデ。底面網代痕あり。	後期
21	深鉢	胴部片	砂粒多。並。にぶい橙色。	2条の沈線を施す。	後期後半
22	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	2条の沈線を施す。土製円盤か。	後期後半

19区 2号環状柱穴列柱 1 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
23	石鏃		28 17 3 1.0	黒曜石	
24	磨製石斧	破片	(38) (35) (12)	18.1 蛇紋岩	装着部片。器面研磨・光沢。
25	磨石	60%	(81) 77 33 315.9	粗粒安山岩	
26	打製石斧	80%	122 57 30 172.0	粗粒輝石安山岩	
27	打製石斧	80%	(94) 51 18 127.3	細粒輝石安山岩	
28	打製石斧	70%	(78) 45 21 93.8	細粒輝石安山岩	

19区 2号環状柱穴列柱 2 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	隆帯に沿って幅広の押し引き文で文様を施す。	勝坂1式
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	内湾する口縁部に刻目が付く隆帯と集合沈線で弧状文を施す。	勝坂3式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	刻目が付く隆帯区画内を沈線で充填。	勝坂3式
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	玉抱き三叉文を施す。	勝坂3式
5	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい黄褐色。	2条の蛇行沈線を施す。	阿玉台II式
6	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。灰黄褐色。	隆帯と幅広の押し引き文を横位に施す。	阿玉台II式
7	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい橙色。	隆帯の両側に幅広の押し引き文を施す。	阿玉台II式
8	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	半裁竹管による横位沈線と交互刺突文を施す。	加曾利E1式
9	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内湾する口縁部に渦巻文を施す。	加曾利E2式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	半裁竹管縦位の集合沈線を施す。	曾利I式
11	深鉢	頸部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	隆線と細沈線で文様を描く。	曾利I式
12	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。明褐色。	口縁部に半裁竹管による斜位の集合沈線を施す。	曾利I式
13	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	半裁竹管縦位の集合沈線を施す。	曾利II式
14	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	無文の口縁部がくの字に内湾。	勝坂3式
15	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	楕円区画内に縦位の沈線。	唐草文系
16	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	頸部に交互刺突文。	唐草文系
17	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	頸部に隆帯で渦巻文を描く。	唐草文系
18	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。明褐色。	口縁部に蛇行沈線。	唐草文系
19	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	口縁部内面にS字状の貼付文。	唐草文系
20	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい赤褐色。	内面隆線が波頂部で渦巻文を描く。	唐草文系
21	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	綾杉状沈線。	唐草文系
22	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	縦位沈線間に綾杉状沈線。	唐草文系
23	深鉢	胴部片 残存高7.9	砂粒多。良好。明赤褐色。	半竹平行沈線。縄文LR縦。	加曾利E3式古段階(唐草文系?) 胎土・色調は唐草文系
24	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	縄文反撚りLLRか。	加曾利E3式

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
25	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	文様を構成する隆帯間に綾杉状沈線。	唐草文系
26	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	隆帯で文様を構成。	唐草文系
27	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	口縁部に楕円区画文。縄文はLR。	加曾利E 4式
28	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部内面に隆線がめぐる。	加曾利E 3式
29	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部に隆帯で渦巻文。縄文はLR。	加曾利E 3式
30	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	胴部に隆帯渦巻文。	加曾利E 3式
31	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	隆線による渦巻文。	加曾利E 4式
32	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。明褐色。	縄文は付加条。	加曾利E 3式
33	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	口唇部内面に隆線。口縁部隆線に沿って刺突列を施す。	唐草文系
34	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	波状口縁。胴部の縄文無節L。	加曾利E 4式
35	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	波状口縁。胴部の縄文はLR。	加曾利E 4式
36	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	胴部上半に細沈線で渦巻文を構成。	加曾利E 4式
37	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	細沈線で渦巻文を構成。	加曾利E 4式
38	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい黄褐色。	縄文LRを地文に2条の沈線で文様を描く。	加曾利E 1式
39	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。褐灰色。	内湾する波状口縁。	加曾利E 4式
40	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	帯状文で文様を構成。	称名寺1式
41	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	深い沈線施文。	称名寺1式
42	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい橙色。	沈線のみで文様を描く。	後期
43	深鉢	胴部片	細砂少。良好。褐色。	沈線のみで文様を描く。	称名寺2式
44	深鉢	口縁部片	細砂多。良好。灰褐色。	口縁部外反。	称名寺2式
45	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。	内外面にナヅ痕を残す。	後期
46	土製品?	破片	細砂多。良好。にぶい褐色。	表裏面に2条の刺突列。	後期

### 19区 2号環状柱穴列柱 2 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
47	石鏃	完形	17	13	4	0.6	黒曜石	
48	石鏃	完形	14	12	2	0.3	黒曜石	
49	削器	70%	15	11	4	0.6	黒曜石	
50	石錐	80%	23	8	7	1.1	黒曜石	
51	石核	—	50	35	58	98.9	流紋岩	
52	磨石	完形	150	62	45	723.2	粗粒安山岩	
53	打製石斧	完形	95	45	15	66.5	黒色頁岩	
54	打製石斧	80%	(96)	58	14	110.9	細粒輝石安山岩	
55	打製石斧	ほぼ完形	(122)	57	21	137.9	細粒輝石安山岩	

### 19区 2号環状柱穴列柱 3 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。赤褐色。	頸部をめぐる隆帯に綾杉状の刻みが付く。	唐草文系古段階
2	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。赤褐色。	地文は無節R。沈線は半裁竹管。	加曾利E 1式
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	地文はRL。沈線は半裁竹管。	加曾利E 1式
4	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	頸部に半裁竹管による集合沈線がめぐる。地文は燃糸L。	加曾利E 1式
5	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。暗赤褐色。	頸部に3条の沈線がめぐる。地文はLR。	曾利I～II式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	縄文RLの地文に平行沈線で文様を描く。	加曾利E 1式
7	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	縄文RLを地文に連弧状の文様を構成。	連弧文系
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	平行沈線による剣先文。地文はRL。	曾利I～II式
9	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	斜行沈線の地文に交差して粘土紐を貼付。	曾利I式

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
10	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい赤褐色。	細い竹管状の集合沈線。	曾利I式
11	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。明赤褐色。	3条の隆線懸垂文と半裁竹管による集合沈線。	曾利I式
12	深鉢	口縁～胴部下半 1/3 推定口径16.9 残存高22.8	砂粒多。良好。明褐色・暗褐色。	樽形の波状口縁深鉢。文様2対4単位。	唐草文系
13	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。暗赤褐色。	隆帯に刻目、胴部に綾杉状沈線。	唐草文系
14	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	隆線と斜行沈線。	唐草文系
15	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	弧状の綾杉状沈線。	唐草文系
16	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗褐色。	2条の隆線で渦巻文を構成。	唐草文系
17	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	隆線と綾杉状沈線。	唐草文系
18	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。暗赤褐色。	縄文LRを地文に連弧文を構成。	唐草文系
19	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	綾杉状沈線。	唐草文系
20	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	隆線区画内に縦位の沈線。	曾利I式
21	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	2条の隆線で渦巻文を構成。	唐草文系
22	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	綾杉状沈線。	唐草文系
23	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。赤黒色。	条線を地文に2条の蛇行沈線を垂下する。	唐草文新段階
24	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	隆帯間を充填する沈線は細い竹管状施文具。	唐草文系
25	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆線懸垂文と横位沈線。	唐草文系
26	浅鉢	頸部片	砂粒少。良好。にぶい白橙色。	楕円区画内に斜行沈線。	唐草文系
27	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	沈線区画縄文帯に押し引き状の刺突列を加える。	称名寺1式?
28	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	縄文RL。	加曾利E3式
29	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	隆帯の渦巻文と楕円区画文。	加曾利E3式
30	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	2条の平行沈線で波状文を構成。	加曾利E3式
31	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	2条の隆帯で渦巻文を構成。	加曾利E3式
32	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。灰褐色。	波状口縁。口縁部に断面三角形の微隆帯。	加曾利E4式
33	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい黄褐色。	波状口縁。体部文様は細沈線で区画。	加曾利E4式
34	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	細沈線区画内に縄文LRを充填。	加曾利E4式
35	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	沈線のみ。	?
36	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	微隆帯と縄文RL。	加曾利E4式
37	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	口縁部に深い太沈線。	?
38	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい赤褐色。	内面の貼付は剥落。高い貼付隆帯に沿って刺突列を施す。	唐草文系古段階
39	深鉢	胴部中位～下位 1/3 残存高14.3	砂粒多。良好。赤褐色。	縄文LR縦。	中期

#### 19区2号環状柱穴列柱3石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石材	備考
40	石鏃	80%	(13)	15	3	0.4	黒曜石	
41	石錐	80%	26	8	4	0.8	黒曜石	
42	打製石斧	70%	(87)	51	20	135.0	細粒輝石安山岩	
43	軽石製品	破片	(38)	(27)	10	4.3	軽石	薄手で全面加工。
44	磨石	完形	118	80	52	587.3	粗粒安山岩	

#### 19区2号環状柱穴列柱4土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	2本の隆帯でS字文を施す。	加曾利E1式
2	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	刻目が付く懸垂隆帯と横位の平行沈線。地文は撚糸L。	唐草文系古段階
3	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい黄褐色。	半裁竹管の平行沈線で重弧文を描く。	唐草文系古段階

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
4	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。明赤褐色。	半裁竹管による斜位の集合沈線。	曾利Ⅰ式
5	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	縦位集合沈線の上に蛇形隆線を貼付。	曾利Ⅰ式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆線の渦巻文と綾杉状沈線。	唐草文系
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆線の渦巻文と綾杉状沈線。	唐草文系
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗赤褐色。	隆線と綾杉状沈線。	唐草文系
9	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	全面に縄文LRを施文。	後期
10	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。明赤褐色。	凹線区画無文帯。縄文RL。	加曾利E3式
11	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	隆帯で渦巻文。縄文はRL。	加曾利E3式
12	深鉢	口縁部片	砂粒少。並。にぶい黄褐色。	口縁部に隆帯がめぐる。	加曾利E4式
13	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	細沈線で弧状文を施す。	?
14	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	凹線と条線で文様を構成。	加曾利E3式
15	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	深い沈線で文様を区画。	加曾利E4式
16	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐灰色。	深い沈線で縄文帯を区画。	称名寺1式
17	深鉢	底部片 推定底径6.0 残存高3.2	砂粒少。良好。橙色。	網代痕なし。	後期

#### 19区2号環状柱穴列柱4 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
18	石鏃	60%	(7)	10	2	0.1	黒曜石	
19	台石	完形	223	201	98	5,990.0	石英閃緑岩	

#### 19区2号環状柱穴列柱5 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	鉢か	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。にぶい橙色。	半裁竹管による2条の平行沈線で幾何学的な文様を構成。交点に三叉印刻を施す。	前期末～中期初
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	隆線区画内に綾杉状沈線。	唐草文系
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	沈線区画内に綾杉状沈線。	唐草文系
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	幅広い凹線で区画。縄文はRL。	加曾利E3式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	細沈線区画内に縄文LRか。	加曾利E3式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	細沈線区画内に縄文LRか。	加曾利E4式
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	深い沈線で区画された縄文帯で渦巻文を構成。	称名寺1式
8	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	深い沈線で区画された縄文帯で渦巻文を構成。	称名寺1式
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	深い沈線で区画された縄文帯で渦巻文を構成。	称名寺1式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線区画内に縄文LRを施す。	堀之内1式
11	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。橙色。	口縁部に2条の沈線。	堀之内1式
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐～明赤褐色。	深い沈線で区画された縄文帯で渦巻文を構成。	称名寺1式
13	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい橙色。	沈線区画内に縄文LRを施す。	堀之内1式

#### 19区2号環状柱穴列柱5 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
14	磨製石斧	30%	(43)	(37)	19	47.2	蛇紋岩	装着部と刃部を欠損。側面が劣化し、ややあれている。転用なし。
15	磨石	60%	(87)	61	35	235.4	粗粒安山岩	

#### 19区2号環状柱穴列柱6 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	波状口縁。波頂部隆帯渦巻文下に無文懸垂帯。縄文はRL。	加曾利E3式
2	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。灰白色。	口縁部に渦巻文と楕円区画文。	加曾利E3式
3	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。暗赤褐色。	口縁部内面折り返し状に肥厚。口縁部に隆線がめぐらる。	唐草文系
4	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	口唇部くの字に外折。縄文はRL。	唐草文系
5	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。暗褐色。	口唇部内面に突帯。口縁部に刺突列。	唐草文系(越後系)

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
6	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	沈線区画内に櫛歯状施文具で綾杉状の刺突を施す。	唐草文系
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	弧状の綾杉状沈線。	唐草文系
8	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	大きく内湾する波状口縁。縄文はLR。	加曾利E 4式
9	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。	口縁部隆線に沿って円形の刺突列を施す。	加曾利E 4式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐灰色。	断面三角形の隆線。	加曾利E 4式
11	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい橙色。	微隆線区画内の縄文はLR。	称名寺1式
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	深い沈線による縄文帯で文様を構成。	称名寺1式
13	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい褐色。	深い沈線による縄文帯で文様を構成。	称名寺1式
14	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	把手が付く波状口縁。口唇部をめぐる沈線の端部に円形刺突を施す。	堀之内1式
15	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい橙色。	斜位の集合沈線。内面研磨。	加曾利B 2～3式
16	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	縄文LRを地文に蛇行沈線を垂下させる。	堀之内1式 17と同個体
17	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。		堀之内1式 16と同個体
18	深鉢	胴部片	細砂多。良好。暗褐色。	外面に横位の綾杉状沈線。内面研磨。	加曾利B 2～3式

#### 19区 2号環状柱穴列柱 6 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
19	石鏃未製品	ほぼ完形	14 14 4 0.7	黒曜石	
20	軽石製品	完形	77 52 39 47.3	軽石	片面に研磨した平坦面と途中までの円孔。もう一方の面に刃物痕のようなキズが残る。未製品か。
21	削器	完形	50 81 12 37.5	細粒輝石安山岩	

#### 19区 2号環状柱穴列柱 7 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	2本隆線の懸垂文。縦位条線を地文に2本の横位沈線を加える。	唐草文系
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	縦位の条線。	唐草文系
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	縦位条線を地文に2条の横位沈線を施す。	唐草文系
4	鉢	胴部上位～底部 1/5 推定底径7.2 残存高13.2	砂粒多。良好。灰黄褐～灰黒褐色。	外面：縦位条線。内面：研磨。底面：網代痕なし。	加曾利E 3式
5	深鉢	胴部片	砂粒・金雲母多。良好。赤褐色。	2条の隆線懸垂文と半裁竹管による綾杉沈線。	唐草文系
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆帯の両側にナゾリを加える。	加曾利E 3式
7	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	隆線区画の無文帯で文様を構成。	加曾利E 4式
8	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。黒褐色。	深い沈線による縄文帯で文様を構成。	称名寺1式
9	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。暗褐色。	刺突を伴う鎖状隆線懸垂文。	称名寺1式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	沈線区画の縄文帯で文様を構成。	称名寺1式
11	深鉢	口縁部片	細砂少。良好。灰褐色。	文様は沈線のみで施す。	称名寺1式
12	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。明褐色・黒色。	山形の突起の両側に円形の刺突を施す。口縁部をめぐる沈線はその刺突を起点とする。	称名寺2式
13	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい褐色。	鋭利な沈線で文様を施す。内面研磨。	称名寺2式
14	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	平行沈線で文様を施す。	後期
15	深鉢	口縁部片	細砂少。並。灰黄褐色。	口唇部内面に沈線。口縁部に細沈線で縄目状の文様を施す。	加曾利B 1式
16	鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい黄橙色。	上半部に文様帯。内外面研磨・光沢。	加曾利B 1式
17	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	沈線区画内を条線で充填。	後期
18	深鉢	口縁部片	細砂多。良好。にぶい黄橙色。	外面にケズリ痕を残す。内面研磨。	後期
19	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	外面にケズリ痕を残す。内面ナデ。	後期
20	深鉢	口縁～胴部中位 1/6 推定口径20.1 残存高13.7	砂粒多。良好。赤褐色。	口唇部内面に沈線がめぐる。外面 横～斜 ケズリ後、ナデ。内面 横～斜 ケズリ痕を残す。	後期

19区 2号環状柱穴列柱 7 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
21	石鏃	90%	20	(11)	5	0.9	黒曜石	
22	削器	70%	48	38	17	2.3	黒曜石	
23	打製石斧	90%	(93)	42	20	102.0	細粒輝石安山岩	
24	石棒	頭部片	(60)	36	31	72.5	緑泥片岩	小形の有頭石棒の頭部。所々に剥落がはいり、当初の形状はかなり失われている。断面形は楕円形。
25	磨石	完形	92	67	52	425.0	粗粒安山岩	
26	磨石	完形	115	85	47	679.0	粗粒安山岩	
27	台石	完形	213	192	64	3,810.0	安山岩	
28	多孔石	ほぼ完形	190	163	112	4720.0	粗粒安山岩	
29	多孔石	完形	322	224	131	12,550.0	粗粒安山岩	

30区 1号環状柱穴列土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁～底部 1/5 推定口径32.3 推定底径8.0 器高38.5	砂粒多。並。黒褐～明赤褐色(器内：黒色)。	口縁部 4 単位波状。底面に網代痕あり。外面：口縁部と胴部下位はケズリ+ナデ。胴部上位は研磨・光沢(ケズリ・ナデの調整後、研磨を施す)。内面：上方は横～斜位のナデ、下方は縦方向のナデ。	高井東式

30区 1号環状柱穴列柱 1 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	隆帯と沈線による懸垂文。縄文は無節Lか。	勝坂 2 式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	刻目が付く隆帯と半裁竹管による平行沈線による文様構成。	勝坂 2 式
3	深鉢	口縁部片	砂粒・金雲母多。良好。暗赤褐色。	口縁部に沈線を施した隆帯で文様を構成。口縁部内湾。外面赤色塗彩。	勝坂 2～3 式
4	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	弱く内湾しながら開く無文の口縁部。口唇部内面に隆帯。	勝坂 2～3 式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	断面三角形の隆線による区画文。区画外に縦位の条線。	加曾利 E 4 式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	綾杉状沈線。	唐草文系新段階
7	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	凹線区画無文帯を垂下。	加曾利 E 3 式
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	3 条の平行沈線で文様を構成。空白部に縄文LR。	堀之内 1 式
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。浅黄褐色。	3 条の平行沈線で文様を構成。	堀之内 1 式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	細沈線と縄文LR。	堀之内 2 式
11	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	堀之内 1 式から引き継ぐ把手の下に 8 字状貼付文。	堀之内 2 式
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗褐色。	3 条の平行沈線で文様を構成。空白部に縄文LR。	堀之内 1 式
13	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。灰褐色。	平行沈線で文様を描く。内外面研磨。	高井東式
14	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。赤褐色。	口縁部に刻目が付く隆線。その下に横位の縄文帯。	堀之内 2 式
15	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	口縁部に押圧を施した隆線がめぐる。	加曾利 B 式
16	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	口縁部上端に高い隆帯を施す。内外面研磨。	高井東式

30区 1号環状柱穴列柱 1 石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	石 材	備 考
17	石棒	頭部	(194)	150	134	5,700.0	デイサイト	無頭の大形石棒の頭部。器面が劣化して荒れているが形状は良く調整されている。頭部に一部自然面が残る。

30区 1号環状柱穴列柱 2 土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	沈線区画外の縄文はLR。	堀之内 1 式
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線区画外の縄文はLR。	堀之内 1 式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	懸垂沈線と縄文LR。	堀之内 1 式
4	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	沈線区画外の縄文は無節L。	堀之内 1 式
5	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。褐灰色。	断面三角形の隆線を施す。	称名寺 1 式
6	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。浅黄褐色。	沈線のみ。	堀之内 1 式
7	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	肥厚する口縁部に刺突列を伴う平行沈線を施す。	堀之内 1 式
8	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	くびれ部に円形の刺突列を伴う平行沈線がめぐる。	堀之内 1 式
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。暗赤褐色。	3 条の平行沈線で文様を構成。	堀之内 1 式
10	土製円盤	完形	砂粒多。良好。にぶい褐色～にぶい褐色。	無文部を使用。	後期

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
11	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙色。	3条の平行沈線で文様を構成。	堀之内1式
12	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	横位沈線を施す。内面研磨。	後期前半
13	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	平行沈線を施す。	堀之内1式
14	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	弧状の貼付文と沈線を施す。	後期か
15	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい黄褐色。	刻目が付く隆線のみ。	堀之内1式

### 30区1号環状柱穴列柱2石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
16	軽石製品	完形	67 53 53 55.3	軽石	原石から1/4を切り取ったような製品。平坦面はほぼ直角で、他の面は自然面がそのまま残る。
17	石鏃	70%	21 (9) 4 0.5	チャート	
18	削器	完形	20 14 5 1.2	黒曜石	

### 30区1号環状柱穴列柱3土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	外面に横位のナデ痕を残す。	後期
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線のみ。	後期
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	横位沈線。	後期

### 30区1号環状柱穴列柱4土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁～頸部 1/4 推定口径27.8 残存高10.4	砂粒多。良好。明黄褐色。	くの字に内折する口縁部と頸部に沈線がめぐる。頸部に8の字状の貼付文。胴部の縄文は無節L。	堀之内1式
2	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。にぶい橙色。	環状の把手に円形刺突を伴うC字状沈線を施す。	堀之内1式
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	口縁部突起に円形刺突を伴うC字状沈線を施す。	堀之内1式 5と同個体
4	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。黒褐色。	口縁突起下に刻目が付く隆線懸垂文、頸部に同隆線を施す。胴部の縄文はLR。	堀之内1式
5	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	口縁部くの字に内折。	堀之内1式 3と同個体
6	浅鉢	口縁部片	細砂多。良好。橙色。	口縁部に縄文帯がめぐる。	堀之内1式
7	深鉢	頸部片	砂粒少。良好。にぶい赤褐色。	頸部をめぐる隆線に刻目が付く。	堀之内1式
8	深鉢	頸部片	細砂少。良好。黒褐色。	懸垂隆線に刻目が付く。縄文はRL。	堀之内1式
9	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。浅黄褐色。	3条の平行沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黄褐色。	3条の平行沈線で文様を構成。縄文はRL。	堀之内1式
11	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい褐色。	3条の平行沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式
12	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。にぶい赤褐色。	3条の平行沈線で文様を構成。縄文はLR。	堀之内1式
13	深鉢	胴部片	細砂多。良好。にぶい黄褐色。	沈線のみ。	堀之内2式か
14	深鉢	頸部片	砂粒多。良好。暗赤褐色。	頸部をめぐる沈線間に円形刺突列を施す。	堀之内1式
15	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	充填縄文帯で連続する三角文を構成。	堀之内2式
16	深鉢	口縁部片	砂粒少。良好。明褐色。	内折する口縁部に沈線と刻目を施す。	堀之内2式
17	深鉢	胴部片	細砂少。良好。黒色。	横位の平行沈線。縄文はLR。	堀之内1式
18	深鉢	底部片 底径7.0 残存高1.9	砂粒多。良好。明赤褐色。	内外面研磨。底面に網代痕。	後期
19	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。褐色。	沈線のみ。	堀之内1式
20	深鉢	胴部片	細砂少。良好。にぶい褐色。	細沈線のみ。	堀之内2式か
21	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	押圧を施した隆帯を横位に施文。器面平滑。	後期後半
22	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰褐色。	押圧を施した隆帯を横位に施文。器面平滑。	後期後半

### 30区1号環状柱穴列柱4石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
23	打製石斧	70%	(58) 57 15 68.4	細粒安山岩	

### 19区1号柱穴列土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。	口縁部に棒状の貼付文。	高井東式



番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
2	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。浅黄橙色。		高井東式
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄橙色。	外面粗いナデ。内面平滑。	高井東式

#### 19区1号柱穴列石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
4	多孔石	完形	181 162 100 3,925.0	粗粒安山岩	

#### 20区1号集石遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐色。	内外面入念なナデと軽い研磨。	後期
2	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。黒褐色。	内外面入念なナデと軽い研磨。	後期

#### 20区1号集石遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
3	円礫	完形	167 121 109 3,200.0	粗粒安山岩	紡錘形の円礫で横断面がわずかに三角形となり3面の平坦部をわずかに研磨している。裏面とした面が最も平坦ですわりが良い。
4	多孔石	完形	159 152 107 3,700.0	粗粒安山岩	扁平な直角礫を使用した多孔石。片面に4つの円錐形の穴が付く。

#### 20区2号集石遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。灰黄褐色。		中世
2	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。褐灰色。		中世
3	内耳鍋	底部片	細砂多。良好。褐色。		中世

#### 20区2号集石遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
4	茶臼	破片	(103) (55) (35) 126.9	粗粒安山岩	茶臼の受け皿端部。製作時のケズリ痕をよく残す。被熱による黒色化明瞭。
5	砥石	破片	(122) (93) (39) 486.2	粗粒輝石安山岩	大形砥石の欠損品。各面に製作時のケズリ痕が残る。小口面が最もよく使われている。全体が被熱で黒色化しており、下端部に敲打痕が認められる。
6	石製品	一部欠損	111 99 53 523.0	粗粒安山岩	

#### 20区4号集石遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部片	砂粒多。並。橙色。	懸垂沈線間を横位沈線で充填。	唐草文新段階
2	深鉢	胴部片	砂粒少。良好。明赤褐色。	竹管状施文具で集合沈線を施す。	曾利古段階
3	深鉢	口縁部片	砂粒多。並。明黄褐色。	口縁部外反。	後期
4	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	内外面研磨・光沢。	後期
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄褐色。	外面研磨。	後期

#### 18区11号焼土遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	須恵器杯	底部片	砂粒少。並。灰色。	底部に網代痕。	
2	須恵器壺	底部片 残存高4.1	砂粒多。良好。灰色。	高台が付く。	

#### 18区11号焼土遺構鉄製品観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	備 考
3	鉄椀	破片	(20) (40) 4 7.3	厚さ3.5mmほどの均質な鉄板を球状に加工している。鉄椀の可能性が高い。表面の色調は赤褐色で、錆ぶくれは認められない。

#### 18区11号焼土遺構石器観察表

番号	器種	残存	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重量(g)	石 材	備 考
4	軽石製品	破片	(56) (64) 29 31.4	軽石	円孔が付く板状の製品。面は平滑で丁寧な作り。

#### 20区9号焼土遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部下位～底部 1/2 底径9.5 残存高20.2	砂粒多。良好。にぶい赤褐色。	胴部に縄文LR縦位施文。底面に白色シルト付着。	加曾利E4式
2	両耳壺	胴部片	砂粒多。良好。赤褐色。	胴部に渦巻文。	加曾利E3式新段階
3	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	沈線区画内の縄文はLR。	加曾利E4式
4	深鉢	底部片 底径7.0 残存高2.3	砂粒多。良好。にぶい褐色。	網代痕なし。	

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
5	深鉢	底部片 底径5.0 残存高1.9	砂粒少。良好。にぶい黄 橙色。	網代痕なし。	
6	深鉢	底部片 底径5.6 残存高2.1	砂粒多。良好。にぶい橙 色。	網代痕なし。	
7	深鉢	口縁～胴部中位 1/2 推定口径33.5 残存高24.0	砂粒多。良好。明赤褐～暗 赤褐色。	隆線区画内に縄文RLを充填。	加曾利E 4式
8	深鉢	胴部片 残存高10.2	砂粒多。良好。にぶい褐 色。	隆線区画内に縄文RLを充填。	加曾利E 4式
9	両耳壺	胴部片	砂粒多。良好。にぶい褐 色。	断面三角形隆線を施す。	加曾利E 4式
10	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい黄 橙色。	胴部に無節縄文Lを施す。	加曾利E 4式
11	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐色。	波頂部にC字状の貼付文。	加曾利E 4式
12	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。赤褐色。	口縁部に2列の刺突。胴部の縄文はLR。	加曾利E 4式 13と同個体
13	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。暗褐色。		12と同個体
14	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。浅黄褐色。	口縁部に2列の刺突。	加曾利E 4式
15	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。灰黄褐色。	口縁部に渦巻文と楕円区画文。縄文はRL。	加曾利E 3式 新段階
16	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。にぶい黄 橙色。	胴部文様は沈線で区画。縄文はLR。	加曾利E 4式
17	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙 色。	沈線区画内の縄文は無節R。	加曾利E 3式 新段階
18	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤 褐色。	沈線区画外の縄文はLR。	加曾利E 4式
19	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい橙 色。	隆線区画内の縄文は無節L。	加曾利E 4式
20	瓢形土器	口縁部片	細砂少。良好。黒色。	微隆線で曲線的な文様を施す。外面に赤色塗彩。	加曾利E 4式 21と同個体
21	瓢形土器	口縁部片	細砂少。良好。黒色。		20と同個体
22	深鉢	胴部片	細砂少。良好。橙色。	鋭利な細沈線で区画。縄文は無節L。	加曾利E 4式
23	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	沈線区画内を充填する縄文はRL。	加曾利E 4式
24	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。黒褐色。	口縁部隆線に沿って円形刺突を施す。縄文はLR。	加曾利E 4式
25	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。にぶい赤 褐色。	隆線懸垂文間を斜位沈線で充填。	唐草文新段階
26	深鉢	口縁部片	砂粒多。並。橙色。	口縁部に隆線がめぐる。	加曾利E 4式
27	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明褐色。	沈線区画内を充填する縄文はRL。	加曾利E 4式
28	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。明赤褐色。	縄文LRを地文に2条の隆線で文様を施す。	加曾利E 4式

#### 20区13号焼土遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。灰黄褐色。		中世
2	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。にぶい褐 色。		中世
3	内耳鍋	底部片	細砂多。良好。にぶい褐 色。		中世
4	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。褐灰色。		中世
5	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。褐灰色。		中世

#### 20区18号焼土遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。にぶい褐 色。		中世
2	内耳鍋	胴部片	細砂多。良好。灰黄褐色。		中世

#### 29区1号焼土遺構土器観察表

番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	口縁～胴部下位 50% 口径27.8 残存高22.9	砂粒多。良好。にぶい黄 褐色。	口縁部に渦巻文と楕円区画文、胴部に無文懸垂帯。 区画内を櫛歯の条線で充填。	加曾利E 3式
2	深鉢	胴部中位～底部 50% 底径8.2 残存高21.9	砂粒多。良好。明赤褐色。	胴部無文帯4本。縄文LR縦。	加曾利E 4式
3	浅鉢	胴部片	砂粒少。良好。橙色。	内外面研磨。	中期後半
4	深鉢	口縁部片	砂粒多。良好。褐灰色。	口縁部に隆帯で渦巻文。	加曾利E 3式
5	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	楕円区画内を斜位の沈線で充填。	加曾利E 3式
6	深鉢	胴部片	砂粒多。良好。橙色。	隆帯区画内を綾杉状沈線で充填。	唐草文新段階
7	鉢か	底部片 推定底径5.6 残存高3.3	砂粒多。良好。明赤褐色。	無文。	

## 報告書抄録

書名ふりがな	よこかべなかむらいせきかっこなな
書名	横壁中村遺跡（7）
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	22
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	439
編著者名	黒澤照弘 石田 真 藤巻幸男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20070326
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	よこかべなかむらいせき
遺跡名	横壁中村遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	24
北緯（日本測地系）	363210
東経（日本測地系）	1384025
北緯（世界測地系）	363221
東経（世界測地系）	1384013
調査期間	19960401-20051231
調査面積	30,000
調査原因	ダム建設
種別	集落
主な時代	縄文／中・近世
遺跡概要	集落－縄文－土器埋設遺構56＋掘立柱建物11＋環状柱穴列3＋柱穴列2＋集石1＋焼土8－土器＋石器／中・近世－集石3＋焼土34－内耳鍋＋砥石＋鉄製品
特記事項	縄文時代中期から後期にかけての拠点集落

# 写真図版



1 18区1号・2号土器埋設遺構 確認当初の状況



2 18区1号・2号土器埋設遺構 確認状況





1 18区1号・2号土器埋設遺構 埋設状況



2 18区2号土器埋設遺構 埋設土器下出土の土器



3 18区5号土器埋設遺構



4 18区7号土器埋設遺構



5 18区10号土器埋設遺構





1 18区11号土器埋設遺構 確認状況



2 18区11号土器埋設遺構 埋設状況



3 18区12号土器埋設遺構 確認状況



4 18区12号土器埋設遺構



5 18区12号土器埋設遺構 埋設状況



6 18区12号土器埋設遺構 土坑掘り方



7 18区13号土器埋設遺構 確認状況



8 18区13号土器埋設遺構 埋設状況





1 18区14号土器埋設遺構 確認状況



2 18区14号土器埋設遺構 埋没土と礫



3 18区14号土器埋設遺構 埋設状況



4 18区14号土器埋設遺構 埋設状況



5 18区14号土器埋設遺構 埋設状況



6 18区14号土器埋設遺構 土器内部の土壌と礫



7 18区14号土器埋設遺構 土坑掘り方



8 18区16号土器埋設遺構 確認状況





1 18区16号土器埋設遺構 埋設状況



2 18区16号土器埋設遺構 土器内部の土壌と礫



3 18区16号土器埋設遺構 土坑掘り方



4 18区17号土器埋設遺構 確認状況



5 18区17号土器埋設遺構 埋設状況



6 18区17号土器埋設遺構 周辺状況



7 18区17号土器埋設遺構 埋設状況

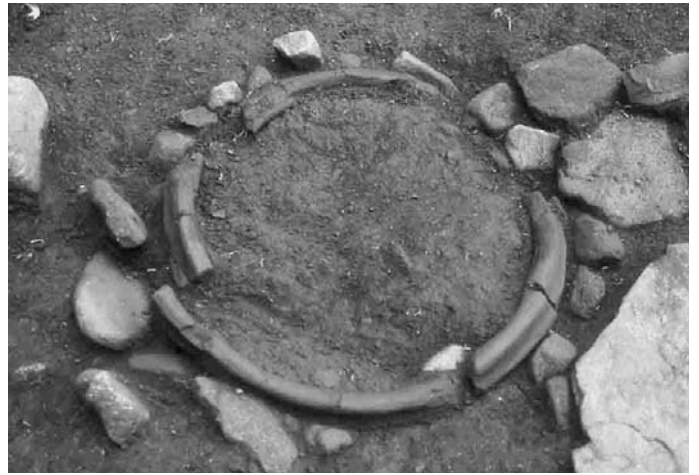


8 18区17号土器埋設遺構 掘り方





1 18区22号土器埋設遺構 確認状況



2 18区22号土器埋設遺構 周囲の礫



3 18区22号土器埋設遺構 埋設状況



4 18区22号土器埋設遺構 掘り方



5 18区23号土器埋設遺構 確認状況



6 18区23号土器埋設遺構 埋設状況



7 18区24号土器埋設遺構 確認状況



8 18区24号土器埋設遺構 掘り方





1 19区2号・3号土器埋設遺構 確認状況（40号住居内）



2 19区2号・3号土器埋設遺構 確認当初の状況



3 19区2号土器埋設遺構 確認時の状況



4 19区3号土器埋設遺構 確認時の状況



5 19区3号土器埋設遺構 埋設状況





1 19区4号土器埋設遺構 確認状況



2 19区4号土器埋設遺構 埋設状況



3 19区6号土器埋設遺構 確認状況



4 19区6号土器埋設遺構 埋設状況



5 19区7号土器埋設遺構 確認状況 (上から)



6 19区7号土器埋設遺構 埋設状況

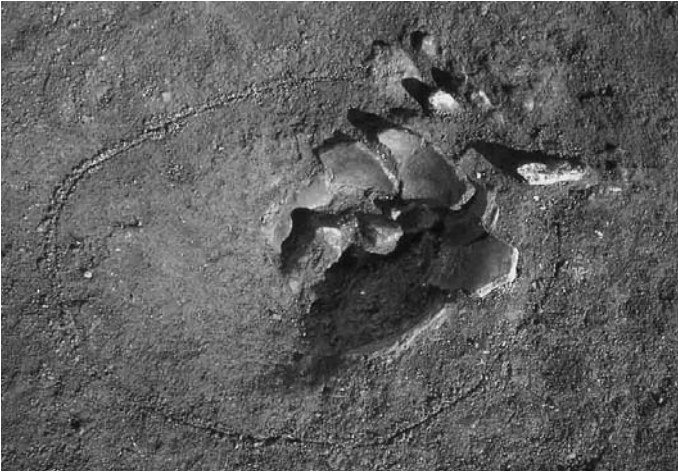


7 19区7号土器埋設遺構 埋設状況 (上から)



8 19区7号土器埋設遺構 掘り方





1 20区2号土器埋設遺構 確認状況



2 20区2号土器埋設遺構 埋設状況



3 20区3号土器埋設遺構 埋設状況



4 20区4号土器埋設遺構 確認状況



5 20区6号土器埋設遺構 確認状況



6 20区6号土器埋設遺構 埋設状況



7 20区12号土器埋設遺構



8 20区11号土器埋設遺構





1 20区10号土器埋設遺構 埋設状況



2 20区10号土器埋設遺構 土器内部の状況



3 20区10号土器埋設遺構



4 20区10号土器埋設遺構 土坑掘り方



5 20区14号土器埋設遺構 右手の段差は4号列石



6 20区14号土器埋設遺構 上方の段差は4号列石



7 20区14号土器埋設遺構 埋設状況（北から）



8 20区14号土器埋設遺構 埋設状況（東から）





1 20区15号土器埋設遺構（北西から）



2 20区15号土器埋設遺構 埋設状況



3 20区16号土器埋設遺構 確認状況



4 20区18号土器埋設遺構 上面の大形礫



5 20区18号土器埋設遺構 埋設状況



6 20区18号土器埋設遺構 土坑掘り方

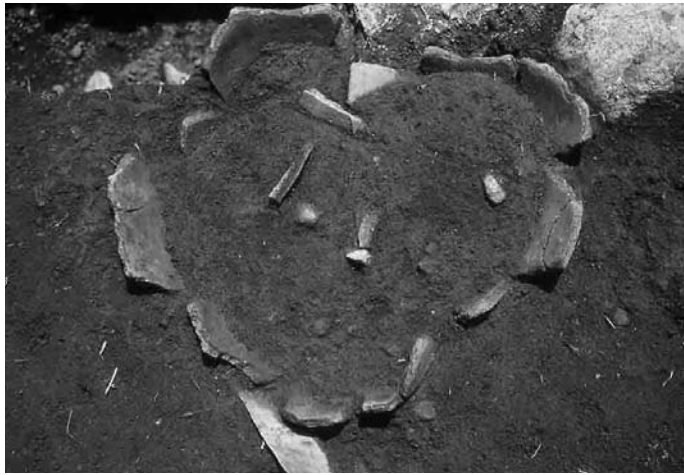


7 20区19号土器埋設遺構（上から）



8 20区19号土器埋設遺構 埋設状況





1 20区20号土器埋設遺構 確認状況



2 20区20号土器埋設遺構 土器内に丸い凹石



3 20区21号土器埋設遺構 (上から)



4 20区21号土器埋設遺構 埋設状況



5 20区23号土器埋設遺構 (上から)



6 20区23号土器埋設遺構 埋設状況



7 20区23号土器埋設遺構 掘り方の礫



8 20区23号土器埋設遺構 掘り方





1 20区24号土器埋設遺構



2 20区25号土器埋設遺構



3 20区26号土器埋設遺構 確認状況



4 20区26号土器埋設遺構 蓋石と扁平円礫



5 20区26号土器埋設遺構 埋設状況



6 20区26号土器埋設遺構 (上から)



7 20区26号土器埋設遺構 土器下の板石



8 20区26号土器埋設遺構 掘り方





1 20区28号土器埋設遺構 確認状況



2 20区28号土器埋設遺構 掘り方確認



3 20区28号土器埋設遺構 掘り方



4 20区30号土器埋設遺構



5 20区29号土器埋設遺構 手前に449号土坑



6 20区29号土器埋設遺構



7 28区1号土器埋設遺構 確認状況



8 28区1号土器埋設遺構 埋設状況





1 28区2号土器埋設遺構 埋設状況



2 28区2号土器埋設遺構 埋設状況



3 28区3号土器埋設遺構 埋設状況



4 28区3号土器埋設遺構 掘り方



5 30区10号土器埋設遺構 確認状況



6 30区10号土器埋設遺構 埋設状況



7 30区10号土器埋設遺構 周囲の礫



8 30区11号土器埋設遺構 埋設状況





1 18区1号掘立柱建物（南から）



2 18区1号掘立柱建物（南から）



3 18区2号掘立柱建物 柱2

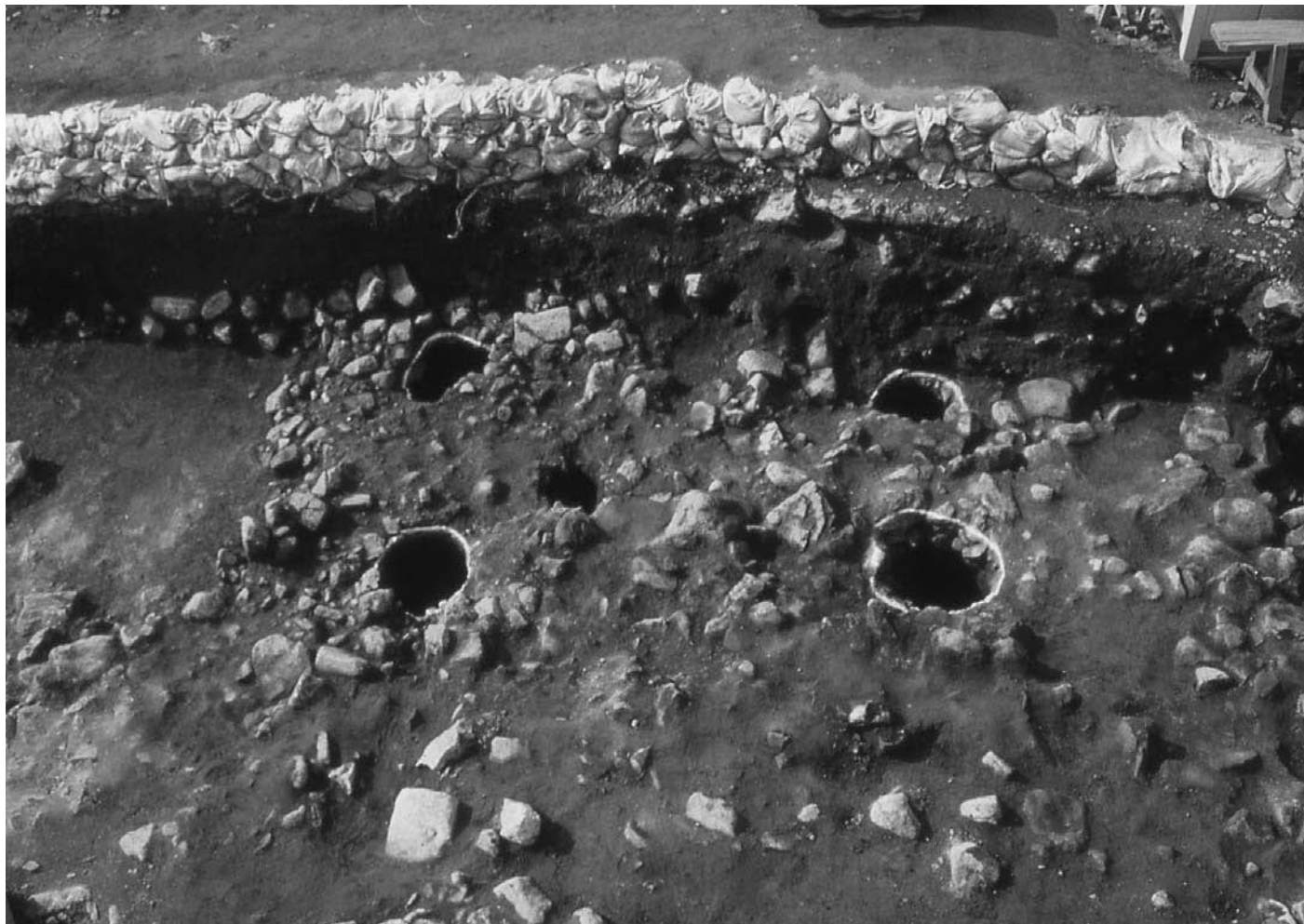


4 18区2号掘立柱建物 柱2

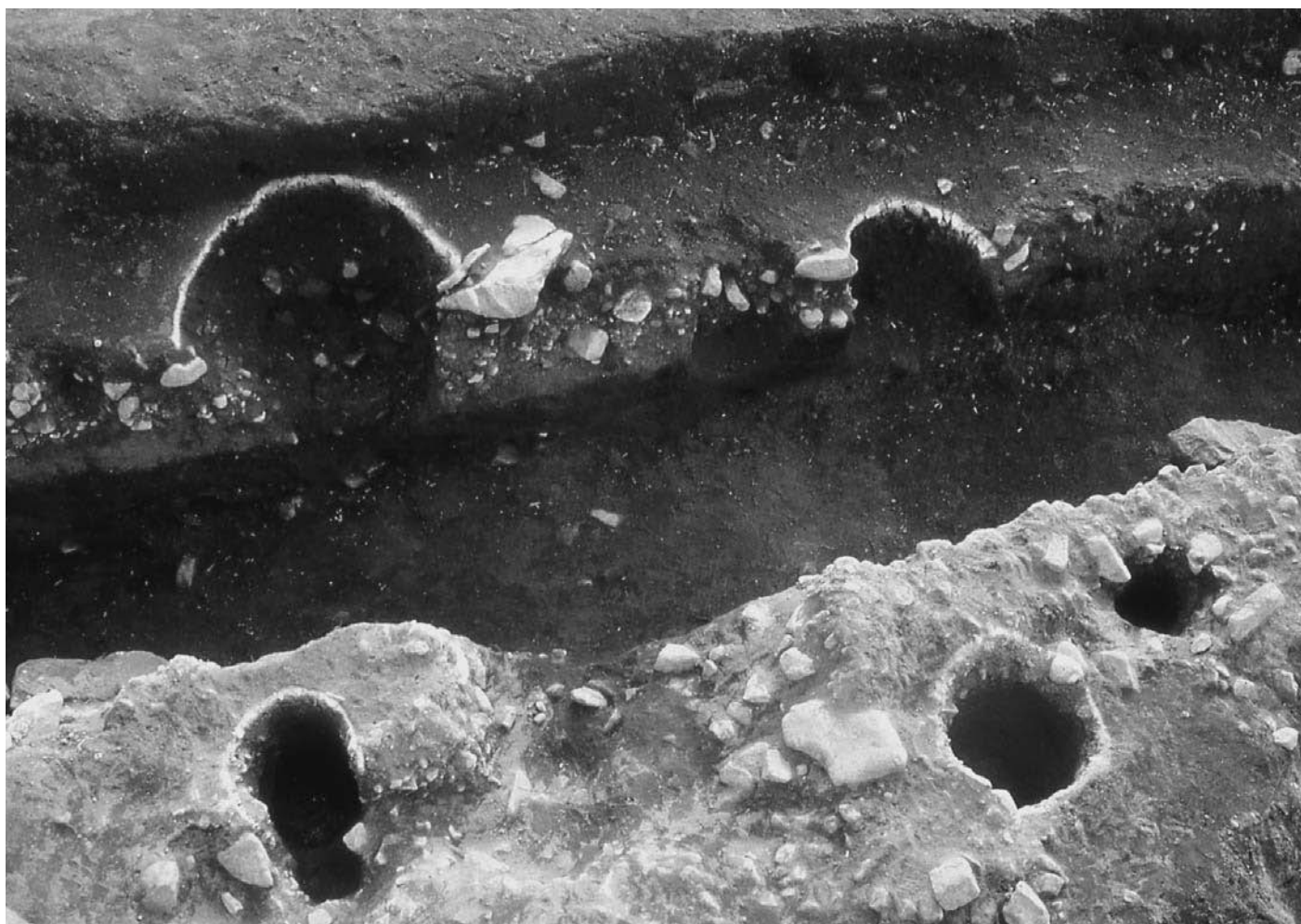


5 18区2号掘立柱建物（南から）





1 18区2号掘立柱建物（南から）



2 18区4号掘立柱建物（北から）





1 18区3号掘立柱建物 確認状況（北から）中央部に埋没谷



2 18区3号掘立柱建物 確認状況（北から）北西部の一部が埋没谷上にある。南側に後期の5号・6号列石が見える。柱穴上面に配石・礫群がのる。





1 18区3号掘立柱建物 確認当初の状況（北から） 埋没谷上の柱穴の上面に配石・礫群がのる。



2 18区3号掘立柱建物 確認状況（北から） 確認当初は8本柱の構造を想定していた。



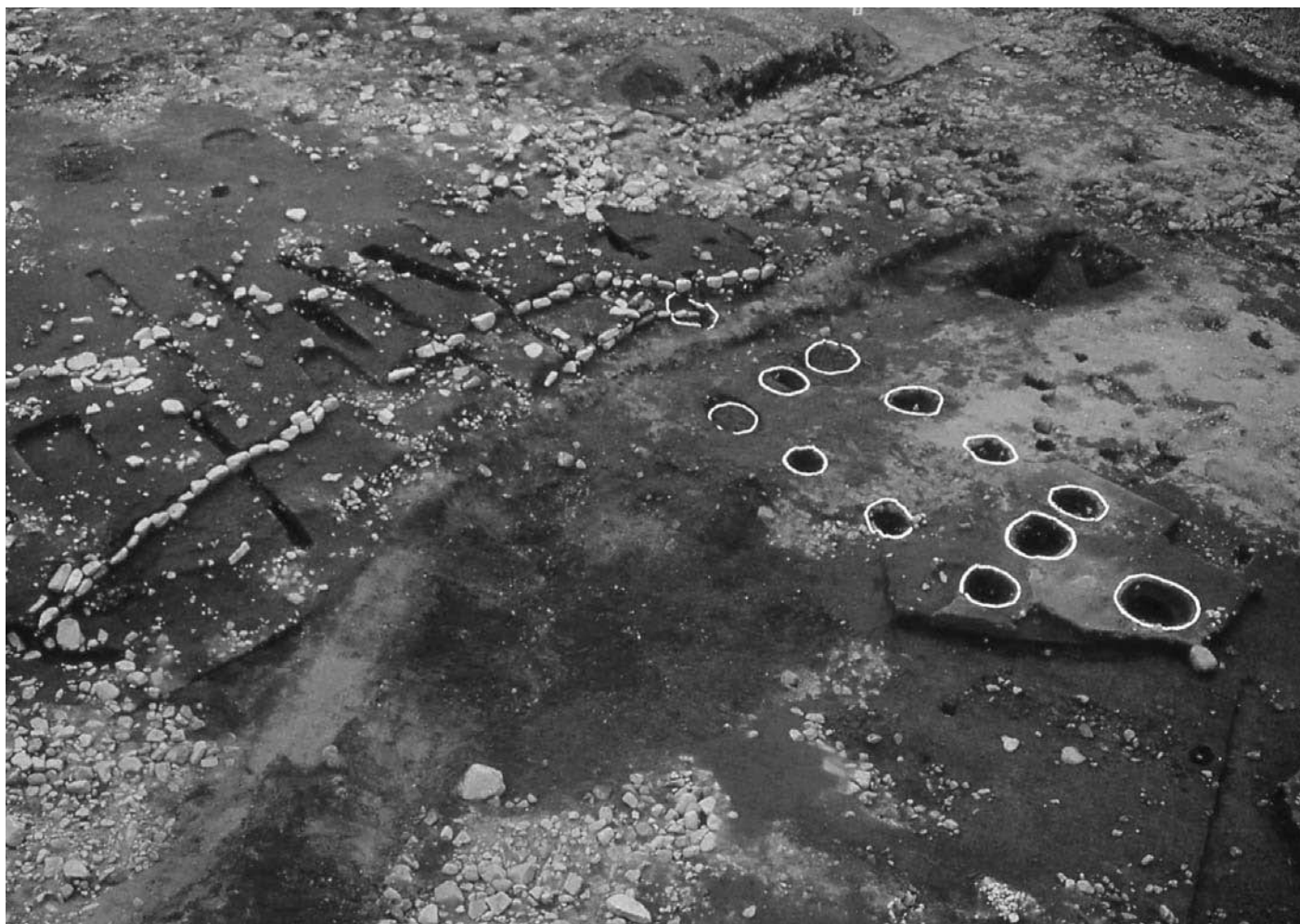


1 18区3号掘立柱建物 完掘状況（東から） 棟持ち柱を持つ12本柱の構造が判明。



2 18区3号掘立柱建物 完掘状況（北東から） 左手の棟持ち柱の上に、後期の6号列石がのる。



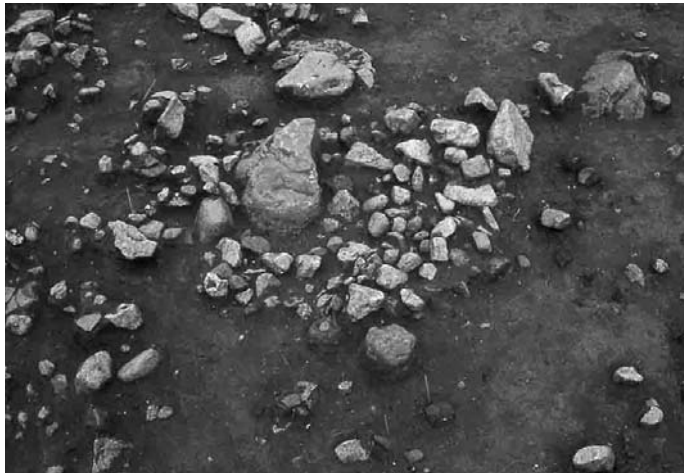


1 18区3号掘立柱建物 遠景（北東から） 南側（左手）に後期の6号列石。



2 18区3号掘立柱建物 遠景（北北東から） 掘立柱建物の南側は、1 mほどの段差がある。





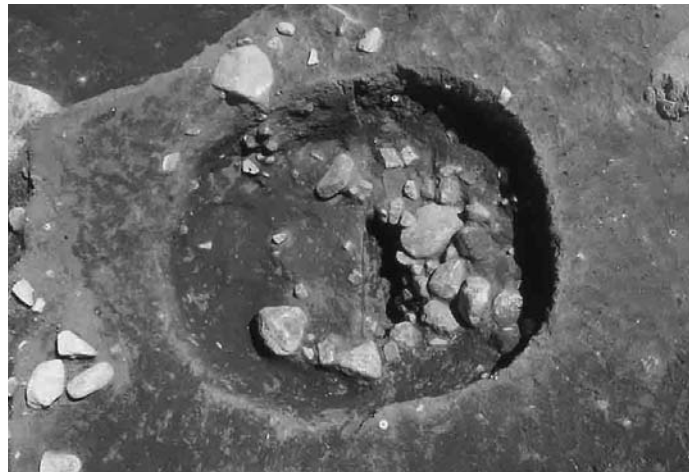
1 18区3号掘立柱建物 柱1 上面の37号配石



2 同1 37号配石下の礫群



3 同1 礫群中央に柱1の柱痕



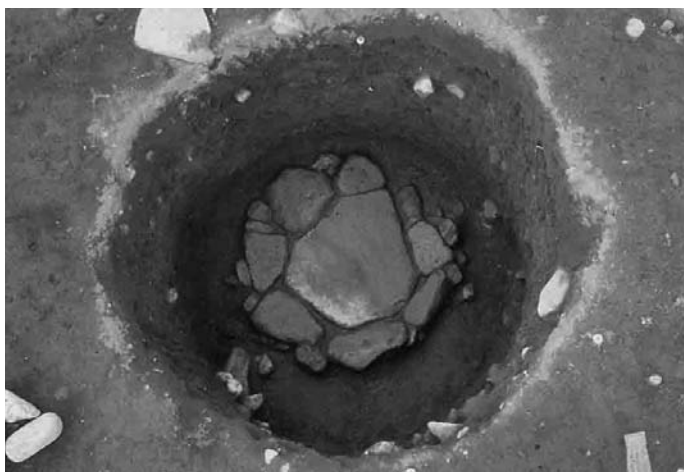
4 同1 柱1 柱痕を取り巻く礫



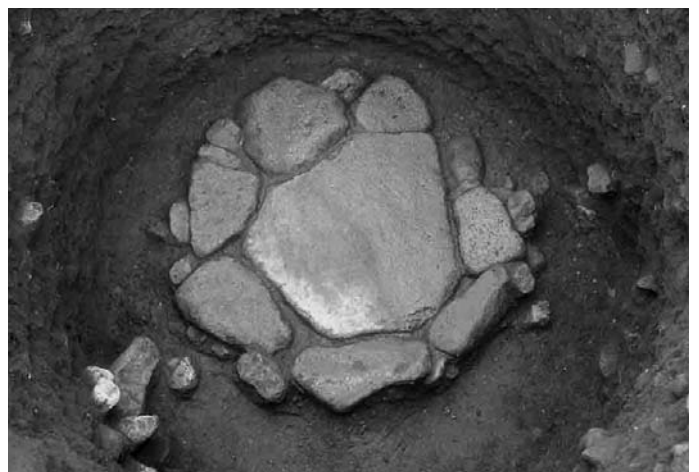
5 同1 柱1 柱痕を取り巻く礫



6 同1 底面で礎石を確認



7 同1 柱1 礎石

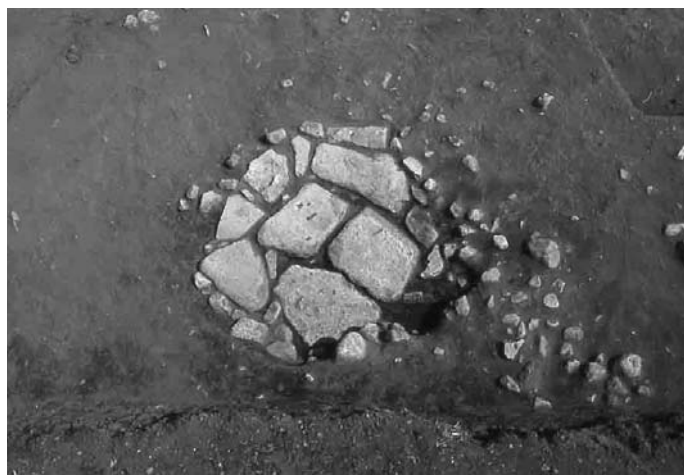


8 同1 柱1 礎石

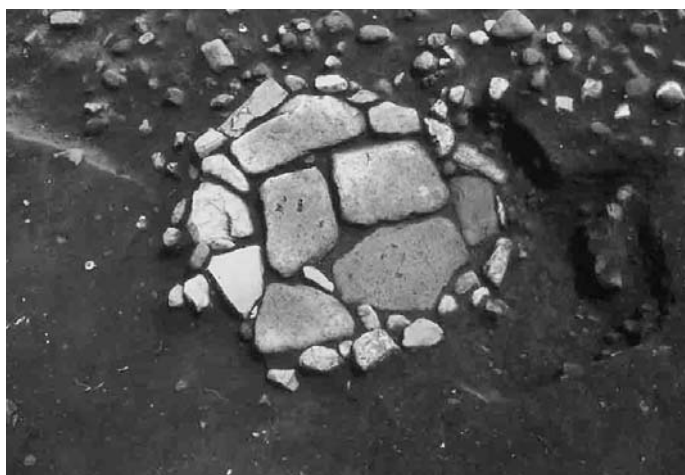




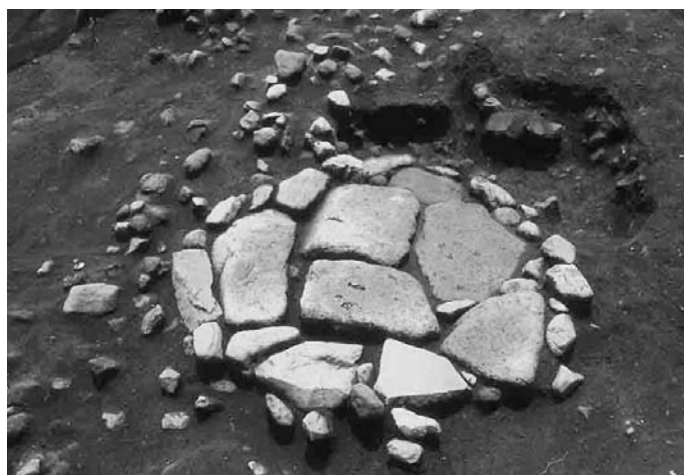
1 18区3号掘立柱建物 柱2 上面の21号配石確認



2 同1 21号配石 周囲の小石



3 同1 21号配石



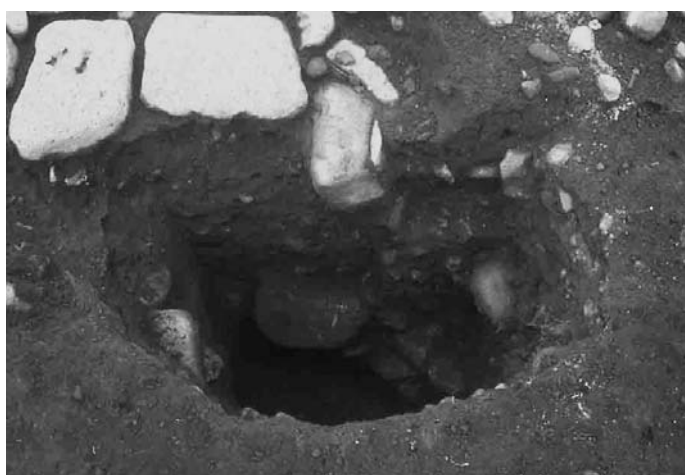
4 同1 21号配石



5 同1 配石下の確認調査



6 同1 柱2 確認状況



7 同1 柱2 確認状況



8 同1 柱2 完掘





1 18区3号掘立柱建物 柱3 上面の22号配石確認



2 同1 22号配石



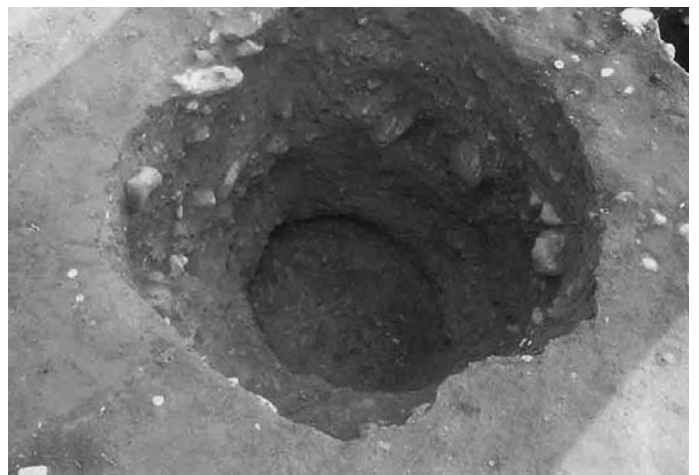
3 同1 配石下で柱3を確認



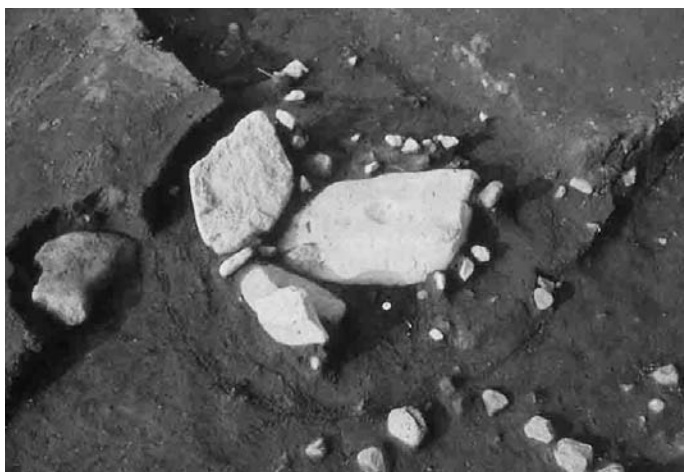
4 同1 柱3 柱痕を取り巻く礫



5 同1 柱3 下部の状況



6 同1 柱3 完掘



7 18区3号掘立柱建物 柱4 上面の38号配石

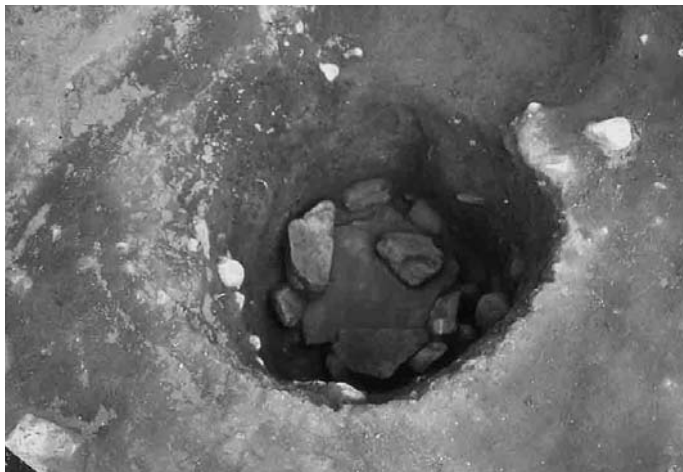


8 同7 柱4 下層に敷かれた礎石





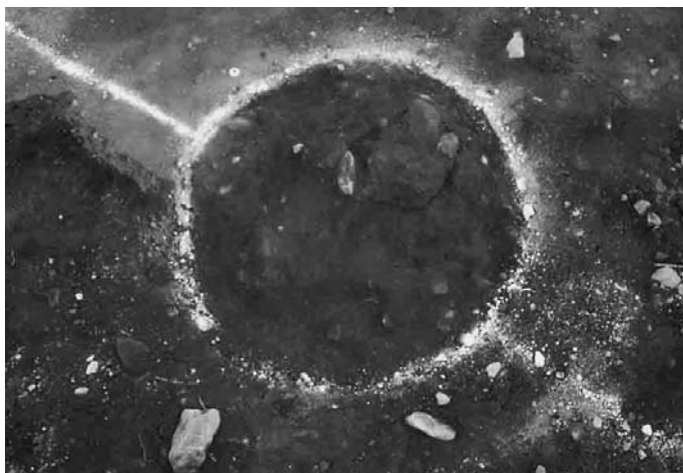
1 18区3号掘立柱建物 柱4 柱痕を取り巻く礫



2 同1 柱4 下層に敷かれた礎石



3 同1 柱4 完掘



4 18区3号掘立柱建物 柱5 確認状況



5 同4 柱5 柱痕確認状況



6 同4 柱5 完掘



7 18区3号掘立柱建物 柱6 確認状況



8 同7 柱6 柱痕確認状況





1 18区3号掘立柱建物 柱6 完掘



2 18区3号掘立柱建物 柱7 遺物出土状況



3 同2 柱7 下層の状況



4 同2 柱7 完掘



5 18区3号掘立柱建物 柱8 柱痕確認状況



6 18区3号掘立柱建物 柱9 上面の中世土坑



7 同6 柱9 上面の中世土坑



8 同6 柱9 確認状況





1 18区3号掘立柱建物 柱10 柱穴確認状況



2 同1 柱10 底面の礎石



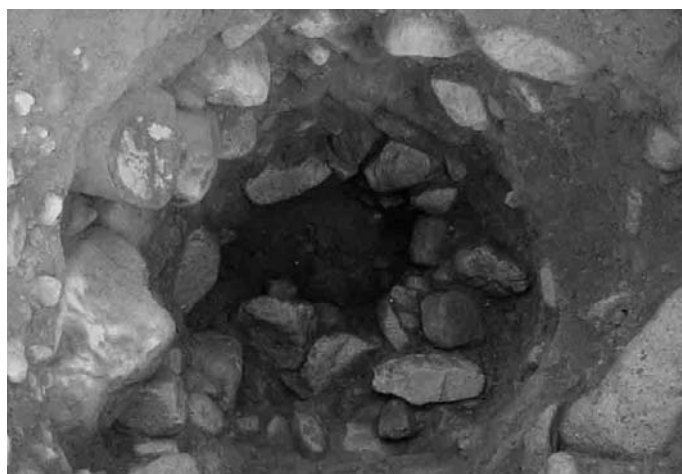
3 同1 柱10 完掘



4 18区3号掘立柱建物 柱11



5 18区3号掘立柱建物 柱12 底面の礫



6 同5 柱12 柱痕を取り巻く礫

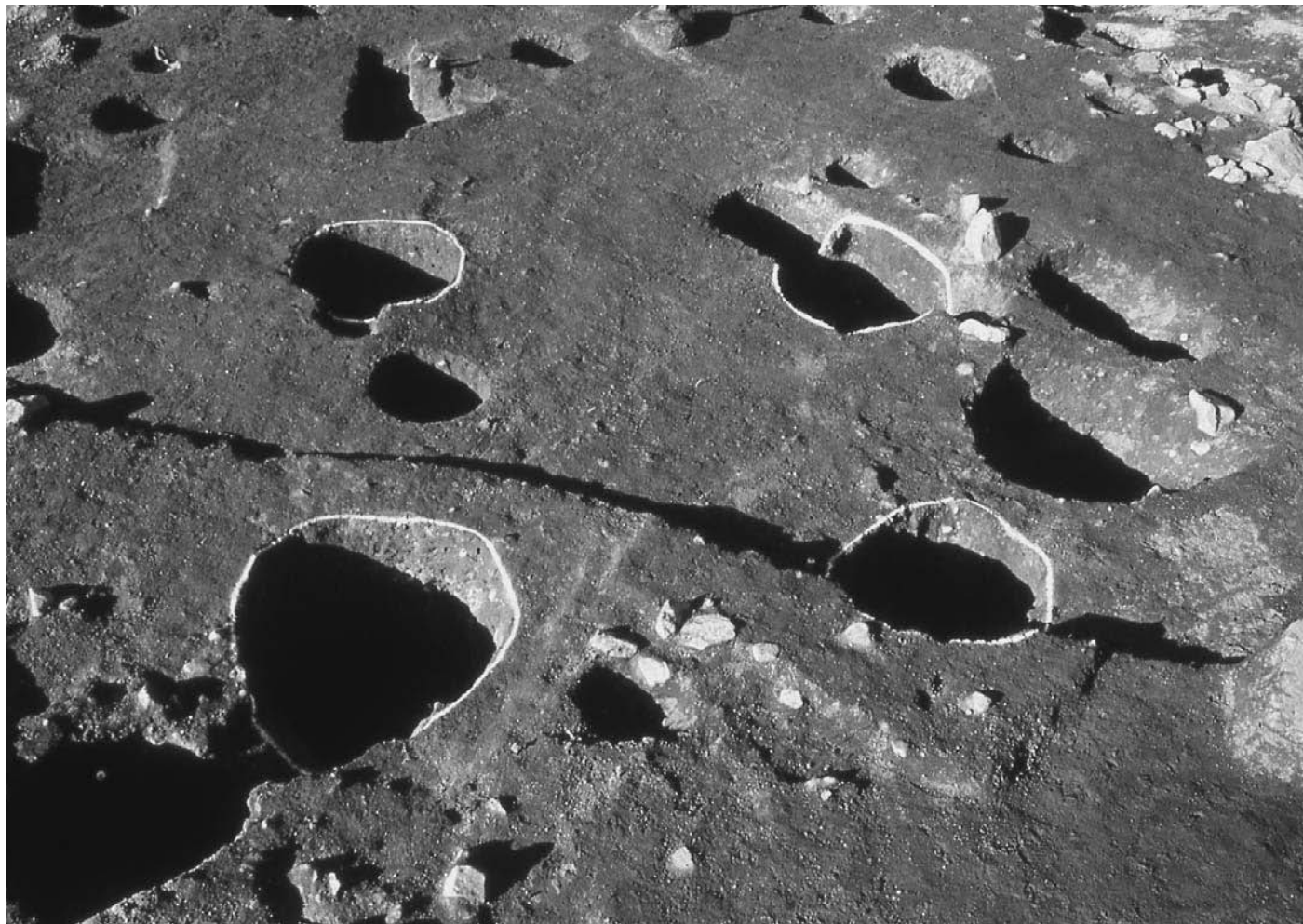


7 同5 柱12 完掘



8 同5 柱12 底面の状況





1 20区1号掘立柱建物 全景（南東から）

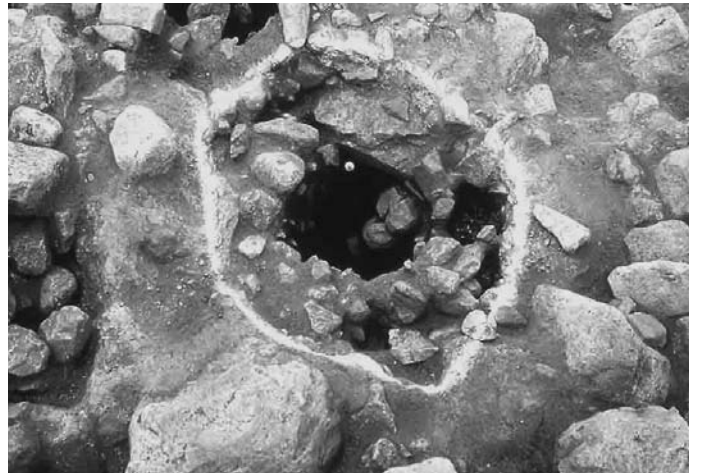


2 20区2号掘立柱建物 全景（西から）

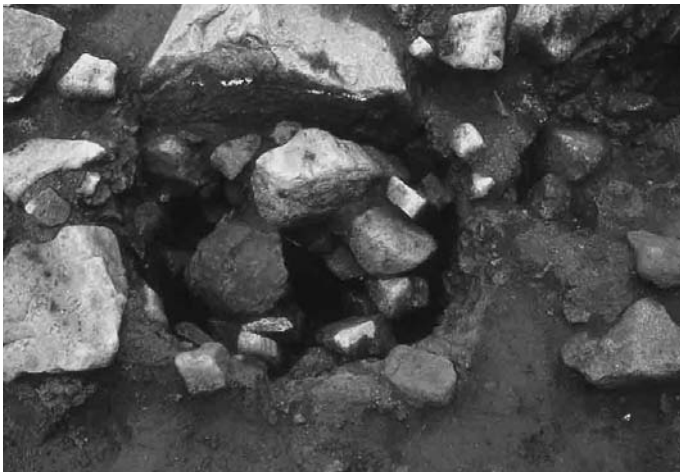




1 20区2号掘立柱建物 柱1



2 同1 柱1



3 同1 柱2



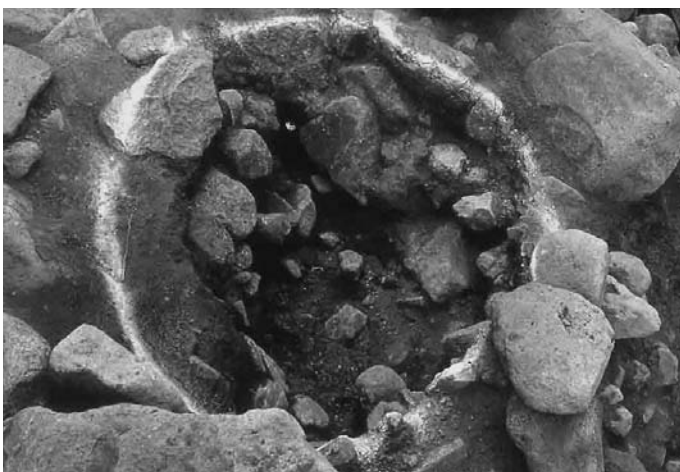
4 同1 柱3



5 同1 柱4



6 同1 柱5



7 同1 柱6



8 同1 柱7





1 20区5号掘立柱建物 全景（北から）



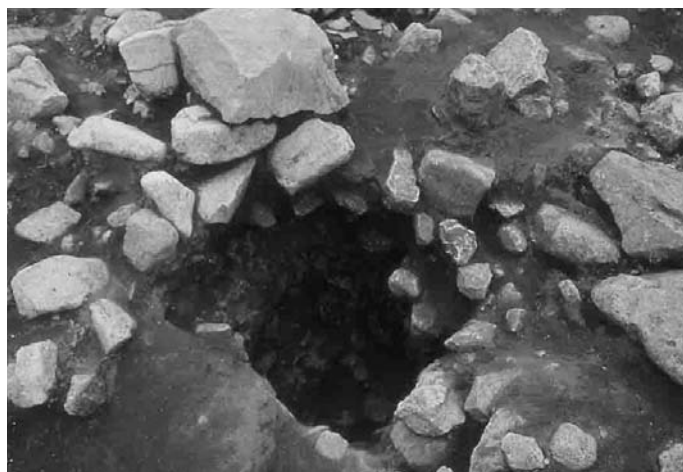
2 同1 柱2 完掘



3 同1 柱2 柱痕調査



4 同1 柱1 柱痕調査



5 同1 柱1 完掘





1 20区5号掘立柱建物 柱1 掘り方



2 同1 柱3 柱痕調査



3 同1 柱3 柱痕調査



4 同1 柱3 掘り方



5 20区6号掘立柱建物 全景（北から）





1 20区6号掘立柱建物 柱1



2 同1 柱1 掘り方



3 同1 柱2



4 同1 柱2 掘り方



5 同1 柱3 柱痕調査



6 同1 柱3



7 同1 柱4 柱痕調査

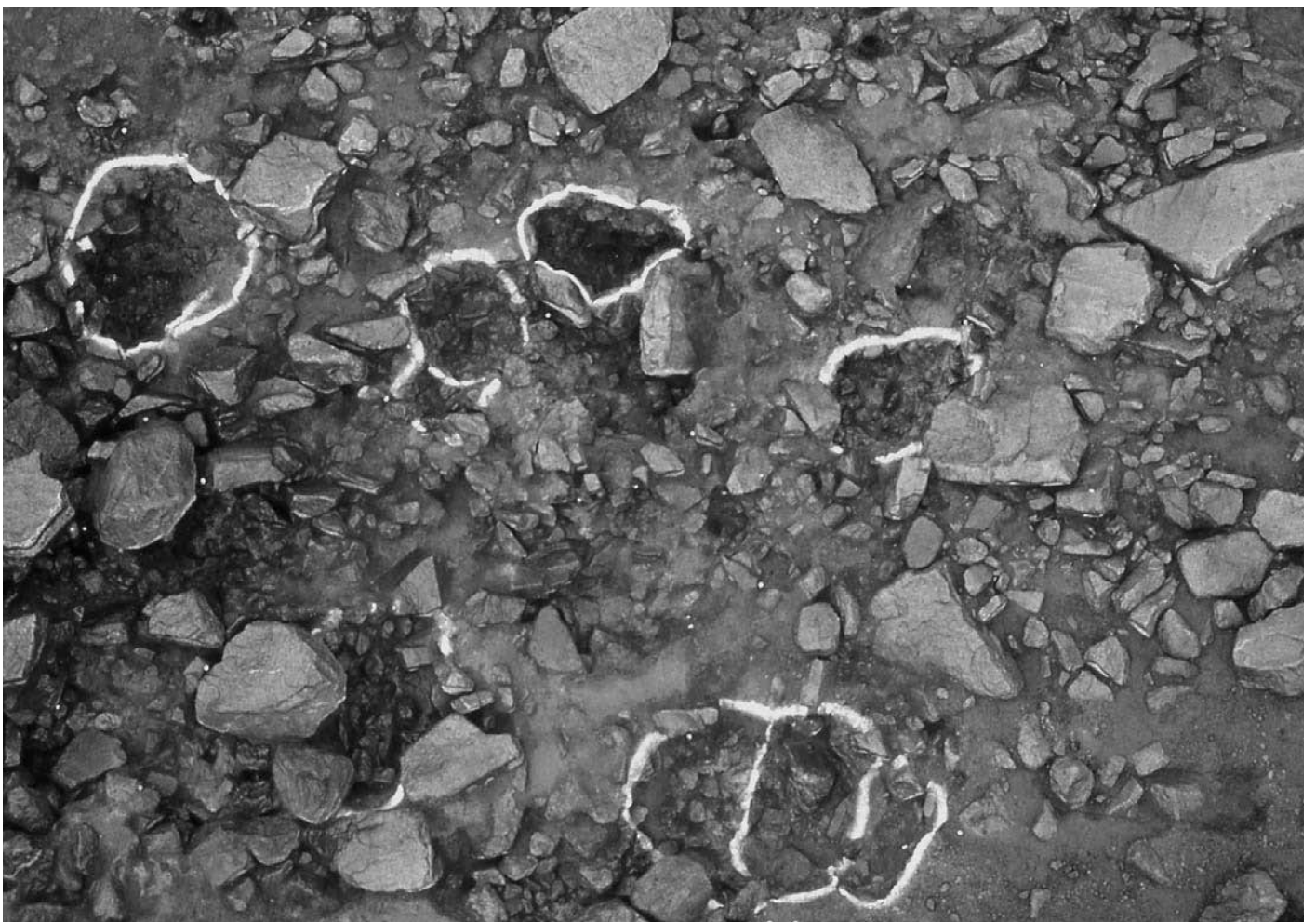


8 同1 柱4





1 20区7号掘立柱建物 全景（西から）



2 20区8号掘立柱建物 全景（北から）





1 20区8号掘立柱建物 柱1



2 同1 柱2



3 同1 柱3



4 同1 柱4



5 29区1号掘立柱建物 全景(南から)



6 同5 柱1



7 同5 柱2

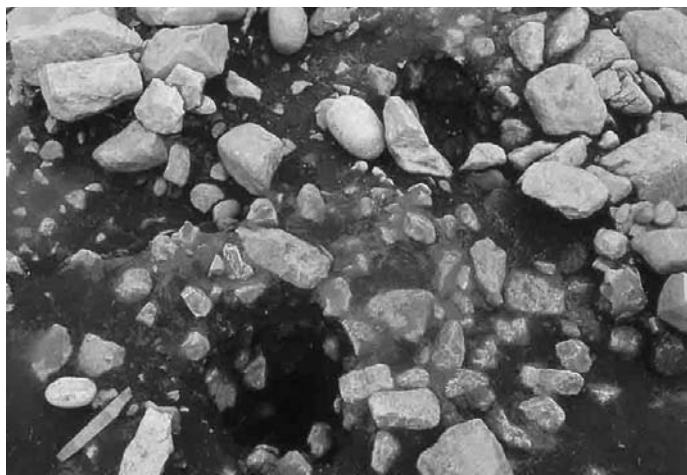


8 同5 柱3





1 19区1号環状柱穴列 全景（東から）



2 同1 柱3と柱4



3 同1 柱2 手前に炭化材



4 同1 柱2 炭化材



5 同1 柱2 炭化材

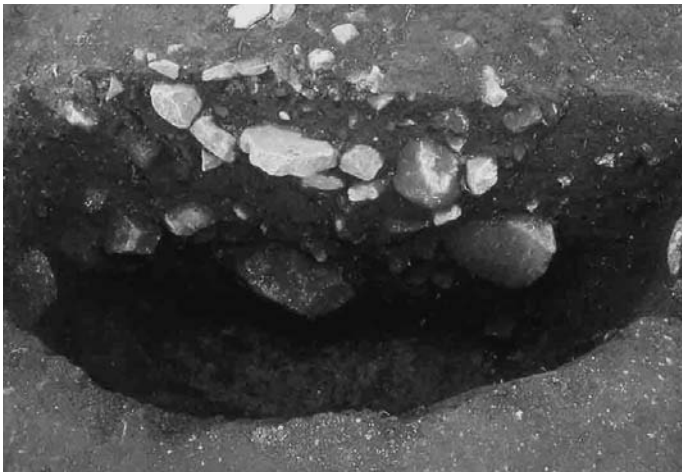




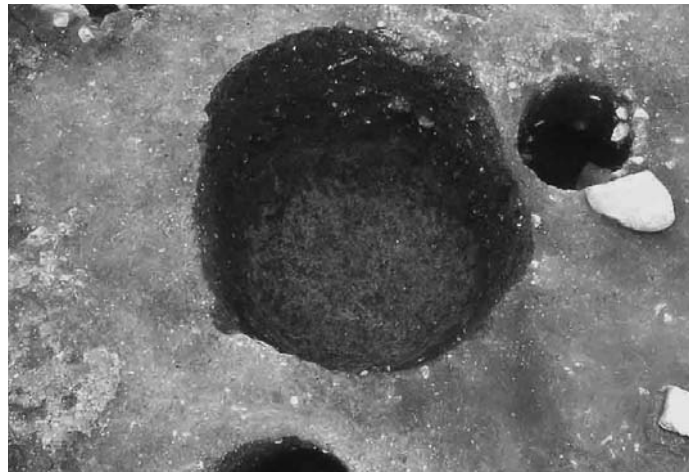
1 19区2号掘立柱建物 柱1



2 同1 柱1



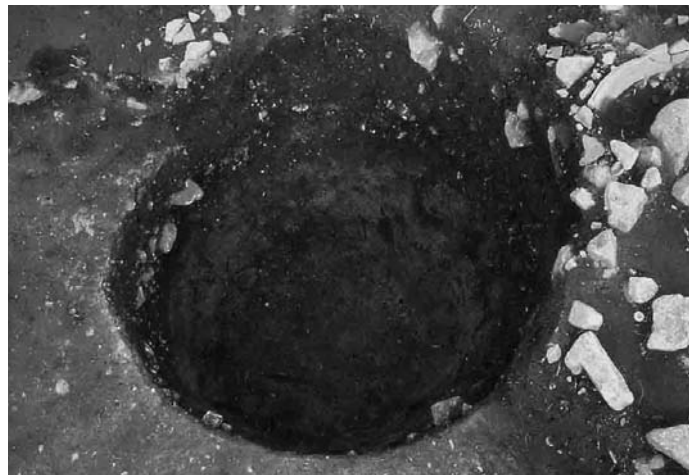
3 同1 柱2



4 同1 柱2



5 同1 柱3



6 同1 柱3



7 同1 柱4 上面の礫

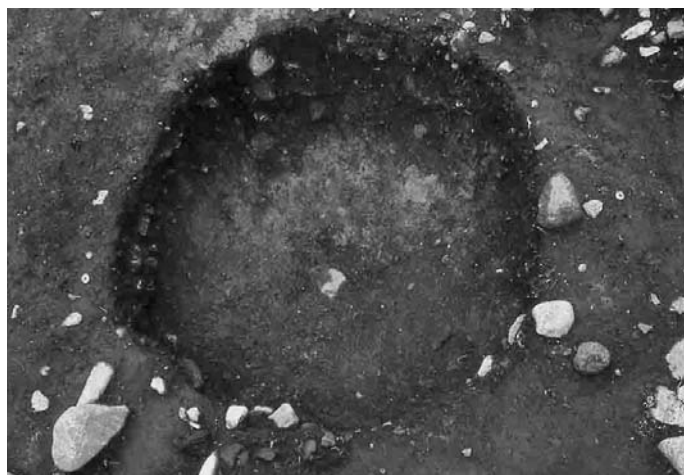


8 同1 柱4 埋没土上層の礫と遺物





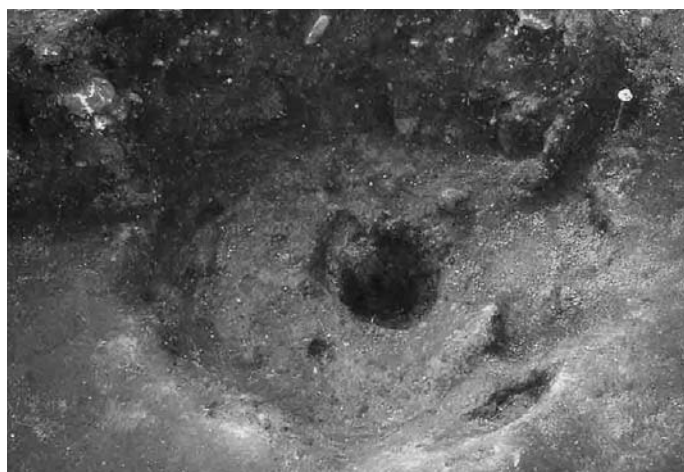
1 19区2号掘立柱建物 柱4 埋没土上層の礫



2 同1 柱4 完掘



3 同1 柱5



4 同1 柱5 完掘



5 同1 柱6



6 同1 柱6 下層の礫と遺物



7 同1 柱7 16号住居床面で確認

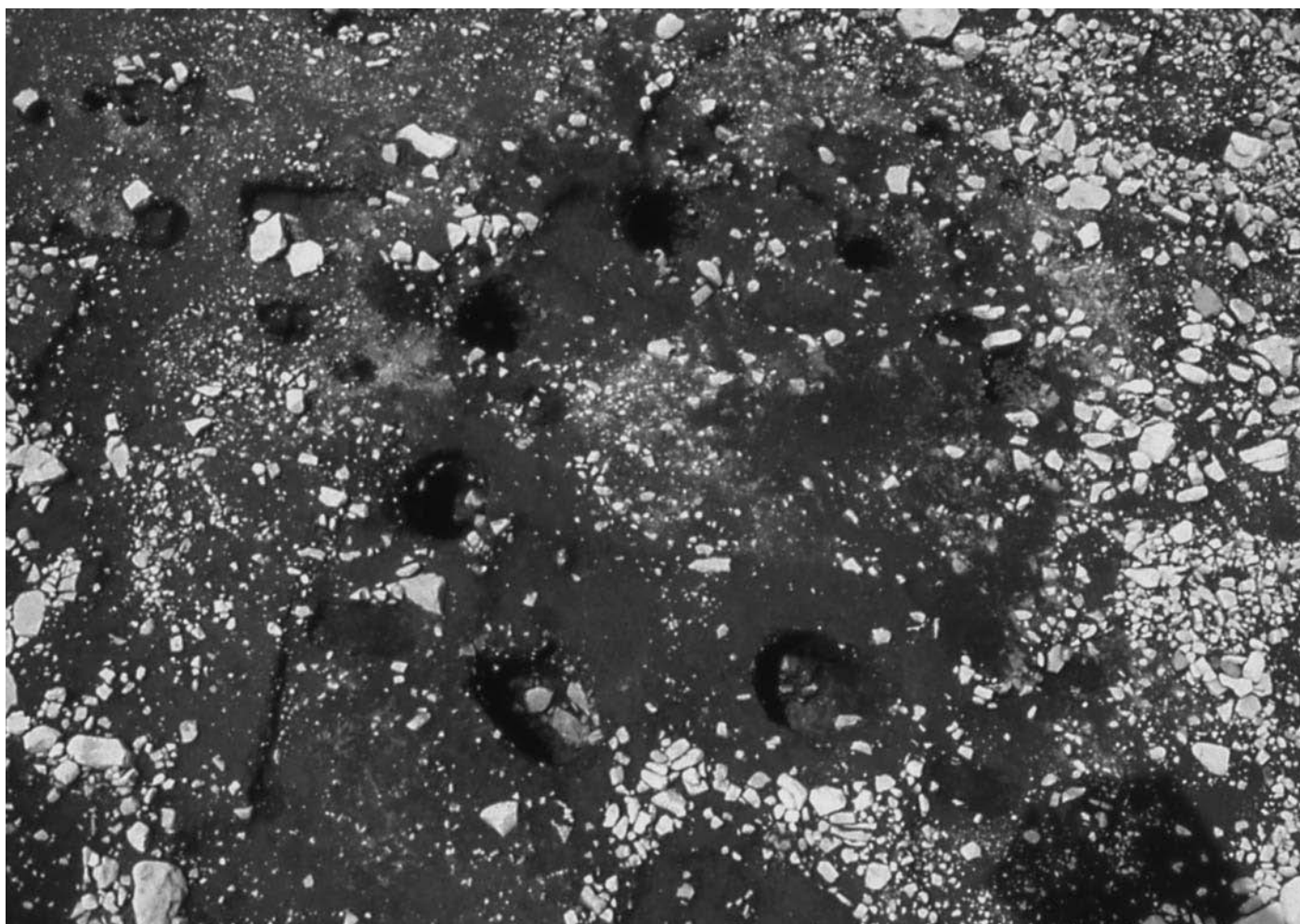


8 同1 柱7 完掘





1 30区1号環状柱穴列 全景（北北東から）



2 30区1号環状柱穴列 全景（東から）

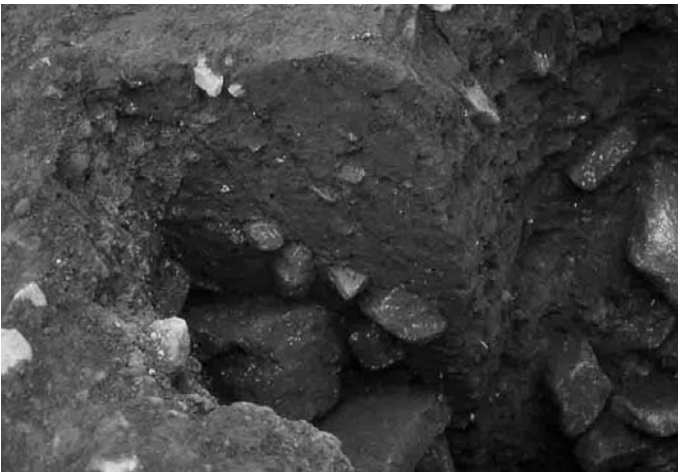




1 30区1号環状柱穴列 柱1 柱痕調査



2 同1 柱1 完掘



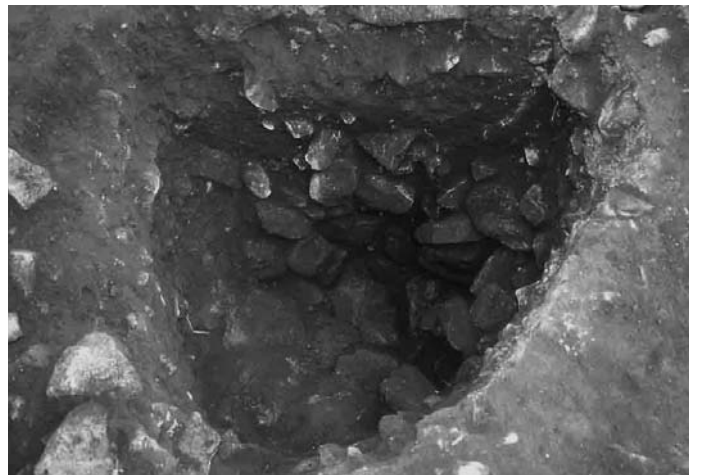
3 同1 柱8 確認状況



4 同1 柱8と柱1



5 同1 柱2 柱痕調査



6 同1 柱2 下層の礫



7 同1 柱2 完掘



8 同1 柱3 上面の礫





1 30区1号環状柱穴列 柱5 上面の礫



2 同1 柱5 柱痕調査



3 同1 柱5 完掘



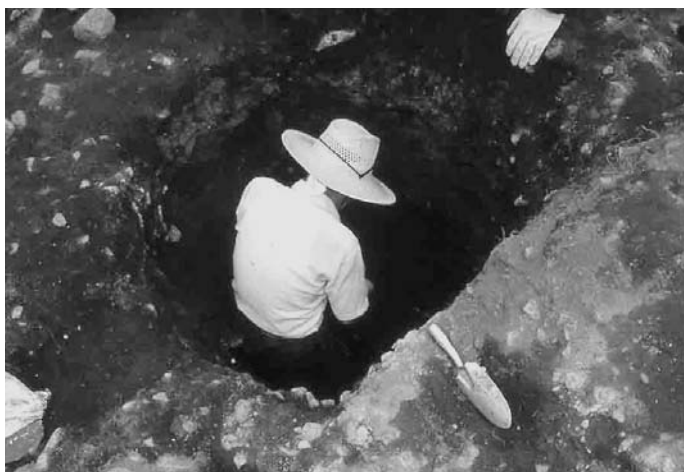
4 同1 柱6 柱痕調査



5 同1 柱6 完掘

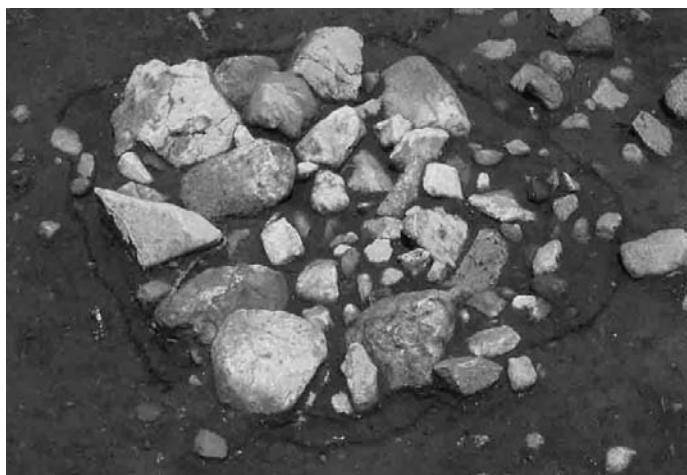


6 同1 柱7



7 同1 柱穴の調査状況





1 18区1号集石 (南東から)



2 20区1号集石 (南から)



3 20区1号集石 (東から)



4 20区1号集石 (南から)



5 20区1号集石 (東から)



6 20区2号集石 (東から)

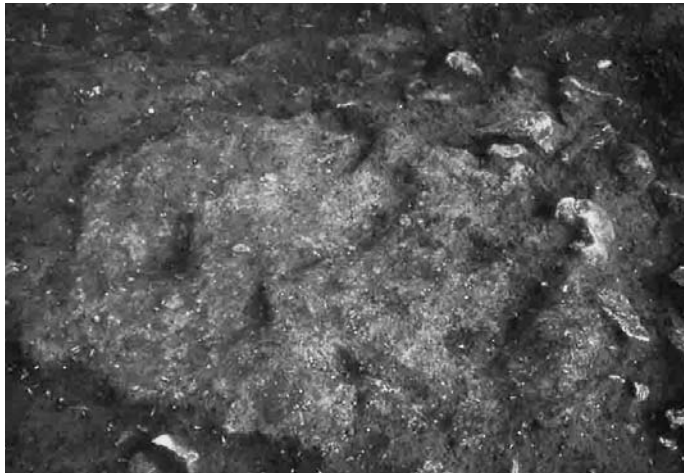


7 20区4号集石 (北から)



8 20区4号集石 掘り方確認





1 18区1号焼土 (北から)



2 18区2号焼土 断面調査



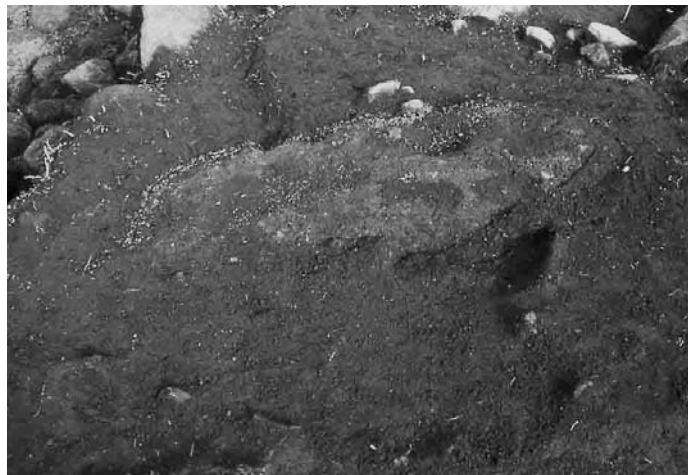
3 18区2号焼土 断面調査



4 18区2号焼土 掘り方



5 18区3号焼土 確認状況



6 18区3号焼土 断面調査



7 18区4号焼土 断面調査



8 18区9号焼土 確認状況





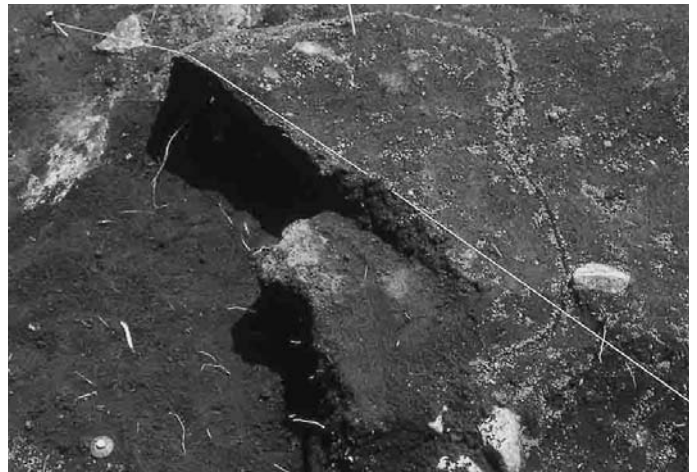
1 18区9号焼土 断面調査



2 18区9号焼土 完掘



3 18区10号焼土 確認状況



4 18区11号焼土



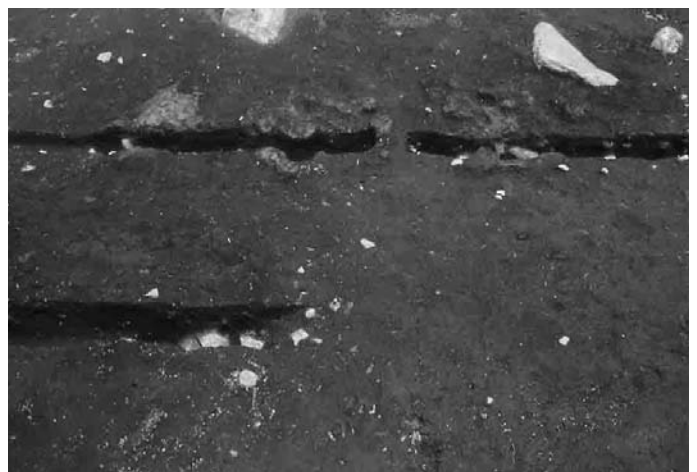
5 18区12号焼土



6 18区13号焼土 確認状況



7 同6



8 同6 断面調査

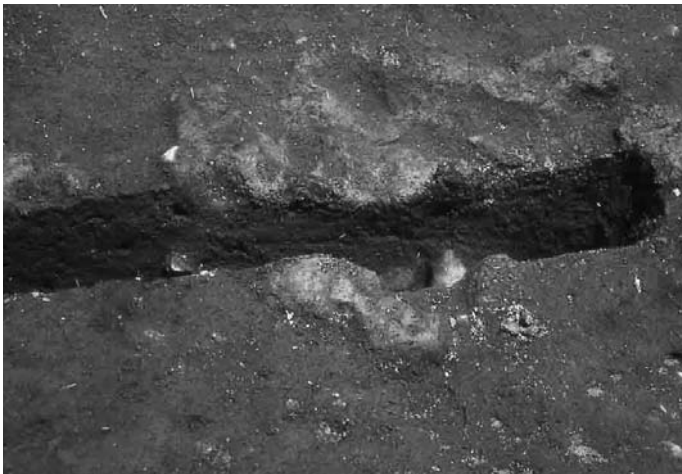




1 18区13号焼土 断面調査



2 同1



3 同1



4 同1



5 18区14号焼土 確認状況



6 同5



7 18区15号焼土 確認状況



8 同7 断面調査





1 18区16号焼土 確認状況（北から）



2 同1 焼土A



3 同1 焼土A 断面調査



4 同1 焼土B



5 同1 焼土B 断面調査



6 同1 焼土C



7 同1 焼土C 確認状況

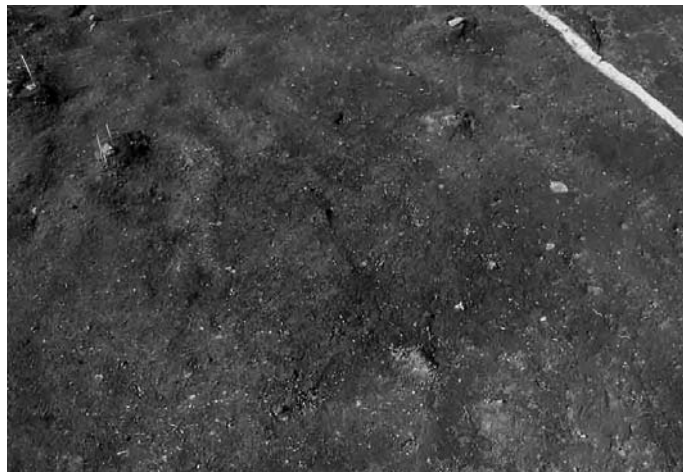


8 同1 調査状況





1 18区17号焼土 確認状況



2 19区1号焼土



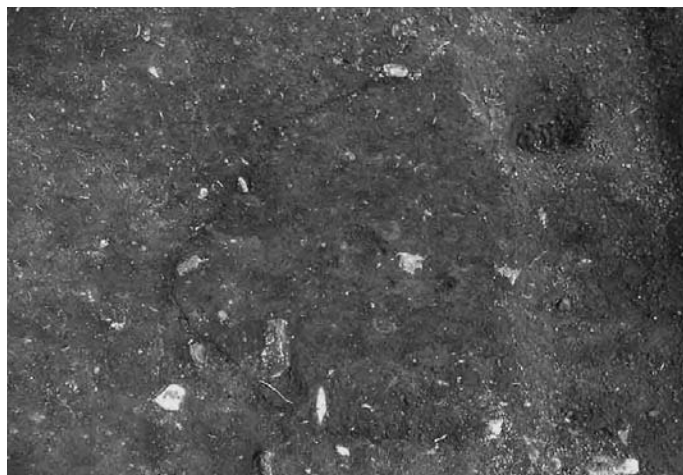
3 19区2号焼土



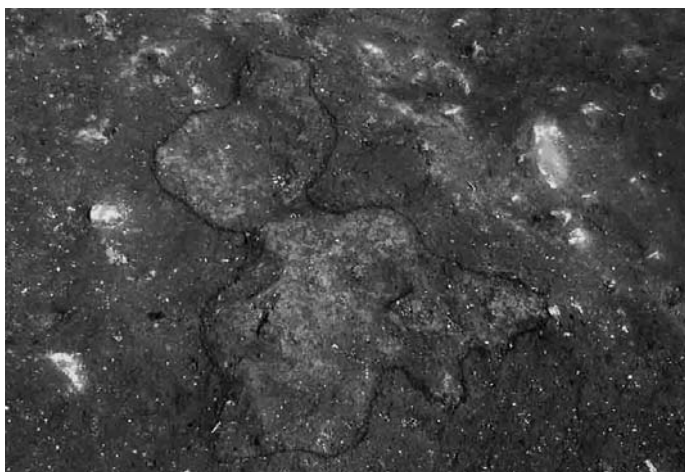
4 19区3号焼土



5 19区4号焼土



6 19区6号焼土



7 19区7号焼土

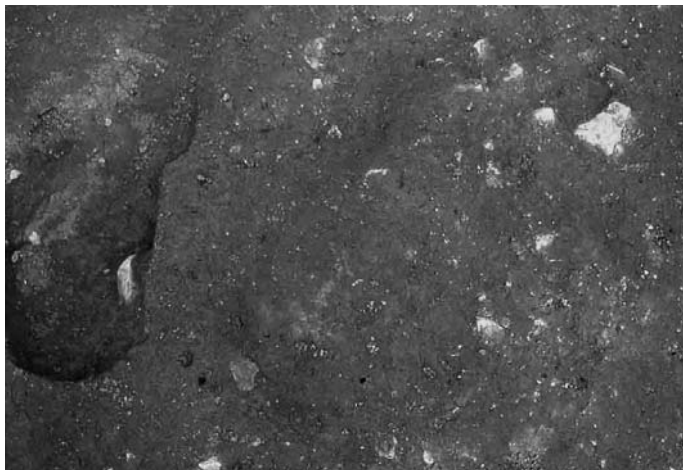


8 19区8号焼土

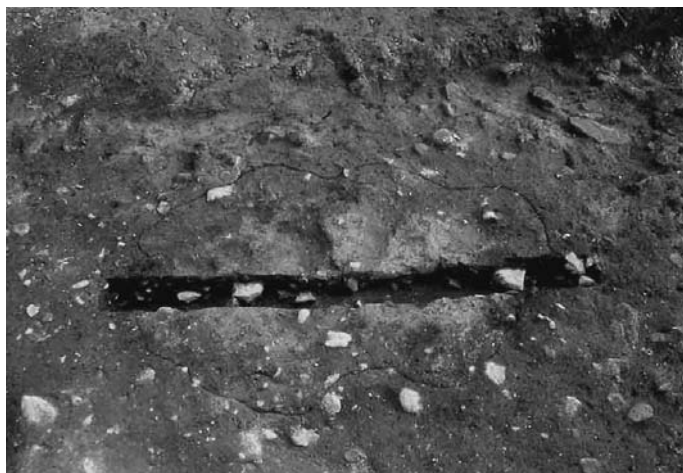




1 19区9号焼土



2 19区10号焼土



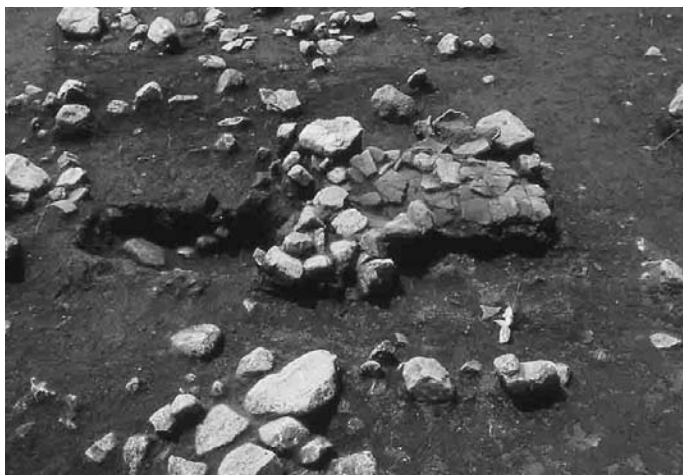
3 19区11号焼土



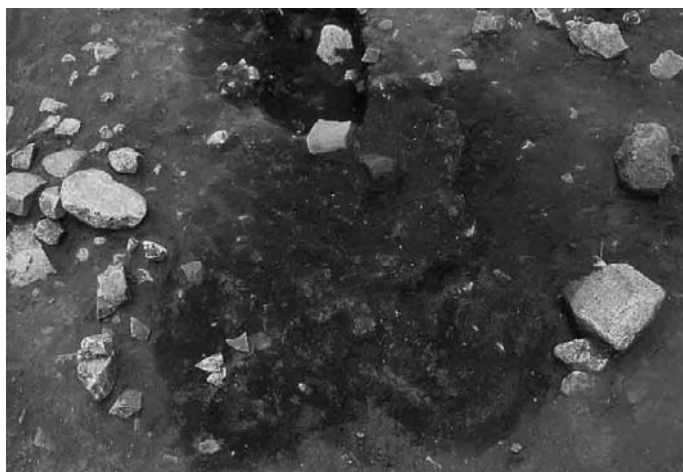
4 20区9号焼土 確認状況



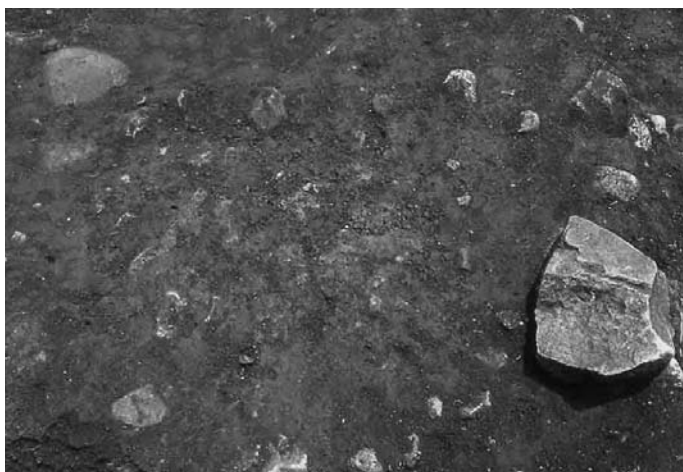
5 同4 遺物出土状況



6 同4 遺物出土状況



7 同4 焼土の確認



8 20区10号焼土





1 20区11号烧土



2 20区12号烧土



3 20区13号烧土 確認状況



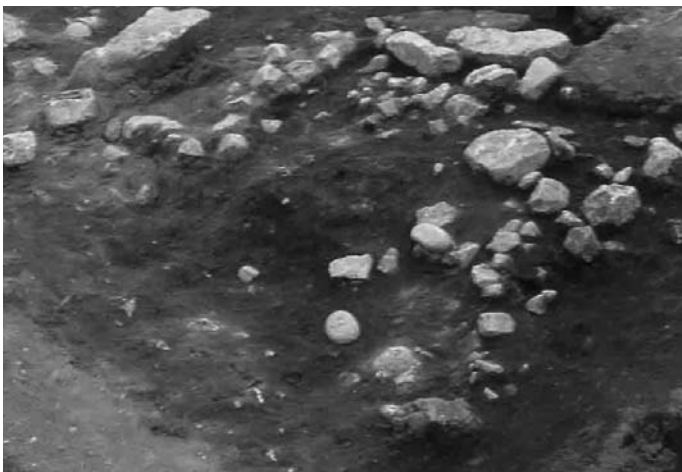
4 同3



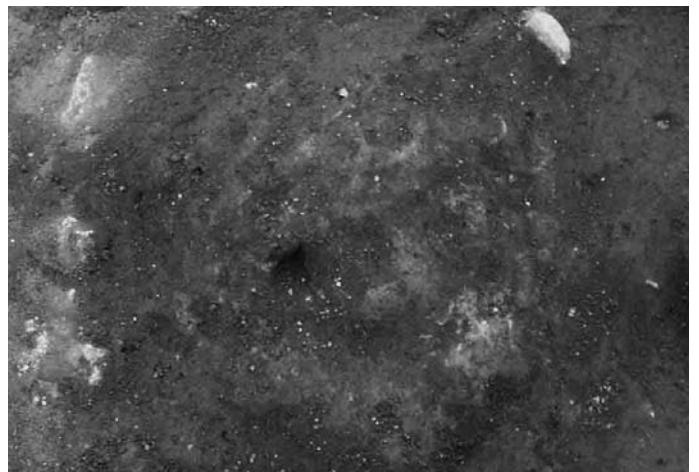
5 同3 断面調査



6 同3 断面調査



7 20区14号烧土



8 同7





1 20区14号焼土



2 20区15号焼土



3 20区16号焼土 確認状況



4 20区17号焼土



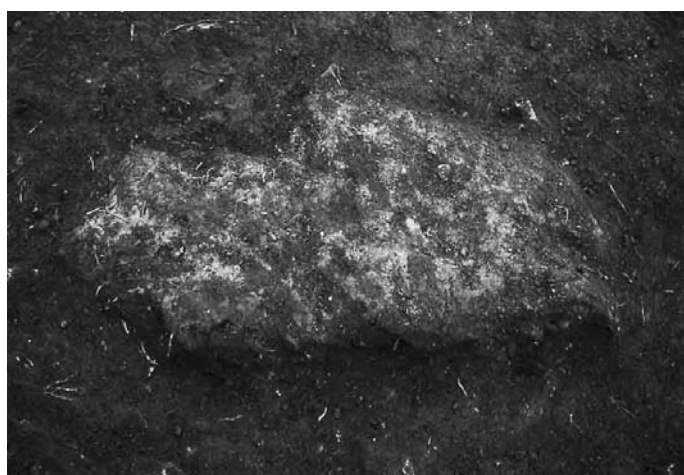
5 20区18号焼土 確認状況



6 同5 焼土下の礫



7 同5 焼土下の礫



8 20区19号焼土





1 20区20号烧土



2 20区21号烧土



3 20区22号烧土



4 20区23号烧土



5 20区24号烧土



6 20区25号烧土



7 20区26号烧土



8 20区27号烧土





1 20区29号焼土 確認状況



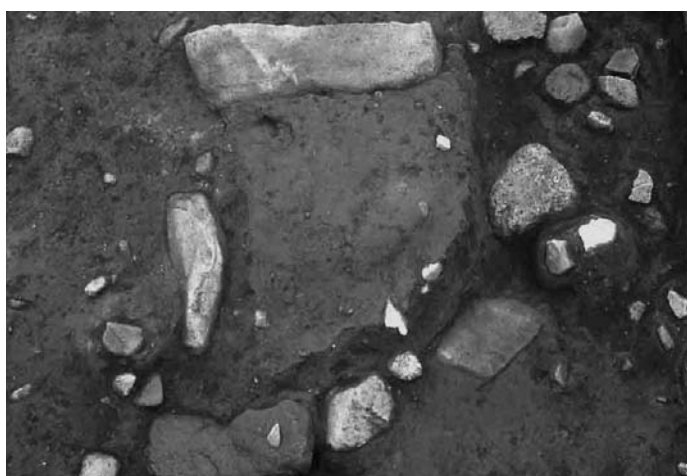
2 同1 断面調査



3 同1 遺物出土状況



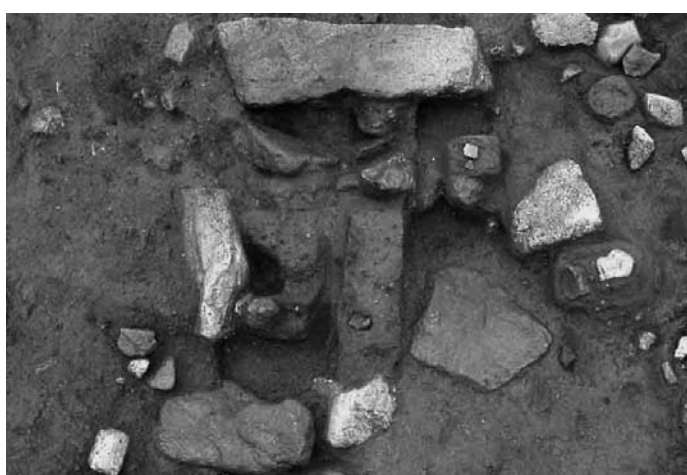
4 20区30号焼土



5 20区31号焼土



6 同5

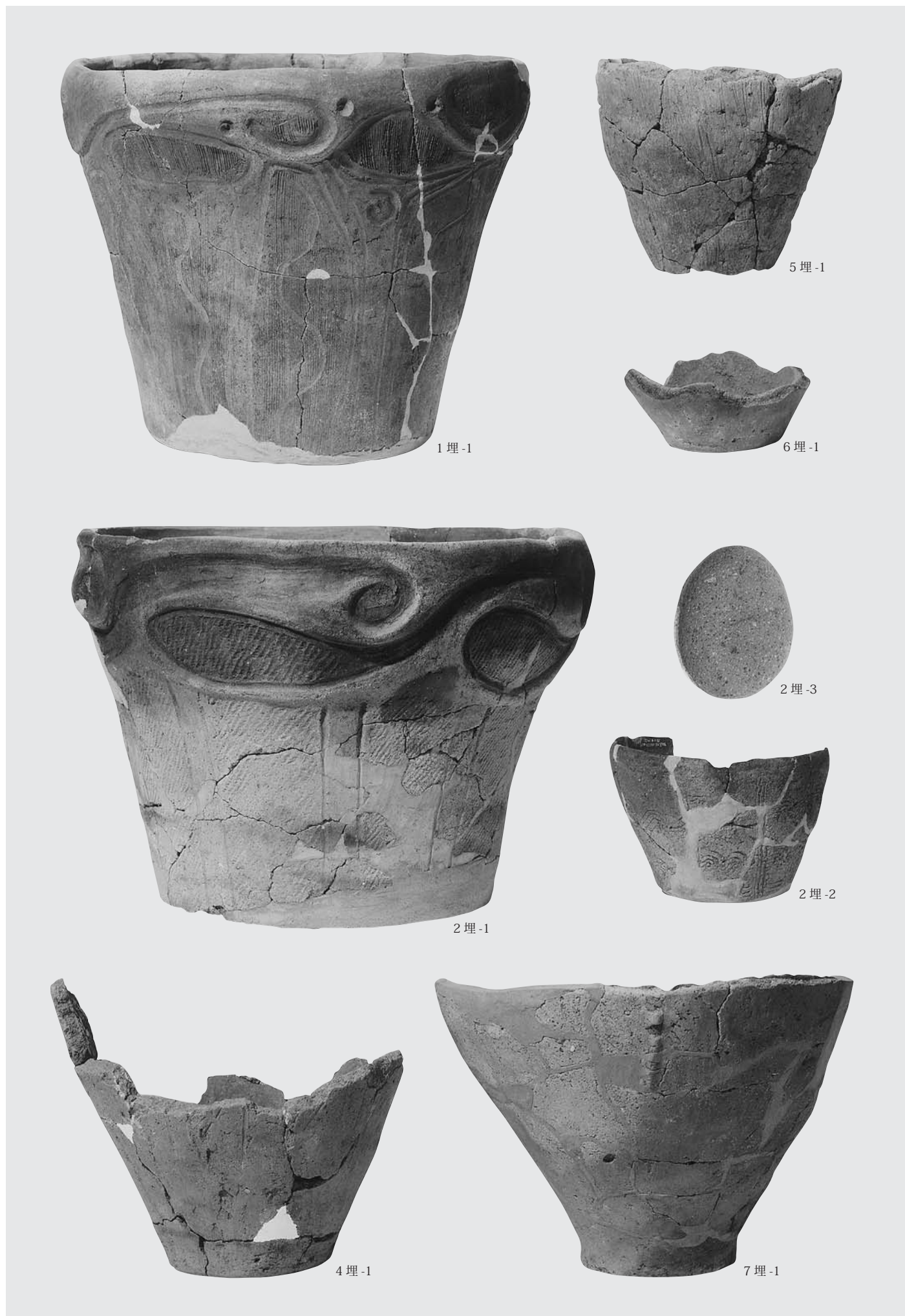


7 同5

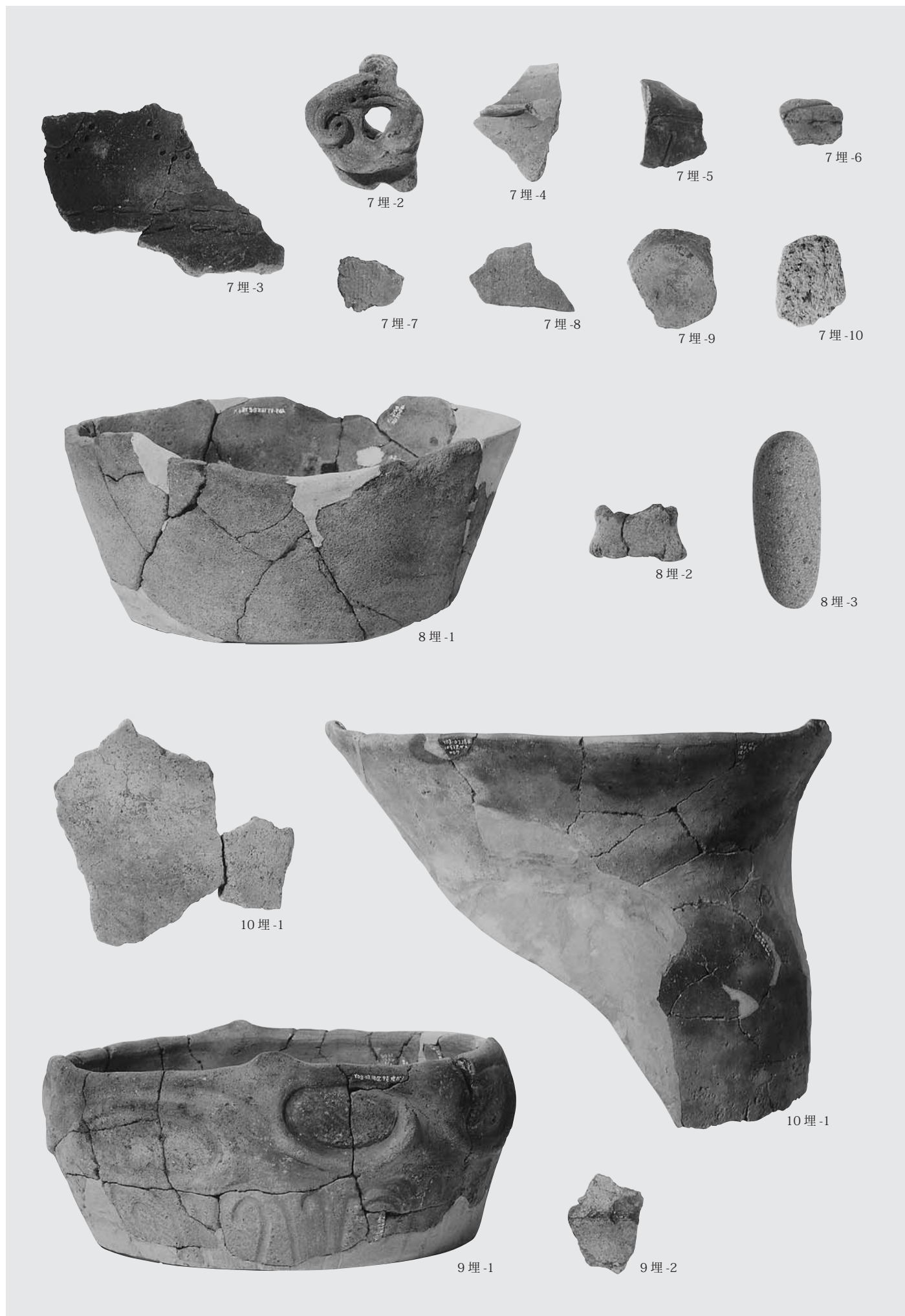


8 20区32号焼土



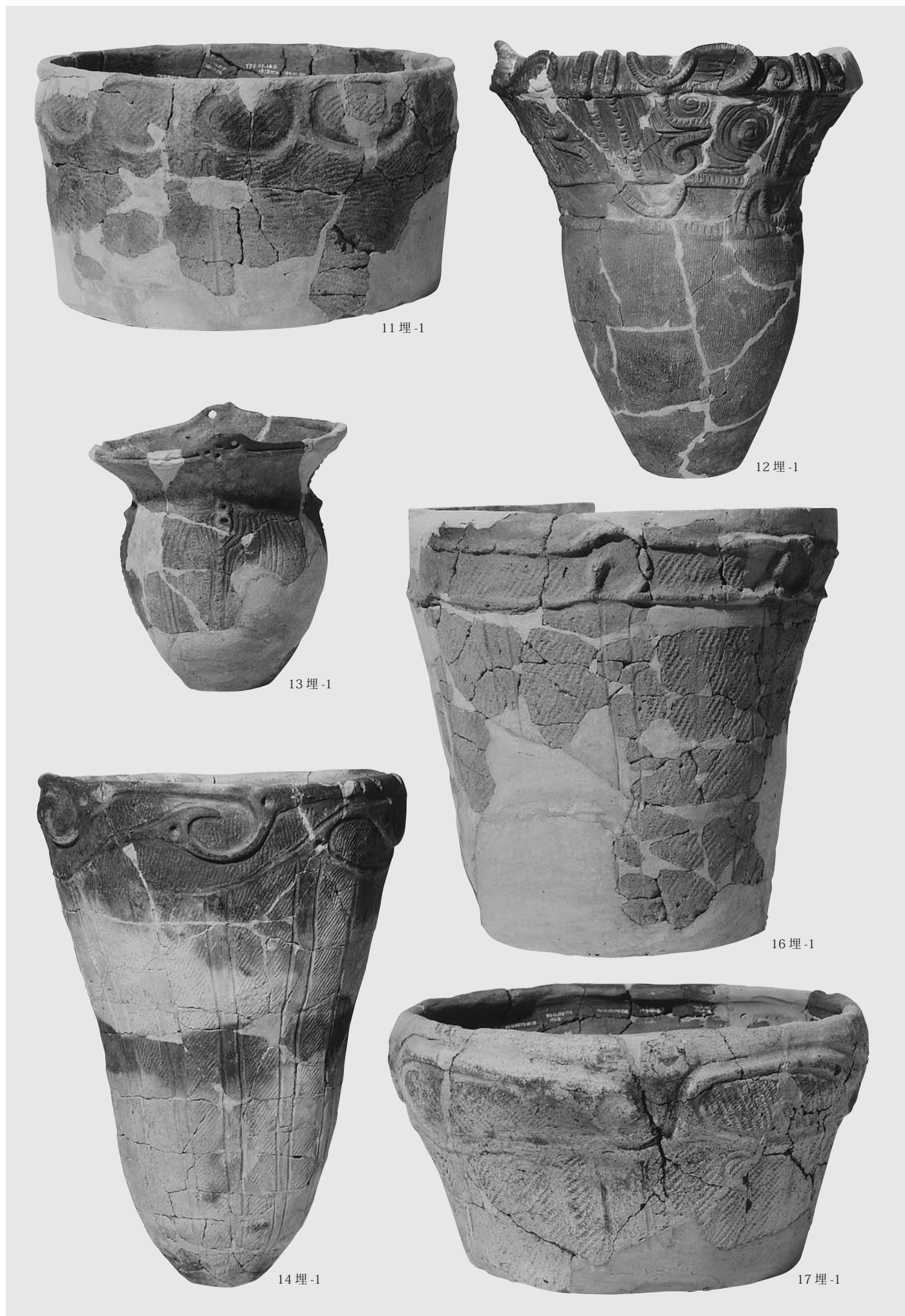


18区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・4・5・6・7号)



18区土器埋設遺構出土遺物（7・8・9・10号）





18区土器埋設遺構出土遺物 (11・12・13・14・16・17号)



19埋-1



22埋-1



23埋-1



23埋-2



22埋-2



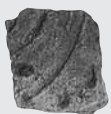
25埋-1



25埋-2



24埋-1



25埋-3



25埋-4



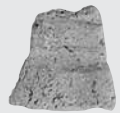
25埋-5



25埋-6



25埋-7



25埋-8



25埋-9



24埋-2



25埋-10

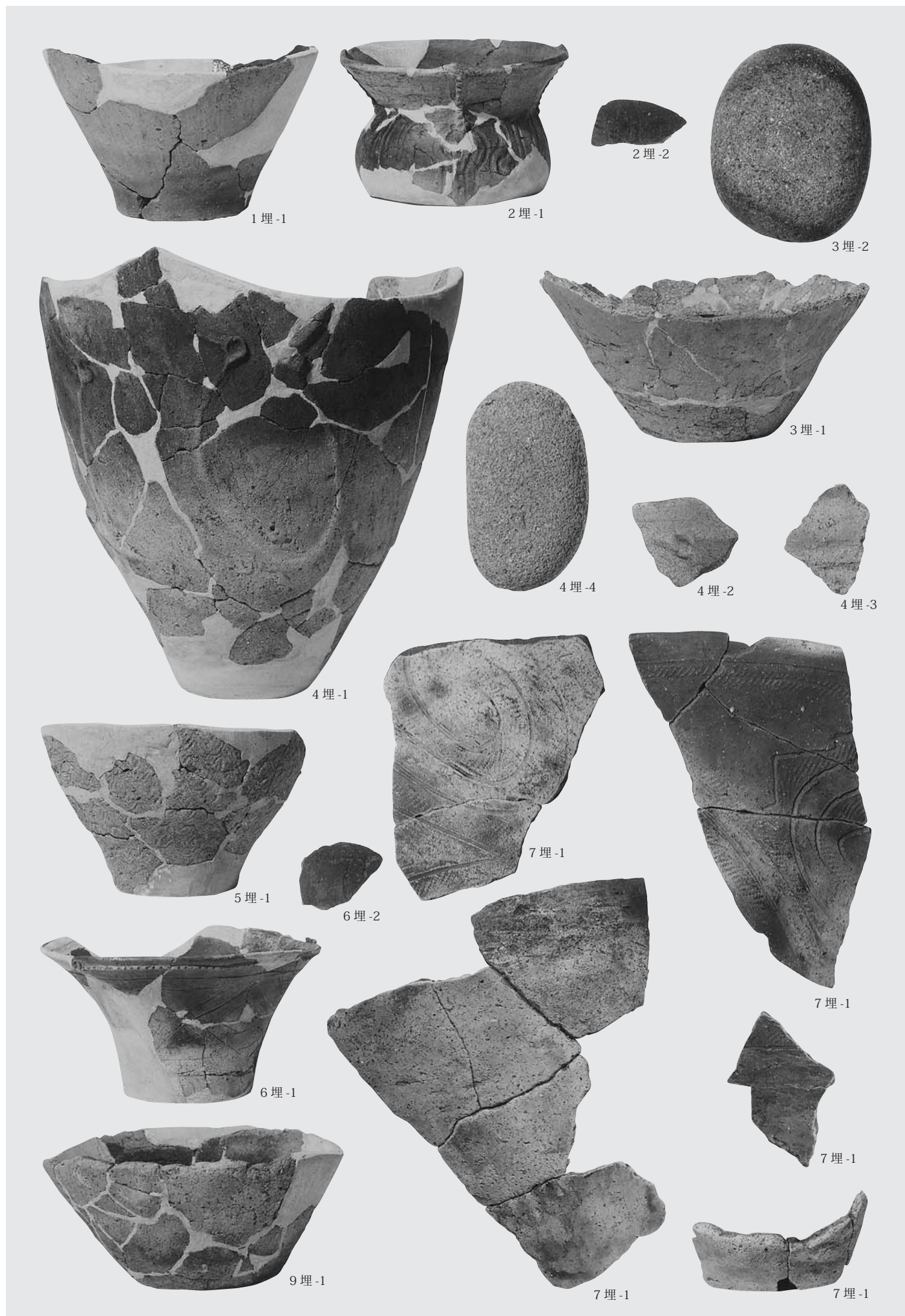


25埋-11

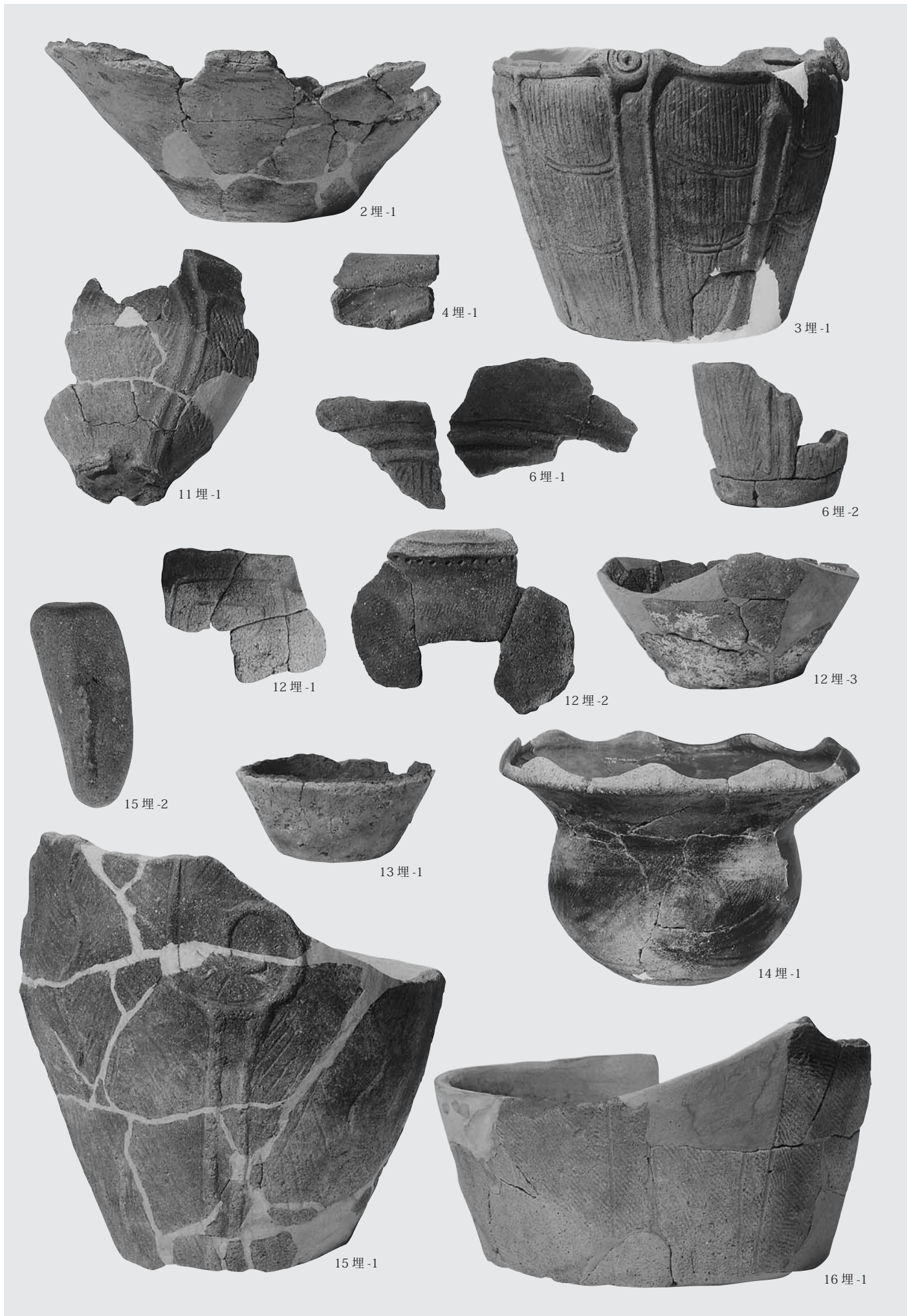


25埋-12



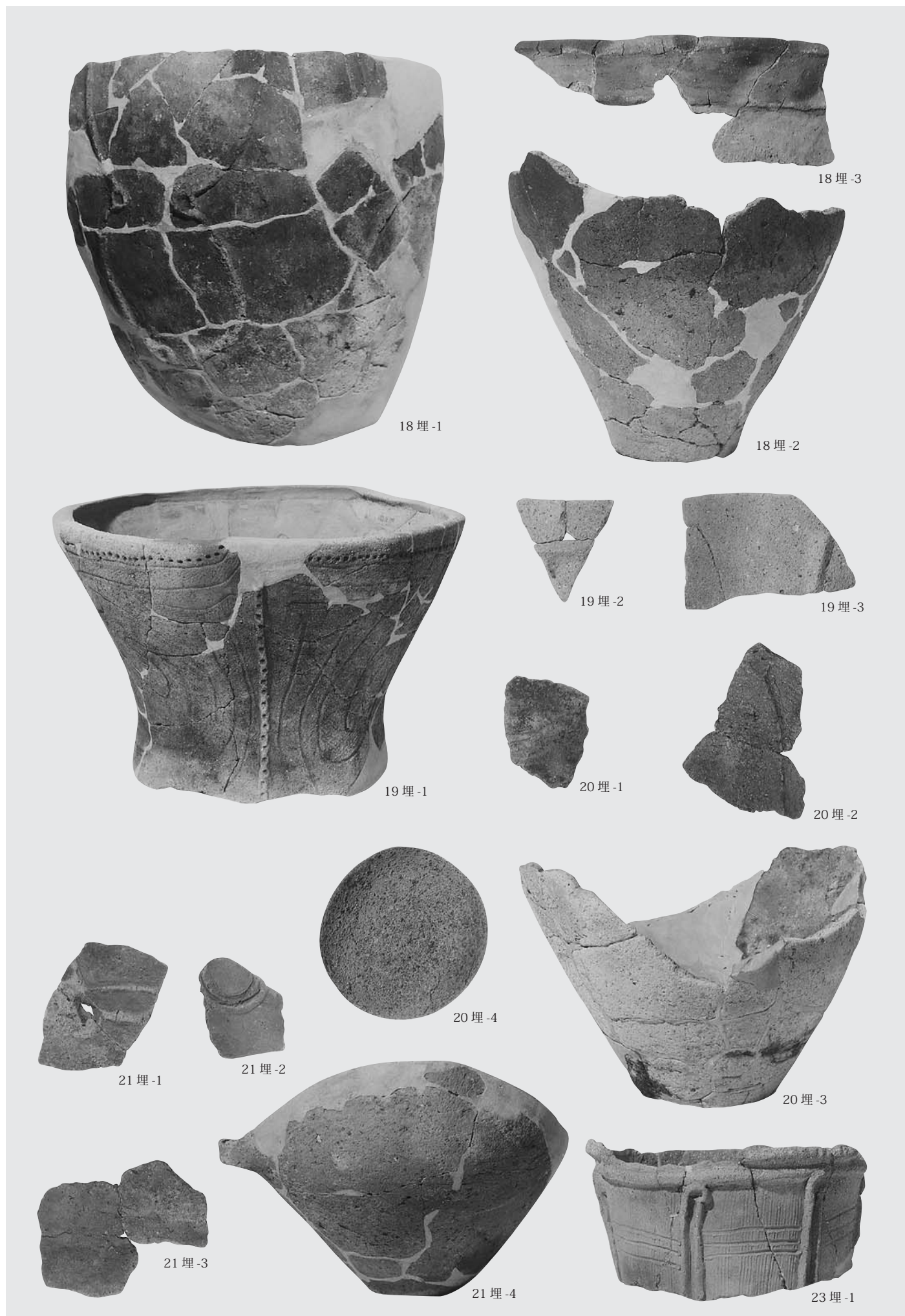


19区土器埋設遺構出土遺物 (1・2・3・4・5・6・7・9号)

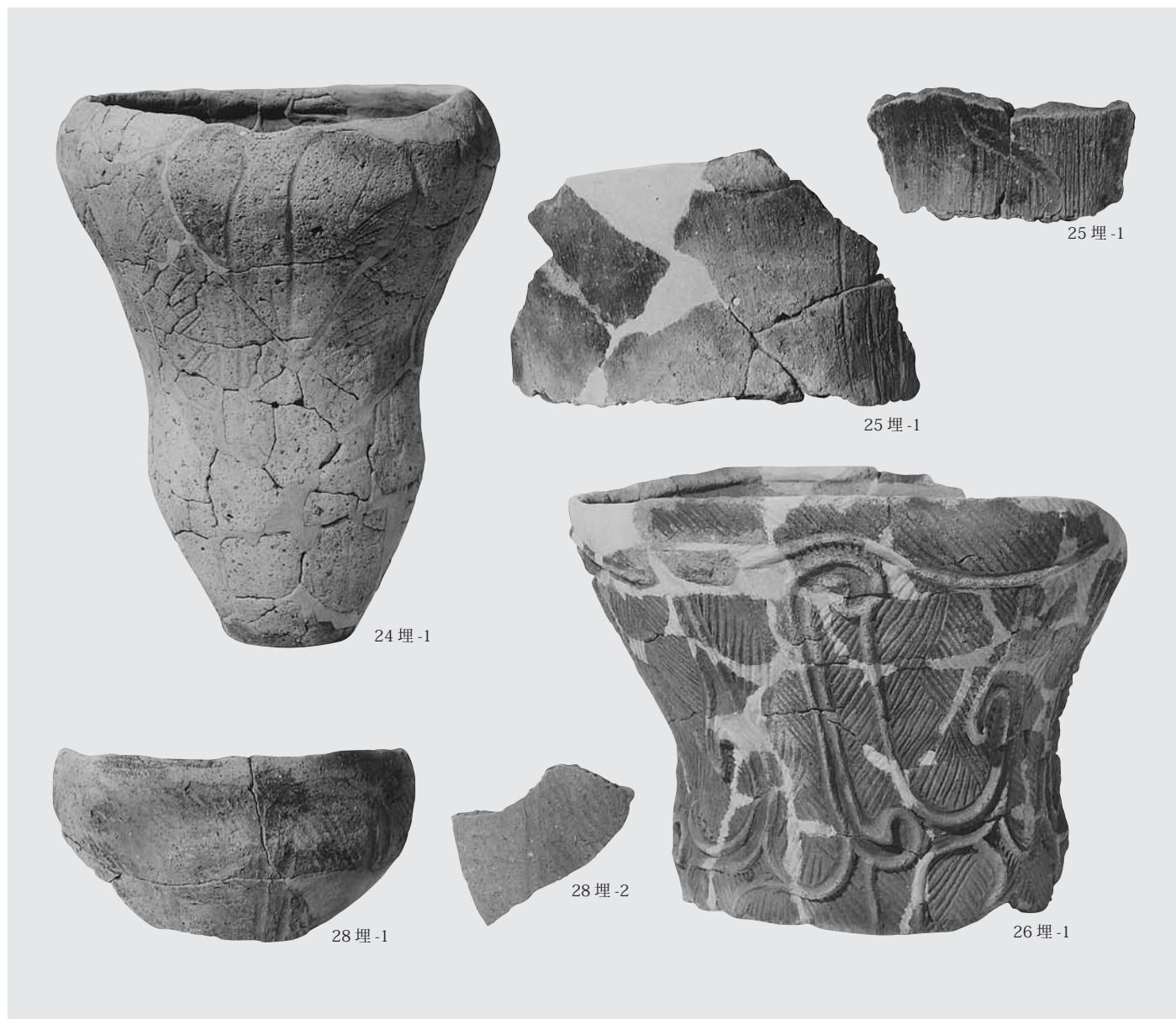


20区土器埋設遺構出土遺物 (2・3・4・6・11・12・13・14・15・16号)





20区土器埋設遺構出土遺物 (18・19・20・21・23号)

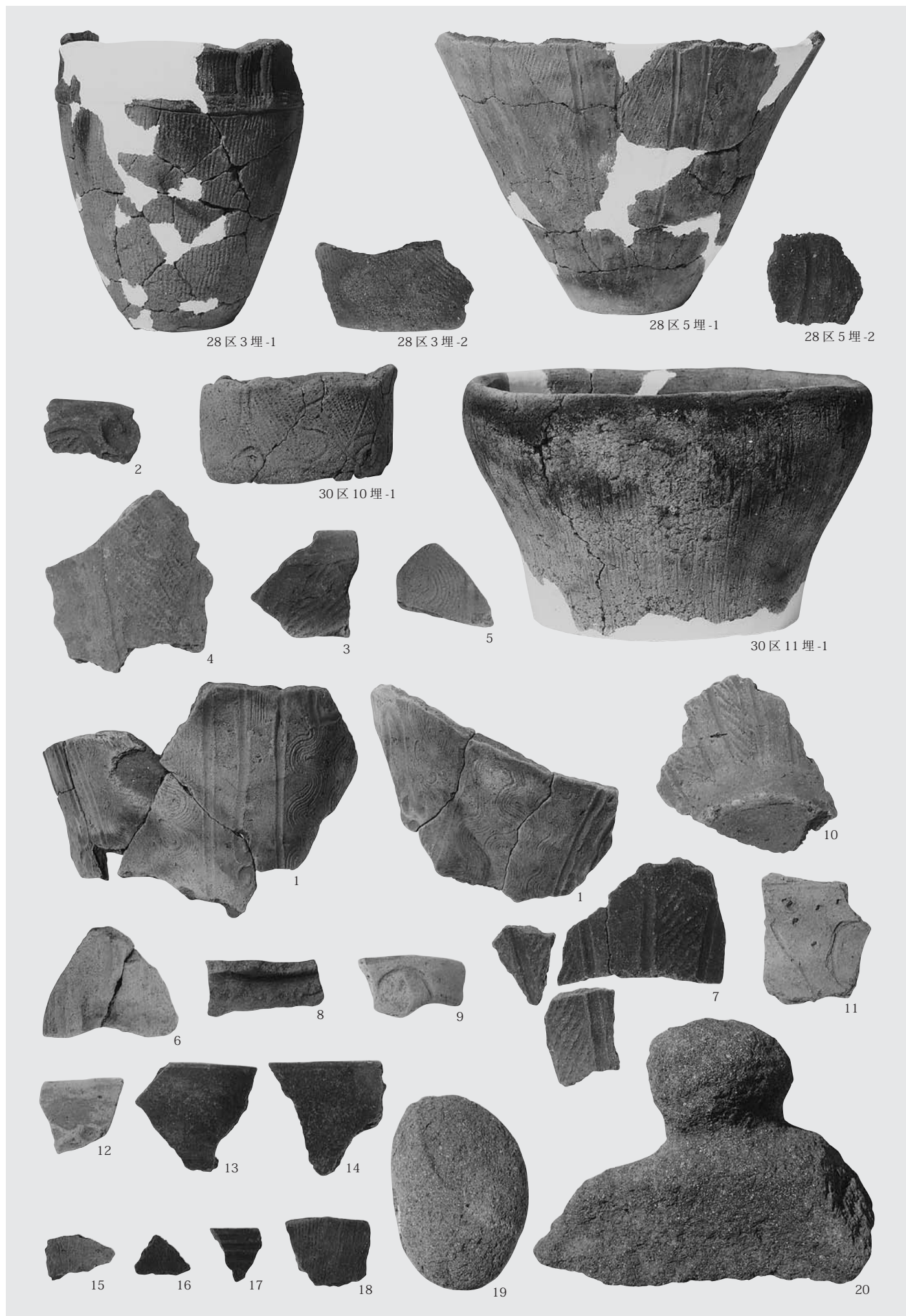


20区土器埋設遺構出土遺物 (24・25・26・28号)

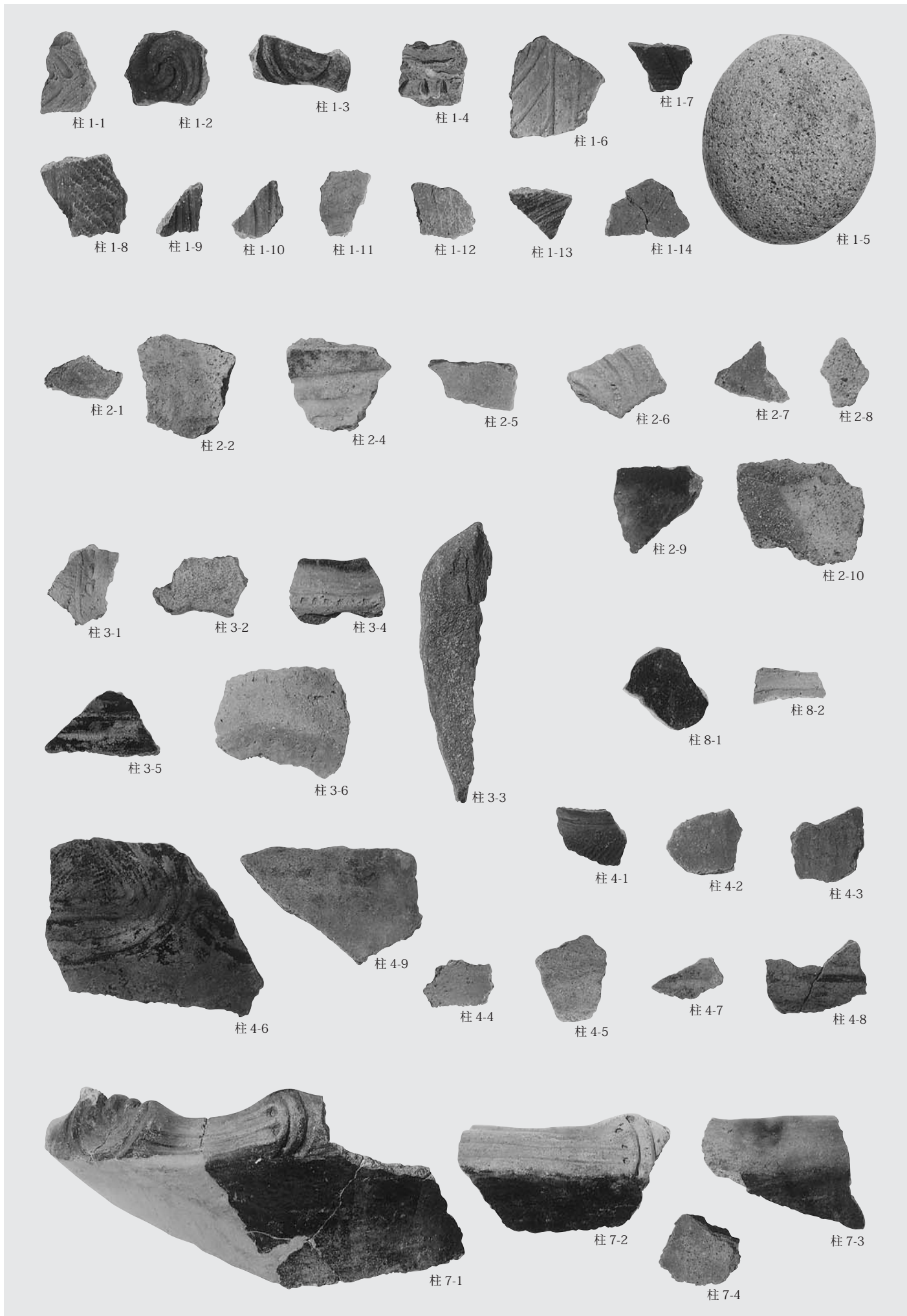


28区土器埋設遺構出土遺物 (2号)



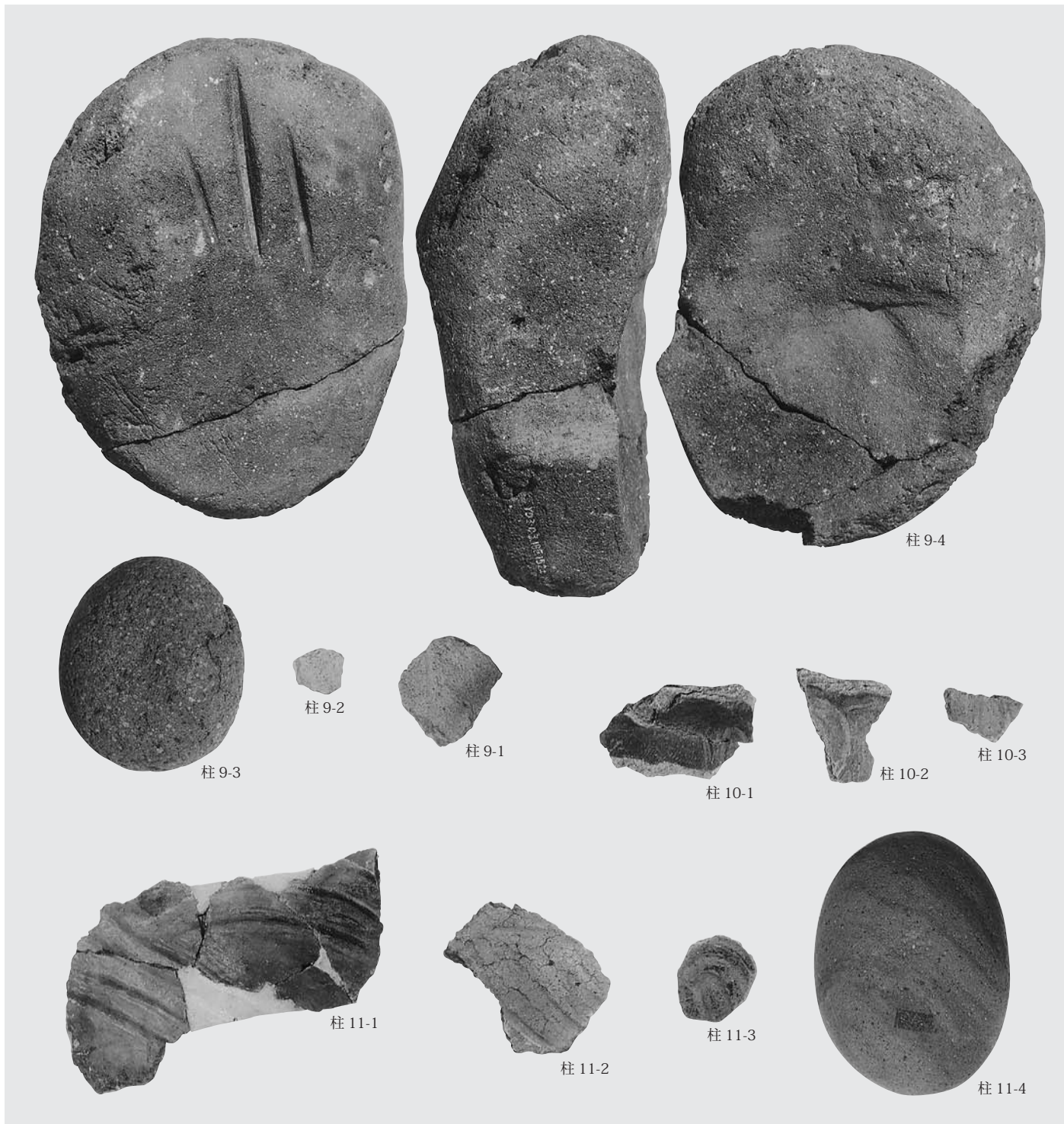


28区・30区土器埋設遺構出土遺物（3・5・10・11号）18区12号配石出土遺物（1～20）

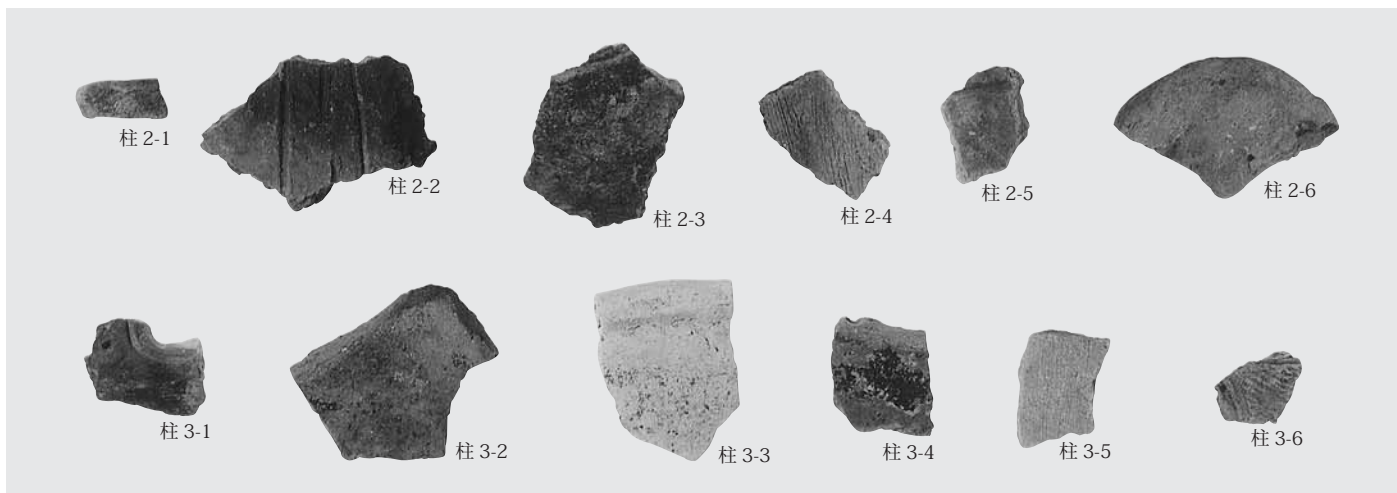


18区3号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・4・7・8)

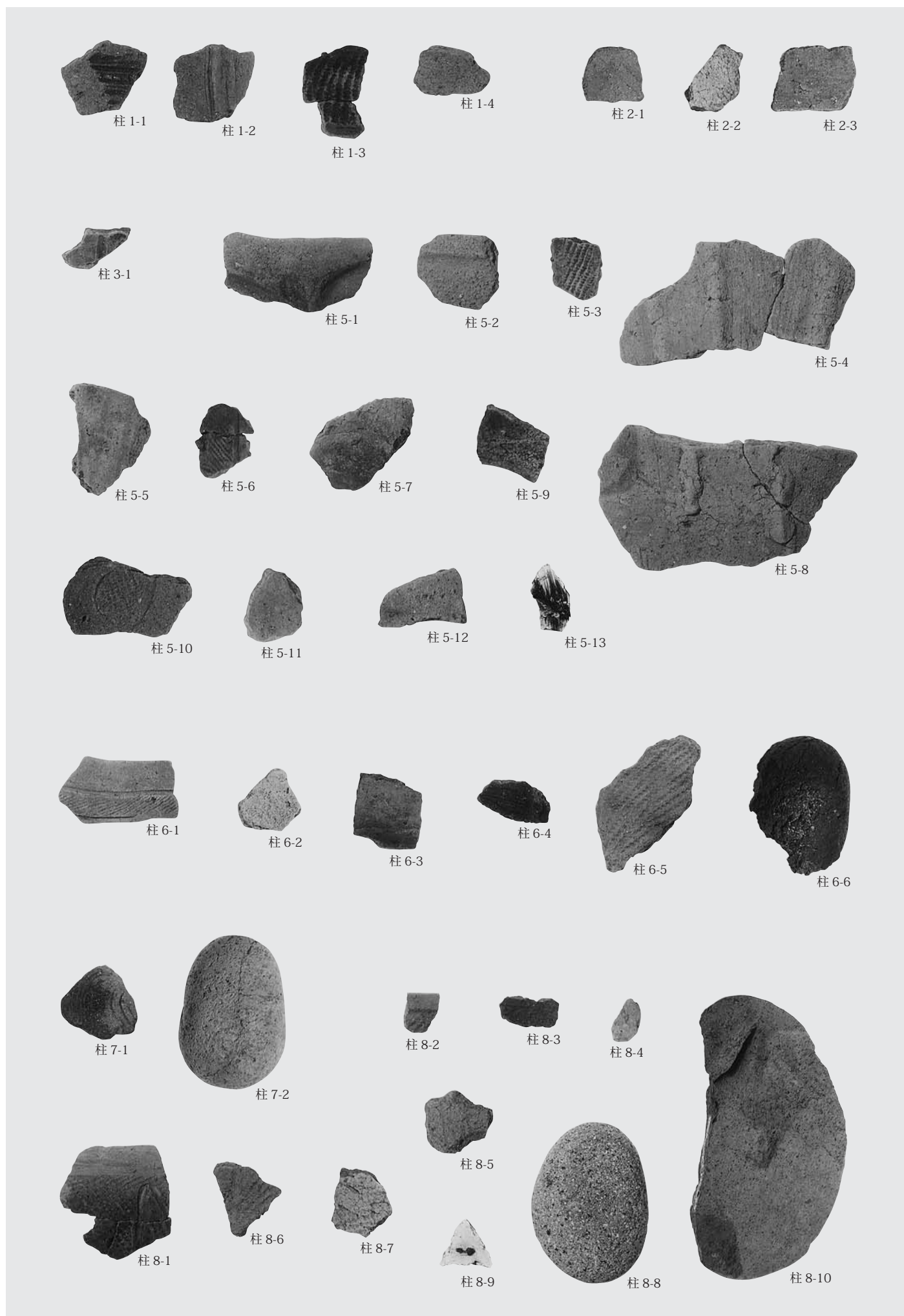




18区 3号掘立柱建物出土遺物 (柱 9・10・11)

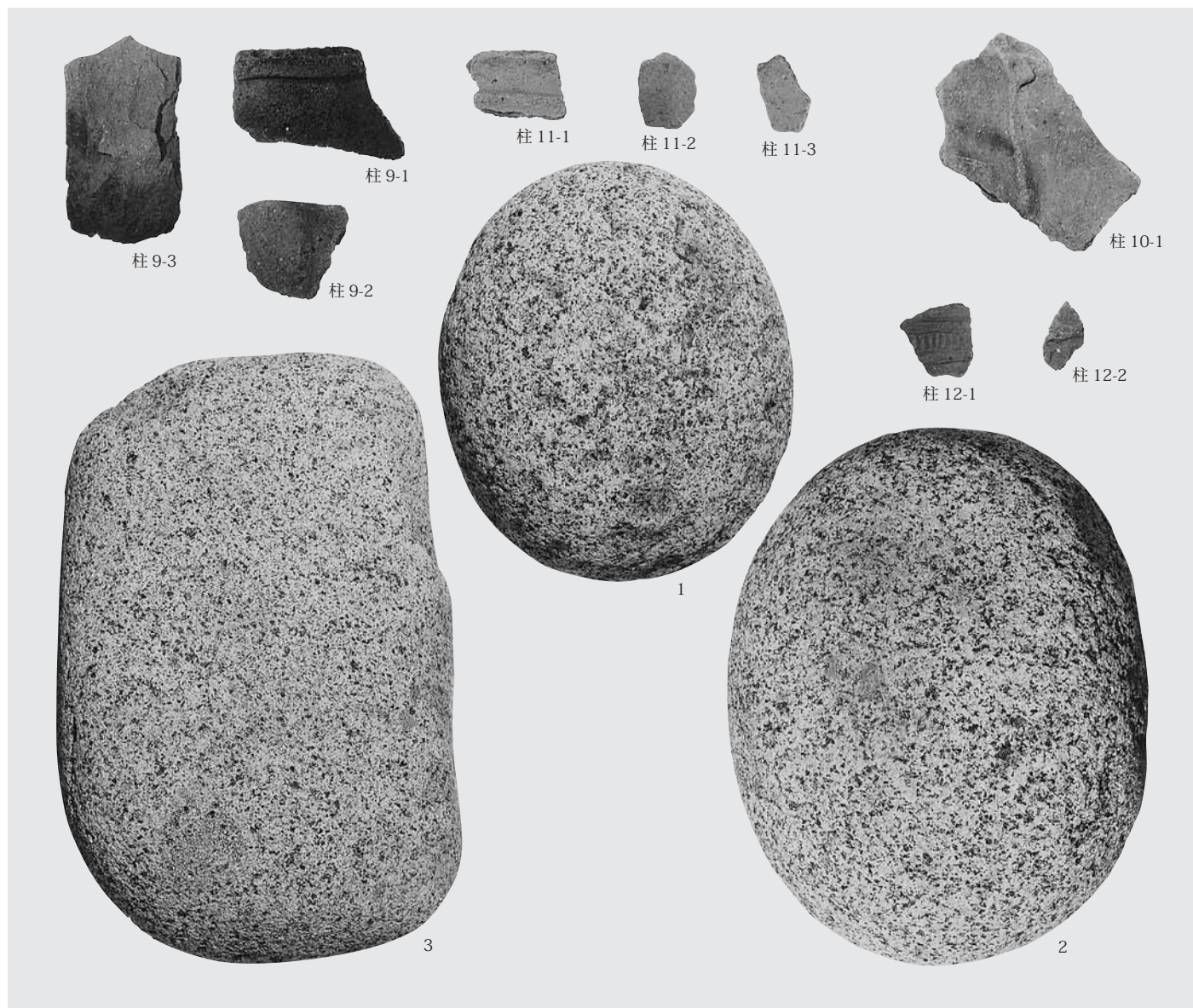


18区 4号掘立柱建物出土遺物 (柱 2・3)

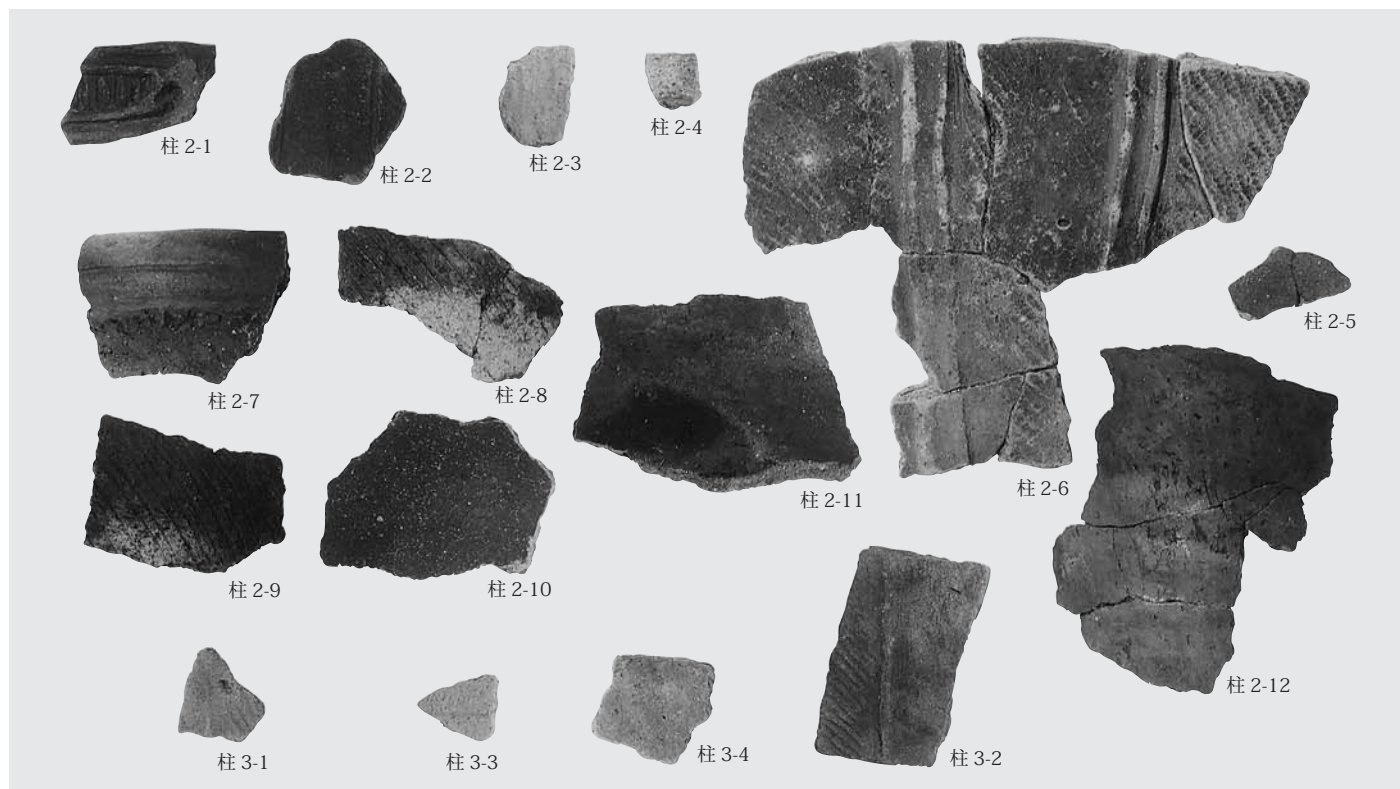


20区2号掘立柱建物出土遺物 (柱1・2・3・5・6・7・8)

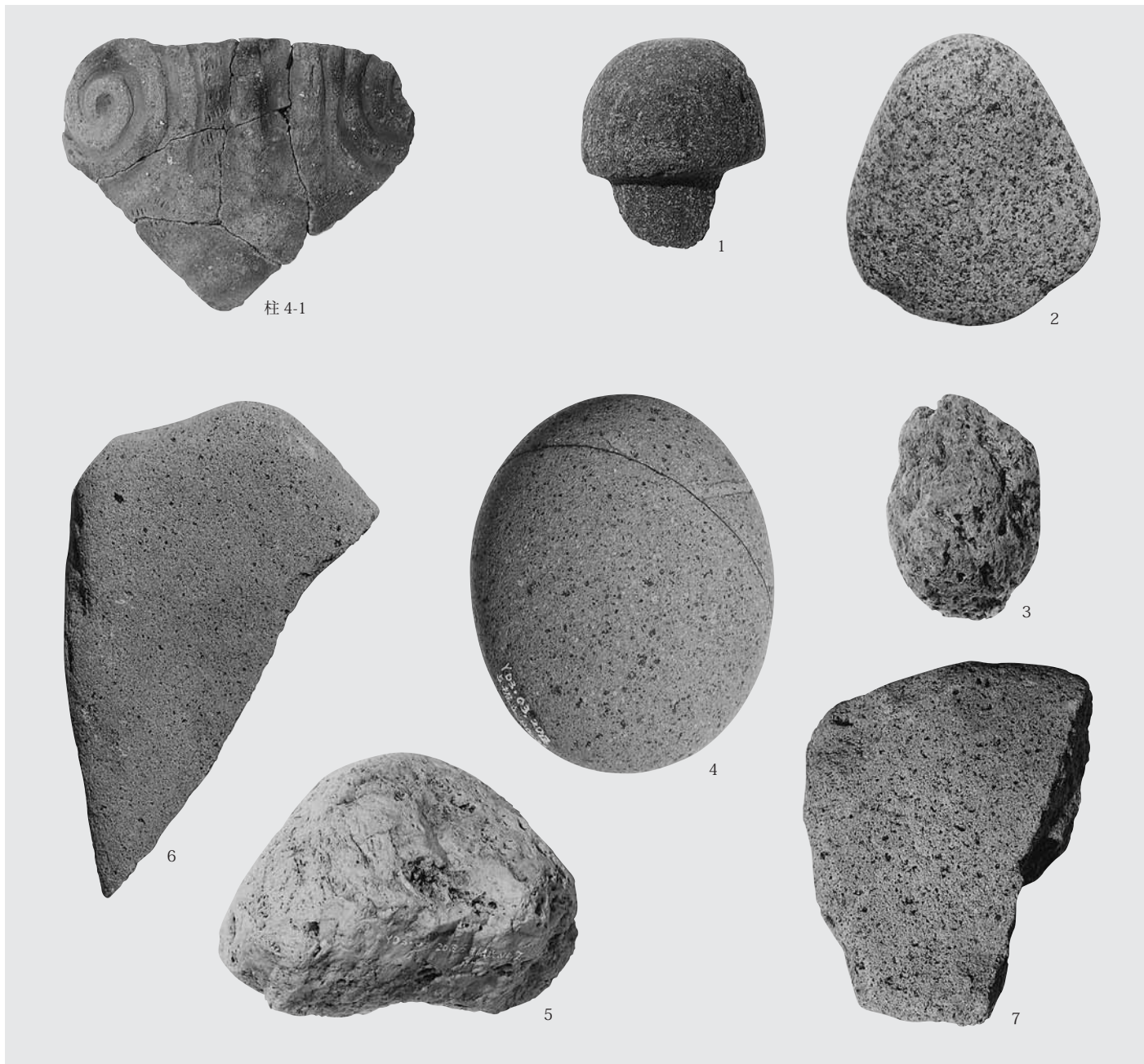




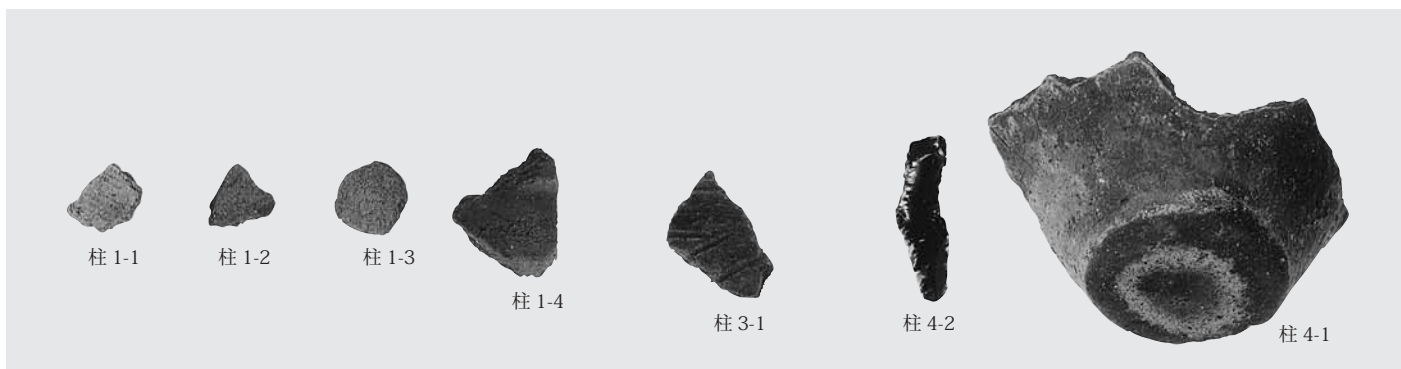
20区 2号掘立柱建物出土遺物 (柱 9・10・11・12)



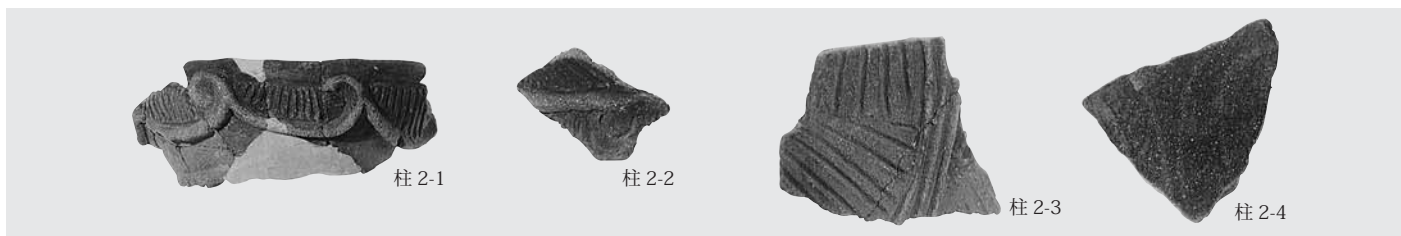
20区 5号掘立柱建物出土遺物 (柱 2・3)



20区5号掘立柱建物出土遺物（柱4）

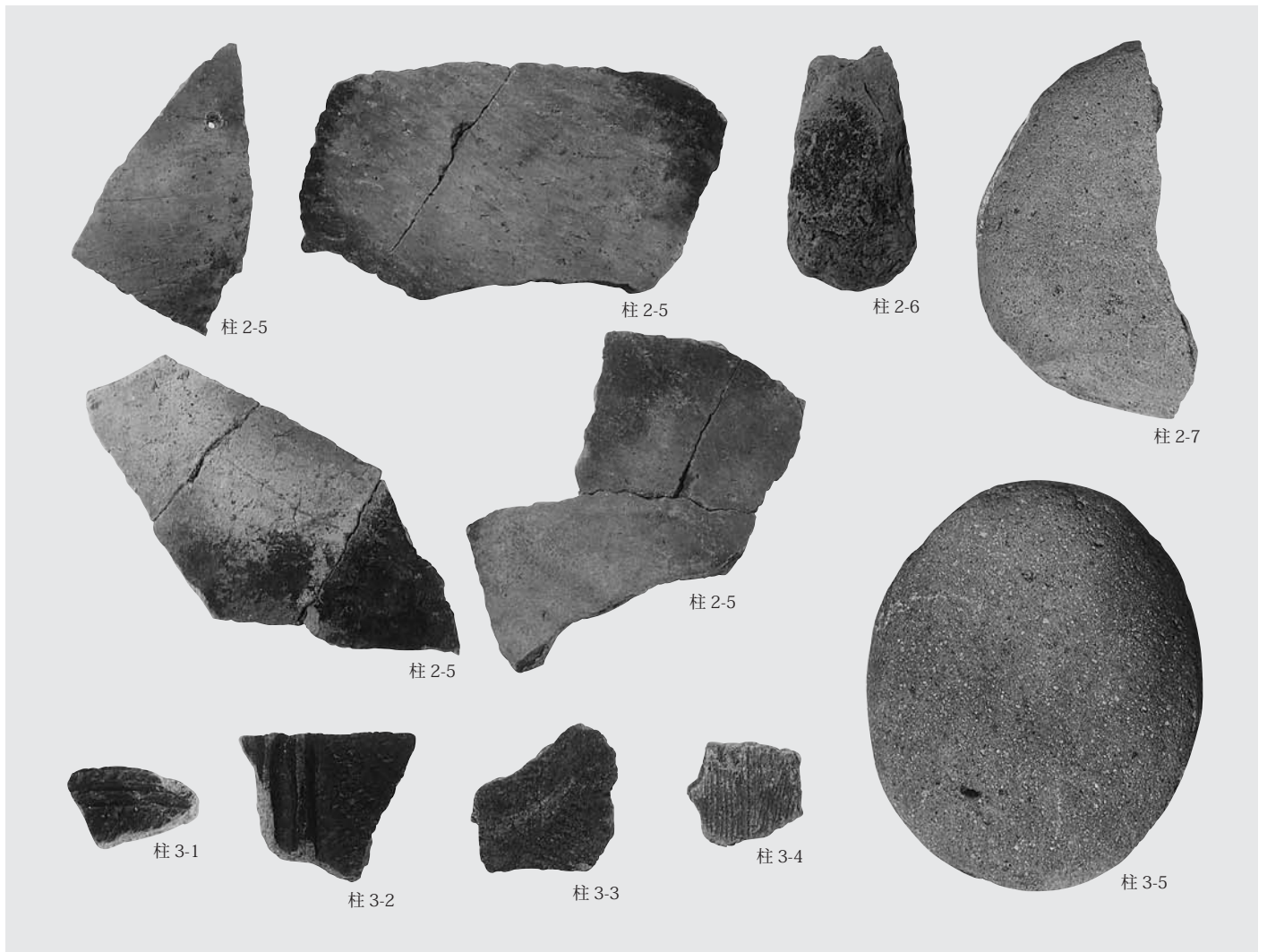


20区6号掘立柱建物出土遺物（柱1・3・4）

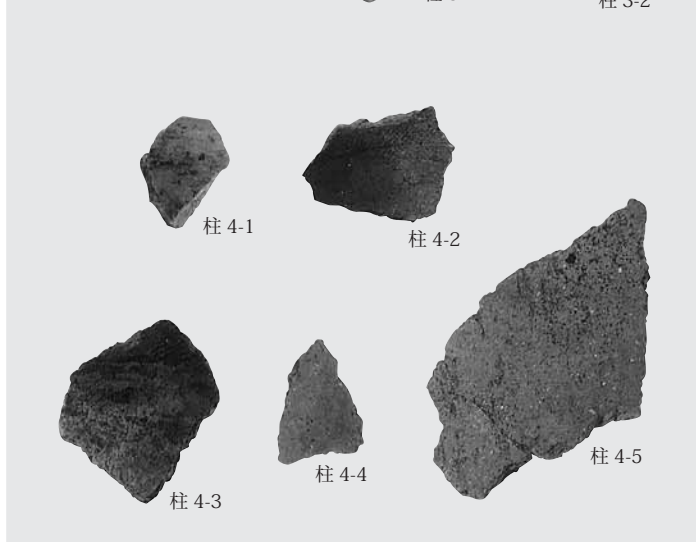
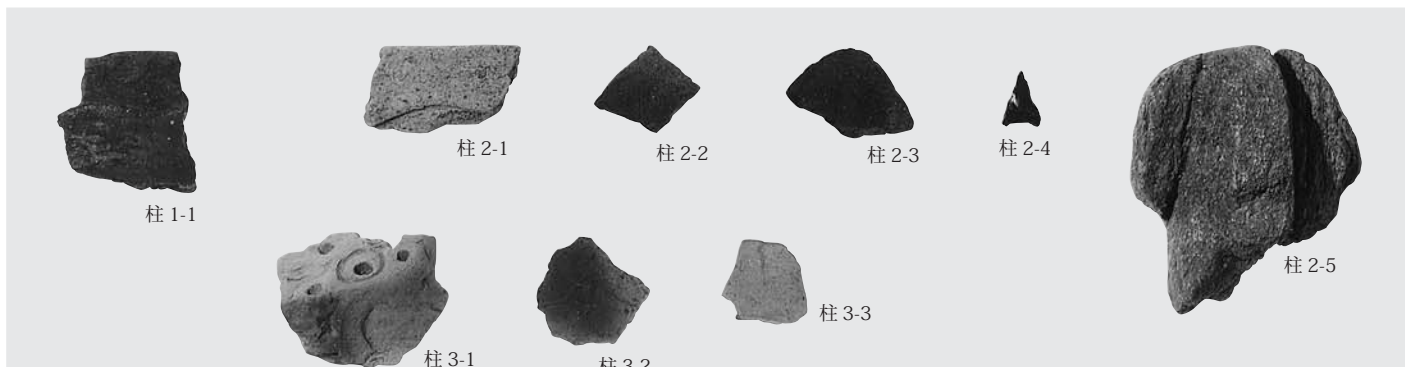


20区7号掘立柱建物出土遺物（柱2）

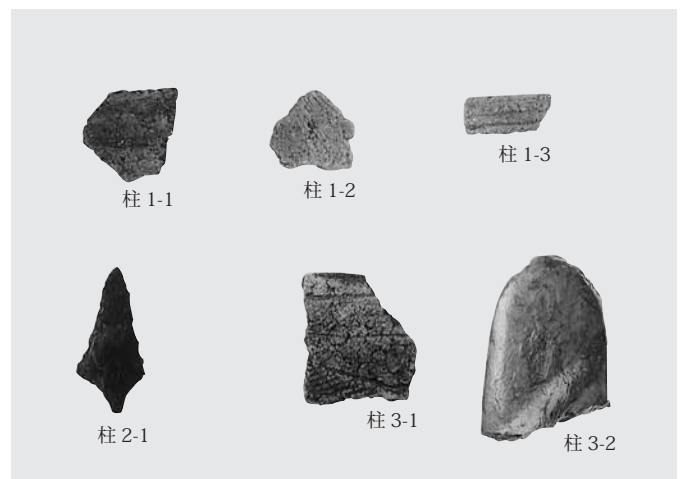




20区 7号掘立柱建物出土遺物 (柱 2・3)



20区 8号掘立柱建物出土遺物 (柱 1・2・3・4)

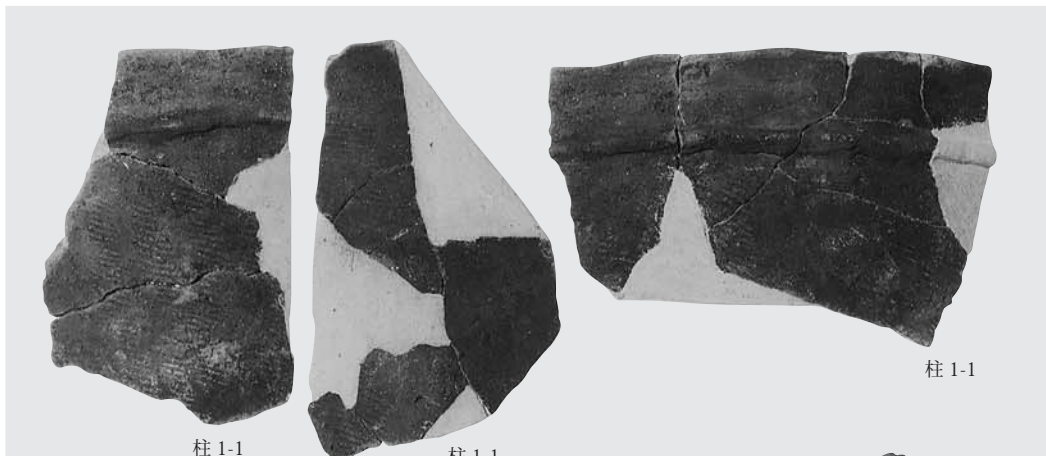


29区 1号掘立柱建物出土遺物 (柱 1・2・3)



1

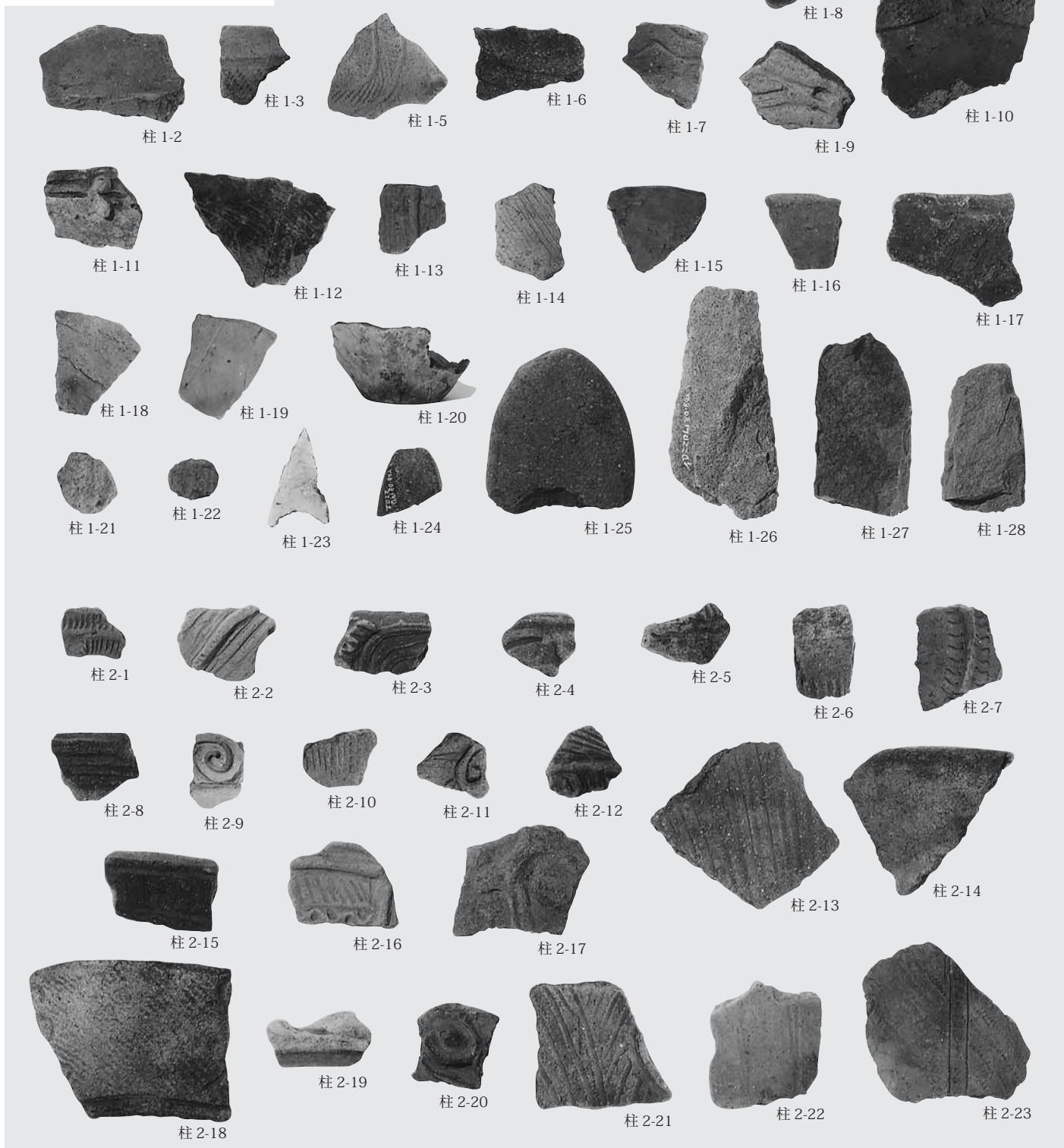
19区 1 号環状柱穴列出土遺物 (柱 4)



柱 1-1

柱 1-1

柱 1-1



柱 1-2

柱 1-3

柱 1-5

柱 1-6

柱 1-7

柱 1-8

柱 1-10

柱 1-9

柱 1-11

柱 1-12

柱 1-13

柱 1-14

柱 1-15

柱 1-16

柱 1-17

柱 1-18

柱 1-19

柱 1-20

柱 1-21

柱 1-22

柱 1-23

柱 1-24

柱 1-25

柱 1-26

柱 1-27

柱 1-28

柱 2-1

柱 2-2

柱 2-3

柱 2-4

柱 2-5

柱 2-6

柱 2-7

柱 2-8

柱 2-9

柱 2-10

柱 2-11

柱 2-12

柱 2-13

柱 2-14

柱 2-15

柱 2-16

柱 2-17

柱 2-18

柱 2-19

柱 2-20

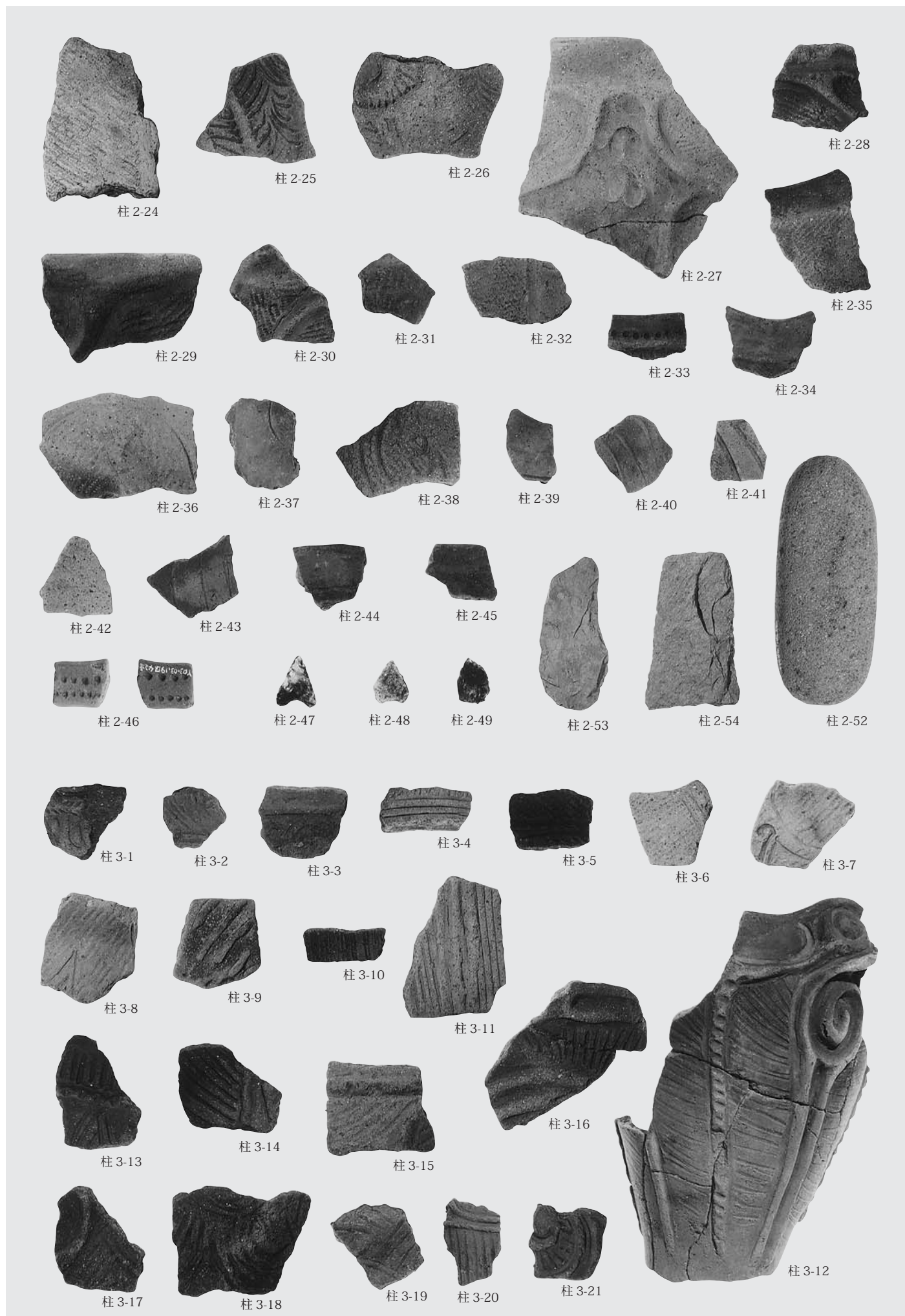
柱 2-21

柱 2-22

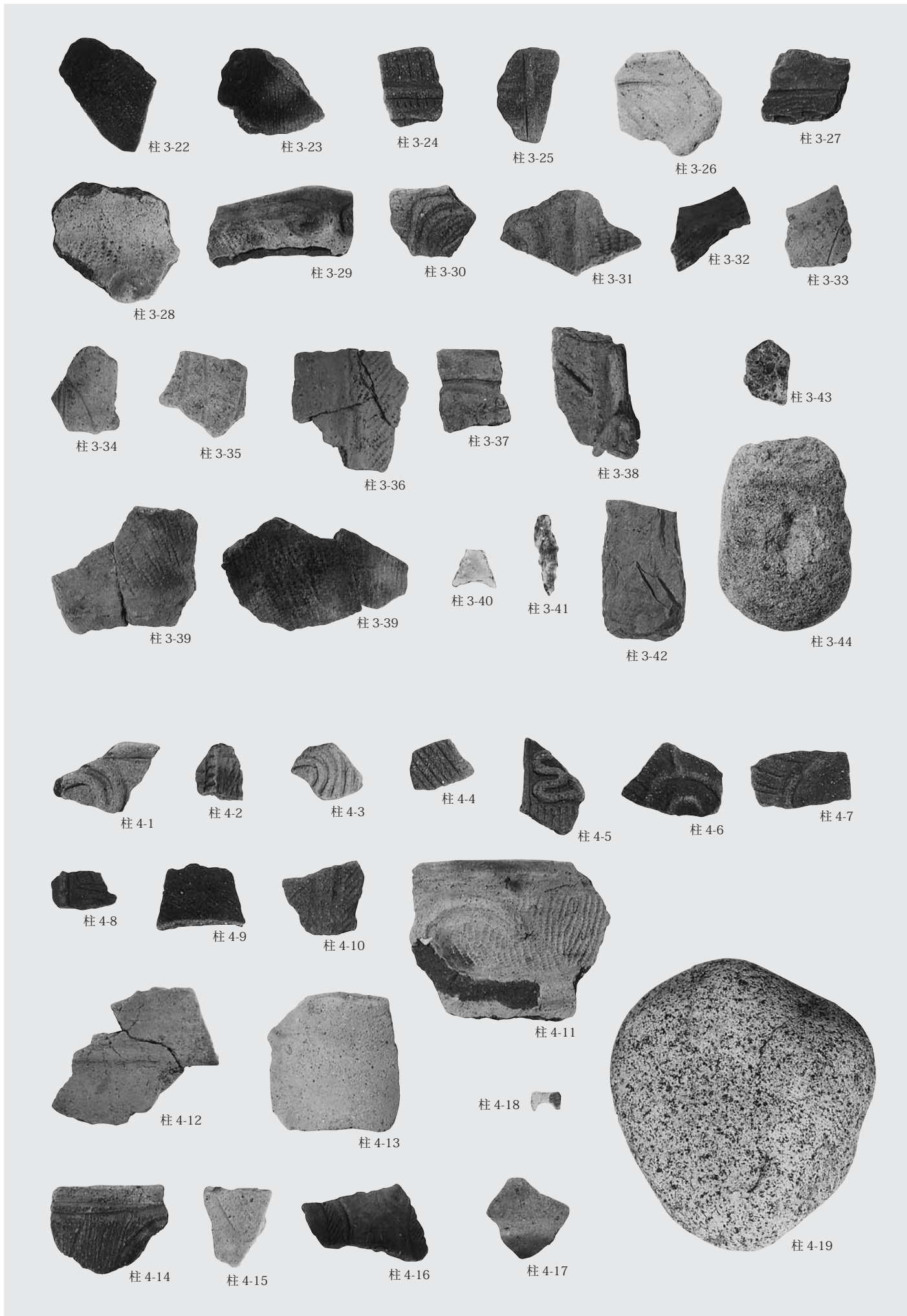
柱 2-23

19区 2 号環状柱穴列出土遺物 (柱 1 · 2)



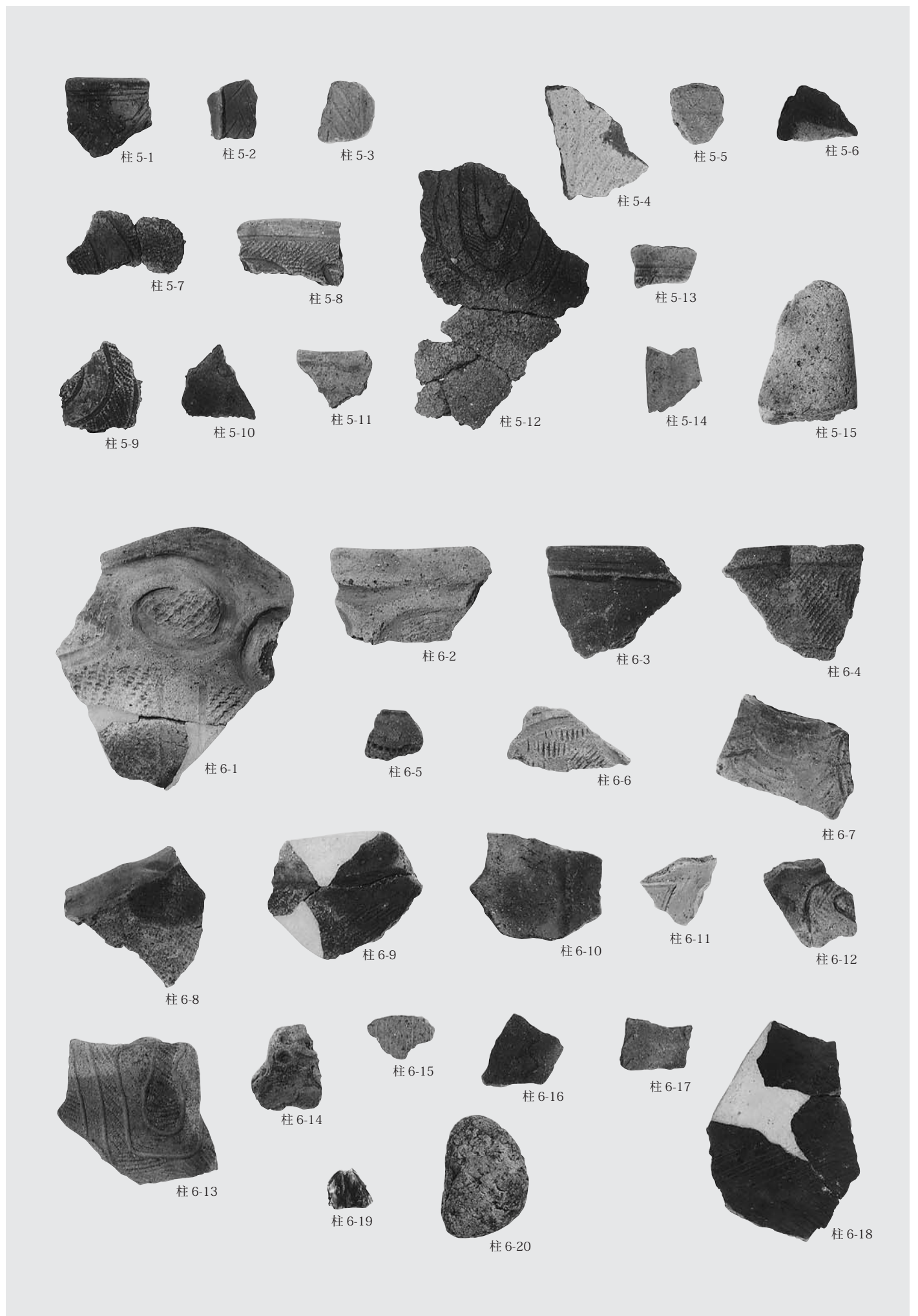


19区 2号環状柱穴列出土遺物 (柱 2・3)

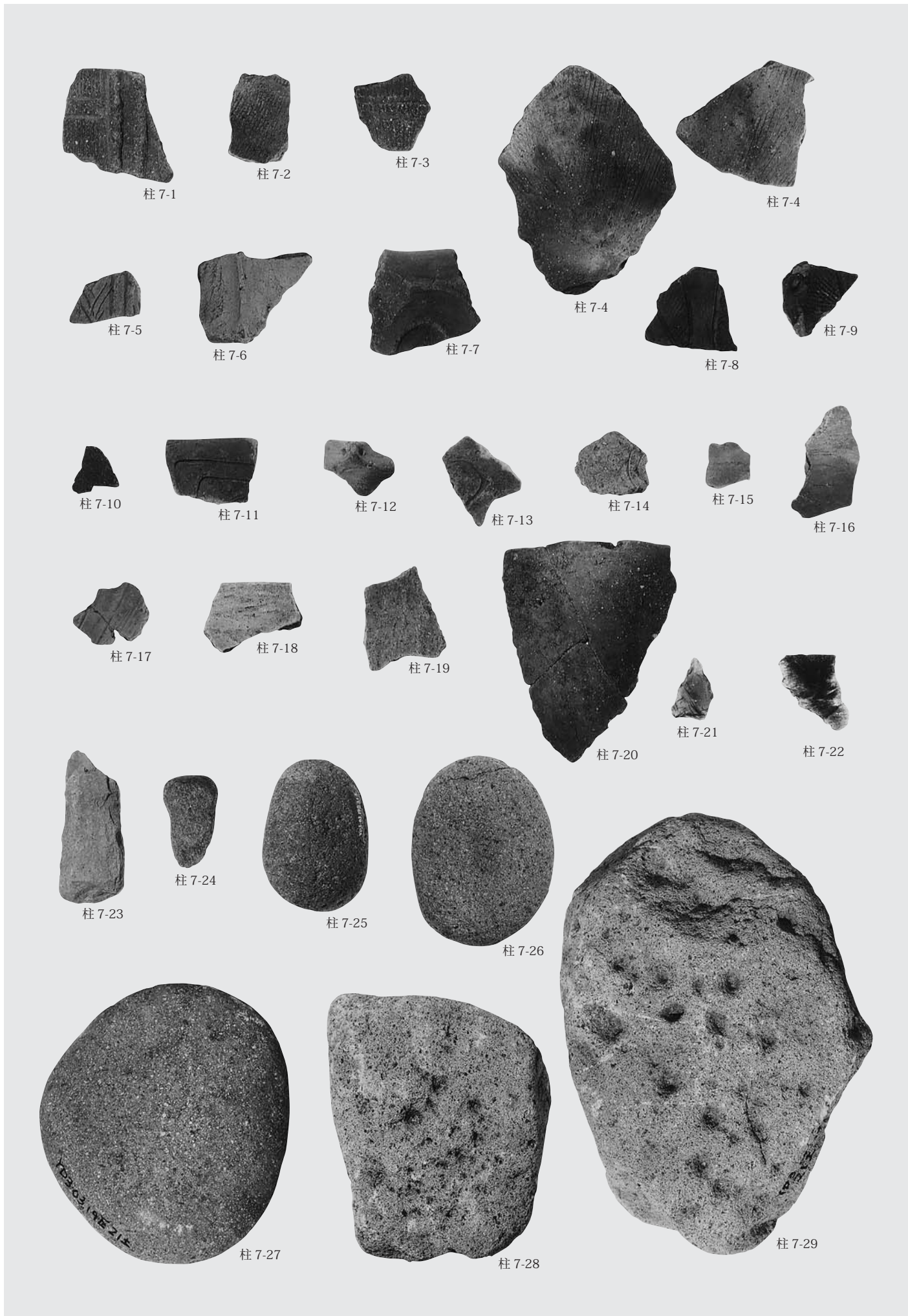


19区2号環状柱穴列出土遺物 (柱3・4)





19区2号環状柱穴列出土遺物（柱5・6）

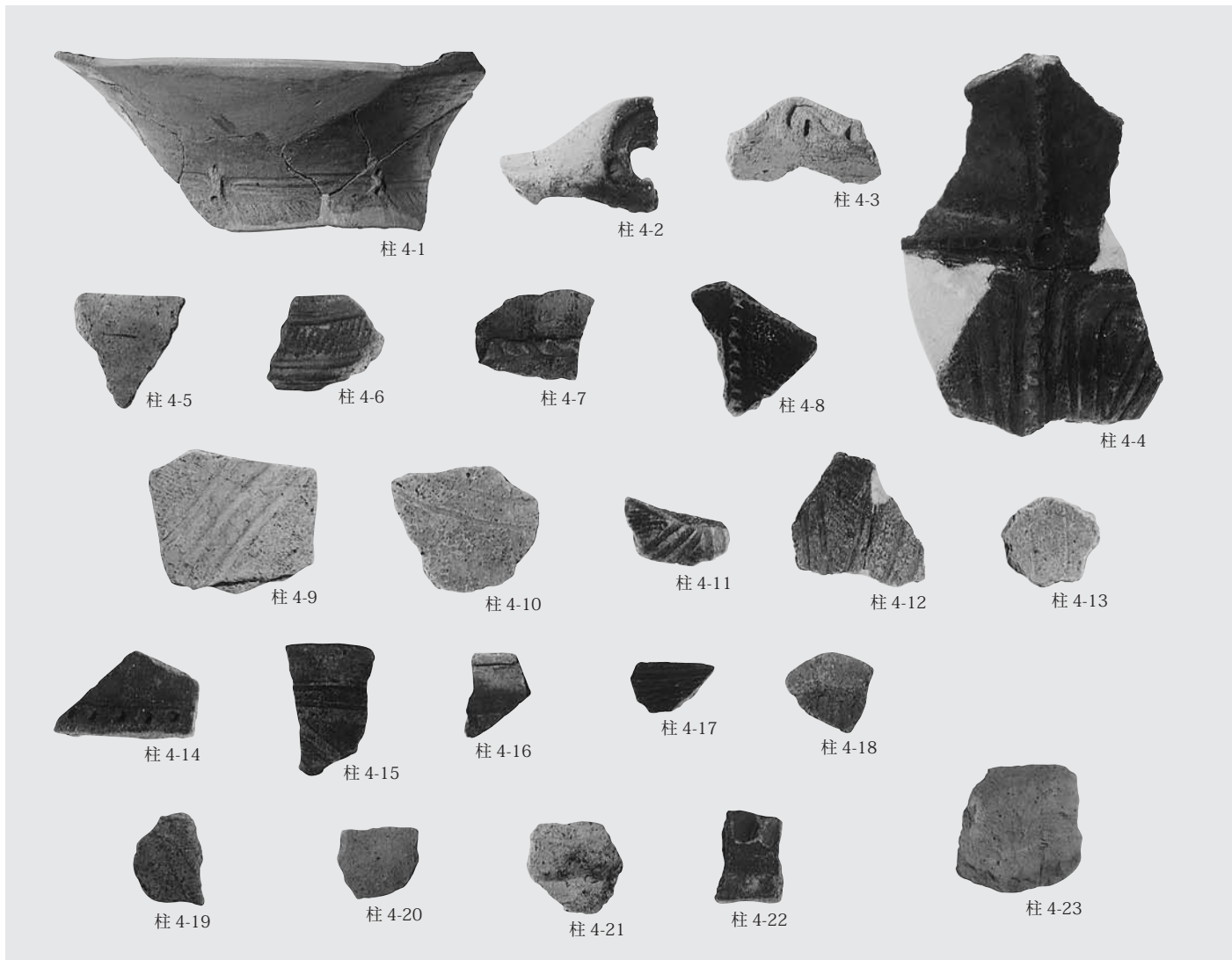


19区 2号環状柱穴列出土遺物 (柱 7)

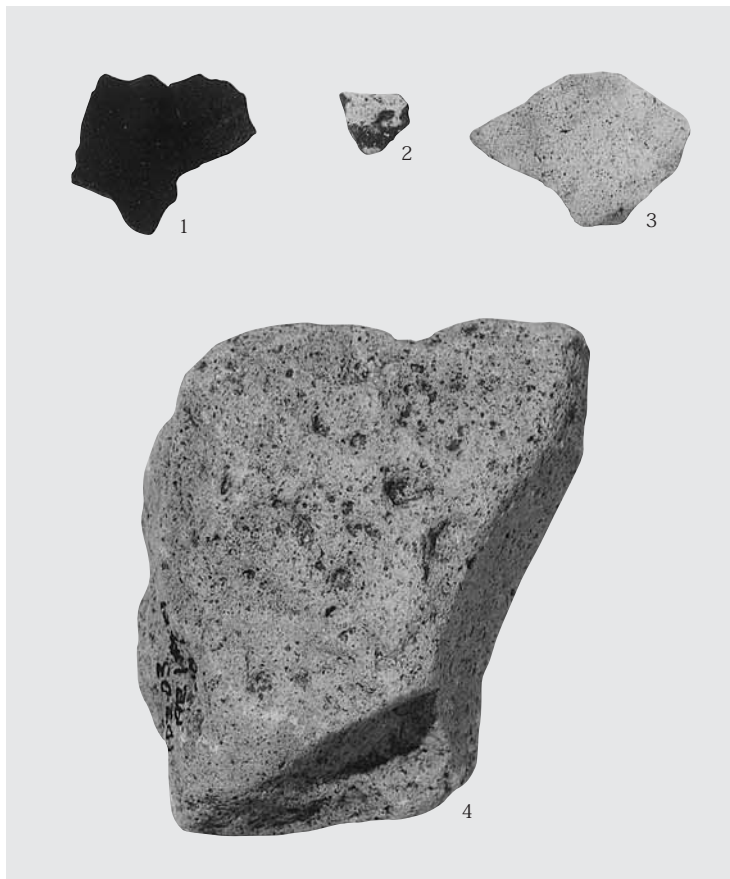




30区1号環状柱穴列出土遺物 (柱1・2・3)



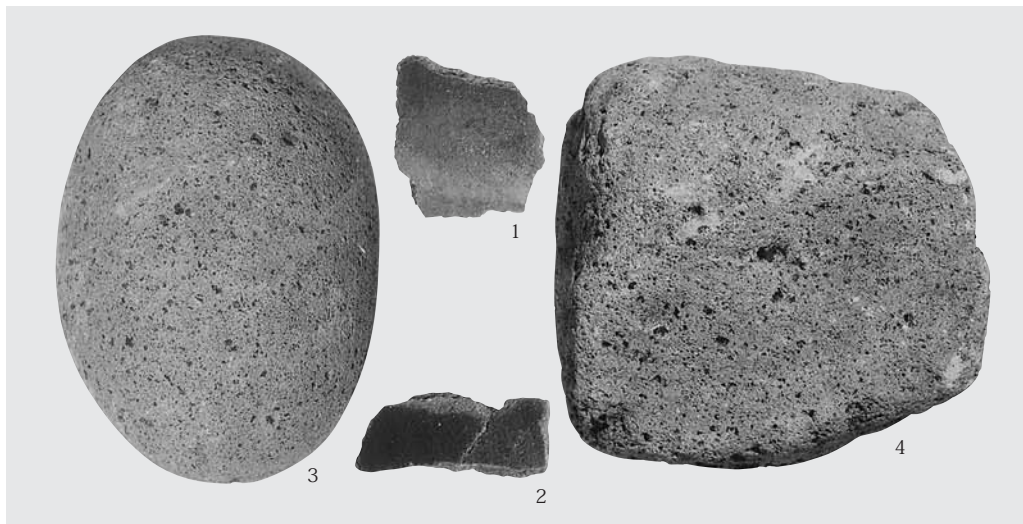
30区 1号環状柱穴列出土遺物 (柱 4)



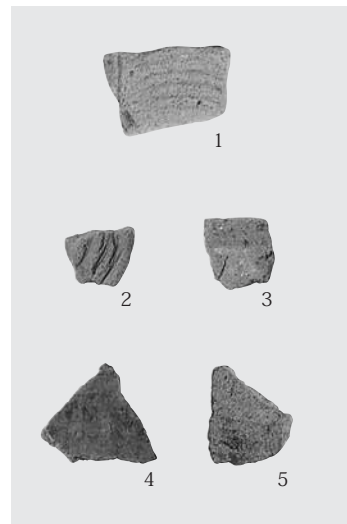
19区 1号柱穴列出土遺物



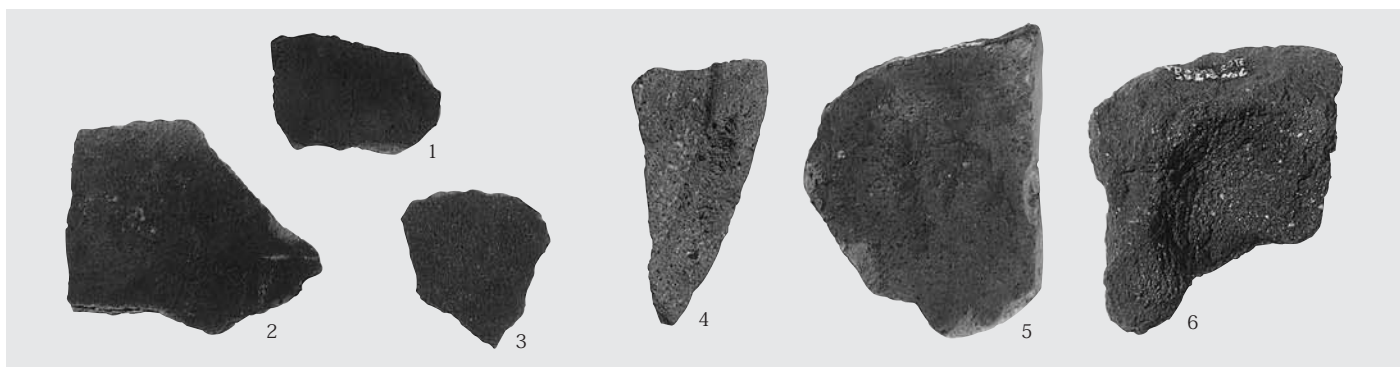
30区 1号環状柱穴列出土遺物



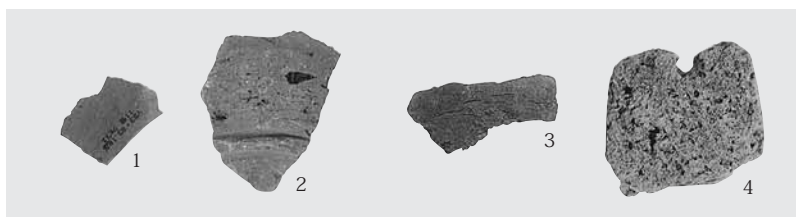
20区 1号集石出土遺物



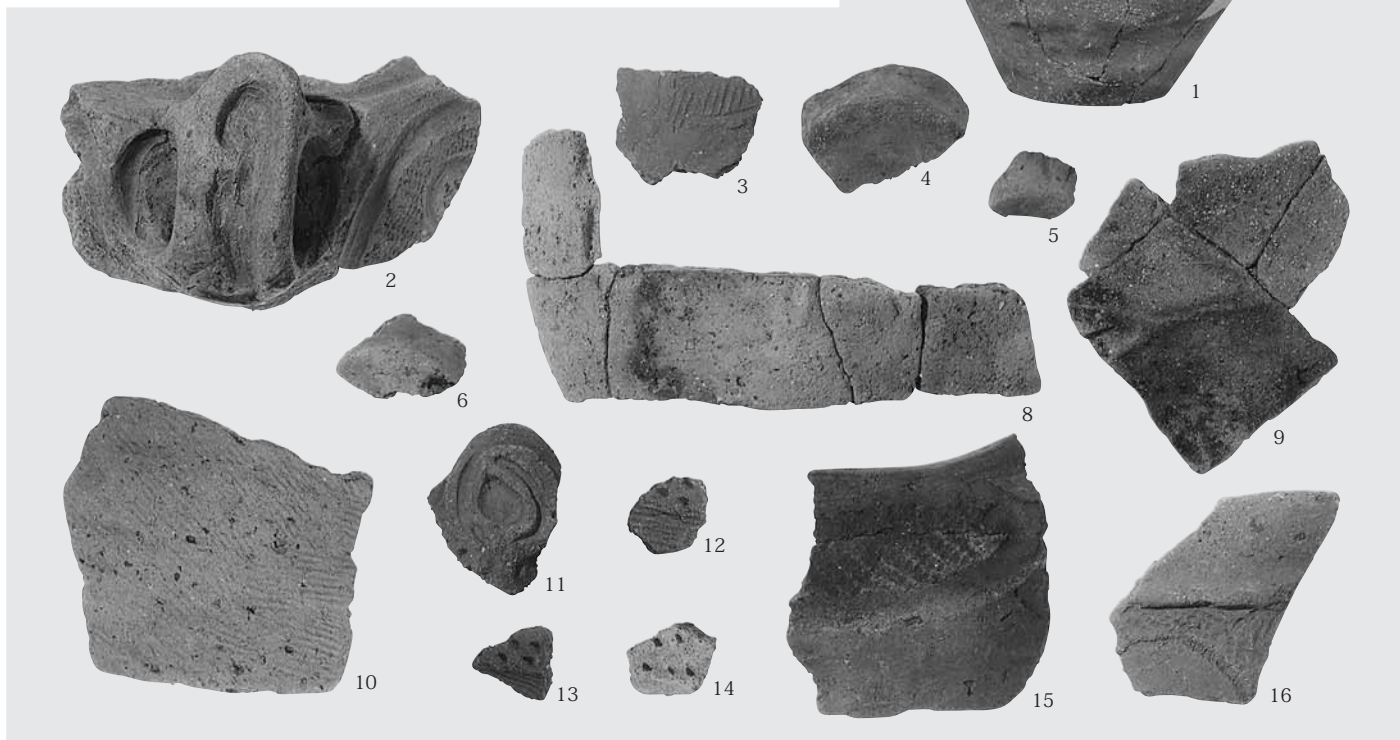
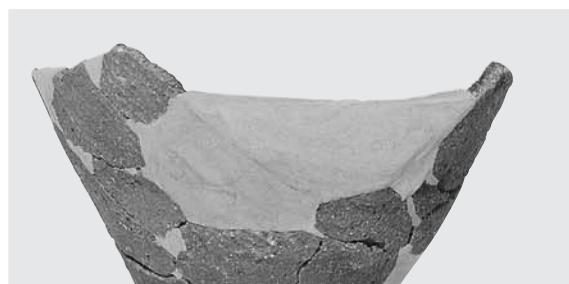
20区 4号集石出土遺物



20区 2号集石出土遺物

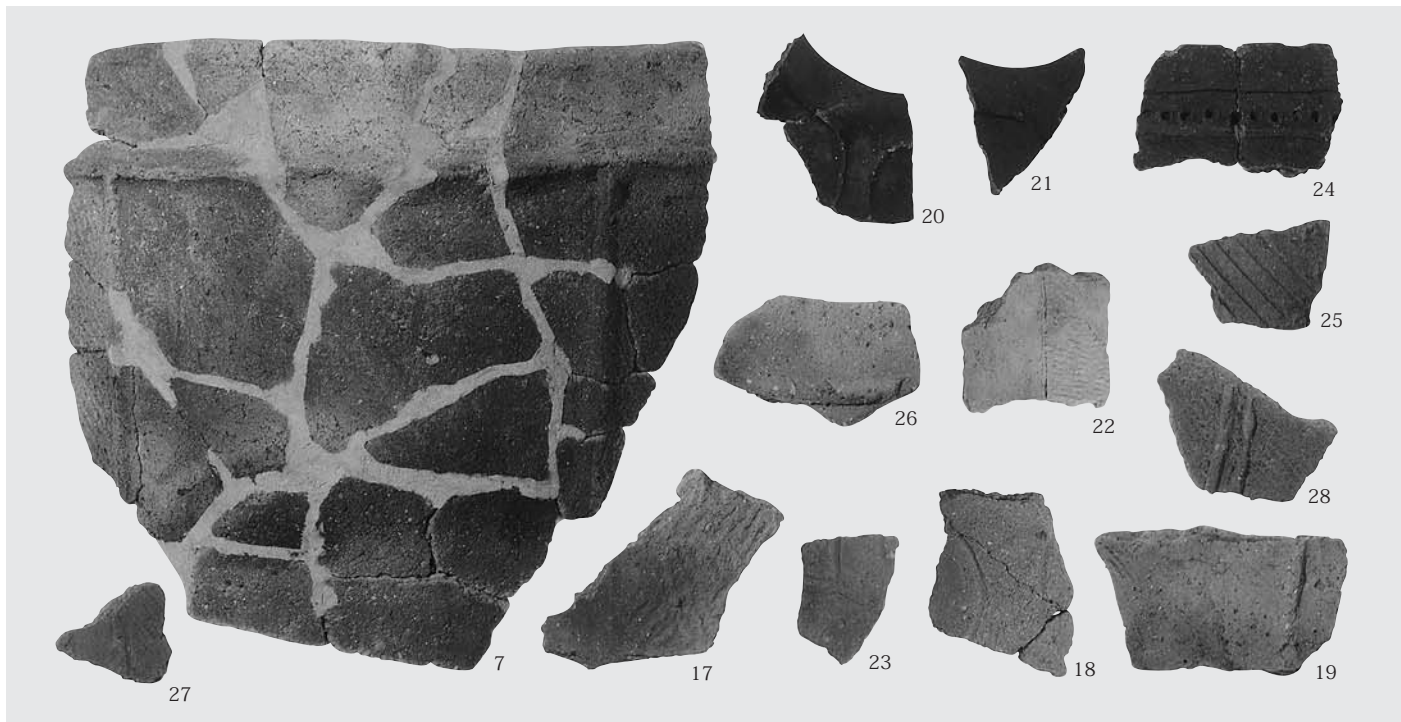


18区 11号焼土出土遺物

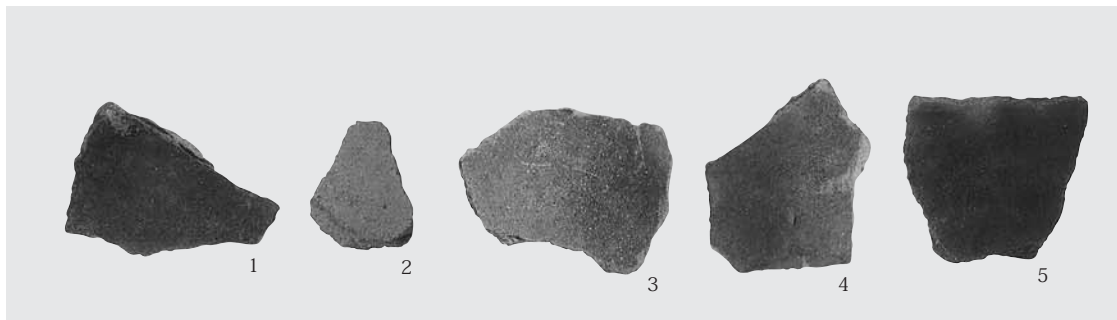


20区 9号焼土出土遺物 (1)





20区9号烧土出土遺物 (2)



20区13号烧土出土遺物



20区18号烧土出土遺物



29区1号烧土出土遺物



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第439集

## 横壁中村遺跡(7)

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集

---

平成20年(2008年)3月25日 印刷

平成20年(2008年)3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

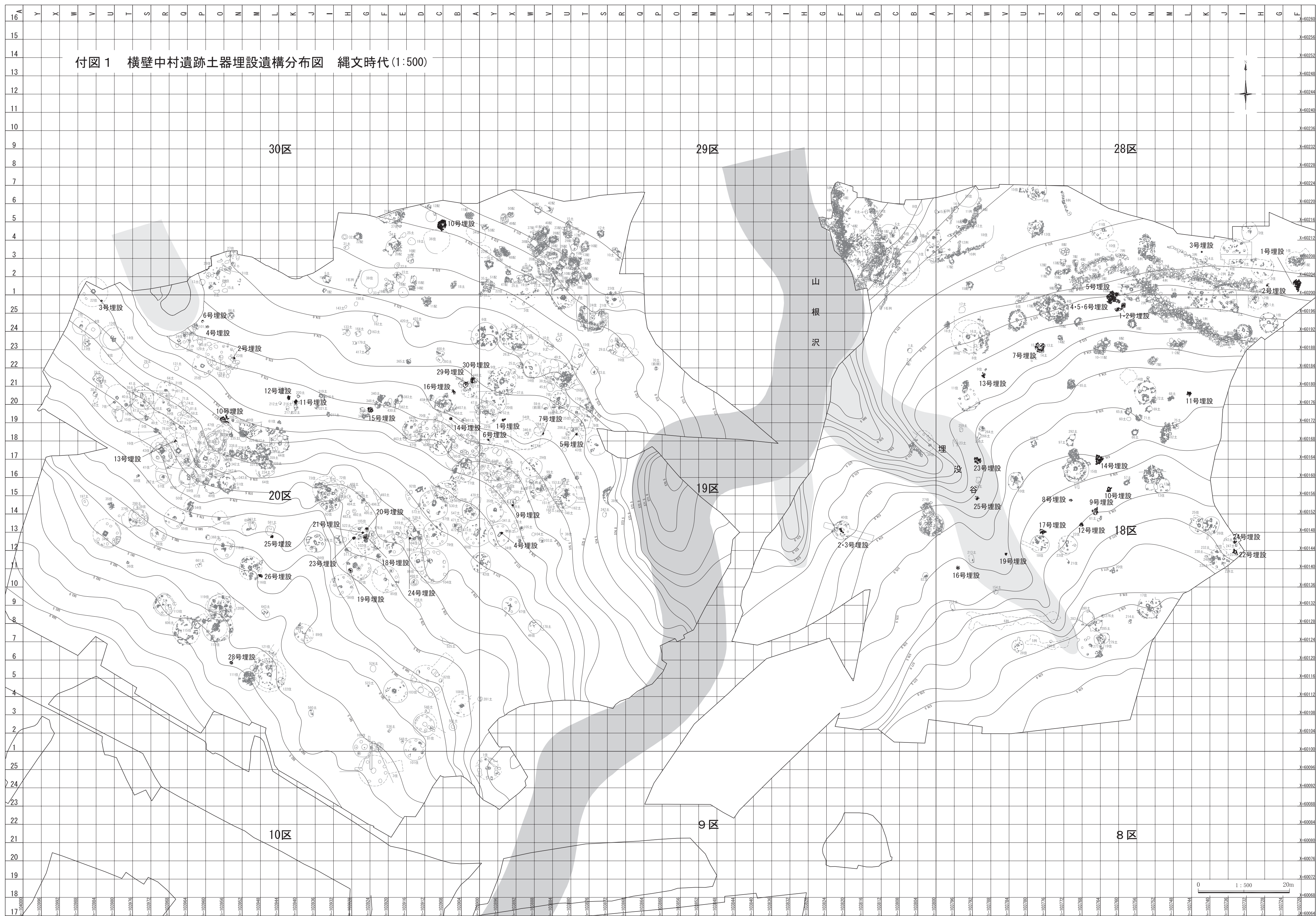
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

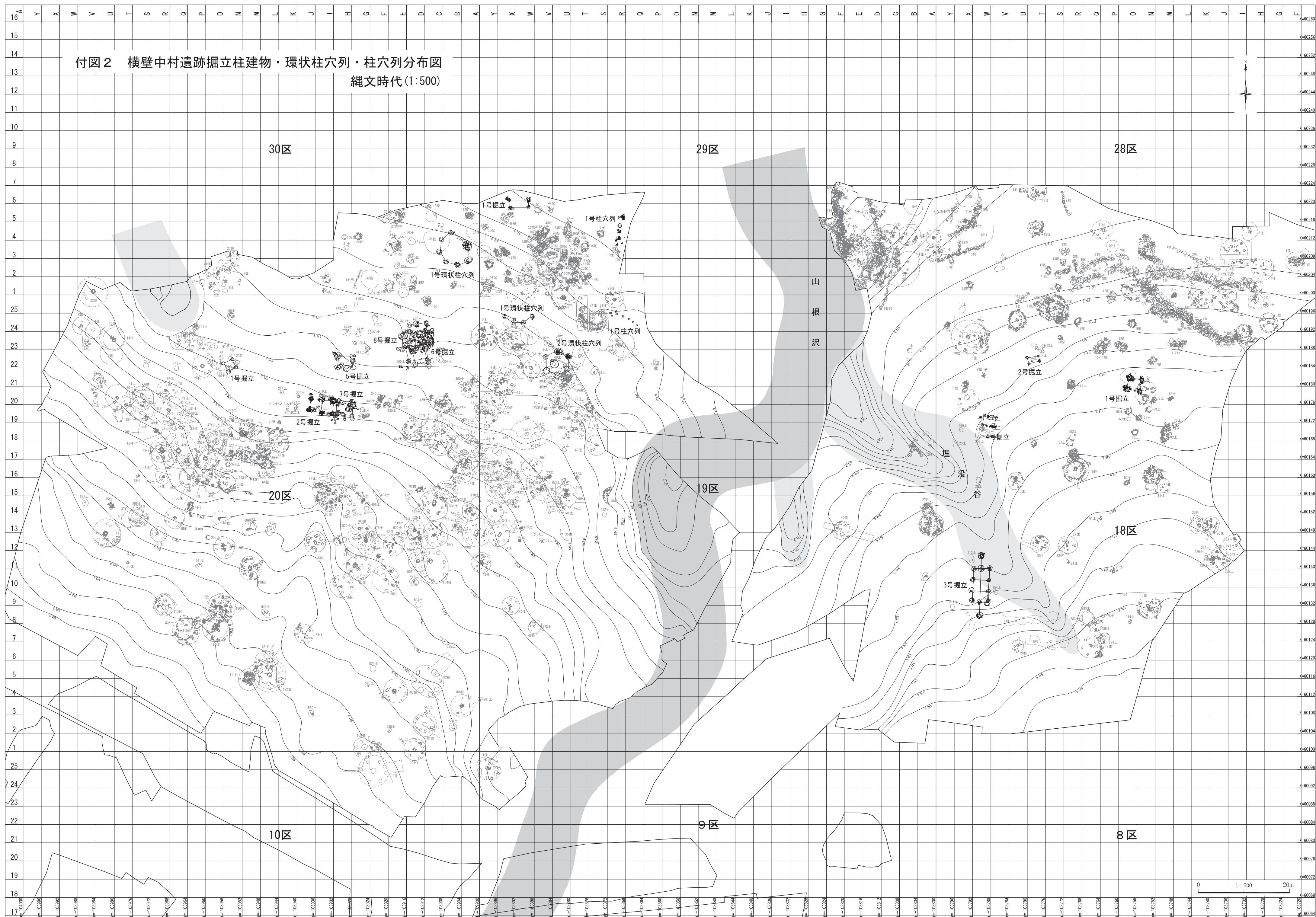
印刷／朝日印刷工業株式会社

付図1 横壁中村遺跡土器埋設遺構分布図 縄文時代(1:500)



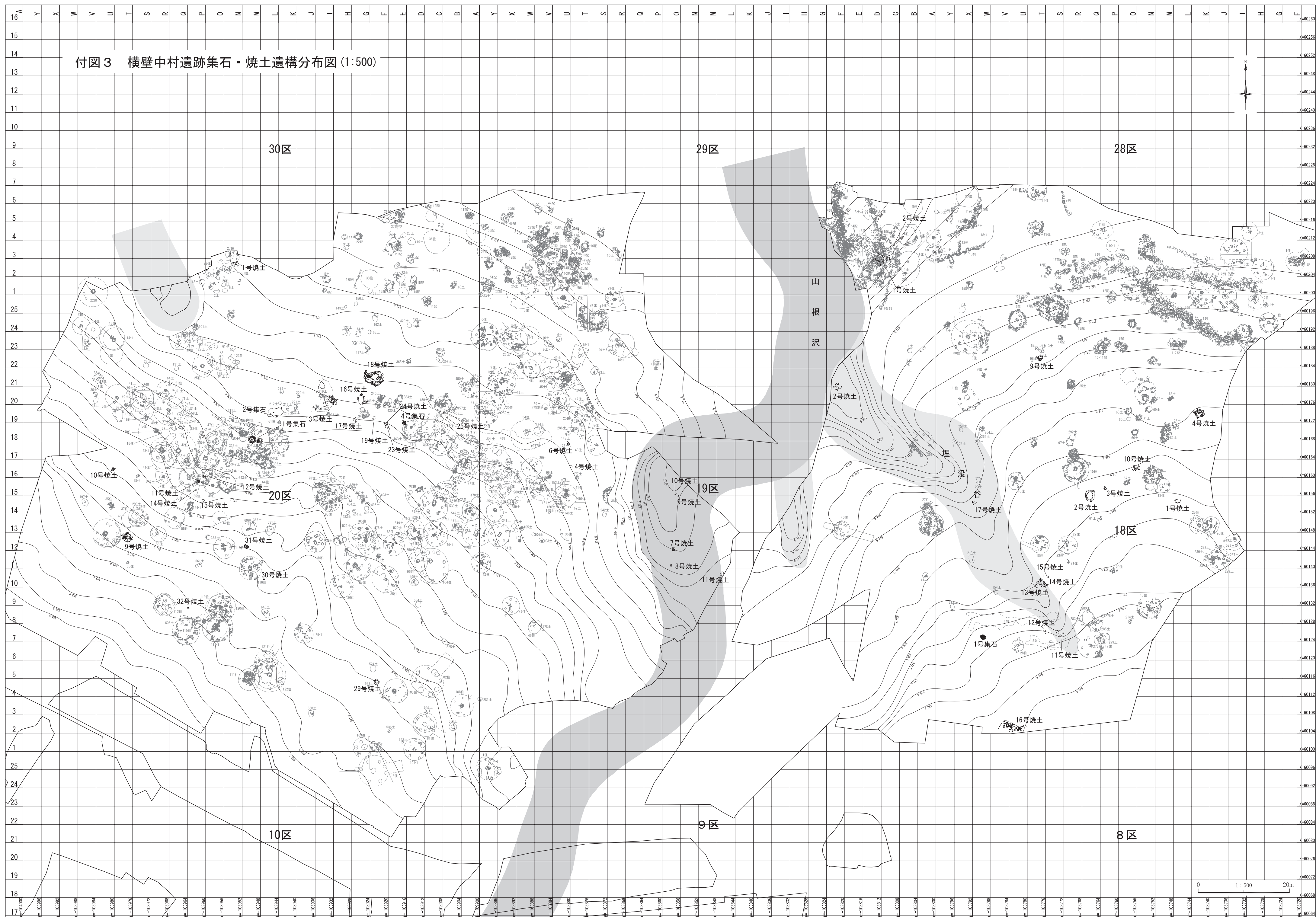


付図2 横壁中村遺跡掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列分布図  
縄文時代(1:500)





付图3 横壁中村遺跡集石・焼土遺構分布図(1:500)



0 1:500 20m